

夏目漱石の世界
こころ (完全版)
新バージョン

はじめに

さて、今回の夏目漱石の世界『こころ』（完全版）という作品は、第一部「先生と私」、第二部「両親と私」、そして、第三部「先生と遺書」という「三部」から成るものであり、われわれ日本人にいちばん多く読まれていている作品の一つでありながら、なかなか作者のその真の「意図」がどこにあるのか判断としないところがあるかと思う。

そこで、今回は、まず、第一部（先生と私）から考えてみたいと思うが、その内容は、まず、「私」という人が、初めて「先生」とめぐり逢ったのは、夏の鎌倉の海岸（浜辺）の海水浴場であった。そして、その「先生」と何回か浜辺で会って話をするようになるに連れて親しくなり、その後、東京に帰ったあとも、「私」という人は、なぜか「心惹かれる」その「先生」の家を頻繁に訪ねるようになって行くのである。そして、最初、訪ねた時には、留守であり、二度目も留守であったが、やがて「奥さん」が出てきて、先生は例月その日になると雑司ヶ谷の墓地にある「或る仏」へ花を手向けに行く習慣があるというので、そこで、私も散歩がてら雑司ヶ谷の「墓地」へと行ってみると、茶店の中から先生らしい人が出て来たので、出し抜けに「先生」と大きな声を掛けると、先生は突然立ち留まって私の顔を見るなり、「どうして……、どうして……」と、異様な調子をもって繰り返されるのであった。もちろん、この墓地の「仏」（親友）との関係においてこそ、先生の「謎」が奥深く隠されているのである。

ところで、この第一部の「先生と私」というのは、それぞれ「本文」＋「*」＋「解説」という構成になっていて、「……最初から最後まで、一字一句、丁寧に読み辿りながら深く考察したもの」であり、それゆえ、興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねて見てください。

令和五年一月吉日（決定版）

如月翔悟

目次

こころ (新バージョン)

はじめに

一、 先生と私 (上)

二、 両親と私 (中)

三、 先生と遺書 (下)

※ 参考文献

夏目漱石の世界
こころ (先生と私)

目次

こころ

序 はじめに

上、 先生と私

- 一、 冒頭の文章
- 二、 先生との出逢い
- 三、 当分鎌倉の宿に留まる^と
- 四、 私は毎日海へ入りに出掛けた
- 五、 先生と白い皮膚の西洋人
- 六、 日本の海水浴の歴史
- * * *
- 七、 先生への好奇心
- 八、 先生への接近
- 九、 先生の眼鏡を拾い上げる
- 十、 先生の後^をに続いて海へ飛び込む
- 十一、 先生と懇意になる
- * * *
- 十二、 東京に帰る
- 十三、 先生宅を訪ねる
- 十四、 雑司ヶ谷^{がや}の墓地
- 十五、 墓^{ほひ}の墓標^{びょう}と銀杏^{いちょう}の木
- 十六、 先生宅訪問^{たく}を重ねる
- 十七、 墓参^{ほさん}と散歩の区別
- 十八、 私は寂^{さび}しい人間です
- * * *
- 十九、 先生宅で食事や酒を飲む
- 二十、 夫婦間の子供の話
- 二十一、 仲^いの好^いい夫婦^{いっついでい}の対^{たい}
- 二十二、 先生と奥^{おく}さんの喧嘩^{けんか}（言逆^{いさか}い）
- 二十三、 天下にただ一人^{ひとり}しかない相手^{あいて}同士
- * * *
- 二十四、 私と奥^{おく}さんの会話
- 二十五、 恋（恋愛）は罪悪^{ざいあく}です
- 二十六、 人間^{にんげん}が自分^{おのれ}は信^{まこと}じられない
- 二十七、 先生^{せんせい}の思想^{しゆきう}はどこから生^うじたのか
- * * *

- 二八、盗難よけの留守番を頼まれる
二九、もし奥さんがいなくなったら、先生は、
三十、元は、ああじゃなかったんです
三一、実は、少し思いあたる事が……
三二、先生が十時頃帰宅する
三三、秋が暮れて冬が来る……
* *
三四、父の病気のことでも国へ帰る
三五、先生宅に暇乞いを兼ねて金を借りに行く
三六、父の病気は思った程悪くはなかった
三七、先生にお札の手紙を書く
三八、父の将棋の相手をする
三九、東京へ帰りたい気持ちが生じて来る
* *
四十、東京へと戻る
四一、父の病気についての談義が続く
四二、卒業論文に専念する
四三、論文完成させ、先生宅訪ねる
*
四四、先生を散歩へと誘い出す
四五、何々園の中に入る
四六、財産の話をする
四七、人はいざという間に急に悪人になる
*
四八、犬と子供の突然の出現
四九、犬と子供の去った後のこと
五十、やがて二人は植木屋を出て行く
*
五一、人間は誰でもいざという間に急に悪人になる
五二、先生は、さつき少し興奮しましたね
五三、私は他に欺かれたのです
五四、やがて二人は電車に乗って帰る
五五、あなたはほんとうに真面目ですか
* *
五六、大学を無事に卒業する
五七、先生の家へ御馳走に招かれていた
五八、先生の家で御馳走にあずかる
五九、これから何をする気ですか
*
六十、父の病気の話からどちらが先に死ぬか

六一、先生が先へ死ぬか、奥さんが早く亡くなるか

六二、先生宅の玄関先にある木犀の木を見て

* *

六三、帰郷への準備をする

六四、汽車で故郷へと帰る

* *

※ 上「先生と私」のまとめ

※ 参考文献

上
(先生と私)

しる

序 はじめに

例えば、夏目漱石の代表的な「作品」の一つには、いわゆる『こころ』という作品があるかと思うが、それは、「先生と私」、「両親と私」、「先生と遺書」という「三部」から成るものであり、最初は、第一部（「先生と私」）の部分から考えてみたいと思う。

まず、「先生と私」という第一部の内容は、私（或いは「奥さん」という第三者から見た（つまり「外から見た」）時の「先生」という存在の「行動（言動）」の描写などが主であり、それは、いわば「外的事実」であり、例えば、その人の「身体的特徴」（容姿・容貌）を初めとして、その時々に表示される「先生」という人間の「顔の表情、しぐさ、言葉や行動、その他、また、生い立ち、学歴、職歴、生活状況、時代的背景、その他」の描写になるかと思う。——例えば、私が初めて「先生」とめぐり逢ったのは、夏の鎌倉の海岸（浜辺）であった。そして、「先生」という人は、外から見ると、終始静かであり、落ち着いていた。けれども時として変な曇りがその顔を横切ることがあった。また、先生には美しい奥さんがいたが、子供はなく、大学出身でありながら、仕事もしないでぶらぶら遊んでいる。それは、それなりの「財産」があるからではあるが、私は、「……先生は、なぜ宅で考えたり勉強したりするだけで、世の中に出て仕事をなさらないのですか？」と聞くと、「……私は世間に向かって働きかける資格のない男だから仕方がない」と答える。また、体は健康であるが、友だちは少なく、それは、人間は信用できないからだということであり、外出は嫌いでも、毎月友人の墓参りだけは行なっている。もちろん、夫婦仲は悪くはないが、ただ、なぜ夫が人を嫌い（避ける）のか？ 奥さんにもよく分からないという。むしろ私が聞きたいくらいだと答えるのである。それが、外から見た「先生」という「人間の姿」であったということである。

上 先生と私

一、冒頭の文章（一）

まず、日本で最も読まれている夏目漱石の『こころ』という作品の、その余りにも有名な「冒頭部分」であるが、それは、次のようなものである。

つまり、「……私はその人を常に先生と呼んでいた。だからここでもただ先生と書くだけで本名は打ち開けない。これは世間を憚る遠慮というよりも、その方が私にとって自然だからである。私はその人の記憶を呼び起すごとに、すぐ『先生』といたいくなる。筆を執っても心持は同じ事である。よそよそしい頭文字などはとても使う気にならない」とある。——これは、これから何かが「始まる」という内容の文章ではなく、それは、すでに過去にあったことを「回想」しているという文章になるかと思う。

二、先生との出逢い（一）

私が先生と知り合いになったのは鎌倉である。その時私はまだ若々しい書生であった。暑中休暇を利用して海水浴に行った友達からぜひ来いという端書を受け取ったので、私は

多少の金を工面くめんして、出掛ける事にした。私は金の工面に二、三日を費さんちやした。ところが、私が鎌倉に着いて三日と経たないうちに、私を呼び寄せた友達は、急に国元から帰れという電報を受け取った。電報には母が病気だからと断つてあつたけれども友達はそれを信じなかつた。友達はかねてから国元にいる親たちに勧めない結婚を強いられていた。彼は現代の習慣からいうと結婚するにはあまり年が若過ぎた。それに肝心の当人が気に入らなかつた。それで夏休みに当然帰るべきところを、わざと避けて東京の近くで遊んでいたのである。彼は電報を私に見せてどうしようと相談をした。私にはどうしていいか分からなかつた。けれども、実際、彼の母が病気であるとすれば、彼はもとより帰るべきであつた。それで彼はとうとう帰る事になつた。せつかく来た私は、鎌倉に一人残された。(本文)

*

*

さて、「私」という人が、初めて「先生」とめぐり逢つたのは、夏の鎌倉の海岸(浜辺)の「海水浴場」であつた。その時、私はまだ若々しい書生(大学生)であり、一方の友達は、ある資産家の息子むすこで金に不自由のない男であつたが、その友達は、急に国元から母が病気だから帰れという電報を受けるが、それを信じなかつた。というのも、友達はかねてから国元にいる親たちに勧めない結婚を強いられていたからである。——これは、当時は、多くの場合、親が「子供の結婚」を決めていたのであり、また、主人公の「先生」も、両親を腸チフスでほぼ同時に失つた後、東京の「高校」へと進んだが、毎年、夏休みに実家に帰ると、叔父おじから同じように「勧めない結婚」を強いられるような経験をしているのである。それはともかく、友達は、まだ年も若く、それに肝心の当人が気に入らなかつたので、夏休みに当然帰るべきところを、わざと避けて東京の近くで遊んでいたのである。けれども、実際、彼の母が病気であるとすれば、彼はもとより帰るべきであり、それで彼はとうとう帰る事になり、せつかく来た私は、鎌倉に一人残されたとなるのである。

三、当分、鎌倉の宿に留まる(一)

学校の授業が始まるにはまだ大分日数だいぶんひかずがあるので鎌倉におつてもよし、帰つてもよしという境遇にいた私は、当分元の宿に留まる覚悟をした。友達は中国のある資産家の息子むすこで金に不自由のない男であつたけれども、学校が学校なのと年が年なので、生活の程度は私とそう変わりもしなかつた。従つて、一人ぼっちになつた私は、別に恰好な宿を探す面倒ももたなかつたのである。——宿は鎌倉でも辺鄙へんびな方角にあつた。玉突たまつきだのアイスクリームだのというハイカラなものには長い暇なまわてを一つ越さなければ手が届かなかつた。車で行つても二十銭は取られた。けれども個人の別荘は其所そこそこにいくつでも建てられていた。それに海へはごく近いので海水浴をやるには至極便利な地位を占めていた。(本文)

*

*

さて、「私」という人は、「……学校の授業が始まるにはまだ大分日数だいぶんひかずがあるので鎌倉におつてもよし、帰つてもよしという境遇にいた私は、当分元の宿に留まる覚悟をした」とある。——まず、当時の「大学」は、三年制であり、しかも、「新学期」は、九月から始まる制度であつた。それに加えて、友達は、中国(地方)のある資産家の息子むすこで金に不自由のない男であつたが、学校が学校なのと年が年なので、これは、私立でなく国立大学であり、しかも、まだ学生なので、生活の程度は私とそれほど変わりなかつたということ

である。従つて、一人ぼっちになつた私は、別に恰好な宿を探す面倒もたなかつたのであるが、これは、友達は、金持ちの息子だからと言つて、特別高い宿ではなく、ごくふつうの宿を借りていたので、別に恰好な宿（他に安い宿）を探す面倒もたらずに、そのままその宿に留まる覚悟をしたということである。

そして、その宿は、鎌倉でも辺鄙な方角にあり、玉突だのアイスクリームだのというハイカラなものには長い暇（田んぼ道）を一つ越さなければ手が届かなかつたとある。――まず、玉突だのアイスクリームだのというのは、幕末維新の頃に、西洋人とともに日本に入つて来たものであり、それが徐々に「ハイカラなもの」として人気を得て普及するようになるのである。また、「車」で行くとあるが、これは「人力車」のことであり、この周辺には、個人の別荘なども其所所にいくつでも建てられていて、しかも、海へはごく近いので海水浴をやるには至極便利な地位を占めていたとある。

四、私は毎日海へはいりに出掛けた（一）

私は毎日海へはいりに出掛けた。古い燻ぶり返つた藁葺の間を通り抜けて磯へ下りると、この辺にこれほどの都会人種が住んでいるかと思ふほど、避暑に來た男や女で砂の上が動いていた。ある時は海の中が銭湯のように黒い頭でごちゃごちゃしている事もあつた。その中に知つた人を一人ももたない私も、こういう賑やかな景色の中に裏まれて、砂の上に寝そべてみたり、膝頭を波に打たしてそこいらを跳ね廻るのは愉快であつた。私は実に先生をこの雑踏の間に見付け出したのである。その時海岸には掛茶屋が二軒あつた。私はふとした機会からその一軒の方に行き慣れていた。長谷辺に大きな別荘を構えている人と違つて、各自に専有の着替場を拵えていない。ここいらの避暑客には、ぜひともこうした共同着替所といった風なものが必要なものであつた。彼らはここで茶を飲み、ここで休息する外に、ここで海水着を洗濯させたり、ここで鹹はゆい身体を清めたり、ここへ帽子や傘を預けたりするのである。海水着を持たない私にも持ち物を盗まれる恐れはあつたので、私は海へ入るたびにその茶屋へ一切を脱ぎ棄てる事にしていた。（本文）

さて、「私」という人は、「……毎日海へはいりに出掛けた」とある。そして、この辺にこれほどの都会人種が住んでいるかと思ふほど、浜辺は避暑に來た男や女で砂の上が動いていた。ある時は海の中が銭湯のように黒い頭でごちゃごちゃしている事もあつた。その中に知つた人を一人ももたない私も、こういう賑やかな景色の中に裏まれて、砂の上に寝そべてみたり、膝頭を波に打たしてそこいらを跳ね廻るのは愉快であつた。――そして、「……私は実に先生をこの雑踏の間に見付け出した」というのである。

それは、「……その時、海岸には掛茶屋が二軒あつた。私はふとした機会からその一軒の方に行き慣れていた」とある。そして、長谷辺に大きな別荘を構えている人と違つて、各自に専有の着替場を拵えていない。ここいらの避暑客には、ぜひともこうした共同着替所といった風なものが必要なものであつた。――というのも、彼らはここで茶を飲み、ここで休息する外に、ここで海水着を洗濯させたり、ここで鹹はゆい身体を清めたり、ここへ帽子や傘を預けたりするのである。海水着を持たない私にも持ち物を盗まれる恐れはあつたので、私は海へ入るたびにその茶屋へ一切を脱ぎ棄てる事にしていた」とある。

まず、「掛茶屋」とあるが、それを「辞書」で見ると、「……道端などによしずなどをかけて簡単に造った茶店であり、注文に応じて茶や和菓子などを提供する処」とある。これは、よく時代劇などでも旅人たちが休憩のためにちよつと立ち寄るあの茶店のことであるが、ここでは特に「海水浴場」用に設けられた簡易な「掛茶屋」になるのである。

ところで、日本には江戸時代まで「海水浴」の風習などは全くなく、幕末から明治時代に入って、まず最初は、日本にいた外国人たちが「海水浴」を始めるようになり、やがて、日本の政財界や華族などの「上流階層」の人たちが海岸に保養を兼ねた別荘などを建てるようになるが、それが、まさに「長谷辺に大きな別荘を構えている人たち」であり、一方、明治末から大正・昭和には、一般の人たちにも海水浴は「体に良い」ということで非常に普及して大ブームとなり、本文のような大変な賑わいになるのである。そして、当時の「掛茶屋」がいわば今日の「海の家」のような役割をしていたのである。

五、先生と白い皮膚の西洋人（二）

私とその掛茶屋で先生を見た時は、先生が丁度着物を脱いでこれから海へ入ろうとするところであった。私はその時反対に濡れた身体を風に吹かして水から上がって来た。二人の間には目を遮る幾多の黒い頭が動いていた。特別の事情のない限り、私はついに先生を見逃したかも知れなかった。それほど浜辺が混雑し、それほど私の頭が放漫であったにも拘わらず、私がすぐ先生を見付け出したのは、先生が一人の西洋人を伴っていたからである。——その西洋人の優れて白い皮膚の色が、掛茶屋へ入るや否や、すぐ私の注意を惹いた。純粹の日本の浴衣を着ていた彼は、それを床几の上にすぼりと放り出したまま、腕組みをして海の方を向いて立っていた。彼は我々の穿く猿股一つの外何物も肌に着けていなかった。私にはそれが第一不思議だった」（本文）とある。

というのも、私はその二日前に由井が浜まで行って、砂の上にしやがみながら、長い間西洋人の海へ入る様子を眺めていた。私の尻をおろした所は少し小高い丘の上で、そのすぐ傍がホテルの裏口になっていた。私の凝としていた間に、大分多くの男が塩を浴びに出て来たが、いずれも胴と腕と股は出していなかった。女は殊更肉を隠しがちであった。大抵は頭に護謨製の頭巾を被って、海老茶や紺や藍の色を波間に浮かしていた。そういう有様を目撃したばかりの私の眼には、猿股一つで済まして皆なの前に立っているこの西洋人が如何にも珍らしく見えた」（本文）とある。

六、日本の海水浴の歴史

これは、まさに日本の「海水浴」の歴史をそのまま物語っているものであり、まず、日本での最初の「海水浴」の幕開けは、幕末から明治に「横浜や築地」の「居留地」で暮らしていた「外国人」たちが、それは、日本に居住していた欧米各国の公使たちをはじめ、宣教師や商人たち、その他の上流階層の人たちが現在の横浜市金沢区の「富岡海岸」を療養・保養地として、夏は、そこで「海水浴」を好んで楽しんでいたのである。——やがて、日本の政界人（高官）をはじめ、華族や財界人の「上流階層」の人たちも、そこに「避暑」で訪れたり、また、長期滞在のための「別荘」なども数多く建られるようになるのである。

そして、明治十六年（一八八三年）には、鎌倉の由比ヶ浜に「海水浴場」が開設されたり、また、明治十八年（一八八五年）には、大磯の照ヶ崎海岸にも「海水浴場」が開設されることになるが、特にこの大磯の「海水浴場」では、大勢の人たちで大変な賑わいを見せるようになるのである。——それは、一体、なぜなのかと問えば、それは、もちろん、鉄道の「交通網の発達」であり、例えば、「大磯海水浴場」が大変な賑わいを見せるようになった理由の一つには、従来の「富岡海水浴場」の場合には、鉄道の駅から「人力車や小舟」などで移動する必要があったそうであるが、一方、大磯の「海水浴場」では、「大磯駅」から歩いてすぐに「海水浴場」へと行けたのである。そして、様々な「鉄道」の開通によって、「海水浴場」への交通の便もよくなると、一部の「上流階層」の人たちだけではなく、やがて、様々な「社会階層」（つまり庶民）の人たちも海岸（浜辺）での「海水浴」を楽しむようになるのである。

それを本文でみると、「……海岸には掛茶屋が二軒あり、私という人は、その一軒の方に行き慣れていた。そして、長谷辺に大きな別荘を構えている人と違って、各自に専有の着替場を拵えていない、ここのらの避暑客には、ぜひともこうした共同着替所といった風なものが必要なのであった」とある。——これは、まさに先生も私も一人の西洋人も、いわば「一般の人たち」であり、一方、「……長谷辺に大きな別荘を構えている人（たち）」と違って」というのは、それは、まさに「上流階層や富裕層」の人たちということになるのだろう。そして、「……私はその二日前に由井が浜まで行って、砂の上にしやがみながら、長い間西洋人の海へ入る様子を眺めていた。私の尻をおろした所は少し小高い丘の上で、そのすぐ傍がホテルの裏口になっていたので、私の凝としていた間に、大分多くの男が塩を浴びに出て来たが、いずれも胴と腕と股は出していなかった。女は殊更肉を隠しがちであった。大抵は頭に護謨製の頭巾を被って、海老茶や紺や藍の色を波間に浮かしていった。そういう有様を目撃したばかりの私の眼には、猿股一つで済まして皆の前に立っているこの西洋人がいかにも珍らしく見えた」とある。——これは、ホテルから出て来て泳いでいる西洋人たちとは、まさに「上流階層」（或いは「富裕層」）の人たちであり、特に「上流階層」の人たちというのは、いわば「道徳や倫理或いは宗教、その他」などの理由から、自分たちの「裸体」を人前に曝すようなことを極力避けていたのである。

一方、先生と一緒にいた「西洋人」という人は、恐らく、「上流階層」でも「富裕層」でもなく、ごく一般の「西洋人」であり、それゆえ、「……猿股一つで済まして皆の前に立っていた」ということになるのだろう。——ところで、当時の「日本人」は、一体、どのような「格好」で泳いでいたのかと問えば、男性の場合は、ふつうは「禪」で泳いでいたかと思うが、一方、女性の場合は、最初の頃は、ただ見ているだけか、或いは、衣服を身に付けて、海水を浴びたり浸かったりすることが中心で、泳ぐというようなことはあまりなかったようで、明治二十三年には、日本で初めての女性用水着が誕生し、そして、明治末期には、現代の「水着のルーツ」につながる「シマウマ水着」などが、初めて、ここに登場することになるのである。

*

*

七、先生への好奇心

七、先生への好奇心(二)

さて、本文に戻りたいが、「……純粹の日本の浴衣を着ていた彼(西洋人)は、それを床几の上にすぼりと放り出したまま、腕組みをして海の方を向いて立っていた。彼は我々の穿く猿股一つの外何物も肌に着けていなかった。私にはそれが第一不思議だった」とある。そして、「……彼はやがて自分の傍を顧みて、そこにこんなにいる日本人に、一言二言何か言った。その日本人は砂の上に落ちた手拭を拾い上げているところであつたが、それを取り上げるや否や、すぐ頭を包んで、海の方へ歩き出した。その人がすなわち先生であつた。——私は単に好奇心のために、並んで浜辺を下りて行く二人の後姿を見守っていた。すると彼らは真直に波の中に足を踏み込んだ。そうして遠浅の磯近くにわいわい騒いでいる多人数の間を通り抜けて、比較的広々した所へ来ると、二人とも泳ぎ出した。彼らの頭が小さく見えるまで沖の方へと向いて行った。それから引き返してまた一直線に浜辺まで戻つて来た。掛茶屋へ帰ると、井戸の水も浴びずに、すぐ身体を拭いて着物を着て、さつさとどこへか行つてしまつた」(本文)とある。

*

*

さて、少し前の本文に、「……私がその掛茶屋で先生を見た時は、先生が丁度着物を脱いでこれから海へ入ろうとするところであつた」というのがあるが、これは、「……先生が丁度着物を脱いで、(禪姿になつて)、海へ入ろうとするところであつた」ということであり、しかも、先生は、「……砂の上に落ちた手拭を拾い上げているところであつたが、それを取り上げるや否や、すぐ頭を包んで、海の方へ歩き出した」とある。これは、西洋人の「頭に護謨製の頭巾を被っている」のを真似てのことなのか? それとも、暑さよけか? それとも、泳ぐ時に、「……髪の毛が濡れて邪魔になつたりするので、そうしているのか?」、そのどれかと思うが、一方、色白の西洋人は、まさに「猿股一つ」の状態で、二人は、並んで浜辺を下りて行き、彼らは真直に波の中に足を踏み込んだ。そして、「……遠浅の磯近くにわいわい騒いでいる多人数の間を通り抜けて、比較的広々した所へ来ると、二人とも泳ぎ出した。彼らの頭が小さく見えるまで沖の方へと向いて行った。それから引き返してまた一直線に浜辺まで戻つて来た。掛茶屋へ帰ると、井戸の水も浴びずに、すぐ身体を拭いて着物を着て、さつさとどこへか行つてしまつた」とある。

さて、「……二人とも泳ぎ出した。(そして)、彼らの頭が小さく見えるまで沖の方へと向いて行った」とある。それでは、先生は、一体、どのような「泳ぎ方」をしたのだろうか? 頭がずつと見えていたということは、もちろん、今日の「自由形」(クロール泳法)ではなく、むしろ、日本泳法の「抜き手」という方法だと思ふが、それは、首から上を出したままの状態で、抜き手で泳ぐというものである。もちろん、「平泳ぎ」もあつたかと思ふが、それはともかく、沖の方まで行って、また、一直線に浜辺まで戻つて来た。掛茶屋へ帰ると、井戸の水も浴びずに、すぐ身体を拭いて着物を着て、さつさとどこかにいつてしまつた」ということであれば、それは、まさに「泳ぐことを第一の目的」として、この海岸(浜辺)へと来ていたのであり、しかも、泳ぎが軽々と出来るだけの「健康な肉体」をも持ち合わせていたということである。

八、先生への接近(二)

さて、「私」という人は、「……彼らの出て行った後、私はやはり元の床几に腰をおろして烟草を吹かしていた。その時私はぼかんとしながら先生の事を考えた。どうも何処かで見えた事のある顔のように思われてならなかった。しかしどうしても何時何処で会った人が想い出せずじまつた。——その時の私は屈托がないというより寧ろ無聊（退屈）に苦しんでいた。それで翌日もまた先生に会った時刻を見計らって、わざわざ掛茶屋まで出かけて見た。すると西洋人は来ないで先生一人麦藁帽を被ってやって来た。先生は眼鏡をとって台の上に置いて、すぐ手拭で頭を包んで、すたすた浜を下りて行った。先生が昨日のように騒がしい浴客の中を通り抜けて、一人で泳ぎ出した時、私は急にその後が追い付たくなつた。私は浅い水を頭の上まで跳かして相当の深さの所まで来て、そこから先生を目標に抜手を切った。すると先生は昨日と違って、一種の弧線を描いて、妙な方向から岸の方へ帰り始めた。それで私の目的はついに達せられなかった。私が陸へ上がって岸の垂れる手を振りながら掛茶屋に入ると、先生はもうちゃんと着物を着て入れ違いに外へ出て行った」（本文）とある。

* * *

まず、その時の「私」は、無聊（退屈）に苦しんでいた。これは、若い時には、誰でも、多かれ少なかれ、経験することであり、何をどうしてよいかよく分からず、あれこれ無為に時を過ごしてしまう時期でもあるが、しかし、その人の「心の中」では、必ず、何かを求めているものであり、それでは、その「何か」とは、一体、何かと敢えて問えば、それは、その「人の心」を、うそ偽りなく、真に「深く満たしてくれるもの」であり、この「私」という人物にとつても、それが「何か」が分からないために、今は、あれこれ退屈している状態であるが、しかし、「先生」を見た時に、何かをふと感じたのであり、それは、あの「人」は、もしかしたら、「……自分の心が知らず識らずのうちに探し求めているその何か（人生の何か）を教えてくださいませんか」というような感じであり、（そういう雰囲気を感じ出していたからこそ、無意識の内にも、自然と「先生」と呼ぶようになるのであり、まさに「先生」と呼ぶのが最もふさわしい感じの人だつたということになるのだろう）。その「感じ」から何故か「心惹かれていく」のであり、それゆえ、「……私は急にその後が追い掛けたくなつた。私は浅い水を頭の上まで跳ねかして相当の深さの所まで来て、そこから先生を目標に抜手を切った。すると先生は昨日と違って、一種の弧線を描いて、妙な方向から岸の方へ帰り始めた。それで私の目的はついに達せられなかった」とある。——この「私の目的」というのは、むしろ、先生と「懇意」になるということであるが、一方、先生は、恐らく、勢いよく泳いで自分の方に迫って来る若者を見た時に、今は他人を避けて生きている先生にとつて、取り敢えずは、それを「避けた」ということになるのだろう。

九、先生の眼鏡を拾い上げる（三）

私は次の日も同じ時刻に浜へ行って先生の顔を見た。その次の日にもまた同じ事を繰り返した。けれども物を言い掛ける機会も、挨拶をする場合も、二人の間には起らなかった。その上先生の態度はむしろ非社交的であった。一定の時刻に超然として来て、また超然と

帰って行った。周囲がいくら賑やかでも、それには殆ど注意を払う様子が見えなかった。最初一所にきた西洋人はその後まるで姿を見せなかった。先生はいつでも一人であった。——或る時先生が例の通りさっさと海から上がって来て、いつもの場所に脱ぎ棄てた浴衣を着ようとすると、どうした訳か、その浴衣に砂がいっぱい着いていた。先生はそれを落すために、後ろ向きになって、浴衣を二、三度振った。すると着物の下に置いてあった眼鏡が板の隙間から下へ落ちた。先生は白緋の上へ兵児帯を締めてから、眼鏡の失くなったのに気が付いたと見えて、急にそこいらを探し始めた。私はすぐ腰掛の下へ首と手を突ッ込んで眼鏡を拾い出した。先生は有難うと言って、それを私の手から受け取った」(本文)とある。

*

*

さて、この場面は、「私」という人は、何度も「先生」との接触を試みようとしたが、なかなか「……物を言い掛ける機会も、挨拶をする場合も、二人の間には起らなかった。その上先生の態度はむしろ非社交的であった。一定の時刻に超然として来て、また超然と帰って行った。しかも、先生はいつでも一人であった」とある。——これは、「先生」という人は、何となく人との「関わり」を避けるような雰囲気はどこか醸し出していたということである。——ところが、それは、ほんの一寸した偶然の「出来事」から、何と「先生」と接触できる機会を得ることになるが、それは、「……或る時先生が例の通りさっさと海から上がって来て、いつもの場所に脱ぎ棄てた浴衣を着ようとすると、どうした訳か、その浴衣に砂がいっぱい着いていた。先生はそれを落すために、後ろ向きになって、浴衣を二、三度振った。すると着物の下に置いてあった眼鏡が板の隙間から下へ落ちた。先生は白緋の上へ兵児帯を締めてから、眼鏡の失くなったのに気が付いたと見えて、急にそこいらを探し始めた。私はすぐ腰掛の下へ首と手を突ッ込んで眼鏡を拾い出した。先生は有難うと言って、それを私の手から受け取った」とある。——これは、「私」という人が、「先生」の「行動」を意識して、注意深く見守っていたからであり、そうでなければ、誰も気づきようのない余りにも小さな一瞬の「出来事」(眼鏡が板の隙間から下へ落ちた)のを見つけて、「……私はすぐ腰掛の下へ首と手を突ッ込んで眼鏡を拾い出した。先生は有難うと言って、それを私の手から受け取った」とはならないのである。——この先生の「有難う」は、ごく自然な「有難う」ではあるが、しかし、もし、「私」という人が見付けてくれなかったら、眼鏡をかけない先生は、その「眼鏡」を見つけ出すのにかなり苦労したかも知れないという、そういう「意味合い」も含まれた「有難う」にもなるのである。これによって、二人は、全くの「他人同士」ではなく、まさに一つの「縁」が出来たということであり、だからこそ、次のような積極的な「行動」も可能になるのである。

十、先生の後につづいて海へ飛び込んだ(三)

次の日私は先生の後につづいて海へ飛び込んだ。そうして先生といっしょの方角に泳いで行った。二丁ほど沖へ出ると、先生は後ろを振り返って私に話し掛けた。広い蒼い海の表面に浮いているものは、その近所に私ら二人より外になかった。そうして強い太陽の光が、眼の届く限り水と山とを照らしていた。私は自由と歓喜に充ちた筋肉を動かして海の中で躍り狂った。先生はまたぱたりと手足の運動を已めて仰向けになったまま浪の上

寝た。私もその真似をした。青空の色がぎらぎらと眼を射るように痛烈な色を私の顔に投げ付けた。「愉快ですね」と私は大きな声を出した。

しばらくして海の中で起き上がるように姿勢を改めた先生は、「もう帰りませんか」と言つて私を促した。比較的強い体質をもった私は、もつと海の中で遊んでいなかった。しかし先生から誘われた時、私はすぐ「ええ帰りましょう」と快く答えた。そうして二人でまた元の路を浜辺へ引き返した。——私はこれから先生と懇意になった。しかし先生がどこにいるかはまだ知らなかった。それから中二日おいてちょうど三日目の午後だったと思う。先生と掛茶屋で出会った時、先生は突然私に向かつて、「君はまだ大分長くここにいますつもりですか」と聞いた。考えない私はこういう問いに答えるだけの用意を頭の中に蓄えていなかった。それで「どうだか分かりません」と答えた。しかしにやにや笑っている先生の顔を見た時、私は急に極りが悪くなった。「先生は？」と聞き返さずにはいらなかった。これが私の口を出した先生という言葉の始まりである。(本文)

*

*

さて、一つの「縁」が出来たことで、「私」という人は、非常に積極的に「先生」のところへと近づいて行くが、それは、「……次の日は先生の後につづいて海へ飛び込んだ。そうして先生といっしょの方角に泳いで行った。二丁(約二二八呎)ほど沖へ出ると、先生は後ろを振り返って私に話し掛けた」とある。——これは、「先生」にしてみれば、恐らく、「若者」は自分の後を追って泳いで来るだろうと予測していたことであり、それは、そういうことが実際に一度あったからであり、だからこそ、今度は逃げずに、「……先生は後ろを振り返って私に話し掛けた」となるのである。——それは、一体、なぜなのかと敢えて問えば、それは、「先生」という人は、妻以外、これという「話し相手」もなく、いわば「孤独な人」であったが、それゆえ、自分の「思いや考え」などを真摯に語り合える相手を、知らず識らずのうちに、誰か信頼できる「話し相手」というものをどこか探し求めるようなところがあったということである。そして、この「若者」であれば、あるいは自分の「話し相手」として「悪くはないかも知れない」と次第に思うようになって行くのである。——そして、しばらく、先生は、手足の運動を已めて仰向けになつたまま浪の上に乗っていたが、やがて、その姿勢を改めた先生は、「もう帰りませんか」と言つて、二人とも、また元の路を浜辺へと引き返して来るのであった。そして、——私はこれから先生と懇意になった。そして、それから三日目の午後だったと思うが、先生と掛茶屋で出会った時、先生は突然私に向かつて、「君はまだ大分長くここにいますつもりですか」と聞いたので、何の考えない私は、「どうだか分かりません」と答えた。一方、にやにやと笑っている先生の顔を見た時、私は急に極りが悪くなった。「先生は？」と聞き返さずにはいらなかった。これが私の口を出した先生という言葉の始まりであった、とある。

まず、二人とも相手の「名前」を知らない状態であり、それゆえ、相手をどう呼ぶかは、一つの問題になるが、先生の方は、自然と「君は」という言葉を使っている。一方、「私」という人は、どう呼ぶかは少し迷つたかと思うが、ふつうであれば、「あなたは」と呼ぶところかも知れないが、「私」という人は、思わず「先生は」と言つてしまつたということである。そして、なぜ、「先生」と呼んだのかは、「私」自身にもよく分からなかったかも知れないが、しかし、潜在的には、そのように「相手」を見ていたということになるのだろう。(例えば、「私」という人は、いわば東京帝国大学(今の東大)の学生である

ので、それなりの能力《教養》もあるかと思うが、一方、「先生」という人も、外国人と一緒にいたこともあったので、ふつう一般の人とは少し違って、少なくとも英語を理解でき得る能力《教養》などはあるのだらうと見ているのである。

十一、先生と懇意になる(三)

私はその晩先生の宿を尋ねた。宿と言っても普通の旅館と違って、広い寺の境内にある別荘のような建物であった。そこに住んでいる人の先生の家族でない事も解った。私が先生と呼び掛けるので、先生は苦笑いをした。私はそれが年長者に対する私の口癖だと言つて弁解した。私はこの間の西洋人の事を聞いてみた。先生は彼の風変りのところや、もう鎌倉にいない事や、色々の話をした末、日本人にさえあまり交際をもたないのに、そういう外国人と近付きになったのは不思議だと言つたりした。私は最後に先生に向かつて、どこかで先生を見たように思うけれども、どうしても思い出せないと云つた。若い私はその時暗に相手も私と同じような感じを持つてはいはしまいかと疑つた。そうして腹の中で先生の返事を予期してかかった。ところが先生はしばらく沈吟したあとで、「どうも君の顔には見覚えがありませんね。人違いじゃないですか」と言つたので私は変に一種の失望を感じた。(本文)

*

*

さて、「……私はその晩先生の宿を尋ねた。宿と言っても普通の旅館と違って、広い寺の境内にある別荘のような建物であった。そこに住んでいる人の先生の家族でない事も解つた。私が先生と呼び掛けるので、先生は苦笑いをした。私はそれが年長者に対する私の口癖だと言つて弁解した」とある。——ここで、再び、なぜ「先生先生」と呼ぶのが問題になっているが、それに対して、「……私はそれが年長者に対する私の口癖だと言つて弁解した」とある。もちろん、その通りだとしても、すべての「年長者」に対して、すべて「先生先生」と呼ぶ人はいないのであり、やはり、それなりの「存在感や雰囲気などを持った人」でなければ、ふつう「先生」とは呼ばないものである。……

また、「……私はこの間の西洋人の事を聞いてみた。それに対して、先生は、日本人にさえあまり交際を持たないのに、そういう外国人と近付になったのは不思議だと言つたりした」とある。——これは、一体、どのようなことを意味するのかと問えば、それは、「先生」という人も、知らず識らずのうちに、やはり、誰か「話し相手」というものをどこか渴望するようなところがあったのである。そして、そのような「精神状態」のところに、全く偶然にも若い「書生」(それは帝大の学生)が突然として目の前に現われ出たということである。もちろん、最初は、その「若者」を避けてはいたが、結局は、それを受け入れることになるのである。——それは、「私」という人も、また、「先生」という人も、知らず識らずのうちに、人生をあれこれ深く語り合える、そういう「相手」(話し相手)というものをどこか渴望していたということであり、そういう二人が、夏の鎌倉の海岸(浜辺)において、偶然にもばつたりとめぐり逢つたということである。

また、「私」という人は、「……最後に先生に向かつて、どこかで先生を見たように思うけれども、どうしても思い出せないと云つた。それに対して、先生はしばらく沈吟したあとで、どうも君の顔には見覚えがありませんね。人違いじゃないですかと言つたので、

私は変に一種の失望を感じた」とある。——これは、「私」にとって、「先生」という人は、もちろん、初めて会った人に過ぎないが、それでも、全くの「他人」として見えているというよりは、むしろ、なぜか遠い昔から知っているような感じに見えているということであり、それは、「先生」に対して、どこか「親しみ」を感じているからということになるのだろう。例えば、われわれ人間は、毎日、毎日、実に様々な人間と直接的でも間接的にも出合っていることになるが、その中で、ある人に対しては、なぜかいつまでたっても「他人」という感じが残る人と、ある人に対しては、なぜか最初の頃からどこか「親しみを感じるような人」とがいるかと思うが、それは、一体、どのようなことを意味するのかと問えば、それは、いわばお互いの「相性や雰囲気或いは考え方や性格その他などがどこか合うような場合と合わないような場合とがある」ということになるのだろう。

さて、ここまですが「先生」と「私」との鎌倉の海岸（浜辺）の「海水浴場」での二人の「出逢いの場面」になるかと思うが、この二人の「出逢い」というのは、作品上の設定では、恐らく、明治天皇崩御の一年前の「明治四十四年」（一九一一年）の夏の鎌倉の「海水浴場」ということになるかと思う。

*

*

十二、東京に帰る

十二、東京に帰る（四）

さて、私は月の末に東京へ帰った。先生の避暑地を引き上げたのはそれよりずっと前であった。私は先生と別れる時に、「これから折々お宅へ伺っても宜ござんすか」と聞いた。先生は単簡にただ「ええいらっしやい」と言っただけであった。その時分の私は先生とよほど懇意になったつもりでいたので、先生からもう少し濃かな言葉を予期して掛ったのである。それでこの物足りない返事が少し私の自信を傷めた。

私はこういう事でよく先生から失望させられた。先生はそれに気が付いているようでもあり、また全く気が付かないようでもあった。私はまた軽微な失望を繰り返しながら、それがために先生から離れて行く気にはなれなかった。むしろそれとは反対で、不安に揺かされるたびに、もつと前へ進みたくなった。もつと前へ進めば、私の予期するあるものが、いつか眼の前に満足に現われて来るだろうと思つた。私は若かつた。けれどもすべての人間に対して、若い血がこう素直に働こうとは思わなかつた。私はなぜ先生に対してだけこんな心持が起るのか解らなかつた。それが先生の亡くなった今日になって、始めて解つて来た。先生は始めから私を嫌っていたのではなかつたのである。先生が私に示した時々の素気ない挨拶や冷淡に見える動作は、私を遠ざけようとする不快の表現ではなかつたのである。傷ましい先生は、自分に近づこうとする人間に、近づくほどの価値のないものだから止せという警告を与えたのである。他の懐かしみに応じない先生は、他を軽蔑する前に、まず自分を軽蔑していたものと見える。（本文）

*

*

まず、私は先生と別れる時に、「……これから折々お宅へ伺っても宜ござんすか」と聞いた。すると、先生は単簡にただ「ええいらっしやい」と言っただけであった。——これは、他人を避けて生きている先生にとつては、まさに「最上級の歓迎の言葉」だと思つた。まだ若い「私」という人にとつては、どこか物足りない返事で少し失望されられたとある。しかし、「……私はこのような軽微な失望を繰り返しながらも、それがために先生から離れて行く気にはなれなかつた。むしろそれとは反対で、不安に揺かされるたびに、もつと前へ進みたくなった。もつと前へ進めば、私の予期するあるものが、いつか眼の前に満足に現われて来るだろうと思つた。私は若かつた。けれどもすべての人間に対して、若い血がこう素直に働こうとは思わなかつた。私はなぜ先生に対してだけこんな心持が起るのか解らなかつた」とある。これは、もちろん、自分はずな「先生」に「心惹かれるのだろうか？」という問題でもあり、先生が醸し出しているその「魅力と秘密」とは、一体、どこから生じて来るものなのだろうか？ それは、「……もつと前へ進めば、私の予期するあるものが、いつか眼の前に満足に現われて来るだろうと思つた」ということであり、（だからこそ、先生宅を頻繁に訪ねるようになるのである）。そして、先生の亡くなった今日になって、始めて解つて来たことは、「……先生は始めから私を嫌っていたのではなく、傷ましい先生は、自分に近づこうとする人間に、近づくほどの価値のないものだから止せという警告を与えたのである。他の懐かしみに応じない先生は、他を軽蔑する前に、まず自分を軽蔑していたものと見える」とあるが、それは一体なぜなのかの「疑問や問題点」などは、まさに第三部の「先生と遺書」の中でやがて明らかになって行くという展開になるのである。

ところで、私はむろん先生を訪ねるつもりで東京へ帰って来たが、授業の始まるまでにはまだ二週間の日数があるので、そのうちに一度行っておこうと思いつながら、しかし、帰って二日三日と経つうちに、鎌倉にいた時の気分が段々薄くなり、その上、大都會の空気が往来で学生の顔を見るたびに新しい学年に対する希望と緊張とを感じ、私はしばらく先生の事を忘れた。——授業が始まって、一カ月ばかりすると私の心に、また一種の弛みが出来てきた。私は何だか不足な顔をして往来を歩き始め、そして、私の頭には再び先生の顔が浮いて出て、私はまた先生に会いたくなつたのである。(本文)

ちなみに、この頃の帝国大学の「新学期」というのは、今とは違って、九月から始まつていたとともに、この「私」という人は、大学三年目であり、しかも、当時の大学は「三年制」で三年で卒業になるのである。

十三、先生宅を訪ねる(四)

私が始めて先生の宅を訪ねた時、先生は留守であつた。二度目に行つたのは次の日曜だと覚えてゐる。晴れた空が身に沁み込むように感ぜられる好日和であつた。その日も先生は留守であつた。鎌倉にいた時、私は先生自身の口から、いつでも大抵宅にいるという事を聞いた。むしろ外出嫌いだという事も聞いた。二度来て二度とも会えなかつた私は、その言葉を思い出して、理由もない不満をどこかに感じた。私はすぐ玄関先を去らなかつた。下女の顔を見て少し躊躇してそこに立っていた。この前名刺を取り次いだ記憶のある下女は、私を待たしておいてまた内へ這入つた。すると奥さんらしい人が代つて出て来た。美しい奥さんであつた。——私はその人から鄭寧に先生の出先を教えられた。先生は例月その日になると雑司ヶ谷の墓地にある或る仏へ花を手向けに行く習慣なのだそうである。「……たつた今出たばかりで、十分になるか、ならないかでございます」と奥さんは気の毒そうに言ってくれた。私は会釈して外へ出た。賑やかな町の方へ一丁(約一〇九畝)ほど歩くと、私も散歩がてら雑司ヶ谷へ行つてみる気になつた。先生に会えるか会えないかという好奇心も動いた。それですぐ踵を回らした。(本文)

さて、いよいよ「先生の宅」を訪ねることになるが、最初は、留守で、二度目も留守であつたが、その時は、すぐに玄関先を去らずに躊躇してそこに立っていると、やがて、奥さんらしい人が代つて出て来て、美しい奥さんであつたが、「……先生は例月その日になると雑司ヶ谷の墓地にある或る仏へ花を手向けに行く習慣なのだ」と話してくれた。しかも、「……たつた今出たばかりで、十分になるか、ならないかでございます」と奥さんは気の毒そうに言ってくれたとある。——まず、「先生の宅」を訪ねてみたら、二度とも留守であつた。先生からは、いつでも大抵宅にいと聞いていたので、理由もない不満をどこかに感じたが、その美しい奥さんらしい人からは、「……先生は例月その日になると雑司ヶ谷の墓地にある或る仏へ花を手向けに行く習慣なのだ」と鄭寧に先生の出先を教えてもらふことになる。——それでは、この「或る仏」とは、一体、誰なのか? ここにこそ、先生の「行動」(「言動」)のすべての「謎と答え」とが奥深く隠されているのであるが、それはここでは伏すとして、「私」という人は、やがて、散歩がてら雑司ヶ谷へ行つ

てみる気になるが、それは、そこへ行って、先生に会えるか会えないか（果たして、そのどっちなのかという、そういう）好奇心も働いたということである。

十四、雑司ヶ谷の墓地（五）

私は墓地の手前にある苗畠なえはたけの左側から這入はいって、両方に楓かえでを植え付けた広い道を奥の方へ進んで行った。するとその端はすれに見える茶店ちやみせの中から先生らしい人がふいと出て来た。私はその人の眼鏡めがねの縁ふちが日に光るまで近く寄って行った。そうして出し抜けに「先生」と大きな声を掛けた。先生は突然立ち留まって私の顔を見た。そして、「どうして……、どうして……」と、先生は同じ言葉を二遍ふた繰り返した。その言葉は森閑しんかんとした昼の中に異様な調子をもって繰り返された。私は急に何とも応えられなくなった。「私の後あとを跟つて来たのですか。どうして……」と、先生の態度はむしろ落ち付いていた。声はむしろ沈んでいった。けれどもその表情の中には判然はつきり言えないような一種の曇りがあった。私は私がどうして此処ここへ来たかを先生に話した。すると、「誰だれの墓へ参りに行ったか、妻さいがその人の名を言いましたか」と聞くので、「いいえ、そんな事は何もおっしゃいません」と答える。「そうですね。——そう、それは言うはずがありませんね、始めて会ったあなたに。言う必要がないんだから」と、先生はようやく得心とくしんしたららしい様子であった。しかし私にはその意味がまるで解わらなかつたとある。（本文）

*

*

さて、この雑司ヶ谷ざうしがやの墓地での「出来事」は、夏目漱石の『こころ』という作品の中で最も大事な「場面」の一つであるが、それは、次のような理由からである。——つまり、この「先生」のその尋常じんじょうとも思えぬ「驚き方」、それは、「どうして……、どうして……」という、この「先生」の異常なまでの「心の激しい動揺」、こそは、まさにすべてを物語っているのであり、それは、「……決して誰にも見られてはいけないところを、突然、誰かに知られてしまったような、或いは、決して誰にも知られてはならないことを、突然、誰かに知られてしまったような」時の、そういう時のような凄まじいまでの「動揺と驚愕と戦慄」とに襲われているのである。——このことだけは決して誰にも知られてはならない、その「人の心」の最も奥深い所に秘められている或る「事実」（或いは或る「真実」）、これがために、その人を「苦しみ悩まし続けている大元おおもと（元凶）」そのものを、この「私」という若者にもしかしたら感づかれてしまったかも知れないという「動揺と驚愕と戦慄」であり、だからこそ、先生は、「どうして……、どうして……」と叫ばずにいられず、また、「私の後あとを跟つて来たのですか。どうして……」と問い正しては、さらに、「……誰の墓へ参りに行ったか、妻さいがその人の名を言いましたか」と聞かすにはおられず、そして、「そうですね。——そう、それは言うはずがありませんね、始めて会ったあなたに。言う必要がないんだから」と、先生はようやく得心とくしんしたらしい様子であったとある。——つまり、このことだけは決して誰にも知られてはならない、その「人の心」の最も奥深い所に秘められている或る「事実」（或いは或る「真実」）、これがために、その人を「苦しみ悩まし続けている大元おおもと（元凶）」そのものについて、当然のことながら、この「若者」にそれを感じられるはずもないと考え直して、やっと得心とくしん（安心）したということである。

十五、墓の墓標と銀杏の木（五）

さて、「……先生と私は通りへ出ようとして墓の間を抜けた。依撒伯拉何々の墓だの、神僕ロギンの墓だのという傍に、一切衆生悉有仏生と書いた塔婆などが建ててあった。全権公使何々というのもあった。私は安得烈と彫り付けた小さい墓の前で、「……これは何と読むんでしよう」と先生に聞いた。「……アンドレとでも読ませるつもりでしょうね」と言つて先生は苦笑した。——先生はこれらの墓標が現わす人種々の様式に対して、私ほどに滑稽もアイロニーも認めてないらしかつた。私が丸い墓石だの細長い御影の碑だのを指して、しきりに彼此言いたがるのを、始めのうちは黙つて聞いていたが、しまいに「……あなたは死という事実をまだ真面目に考えた事がありませんね」と言つた。私は黙つた。先生もそれぎり何とも言わなくなつた。

墓地の区切り目に、大きな銀杏が一本空を隠すように立っていた。その下へ来た時、先生は高い梢を見上げて、「……もう少しすると、綺麗ですよ。この木がすっかり黄葉して、ここいらの地面は金色の落葉で埋まるようになります」と言つた。先生は月に一度ずつは必ずこの木の下を通るのであった。向うの方で凸凹の地面をならして新墓地を作っている男が、鍬の手を休めて私たちを見ていた。私たちはそこから左へ切れてすぐ街道へ出た。

これからどこへ行くという目的のない私は、ただ先生の歩く方へ歩いて行つた。先生はいつもより口数を利かなかつた。それでも私はさほどの窮屈を感じなかつたので、ぶらぶら一緒に歩いて行つた。——「……すぐお宅へお帰りですか」、「……ええ別に寄る所もありませんから」、「二人はまた黙つて南の方へ坂を下りた。「……先生のお宅の墓地はあそこにあるんですか」と私がまた口を利き出すと、先生は、「いいえ」と答える。そこで、「……どなたのお墓があるんですか。——ご親類のお墓ですか」と聞くと、「いいえ」と、先生はこれ以外に何も答へなかつた。私もその話はそれぎりにして切り上げた。すると一町ほど歩いた後で、先生が不意にそこへ戻つて来た。「……あすこには私の友達の墓があるんです」、「……お友達のお墓へ毎月お参りをなさるんですか」、「そうです」、先生はその日これ以外を語らなかつた。（本文）

さて、先生と私は「通り」へ出ようとして墓の間を抜けたが、その時に、若者は、様々な墓石の「墓標」を見ては、しきりに彼此言いたがるのを、先生は、始めのうちは黙つて聞いていたが、しまいに、「……あなたは死という事実をまだ真面目に考えた事がありますね」と言つた。私は黙つた。先生もそれぎり何も言わなくなつた。

墓地の区切り目に、大きな銀杏が一本空を隠すように立っていた。その下へ来た時、先生は高い梢を見上げて、「……もう少しすると、綺麗ですよ。この木がすっかり黄葉して、ここいらの地面は金色の落葉で埋まるようになります」と言つた。先生は月に一度ずつは必ずこの木の下を通るのであった。これからどこへ行くという目的のない私は、ただ先生の歩く方へ一緒に歩いて行き、そして、「……すぐお宅へお帰りですか」と聞くと、「……ええ別に寄る所もありませんから」、「……先生のお宅の墓地はあすこにあるんですか」と聞くと、「いいえ」と答へ、「……どなたのお墓があるんですか。——ご親類のお墓ですか」と聞くと、「いいえ」と答えるだけであつた。それから、一町（約一〇九呎）ほど歩いた後で、先生が不意にそこへ戻つて来た。「……あすこには私の友達の墓があるんで

す」と言い、「……お友達のお墓へ毎月お参りをなさるんですか」と聞くと、「そうです」と答えるだけであった。先生はその日これ以外に何も語らなかったとある。

さて、この場面は、「墓地」(「人の死」) というものに対する「若者の意識」と「先生の意識」との「決定的な違い」がはっきりと浮き彫りにされているところであり、それは、この「若者」にとっては、「墓地」(「人の死」) というのは、まだ自分とは「直接には何の関係ない」いわば「他人事の場合」に過ぎないが、一方、先生にとっては、決して「他人事の場合」などではなくて、先生のその「人生」とまさに直結している、「現実の場所」になっているのである。——それにしても、毎月一度の「墓参り」(その命日)を欠かさないとするのは、誰がどう考えても「多過ぎる」という感じを抱かせることになるが、その「謎」も、第三部の「先生と遺書」の中で、やがて明らかにされる事になるのである。

十六、先生宅訪問を重ねる(六)

私はそれから時々先生を訪問するようになった。行くたびに先生は在宅であった。先生に会う度数が重なるにつれて、私はますます繁く先生の玄関へ足を運んだ。

けれども先生の私に対する態度は初めて挨拶をした時も、懇意になったその後も、あまり変りはなかった。先生は何時も静かであった。ある時は静か過ぎて淋しいくらいであった。私は最初から先生には近づきたい不思議があるように思っていた。それでいて、どうしても近づかなければいけないという感じが、どこかに強く働いた。こういう感じを先生に対してもっていたものは、多くの人のうちで或いは私だけかも知れない。しかし私の私だけにはこの直感が後になって事実の上に証拠立てられたのだから、私は若々しいと言われても、馬鹿げていると笑われても、それを見越した自分の直覚をとにかく頼もしくまた嬉しく思っている。人間を愛し得る人、愛せずにはいられない人、それでいて自分の懐に入ろうとするものを、手を拡げて抱き締める事の出来ない人、——これが先生であった。(本文)

*

*

さて、先生のお宅を訪ねることを何度も重ねていくうちに、次のようなことが分かって来た。それは、「……先生の私に対する態度は、初めて挨拶をした時も、懇意になったその後も、あまり変りはなかった。先生は何時も静かであった。私は最初から先生には近づきたい不思議があるように思っていたが、それでいて、どうしても近づかなければいけないという感じが、どこかに強く働いた。こういう感じを先生に対してもっていたものは、多くの人のうちで或いは私だけかも知れない」とある。——つまり、先生にはどこか他人を避けて近づけないようにしているところがあるとともに、一方では、「私」という若者をなぜか惹きつけて止まない不思議な「魅力と謎」とを深く秘めているところがあつたということである。そして、その「先生」という人は、もともとは「人間嫌い」でも何でもなく、「……人間を愛し得る人、愛せずにはいられない人、それでいて、(ある出来事をきっかけとして)、自分の懐に入ろうとするものを、(無条件で)手を拡げて抱き締める事の出来ない人(或いは出来なくなってしまう人)、——これが先生であった」ということである。

十七、墓参りと散歩の区別（六）

今言った通り先生は始終静かであった。落ち付いていた。けれども時として変な曇りがその顔を横切る事があった。私が始めてその曇りを先生の眉間に認めたのは、雑司ヶ谷の墓地で、不意に先生を呼び掛けた時であった。私はその異様の瞬間に、今まで快く流れていた心臓の潮流をちよつと鈍らせた。しかしそれは単に一時の結滞に過ぎなかった。私の心は五分と経たないうちに平素の弾力を回復した。私はそれぎり暗そうなこの雲の影を忘れていた。再び、それを思い出させられたのは、小春の尽きる頃の或る晩の事であった。先生と話していた私は、ふと先生がわざわざ注意してくれた銀杏の大樹を眼の前に想い浮かべた。勘定してみると、先生が毎月例として墓参りに行く日が、それからちようど三日目に当たっていた。その三日目は私の課業が午で終える楽な日であった。私は先生に向かって、「……先生雑司ヶ谷の銀杏はもう散ってしまったでしようか」と聞くと、「……まだ空坊主にはならないでしょう」と言うので、そこで私はすぐさま、「……今度お墓参りにいらつしやる時にお伴をしても宜ござんすか。私は先生と一緒にあすこいらが散歩してほしい」と言うと、先生は、「……私は墓参りに行くんで、散歩に行くんじゃないですよ」と答えるので、「……しかし、ついでに散歩をなすたらちようど好いじゃありませんか」と言うと、先生は何とも答えなかった。

しばらくしてから、「……私のは本当の墓参りだけなんだから」と言つて、どこまでも墓参りと散歩を切り離そうとする風に見えた。私と行きたくない口実だか何だか、私にはその時の先生が、いかにも子供らしくて変に思われた。私はなおと先へ出る気になった。「……じゃお墓参りでも好いからいっしょに伴れて行つて下さい。私もお墓参りをしますから」と言つた。実際、私には墓参りと散歩との区別がほとんど無意味のように思われたのである。すると、先生の眉がちよつと曇つた。眼のうちにも異様の光が出た。それは迷惑とも嫌悪とも畏怖とも片付けられない微かな不安らしいものであった。私は忽ち雑司ヶ谷で「先生」と呼び掛けた時の記憶を強く思い起した。二つの表情は全く同じだったのである。「私は」と先生が言つた。「……私はあなたに話す事の出来ない理由があつて、他といっしょにあすこへ墓参りには行きたくないのです。自分の妻さえまだ伴れて行つた事がないのです」と答えるのであつた。（本文）

*

*

さて、この場面は、まだ若い「私」という人と、心に「深い傷」（影）を持つ「先生」との、人の「死」やその「墓参り」に対する「考え方」の「根本的な違い」の表れているところであり、それは、次のようなことである。——まず、この「私」という若い人（書生）の、その「家族」（両親や兄や妹その他）などは、まだ生きてるのであり、それゆえ、まだ親しい人の「死」に直面したという生の「経験や想い出」などの持ち合わせがないのである。それゆえ、人の「死」もその「墓参り」も、まだどこか他人事のように感じられて、その「重み」（「現実味」「リアリティー」）というものが感じられないのである。だからこそ、「……実際、私には墓参りと散歩との区別がほとんど無意味のように思われた」となるのである。——つまり、「散歩」と「墓参り」、それは「全く違うもの」であるが、この「私」という若者にとつては、ほとんど同じように見えているのである。

一方、心に「深い傷」（影）を持つ「先生」にとつては、自分の「行動」（言動）が、

結果として、親友を「死に追いやるようなこと」になつてしまったことに、……あの時、自分は、なぜ、あのようなことを言つてしまつたのか？ 或いは、あの時、自分は、なぜ、あのような行動をしてしまつたのか？ そのような「後悔の念や自責の念」などに襲われているのであり、その「想い」が、先生の「心」を「深く苦しめている」とともに、毎月一度の「墓参り」を欠かさずさせているのであり、それゆえ、「……私のは本当の墓参りだけなんだから」と言うのも、それは、まさに親友にいわば「懺悔（謝罪）に行つてゐる」ようなものであり、それゆえ、他人は邪魔になるだけであるとともに、そのような「姿」は、誰にも見られたくないし、ましてや、誰よりも「妻」に知られることを何よりも恐れているのである。それが、つまり、「……私はあなたに話す事の出来ない理由があつて、他といつしよにあそこへ墓参りには行きたくないのです。自分の妻さえまだ伴つて行つた事がないのです」という言葉になるのである。

十八、私は寂しい人間です（七） 其の一

私は不思議に思った。しかし私は先生を研究する気でその宅へ出入りをするのではなかつた。私はただそのままにして打ち過ぎた。今考えるところの私の態度は、私の生活のうちでむしろ尊むべきものの一つであつた。私は全くそのために先生と人間らしい温かい交際ができたのだと思う。もし私の好奇心が幾分でも先生の心に向かつて、研究的に働き掛けたなら、二人の間を繋ぐ同情の糸は、何の容赦もなくその時ふつりと切れてしまつたろう。若い私は全く自分の態度を自覚していなかつた。それだから尊いのかも知れないが、もし間違えて裏へ出たとしたら、どんな結果が二人の仲に落ちて来たらう。私は想像してもぞつとする。先生はそれでなくても、冷たい眼で研究されるのを絶えず恐れていたのである。（本文）

*

*

さて、「……私は不思議に思った」とある。これは、「……何かよほどの理由があるのだらうとは思つた」が、「……私は先生を研究する気でその宅へ出入りをするのではなかつた。（それゆえ）、私はただそのままにして打ち過ぎた」。——それは、つまり、先生の「心の中」を根ほり葉ほり探るようなことはしなかつた。それが結果としてよかつたのであり、「……もし間違えて裏（探り）へ出たとしたら、どんな結果が二人の仲に落ちて来たらう。私は想像してもぞつとする。先生はそれでなくても、冷たい眼で研究されるのを絶えず恐れていたからである」となるのである。

十八、私は寂しい人間です（七） 其の二

さて、私は、月に二度若しくは三度ずつ必ず先生の宅へ行くようになった。私の足が段々繁くなつた時のある日、先生は、突然私に向かつて聞いた。それは、「……あなたは何でそう度々私のようなものの宅へやつて来るのですか」、「……何でと言つて、そんな特別な意味はありません。——しかしお邪魔なんですか」、「……邪魔だとは言いません」と言う。なるほど迷惑という様子は、先生の何処にも見えなかつた。私は先生の交際の範囲の極めて狭い事を知つていた。先生の元の同級生などで、その頃東京にいるものは殆

ど二人か三人しかないという事も知っていた。先生と同郷の学生などには時たま座敷で同座する場合もあったが、彼らのいずれもは皆な私ほど先生に親しみをもっていないように見受けられた。すると、「……私は淋しい人間です」と先生が言った。「……だからあなたに来て下さる事を喜んでいます。だからなぜそう度々来るのかと言って聞いたのです」、「……そりやまた何故です」と、私がこう聞き返した時、先生は何とも答えなかった。ただ私の顔を見て、「……あなたは幾歳ですか」と聞いた。この問答は私にとつてすこぶる不得要領のものであったが、私はその時底まで押さずに帰ってしまった。(本文)

*

*

さて、私は、月に二度若しくは三度ずつ必ず先生の宅へ行くようになった。私の足が段々繁くなつた時のある日、先生は、突然私に向かつて聞いた。それは、「……あなたは何でそう度々私のようなもの宅へやってくるのですか」と聞くと、「私」という人は、「……何でと言って、そんな特別な意味はありません。——しかし邪魔なんですか」と聞き返すので、先生は、「……邪魔だとは言いません」と言う。そして、「……私は淋しい人間です」、「……だからあなたに来て下さる事を喜んでいます。だからなぜそう度々来るのかと言って聞いたのです」、「……そりやまた何故です」と、私がこう聞き返した時、先生は何とも答えなかったとある。

まず、先生が、「……あなたは何でそう度々私のようなもの宅へやってくるのですか」と聞くのは、それは、「……一体、何がよくてそう度々やって来るのですか」と聞いていたのである。それに対して、「私」という人は、「……何でと言って、そんな特別な意味はありません」と答えている。それは、まだ本人にも「よく分かっていない」ということなのかも知れない。すると、先生は、「……私は淋しい人間です」と言うのであった。

それでは、この「……私は淋しい人間です」というのは、一体、どのような「意味合い」になるのかと問えば、それは、次のようなことである。つまり、一言で言えば、それは、まさに「話し相手」がないということであるが、しかし、それは、ごく「ふつう一般に世間話などをするような話し相手」のことではなく、もっと「心を割って親しく話し合える話し相手がいない」ということである。だからこそ、(比較的信頼できて親しく話せる)「……あなたの来て下さる事を喜んでいます」となるのである。——これは、何度も書き記しているように、「先生」という人は、妻以外、これという「話し相手」もなく、いわば「孤独な人」であったが、それゆえ、自分の「思いや考え」などを真摯に語り合える相手を、知らず識らずのうちに、誰か信頼できる「話し相手」というものをどこか探し求めるようなところがあったということである。そして、そのような「精神状態」のところに、全く偶然にも若い「書生」(それは帝大の学生)が突然として目の前に現われ出たということである。もちろん、最初は、その「若者」を避けてはいたが、結局は、それを受け入れることになるのである。——それは、「私」という人も、また、「先生」という人も、知らず識らずのうちに、単なる世間話などをするような相手ではなく、もっと人生をあれこれと深く語り合える、そういう「相手」(真の「話し相手」)というものをどこか渴望していたということであり、そういう二人が、夏の鎌倉の海岸(浜辺)において、偶然にもばったりとめぐり逢つたということである。

そして、「先生」という人は、「心の中」ではまさに真に信頼でき得る「話し相手」というものを、知らず識らずのうちに、探し求めていたのであり、一方、「私」という人

は、無聊（ぶりょう）に苦しんでいたが、これは、若い時には、誰でも、多かれ少なかれ、経験することであり、何をどうしてよいかよく分からず、あれこれ無為に時を過ごしてしまふ時期でもあるが、しかし、その人の「心の中」では、必ず、何かを求めているものがあり、それでは、その「何か」とは、一体、何かと敢えて問えば、それは、その「人の心」を、うそ偽りなく、真（まこと）に「深く満たしてくれるもの」であり、この「私」という人物にとつても、それが「何か」が分からないために、今は、あれこれ退屈している状態であるが、しかし、「先生」を見た時に、何かをふと感じたのであり、それは、あの「人」は、若（わか）しかしたら、「……自分の心が知らず識らずのうちに探し求めているその何か（人生の何か）を教えてくれる人かも知れない」というような感じであり、そういう雰囲気を醸し出していたからこそ、無意識の内にも、自然と「先生」と呼ぶようになったのである。

ところで、先生は、私の顔を見て、「……あなたは幾歳ですか」と聞いて来た。この間答は私にとつてすこぶる不得要領（ふとくようりょう）（要点がはつきりしないもの）であつたが、私はその時底まで押さずに帰つてしまつたとある。——この「底まで押さずに帰つた」というのは、恐らく、「……なぜ、年齢のことなどを聞くのですか？」と問い詰めることはせずに、そのまま帰つたということである。

十八、私は寂しい人間です（七） 其の三

しかし、それから四日と経たないうちに、（私は）また先生を訪問した。先生は、座敷へ出るや否や笑い出した。「また来ましたね」と言つた。「ええ来ました」と言つて自分も笑つた。私は外の人からこう言われたらきつと癩（しやく）に触つたらうと思う。しかし、先生にこう言われた時は、まるで反対であつた。癩（しやく）に触らないばかりでなくかえつて愉快だつた。「……私は淋しい人間です」と、先生は、その晩またこの間の言葉を繰り返した。「……私は淋しい人間ですが、ことによるとあなたも淋しい人間じゃないですか。私は淋しくつても年を取っているから、動かずにいられるが、若いあなたはそうは行かないのでしょうか。動けるだけ動きたいのでしょうか。動いて何かに打つかりたいのでしょうか……」と言つと、「……私はちつとも淋しくはありません」と答える、先生は、「……若いうちほど淋しいものはありません。そんならなぜあなたはそう度々私の宅へ来るのですか」と聞く。ここでもこの間の言葉がまた先生の口から繰り返された。そして、「……あなたは私に会つてもおそろくまだ淋しい気がどこかでしているでしょう。私にはあなたのためにその淋しさを根元から引き抜いて上げるだけの力がないんだから。あなたは外の方を向いて今に手を広げなければなりません。今に私の宅の方へは足が向かなくなりませう」と、先生は、こう言つて淋しい笑い方をしたとある。（本文）

さて、それから四日と経たないうちに、（私は）また先生を訪問した。先生は、座敷へ出るや否や笑い出した。「また来ましたね」と言つた。「ええ来ました」と言つて自分も笑つたとある。——これは、「私」という人も、また、「先生」という人も、知らず識らずのうちに、単なる世間話などをするような相手ではなく、もつと人生をあれこれと深く語り合える、そういう「相手」（真の「話し相手」）というものを二人とも非常に強く渴望していたということである。すると、先生は、「……私は淋しい人間ですが、ことによ

るとあなたも淋しい人間じゃないですか。私は淋しくつても年を取っているから、動かずにいられるが、若いあなたはそうは行かないのでしょうか。動けるだけ動きたいのでしょうか。動いて何かに打つかりたいのでしょうか」と言うのと、「……私はちつとも淋しくはありませぬ」と答える、先生は、「……若いうちほど淋しいものはありません。そんならなぜあなたはそう度々私の宅へ来るのですか」と聞くのであった。

これは、誰であれ、特に若い時期には、「心の中」では、必ず、何かを求めているものであり、それでは、その「何か」とは、一体、何かと敢えて問えば、それは、その「人の心」を、うそ偽りなく、真に「深く満たしてくれるもの」であるが、この「私」という人物にとつても、それが「何か」が分からないために、今は、あれこれ退屈している状態であるが、しかし、「先生」を見た時に、何かをふと感じたのであり、それは、あの「人は、若しかししたら、「……自分の心が知らず識らずのうちに探し求めているその何か（人生の何か）を教えてくれる人かも知れない」というように感じたということである。しかし、「先生」という人は、「……あなたは私に会ってもおそろくまだ淋しい気がどこかでしているでしょう。私にはあなたのためにその淋しさを根元から引き抜いて上げるだけの力がないんだから。（それゆえ）、あなたは外の方を向いて今に手を広げなければならぬくなります。今に私の宅の方へは足が向かなくなりませぬ」と言うのであった。——それは、一体、何故なのか？（本来であれば、この若者のその期待にこたえて、彼の人生を正しく導くようなことを言ったりやったりして上げたいが、また、本来、それができ得る人でありながら）、先生の「言葉」を借りて言えば、「……私は世間に向かつて働きかける資格のない男だから仕方がない」（つまり私は他人に「働きかける資格」のない人間だからそれが出来ない）ということであり、この「謎めいた言葉」というのは、「第三部」（先生と遺書）を読み解くことによつて、やがては明らかになるということである。

*

*

十九、先生宅で食事や酒を飲む

十九、先生宅で食事や酒を飲む（八）其の一

幸いにして先生の予言は実現されずに済んだ。経験のない当時の私は、この予言の中に含まれている明白な意義さえ了解し得なかった。私は依然として先生に会いに行つた。その内いつの間にか先生の食卓で飯を食うようになった。自然の結果奥さんとも口を利かなければならないようになった。——普通の人間として私は女に対して冷淡ではなかった。けれども年の若い私の今まで経過して来た境遇から言つて、私はほとんど交際らしい交際を女に結んだ事がなかった。それが原因かどうかは疑問だが、私の興味は往來で出会う知りもしない女に向かつて多く働くだけであつた。先生の奥さんにはその前玄関で会つた時、美しいという印象を受けた。それから会うたびに同じ印象を受けない事はなかった。しかしそれ以外に私はこれと言つてとくに奥さんについて語るべき何物も持たないような気がした。——これは奥さんに特色がないと言うよりも、特色を示す機会が来なかつたのだと解釈する方が正當かも知れない。しかし私はいつでも先生に付属した一部分のような心持で奥さんに対していた。奥さんも自分の夫の所へ来る書生だからという好意で、私を遇していたらしい。だから中間に立つ先生を取り除ければ、つまり二人はばらばらになつていた。それで始めて知り合いになつた時の奥さんについては、ただ美しいという外に何の感じも残っていない。（本文）

*

*

この場面は、まさに「書いてある通り」だと思つて、まず、「……その内いつの間にか先生の食卓で飯を食うようになった。自然の結果奥さんとも口を利かなければならないよになつた」とある。この「先生の食卓で飯を食うようになった」とすれば、当然のことながら、先生とはより親しくなつて行くだろうし、また、奥さんとも話をするようになる。——例えば、人と「親しくなる方法」の一つとして、食事を一緒にする（或いは「飲み食いを一緒にする」というのは、まさに「基本中の基本」（古典中の古典）であり、例えば、「友達関係」であれ、「男女関係」であれ、その他、どのような関係であれ、相手と「親しくなろう」とするならば、その極めて有効な「方法」の一つとして、遙か遠い大昔から、相手と「食事を一緒にする」（或いは「飲み食いを一緒にする」）ことによつてこそ、一般的に、それだけ「親しさを増して行く」ことになるのである。それはともかく、「私」という人にとつて、「……始めて知り合いになつた時の奥さんについては、ただ美しいという外に何の感じも残っていない」とあるが、しかし、やがては、「奥さんとも親しく話をするようになる」ことによつてこそ、この「私」という人は、今まで知り得なかつた「先生に関する実様な事実を知る」ことになるのである。

十九、先生宅で食事や酒を飲む（八）其の二

さて、ある時、私は先生の宅で酒を飲まされた。その時、奥さんが出て来て傍で酌をしてくれた。先生は、いつもより愉快そうに見えた。奥さんに「お前も一つお上がり」と言つて、自分の呑み干した盃を差した。奥さんは、「私は……」と辞退しかけた後、迷惑そうにそれを受け取つた。奥さんは綺麗な眉を寄せて、私の半分ばかり注いで上げた盃を、唇の先へ持つて行つた。奥さんと先生の間に下のような会話が始まつた。「……珍ら

しい事。私に呑めとおっしゃった事は滅多にないのにね」、「……お前は嫌いだからさ。しかし稀には飲むといいよ。悪い心持になるよ」、「……ちつともならないわ。苦しいぎりでもあなたは大変ご愉快そうね、少しご酒を召し上がると」、「……時によると大変愉快になる。しかし何時でもという訳にはいかない」、「今夜はいかがです」、「今夜はいい心持だね」、「……これから毎晩少しづつ召し上がると宜ござんすよ」、「そうはいかない」、「……召し上がって下さいよ。その方が淋しくなくて好いから」と言うのであった。(本文)

*

*

さて、この「夫婦の会話」は、実に自然かつ滑らかに進んでいるが、それは、一体、なぜなのかと問えば、それは、この「二人の間」には、第三者の「私」という人が存在するからである。——まず、夫が、奥さんに「お前も一つお上がり」と言つて、自分の呑み干した盃を差した。奥さんは、「私は……」と辞退しかけた後、迷惑そうにそれを受け取つた。そして、「……珍しい事。私に呑めとおっしゃった事は滅多にないのにね」となるのである。——だとすれば、先生は、酒を飲む時は、ほとんど「ひとりで飲んでいること」が多くて、奥さんは傍にいて、その先生のお酒のお酌をしていることになるのだろう。だとすれば、例えば、「夫婦二人」だけで、「……世間話をするにしろ、自分たちの話をするにしろ、その他、どのような話をするにせよ」、どうしても「相手との直接的な対話形式」にならざるを得ないものである。——つまり、「……夫がこう言えば、妻はそれに対してこう応え、妻がこう言えば、夫はそれに対してこう応える」というような二人だけの「対話形式」がずっと続くことになる。特にこの「先生」の場合は、妻と直接面と向かつて「一対一」になることは、死んだ親友をなぜか「想い出す」ことになってしまい、それは、非常に辛いことになるのである。——ところが、そこに「第三者」が入れば、「夫と妻だけ」の対話だけではなく、「夫から第三者」(逆に「第三者から夫」)、また、「妻から第三者」(逆に「第三者から妻」)というように、実に様々な「対話形式」が自然と生じて来ることになり、それだけいわば「楽な気持ち」になれるのである。

例えば、その「第三者」が「夫婦の間」の「実の子供(たち)」であれ、また、可愛がつている犬やネコの「愛玩動物」(ペット類)であれ、或いは、親戚、親友、友達、その他、誰であっても、いわば気心の知れた「第三者」であれば、「夫婦だけの時」とはまた違つて、一般に、何かもつと「楽な気持ち」になれるものではないかと思う。特に「先生」の場合は、妻と「直接面と向かうこと」を出来るだけ避けているのであり、それゆえ、そこに「私」という「第三者」がいることで、最初から最後までずっと妻と「向き合う」必要がなくなり、それだけ「楽な気持ち」になれて、この時の「夫婦の会話」のように、実に自然かつ滑らかに進んで行くことにもなるのである。

二十、夫婦間の子供の話(八)

ところで、先生の宅は夫婦と下女だけであつた。行くたびに大抵はひそりとしていた。高い笑い声などの聞こえる試しはまるでなかった。或る時は、宅の中にいるものは先生と私だけのような気がした。「……子供でもあると好いんですがね」と奥さんは私の方を向いて言った。私は、「……そうですね」と答えた。しかし私の心には何の同情も起らな

った。子供を持った事のないその時の私は、子供をただ蒼蠅うるさいもののように考えていた。「……一人貰もらってやろうか」と先生が言った。「……貰もらッ子じゃ、ねえあなた」と奥さんはまた私の方を向いた。「……子供はいつまで経たつたつてできっこないよ」と先生が言った。奥さんは黙もくっていた。「なぜです」と私が代りに聞いた時、先生は、「天罰だからさ」と言いって高く笑わらった。(本文)

*

*

それでは、なぜ、先生「夫婦」には、子供がいなかったのだらうか？ それは、次のような理由からなのである。——まず、「……子供でもあると好いいんですがね」と、奥さんは、私の方を向いて言いった。これは、極めて「大事な言葉」であり、それは、奥さんの心の底からの「本音」そのものだからであり、この「言葉」に対して、夫（先生）がどのように「反へん応おう」するのかわをじつと見ているのである。それに対して、夫（先生）は、「……一人貰もらってやろうか」と言いった。「……貰もらッ子じゃ、ねえあなた」と奥さんはまた私の方を向むいたとある。これは、当然のことながら、夫（先生）の「子供こそが欲しい」であり、何も「他人の子供」が欲しいということではないのである。すると、夫（先生）は、実に「恐おそるべき言葉」を発するのである。それは、「……子供はいつまで経たつたつてできっこないよ」と先生が言いった。この「言葉」を聞いて、妻（奥さん）は、まだ「希望」を捨すてずに抱かかっていた、その「想おもい」が、まさに一気に「地獄の底」へと突き落とされてしままうのである。だからこそ、奥さんは黙もくっていた（いや黙もくり込むしかなかったのである）。そこで、「なぜです」と私が代りに聞いた時、先生は、「……天罰だからさ」と言いって高く笑わらった、とある。——それでは、その「天罰」とは、一体、具体的にはどのようなものになるのかについては、ここでは「伏ひそして」、後述の「第三部」（先生と遺書）のところこで、出来るだけ詳しく考察してみたいと思おもう。

二一、仲の好い夫婦の一对（九）

私の知る限り先生と奥さんとは、仲の好い夫婦の一对いっぴであった。家庭の一員として暮くした事のない私のことだから、深い消息は無む論解わらなかつたけれども、座敷で私と対坐たいざしている時、先生は何かのついでに、下女げじよを呼よばないで、奥さんを呼よぶ事があった。（奥さんの名は静しずと言いった）。先生は「おい静」といつでも襖ふすまの方を振り向むいた。その呼よびかたが私には優やさしく聞きこえた。返事をして出て来る奥さんの様子も甚はなだ素直すじであった。ときたまご馳走ちそうになつて、奥さんが席へ現あわれる場合などには、この関係が一層明らかあに二人の間に描あき出でされるようであった。——先生は時々奥さんを伴つれて、音楽会だの芝居だのに行いった。それから夫婦づれで一週間以内の旅行をした事も、私の記憶によると、二、三度以上あつた。私は箱根はこねから貰もらった絵端書えはぎをまだ持っている。日光へ行いった時は紅葉もみぢの葉を一枚封じ込めた郵便も貰もらった。当時の私の眼に映うつつた先生と奥さんの間柄はまずこんなものであつた。(本文)

*

*

さて、私の知る限り先生と奥さんとは、仲の好い夫婦の一对いっぴであった。座敷で私と対坐たいざしている時、先生は何かのついでに、下女げじよを呼よばないで、奥さんを呼よぶ事があった。そして、先生は、「おい静」といつでも襖ふすまの方を振り向むいた。その呼よびかたが私には優やさしく聞き

こえた。返事をして出て来る奥さんの様子も甚だ素直であった。ときたまご馳走になつて、奥さんが席へ現われる場合などには、この関係が一層明らかに二人の間に描き出された。——先生は時々奥さんを伴れて、音楽会だの芝居だのに行つた。それから夫婦づれで一週間以内の旅行をした事も、私の記憶によると、二、三度以上あつたとある。——これは、「私」という人から見た、まさに先生「夫婦」のいわば「外的事実」であるが、しかし、一方、先生「夫婦」の間には、当然のことながら、二人だけにしか解りようのない「内的事実」というものもあつたのである。それは、まさに次のようなものである。

二二、先生と奥さんの喧嘩（言逆い）（九）其の一

そのうちにたった一つの例外があつた。ある日私がいつもの通り、先生の玄関から案内を頼もうとすると、座敷の方でだれかの話し声がした。よく聞くと、それが尋常の談話でなくって、どうも言逆いらしかつた。先生の宅は玄関の次がすぐ座敷になつていたので、格子の前に立っていた私の耳にその言逆いの調子だけはほぼ分つた。そうしてそのうちの一人が先生だという事も、時々高まつて来る男の方の声で解つた。相手は先生よりも低い音なので、誰だか判然しなかつたが、どうも奥さんらしく感ぜられた。泣いているようでもあつた。私はどうしたものだろうと思つて玄関先で迷つたが、すぐ決心をしてそのまま下宿へ帰つた。——妙に不安な心持が私を襲つて来た。私は書物を読んでも呑み込む能力を失つてしまつた。約一時間ばかりすると先生が窓の下へ来て私の名を呼んだ。私は驚いて窓を開けた。先生は散歩しようと言つて、下から私を誘つた。先刻帯の間へ包んだままの時計を出して見ると、もう八時過ぎであつた。私は帰つたなりまだ袴を着けていた。私はそれなりすぐ表へ出た。（本文）

*

*

さて、今度は、先生と奥さんとの「喧嘩」（言逆い）であるが、それは、「……先生の宅の中から、尋常の談話でなくって、どうも言逆いらしい声が聞こえてきた。そして、そのうちの一人が先生だという事も、時々高まつて来る男の方の声で解つた。相手は先生よりも低い音なので、誰だか判然しなかつたが、どうも奥さんらしく感ぜられた。泣いているようでもあつた」とある。——もちろん、これだけでは、この夫婦がどのようなことで揉めているのかは全く分からないが、しかし、もうちよつと先を読み進んでいくと、次のような言葉が出て来る。それは、先生が、「……実は先刻妻と少し喧嘩をしてね。それで下らない神経を昂奮させてしまつたんです」、「……妻が私を誤解するのです。それを誤解だと言つて聞かせても承知しないのです。（だから）つい腹を立てたのです」、「……妻が考えているような人間なら、私だつてこんなに苦しんでいやしない」と言うのであつた。むろん、これだけでは、具体的なことは何一つ分からないが、しかし、この先をずっと読み進めていけば、やがては分かつて来る問題であり、それゆえ、これはこのままにして前に進みたいと思う。——ところで、「私」という人は、その時、どうしようかと迷つたが、そのまま下宿へ帰つた。……すると、驚いたことに、「……先生は散歩しようと言つて、下から私を誘つた」とある。もしそうだとすれば、先生の「宅」と「私」という人の「下宿先」とは、二人が歩いて、「往き来でき得るような距離」（約一時間内）に住んでいるということであり、そして、二人は、散歩に出かけることになるのである。

その晩私は先生といっしよに麦酒を飲んだ。先生は元来酒量に乏しい人であった。ある程度まで飲んで、それで酔えなければ、酔うまで飲んでみるという冒険の出来ない人であった。「……今日は駄目です」と言って先生は苦笑した。「……愉快になれませんか」と私は気の毒そうに聞いた。——私の腹の中には始終先刻の事が引つ懸っていた。肴の骨が咽喉に刺さった時のように、私は苦しんだ。打ち明けてみようかと考えたり、止した方が好かるうかと思ひ直したりする動揺が、妙に私の様子をそわそわさせた。「……君、今夜はどうかしていますね」と先生の方から言い出した。「……実は私も少し変なのですよ。君に分りますか」と聞かれて、私は何の答えもし得なかつた。「……実は先刻妻と少し喧嘩をしてね。それで下らない神経を昂奮させてしまったんです」と先生がまた言った。「どうして……」とだけ、私には喧嘩という言葉が口へ出て来なかつた。「……妻が私を誤解するのです。それを誤解だと言って聞かせても承知しないのです。（だから）つい腹を立てたのです」、「……どんなに先生を誤解なさるんですか」と聞くと、先生は私のこの問いに答えようとはしなかつた。「……妻が考えているような人間なら、私だってこんなに苦しんでいやしない」と言うのであつた。先生がどんなに苦しんでいるか、これも私には想像の及ばない問題であつた。（本文）

*

*

さて、「その晩」（正確には夜八時過ぎ以降であるが）、外で、私は先生といっしよに麦酒を飲んだ。（中略）、そして、「……今日は駄目です」と言つて先生は苦笑したとある。これは、前に、先生が、奥さんに「お前も一つお上がり」と言つて、自分の呑み干した盃を差した時には、先生は、「……今夜は好い心持だね」と言つていた。ところが、今回は、「……今日は駄目です」と言つて先生は苦笑したとなるのである。それは、当然のことながら、奥さんと「喧嘩」（言逆い）を起こしているからである。——つまり、「……実は先刻妻と少し喧嘩をしてね。それで下らない神経を昂奮させてしまったんです」、「……妻が私を誤解するのです。それを誤解だと言って聞かせても承知しないのです。（だから）つい腹を立てたのです」、「……妻が考えているような人間なら、私だってこんなに苦しんでいやしない」と言うのであるが、この「問題」を解く鍵としては、次のような「言葉」を参考までに書き記しておきたいと思う。

それは、少し後で、「私」と「奥さん」の「二人の対話」の中に出て来るものであるが、それは、次のようなものである。つまり、「……若い時はあんな人じゃなかつたんですよ。若い時はまるで違つていました。それが全く變つてしまつたんです」、「……若い時つていつ頃ですか」、「書生時代よ」、「……じゃ先生がそう變つて行かれる原因がちゃんと解るべきはずですがね」、「……あなたからそういわれると実に辛いんですが、私にはどう考えても、考えようがないんですもの。私は今まで何遍あの人に、どうぞ打ち明けて下さいつて頼んで見たか分りやしません」、「……先生は何とおっしゃるんですか」、「……何にもいう事はない、何にも心配する事はない、おれはこういう性質になつたんだからというだけで、取り合つてくれないんです」、「……私はどうとう辛防し切れなくなつて、先生に聞きました。私に悪い所があるなら遠慮なく言つて下さい、改められる欠点なら改め

るからって、すると先生は、お前に欠点なんかありやしない、欠点はおれの方にあるだけだと言うんです。そう言われると、私悲しくなつて仕様がないうんです、涙が出てなあの事自分の悪い所が聞きたくなるんです」とある。——つまり、「……先生は、なぜ変わってしまったのか？ それをどうしても打ち明けてはくれなかった」ということである。

二二、先生と奥さんの喧嘩（言逆い）（十）其の三

二人が帰るとき歩きながらの沈黙が一丁（約一〇九頁）も二丁（約二一八頁）もつづいた。その後で突然先生が口を利き出した。「……悪い事をした。怒つて出たから妻はさぞ心配をしているだろう。考えると女は可哀（かわい）そうなものですね。私の妻などは私より外（ほか）にまるで頼りにするものがないんだから」、先生の言葉はちよつとそこで途切（とぎ）れたが、別に私の返事を期待する様子もなく、すぐその続きへ移つて行つた。「……そういうと、夫の方はいかにも心丈夫のようで少し滑稽（こっけい）だが。君、私は君の眼にどう映りますかね。強い人に見えますか、弱い人に見えますか」、「……中位（ちゆうゐ）に見えます」と私は答えた。この答えは先生にとって少し案外（あんがい）らしかつた。先生はまた口を閉じて、無言で歩き出した。

先生の宅（うち）へ帰るには私の下宿（しよくだ）のついで傍（そば）を通るのが順路（じゆんろ）であつた。私はそこまで来て、曲り角で分れるのが先生に濟（た）まないような気がした。「……ついでにお宅（たく）の前までお伴（とも）しましょうか」と言つた。先生は忽（たちま）ち手で私を遮（さか）つた。「……もう遅いから早く帰りましたま。私も早く帰つてやるんだから、妻君（さいくん）のために」、先生が最後に付け加えた「妻君のために」という言葉は妙にその時の私の心を暖かにした。私はその言葉のために、帰つてから安心して寝る事ができた。私はその後も長い間この「妻君のために」という言葉を忘れなかつた。——先生と奥さんの間に起つた波瀾（はらん）が、大したものでもない事はこれでも解（わか）つた。それがまた滅多（めつた）に起る現象（げんさう）でなかつた事も、その後絶えず出入りをして来た私にはほほ推察（すいさ）ができた。それどころか先生はある時こんな感想（かんさう）すら私に洩（も）らした。（本文）

* * *

さて、ここで最も「大事な言葉」は、「……悪い事をした。怒つて出たから妻（さい）はさぞ心配（しんぱい）をしているだろう。考えると女は可哀（かわい）そうなものですね。私の妻などは私より外（ほか）にまるで頼りにするものがないんだから」、そして、「……もう遅いから早く帰りましたま。私も早く帰つてやるんだから、妻君（さいくん）のために」と、先生は最後に付け加えたのである。——これは、先生がいかにどれだけ「奥さん」のことを心の底から愛しているかがはっきりと分かるところであり、だからこそ、次のような「言葉」を先生は（ある時）語ることもなるのである。——それは、先生の「本心（ほんしん）」そのものである。

二三、天下にただ一人しかない相手同士（十）

つまり、「……私は世の中で女というものをたつた一人しか知らない。妻（さい）以外の女はほとんど女として私に訴（こ）えないのです。妻の方でも、私を天下にただ一人しかない男と思つてくれています。そういう意味から言つて、私たちは最も幸福（きふ）に生れた人間の一对（いっぴ）であるべきはずです」。——私は今前後の行き掛（が）りを忘れてしまったから、先生が何のためにこんな自白（じはく）を私にして聞かせたのか、判然（はつきり）言う事が出来ない。けれども先生の態度の真面目（まじめ）

であったのと、調子の沈んでいたのとは、今だに記憶に残っている。その時ただ私の耳に異様に響いたのは、「最も幸福に生れた人間の一对であるべきはずです」という最後の一句であった。先生はなぜ幸福な人間と言い切らないで、あるべきであるかと断わったのか。私にはそれだけが不審であった。ことにそこへ一種の力を入れた先生の語気が不審であった。先生は事実をたして幸福なのだろうか、また幸福であるべきはずでありながら、それほど幸福でないのだろうか。私は心の中で疑らざるを得なかった。けれどもその疑いは一時限りどこかへ葬られてしまった。(本文)

*

*

さて、「……私は世の中で女というものをたった一人しか知らない。妻以外の女はほとんど女として私に訴えないのです。妻の方でも、私を天下にただ一人しかない男と思ってくれています。そういう意味から言って、私たちは最も幸福に生れた人間の一对であるべきはずです」と言うのであった。

これは、お互いが「天下にただ一人しかない相手」と深く思っているものであり、それゆえ、当然のことながら、この世で誰よりも「仕合わせな夫婦の一对」であるべきはずであるが、実際は、そうなっていないところに、先生「夫婦」には何か大きな「謎」が奥深く匿されているということである。

*

*

二四、私と奥さんの会話

私はそのうち先生の留守に行つて、奥さんと二人差向いで話をする機会に出合った。先生はその日横浜を出帆する汽船に乗つて外国へ行くべき友人を新橋へ送りに行つて留守であつた。横浜から船に乗る人が、朝八時半の汽車で新橋を立つのはその頃の習慣であつた。私はある書物について先生に話してもらふ必要があつたので、あらかじめ先生の承諾を得た通り、約束の九時に訪問した。先生の新橋行きは前日わざわざ告別に來た友人に対する礼義としてその日突然起つた出来事であつた。先生はすぐ帰るから留守でも私に待つているようにと言ひ残して行つた。それで私は座敷へ上がつて、先生を待つ間、奥さんと話をした。(本文)、——この「奥さん」と話をするこゝによつてこそ、今まで知り得なかつた先生に関する「実に様々な情報その他」などを得ることになるのである。

その時の私はすでに大学生であつた。始めて先生の宅へ來た頃から見るとずっと成人した氣でいた。奥さんとも大分懇意になつた後であつた。私は奥さんに対して何の窮屈も感じなかつた。差向いで色々の話をした。しかしそれは特色のないただの談話だから、今ではまるで忘れてしまつた。そのうちでたつた一つ私の耳に留まつたものがある。しかしそれを話す前に、ちよつと断つておきたい事がある。

先生は大学出身であつた。これは始めから私に知れていて、しかし先生の何もしないで遊んでいるという事は、東京へ歸つて少し経つてから始めて分かつた。私はその時どうして遊んでいられるのかと思つた。——先生はまるで世間に名前を知られていない人であつた。だから先生の学問や思想については、先生と密切の關係をもつていて私より外に敬意を払うもののあるべきはずがなかつた。それを私は常に惜しい事だと言つた。先生はまた「私のようなものが世の中へ出て、口を利いては濟まない」と答えるがりで、取り合はなかつた。私にはその答えが謙遜過ぎてかえつて世間を冷評するようにも聞こえた。實際先生は時々昔の同級生で今著名になつていて誰彼を捉えて、ひどく無遠慮な批評を加える事があつた。それで私は露骨にその矛盾を挙げて云々してみた。私の精神は反抗の意味というよりも、世間が先生を知らないで平氣でいるのが残念だつたからである。その時先生は沈んだ調子で、「どうしても私は世間に向かつて働き掛ける資格のない男だから仕方がありません」と言つた。先生の顔には深い一種の表情がありありと刻まれた。私にはそれが失望だか、不平だか、悲哀だか、解らなかつたけれども、何しろ二の句の継げないほどに強いものだったので、私はそれぎり何もいう勇氣が出なかつた。(本文)

さて、「私」という人は、八月の「夏休み」に鎌倉の海水浴場で始めて「先生」に出逢つた。そして、九月にはいよいよ「新学年」が始まるが、この時、「私」という人は、恐らく「大学三年生」になつたはずであるが、本文では何も詳しくは記されていない。しかも、当時の「帝国大学」は「三年制」であつた。そして、九月に「……始めて先生の宅へ來た頃から見るとずっと成人した氣でいた」とある。——それは、つまり、九月、十月、十一月……と過ぐすことで、「……奥さんとも大分懇意となり、私は奥さんに対して何の窮屈も感じなかつた。差向いで色々の話をする」ようになっていたのである。

ところで、先生は大学出身(帝国大出)でありながら、何もしないで遊んでいた。それ

は、両親から譲り受けた「財産」がかなりあったからではあるが、それに対して、「……私は常に惜しい事だと言った」。それは、「……世間が先生を知らないで平気でいるのが残念だったからである」とある。——それに対して、先生は、「……私のようなものが世の中へ出て、口を利いては済まない」と言い、また、「……どうしても私は世間に向かつて働き掛ける資格のない男だから仕方ありません」と語るだけであった。私にはそれが失望だか、不平だか、悲哀だか、解らなかつたけれども、何しろ二の句の継げないほどに強いものだったので、私はそれぎり何もいう勇気が出なかつたとある。

それでは、先生は、なぜ、「……私のようなものが世の中へ出て、口を利いては済まない」と言い、また、「……どうしても私は世間に向かつて働き掛ける資格のない男だから仕方ありません」と言うのか？ この「問題」は、第三部の「先生と遺書」のなかで解明されるべきものであり、それゆえ、ここでは伏して前に進めたいと思う。

二四、私と奥さんの会話（十一） 其の二

私が奥さんと話している間に、問題が自然先生の事からそこへ落ちて来た。「……先生はなぜああやって、宅で考えたり勉強したりなさるだけで、世の中へ出て仕事をなさらないんでしょう」、「……あの人は駄目ですよ。そういう事が嫌いなんですから」、「……つまり下らない事だと悟っていらつしやるんでしょうか」、「……悟るの悟らないのって、——そりや女だからわたくしには解りませんが、おそらくそんな意味じゃないでしょう。やっぱり何かやりたいのじゃないか」と言う。それでいて出来ないんです。だから気の毒ですわ」と言う。「……しかし先生は健康から言つて、別にどこも悪いところはないようじゃありませんか」、「……丈夫ですとも。何にも持病はありません」、「……それでなぜ活動が出来ないんでしょう」、「……それが解らないのよ、あなた。それが解るくらいなら私だって、こんなに心配しやしません。分からないから気の毒でたまらないんです」、奥さんの語気には非常に同情があつた。それでも口元だけでは微笑が見えた。外側から言えば、私の方がむしろ真面目だつた。私はむずかしい顔をして黙っていた。すると奥さんが急に思い出したようにまた口を開いた。「……若い時はあんな人じゃなかつたんですよ。若い時はまるで違つていました。それが全く変つてしまつたんです」、「……若い時つていつ頃ですか」と私が聞いた。「書生時代よ」、「……書生時代から先生を知つていらつしやつたんですか」と聞くと、奥さんは急に薄赤い顔をした。（本文）

*

*

さて、夏目漱石の『こころ』という作品の中でも、この「二人の会話」で様々な「言葉」というのは、実に「大事なもの」であり、まず、「……先生はなぜああやって、宅で考えたり勉強したりなさるだけで、世の中へ出て仕事をなさらないんでしょう」とある。これこそは、最大の「謎」の一つではあるが、それに対して、奥さんは、「……あの人は駄目ですよ。そういう事が嫌いなんですから」、「……つまり下らない事だと悟つていらつしやるんでしょうか」、「……悟るの悟らないのって、——そりや女だからわたくしには解りませんが、おそらくそんな意味じゃないでしょう。やっぱり何かやりたいのじゃないか」と語るのであつた。つまり、「……やっぱり何かやりたいのじゃないか」と言うのであつた。だから気の毒ですわ」

ということであるが、それは、一体、なぜなのか？ その真の「理由」を、二人（私も奥さん）も全く「知らない」状態にあるということである。そして、奥さんは、「……若い時はあんな人じゃなかったんですよ。若い時はまるで違っていました。それが全く変わってしまったんです」、「……若い時っていつ頃ですか」、「書生時代よ」と続くのである。

二四、私と奥さんの会話（十二） 其の三

奥さんは東京の人であった。それはかつて先生からも奥さん自身からも聞いて知っていた。奥さんは、「……本当いうと合の子なんですよ」と言った。奥さんの父親はたしか鳥取かどこかの出であるのに、お母さんの方はまだ江戸と言った時分の市ヶ谷で生れた女なので、奥さんは冗談半分そう言ったのである。ところが先生は全く方角違いの新潟県人であった。だから奥さんがもし先生の書生時代を知っているとすれば、郷里の関係からでない事は明らかであった。しかし薄赤い顔をした奥さんはそれより以上の話をしたくないようだったので、私の方でも深くは聞かずに聞いた。

先生と知り合いになってから先生の亡くなるまでに、私はずいぶん色々な問題で先生の思想や情操に触れてみたが、結婚当時の状況については、ほとんど何も聞き得なかった。私は時によると、それを善意に解釈しても見た。年輩の先生の事だから、艶めかしい回想などを若いものに聞かせるのはわざと慎んでいるのだろうと思った。時によると、またそれを悪くも取った。先生に限らず、奥さんに限らず、二人とも私に比べると、一時代前の因襲のうちに成人したために、そういう艶っぽい問題になると、正直に自分を開放するだけの勇気がないのだろうと考えた。もともとどちらも推測に過ぎなかった。そうしてどちらの推測の裏にも、二人の結婚の奥に横たわる花やかなロマンスの存在を仮定していた。（本文）

*

*

さて、奥さんは「東京」の人であった。父親はたしか「鳥取」かどこかの出であり、母親は、まだ江戸と言った時分の「市ヶ谷」で生れた人であった。それゆえ、奥さんは、「……本当いうと合の子なんですよ」と冗談半分にそう言っていたのである。一方、先生は、全く方角違いの「新潟県人」であった。それゆえ、先生と奥さんとは、「郷里の関係」から親しくなった間柄ではないことは明らかであった。——つまり、二人は、先生が「書生」（大学生）、一方、奥さんは「女学校の学生」の時に、東京で、奥さんの「母親」（軍人の未亡人であった）が、自分の家の「空き部屋」（一つの部屋）を個人に貸すという「素人下宿」を行っていたが、その「空き部屋」（一つの部屋）に先生（その時は大学生）がたまたま下宿することになったので、自然と、その家の「奥さん」（軍人の未亡人）と「お嬢さん」（今の奥さん）とも親しくなることになったという経緯があるのである。

そして、「……先生と知り合いになってから先生の亡くなるまでに、私はずいぶん色々な問題で先生の思想や情操に触れてみたが、結婚当時の状況については、ほとんど何も聞き得なかった」とある。そのことについて、「私」という人は、最終的には、「……二人とも私にはほとんど何も話してくれなかった。（その理由として）、奥さんは慎みのために、先生はまたそれ以上の深い理由のために」としているのである。

二四、私と奥さんの会話（十二） 其の四

私の仮定ははたして誤らなかつた。けれども私はただ恋の半面だけを想像に描き得たに過ぎなかつた。先生は美しい恋愛の裏に、恐ろしい悲劇を持っていた。そうしてその悲劇のどんなに先生にとつて見惨なものであるかは相手の奥さんにまるで知れていなかった。奥さんは今でもそれを知らずにいる。先生はそれを奥さんに隠して死んだ。先生は奥さんの幸福を破壊する前に、まず自分の生命を破壊してしまつた。——私は今この悲劇については何事も語らない。その悲劇のためにむしろ生れ出たとも言える二人の恋愛については、先刻言つた通りであつた。二人とも私にはほとんど何も話してくれなかつた。奥さんは慎みのために、先生はまたそれ以上の深い理由のために。（本文）

*

*

さて、ここで最も「大事な言葉」は、「……私はただ恋の半面（花やかなロマンスの面）だけを想像に描き得たに過ぎなかつた。先生は美しい恋愛の裏に、恐ろしい悲劇を持っていた。そうしてその悲劇のどんなに先生にとつて見惨なものであるかは相手の奥さんにまるで知れていなかった。奥さんは今でもそれを知らずにいる。先生はそれを奥さんに隠して死んだ。先生は奥さんの幸福を破壊する前に、まず自分の生命を破壊してしまつた」とある。——これは、すでに「すべてを知っている私」という人のいわば感想（感慨）であり、そして、「恋」（恋愛）というものは、一方では、実に「花やかなロマンスの一面」を持ちながら、しかし、もう一方では、実に恐ろしい「悲劇の一面」をも持ち合わせていることの、いわば一つの「実例」にもなっているのである。ただ、「……私は今その悲劇については何事も語らない」としているのである。

二五、恋（恋愛）は罪悪です（十二） 其の一

ただ一つ私の記憶に残っている事がある。或る時花時分に私は先生といつしよに上野へ行つた。そうしてそこで美しい一对の男女を見た。彼らは睦まじそうに寄り添つて花の下を歩いていた。場所が場所なので、花よりもそちらを向いて眼を峙だてている人が沢山あつた。「……新婚の夫婦のようだね」と先生が言つた。「仲が好さそうですね」と私が答えた。先生は苦笑さえしなかつた。二人の男女を視線の外に置くような方角へ足を向けた。それから私にこう聞いた。「……君は恋をした事がありますか」、私はないと答えた。「……恋をしたくはありませんか」、私は答えなかつた。「……したくない事はないでしょう」、「ええ」、「……君は今あの男と女を見て、冷評しましたね。あの冷評のうちには君が恋を求めながら相手を得られないという不快の声が交つていましょう」、「……そんな風に聞こえましたか」、「……聞こえました。恋の満足を味わっている人はもつと暖かい声を出すものです。しかし……しかし君、恋は罪悪ですよ。解っていますか」、私は急に驚かされた。何とも返事をしなかつた。（本文）

*

*

まず、「……或る時花時分に私は先生といつしよに上野へ行つた。そうしてそこで美しい一对の男女を見た。彼らは睦まじそうに寄り添つて花の下を歩いていた。場所が場所なので、花よりもそちらを向いて眼を峙だてている人が沢山あつた」とある。そして、「……

：新婚の夫婦のようだね」と先生が言った。「仲が好きそうですね」と私が答えた。そのあと、「……君は恋をした事がありますか」と聞くので、私はないと答えた。「……恋をしたくはありませんか」と言われて、私は答えなかった。「……したくない事はないでしょう」と言うので、「ええ」と答えると、「……君は今あの男と女を見て、冷評ひやひやしましたね。あの冷評ひやひやのうちには君が恋を求めながら相手を得られないという不快の声こゑが交まじわりましたよ」と言うので、「……そんな風ふうに聞こえましたか」と応こたえると、「……聞こえませんでした。恋の満足を味わっている人はもつと暖かい声を出すものです。しかし……しかし君、恋は罪悪ですよ。解わかっていますか」と先生は言うのであった。私は急に驚かされた。何とも返事をしなかったとある。

さて、先生は、最後のところで、「……君、恋は罪悪ですよ。解わかっていますか」と言っている。それを聞いて、「私」という人は、「……私は急に驚かされた。何とも返事をしなかった」とある。——これは、まだ若い「私」という人にとっては、確かに「驚くべき言葉」かも知れないが、しかし、人生経験の長い「先生」にとっては、それは、それほど「驚くべき言葉」ではなく、むしろ、「恋」（恋愛）というものは、一方では、実に「花やかなロマンスの一面」を持ちながら、しかし、もう一方では、実に恐ろしい「悲劇の一面」をも持ち合わせていることを、先生は、まさにわが身を以て誰よりも骨身に染みてよく知っているのであり、だからこそ、「恋」（恋愛）は、罪悪ですよ、と言うのである。

二五、恋（恋愛）は罪悪です（十三） 其の二

我々は群集の中にいた。群集はいずれも嬉うれしそうな顔をしていた。そこを通り抜けて、花も人も見えない森の中へ来るまでは、同じ問題を口にする機会がなかった。「……恋は罪悪ですか」と私がその時突然聞いた。「……罪悪です。たしかに」と答えた時の先生の語気は前と同じように強かった。「……なぜですか」、「……なぜだか今に解ります。今にじゃない、もう解っているはずですよ。あなたの心はとつくの昔からすでに恋で動いているじゃありませんか」、私は一応自分の胸の中を調べて見た。けれどもそこは案外に空虚であった。思いあたるようなものは何にもなかった。「……私の胸の中にこれという目的物は一つもありません。私は先生に何も隠してはいないつもりです」、「……目的物がありませんから動くのです。あれば落ち付けるだろうと思って動きたくなるのです」、「……今それほど動いちゃいません」、「……あなたは物足りない結果私の所に動いて来たじゃありませんか」、「……それはそうかも知れません。しかしそれは恋とは違います」、「……恋に上のぼる階段かいでんなんです。異性と抱き合う順序として、まず同性の私の所へ動いて来たのです」、「……私には二つのものが全く性質を異ことにしてるように思われます」、「……いや同じです。私は男としてどうしてもあなたに満足を与えられない人間なのです。それから、ある特別の事情があつて、なおさらあなたに満足を与えられない人間なのです。私は実際お気の毒に思っています。あなたが私からよそへ動いて行くのは仕方がない。私はむしろそれを希望しているのです。（本文）

*

*

さて、当然のごとく、「私」という人は、「……恋は罪悪ですか」と聞いている。すると、先生は、「……罪悪です。たしかに」と、先生の語気は前と同じように強かったとあ

る。それは、もちろん、先生は、まさに「わが身を以って誰よりもそれを骨身に染みてよく知っている」からではあるが、しかし、それだけではなく、たとえどれほど「知性や理性に強く支配されている君子・聖人」であったとしても、ひとたび、「恋（恋愛）の世界」に心からどっぷりと深く陥（おちい）つてしまえば、誰であれ！ まさに「正気」を失ってしまうものである。……それは、先生も、また、まさに「そうだった」ということである。

さて、まだ若い「私」という人は、先生の「恋は罪悪です」という言葉を聞いて、それは、「……なぜですか」、「……なぜだか今に解ります。今にじゃない、もう解っているはずです。あなたの心はとつくの昔からすでに恋で動いているじゃありませんか」、私は一応自分の胸の中を調べて見た。しかし、「……私の胸の中にこれという目的物は一つもありません。私は先生に何も隠してはいないつもりです」と言うと、先生は、「……目的物がないから動くのです。あれば落ち付けるだろうと思って動きたくなるのです」とある。

* *
これは、非常に「興味深い言葉」であり、つまり、「恋」というのは、すなわち、何であれ！ ある対象に「心惹かれる」ことであるが、例えば、自分は、「お金」がないから、恐らく、不幸なのだろう。だから、その「お金」（大金）が手に入れば、きっと幸せになれるだろうと思って、多くの人たちは、まさに「金儲け」へと動き出すのである。また、自分は、「恋」（恋愛）をしていないから不幸なのだろう。だから、「恋」（恋愛）をして「恋人」でも出来れば、きっと幸せになれるだろうと思って、「恋」（恋愛）へと動き出すのである。しかし、「恋」（恋愛）というものは、一方では、確かに、心ときめく、実に「花やかなロマンスの一面」を持ち合わせてはいるが、しかし、もう一方では、実に恐ろしい「悲劇の一面」をも持ち合わせていることを、誰でも、遅かれ早かれ、嫌が上でもまさに「思い知る」ことになるとともに、何らかの「罪の意識」（或いは「良心の呵責（かしやく）」などにさいなまれることにもなるのである。——つまり、何かが欠けているから、自分は不幸なのだろう。だから、その「欠けているもの」を充たせば、きっと幸せになれるだろうと思って、われわれ人間というのは、まさにその方向へと「動き出す」のである。

* *
さて、「私」という人は、「……今（私は）それほど動いちゃいません」と言うと、先生は、「……あなたは（ほかの人では）物足りない結果私の所に動いて来たじゃありませんか」と言う。それに対して、「……それはそうかも知れません。しかしそれは恋とは違います」と言う。すると、先生は、「……恋に上る階段（かいだん）なんです。異性と抱き合う順序として、まず同性の私の所へ動いて来たのです」と言う。すると、「……私には二つのものが全く性質を異（こと）にしているように思われます」と言う。先生は、「……いや同じです。私は男としてどうしてもあなたに満足を与えられない人間なのです。それから、ある特別の事情があつて、なおさらあなたに満足を与えられないのです。私は実際お気の毒に思っています。（なぜなら、「私」という人は、知らず識らずのうちに、先生から「何かを得よう」として、先生の所に来てしているのである。ところが）、あなたが私から（満足できるようなものが得られず、やがて）よそへ動いて行くのは仕方がない。私はむしろそれを希望しているのです」となっていくのである。

* *
さて、ここで「最も大事」なことは、次のようなことであり、それは、まだ若い「私」

という人は、「恋」というものは、まさに男女間の「恋愛」だけだと限定して、それだけが「恋」だと思ひ込んでるのである。一方、先生は、男女間の「恋愛」だけではなく、「恋」というのは、もつと幅広く、何であれ！ ある対象に「心惹かれる」ことであると見ているのである。——それゆえ、人間、動物、植物、自然、人工物、宇宙、その他、何であれ、例えば、ゲームに心惹かれ、夢中になっている、また、カラオケに心惹かれ、夢中になっている、或いは、ゴルフに心惹かれ、夢中になっている、もちろん、誰かに心惹かれて、夢中になっている。或いは、ある動植物（ペット類）などに心惹かれ、夢中になっている。その他、何であれ、ある「対象」に「……心惹かれて、夢中になっている心の状態」というのは、基本的には、すべてその「対象」にまさに「恋をしている状態」と同じような「心のあり方」になっているのである。——つまり、「恋」というのは、何であれ！ ある対象に「心惹かれて、いる心の状態」のことであるが、その中でも、われわれ人間というのは、特に男女間の「恋」（恋愛）こそは、まさに格別の「恋」（数多くの「恋」の中でも最上無比の「恋」）だと思ひ込んで、いるのである。それは、当然のことながら、われわれ人間の「本能的性的欲求」（それは「愛情欲」と「セックス欲」それに「子孫欲」から成る）とも深く結びついているからである。——つまり、「心の渴き」は、「愛情」によって深く満たされ、また、「肉体の渴き」は、「セックス」によって深く満たされ、そして、「子孫保存欲」は、生まれ育つ「子供たち」によって深く満たされるのである。

二五、恋（恋愛）は罪悪です（十三） 其の三

私は変に悲しくなった。「……私が先生から離れて行くようにお思ひになれば仕方がありませんが、私にそんな気の起こった事はまだありません」と言うと、先生は私の言葉に耳を貸さなかった。「……しかし気を付けないといけない。恋は罪悪なんだから。私の所では満足が得られない代りに危険もないが、——君、黒い長い髪で縛られた時の心持を知っていますか」と聞く、私は想像で知っていた。しかし事実としては知らなかった。いずれにしても先生の言う罪悪という意味は朦朧としてよく解らなかつた。その上私は少し不愉快になつた。——「……先生、罪悪という意味をもつと判然言つて聞かして下さい。それでなければこの問題をここで切り上げて下さい。私自身に罪悪という意味が判然解るまで」と言うと、「……悪い事をした。私はあなたに真実を話している気でした。ところが実際は、あなたを焦慮していたのだ。私は悪い事をした」と言い、先生と私とは博物館の裏から鶯溪の方角に静かな歩調で歩いて行つた。垣の隙間から広い庭の一部に茂る熊笹が幽邃に見えた。「……君は私がなぜ毎月雑司ヶ谷の墓地に埋まっている友人の墓へ参るのか知っていますか」と聞く、先生のこの問いは全く突然であつた。しかも先生は私がこの問いに対して答えられないという事もよく承知していた。私はしばらく返事をしなかつた。すると先生は始めて気が付いたようにこう言った。「……また悪い事を言つた。焦慮せるのが悪いと思つて、説明しようとする、その説明がまたあなたを焦慮せるような結果になる。どうも仕方がない。この問題はこれで止めましょう。とにかく恋は罪悪ですよ、よござんすか。そうして神聖なものですよ」と言うのであつた、私には先生の話がますます解らなくなつた。しかし先生はそれぎり恋を口にしなかつたのである。（本文）

*

*

さて、私は変に悲しくなった。「……私が先生から離れて行くようにお思いになれば仕方がありませんが、私にそんな気の起こった事はまだありません」とある。これは、まさにその通りであり、「先生」が亡くなった今も、こうして「先生」について語っているのである。つまり、「先生」からは、離れていないのである。——例えば、晩年のソクラテスは、七〇歳の時、「……ソクラテスは、国の認める神々を認めず、別の新奇な鬼神のまつりを導入するという罪をおかし、かつまた、青年たちに有害を与えるという罪をおかしている。これは死刑に値する」という罪状で訴えられて、その結果、「刑死」（毒杯を仰いで従容として死んでいく）という悲惨な結末になるが、それに対して、「晩年」（七十四歳）のプラトンは、その『第七書簡』のなかで、「……当時の人々のなかでいちばん正しかったと言ってもおそらくわたしの恥にはならないであろう方を、——わが敬愛すべき年長の友ソクラテスを、……」と記している。……これは、すでに七十四歳という晩年を迎えていながらも、今なおそのプラトンの「心の中」には、「師ソクラテスへの敬愛の情」というものが、すこしも色褪せない状態で存在していたことの明らかな証拠となるものである。——つまり、ソクラテスの「刑死」後も、プラトンという人は、師ソクラテスからは少しも離れることはなかったということである。

それはともかく、先生は、「……しかし気を付けないといけない。恋は罪悪なんだから。私の所では満足が得られない代りに危険もないが、——君、黒い長い髪で縛られた時の心持を知っていますか」と聞く、私は想像で知っていた。しかし事実としては知らなかった。いずれにしても先生の言う罪悪という意味は朦朧としてよく解らなかつたとある。——例えば、先生は、「……君、黒い長い髪で縛られた時の心持を知っていますか」と聞いている。これは、例えば、この『こころ』という作品の中でも、例えば、親友とお嬢さんとが親しく話している場面などに出つくわすと、「先生」という人の「心の中」では、押さえ難いほどの「嫉妬心」や「不平・不満」、その他の「負の感情」（恨みや憎しみ）などに襲われてしまうのである。それは、誰の「心の中」でも全く同じことである。——つまり、とても「正気」ではいられないほどの「精神的状態」に深く陥ってしまうのである。それが、まさに男女間の「恋」（恋愛）なのである。

二五、恋（恋愛）は罪悪です（十三） 其の四

さて、「私」という人は、「……先生、罪悪という意味をもっと判然言つて聞かして下さい。それでなければこの問題をここで切り上げて下さい。私自身に罪悪という意味が判然解るまで」と言う。すると、先生は、「……悪い事をした。私はあなたに真実を話している気でした。ところが実際は、あなたを焦慮していたのだ。私は悪い事をした」と。

やがて、「……君は私がなぜ毎月雑誌司ケ谷の墓地に埋まっている友人の墓へ参るのか知っていますか」と聞く、先生のこの問いは全く突然であった。しかも先生は私がこの問いに対して答えられないという事もよく承知していた。私はしばらく返事をしなかった。すると先生は始めて気が付いたようにこう言った。「……また悪い事を言った。焦慮させるのが悪いと思って、説明しようとする、その説明がまたあなたを焦慮させるような結果になる。どうも仕方がない。この問題はこれで止めましょう。とにかく恋は罪悪ですよ、よござんすか。そうして神聖なものですよ」とある。（本文）

さて、これは、まだ若い「私」という人にとっては、男女間の「恋」（恋愛）については、どうしても、心ときめく、実に「花やかなロマンスの一面」の方ばかりを見てしまう傾向があり、もう一方の、実に恐ろしい「悲劇の一面」の方は、まだ経験がないからなかなかイメージ出来難いのである。——ところが、一方の、先生の方は、男女間の「恋」（恋愛）については、その実に恐ろしい「悲劇の一面」を、まさに「わが身を以って誰よりも骨身に染みてよく知っている」のであり、だからこそ、「恋」（恋愛）は、罪悪です、と言うのである。しかも、ここで最も大事なことは、——これは、先生だけの問題ではなく、実は、この世の誰であれ、遅かれ早かれ、やがては、嫌が上でもそのことを「思い知る」ことになると共に、何らかの「罪の意識」（或いは「良心の呵責」）などにさいなまれることにもなるのである。

二六、人間が自分は信じられない（十四）其の一

年の若い私は稍ともすると一凶になり易かった。少なくとも先生の眼にはそう映っていたらしい。私には学校の講義よりも先生の談話の方が有益なのであった。教授の意見よりも先生の思想の方が有難いのであった。とどの詰まりを言えば、教壇に立って私を指導してくれる偉い人々よりもただ独りを守って多くを語らない先生の方が偉く見えたのであった。「……あんまり逆上ちゃいけません」と先生が言った。「……覚めた結果としてそう思うんです」と答えた時の私には充分の自信があった。その自信を先生は肯がってくれなかった。「……あなたは熱に浮かされているのです。熱がさめると厭になります。私は今のあなたからそれほど思われるのを、苦しく感じています。しかしこれから先のあなたに起こるべき変化を予想して見ると、なお苦しくなります」。「……私はそれほど軽薄に思われているんですか。それほど不信用なんですか」、「……私はお気の毒に思うのです」、「……気の毒だが信用されないとおっしゃるんですか」と言うのであった。（本文）

さて、「私」という人は、「……私には学校の講義よりも先生の談話の方が有益なのであった。教授の意見よりも先生の思想の方が有難いのであった。とどの詰まりを言えば、教壇に立って私を指導してくれる偉い人々よりもただ独りを守って多くを語らない先生の方が偉く見えたのであった」とある。——だからこそ、その「人」を、まさに「先生」と呼ぶのが最もふさわしいということにもなるのだろう。それはともかく、「……あんまり逆上ちゃいけません」と先生が言った。それに対して、「……覚めた結果としてそう思うんです」と答えた時の私には充分の自信があった。その自信を先生は肯がってくれなかった。「……あなたは熱に浮かされているのです。熱がさめると厭になります。私は今のあなたからそれほど思われるのを、苦しく感じています。しかしこれから先のあなたに起こるべき変化を予想して見ると、なお苦しくなります」とある。

つまり、「先生」は、君は私を「過大評価し過ぎていて」と言っているのである。やがて、私の「本当の姿」（その「実体」）を知ったならば、恐らく、がっかりするか、軽蔑するようになるだろう。だからこそ、「……私は今のあなたからそれほど思われるのを、苦しく感じています。しかしこれから先のあなたに起こるべき変化を予想して見ると、な

お苦しくなります」となるのである。ところが、一方の、「私」という人は、「……その時の熱に浮かされてものを言い、その熱がさめればもう厭になるという、そういう取るに足りない軽薄な人間だと思つて居るのですか」と、言つて居るのである。それが、まさに「……私はそれほど軽薄に思われているんですか。それほど不信用なんですか」、「……私はお気の毒に思うのです」、「……気の毒だが信用されないとおっしゃるんですか」と言い寄つて居るのである。

二六、人間が自分は信じられない（十四）其の二

先生は迷惑そうに庭の方を向いた。その庭に、この間まで重そうな赤い強い色をぼたぼた点じていた椿の花はもう一つも見えなかった。先生は座敷からこの椿の花をよく眺める癖があつた。「……信用しないつて、特にあなたを信用しないんじゃない。人間全体を信用しないんです」、その時生垣の向うで金魚売りらしい声が出た。その外には何の聞こえるものもなかった。大通りから二丁も深く折れ込んだ小路は存外静かであつた。家の中はいつもの通りひっそりしていた。私は次の間に奥さんのいる事を知つていた。黙つて針仕事か何かしている奥さんの耳に私の話し声が聞こえるという事も知つていた。しかし私は全くそれを忘れてしまつた。「……じゃ奥さんも信用なさらないんですか」と先生に聞いた。——先生は少し不安な顔をした。そうして直接の答えを避けた。「……私は私自身さえ信用して居ないのです。つまり自分で自分が信用できないから、人も信用できないようになって居るのです。自分を呪うより外に仕方がないのです」、「……そうむずかしく考えれば、誰だつて確かなものはないでしょう」、「……いや考えたんじゃない。やつたんです。やつた後で驚いたんです。そうして非常に怖くなつたんです」と言うのであつた。（本文）

*

*

さて、先生は、「……迷惑そうに庭の方を向いた。その庭に、この間まで重そうな赤い強い色をぼたぼた点じていた椿の花はもう一つも見えなかった。先生は座敷からこの椿の花をよく眺める癖があつた」とある。——この「椿の花」というのは、有名な『草枕』の中にも出て来る「花」であり、それは、「……あの『花の色』は、ただの『赤』ではない。余は深山椿を見るたびにいつも妖女の姿を連想する。目を醒すほどの派手やかなの奥に、言うに言われぬ調子を持つて居る。黒ずんだ、毒気のある、恐ろし味を帯びた調子である。屠られたる（処刑された）囚人の血が、おのずから人の目を惹いて、おのずから人の心を不快にすることく一種異様な『赤』である。——そして、見ていると、ぼたりと赤い花が水の上に落ちた。しばらくするとまたぼたりと落ちた。あの花は決して散らない。かたまつたまま枝を離れる。ぼたりぼたりと落ちる。際限なく落ちる」とある。——つまり、庭にその「椿の木」が植えられていて、しかも、「……先生は座敷からこの椿の花をよく眺める癖があつた」とすれば、或いは、夏目漱石という人は、「……余は深山椿を見るたびにいつも妖女の姿（世にも妖しき女性の姿）を連想させられるが、その『椿の花』があるいは好きだつた」（つまり「なぜか心惹かれる対象であつた」）のかも知れない。

そして、「先生」という人は、「……信用しないつて、特にあなたを信用しないんじゃない。人間全体を信用しないんです」と言う。すると、「私」という人は、「……じゃ奥

さんも信用なさらないんですか」と先生に聞いている。――まず、先生は、「……信用しないって、特にあなたを信用しないんじゃない。人間全体を信用しないんです」と言っている。これは、両親を「腸チフス」でほぼ同時に亡くした後、家の「財産の管理」はすべて「叔父」に任せていたが、その「叔父」に裏切られて、「家の財産」の多くを奪われてしまうのである。――それ以来、まさに「人間不信」が生じて来るが、しかし、それは、まだ「決定的なもの」ではなく、それに加えて、先生自身、自らが「親友」を裏切るような行動をしてしまうのである。それが、まさに「……いや考えたんじゃない。やったんです。やった後で驚いたんです。そうして非常に怖くなったんです」という「言葉」になるのである。それゆえ、まさに「……私は私自身さえ信用していません。つまり自分が信用できないから、人も信用できないようになってるんです。自分を呪うより外に仕方がないのです」という「言葉」になるのである。――ちなみに、「……じゃ奥さんも信用なさらないんですか」と聞かれて、もちろん、先生自身は、「……奥さんを信用している」のであるが、しかし、先生の「頭の中」(或いは「心の中」)には、次のような「想い」があるのである。それは、つまり、「……平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人なんです。それが、いざという間際に、急に悪人になるんだから恐ろしいのです。だから油断が出来ないんです」という「言葉」になるのである。それは、「……自分自身がまさにそうだったからという意味合いを含んでいる」のである。

二六、人間が自分は信じられない(十四) 其三

私はもう少し先まで同じ道を辿って行きたかった。すると襖の陰で「あなた、あなた」という奥さんの声が二度聞こえた。先生は二度目に「何だい」と言った。奥さんは「ちよつと」と先生を次の間へ呼んだ。二人の間にどんな用事が起ったのか、私には解らなかつた。それを想像する余裕を与えないほど早く先生はまた座敷へ帰って来た。「……とにかくあまり私を信用してはいけませんよ。今に後悔するから。そうして自分が欺かれた返報に、残酷な復讐をするようになるものだから」と言う。「……そりやどういう意味ですか」と聞くと、「……かつてはその人の膝の前に跪いたという記憶が、今度はその人の頭の上に足を載せさせようとするのです。私は未来の侮辱を受けないために、今の尊敬を斥けたいと思うのです。私は今より一層淋しい未来の私を我慢する代りに、淋しい今の私を我慢したいのです。自由と独立と己れとに充ちた現代に生れた我々は、その犠牲としてみんなこの淋しみを味わわなくてはならないでしょう」、私はこういう覚悟をもっている先生に対して、言うべき言葉を知らなかつた。(本文)

*

*

さて、先生は、「……とにかくあまり私を信用してはいけませんよ。今に後悔するから。そうして自分が欺かれた返報に、残酷な復讐をするようになるものだから」と言う。すると、「私」という人は、「……そりやどういう意味ですか」と聞くと、先生は、「……かつてはその人の膝の前に跪いたという記憶が、今度はその人の頭の上に足を載せさせようとするのです。私は未来の侮辱を受けないために、今の尊敬を斥けたいと思うのです。私は今より一層淋しい未来の私を我慢する代りに、淋しい今の私を我慢したいのです。自由と独立と己れとに充ちた現代に生れた我々は、その犠牲としてみんなこの淋しみを味わ

わなくてはならないでしょう」と言うのであった。私はこういう覚悟をもっている先生に對して、言うべき言葉を知らなかった、となるのである。

これは、前にも記したように、「……君は私を『過大評価し過ぎている』のである。やがて、私の『本当の姿』(その『実体』)を知ったならば、恐らく、君は、がっかりするだろうし、また、軽蔑し、今度は、何でこんな人間に自分は跪いたのかと後悔をし、そして、逆に、侮辱するようになるだろう」と言っているのである。それが、まさに「……かつてはその人の膝の前に跪いたという記憶が、今度はその人の頭の上に足を載せさせようとするのです」という「言葉」になるのである。だからこそ、「……私は未来の侮辱を受けないために、今の尊敬を斥けたいと思うのです。私は今より一層淋しい未来の私を我慢する代りに、淋しい今の私を我慢したいのです」と言うのである。そして、「……自由と独立と己れとに充ちた現代に生れた我々は、その犠牲としてみんなこの淋しみを味わわなくてはならないでしょう」と言うのであった。——これは、例えば、江戸時代の「封建時代」のような社会であれば、その「主従関係」や「上下関係」或いは「人間関係」などはそれなりにしつかりとしていただろうが、明治時代という、この「……自由と独立と己れ(エゴ)とに充ちた現代に生れた我々は、その犠牲(代償)として、お互いの「人間関係」や「上下関係」或いは「主従関係」なども容赦なく激変するような「淋しさ」(孤独や悲哀など)を誰もが味わわなくてはならないのでしよう」と語っているのである。

例えば、親子関係なども、封建時代には、「……父上、母上」と呼び、自然と親を敬い、子が親に逆らうなどは、とでもでき難い時代であったろうが、今日では、平気で親に逆らい、平気で親の悪口を言い、そして、平気で親を馬鹿にするのである。それが、まさに「自由と平等とエゴ」の社会であり、それは、親だけではなく、ありとあらゆる人間との関係において、その他、すべてにおいて同じことが言えるのである。さらに加えて、今日のよいうな「インターネット時代」ともなれば、その規模は一気に拡大して、世界中の何十億というありとあらゆる階層のありとあらゆる分野のありとあらゆる人たちが実在にありとあらゆる「意見」(むろん実在に多種多様な罵詈雑言なども含めて)絶えず飛び交うような時代になっているのである。

二七、先生の思想はどこから生じたのか(十五) 其の一

その後、私は奥さんの顔を見るたびに気になった。先生は奥さんに対しても始終こういう態度に出るのだろうか。もしそうだとすれば、奥さんはそれで満足なのだろうか。

奥さんの様子は満足とも不満足とも極めようがなかった。私はそれほど近く奥さんに接触する機会がなかったから。それから奥さんは私に会うたびに尋常であったから。最後に先生のいる席でなければ私と奥さんとは滅多に顔を合せなかったから。

私の疑惑はまだその上にもあった。先生の人間に對するこの覚悟はどこから来るのだろうか。ただ冷たい眼で自分を内省したり現代を觀察したりした結果なのだろうか。先生は坐つて考える質の人であった。先生の頭さえあれば、こういう態度は坐つて世の中を考えていても自然と出て来るものだろうか。私にはそうばかりとは思えなかった。先生の覚悟は生きた覚悟らしかった。火に焼けて冷却し切った石造家屋の輪廓とは違っていた。私の眼に映ずる先生はたしかに思想家であった。けれどもその思想家の纏め上げた主義の裏には、

強い事実が織り込まれているらしかった。自分と切り離された他人の事実でなくって、自分自身が痛切に味わった事実、血が熱くなったり脈が止まったりするほどの事実が、畳み込まれているらしかった。(本文)

*

*

まず、「私」という人は、「……先生は奥さんに対しても始終こういう態度に出るのだろうか。もしそうだとすれば、奥さんはそれで満足なのだろうか」とある。先生は、奥さんに対しては、出来るだけ「優しくしようとしている」のである。ただ、奥さんと直接面と向かうことはどこか避けるようなところがあるのである。それが奥さんにとっては不満なのである。それに加えて、私の疑惑はまだあった。それは、「……先生の人間に対するこの覚悟はどこから来るのだろうか。ただ冷たい眼で自分を内省したり現代を観察したりした結果なのだろうか。……私の眼に映ずる先生はたしかに思想家であった。けれどもその思想家の纏め上げた主義の裏には、強い事実が織り込まれているらしかった。自分と切り離された他人の事実でなくって、自分自身が痛切に味わった事実、血が熱くなったり脈が止まったりするほどの事実が、畳み込まれているらしかった」とある。——もちろん、それは、その通りであるが、それについては、「第三部」(先生と遺言)を読めば、すべては明らかになることであり、ここではこのまま伏して、次に進みたいと思う。

二七、先生の思想はどこから生じたのか(十五) 其二

これは私の胸で推測するがものはない。先生自身すでにそうだと告白していた。ただその告白が雲の峯のようであった。……私の頭の上に正体の知れない恐ろしいものを蔽い被せた。そうしてなぜそれが恐ろしいか私にも解らなかつた。告白はぼうとしていた。それでいて明らかに私の神経を震わせた。(本文)、——この部分は、それ(先生が経験した事実)が具体的には一体どのようなものであつたかはよく分からなかつたが、しかし、何か得体の知れないそら恐ろしいものをなぜか感じて、私の神経を震わせたのである。

私は先生のこの人生観の基点に、或る強烈な恋愛事件を仮定してみた。(無論先生と奥さんとの間に起つた)。先生がかつて恋は罪悪だと言つた事から照らし合せて見ると、多少それが手掛りにもなつた。しかし先生は現に奥さんを愛していると私に告げた。すると二人の恋からこんな厭世に近い覚悟が出ようはずがなかつた。「かつてはその人の前に跪いたという記憶が、今度はその人の頭の上に足を載せさせようとする」と言つた先生の言葉は、現代一般の誰彼について用いられるべきで、先生と奥さんの間には当てはまらないもののようにもあつた。(本文)、——外から見ると、先生と奥さんとの間はそれなりにうまく行っているように見える。それゆえ、二人の恋からこんな厭世に近い覚悟が出ようはずがないと思うが、しかし、男女間の「恋」(恋愛)には、もう一方の、実に恐ろしい「悲劇の一面」もあることを、どうしてもイメージ出来ないでいたということである。

雑司ヶ谷にある誰だか分らない人の墓、——これも私の記憶に時々動いた。私はそれが先生と深い縁故のある墓だという事を知っていた。先生の生活に近づきつつありながら、近づく事のできない私は、先生の頭の中にある生命の断片として、その墓を私の頭の中にも受け入れた。けれども私に取つてその墓は全く死んだものであつた。二人の間にある生命の扉を開ける鍵にはならなかつた。むしろ二人の間に立って、自由の往来を妨げる魔物の

ようであった。(本文)、——この「ぞうし雑司ヶ谷がやにある誰だれだか分らない人の墓」、それは、「…私に取ってその墓は全く死んだものであった。二人の間にある生命いのちの扉を開ける鍵かぎにはならなかった」とあるが、しかし、この「墓」、こそは、実は、すべ凡ての「なぞ謎」を解き明かす、まさに「かぎ鍵」そのものになっていくのである。

*

*

二八、盗難よけの留守番を頼まれる

二八、盗難よけの留守番を頼まれる（十五）其の一

そうこうしているうちに、私はまた奥さんと差し向いで話をしなければならぬ時機が来た。その頃は日の詰って行くせわしない秋に、誰も注意を惹かれる肌寒の季節であった。先生の附近で盗難に罹ったものが三、四日続いて出た。盗難はいずれも宵の口であった。大したものを持って行かれた家はほとんどなかったけれども、這入られた所では必ず何か取られた。奥さんは気味をわるくした。そこへ先生がある晩家を空けなければならぬ事情が出来てきた。先生と同郷の友人で地方の病院に奉職しているものが上京したため、先生は外の二、三名と共に、ある所でその友人に飯を食わせなければならなくなった。先生は訳を話して、私に帰って来る間までの留守番を頼んだ。私はすぐ引き受けた。（本文）

*

*

さて、「……そうこうしているうちに、私はまた奥さんと差し向いで話をしなければならぬ時機が来た」とある。——この「私と奥さんと二人だけの会話」をするという機会には、何度かあるが、そのどれも非常に「大事な場面」であり、それは、一体、なぜかと問えば、それは、先生からは直接聞き出せないような実に様々な「情報」（特に先生に関する情報）を、奥さんから直接聞くことができ得るからである。

二八、盗難よけの留守番を頼まれる（十五）其の二

私の行ったのはまだ灯の点くか点かない暮方であったが、几帳面な先生はもう宅にいなかった。「時間に後れると悪いって、つい今しがた出掛けました」と言った奥さんは、私を先生の書斎へ案内した。

書斎には洋机と椅子の外に、沢山の書物が美しい背皮を並べて、硝子越に電燈の光で照らされていた。奥さんは火鉢の前に敷いた座蒲団の上へ私を坐らせて、「……ちつと其所いらにある本でも読んでいて下さい」と断って出て行った。私は丁度主人の帰りを待ち受ける客のような気がして済まなかった。私は畏まったまま烟草を飲んでみた。奥さんが茶の間で何か下女に話している声が聞こえた。書斎は茶の間の縁側を突き当って折れ曲った角にあるので、棟の位置から言うと、座敷よりもかえって掛け離れた静かさを領していた。一しきりで奥さんの話し声が已むと、後はしんとした。私は泥棒を待ち受けるような心持で、凝としながら気をどこかに配った。

十分ほどすると、奥さんがまた書斎の入口へ顔を出した。「おや」と言って、軽く驚いた時の眼を私に向けた。そうして客に来た人のように鹿爪らしく控えている私をおかしそうに見た。「……それじゃ窮屈でしょう」、「いえ、窮屈じゃありません」、「……でも退屈でしょう」、「……いいえ。泥棒が来るかと思って緊張しているから退屈でもありません」と言うのであった。（本文）——この場面は、まだ若い書生のどこか女性慣れしていない初々しさや真面目さなどが描かれているところになるのかも知れない。

二八、盗難よけの留守番を頼まれる（十五）其の三

奥さんは手に紅茶茶碗を持ったまま、笑いながらそこに立っていた。「……ここは隅っ

こだから番をするには好くありませんね」と私が言った。「……じゃ失礼ですがもつと真中へ出て来て頂戴。ご退屈だろうと思つて、お茶を入れて持つて来たんですが、茶の間で宜しければ彼方で上げますから」、私は奥さんの後に尾いて書齋を出た。茶の間には綺麗な長火鉢に鉄瓶が鳴つていた。私はそこで茶と菓子御馳走になった。奥さんは寝られないといけなうと言つて、茶碗に手を触れなかつた。——「……先生はやっぱり時々こんな会へお出掛けになるんですか」、「……いいえ滅多に出た事はありません。近頃は段々人の顔を見るのが嫌になるようです」、「……言つた奥さんの様子に、別段困つたものだという風も見えなかつたので、私はつい大胆になつた。「……それじゃ奥さんだけが例外な人ですか」、「……いいえ私も嫌われている一人なんです」、「……そりや嘘です」と私が言つた。「……奥さん自身嘘と知りながらそうおっしゃるんでしょう」、「なぜ」、「……私に言わせると、奥さんが好きになつたから世間が嫌いになるんですもの」、「……あなたは学問をする方だけあつて、なかなかお上手ね。空っぽな理屈を使いこなす事が。世の中が嫌いになつたから、私までも嫌いになつたんだとも言われるじゃありませんか。それと同なじ理屈で」、「……両方とも言われることは言われますが、この場合は私の方が正しいのです」、「……議論はいやよ。よく男の方は議論だけなさるのね、面白そうに。空の盃でよくあ飽きずに献酬（酒杯のやり取り）ができると思ひますわ」、奥さんの言葉は少し手痛かつた。しかしその言葉の耳障から言うと、決して猛烈なものではなかつた。自分に頭脳のある事を相手に認めさせて、そこに一種の誇りを見出すほどに奥さんは現代的でなかつた。奥さんはそれよりもつと底の方に沈んだ心を大事にしているらしく見えた。（本文）

*

*

まず、「……先生はやっぱり時々こんな会へお出掛けになるんですか」、「……いいえ滅多に出た事はありません。近頃は段々人の顔を見るのが嫌いになるようです」、「……言つた奥さんの様子に、別段困つたものだという風も見えなかつたのである。——これは、奥さんは、すでに何度となく先生になぜですかと問い正しても、先生は全く取り合つてくれないので、今ではもう仕方がないというような心の状態になつているのである。そこで、「私」という人は、「……それじゃ奥さんだけが例外なんですか」と聞くと、「……いいえ私も嫌われている一人なんです」と答える。これは、奥さんの「実感」であり、それは、「……奥さんを避けるようなところがある」からである。すると、「……そりや嘘です」と私が言つた。「……奥さん自身嘘と知りながらそうおっしゃるんでしょう」、「なぜ」、「……私に言わせると、奥さんが好きになつたから世間が嫌いになるんですもの」とある。これは実に分かり難い「理屈」であるが、恐らく、「……誰よりも奥さんがこの世で一番好きになつたので、それに比べれば、世間の人々などはもうどうでもよい」というようなことであり、それに対して、奥さんは、「……世の中が嫌いになつたから、私までも嫌いになつたんだとも言われるじゃありませんか」と言う。こちらの方が、遙かに無理のない「考え方」になるかと思うが、「私」という人は、「……両方とも言えますが、この場合は私の方が正しいのです」と言い張る根拠は、一体、どこにあるのかと問えば、それは、先生の次のような「言葉」にあるのである。それは、「……私は世の中で女というものをたつた一人しか知らない。妻以外の女はほとんど女として私に訴えないのです。妻の方でも、私を天下にただ一人しか知らない男と思つてくれています。そういう意味から言つて、私たち

は最も幸福に生れた人間の「一対」であるべきはずだ」という、この「言葉」を根拠として
そう言うのである。

ちなみに、男たちの「議論好き」に対して、奥さんは、「……よく男の方は議論だけな
さるのね、面白そうに。空の盃でよくああ飽きずに献酬ができると思いますわ」と言
うのは、実に面白いところであり、また、「議論好き」は、「……自分に頭脳のある事を
相手に認めさせて、そこに一種の誇り（や優越感）などを見出す」という説明も、非常に
面白いところである。

二九、もし奥さんが亡くなったら先生は（十七）其の一

私はまだその後（あと）に言うべき事をもっていた。けれども奥さんから徒らに議論を仕掛け
る男のように取られては困ると思つて遠慮した。奥さんは飲み干した紅茶茶碗の底を覗い
て黙っている私を外らさないように、「もう一杯上げましょうか」と聞いた。私はすぐ茶
碗を奥さんの手に渡した。「……いくつ？ 一つ？ ニっつ？」、妙なもので角砂糖をつ
まみ上げた奥さんは、私の顔を見て、茶碗の中へ入れる砂糖の数（かず）を聞いた。奥さんの態度
は私に媚びるといふほどではなかったけれども、先刻の強い言葉を力めて打ち消そうとす
る愛嬌（あいぎょう）に充ちていた。私は黙つて茶を飲んだ。飲んでしまつても黙つていた。「……あな
た大変黙り込んだね」と奥さんが言った。「……何か言うとまた議論を仕掛ける
なんて、叱り付けられそうですから」と私は答えた。「まさか」と奥さんが再び言った。

（本文）

*

*

まず、「……飲み干した紅茶茶碗の底を覗いて黙っている私」とあるが、ここに出て来
る「紅茶茶碗」というのは、恐らく、（夏目漱石の趣味から言つても）、イギリス製の表
面の肌（はだ）のきめ細やかで滑らかな「磁器」の「紅茶茶碗」に違いなく、それゆえ、でこぼこ
とした「陶器」の茶碗とは違うのである。——例えば、『草枕』の中でも、主人公の「画
工」は、まず、自分は羊羹が好きで、それは、べつだん食べたくはないが、その「肌合」
が滑らかで、緻密（ちみつ）なのが良くと賞賛し、また、青磁の菓子皿も良いとほめる。（これが本
当であるならば、夏目漱石は、陶器よりも磁器をより好んだ人かも知れない。）

次に、「……奥さんの態度は私に媚びるといふほどではなかったけれども、先刻の強い
言葉を力めて打ち消そうとする愛嬌に充ちていた」とあるが、これは、もつと「相手（私）
と話がしたい」という態度の表れであり、それが、まさに「……あなた大変黙り込んだま
ったのね」という「言葉」となつて外に現われ出るのである。（これは、奥さん自身、《先
生の事で》あれこれ話してみたいという思いがどこ潜在的にあつたということなのか
も知れない）。一方、「私」という人は、「……何か言うとまた議論を仕掛けるなんて、叱
り付けられそうですから」と答えると、「まさか」と奥さんが再び言ったとあるが、もち
ろん、大事なものは、これから先の「文章」である。

二九、もし奥さんが亡くなったら先生は（十七）其の二

二人はそれを緒口にまた話を始めた。そうしてまた二人に共通な興味のある先生を問題

にした。「……奥さん、先刻の続きをもう少し言わせて下さいませんか。奥さんには空な理屈と聞こえるかも知れませんが、私はそんな上の空で言ってる事じゃないんだから」。「じゃおっしゃい」、「……今奥さんが急になくなったとしたら、先生は現在の通りで生きていられるでしょうか」、「……そりや分らないわ、あなた。そんな事、先生に聞いて見るより外に仕方がないじゃありませんか。私の所へ持って来る問題じゃないわ」、「……奥さん、私は真面目ですよ。だから逃げちゃいけません。正直に答えなくっちゃ」、「……正直よ。正直に言っただけに私には分らないのよ」、「……じゃ奥さんは先生をどのくらい愛していらっしやるんですか。これは先生に聞くよりむしろ奥さんに伺っていい質問ですから、あなたに伺います」、「……何もそんな事を聞き直つて聞かなくても好いじゃありませんか」、「……真面目くさつて聞くがものはない。分り切つてるとおっしゃるんですか」、「まあそうよ」、「……そのくらい先生に忠実なあなたが急になくなったら、先生はどうなるんでしょう。世の中のどっちを向いても面白くない先生は、あなたが急になくなつたら後でどうなるでしょう。先生から見てもいいわ、あなたから見てですよ。あなたから見ても、先生は幸福になるでしょうか、不幸になるでしょうか」、「……そりや私から見れば分っています。（先生はそう思っていないかも知れませんが）。先生は私を離れば不幸になるだけです。あるいは生きていられないかも知れませんよ。そう言うとおのぼれ己惚になるようですが、私は今先生を人間として出来るだけ幸福にしているんだと信じていますわ。どんな人があつても私ほど先生を幸福に出来るものはないとまで思い込んでますわ。それだからこうして落ち付いていられるんです」、「……その信念が先生の心に好く映るはずだと私は思います」、「……それは別問題ですわ」、「……やっぱり先生から嫌われているとおっしゃるんですか」、「……私は嫌われているとは思いません。嫌われる訳がないんですもの。しかし先生は世間が嫌いなんです。世間というより近頃では人間が嫌いになつていられるでしょう。だからその人間の一人として、私も好かれるはずがないじゃありませんか」、奥さんの嫌われているという意味がやつと私に呑み込めた。（本文）

*

*

さて、「私」という人は、突然、「……今奥さんが急にいなくなったとしたら、先生は現在の通りで生きていられるでしょうか」と聞く。すると、奥さんは、「……そりや分らないわ、あなた。そんな事、先生に聞いて見るより外に仕方がないじゃありませんか。私の所へ持って来る問題じゃないわ」と答える。そこで、「私」という人は、「……じゃ奥さんは先生をどのくらい愛していらっしやるんですか。これは先生に聞くよりむしろ奥さんに伺っていい質問ですから、あなたに伺います」と聞く。すると、奥さんは、「……何もそんな事を聞き直つて聞かなくても好いじゃありませんか」、「……真面目くさつて聞くがものはない。分り切つてるとおっしゃるんですか」、「まあそうよ」、「……そのくらい先生に忠実なあなたが急にいなくなったら、先生はどうなるんでしょう。世の中のどっちを向いても面白くない先生は、あなたが急にいなくなったら後でどうなるでしょう。先生から見てもいいわ、あなたから見てですよ。あなたから見ても、先生は幸福になるでしょうか、不幸になるでしょうか」と聞く。すると、奥さんは、「……そりや私から見れば分っています。（先生はそう思っていないかも知れませんが）。先生は私を離れば不幸になるだけです。あるいは生きていられないかも知れませんが。そういうと、己惚になるようですが、私は今先生を人間として出来るだけ幸福にしているんだと信じていま

すわ。どんな人があっても私ほど先生を幸福に出来るものはないとまで思い込んでいますわ。それだからこうして落ち付いていられるんです」と答える。

*

*

まず、「私」という人は、なぜ、このような「質問」をしたのかと問えば、それは、結局は、奥さんの「心の中」を確かめてみたかったからである。——例えば、先生は、前に、「……私は世の中で女というものをたった一人しか知らない。妻以外の女はほとんど女として私に訴えないのです。妻の方でも、私を天下にただ一人しかない男と思ってくれています。そういう意味から言って、私たちは最も幸福に生れた人間の一对であるべきはずです」と言っていた。ほんとうにそうなのか？ それを奥さんに直接聞いて、奥さんの「心の中」を確かめてみたかった。——それは、本文では、「……じゃ奥さんは先生をどのくらい愛していらっしゃるんですか。これは先生に聞くよりむしろ奥さんに伺っていい質問ですから、あなたに伺います」と聞く。すると、奥さんは、「……何もそんな事を聞き直って聞かなくても好いじゃありませんか」、「……真面目くさって聞くがものはない。分り切つてるとおっしゃるんですか」、「まあそうよ」と答えるのであった。

すると、「私」という人は、再び、最初の質問に戻って、「……そのくらい先生に忠実なあなたが急にいなくなったら、先生はどうなるんでしょう。世の中のどつちを向いても面白そうでない先生は、あなたが急にいなくなったら後でどうなるでしょう。先生から見てじゃない。あなたから見てですよ。あなたから見ても、先生は幸福になるでしょうか、不幸になるでしょうか」と聞く。——これは、まさに「……私たちは最も幸福に生れた人間の一对であるべきはずである」が、なぜ、そうなっていないのか？ また、先生の「考え方」は、なぜ「厭世的な思想」を帯びてしまうのか？ それらの「疑問」を解くための「質問」でもあるが、それに対して、奥さんは、「……そりゃ私から見れば分っています。（先生はそう思っていないかも知れませんが）。先生は私を離れば不幸になるだけです。あるいは生きていられないかも知れませんが。そういうと、己惚になるようですが、私は今先生を人間として出来るだけ幸福にしているんだと信じていますわ。どんな人があっても私ほど先生を幸福に出来るものはないとまで思い込んでいますわ。それだからこうして落ち付いていられるんです」と答えるのであった。

つまり、「……私は今先生を人間として出来るだけ幸福にしているんだと信じていますわ。どんな人があっても私ほど先生を幸福に出来るものはないとまで思い込んでいますわ」、さらに加えて、「……私は嫌われてとは思いません。嫌われる訳がないんですもの。しかし先生は世間が嫌いなんでしょう。世間というより近頃では人間が嫌いになっていくんでしょう。だからその人間の一人として、私も好かれるはずがないじゃありませんか」と言っている。——だとすれば、「……私たちは最も幸福に生れた人間の一对であるべきはずである」が、なぜ、そうなっていないのか？ また、先生の「考え方」は、なぜ「厭世的な思想」を帯びてしまうのか？ それらの直接の「……原因は奥さんにはない」ということになるのである。

三十、元は、ああじゃなかったんです（十八）其の一

私は奥さんの理解力に感心した。奥さんの態度が旧式の日本の女らしくないところも私

の注意に一種の刺戟しげきを与えた。それで奥さんはその頃流行り始めたいわゆる新しい言葉などはほとんど使わなかった。——私は女というものに深い交際つきあひをした経験のない迂闊うかつな青年であった。男としての私は、異性に対する本能から、憧憬どうけいの目的物として常に女を夢みていた。けれどもそれは懐かしい春の雲を眺めるような心持で、ただ漠然と夢みていたに過ぎなかった。だから実際の女の前へ出ると、私の感情が突然変る事が時々あった。私は自分の前に現われた女のために引き付けられる代りに、その場に臨んでかえって変な反撥はんぱつ力を感じた。奥さんに対して私にはそんな気がまるで出なかった。普通男女なんによの間に横たわる思想の不平均ふへいという考えもほとんど起らなかった。私は奥さんの女であるという事を忘れた。私はただ誠実なる先生の批評家および同情家として奥さんを眺めた。(本文)

*

*

まず、最初は、「私」から見た「奥さん」の「感想や評価」になっているが、それは、「……私は奥さんの理解力に感心した。奥さんの態度が旧式の日本の女らしくないところも私の注意に一種の刺戟しげきを与えた。それで奥さんはその頃流行り始めたいわゆる新しい言葉などはほとんど使わなかった」とある。——まず、奥さんは、当時の「女学校」をしっかりと卒業しているのであり、それゆえ、「……奥さんの理解力や奥さんの態度が旧式の日本の女らしくないところも」一応領けるとともに、「……その頃流行り始めたいわゆる新しい言葉などはほとんど使わなかった」とすれば、その時々「流行やブーム」などにすぐに影響を受けて流されてしまうタイプの女性ではなく、どこか芯のある女性なのかも知れない。——一方、まだ若い「私」という人の「女性観」であるが、それは、「……私は女というものに深い交際つきあひをした経験のない迂闊うかつな青年であった。男としての私は、異性に対する本能から、憧憬どうけいの目的物として常に女を夢みていた。けれどもそれは懐かしい春の雲を眺めるような心持で、ただ漠然と夢みていたに過ぎなかった。だから実際の女の前へ出ると、私の感情が突然変る事が時々あった。私は自分の前に現われた女のために引き付けられる代りに、その場に臨んでかえって変な反撥はんぱつ力を感じた」とある。

これは、恐らく、多くの若い男性に共通した意識であり、まず、「男性」というものは、「……異性に対する本能から、(女性は)憧憬どうけいの目的物(あこがれの対象)」として常に女を夢みている」ものであるが、しかし、「……実際の女の前へ出ると、私は自分の前に現われた女のために引き付けられる代りに、その場に臨んでかえって変な反撥はんぱつ力を感じた」とある。——つまり、「……一方では、引き付けられ、一方では、反発する、これは、一体、どういう心理かという問題である」が、まず、一方では、引き付けられる、これは、まさに「本能的なもの」からであるが、一方では、男女の「脳」の違い等、そこから生じる実に様々な「意見の違い」などから反発し合う、そして、もう一つは、お互いに「自分の存在」を主張し合って反発し合うのである。……ところが、「奥さん」に対しては、そのような「反発心」、「……そんな気がまるで出なかった。普通男女なんによの間に横たわる思想の不平均ふへいという考えもほとんど起らなかった。私は奥さんの女であるという事を忘れた。私はただ誠実なる先生の批評家および同情家として奥さんを眺めた」とある。——これは、意味なく「反発し合う相手(女)」としてではなく、私はただ誠実なる先生の批評家および同情家として「奥さんをそのまま素直に受け入れた」ということである。

三十、元は、ああじゃなかったんです(十八) 其の二

そこで、「……奥さん、私がこの前なぜ先生が世間的にもっと活動なさらないのだろうと言つて、あなたに聞いた時に、あなたはおっしゃった事がありますね。元はああじゃなかったんだつて」、「……ええ言いました。実際あんなじゃなかったんだつて」、「……どんなだったんですか」、「……あなたの希望なさるような、また私の希望するような頼もしい人だったんです」、「……それがどうして急に変化なすつたんですか」、「……急にじゃありません、段々ああなつて来たのよ」、「……奥さんはその間始終先生といつしよにいらしたんでしよう」、「……無論いしましたわ。夫婦ですもの」、「……じゃ先生がそう変つて行かれる原因がちゃんと解るべきはずですがね」、「……それだから困るのよ。あなたからそう言われると実に辛いんですが、私にはどう考えても、考えようがないんですもの。私は今まで何遍あの人に、どうぞ打ち明けて下さいって頼んで見たか分りやしません」、「……先生は何とおっしゃるんですか」、「……何にも言う事はない、何にも心配する事はない、おれはこういう性質になつたんだからと言っただけで、取り合つてくれないんです」とある。(本文)

*

*

さて、この場面では、非常に「大事な言葉」が数多く出て来ますが、まず、最初は、「……あなたに聞いた時に、あなたはおっしゃった事がありますね。元はああじゃなかったんだつて」、「……ええ言いました。実際あんなじゃなかったんだつて」、「……どんなだったんですか」と聞くと、「……あなたの希望なさるような、また私の希望するような頼もしい人だったんです」とある。——つまり、先生という人は、前々から今のような状態だったのでなく、元は、「……あなたの希望なさるような、また私の希望するような頼もしい人だった」ということであり、だからこそ、奥さん(当時のお嬢さん)は、その先生(当時は大学生)に強く心惹かれて、結婚をしたのである。そこで、「私」という人は、「……それがどうして急に変化なすつたんですか」と聞くと、奥さんは、「……急にじゃありません、段々ああなつて来たのよ」と答えるのであった。

例えば、「急に變化した」のであれば、その「原因」を見つけ出すのも比較的容易かも知れないが、一方、それが「段々に變化した」のであれば、その「原因」を見つけ出すことも難しいことになるのだろう。だからこそ、次のような「会話」が続くのである。——つまり、「……奥さんはその間始終先生といつしよにいらしたんでしよう」、「……無論いしましたわ。夫婦ですもの」、「……じゃ先生がそう変つて行かれる原因がちゃんと解るべきはずですがね」、「……それだから困るのよ。あなたからそう言われると実に辛いんですが、私にはどう考えても、考えようがないんですもの。私は今まで何遍あの人に、どうぞ打ち明けて下さいって頼んで見たか分りやしません」、「……先生は何とおっしゃるんですか」、「……何にも言う事はない、何にも心配する事はない、おれはこういう性質になつたんだからと言っただけで、取り合つてくれないんです」とある。

さて、ここで最も「大事な言葉」はと言えば、その一つは、まさに「……私は今まで何遍あの人に、どうぞ打ち明けて下さいって頼んで見たか分りやしません」というこの「言葉」であり、(例えば、前に出て来た「夫婦喧嘩」などもまさにこの事なのである)。そして、もう一つは、まさに「……何にも言う事はない、何にも心配する事はない、おれはこういう性質になつたんだからと言っただけで、取り合つてくれないんです」というこの「言葉」

である。——つまり、奥さんは、「どうしてもその原因が知りたい」がために、「……私は今まで何遍あの人に、どうぞ打ち明けて下さいって頼んで見たか分りやしません」となるのであり、一方、先生の方は、逆に、「……何があつてもそのことだけは絶対に話すことは出来ない」と思っているからこそ、まさに「……何にも言う事はない、何にも心配する事はない、おれはこういう性質になったんだからと言うだけで、取り合ってくれないんです」となるのである。これでは、どこまで行っても二人の「思い」は、「平行線」であるしかないのである。

三十、元は、ああじゃなかったんです(十八) 其の三

私は黙っていた。奥さんも言葉を途切らした。下女部屋にいる下女はことりとも音をさせなかった。私はまるで泥棒の事を忘れてしまった。「……あなたは私に責任があるんだと思つてやしませんか」と突然奥さんが聞いた。「いいえ」と私が答えた。「……どうぞ隠さずに言つて下さい。そう思われるのは身を切られるより辛いんだから」と奥さんが言った。「……これでも私は先生のために出来るだけの事はしているつもりなんです」。「……そりや先生もそう認めていられるんだから、大丈夫です。ご安心なさい、私が保証します」、奥さんは火鉢の灰を掻き馴らした。それから水注の水を鉄瓶に注した。鉄瓶は忽ち鳴りを沈めた。「……私はどうとう辛防し切れなくなつて、先生に聞きました。私に悪い所があるなら遠慮なく言つて下さい、改められる欠点なら改めるからつて、すると先生は、お前に欠点なんかありやしない、欠点はおれの方にあるだけだと言うんです。そう言われると、私悲しくなつて仕様がないうんです、涙が出てなのおの事自分の悪い所が聞きたくなるんです」、奥さんは眼の中に涙をいっぱい溜めたとある。(本文)

*

*

さて、ここにも極めて「大事な言葉」が出て来ますが、その前に、奥さんは、「……あなたは私に責任があるんだと思つてやしませんか」と突然言い出した。「いいえ」と私が答えると、「……どうぞ隠さずに言つて下さい。そう思われるのは身を切られるより辛いんだから」と奥さんがまた言った。「……これでも私は先生のために出来るだけの事はしているつもりなんです」。「……そりや先生もそう認めていられるんだから、大丈夫です。ご安心なさい、私が保証します」と言うのであった。——まず、奥さんは、「……私に責任があるとそう思われるのは身を切られるより辛い」と言い、また、「……これでも私は先生のために出来るだけの事はしているつもりなんです」と言っている。つまり、奥さんは、夫(先生)のために「身も心も尽くしている」と言いたいのである。それだけ「夫(先生)のことを心の底から愛している」ということでもあるのである。

それは、まさに「その通り」であり、それに加えて、ここで何より「大事な言葉」というのは、それは、次の言葉になるのである。——つまり、「……私はどうとう辛防し切れなくなつて、先生に聞きました。私に悪い所があるなら遠慮なく言つて下さい、改められる欠点なら改めるからつて、すると先生は、お前に欠点なんかありやしない、欠点はおれの方にあるだけだと言うんです。そう言われると、私悲しくなつて仕様がないうんです、涙が出てなのおの事自分の悪い所が聞きたくなるんです」と、奥さんは眼の中に涙をいっぱい溜めた、となるのである。

さて、「……私はどうとう辛防し切れなくなつて、先生に聞きました。私に悪い所があるなら遠慮なく言つて下さい、改められる欠点なら改めます」からと。これは、もうどうにも行き詰まつての「捨て身」の訴えであり、たとえ「どんな欠点(悪い所)を露骨に指摘されようとも、また、どんなに聞くに堪えない罵詈雑言などを浴びせられようと、それを甘んじて受け入れる……」というような、まさに必死の「覚悟」の表れになるのである。それに対して、先生は、「……お前に欠点なんかありやしない、欠点はおれの方にあるだけだと言ふんです」とある。——これは、極めて「大事な言葉」であり、つまり、奥さんには、文字通り、「何の欠点もない」のである。それゆえ、奥さんが、「……私にはどう考えても、考えようがないんですもの」と言うのも、もつともなことである。つまり、「……欠点はおれ(先生)の方にあるだけだ」と言っているが、それは、まさにその「言葉通り」なのである。……それでは、その「欠点」とは、一体、具体的には何かと問えば、その「ヒント」として、「……実は、少し思いあたることがある」と続くのである。

*

*

ちなみに、「……そう言われると、私悲しくなつて仕様がないうんです、涙が出てなおの事自分の悪い所が聞きたくなくなるんです」とあるが、これは、前のところで、「先生と奥さんの喧嘩(言逆い)」があつた時の、その二人の「喧嘩(言逆い)」の「原因」こそは、まさに「この事」であり、一つは、「……私は今まで何遍あの人に、どうぞ打ち明けて下さいつて頼んで見たか分りやしません」、しかし、先生は、「……何にも言う事はない、何にも心配する事はない、おれはこういう性質になつたんだからと言うだけで、取り合つてくれないんです」。そして、もう一つは、「……私に悪い所があるなら遠慮なく言つて下さい、改められる欠点なら改めます」と言つても、先生は、「……お前に欠点なんかありやしない、欠点はおれの方にあるだけだ」と言うだけであり、「……そう言われると、私悲しくなつて仕様がないうんです、涙が出てなおの事自分の悪い所が聞きたくなくなるんです」と、奥さんは、ただ泣くばかりになつてしまふのである。

三一、実は、少し思いあたること(十九) 其の一

始め私は理解のある女性として奥さんに対していた。私はその気で話しているうちに、奥さんの様子が次第に變つて来た。奥さんは私の頭脳に訴える代りに、私の心臓を動かした。始めた。自分と夫の間には何の蟠まりもない、またないはずであるのに、やはり何かある。それだのに眼を開けて見極めようとすると、やはり何にもない。奥さんの苦にする要点はここにあつた。——奥さんは最初世の中を見る先生の眼が厭世的だから、その結果として自分も嫌われているのだと断言した。そう断言しておきながら、ちつともそこに落ち付いていられた。底を割ると、かえつてその逆を考えていた。先生は自分を嫌う結果、どうとう世の中まで厭になつたのだらうと推測していた。けれどもどう骨を折つても、その推測を突き留めて事実とする事が出来なかつた。先生の態度はどこまでも良人らしかつた。親切で優しかつた。疑いの塊りをその日その日の場合で包んで、そつと胸の奥にしまつておいた奥さんは、その晩その包みの中を私の前で開けて見せた。「……あなたどう思つて？」と聞いた。「……私からあんなつたのか、それともあなたの言う人世観とか何とかいうものから、あんなつたのか。隠さず言つて頂戴」、私は何も隠す気はなかつた。

けれども私の知らないあるものがそこに存在しているとすれば、私の答えが何であろうと、それが奥さんを満足させるはずがなかった。そうして私はそこに私の知らないあるものがあると信じていた。「……私には解りません」、奥さんは予期の外れた時に見る憐れな表情をその咄嗟に現わした。私はすぐ私の言葉を継ぎ足した。「……しかし先生が奥さんを嫌っていらつしやらない事だけは保証します。私は先生自身の口から聞いた通りを奥さんに伝えるだけです。先生は嘘を吐かない方でしょう」と言った。(本文)、

*

*

さて、「……奥さんは私の頭脳に訴える代りに、私の心臓(心)を動かし始めた」とある。そして、「……自分と夫の間には何の蟠まりもない、またないはずであるのに、やはり何かある。それだのに眼を開けて見極めようとすると、やはり何にもない。奥さんの苦にする要点はここにあった。——奥さんは最初世の中を見る先生の眼が厭世的だから、その結果として自分も嫌われているのだと断言した。そう断言しておきながら、ちっともそこに落ち付いていられなかった。底を割ると、かえってその逆を考えていた。先生は自分を嫌う結果、とうとう世の中まで厭になったのだろうと推測していた。けれどもどう骨を折っても、その推測を突き留めて事実とする事が出来なかった」とある。——つまり、真の「原因」が一体何なのかは、奥さんにはどうしても「解りかねていた」のである。しかも、「……先生の態度は、どこまでも良人らしく、親切で優しくかった」のである。

奥さんは、その「疑いの塊り」をそつと胸の奥にしまっておいたが、その晩、その包みの中を私の前で開けて見せた。「……あなたどう思つて?」、「……私からあんなつたのか、それともあなたの言う人世観とか何とか言うものから、あんなつたのか。隠さず言つて頂戴」と聞くのであつた。(もちろん、その両方とも違うのである)。それに対して、「私」という人は、「……私は何も隠す気はなかった。けれども私の知らないあるものがそこに存在しているとすれば、私の答えが何であろうと、それが奥さんを満足させるはずがなかった。そうして私はそこに私の知らないあるものがあると信じていた」とある。——つまり、「私」という人は、「……そこに私の知らないあるものが(きつと何かがあるに違いない)と信じていた」が、それが、一体、何であるかは、私も奥さんも未だ「知らない状態」にあつたということである。しかし、はつきりと言えることは、「……先生が奥さんを嫌っていらつしやらない事だけは保証します。私は先生自身の口から聞いた通りを奥さんに伝えるだけです。先生は嘘を吐かない方でしょう」となるのである。……

三一、実は、少し思いあたること(十九) 其の二

奥さんは何とも答えなかつた。しばらくしてからこう言つた。「……実は私すこし思いあたる事があるんですけども……」、「……先生がああいう風になつた原因についてですか」、「……ええ。もしそれが原因だとすれば、私の責任だけはなくなるんだから、それだけでも私大変楽になれるんですが」、「……どんな事ですか」と聞くと、奥さんは言い渋つて膝の上に置いた自分の手を眺めていた。「……あなた判断して下さつて。言うから」、「……私にできる判断ならやります」、「……みんなは言えないのよ。みんな言うところから。叱られないところだけよ」、私は緊張して唾液を呑み込んだ。「……先生がまだ大学にいる時分、大変仲の好いお友達が一人あつたのよ。その方がちょうど卒業する

少し前に死んだんです。急に死んだんです」、奥さんは私の耳に私語くような小さな声で、「……実は変死したんです」と言った。それは、「どうして」と聞き返さずにはいられないような言い方であった。「……それっ切りしか言えないのよ。けれどもその事があってから後なんです。先生の性質が段々変って来たのは。なぜその方が死んだのか、私には解らないの。先生にも恐らく解っていないでしょう。けれどもそれから先生が変って来たと思えば、そう思われない事もないのよ」、「……その人の墓ですか、雑司ヶ谷にあるのは」、「……それも言わない事になってるから言いません。しかし人間は親友を一人亡くしただけで、そんなに变化出来るものでしょうか。私はそれが知りたくって堪らないんです。だからそこを一つあなたに判断して頂きたいと思うの」、私の判断はむしろ否定の方に傾いていた。(本文)。

*

*

さて、いよいよ「核心に迫るヒント」が登場して来るのである。それは、「……実は私すこし思いあたる事があるんですけれども……」、「……先生がああいう風になつた原因についてですか」、「……ええ。もしそれが原因だとすれば、私の責任だけはなくなるんだから、それだけでも私大変楽になれるんですが」、「……どんな事ですか」と聞くと、「……あなた判断して下さい。言うから」、「……みんなは言えないのよ。みんな言うところから。叱られないところだけよ」、「……先生がまだ大学にいる時分、大変仲のいいお友達が一人あつたのよ。その方がちょうど卒業する少し前に死んだんです。急に死んだんです」、「……実は変死したんです」、「……それっ切りしか言えないのよ。けれどもその事があつてから後なんです。先生の性質が段々変って来たのは。なぜその方が死んだのか、私には解らないの。先生にも恐らく解っていないでしょう。けれどもそれから先生が変って来たと思えば、そう思われない事もないのよ」と言うのであつた。

さて、ここで最も「大事な言葉」としては、一つは、「……先生がまだ大学にいる時分、大変仲のいいお友達が一人あつたのよ。その方がちょうど卒業する少し前に死んだんです。急に死んだんです」、「……実は変死したんです」、そして、もう一つは、「……その事があつてから後なんです。先生の性質が段々変って来たのは。なぜその方が死んだのか、私には解らないの。先生にも恐らく解っていないでしょう。けれどもそれから先生が変って来たと思えば、そう思われない事もないのよ」となるのである。

つまり、大学時代に、非常に仲のいい友達が一人いたが、その友達が卒業する少し前に急に死んだ、実は変死したのである。しかし、なぜ「変死」したのか？ それは、「……私には解らないの」、恐らく、先生にも解っていないでしょう」とある。この「……私には解らないの」という言葉こそ、最も「大事な言葉」(キーワード)であり、奥さん(当時はお嬢さん)は、「その人が死んだ」ということだけは知らされたが、その人がどのような状態で死んでいたかなどの、それ以外のことは何一つ知らされてはいなかったのである。ここにこそ「大きな謎」が隠されていることになるが、それはともかく、奥さんは、「……その事があつてから後なんです。先生の性質が段々変って来たのは。……それから先生が変って来たと思えば、そう思われない事もないのよ」となるのである。すると、「私」という人は、「……その人の墓ですか、雑司ヶ谷にあるのは」と聞くと、奥さんは、「……それも言わない事になってるから言いません。しかし人間は親友を一人亡くしただけで、そんなに变化出来るものでしょうか。私はそれが知りたくって堪らないんです。だからそ

こを一つあなたに判断して頂きたいと思うの」と聞くのであった。——つまり、奥さんにとつての「最大の疑問」は、「……人間は親友を一人亡くしただけで、そんなに変化出来るものでしょうか。私はそれが知りたくって堪らないんです。だからそこを一つあなたに判断して頂きたいと思うの」となるのである。それに対して、「……私の判断はむしろ否定の方に傾いていた」となるのである。

三二、先生が夜十時頃帰宅する（二十）其の一

私は私のつかまえた事実の許す限り、奥さんを慰めようとした。奥さんもまた出来るだけ私によって慰められたそうに見えた。それで二人は同じ問題をいつまでも話し合った。けれども私はもともと事の大根を攫んでいなかった。奥さんの不安も実はそこに漂う薄い雲に似た疑惑から出て来ていた。事件の真相になると、奥さん自身にも多くは知れていなかった。知れているところでも悉皆は私に話す事が出来なかった。従って、慰める私も、慰められる奥さんも、共に波に浮いて、ゆらゆらしていた。ゆらゆらしながら、奥さんはどこまでも手を出して、覚束ない私の判断に縋り付こうとした。（本文）

*

*

さて、二人は、「……同じ問題（先生のこと）でいつまでも話し合った」が、しかし、「……私はもともと事の大根（大元）を攫んでいなかった。奥さんの不安も実はそこに漂う薄い雲に似た疑惑から出て来ていた。事件の真相になると、奥さん自身にも多くは知れていなかった。知れているところでも悉皆は私に話す事が出来なかった」とある。——つまり、私も奥さんも、その事の「大元」（ほんとうの原因）は、全く知らないでいた。あり、それゆえ、慰める私も、慰められる奥さんも、共に波に浮いて、ゆらゆらしていた。ゆらゆらしながらも、奥さんはどこまでも手を出して、覚束ない私の判断に縋り付こうとした。——つまり、奥さんは、先生がなぜ変わってしまったか？ その「真の原因」を何が何でも知りたくて、覚束ない「私の判断」に縋り付こうとしていたのである。

三二、先生が夜十時頃帰宅する（二十）其の二

十時頃になって先生の靴の音が玄関に聞こえた時、奥さんは急に今までの凡てを忘れたように、前に坐っている私をそっちのけにして立ち上がった。そうして格子を開ける先生を殆ど出合い頭に迎えた。私は取り残されながら、後から奥さんに尾いて行った。下女だけは仮寝でもしていたと見えて、ついに出て来なかった。

先生はむしろ機嫌がよかった。しかし奥さんの調子はさらによかった。今しがた奥さんの美しい眼のうちに溜った涙の光と、それから黒い眉毛の根に寄せられた人の字を記憶していた私は、その変化を異常なものとして注意深く眺めた。もしそれが詐りでなかったならば、（実際それは詐りとは思えなかったが）、今までの奥さんの訴えは感傷を玩ぶためにとくに私を相手に拵えた、徒らな女性の遊戯と取れない事もなかった。もつともその時の私には奥さんをそれほど批評的に見る気は起らなかった。私は奥さんの態度の急に輝いて来たのを見て、むしろ安心した。これならばそう心配する必要もなかったんだと考え直した。（本文）

* *
さて、夜十時頃に「先生」が帰って来る。それは、「……十時頃になって先生の靴の音が玄関に聞こえた時、奥さんは急に今までのすべてを忘れたように、前に坐っている私をそつちのけにして立ち上がった。そうして格子を開ける先生をほとんど出合い頭に迎えた。私は取り残されながら、後から奥さんに尾いて行つた」とある。——これは、一体、どのようなことを意味するのかと問えば、それは、次のようなことである。

まず、考えられることは、「奥さん」というのは、まさに夫の「妻」であり、それゆえ、その「夫の帰宅」というものには、無意識のうちにも、どこか「心待ち」にするようなところがあるとともに、一般的に、その「夫の帰宅」には敏感に反応しやすいものなのである。ましてや、奥さんは、夫（先生）を心から愛しているのである。——もちろん、それだけではなく、今晚の「奥さん」は、「私」という人と「先生のこと」でいろいろ話をすることによって、自分が「先生に嫌われているのではなく、むしろ愛されている」ことを「私」から聞かされて、また、先生が変わつた原因にしても、自分が「直接の原因」ではないらしいことを知って、むしろ「ほっとした」のである。だからこそ、「……先生はむしろ機嫌がよかつた。しかし奥さんの調子はさらによかつた（となるのである）。今しがた奥さんの美しい眼のうちに溜つた涙の光と、それから黒い眉毛の根に寄せられた八の字を記憶していた私は、その変化を異常なものとして注意深く眺めた」とある。が、それは、今までの「疑いの塊り」を「私」という人に打ち明けることによって、かえつて「心の重荷」が取り除かれ、むしろ「心が軽くなつた」ということである。

三二、先生が夜十時頃帰宅する（二十） 其三

先生は笑いながら「どうもご苦労さま、泥棒は来ませんでしたか」と私に聞いた。それから「来ないんで張合が抜けやしませんか」と言った。——帰る時、奥さんは「どうもお気の毒さま」と会釈した。その調子は忙しいところを暇を潰させて気の毒だというよりも、せつかく来たのに泥棒が這入らなくて気の毒だという冗談のように聞こえた。奥さんはそう言いながら、先刻出した西洋菓子の残りを、紙に包んで私の手に持たせた。私はそれを袂へ入れて、人通りの少ない夜寒の小路を曲折して賑やかな町の方へ急いだ。（本文）
——この場面は、先生と奥さんとがいかにも「幸せな夫婦」のように見えているのである。

* *
私はその晩の事を記憶のうちから引き抜いてここへ詳しく書いた。これは書くだけの必要があるから書いたのだが、実を言うと、奥さんに菓子を貰つて帰るとき気分では、それほど当夜の会話を重く見ていなかった。私はその翌日午飯を食いに学校から帰つて来て、昨夜机の上に載せて置いた菓子の包みを見ると、すぐその中からチョコレートを塗つた鶯色のカステラを出して頬張つた。そうしてそれを食う時に、必竟この菓子を私にくれた二人の男女は、幸福な一対として世の中に存在しているのだと自覚しつつ味わつた。（本文）

* *
さて、ここで「大事な言葉」としては、「……私はその晩の事を記憶のうちから引き抜いてここへ詳しく書いた。これは書くだけの必要があるから書いたのだが、実を言うと、

奥さんに菓子を買って帰るときの気分では、それほど当夜の会話を重く見ていなかった」とある。——それは、一体、何故なのかと問えば、それは、若しも「……先生が自殺という形で亡くなるということがなければ、恐らく、その晩のことを思い出すようなこともなかったに違いない」とともに、今もなお、「……必竟この菓子を私にくれた二人の男女は、幸福な一对として世の中に存在しているのだ」と、私は思い続けていたに違いないということである。

三三、秋が暮れて冬が来る（二十）

秋が暮れて冬が来るまで格別の事もなかった。私は先生の宅へ出這りをするついでに、衣服の洗い張りや仕立て方などを奥さんに頼んだ。それまで繻絆というものを着た事のない私が、シャツの上に黒い襟のかかったものを重ねるようになったのはこの時からであった。子供のない奥さんは、そういう世話を焼くのがかえって退屈凌ぎになって、結局身体のだ位ぐんいの事を言っていた。——「……こりゃ手織りね。こんな地の好い着物は今まで縫った事がないわ。その代り縫い悪いのよそりやあ。まるで針が立たないんですもの。お蔭で針を二本折りましたわ」、こんな苦情を言う時ですら、奥さんは別に面倒くさいという顔をしなかった。（本文）

さて、先生とは、夏、鎌倉の「海岸」（海水浴場）で初めて出逢い、その後、東京に帰って来てからは、九月の「新学年」以降、「私」という人は、先生の宅を頻繁に出這りするようになり、九月、十月、十一月、そして、今は、十二月、秋が暮れて冬が来るまで格別の事もなかったとある。そして、私は先生の宅へ出這りをするついでに、衣服の洗い張りや仕立て方などを奥さんに頼んだとある。——これは、奥さん（当時のお嬢さん）は、いわゆる「女学校」に通いながらも、一方では、「縫いもの」（仕立て方）などを習いに通っていたのである。というのも、当時は、当然のことながら、まだ「ミシン」などは一般家庭には普及しておらず、すべては「手縫い」であり、それがここで役立っているということである。

*

*

三四、父の病氣のことで国へ帰る

三四、父の病氣のことで国へ帰る(二十一)

冬が来た時、私は偶然国へ帰らなければならぬ事になった。私の母から受け取った手紙の中に、父の病氣の経過が面白くない様子を書いて、今が今という心配もあるまいが、年が年だから、できるなら都合して帰って来てくれと頼むように付け足してあった。

父はかねてから腎臓を病んでいた。中年以後の人にしばしば見る通り、父のこの病は慢性であった。その代り要心さえしていれば急変のないものと当人も家族のものも信じて疑わなかった。現に父は養生のお蔭一つで、今日までどうかこうか凌いで来たように客が来ると吹聴していた。その父が、母の書信によると、庭へ出て何かしている機に突然眩暈がして引ッ繰り返った。家内のもは軽症の脳溢血と思ひ違えて、すぐその手当をした。後で医者からどうもそうではないらしい、やはり持病の結果だろうという判断を得て、始めて卒倒と腎臓病とを結び付けて考えるようになったのである。

冬休みが来るにはまだ少し間があつた。私は学期の終りまで待つていても差支えあるまいと思つて一日二日そのままにしておいた。するとその一日二日の間に、父の寝ている様子だの、母の心配している顔だのが時々眼に浮かんだ。そのたびに一種の心苦しさを嘗めた私は、どうしよう帰る決心をした。国から旅費を送らせる手数と時間を省くため、私は暇乞いかたがた先生の所へ行つて、要るだけの金を一時立て替えてもらう事にした。(本文)

*

*

さて、今度は「私」という人の「家族」の問題が出てくるが、それは、まず、「……母から受け取った手紙の中に、父の病氣の経過が面白くない様子で、今が今という心配もあるまいが、年が年だから、できるなら都合して帰って来てくれと頼むように付け足してあった」とある。そして、「……父はかねてから腎臓を病んでいたが、父のこの病は慢性であった。その代り要心さえしていれば急変のないものと当人も家族のものも信じて疑わなかった。(中略)、その父が、母の書信によると、庭へ出て何かしている機に突然眩暈がして引ッ繰り返った。家内のもは軽症の脳溢血と思ひ違えて、すぐその手当をした。後で医者からどうもそうではないらしい、やはり持病の結果だろうという判断を得て、始めて卒倒と腎臓病とを結び付けて考えるようになった」とある。

まず、この「私」という人の「家族」構成であるが、それは、父や母の「両親」をはじめ、九州で働く「長男」と、大学生である「私」(次男)と、そして、もう一人は、他国(他県)に嫁に行き、今は妊娠中の「妹」(長女)の、全部でこの「五大家族」から成るものである。——そして、そのうちの「父親」が、まさに慢性的「腎臓病」を患つていて、母の手紙によると、「……庭へ出て何かしている機に突然眩暈がして引ッ繰り返った」ということで、家族は、最初、軽い「脳溢血」だろうと思ひ違ひをして、そのような手当をしたが、医者の話だと、それは、やはり「持病(腎臓病)の結果」だろうという判断を得て、初めて「卒倒」と「腎臓病」とを結び付けて考えるようになるのであった。

それでは、なぜ慢性的「腎臓病」なのか? その「理由」の一つとしては、例えば、突然の「脳溢血や心筋梗塞」などでは余りに話が急過ぎて、その病状に応じた「話の展開」が出来にくいと共に、もう一つは、恐らく、先生の「奥さん」(元お嬢さん)の「母親」(軍人の未亡人)も、同じ病氣で亡くなつてゐるという設定にして、その両者を親密に「関連付ける」ことで、作者(夏目漱石)は、いわば「話の展開」を巧みに組み立ててゐるの

である。

三五、先生宅に暇乞いを兼ねて金を借りに行く（二十一）

先生は少し風邪の気味で、座敷へ出るのが臆劫だと言って、私をその書齋に通した。書齋の硝子戸から冬に入って稀に見るような懐かしい和らかな日光が、机掛けの上に射していた。先生はこの日当たりの好い室の中へ大きな火鉢を置いて、五徳の上に懸けた金盃から立ち上る湯気で、呼吸の苦しくなるのを防いでいた。——「……大病は好いが、ちよつとした風邪などはかえって厭なものですね」と言った先生は、苦笑しながら私の顔を見た。先生は病氣という病氣をした事のない人であった。先生の言葉を聞いた私は笑いたくなつた。「……私は風邪ぐらいなら我慢しますが、それ以上の病氣は真平です。先生だつて同じ事でしょう。試みにやつてご覧になるとよく解ります」、「……そうかね。私は病氣になるくらいなら、死病に罹りたいと思つてる」、私は先生の言う事に格別注意を払わなかつた。すぐ母の手紙の話をして、金の無心を申し出た。「……そりゃ困るでしょう。そのくらいなら今手元にあるはずだから持つて行きたまえ」、先生は奥さんをお呼びで、必要の金額を私の前に並べさせてくれた。それは奥の茶箆笥か何かの抽出から出して来た奥さんは、白い半紙の上へ鄭寧に重ねて、「……そりゃご心配ですね」と言つた。「……何遍も卒倒したんですか」と先生が聞いた。「……手紙には何とも書いてありませんが。——そんなに何度も引ッ繰り返るものですか」と聞くと、「ええ」と応え、先生の奥さんの母親という人も私の父と同じ病氣で亡くなつたのだという事が始めて私に解つた。「……どうせむずかしいんでしょう」と私が言つた。「……そうさね。私が代られれば代つてあげても好いが。——嘔気はあるんですか」、「……どうですか、何とも書いてないから、大方はないでしょう」、「……吐気さえ来なければまだ大丈夫ですよ」と奥さんが言つた。私はその晩の汽車で東京を立つた。（本文）

*

*

まず、先生は、少し風邪気味で、「座敷」（茶の間）へ出るのが臆劫だと言って、私を先生のいるその「書齋」へと通した。そして、先生は、「……大病は好いが、ちよつとした風邪などはかえって厭なものですね」と言つて、苦笑しながら私の顔を見たという。一方、病氣らしい病氣をした事のない先生の言葉を聞いて、私は笑いたくなつた。そして、「……私は風邪ぐらいなら我慢しますが、それ以上の病氣は真平です。先生だつて同じ事でしょう。試みにやつてご覧になるとよく解ります」と言つと、先生は、「……そうかね。私は病氣になるくらいなら、死病に罹りたいと思つてる」と言うのであつた。

さて、これらは、一体、どのような「意味合い」になるのかと問えば、それは、次のようなことである。——まず、われわれ人間にとつて何よりも「恐いもの」は、それは、自分が「死ぬ」ということである。自分にとつて、「死ぬ」こと以上に怖いものは、この世に何もないのである。それゆえ、「死」に直結しない「病氣」であれば、多くの場合、それほど「怖い」とは思わないものである。むしろ、何の病氣であれ、誰でも「真平御免」ではあるのである。だからこそ、「私」という人は、まさに「……私は風邪ぐらいなら我慢しますが、それ以上の病氣は真平です。先生だつて同じ事でしょう。試みにやつてご覧になるとよく解ります」と言うのである。つまり、「病氣」で苦しむのは、誰でも「真平御免」

ではあるが、それ以上に「真平御免」なのが、まさに「自分が死ぬ」ということである。これが最も一般的な「考え方」であるが、それは、この世に「一秒でも長く生きていたい」と願う人たちの心から自ずと生じて来る「考え方」である。……

一方、「先生」という人には、いわば「自殺願望」というものが潜在的にあり、それゆえ、先生は、「……大病はいいが、ちよつとした風邪などはかえって厭なものです」と言ったり、また、「……そうかね。私は病気になるくらいなら、死病に罹りたいと思つてゐる」と言うのである。それは、「……大病ならば、まさに『死ぬる』が、風邪や（大病ではない）病気などでは、ただ『苦しむ』だけであつて、とても『死ぬる』からであり」、だからこそ、先生は、「……（死ねない）病気になるくらいなら、（死ぬる）死病に罹りたいと思つてゐる」という「言葉」になるのである。それに対して、「私」という人は、「……私は先生のいう事に格別注意を払わなかつた」とある。それは、つまり、「……先生は、何か冗談か、或いは、自分をからかうために、そんなことを言つてゐるのだろう」と思つて、軽く聞き流してしまつたからである。……といふのも、先生の「頭の中」（或いは「心の中」）のその奥深くに、まさか「自殺願望」が棲み付いてゐるなどとは、夢にも、また、露ほども決して思へなかつたということである。

*

*

次に、「私」という人は、「……すぐ母の手紙の話をして、金の無心を申し出た」とある。すると、先生は、「……そりや困るでしょう。そのくらいなら今手元にあるはずだから持つて行きたまえ」と言う。先生は、奥さん呼んで、必要の金額を私の前に並べさせてくれた。それは奥の茶箆筒か何かの抽出から出して来た奥さんは、白い半紙の上へ鄭重に重ねて、「……そりやご心配ですね」と言つたとある。——まず、父の病気の経過が面白くない様子なので、そのことが日ごとに心配になり、結局、国へ帰る決心をしたが、そのために、国から旅費を送らせる手数と時間を省くため、私は暇乞いかたがた先生の所へ行つて、要るだけの金を一時立て替えてもらう事にした。すると、先生は、「……そりや困るでしょう」ということで、快くお金を立て替えてくれて、奥さんも、「……そりやご心配ですね」と、心やさしく言つてくれるのであつた。

すると、先生は、「……何遍も卒倒したんですか」と聞いて来た。これは、先生の奥さんの「母親」が同じ病気で亡くなつていたので、その「腎臓病」の症状については、よく知つていたことである。すると、「私」という人は、「……手紙には何とも書いてありませんが。——そんなに何度も引ッ繰り返るものですか」と聞くので、先生は、「ええ」と答えて、先生の奥さんの母親という人も私の父と同じ病気で亡くなつたのだという事が始めて私に解つたということになるのである。そして、「……どうせ（治るのは）むずかしいんでしよう」と私が聞くと、先生は、「……そうさね。私が代られれば代つてあげてもいいが」とあるが、この「……私が代られれば代つてあげてもいいが」というのは、実に不思議な返答であるが、これは、先生の心の奥深くには「自殺願望」があつて、それがこのようなところにもふと姿を表すのである。そして、「……嘔気はあるんですか」と先生が聞くので、「……どうですか、何とも書いてないから、大方ないんでしよう」と答えると、今度は、「……吐気さえ来なければまだ大丈夫ですよ」と奥さんが言つたとある。これは、奥さんも「腎臓病」のことは、当然のことながら、「母親」の看病等で、誰よりもよく「熟知してゐた」ということである。そして、私は、その晩の汽車で東京を立つた、

となるのである。

三六、父の病氣は思ったほど悪くはなかった（二十二）

父の病氣は思ったほど悪くはなかった。それでも着いた時は、床の上に胡坐をかい、
「……みんなが心配するから、まあ我慢してこう凝じょうとしている。なにもう起きてもいいの
さ」と言った。しかもその翌日からは母が止めるのも聞かずに、とうとう床を上げさせて
しまった。母は不承無性に太織の蒲団を畳みながら、「……お父さんはお前が帰って来
たので、急に気が強くなるんだよ」と言った。私には父の挙動がさして虚勢を張って
いるようにも思えなかった。——私の兄はある職を帯びて遠い九州にいた。これは万一の
事がある場合でなければ、容易に父母の顔を見る自由の利かない男であった。妹は他国へ嫁
いだ。これも急場の間に合うように、おいそれと呼び寄せられる女ではなかった。兄妹
三人のうちで、一番便利なのはやはり書生をしている私だけであった。その私が母のいい
付け通り学校の課業を放り出して、休み前に帰って来たという事が、父には大きな満足で
あった。——「……これしきの病氣に学校を休ませては気の毒だ。お母さんがあまり仰山
な手紙を書くものだからいけない」、——父は口ではこう言った。こう言つたばかりでな
く、今まで敷いていた床を上げさせて、いつものような元気を示した。「……あんまり軽
はずみをしてまた逆回すといけませんよ」と言う、私のこの注意を父は愉快そうにしかし極
めて軽く受けた。「……なに大丈夫、これでいつものように要心さえしていれば」と言う。
実際、父は大丈夫らしかった。家の中を自由に往来して、息も切れなければ、眩暈も感じ
なかった。ただ顔色だけは普通の人よりも大変悪かったが、これはまた今始まった症状で
もないので、私たちは格別それを気に留めなかった。（本文）

*

*

さて、父の病氣は思ったほど悪くはなかった。そして、着いた時は、床の上に胡坐をか
いていたが、翌日からは、母が止めるのも聞かずに、とうとう床を上げさせてしまった。
一方、母は「不承無性」（しぶしぶ）太織の蒲団を畳みながら、「……お父さんはお前
が帰って来たので、急に気が強くなるんだよ」と言った。——むろん、その通りだと
思うが、息子が帰って来て素直に「嬉しかった」とともに、もう一つの理由としては、少
しでも元氣なところを見せて、息子に余計な心配をかけまいという気持ちもあったのかも
知れない。——ところで、私の兄は、ある職を帯びて遠い九州にいた。また、妹は、他国
へと嫁いだ。それゆえ、両方とも「万一の場合」でもなければ、家に容易には帰って来ら
れないのである。つまり、兄妹三人のうちで、一番便利なのは、やはり書生をしている
私だけであり、その私が母のいい付け通り学校の課業を放り出して、休み前に帰って来た
という事が、父には大きな満足であったとある。

さて、この「……父には大きな満足であった」というのは、まず、「……親の言うこと
を聞いて、素直に帰って来てくれた」ことが、少しでも自分のことを気に掛けて心配して
くれているのかと思つて、素直に「嬉しい」のである。——例えば、子供も大人になると、
何だかんだと理由を付けて、帰ってこないことも多く、それは、親からすれば、どこか子
供に見捨てられたような、そのような「淋しい」感じを抱くことにもなるのである。そし
て、もう一つは、父親は、「……自分の病氣はすでに末期近くで、いつどうなるか分から

ないことは自ずと感じている」のであり、その「心細さや淋しさ」などから、また、元気で生きている間に、息子に逢えたことが素直に「嬉しい」ということにもなるのだろう。そして、父親は、「……これしきの病気に学校を休ませては気の毒だ。お母さんがあまり仰山（大げさ）な手紙を書くものだからいけない」と言っているが、これは、息子に「気を遣うこと」ではあるが、実際、この時は、まだ「元氣そうにしていた」のである。一方、「私」という人は、先生からこの「病気の怖さ」を聞かされていたので、父親のことを心配して、「……あんまり軽はずみをしてまた逆回すといけませんよ」と注意を促すが、父親は、「……なに大丈夫、これでいつものように要心さえしていれば」と言って、極めて軽く受け流した。——それは、「……実際、父は大丈夫らしかった。家の中を自由に往来して、息も切れなければ、眩暈も感じなかった。ただ顔色だけは普通の人よりも大変悪かったが、これはまた今始まった症状でもないのです、私たちは格別それを気に留めなかった」とある。——もちろん、この「病氣」（腎臓病）の最大の「怖さ」は、本人にも「自覚症状」があまりないということであり、今回倒れたということは、やがて「何回も倒れる」ことが続く前ぶれでもあり、その末期症状は、もうそこまでやって来ているのである。

三七、先生にお礼の手紙を書く（二十二）

私は先生に手紙を書いて恩借の礼を述べた。正月上京する時に持参するからそれまで待つてくれるようにと断わった。そうして父の病状の思ったほど陰悪でない事、この分なら当分安心な事、眩暈も嘔気も皆無な事などを書き連ねた。最後に先生の風邪についても一言の見舞を付け加えた。私は先生の風邪を實際軽く見ていたのである。

私はその手紙を出す時に決して先生の返事を予期していなかった。出した後で父や母と先生の噂などをしながら、遥かに先生の書齋を想像した。「……こんど東京へ行く時には椎茸でも持って行ってお上げ」、「……ええ、しかし先生が干した椎茸などを食うかしら」、「……旨くはないが、別に嫌いな人もないだろう」と言うのであった。私には椎茸と先生を結び付けて考えるのが変であった。

先生の返事が来た時、私はちよつと驚かされた。ことにその内容が特別の用件を含んでいなかったの、（より）驚かされた。先生はただ親切づくで、返事を書いてくれたんだと私は思った。そう思うと、その簡単な一本の手紙が私には大層な喜びになった。もつともこれは私が先生から受け取った第一の手紙には相違なかったが。

第一というと私と先生の間に書信の往復がたびたびあったように思われるが、事實は決してそうでない事をちよつと断わっておきたい。私は先生の生前にたった二通の手紙しか貰っていない。その一通は今言うこの簡単な返書で、あとの一通は先生の死ぬ前とくに私宛で書いた大変長いものである。——父は病気の性質として、運動を慎まなければならぬので、床を上げてからも、ほとんど戸外へは出なかつた。一度天気のごく穏やかな日の午後庭へ下りた事があるが、その時は万一を氣遣って、私が引き添うように傍に付いていた。私が心配して自分の肩へ手を掛けさせようとしても、父は笑って応じなかつた。（本文）

*

*

まず、「私」という人は、故郷に帰ってから、手紙で先生に「恩借」（好意で金銭を借

り受けたこと)の礼を述べたとある。これは、当然のことながら、当時は、まだ電話も一般には普及しておらず、急な時は、電報、ふだんは、手紙かはがきで連絡を取り合っていたのである。金銭は、正月上京する時に持参して返済すること、また、先生も気にしているだろうと思つて、父親の「病状」については、「……父の病状は、思つたほど険悪ではなく、この分なら当分安心であり、眩暈も嘔気も皆無なことなどを書き連ねて、そして、最後に先生の風邪(かぜ)についても一言の見舞を付け加えた。私は先生の風邪(かぜ)を実際軽く見ていたので」という内容になるが、最後の「……私は先生の風邪(かぜ)を実際軽く見ていたので」とすれば、実際の先生はその「風邪」をこじらせていたのかも知れない。そして、先生からの返事が来た時には、私はちよつと驚かされたのである。——これは、例えば、何らかの用件で手紙を出した場合には、その「用件」についての「返答」が返つて来ても何の不思議も特別なこともないが、これという「用件」もないのに、その「返信」が返つて来るのは、「……先生はただ親切づくで、返事を書いてくれたんだと私は思った。そう思うと、その簡単な一本の手紙が私には大層な喜びになった」とある。これは、——例えば、大好きな芸能人やその他の人にファンレターやその他の手紙などを書いたが、恐らく、返事などは返つてこないだろうと思つていたら、何と丁寧な手紙が送られて来て、非常に嬉しかったというような心理と基本的には全く同じことである。

*

*

さて、先生と私との間の「手紙」のやり取りは、まず、最初は、十二月の中頃(冬休み前)、私の方から先生に「恩借の礼」や「父親の病状」などを書いた手紙を一通送つた。それに対して、先生の方からは丁寧な「返信の手紙」が送られてきた。この時は、それだけであったが、翌年、「私」という人は、卒業論文に専念して、やがて無事に大学を卒業する。そして、その「卒業証書」を持って、七、八月、再び、故郷へと帰ることになる。父親の病状は、小康な状態を保っていたので、この頃、先生にこちらの様子を書いた「手紙」を一通書いて送つたが、その「返信の手紙」は送られて来なかった。

一方、七月、明治天皇のご病気の報知があり、やがて、七月三十日、崩御の報道が伝えられると、父親は、その新聞を手にして、「……ああ、ああ、天子様もとうとうお隠れになる。己も……」と、父の元氣は、一気に衰えて行くのである。そこで、母親は、父親を安心させるためにも、「……お前の先生先生という方にも(就職先を)お願いしたら好いじゃないか。こんな時こそ」と言われて、そこで仕方なく、先生に「手紙」を書くが、いつまで経つてもその返事は送られて来なかった。この時、先生は、自分をどうしたらよいか深く悩んでいて、私の就職先どころではなかったということである。

そして、九月、「私」という人は、東京に帰京しようとするが、突然、父親が風呂場で倒れて帰れなくなる。やがて、九月十三日、明治天皇の御大葬の日、「乃木大将の殉死」という報道が流れる。翌日、先生から、「……ちよつと会いたいが来られるかという」内容の「電報」(急報)を受ける。「私」という人は、父の病状が悪化して、「……行かれない」という「電報」(返電)と(それに関連した詳細の手紙)を出すと、今度は、二日後、先生は、「……来ないでもよろしい」という「電報」(急報)を打つて来る。

その後、しばらくして、「私」という人は、父親の「看病」をしている時に、先生からの実に長い「手紙」を受け取るが、それがまさに「先生の遺書」であり、本文では、「……先生が死ぬ前にとくに私宛で書いた大変長いもの」というものであり、これらが「先生

と私の間」での「手紙や電報」のやり取りの全部になるのである。

三八、父の将棋の相手をする（二十三）其の一

私は退屈な父の相手としてよく将碁盤に向かった。二人とも無精な性質なので、炬燵にあたったまま、盤を櫓の上へ載せて、駒を動かすたびに、わざわざ手を掛蒲団の下から出すような事をした。時々持駒を失くして、次の勝負の来るまで双方とも知らずにいたりした。それを母が灰の中から見付け出して、火箸で挟み上げるといふ滑稽もあった。――「……碁だと盤が高過ぎる上に、足が着いているから、炬燵の上では打てないが、そこへ来ると将碁盤はいいね、こうして楽に差せるから。無精者には持って来いだ。もう一番やろう」、父は勝った時は必ずもう一番やろうと言った。そのくせ負けた時にも、もう一番やろうと言った。要するに、勝っても負けても、炬燵にあたって、将碁を差したがる男であった。始めのうちは珍らしいので、この隠居じみた娯楽が私にも相当の興味を与えたが、少し時日が経つに伴って、若い私の気力はそのくらいな刺戟で満足できなくなった。私は金や香車を握った拳を頭の上へ伸ばして、時々思い切ったあくびをした。（本文）

*

*

さて、私は退屈な父の相手としてよく将碁盤に向かったとある。――例えば、炬燵の中に足を入れて、父親と「息子」（大学生）との二人が向き合って行なう遊びとしては、やはり「将棋か囲碁」になるかと思うが、しかし、「……碁だと盤が高過ぎる上に、足が着いているから、炬燵の上では打てないが、そこへ来ると将碁盤はいいね、こうして楽に差せるから。無精者には持って来いだ。もう一番やろう」と、父は勝った時は必ずもう一番やろうと言い、そのくせ負けた時にも、もう一番やろうと言った。要するに、勝っても負けても、炬燵にあたって、将碁を差したがる男であったとある。一方、「息子」（大学生）の方は、「……始めのうちは珍らしいので、この隠居じみた娯楽が私にも相当の興味を与えたが、少し時日が経つに伴って、若い私の気力はそのくらいな刺戟で満足できなくなった」とある。そこで、私は金や香車を握った拳を頭の上へ伸ばして、時々思い切ったあくび（退屈の仕草）をしたり、或いは、次のようなことを考えるようになる。

三八、父の将棋の相手をする（二十三）其の二

私は東京の事を考えた。そうして漲る心臓の血潮の奥に、活動活動と打ちつづける鼓動を聞いた。不思議にもその鼓動の音が、ある微妙な意識状態から、先生の力で強められているように感じた。――私は心のうちで、父と先生とを比較して見た。両方とも世間から見れば、生きているか死んでいるか分らないほど大人しい男であった。他に認められるという点から言えばどっちも零であった。それでいて、この将碁を差したがる父は、単なる娯楽の相手としても私には物足りなかった。かつて遊興のために往来をした覚えのない先生は、娯楽の交際から出る親しみ以上に、いつか私の頭に影響を与えていた。ただ頭といるのはあまりに冷やか過ぎるから、私は胸と言いたい。肉のなかに先生の力が喰い込んでいると言っても、血のなかに先生の命が流れていると言っても、その時の私には少しも誇張でないように思われた。私は父が私の本当の父であり、先生はまた言うまでもな

く、あかの他人であるという明白な事実を、ことさらに眼の前に並べてみて、始めて大きな真理でも発見したかのごとくに驚いた。(本文)

*

*

さて、今度は、「父親」と「先生」との比較対照になるが、それは、「……私は心のうちで、父と先生とを比較して見た。両方とも世間から見れば、生きているか死んでいるか分らないほど大人しい男であった。他に認められるという点から言えばどっちも零であった。それでいて、この将碁を差したがる父は、単なる娯楽の相手としても私には物足りなかつた。かつて遊興のために往来をした覚えのない先生は、娯楽の交際から出る親しみ以上に、いつか私の頭に影響を与えていた」とある。——まず、「……両方とも世間から見れば、生きているか死んでいるか分らないほど大人しい男であった。他に認められるという点から言えばどっちも零であった」とある。これは、一言で言えば、まさに「社会的な活動」(つまり世の中に出て「仕事」など)を行なっていないからである。

また、「……この将碁を差したがる父は、単なる娯楽の相手としても私には物足りなかつた」とあるが、それは、例えば、政治、経済、教育、社会活動、学問、芸術、芸能、スポーツ、医療、その他、何であれ、「父親」は、それらの様々な「教養」なども先生ほどには豊かではなく、また、人間としての「成熟度」なども先生ほどではないという感じとして、それゆえ、この世のいろいろな問題であれこれと人生を深く「語り合える相手」としては物足りない、と、そのように「父親」を見ているのである。——一方、先生に対しては、逆に、例えば、政治、経済、教育、社会活動、学問、芸術、芸能、スポーツ、医療、その他、何であれ、それらに対する様々な「教養」などを豊かに持ち合わせていると共に、人間としても真に「内的成長(成熟)」している、この世のいろいろな問題であれこれと人生を深く「語り合える相手」である、と見ているのである。だからこそ、「私」という人は、その「先生」という人に、うそ偽りなく、強く心惹かれているとともに、次のようにも語るのである。

*

*

つまり、「……ただ頭というのはあまりに冷やか過ぎるから、私は胸と言いたい。肉のなかに先生の力が喰い込んでい、と言つても、血のなかに先生の命が流れていると言つても、その時の私には少しも誇張でない、ように思われた」。だからこそ、「私」という人は、「……私は東京の事を考えた。そうして漲る心臓の血潮の奥に、活動活動と打ちつづける鼓動を聞いた。不思議にもその鼓動の音が、ある微妙な意識状態から、先生の力で強められているように感じた」となるのである。そして、「……私は父が私の本当の父であり、先生はまた言うまでもなく、あかの他人であるという明白な事実を、ことさらに眼の前に並べてみて、始めて大きな真理でも発見したかのごとくに驚いた」とあるが、これは、本来であれば、「私」という人間の、その「……肉のなかに本来実の『父親の命』が喰い込んでい、るはずのものであるが、しかし、実際は、そうではなく、全くの赤の他人に過ぎない「先生」という人の、その「先生の力」が自分(私)の肉のなかに喰い込んで「力」となっているとともに、「先生の命」が自分(私)の血のなかに流れて赤き「血潮」となっているからこそ、自分(私)の、「……漲る心臓の血潮の奥に、活動活動と打ちつづける鼓動が聞こえるが、それは、先生の力で強められているように感じた」となるのである。

そして、全くの赤の他人に過ぎない「先生」からは、意外なほど大きな「影響」を受けているのに比べて、一方、実の「父親」からは、これという「影響」をあまり受けていないことを知って、まるで「初めて大きな真理でも発見したかのごとくに驚いている」のである。——むろん、これは、「私」という人がまだ「若い」ので、極めて「上昇志向」(ここでは「自分を少しでも成長させようとする気持ち」)がより強いために、全くの赤の他人に過ぎない「先生」ではあるが、その「先生」の方に、「私」という人は、実の「父親」よりも「より強く心惹かれている」ということである。

三九、東京へ帰りたいたい気持ちが生じて来る(二十三)

私がのつそつし出すと前後して、父や母の眼にも今まで珍しかった私が段々陳腐ちんぷになって来た。これは夏休みなどに国へ帰る誰でもが一樣に経験する心持だろうと思うが、当座の一週間ぐらいは下にも置かないように、ちやほや歓待もてなされるのに、その峠を定規通り通り越すと、あとはそろそろ家族の熱が冷めて来て、しまいには有つても無くつても構わないもののように粗末に取り扱われがちになるものである。私も滞在中にその峠を通り越した。その上私は国へ帰るたびに、父にも母にも解わからない変なところを東京から持って帰った。昔で言うと、儒者じゆしやの家へ切支丹キリシタンの臭においを持ち込むように、私の持つて帰るものは父とも母とも調和しなかった。無論私はそれを隠していた。けれども元々身に着いているものだから、出すまいと思つても、いつかそれが父や母の眼に留とまった。私はつい面白くなくなった。早く東京へ帰りたくなつた。

父の病氣は幸い現状維持のまま、少しも悪い方へ進む模様は見えなかった。念のためにならぬ遠くから相当の医者を招いたりして、慎重に診察してもらつてもやはり私の知つてゐる以外に異状は認められなかった。私は冬休みの尽きる少し前に国を立つ事にした。立つと言ひ出すと、人情は妙なもので、父も母も反対した。「……もう帰るのかい、まだ早いじゃないか」と母が言つた。「……まだ四、五日いても間に合うんだろう」と父が言つた。私は自分の極めた出立しゅつたつの日を動かさなかつた。(本文)

*

*

さて、「……私がのつそつし出すと前後して、父や母の眼にも今まで珍しかった私が段々陳腐ちんぷになつて来た。これは夏休みなどに国へ帰る誰でもが一樣に経験する心持だろうと思うが、当座の一週間ぐらいは下にも置かないように、ちやほや歓待もてなされるのに、その峠を定規通り通り越すと、あとはそろそろ家族の熱が冷めて来て、しまいには有つても無くつても構わないもののように粗末に取り扱われがちになるものである」とある。——例えば、一般に、最初は、大事や親切にされても、やがて、普通ふつうになり、最後には、嫌いやがられるようになって行く。これは、結局、今までの生活の中に「第三者」(元家族でも)入つて来ると、今までは生活が変わり、最初のうちはそれでよくても、やがて、普通ふつうになり、最後には、嫌いやがられるのも、「第三者」が居いるといふこと自体わづらが煩わづらわしいことになり、その「第三者」のいない元の「今までの生活に戻したい」といふ気持ちになるからである。むろん、そうならない場合も、多々、あるといふことである。

それはともかく、「……私は国へ帰るたびに、父にも母にも解わからない変なところを東京から持つて帰つた。昔で言うと、儒者じゆしやの家へ切支丹キリシタンの臭においを持ち込むように、私の持つて

帰るものは父とも母とも調和しなかった。無論私はそれを隠していた。けれども元々身に
着いているものだから、出すまいと思っても、いつかそれが父や母の眼に留まった。私は
つい面白くなくなった。早く東京へ帰りたくなった」とある。——まず、「儒者の家」と
いうのは、いわば「昔からの古い保守的な考え方をする家」のなかに、切支丹キリシタン（それは「西
洋風の新しい考え方」の臭いにおを持ち込むために、私の持つて帰るものは父とも母とも調和
しなかった。——つまり、「私」という人の「……ものの見方、とらえ方、考え方、また、
価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などが父や母とは違っているのである。

むろん、「……私はそれを隠していたが、元々身に着いているものだから、出すまいと
思っても、いつかそれが父や母の眼に留まった。私はつい面白くなくなった。それは、父
や母に理解してもらえないからである。だから、早く東京へ帰りたくなった」となるので
ある。——しかも、父の病気は幸い現状維持のまま、少しも悪い方へ進む模様は見えな
かった。私は、冬休みの尽きる少し前に国を立つ事にしたのである。

*

*

四十、東京へ戻る

東京へ帰ってみると、松飾はいつか取り払われていた。町は寒い風の吹くに任せて、どこを見てもこれというほどの正月めいた景気はなかった。——私は早速先生のうちへ金を返しに行った。例の椎茸もついでに持って行った。ただ出すのは少し変だから、母がこれを差し上げてくれと言いましたとわざわざ断って奥さんの前へ置いた。椎茸は新しい菓子折に入れてあった。鄭寧に礼を述べた奥さんは、次の間へ立つ時、その折を持って見て、軽いのに驚かされたのか、「こりや何の御菓子」と聞いた。奥さんは懇意になると、こんなところに極めて淡泊な小供らしい心を見せた。

二人とも父の病気について、色々掛念の問いを繰り返してくれた中に、先生はこんな事を言った。「……なるほど容体を聞くと、今が今どうという事もないようですが、病気が病気だからよほど気をつけないといけません」、先生は腎臓の病について私の知らない事を多く知っていた。「……自分で病気に罹っているながら、気が付かないで平気でいるのがあの病の特色です。私の知ったある士官は、とうとうそれでやられたが、全く嘘のような死に方をしたんですよ。何しろ傍に寝ていた細君が看病をする暇も何にもないくらいなんですからね。夜中にちよつと苦しいと言つて、細君を起したがり、翌る朝はもう死んでい たんです。しかも細君は夫が寝ているとばかり思つてたんだつて言うんだから。」（本文）

*

*

さて、ここで「面白い」と思うのは、「……私は早速先生のうちへ金を返しに行った。例の椎茸もついでに持って行った。椎茸は、新しい菓子折に入れてあった。鄭寧に礼を述べた奥さんは、次の間へ立つ時、その折を持って見て、軽いのに驚かされたのか、『こりや何の御菓子』と聞いた。奥さんは懇意になると、こんなところに極めて淡泊な小供らしい心を見せた」とある。——まず、家で栽培した「椎茸」を「新しい菓子折」に入れて持つて行った。当然、奥さんは、中には「何らかの菓子類」が入っているのだらうと思つた。ところが、その「新しい菓子折」を手を持ってみたら、何らかの「菓子類」にしては、あまりに「軽い」ので、ほとんど無意識のうちに、「こりや何の御菓子」と聞いたのである。

例えば、まだ小さな子供であれば、誰かから包装された「何か土産やプレゼントなど」をもらった時に、子供は、とかく無遠慮に「これなーに？」とか、「この中身なーに？」などと、いきなり聞いたりするものであるが、そのような「感じ」があつたということである。——つまり、ふつう大人であれば、気を遣つて、手に持つてあまりに軽いからと言って、いきなり「こりや何の御菓子」などと無遠慮の「質問」はしないものであるということである。そういう意味では、そういうことにはあまりこだわらない、さっぱりとした、「……極めて淡泊な小供らしい心を見せた」となるのである。

次に、先生も奥さんも心配していただであらう、私の「父の病気」についての質問がいろいろあつたが、その中で、先生は、「……なるほど容体を聞くと、今が今どうという事もないようですが、病気が病気だからよほど気をつけないといけません」と言つた、先生は腎臓の病について私の知らない事を多く知つていたとある。そして、実例を挙げて、この「病気」（腎臓の病）がいかに「恐ろしいものか」（それは「本人の自覚のないまま病状はどんどん悪化していく病であること）を語るのであつた。

四一、父の病気についての談義が続く（二十四）

今まで楽天的に傾いていた私は急に不安になった。「……私の父もそんなになるでしょうか。ならんとも言えないですね」、「……医者は何と言うのです」、「……医者は到底治らないと言うんです。けれども当分のところ心配はあるまいとも言っています」、「……それじゃ好いでしよう。医者がそういうのなら。私の今話したのは気が付かずに行った人の事で、しかもそれが随分乱暴な軍人なんだから」と言うのであった、

私はやや安心した。私の変化を凝と見ていた先生は、それからこう付け足した。「……然し人間は健康にしろ病気にしろ、どっちにしても脆いものです。いっどんな事でどんな死にようをしないとも限らないから」と言うので、「……先生もそんな事を考えてお出ですか」と聞くと、「……いくら丈夫の私でも、満更考えない事ありません」と、先生の口元には微笑の影が見えた。「……よくころりと死ぬ人があるじゃありませんか。自然に。それからあつと思う間に死ぬ人もあるでしょう。不自然な暴力で」と言うので、「……不自然な暴力って何ですか」と聞くと、「……何だかそれは私にも解らないが、自殺する人はみんな不自然な暴力を使うんでしょう」と言う。「……すると殺されるのも、やはり不自然な暴力のお蔭ですね」と言うのと、「……殺される方はちつとも考えていなかった。なるほどそう言えばそうだ」と言うのであった。

その日はそれで帰った。帰ってから父の病気はそれほど苦にならなかった。先生の言った自然に死ぬとか、不自然の暴力で死ぬとかいう言葉も、その場限りの浅い印象を与えただけで、後は何らのこだわりを私の頭に残さなかった。私は今まで幾度か手を着けようとしては手を引つ込めた「卒業論文」を、いよいよ本式に書き始めなければならぬと思ひ出した。（本文）

*

*

まず、私の「父の病気」については先生との会話のなかで、「……医者は何と言うのです」と聞くので、「……医者は到底治らないと言うんです。けれども当分のところ心配はあるまいとも言っています」、「……それじゃ好いでしよう。医者がそういうなら。……」と言うのであった。そのあとに、先生は、こう付け足したとある。「……然し人間は健康にしろ病気にしろ、どっちにしても脆いものです。いっどんな事でどんな死にようをしないとも限らないから」、「……先生もそんな事を考えてお出ですか」と聞くと、「……いくら丈夫の私でも、満更考えない事ありません」と、先生の口元には微笑の影が見えた。そして、「……よくころりと死ぬ人があるじゃありませんか。自然に。それからあつと思う間に死ぬ人もあるでしょう。不自然な暴力で」と言うので、「……不自然な暴力って何ですか」と聞くと、「……何だかそれは私にも解らないが、自殺する人はみんな不自然な暴力を使うんでしょう」と言う。「……すると殺されるのも、やはり不自然な暴力のお蔭ですね」と言うのと、先生は、「……殺される方はちつとも考えていなかった。なるほどそう言えばそうだ」と言い、その日はそれで帰ったとある。

まず、われわれ人間の「死に方」としては、一つは、何らかの「病気」で亡くなる場合、一つは、何らかの「事故」や「自然災害」などに遭遇して亡くなる場合、一つは、人や動物などに「殺害されて」亡くなる場合、一つは、薬や食中毒或いは医療ミスその他などで亡くなる場合、そして、もう一つは、自ら「命を絶って」（自殺をして）なくなる場合、

その他、いろいろとあるかと思うが、先生は、「……よくころりと死ぬ人があるじゃありませんか。自然に。それからあつと思う間に死ぬ人もあるでしょう。不自然な暴力で」と言う。すると、「私」という人は、「……不自然な暴力で何ですか」と聞くと、先生は、「……何だかそれは私にも解らないが、自殺する人はみんな不自然な暴力を使うんでしょ」と言う。「私」という人は、「……すると殺されるのも、やはり不自然な暴力のお蔭ですわね」と言うので、先生は、「……殺される方はちつとも考えていなかった。なるほどそう言えばそうだ」とあるが、ここで最も「興味深い」のは、先生は、「不自然な暴力」としては、「……殺される方はちつとも考えていなかった」ということであり、先生が考えていたのは、まさに「……自ら命を絶つ自殺の方ばかりであった」ということである。……こういうところにも「先生の心」が見え隠れするのである。

一方、「私」という人は、「……帰ってからも父の病気はそれほど苦にならなかったし、また、先生の言った自然に死ぬとか、不自然の暴力で死ぬとかいう言葉も、その場限りの浅い印象を受けただけで、後は何らのこだわりも私の頭に残さなかった」とある。それは、まだ「若い」ので、「死の問題」は、所詮他人事に過ぎないのである。そして、「私」という人の「頭の中」(或いは「心の中」)にあったものは、むしろ「卒業論文」のことであり、「……いよいよ本式に書き始めなければならないと思いついた」ということである。

四二、卒業論文に専念する(二十五) 其の一

その年の六月に卒業する筈の私は、是非ともこの論文を成規通り四月一杯に書き上げてしまわなければならなかった。二、三、四と指を折って余る時日を勘定して見た時、私は少し自分の度胸を疑ぐった。他のものは余程前から材料を蒐めたり、ノートを溜めたりして、余所目にも忙しそうに見えるのに、私だけはまだ何にも手を着けずにいた。私にはただ年が改まったら大いにやろうという決心だけがあった。私はその決心でやり出した。そうして忽ち動けなくなった。今まで大きな問題を空に描いて、骨組だけはほぼ出来上っている位に考えていた私は、頭を抑えて悩み始めた。私はそれから論文の問題を小さくした。そうして練り上げた思想を系統的に纏める手数を省くために、ただ書物の中にある材料を並べて、それに相当な結論を一寸付け加える事にした。(本文)

*

*

さて、「私」という人は、いよいよ本格的に「卒業論文」に取りかかることになるが、それは、「……その年の六月に卒業する筈の私は、是非ともこの論文を成規通り四月一杯に書き上げてしまわなければならなかった。二、三、四と指を折って余る時日を勘定して見た時、私は少し自分の度胸を疑ぐった(大丈夫の想いが揺れた)。他のものはよほど前から材料を蒐めたり、ノートを溜めたりして、余所目にも忙しそうに見えるのに、私だけはまだ何にも手を着けずにいた。私にはただ年が改まったら大いにやろうという決心だけがあった」とある。そして、実際、「……私はその決心でやり出したら、忽ち動けなくなった」。それは、「……今まで大きな問題を空に描いて、骨組だけはほぼ出来上っている位に考えていた私は、頭を抑えて悩み始めた。私はそれから論文の問題を小さくした。そうして練り上げた思想を系統的に纏める手数を省くために、ただ書物の中にある材料を

並べて、それに相当な結論を一寸付け加える事にした」とある。——これは、その人の「頭の中」（或いは「心の中」）だけであれこれ思ったり考えたり空想したりすることは比較的容易にでき得るとしても、それを実際に「卒業論文」としてより、正確かつより、厳密な「文章」として書き連ねていく作業ともなれば、それはもう極めて大変なことになるといふことであり、それゆえ、仕方なく、「……論文の問題を小さくした」ということである。

四二、卒業論文に専念する（二十五）其の二

私の選択した問題は先生の専門と縁故の近いものであった。私がかつてその選択について先生の意見を尋ねた時、先生は好いでしょうと言った。狼狽した気味の私は、早速先生の所へ出掛けて、私の読まなければならぬ参考書を聞いた。先生は自分の知っている限りの知識を、快く私に与えてくれた上に、必要の書物を、二、三冊貸そうと言った。しかし先生はこの点について毫も私を指導する任に当らうとしなかった。「……近頃はあんまり書物を読まないから、新しい事は知りませんよ。学校の先生に聞いた方が好いでしょう」、先生は一時非常の読書家であったが、その後どういふ訳か、前ほどの方面に興味が無くなつたようだと、かつて奥さんから聞いた事があるのを、私はその時ふと思ひ出した。私は論文をよそにして、そぞろに口を開いた。——「……先生はなぜ元のように書物に興味を持ち得ないんですか」、「……なぜという訳もありませんが。……つまりいくら本を読んでもそれほど偉くならないと思うせいでしょう。それから……」、「……それから、まだあるんですか」、「……まだあるというほどの理由でもないが、以前はね、人の前へ出たり、人に聞かれたりして知らないで恥のようにきまりが悪かつたものだが、近頃は知らないという事が、それほど恥でないように見え出したものだから、つい無理にも本を読んでも本を、読んでみようという元気がなくなつたのでしよう。まあ早く言えば老い込んだのです」と、先生の言葉はむしろ平静であった。世間に背中を向けた人の苦味を帯びていなかっただけに、私にはそれほどの手応えもなかつた。私は先生を老い込んだとも思わない代りに、偉いとも感心せずに帰つた。（本文）

*

*

まず、「……私の選択した問題は先生の専門と縁故の近いものであった。私がかつてその選択について先生の意見を尋ねた時、先生は好いでしょうと言った」とある。それでは、それは、一体、どのような「学問」かと問えば、それは、本文には「何も明記されていない」ので分かりようもないが、ただ、理工系ではなく、文化系であり、法学をはじめ、政治学、経済学、教育学、文学や芸術学、語学、社会学、心理学、歴史学、その他、いろいろあるかと思うが、先生自身は、自らを「思想家」と見ているのであり、それゆえ、恐らく、思想や倫理などを扱う「哲学」（か文学）のようなものではないかと思う。

それはともかく、「私」という人は、「……先生はなぜ元のように書物に興味を持ち得ないんですか」、「……なぜという訳もありませんが。……つまりいくら本を読んでもそれほど偉くならないと思うせいでしょう。それから……」、「……それから、まだあるんですか」、「……まだあるというほどの理由でもないが、以前はね、人の前へ出たり、人に聞かれたりして知らないで恥のようにきまりが悪かつたものだが、近頃は知らないという事が、それほど恥でないように見え出したものだから、つい無理にも本を読んでもみよ

うという元気が出なくなつたのでしよう。まあ早く言えば老い込んだのです」と、先生の言葉はむしろ平静であつた。世間に背中を向けた人の苦味(くみ) (苦言) を帯びていなかっただけに、私にはそれほどの手応え(てうた) もなかつた。私は先生を老い込んだとも思わない代りに、偉いとも感心せず(えら) に帰つたとある。

それは、先ず、まだ若い「私」という人は、まさに「向上心」に燃えているのであり、それゆえ、「……先生はなぜ元のように書物に興味を持ち得ないんですか」と聞きたくなるのも、当然であるが、一方の「先生」は、「……なぜという訳もありませんが。……つまりいくら本を読んでもそれほど偉くならないと思うせいでしよう」と言い、また、「……以前はね、人の前へ出たり、人に聞かれたりして知らない恥(ち) のようにきまりが悪かつたものだが、近頃は知らないという事が、それほどの恥でないように見え出したものだから、つい無理にも本を読んでみようという元気が出なくなつたのでしよう。まあ早く言えば老い込んだのです」と言うのであつた。

むろん、これには大きな「理由」があるのであり、それは、先生自身は、本来は、社会に出て、出来るならば何らかの活動をしたと思つて来た時期もあり。そのために、先生は一時非常の読書家でもあつたが、しかし、先生には、どうしても「社会に出て活動したくとも活動(か) でき得ないような余りに重い『心の傷』(罪) を背負い込んでしまつた」がために、読書に対する「意欲」も次第に衰えてしまつたのである。——一方、それに対して、「私」という人は、「……私は先生を老い込んだとも思わない代りに、偉いとも感心せず(えら) に帰つた」とある。これは、まさに「向上心」に燃えている若者から見れば、何か「物足りなさ」を感じたということである。

四二、卒業論文に専念する(二十五) 其の三

それからの私はほとんど論文に崇(た) れた精神病患者のように眼を赤くして苦しんだ。私は一年前に卒業した友達について、色々様子を聞いてみたりした。そのうちの一人は締切の日(しめきり) に車で事務所へ馳(か) けつけて漸(ようや) く間に合わせたと言つた。他の一人は五時を十五分ほど後(おく) らして持つて行つたため、危(あやう) く跳(は) ね付けられようとしたところを、主任教授の好意でやつと受理してもらつたと言つた。私は不安を感じると共に度胸(どくちゆう) を据(す) えた。毎日机の前で精(せい) 根(こん) のつづく限り働いた。でなければ、薄暗い書庫(しよこ) に這(はい) 入つて、高い本棚のあちらこちらを見廻(みまわ) した。私の眼は好事家(こうずか) が骨董(こつどう) でも掘り出す時のように背表紙(せひょうし) の金文字(きんもじ) をあさつた。

梅(うめ) が咲(さ) くにつけて寒い風(かぜ) は段々(むじ) 向(む) を南(みなみ) へ更(か) えて行つた。それが一仕切(ひとしきり) 経(た) つと、桜(うわさ) の噂(うわさ) がちらほら私の耳(みみ) に聞こえ出した。それでも私は馬車馬(ばしやば) のように正面(まへ) ばかり見て、論文(ろんぶん) に鞭(むち) うたれた。私はついに四月(しがつ) の下旬(しんげん) が来て、やつと予定通り(よていどおり) のものを書き上げるまで、先生の敷居(ふきい) を跨(また) がなかつた。(本文)

*

*

さて、この「場面」は、学生にとつて「卒業論文」を書くということが、いかに大変な「一大事業」であるかを友だちの実例(じつれい) などを挙(あ) げて書き記(き) しているものであり、「私」自身も、毎日毎日、「論文」に崇(た) れられた精神病患者(せいしんびやうびやう) のように眼(め) を赤くして苦しみ、そして、「……ついに四月(しがつ) の下旬(しんげん) が来て、やつと予定通り(よていどおり) のものを書き上げるまで、あれほど頻繁(ひんぱん) に行き来(きらい) していた、先生の敷居(ふきい) をも跨(また) がなかつた」ということである。

ちなみに、当時の大学では、卒業論文提出が「四月一杯」までであり、また、口述試験は、「六月」にあり、そして、卒業式は、ふつう「七月」となっていたそうである。が、ただ、この夏目漱石の『こころ』という作品の中では、卒業は「六月」となっている。

四三、論文を完成させ、先生宅を訪ねる（二十六）

私の自由になったのは、八重桜の散った枝にいつしか青い葉が霞むように伸び始める初夏の季節であった。私は籠を抜け出した小鳥の心をもって、広い天地を一目に見渡しながら、自由に羽搏きをした。私はすぐ先生の家へ行った。枳殻の垣が黒ずんだ枝の上に、萌るような芽を吹いていた。柘榴の枯れた幹から、つやつやしい茶褐色の葉が、柔らかかそうに日光を映していたりするの、道々私の眼を引き付けた。私は生れて初めてそんなものを見るような珍らしさを覚えた。

先生は嬉しそうな私の顔を見て、「……もう論文は片付いたんですか、結構ですね」と言った。私は、「……お蔭でようやく済みました。もう何にもする事はありません」と言った。——実際、その時の私は、自分のなすべき凡ての仕事が既に結了して、これから先は威張って遊んでいても構わないような晴やかな心持でいた。私は書き上げた自分の論文に対して充分の自信と満足をもっていた。私は先生の前で、しきりにその内容を喋々した。先生は何時もの調子で、「なるほど」とか、「そうですね」とか言ってくれたが、それ以上の批評は少しも加えなかった。私は物足りないというよりも、聊か拍子抜けの気味であった。それでもその日私の気力は、因循らしく見える先生の態度に逆襲を試みるほどに生々していた。（本文）

さて、「……私の自由になったのは、八重桜の散った枝にいつしか青い葉が霞むように伸び始める初夏の季節であった」とある。だとすれば、それは、まさに「五月」のことであり、「……私は籠を抜け出した小鳥の心をもって、広い天地を一目に見渡しながら、自由に羽搏きをした」。そして、「……私はすぐ先生の家へ行った」とある。——これは、「卒業論文」を完成させるために長く「部屋」に閉じ籠められていた状態から、やっと解放されて、行きたくともずつと我慢していた、その「先生の家」へとすぐに出かけたが、その道々には枳殻の枝の上に、萌るような芽が吹いていたり、また、柘榴の枯れた幹から、つやつやしい茶褐色の葉が、柔らかかそうに日光を映していたりするの、私の眼を引き付けた。私は生れて初めてそんなものを見るような珍らしさを覚えた、とある。

例えば、われわれ人間というのは、若しも貪欲な「利害損得」などに振りまわされている「目」で「自然」を見た場合、例えば、仕事やその他などに追われている人たちは、まわりの「自然の風景」などをしみじみ見ることもなければ、ましてや道端の「タンポポの花」などには目もくれないだろう。そんなものは、腹の足しにもならなければ、一円にもならないからである。そんなものよりも、遙かに仕事やその他の方が遙かに大事だからである。むろん、それは、それで大事なことではあるが、しかし、それでは、「自然」というもの（敢えて「美」というもの）は、永遠に見えてはこないものである。

つまり、大事なことは、この世（俗世）の実に様々な「利害損得」などに振りまわされ

ている「心的状態」から離れて、文字通り、純粹な「眼」で「対象」そのものを見ること
によってこそ、初めて、あるがままの「自然の風景」（その「美しさ」）がはつきりと見
えて来ることになるが、しかし、それだけではまだ不十分であり、さらに大事なことは、
次のようなことである。——つまり、われわれ人間は、この世に生まれて今日まで生きて
きた「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」）などから、自
ずとその人なりの「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道德観、人生観、生
き方、その他」などが生み出されることになるが、しかし、それらは、その人の「色メガ
ネ」であり、それゆえ、その「色メガネ」を一度取り外すことによつてこそ、初めて、百
%純粹な「眼」で「対象」そのものが見えて来ることであり、その結果、実に様々
な「対象」の「色そのもの」、「形そのもの」、「音そのもの」、「匂いそのもの」、「味そのもの」
「感触そのもの」、その他を、初めて、真に「見聞き嗅ぎ味ひ触れ感じ知る」ことができ
得るようになるということである。

さて、先生は嬉しそうな私の顔を見て、「……もう論文は片付いたんですか、結構です
ね」と言った。私は、「……お蔭でようやく済みました。もう何にもする事はありません」
と言った。——実際、その時の私は、自分のなすべき凡ての仕事が既に結了して、これ
から先は威張って遊んでいても構わないような晴やかな心持でいたとある。

これは、学生にとつて「卒業論文」を書き上げ完成させるといふことが、いかに大変な
「一大事業」であるかを物語るものであると共に、この上もない「達成感や満足感或いは
開放感」などに充たされていて、だからこそ、次のように語るのである。つまり、「……
私は書き上げた自分の論文に対して充分の自信と満足をもっていた。私は先生の前で、し
かりにその内容を喋々とした（つまりしゃべりまくった）」とある。——これは、自分の
論文について、何か凄いとかが、素晴らしいとか、その他、とにかく、先生にほめてもら
いたいという心理からである。ところが、一方、先生は、いつもの調子で、「なるほど」と
か、「そうですね」とか言ってくれたが、それ以上の批評は少しも加えなかった。私は物
足りないというよりも、聊か拍子抜けの気味であつたとある。

これは、まだ若い「私」にとつては、「……自分の論文に対して充分の自信と満足を持
つていた」としても、「先生」をはじめ、その分野で何年も何十年も専門かつ最先端の研
究などを行っている大学教授たちにとっては、実に数多くの学生たちが書き上げる「卒業論
文」などを読んでも、多くの場合、そこに真に驚くべき人類的な発見の内容のものを見
出すことは少なく、それゆえ、学生たちが期待するほどの「高い評価」などは得られ難
いのである。それでも、「……その日の私の気力は、因循らしく（それが何だと）見える先
生の態度に逆襲を試みるほどに生々していた」と続くのである。

*

*

四四、先生を散歩へと誘い出す

四四、先生を散歩へと誘い出す(二十六)

私は青く蘇生ろうとする大きな自然の中に、先生を誘い出そうとした。「……先生何処かへ散歩しましょう。外へ出ると大変好い心持です」、「……何処へ」、私は何処でも構わなかった。ただ先生を伴れて郊外へ出たかった。——一時間の後、先生と私は目的通り市を離れて、村とも町とも区別の付かない静かな所を宛もなく歩いた。私はかなめの垣から若い柔らかい葉を撿ぎ取って芝笛を鳴らした。ある鹿児島人を友達にもって、その人の真似をしつつ自然に習い覚えた私は、この芝笛というものを鳴らす事が上手であった。私が得意にそれを吹きつづけると、先生は知らん顔をしてよそを向いて歩いた。

やがて若葉に鎖ざされたように翳鬱した小高い一構えの下に細い路が開けた。門の柱に打ち付けた標札に「何々園」とあるので、その個人の邸宅でない事がすぐ知れた。先生はだらだら上りになって入口を眺めて、「這入ってみようか」と言った。私はすぐ「植木屋ですね」と答えた。(本文)

*

*

さて、「私」という人は、「……先生何処かへ散歩しましょう。外へ出ると大変好い心持ですよ」と誘うと、先生は、「……何処へ」と聞くのであった。私は何処でも構わなかった。ただ先生を伴れて郊外へ出たかった。そして、——一時間の後、先生と私は目的通り市を離れて、村とも町とも区別の付かない静かな所を宛もなく歩いた。私は「かなめの垣」(これは「かなめもちで造った生け垣」)から、若い柔らかい葉を撿ぎ取って芝笛を鳴らした。ある鹿児島人を友達にもって、その人の真似をしつつ自然に習い覚えた私は、この芝笛というものを鳴らす事が上手であった。私が得意にそれを吹きつづけると、先生は知らん顔をしてよそを向いて歩いたとある。——この場面は、先生を散歩に誘い出し、そして、約一時間後、あてもなく歩いて辿り着いたその地点とは、まさに次のような場所であったが、これは、結局、その「場所設定」のための導入部分になっているのである。

やがて、若葉に鎖ざされたように翳鬱した小高い一構えの下に細い路が開けた。門の柱に打ち付けた標札に「何々園」とあるので、その個人の邸宅でない事がすぐ知れた。先生はだらだら上りになって入口を眺めて、「這入ってみようか」と言った。私はすぐ「植木屋ですね」と答えたとある。——そして、この「場所」(この「何々園」)で、先生の余りにも有名な「せりふ」が登場して来るのである。それは、つまり、どこでその有名な「せりふ」を先生に言わせようかと考えた末に、恐らく、作者(夏目漱石)という人は、まさにこの「場所」を選んだということである。

四五、何々園の中に入る(二十六)

植込の中をうねりして奥へ上ると左側に家があった。明け放った障子の内はがらんとして人の影も見えなかった。ただ軒先に据えた大きな鉢の中に飼ってある金魚が動いていた。「……静かだね。断わらずに這入っても構わないだろうか」、「……構わないでしょう」と、二人はまた奥の方へ進んだ。しかしそこにも人影は見えなかった。躑躅が燃えるように咲き乱れていた。先生はそのうちで樺色の丈の高いのを指して、「……これは霧島でしょう」と言った。——芍薬も十坪あまり一面に植え付けられていたが、まだ季節が

来ないので花を着けているのは一本もなかった。この芍薬畠の傍にある古びた縁台のよ
うなものの上に先生は大の字なりに寝た。私はその余った端の方に腰をおろして烟草を吹
かした。先生は着い透き徹るような空を見ていた。私は私を包む若葉の色に心を奪われて
いた。その若葉の色をよくよく眺めると、一々違っていた。同じ楓の樹でも同じ色を枝
にかけているものは一つもなかった。細い杉苗(杉の苗)の頂に投げ被せてあった先生
の帽子が風に吹かれて落ちた。(本文)

*

*

さて、その「何々園」の中は、次のようなものであった。つまり、「……植込の中を一
うねりして奥へ上ると左側に家があった。明け放った障子の内はがらんとして人の影も
見えなかった。ただ軒先に据えた大きな鉢の中に飼ってある金魚が動いていた。「……静
かだね。断わらずに這入っても構わないだろうか」、「……構わないでしょう」、二人はま
た奥の方へ進んだ。しかしそこにも人影は見えなかったとある。そして、躑躅が燃えるよ
うに咲き乱れていた。「満開」だとすれば、季節は、まさに「五月」、先生はそのうちで樺色
の丈の高いのを指して、「……これは霧島でしょう」と言った。——芍薬も十坪あまり一
面に植え付けられていたが、まだ季節が来ないので花を着けているのは一本もなかったと
ある。例えば、「……芍薬は、牡丹が咲き終わるのを待つようにして咲く」とある。牡丹
は、東京では、ふつう「五月」頃、その後「芍薬」が咲き匂うということになるのだ
ろう。そして、この芍薬畠の傍にある古びた「縁台のようなもの」の上に先生は大の字
なりに寝た。私はその余った端の方に腰をおろして烟草を吹かした。先生は着い透き徹る
ような空を見ていた。私は私を包む若葉の色に心を奪われていた。その若葉の色をよくよ
く眺めると、一々違っていた。同じ楓の樹でも同じ色を枝に着けているものは一つもな
かったとある。——これは、この世(俗世)の実に様々な「欲望や感情」(或いは「利害
損得」)などに振りまわされている「心的状態」から離れて、文字通り、純粹な「眼」で
「対象」そのものを見ているということであり、そのような「見方」によってこそ、初め
て、あるがままの「自然の風景」(その「美しさ」)がはっきりと見えて来るということ
である。その時、細い杉苗(杉の苗)の頂に投げ被せてあった先生の帽子が風に吹かれ
て落ちたとある。

四六、財産の話をする(二十七) 其の一

私はすぐその帽子を取り上げた。所々に着いている赤土を爪で弾きながら先生を呼んだ。
「……先生帽子が落ちました」と言うと、「……ありがとう」と、身体を半分起してそれ
を受け取った先生は、起きるとも寝るとも片付かないその姿勢のまま、変な事を私に聞
いた。「……突然だが、君の家には財産が余程あるんですか」、「……あるという程ありや
しません」、「……まあどの位あるのかね。失礼の様だが」、「……どの位って、山と田地
が少しあるぎり、金なんかまるで無いんでしょう」と言った。

先生が私の家の経済について、問いらしい問いを掛けたのはこれが始めてであった。私
の方はまだ先生の暮し向きに関して、何も聞いた事がなかった。先生と知り合いになった
始め、私は先生がどうして遊んでいられるかを疑った。その後もこの疑いは絶えず私の
胸を去らなかつた。しかし私はそんな露骨な問題を先生の前に持ち出すのをぶしつけとば

かり思つて何時でも控えていた。若葉の色で疲れた眼を休ませていた私の心は、偶然またその疑いに触れた。——「……先生はどうなんです。どの位の財産をもつていらつしやるんですか」「……私は財産家と見えますか」。(本文)

*

*

さて、いよいよ「本題」が登場して来るが、それは、まず、「……先生、帽子が落ちました」と言うと、「……ありがとう」と、身体を半分起してそれを受け取った先生は、起きるとも寝るとも片付かないその姿勢のまま、変な事を私に聞いた。それは、「財産」のことであるが、「……突然だが、君の家には財産が余程あるんですか」「……あるという程ありやしません」、すると、先生は、「……まあどの位あるのかね。失礼の様だが」と聞く。私は、「……どの位」って、山と田地が少しあるぎり、金なんかまるで無いんでしょう」と答えるのであった。ここまでは、ふつうの会話ではあるが、しかし、「……先生が私の家の経済について、問いらしい問いを掛けたのはこれが始めてであつた」とともに、一方、「私」の方でも、「……まだ先生の暮し向きに関して、何も聞いた事がなかつた。先生と知り合いになつた始め、私は先生がどうして遊んでいられるかを疑つた。その後もこの疑いは絶えず私の胸を去らなかつた。しかし私はそんな露骨な問題を先生の前に持ち出すのをぶしつけとばかり思つて何時でも控えていた」が、ついに、「……先生はどうなんです。どの位の財産をもつていらつしやるんですか」と問うのであった。——もちろん、これは、いわば「前振り」に過ぎないのであるが、しかし、その「財産」をめぐる「問題」からこそ、先生は、今日のような先生になつてしまつた「大きな要因」の一つがあるのである。……先生は、「……私は財産家と見えますか」と聞くのであった。

四六、財産の話をする(二十七) 其の二

先生は平生から寧ろ質素な服装をしていた。それに家内は小人数であつた。従つて住宅も決して広くはなかつた。けれどもその生活の物質的に豊かな事は、内輪に這入り込まない私の眼にさえ明らかであつた。要するに先生の暮しは贅沢と言えないまでも、あたじけなく(けちけちと)切り詰めた無弾力性のもではなかつた。「……そうでしょう」と私が言つた。「……そりゃその位の金はあるさ、けれども決して財産家じゃありません。財産家ならもつと大きな家でも造るさ」、この時先生は起き上つて、縁台の上に胡坐をかいていたが、こう言い終ると、竹の杖の先で地面の上へ円のようなものを描き始めた。それが済むと、今度はステッキを突き刺すように真直に立てた。「……これでも元は財産家なんだがなあ」、先生の言葉は半分独言のようであつた。それですぐ後に尾いて行き損なつた私は、つい黙っていた。「……これでも元は財産家なんですよ、君」と言い直した先生は、次に私の顔を見て微笑した。私はそれでも何とも答えなかつた。むしろ不調法で答えられなかつたのである。すると、先生がまた問題を他へ移した。(本文)

*

*

さて、「……先生は平生から寧ろ質素な服装をしていた。それに家内は小人数であつた。従つて住宅も決して広くはなかつた。けれどもその生活の物質的に豊かな事は、内輪に這入り込まない私の眼にさえ明らかであつた。要するに先生の暮しは贅沢と言えないまでも、けちけちと切り詰めた無弾力性のもではなかつた」のである。「……そうでしょう」と

私が言った。「……そりやその位の金はあるさ、けれども決して財産家じゃありません。財産家ならもつと大きな家でも造るさ」となるが、大事なのは、この次であり、この時、先生は起き上つて、縁台の上に胡坐をかいていたが、こう言い終ると、竹の杖の先で地面の上へ円のようなものを描き始めた。それが済むと、今度はステッキを突き刺すように真直に立てた。「……これでも元は財産家なんだがなあ」と、先生の言葉は半分独言のようであった。それですぐ後に尾いて行き損なつた私は、つい黙っていた。「……これでも元は財産家なんですよ、君」と言い直した先生は、次に私の顔を見て微笑したとある。——さて、「……竹の杖の先で地面の上へ円のようなものを描き始めた。それが済むと、今度はステッキを突き刺すように真直に立てた」とあるが、これは、まさに「過去」を思い出しては、その「怒りや恨み」などで興奮している、「心の状態」から生じている「行為」になるのである。そして、「……これでも元は財産家なんだがなあ」と、先生の言葉は半分独言のように言い、そして、再び、「……これでも元は財産家なんですよ、君」と言い直した先生は、次に私の顔を見て微笑したとあるが、——これは、元々は、まさに「財産家」であつたのである。ところが、その「財産」の多くを「人に欺し取られてしまう」のである。だからこそ、「先生」という人は、「財産」の話になると、その「過去」のことを思い出しては、今でも、その「怒りや恨み」などで興奮してしまうのである。そこで、「……先生はまた問題を他へ移したとなる」のである。

四六、財産の話をする（二十七）其の三

先生は、「……あなたのお父さんの病気はその後どうなりました」と聞く。私は父の病気について正月以後何にも知らなかつた。月々国から送ってくれる為替と共に来る簡単な手紙は、例の通り父の手蹟であつたが、病気の訴えはそのうちに殆ど見当らなかつた。その上書体も確かであつた。この種の病人に見る顫えが少しも筆の運びを乱してはなかつた。「……何とも言つて来ませんが、もう好いんでしよう」、「……好ければ結構だが、——病症が病症だからね」、「……やっぱ駄目ですかね。でも当分は持ち合つてるんでしよう。何とも言つて来ませんよ」、「……そうですか」と言うのであつた。私は先生が私のうちの財産を聞いたり、私の父の病気を尋ねたりするのを、普通の談話——胸に浮かんだままをその通り口にする、普通の談話と思つて聞いていた。ところが先生の言葉の底には両方を結び付ける大きな意味があつた。先生自身の経験を持たない私は無論そこに気が付くはずがなかつた。（本文）

*

*

さて、今度は、「父の病気」の問題になるが、先生は、「……あなたのお父さんの病気はその後どうなりました」と聞く。私は父の病気について正月以後何にも知らなかつた。月々国から送ってくれる「為替」（現金書留）と共に来る簡単な手紙は、例の通り父の手蹟であつたが、病気の訴えはそのうちに殆ど見当らなかつた。（これは、本人だからこそ余計な心配をかけまいと何も書かないのであり、母親であれば、もつといろいろと細かなことを書いて来たかも知れない）。その上書体も確かであつた。この種の病人に見る顫えが少しも筆の運びを乱してはなかつた。（だとすれば、手の震えは、まだないのだらう）。「……何とも言つて来ませんが、もう好いんでしよう」とあるが、（これは、余りに暢気な言

葉であり)、一方、先生は、「……好ければ結構だが、——病症が病症なんだからね」という根拠は、(妻の「母親」の「腎臓病」を実際に見てきた経験があるからである)。すると、「私」という人は、「……やっぱ、駄目ですかね。でも当分は持ち合ってるんですよ。何とも言つて来ませんよ」とあるが、これは、「父の病氣」は「もう治らない」とは覚悟しているが、しかし、まだ「しばらくは大丈夫だろう」と見ているのである。……先生は、「……そうですか」と言うだけであった。

ところで、私は、「……先生が私のうちの財産を聞いたり、私の父の病気を尋ねたりするのを、普通の談話——胸に浮かんだままをその通り口にする、普通の談話と思つて聞いていた。ところが先生の言葉の底には両方を結び付ける大きな意味があった。先生自身の経験を持たない私は無論そこに気が付くはずがなかった」とある。——これは、第三部(先生と遺言)を読めば、詳細に書き記されているので、ここではごく簡単に説明をすると、一人息子の「先生」がまだ中学生の終わりの頃、突然、父も母も「腸チフス」の病気でほぼ同時に亡くなつてしまふのである。そこで、「父親」が遺した実家の旧家の「財産管理」は、親戚の「叔父」(父親の実の弟)にすべてを任せて、「先生」は、東京の「高等学校」に入学することになるのである。そして、夏休みだけは「実家」に戻り、あとは、ずっと「東京」で暮らすような生活をしてきたが、その「高校三年間」の間に、その実家の旧家の「財産」の多くを親戚の「叔父」(父親の実の弟)にまさに「欺し取られてしまふ」のである。そのような絶対に許せない苦々しい「経験」(つまり「生々しい実体験」)があればこそ、先生は、次のようなことを何度も「私」に対して言つたり、また、聞いたりしているのである。

四七、人はいざという間に悪人になる(二十八) 其の一

先生は、「……君のうちに財産があるなら、今のうちによく始末をつけてもらつておかないといけないと思うがね、余計なお世話だけれども。君のお父さんが達者なうちに、貰うものはちゃんと貰つておくようにしたらどうですか。万一の事があつたあとで、一番面倒の起るのは財産の問題だから」と言うので、「ええ」と、私は先生の言葉に大した注意を払わなかつた。私の家庭でそんな心配をしていないもの、私に限らず、父にしろ母にしる、一人もないと私は信じていた。その上先生の言う事の、先生として、あまりに実際的なのに私は少し驚かされた。しかしそこは年長者に対する平生の敬意が私を無口にした。

「……あなたのお父さんが亡くなられるのを、今から予想して掛かるような言葉遣いをするのが気に触つたら許してくれたまえ。しかし人間は死ぬものだからね。どんなに達者なものでも、いつ死ぬか分らないものだからね」と、先生の口気は珍らしく苦々しかった。

「……そんな事をちつとも気に掛けちゃいけません」と私は弁解した。(本文)

* * *

さて、いよいよ「核心部分」に迫つて来ましたが、先生は、「……君のうちに財産があるなら、今のうちによく始末をつけてもらつておかないといけないと思うがね、余計なお世話だけれども。君のお父さんが達者なうちに、貰うものはちゃんと貰つておくようにしたらどうですか。万一の事があつたあとで、一番面倒の起るのは財産の問題だから」と言うので、「ええ」と、私は先生の言葉に大した注意を払わなかつた。私の家庭でそんな心

配をしているものは、私に限らず、父にしろ母にしろ、一人もないと私は信じていた。その上先生のいう事の、先生として、あまりに実地的なのに、私は少し驚かされたのである。

つまり、「私」という、まだ「若い人」ととって、いわば尊敬する「先生」という人が、なぜ、どうしてこのような「財産の問題」などにここまで執拗にこだわり尋ねて来るのか、その「真意」が全く分かり兼ねているのである。一方、「先生」としては、自分と「同じような経験」をこの若者に絶対にさせたくないという、その「一念」（深い想い）からであり、それは、次のようなことである。——つまり、まだ若い「私」という人は、「……私は先生の言葉に大した注意を払わなかった。私の家庭でそんな心配をしているものは、私に限らず、父にしろ母にしろ、一人もないと私は信じていた」とある。つまり、「財産問題」などで「家族や親戚」などがまさに「骨肉の争い」などを起こすことなど絶対にあり得ないと固く信じ切っているのである。それは、「それでよい」のである。問題は、絶対により得ないと固く信じ切っていた、その「家族や親戚」などに「裏切られた時」のことを、「先生」という人は、心の底から心配しているのである。なぜなら、「先生」自身、絶対にあり得ないと固く信じ切っていた、その親戚の「叔父」（父親の実の弟）にその実家の旧家の「財産」の多くをまさに「欺し取られてしまった」からである。その結果、その親戚の「叔父」（父親の実の弟）を一生涯恨み続けなければならぬという「重荷」を背負わされたとともに、そのような絶対に許せない苦々しい「経験」（つまり「生々しい実体験」）からこそ、やがて、「先生」という人は、「人間嫌い」や「人間不信」などになつて行く。「大きな要因」の一つになつていのである。もちろん、それだけではなく、もう一つの極めて「大きな要因」があつて、それらがまさに「今のような先生にしている」要因であるが、それは、次の機会に説明をするとして、一方、「私」という人は、「……そんな事をちつとも気に掛けちゃいけません」と、弁解するのであつた。

四七、人はいざという間に急に悪人になる（二十八）其の二

先生は、「……君の兄弟は何人でしたかね」と聞いた。その上に、私の家族の人数を聞いた。親類の有無を尋ねたり、叔父や叔母の様子を問うなどした。そうして最後にこう言つた。「……みんな善い人ですか」、「……別に悪い人間という程のものもないようです。大抵田舎者ですから」、「……田舎者はなぜ悪くないんですか」、——私はこの追窮に苦しんだ。しかし先生は私に返事を考えさせる余裕さえ与えなかった。「……田舎者は都会のものより、却つて悪い位なものです。それから、君は今、君の親戚などの中に、これと言つて、悪い人間はいないようだとおっしゃいましたね。しかし悪い人間という一種の人間が世の中にあると君は思っているんですか。そんな鑄型に入れたような悪人は世の中にある筈がありませんよ。平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざという間に、急に悪人になるんだから恐ろしいのです。だから油断が出来ないんです」（本文）

*

*

さて、夏目漱石の『こころ』という作品のなかで、最も「有名な文章（せりふ）」の一つが、まさにこの「場面」で登場して来るが、それは、次のようなものである。——まず、先生は、「……君の兄弟は何人でしたかね」と聞いた。その上に、私の家族の人数を聞いて

たり、親類の有無を尋ねたり、叔父や叔母の様子を問いただした」とある。これは、もちろん、どのような「可能性」があるのかを見ているのである。——例えば、まず、「父親」が亡くなれば、残された「母親」と「三人兄弟」（兄と私と妹）で、その家の「財産」の「分配」を行なうことになるかと思う、その場合、「私」という人は、「……山と田地が少しあるぎり、金なんかまるで無いんでしよう」と言っていた。もちろん、「家」は、母親が受け継ぐことになるだろうが、その他、例えば、その「山や田地」などは誰が「遺産分け」として受け継ぐのかという問題が生じるかも知れない。また、数多くの親戚や叔父や叔母などがあるとして、この「家」の「遺産分け」などにどのように関わって来るのかは分からないが、とにかく、そのような「可能性」を見ているのである。

そして、「先生」は、終に「その言葉」を発するのである。それは、「……みんな善い人ですか」と聞くと、「私」という人は、「……別に悪い人間という程のものでもないよです。大抵田舎者ですから」と答える。すると、先生は、「……田舎者はなぜ悪くないんですか」と聞く。——私はこの追窮に苦しんだ。しかし先生は私に返事を考えさせる余裕さえ与えなかった。「……田舎者は都会のものより、却って悪い位なものです。それから、君は今、君の親戚なぞの中に、これと言って、悪い人間はいないようだと思います。しかし悪い人間という一種の人間が世の中にあると君は思っているんですか。そんな鑄型に入れたような悪人は世の中にある筈がありませんよ。平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざという間に、急に悪人になるんです。少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざという間に、急に悪人になるんだから恐ろしいのです。だから油断が出来ないんです」という「言葉」である。

例えば、「夏目漱石」という人は、生後すぐに四谷の古道具屋（一説に八百屋）に「里子」に出されるが、姉が不憫に思い、実家へ連れ戻される。そして、一歳の時、今度は、父親の友人であった塩原家のところへ「養子」に出されるが、義父の「女性問題」から「家庭不和」となり、七歳の時、養母とともに一時生家に戻る。そして、九歳の時、「養父母」の離婚により、生家に戻るようになるが、養父と実父との対立は続き、「塩原」から「夏目家」への復籍は、二十一歳の時になるのである。

その後、「夏目漱石」が有名な「作家」になると、今度は、金銭に困っていたその「義父」（塩原昌之助）という人は、有名になった「夏目漱石」の家にその姿をたびたび現わしては、毎回、お金の「無心」をするようになるのである。そのために、「夏目漱石」という人は、そのことで非常に「悩み苦しむ」ことにもなるのであるが、そのような「経験」（実体験）が実際にあるのであり、そのようなことも「このような言葉」の中には反映されているのである。

それはともかく、ここでの最も「重要な言葉」は、「……平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざという間に、急に悪人になるんだ

から恐ろしいのです。だから油断が出来ないんです」ということである。そして、この「言葉」が「先生」の「頭の中」(或いは「心の中」)に生じて来た「最大の理由」の一つが、まさに「先生」自身、絶対にあり得ないと固く信じ切っていた、その親戚の「叔父」(父親の弟)にその実家の旧家の「財産」の多くをまさに「欺し取られてしまった」ということである。その結果、その親戚の「叔父」(父親の弟)を一生涯恨み続けなければならぬという「重荷」を背負わされたとともに、そのような絶対に許せない苦々しい「経験」(つまり「生々しい実体験」)からこそ、やがて、「先生」という人は、「人間嫌い」や「人間不信」などになって行く「大きな要因」の一つになっているのである。もちろん、「先生」にはもう一つの「決定的な要因」があるのであるが、それは、第三部の「先生と遺書」のところで詳しく述べたいと思うので、ここでは先へと進みたいと思う。

*

*

四八、犬と子供の突然の出現

四八、犬と子供の突然の出現（二十八）

先生の言う事は、ここで切れる様子もなかった。私はまたここで何か言おうとした。すると後ろの方で犬が急に吠え出した。先生も私も驚いて後ろを振り返った。

縁台の横から後部へ掛けて植え付けてある杉苗の傍に、熊笹が三坪ほど地を隠すように茂って生えていた。犬はその顔と背を熊笹の上に現わして、盛んに吠え立てた。そこへ十ぐらいの小供が馳けて来て犬を叱り付けた。小供は徽章の着いた黒い帽子を被ったまま先生の前へ廻って礼をした。「……叔父さん、這入って来る時、家に誰もいなかったかい」と聞いた。「……誰もいなかったよ」、「……姉さんやおつかさんが勝手の方に居たのに」、「……そうか、居たのかい」、「……ああ。叔父さん、今日はって、断って這入って来ると好かったのに」、先生は苦笑した。懐中から褄口を出して、五銭の白銅を小供の手に握らせた。「……おつかさんにそう言ってくれ。少しここで休まして下さいって、——小供は伶俐そうな眼に笑いを漲らして、首肯いて見せた。「……今斥候長になつてるところなんだよ」、小供はこう断って、躑躅の間を下の方へ駈け下りて行った。犬も尻尾を高く巻いて小供の後を追い掛けた。しばらくすると同じぐらいの年格好の小供が二、三人、これも斥候長の下りて行った方へ駈けて行った。（本文）

*

*

さて、「……後ろの方で犬が急に吠え出した。先生も私も驚いて後ろを振り返った」とある。これは、今までの先生と私との「会話」を一度中断させるような展開になつてゐる。それでは、なぜ、二人の「会話」を一度中断させるような展開が必要になるのだろうか。むろん、それには様々な「理由」が考えられるかと思うが、まず、考えられることは、二人の「会話」がずっと続いているために、今、二人はどのような「風景の場所」でどのような状況で話をしているのかが分かり難くなつてゐる。そこで、一度、二人だけの「会話の世界」から、「現実の世界」へと引き戻してゐるのである。——例えば、犬が急に吠え出すとか、また、突然、雨が降り出すとか、その他、そのような「変化の描写」を書き加えることによつて、二人が居る、その「現場の状況」がより生々しい「真実味」を以つて再び見えて来るのである。それが、まさに次のような「描写」になるのである。

つまり、「……後ろの方で犬が急に吠え出した。先生も私も驚いて後ろを振り返った。すると、縁台の横から後部へ掛けて植え付けてある杉の苗の傍に、熊笹が三坪ほど地を隠すように茂って生えていた。犬は、その顔と背を熊笹の上に現わして、盛んに吠え立てた。そこへ十ぐらいの小供が馳けて来て犬を叱り付けた。小供は徽章の着いた黒い帽子を被ったまま先生の前へ廻って礼をした。「……叔父さん、這入って来る時、家に誰もいなかったかい」と聞いた。「……誰もいなかったよ」、「……姉さんやおつかさんが勝手の方に居たのに」、「……そうか、居たのかい」、「……ああ。叔父さん、今日はって、断って這入って来ると好かったのに」、先生は苦笑した。懐中から褄口を出して、五銭の白銅を小供の手に握らせた。「……おつかさんにそう言ってくれ。少しここで休まして下さいって、——小供は伶俐そうな眼に笑いを漲らして、首肯いて見せた。「……今斥候長（偵察部隊の隊長）になつてるところなんだよ」と言う。（これは、怪しい二人が何々園の中に侵入したので、子供たちの間でお前が行つて《或いは自分が行つて》話を聞いて来るといふことので出て来たのである）。小供はこう断って、躑躅の間を下の方へ駈け下りて行った。

犬も尻尾を高く巻いて小供の後を追い掛けた。しばらくすると同じくらしい年格好の小供が二、三人、これも斥候長の下りて行った方へ駆けて行った、となるのである。

そして、もう一つの「大きな理由」は、一気に「最後の結末」まで行くのではなく、一度、中断して、再び、「最後の結末」の方へと向かうという手法の方が、より強い「鮮明な衝撃」を与えることができ得るからである。それが、次からの「言葉」になるのである。

四九、犬と子供の去った後のこと（二十九）

先生の談話は、この犬と小供のために、結末まで進行する事が出来なくなったので、私はずいぶんその要領を得ないでしまった。先生の気にする財産云々の掛念はその時の私には全くなかった。私の性質として、また私の境遇から言って、その時の私には、そんな利害の念に頭を悩ます余地がなかったのである。考えるとこれは私がまだ世間に出ないためでもあり、また実際その場に臨まないためでもあつたらうが、とにかく若い私にはなぜか金の問題が遠くの方に見えた。

先生の話のうちでただ一つ底まで聞きたかつたのは、人間がいざという間に、誰でも悪人になるという言葉の意味であつた。単なる言葉としては、これだけでも私に解らない事はなかつた。しかし私はこの句についてもつと知りたかつた。

犬と小供が去つたあと、広い若葉の園は再び故の静かさに歸つた。そうして我々は沈黙に鎖ざされた人の様にしばらく動かずにいた。うるわしい空の色がその時次第に光を失つて来た。眼の前にある樹は大概楓であつたが、その枝に滴るように吹いた軽い緑の若葉が、段々暗くなつて行くように思われた。遠い往來を荷車を引いて行く響きがごろごろと聞こえた。私はそれを村の男が植木か何かを載せて縁日へでも出掛けるものと想像した。先生はその音を聞くと、急に瞑想から呼吸を吹き返した人のように立ち上がった。(本文)

* * *

さて、ここで最も「大事な言葉」は、「……先生の話のうちでただ一つ底まで聞きたかつたのは、人間がいざという間に、誰でも悪人になるという『言葉の意味』(その真意)であつた。単なる言葉としては、これだけでも私に解らない事はなかつた。しかし私はこの句についてもつと知りたかつた」というこの部分である。——これは、読者も全く「同じ心理」に置かれていたのである。ところが、再び、周りの風景やその様子の描写などになつて行く。なぜ、すぐに「本題」に入らないのか？ それはもちろん、いわば「読者を焦らす」ということでもあるが、それ以上に大事なことは、一方の「私」という人は、「……人間がいざという間に、誰でも悪人になるという『言葉の意味』(その真意)を底まで聞きたかつた」と今もそう強く思っているが、一方の「先生」の方は、犬と子供の突然の出現によつて、あれほど興奮して「財産」のことについて語っていた先生の「心の状態」は、今は本来の「心の静けさ」を取り戻しているのである。だからこそ、次のような言葉になつて行くのである。

五十、やがて二人は植木屋を出て行く(二十九)

先生は、「……もう、除々そろそろ帰りましょう。大分だいぶ日が永くなつたようだが、やっぱりこう安閑あんかんとしているうちには、何時いつの間にか暮れて行くんだね」、先生の背中には、さつき縁台えんたいの上に仰向あおむきに寝た痕あとがいつぱい着いていた。私は両手でそれを払い落した。「……ありがとう。脂やにがこびり着いてやしませんか」と聞くので、「……綺麗きれいに落ちました」と言うと、「……この羽織うゑはつい此間こゝ拵だてしらえたばかりなんだよ。だから無闇むやみに汚して帰ると、妻さいに叱しかられるからね。有難ありがたう」と言い、二人はまただから坂さかの中途ちゆうとにある家の前まへへ来た。這入はいる時には誰もいる気色けしきの見えなかつた縁側えんがわに、お上かみさんが、十五、六の娘むすめを相手に、糸巻いとまきへ糸いとを巻き付けていた。二人は大きな金魚鉢ぼちの横よこから、「……どうもお邪魔じやまをしました」と挨拶あいさつした。お上かみさんは、「……いいえお構かまい申しも致いたしませんで」と礼れいを返かへした後あと、先刻さうき小供こどもに遣やつた白銅はくどうの札しやくを述べた。(本文)、――さて、これで、「何々園なにげん」(植木屋うゑきや)の場面は終了して、いよいよ「核心部分かくしんぶぶん」そのものへと入って行くのである。

*

*

五一、人間は誰だれでもいざという間際まぎわに急に悪人になる

五一、人間は誰でもいざという間際に急に悪人に変わる(二十九)

門口を出て二、三町来た時、私はついに先生に向かって口を切った。「……さきほど先生の言われた、人間は誰でもいざという間際に悪人になるんだという意味ですね。あれはどういう意味ですか」、「……意味と言って、深い意味ありません。——つまり事実なんですよ。理屈じゃないんだ」、「……事実で差支えありませんが、私の伺いたいのは、いざという間際という意味なんです。一体どんな場合を指すのですか」、先生は笑い出した。あたかも時機の過ぎた今、もう熱心に説明する張合いがないと言った風に。「……金さ君。金を見ると、どんな君子でもすぐ悪人になるのさ」、私には先生の返事があまりに平凡過ぎて詰まらなかつた。先生が調子に乗らないごとく、私も拍子抜けの気味であつた。私は澄ましてさつさと歩き出した。いきおい先生は少し後れがちになつた。先生はあとから「おいおい」と声を掛けた。「……そら見たまえ」、「……何をですか」、「……君の気分だつて、私の返事一つですぐ変わるじゃないか」、待ち合わせるために振り向いて立ち留まつた私の顔を見て、先生はこう言つた。(本文)

* さて、「何々園」(植木屋)の門口を出て、一、三町(二町は約一〇九メートル)来た時、私はついに先生に向かって口を切った。「……さきほど先生の言われた、人間は誰でもいざという間際に悪人になるんだという意味ですね。あれはどういう意味ですか」と聞くと、先生は、「……意味と言って、深い意味ありません。——つまり事実なんですよ。理屈じゃないんだ」と言うのであつた。——この「……意味と言って、深い意味ありません。——つまり事実なんですよ。理屈じゃないんだ」というのは、一体、どういう「意味合い」になるのかと敢えて問えば、それは、例えば、「……われわれ人間は、誰でも、遅かれ早かれ、やがては死ぬものだ。これは、理屈じゃないんだ、つまり事実なんですよ」という、そういう「意味合い」を含むものになるのである。

それでは、なぜ、「……人間は誰でもいざという間際に悪人になるんだ」と言い切れるのか？ それが「最大の問題」になるが、それは、次のようなことである。——つまり、この「悪人」という「言葉」を、どのように「解釈」するかについてはかかつているのである。つまり、この「悪人」という「言葉」は、すなわち、「悪い心」になるということであり、これは、ほぼ「百%」近くそうなるということであるが、しかし、その「悪い心」になつた時に、その「悪い心」のままに実際に行動(言動)してしまう場合と、その「悪い心」に襲われながらも、その「悪い心」のままに実際に行動(言動)しない場合とがある、その「悪い心」になるのである。——つまり、「……人間は誰でもいざという間際に悪人(悪い心)になるものであるが、しかし、その「悪い心」になつた時に、その「悪い心」のままに実際に行動(言動)してしまう場合と、その「悪い心」のままに襲われながらも、その「悪い心」に襲われながらも、その「悪い心」のままに実際に行動(言動)しない場合とがあるということになる」のである。

* 例えば、太宰治の『走れメロス』の場合、メロスは、町へと走って戻る途中、一度だけ、親友を裏切るような想い(悪い心)に襲われてしまう。また、人質になつていた「親友」も、一度だけ、メロスを疑う「気持ち」(悪い心)に襲われてしまう。一方、暴君(ディオニス)は、人間が信じられないという想い(悪い心)に襲われて、疑わしい人間は、次

から次へと容赦なく肅正していたのである。つまり、三人が三人とも、いざという間際に（つまり何か追い詰められたような状況に置かれた時に）、みんな悪人（悪い心）になっているのである。しかし、メロスの場合は、その「悪人」（悪い心）に襲われながらも、その想い（悪い心）を振り切つて、最後まで走り続けるのである。一方、暴君（ディオニス）の場合は、人間が信じられないという想い（悪い心）に襲われた時に、そのまま「悪人」（悪い心）のままに、実際に、疑わしい人間は、次から次へと容赦なく肅正していたのである。つまり、「……人間というのは誰でもいざという間際に（つまり何か追い詰められたような状況に置かれた時には）誰でも悪人（悪い心）になってしまうものであるが、しかし、その「悪い心」になった時に、その「悪い心」のままに実際に行動（言動）してしまう場合と、その「悪い心」に襲われながらも、その「悪い心」のままに実際に行動（言動）しない場合とがあるということである。

*

*

さて、「私」という人は、「……事実で差支えありませんが、私の伺いたいのは、いざという間際という意味なんです。一体どんな場合を指すのですか」と聞くと、先生は、笑い出した。あたかも時機の過ぎた今、もう熱心に説明する張合いがないといった風に。そして、「……金さ君。金を見ると、どんな君子でもすぐ悪人になるのさ」と答えるのであった。私には先生の返事があまりに平凡過ぎて詰まらなかった。先生が調子に乗らないごとく、私も拍子抜けの気味であつたとある。

さて、「先生」という人は、「……金さ君。金を見ると、どんな君子でもすぐ悪人になるのさ」と答えるのであった。もちろん、これは、まだ中学生であつた「先生」が、父親も母親も心から信頼していたので、「先生」自身も、そのまま信じ切つていた、その親戚の「叔父」（父親の実の弟）にその実家の旧家の恐らく何億何十億という「財産」の多くをまさに「欺し取られてしまった」という、そのような絶対に許せない苦々しい「経験」（つまり「生々しい実体験」）があつて、その「経験」（つまり「生々しい実体験」）からこそ、まさに生じて来た「金さ君」という言葉（想い）になるのである。

例えば、道ばたに「大金」が落ちていれば、誰でも「お金」はほしいわけだから、人が見ていなければ、それを「ねこばば」したい気持ち（衝動）に襲われたとしても、それを責めることは出来ないだろう。ただ「問題」なのは、その「ねこばば」したいという気持ち（衝動）のままに実際に「ねこばば」をしてしまう場合と、「ねこばば」したい気持ちは、山々だけれども、それを「交番」（警察）に届け出る場合とがあるかと思う。——つまり、誰でも「お金」はほしいわけだから、人が見ていなければ、それを「ねこばば」したい「気持ち」（衝動）、つまり、誰でも「悪人」（悪い心）に襲われてしまうものであるが、しかし、その「悪い心」に襲われた時に、その「悪い心」のままに実際に行動（言動）してしまう場合と、その「悪い心」に襲われながらも、その「悪い心」のままに実際に行動（言動）しない場合とがあるということである。

それでは、どういう時に、その「悪い心」に襲われた時に、その「悪い心」のままに実際に行動（言動）してしまうのかと問えば、それが、まさに「いざという間際に」（つまり「何かに追い詰められたような状況に置かれた時に」）、誰でも悪人（悪い心）のままに実際に行動（言動）してしまう傾向があるのである。——それが、すなわち、「先生」が言う、「……君は今、君の親戚なぞの中に、これと言って、悪い人間はいないようだ

言いましたね。しかし悪い人間という一種の人間が世の中にあると君は思っているんですか。そんな鑄型いかにに入れたような悪人は世の中にあるはずがありませんよ。平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざという間際まぎわに（それは『何かに追い詰められたような状況に置かれた時に』、急に悪人になるんだから恐ろしいのです。だから油断が出来ないんです」という言葉の、まさに「真意」になるかと思う。

*

*

さて、「私」という人は、先生の返事があまりに平凡過ぎて詰つままらなかつた。先生が調子に乗らないごとく、私も拍子抜けの気味であつた。それゆえ、（不満を抱きながら）、私は澄ましてさつさと歩き出した。いきおい先生は少し後おくれがちになつた。先生はあとから「おいおい」と声を掛けた。「……そら見たまえ」、「……何をですか」、「……君の気分だつて、私の返事一つ（期待したような返事でなかつたの）で、すぐ変る（不満を抱いている）じゃないか」と、待ち合わせるために振り向いて立ち留どまつた私の顔を見て、先生はこう言つた、となるのである。

つまり、われわれ人間というのは、その人の置かれたその時々、状況に依つて、その人の「よい面」が現われたり、逆に、「悪い面」が現われたり、或いは、何かわけのわからない面が現われたりすることである、つまり、よい人は、いつも「よい人」であり、そして、悪い人は、いつも「悪い人」というようなことではなく、その人の置かれたその時々、状況に依つて、その人の「よい面」が現われたり、また、逆に、その人の「悪い面」が現われたり、あるいは、何かとんでもない面が現われたりすることである。

つまり、あるがままの「生身の人間」というのは、自分でも自分がいつ何を言い出すか、また、何をしでかすかまかつた分らないものである。このことは、徹底的に考えてみる必要があり、われわれは、どうしてもあの人は、ああいう人、自分はこういう人間と考へやすいものであるが、しかし、そういう固定化した存在では決してなく、むしろいつ何を言い出すか、また、何をしでかすかまかつた分らない、そういうまさにどろどろとした得体の知れない存在なのである。

五二、先生は、さつき少し興奮しましたね（三十）

その時の私は腹の中で先生を憎らしく思つた。肩を並べて歩き出してからも、自分の聞きたい事をわざと聞かずにいた。しかし先生の方では、それに気が付いていたのか、いないのか、まるで私の態度に拘泥こだわる様子を見せなかつた。いつもの通り沈黙がちに落ち付き払つた歩調をすまして運んで行くので、私は少し業腹しょうはらになつた。何とか言つて一つ先生をやつ付けてみたくなって来た。——「先生」、「何ですか」、「……先生はさつき少し興奮なさいましたね。あの植木屋の庭で休んでいる時に。私は先生の昂奮こうふんしたのを滅多めったに見た事がないんですが、今日は珍らしいところを拝見したような気がします」。

先生はすぐ返事をしなかつた。私はそれを手応えのあつたようにも思つた。また的外まじれたようにも感じた。仕方がないから後は言わないう事にした。すると先生がいきなり道の端へ寄つて行つた。そうして綺麗きれいに刈り込んだ生垣いけがきの下で、裾すそをまくつて小便をした。私は先生が用を足す間あいだぼんやりそこに立つていた。「やあ失敬」、——先生はこう言つてまた歩き出した。私はどうとう先生をやり込める事を断念した。私達の通る道は段々賑にぎやかに

なつた。今までちらほらと見えた広い畠の斜面や平地が、全く眼に入らないように左右の家並が揃つて来た。それでも所々宅地の隅などに、豌豆の蔓を竹に絡ませたり、金網で鶏を囲い飼いにしたりするのが閑静に眺められた。市中から帰る駄馬が仕切りなく擦れ違つて行つた。こんなものに始終気を奪られがちな私は、さつきまで胸の中にあつた問題をどこかへ振り落してしまつた。先生が突然そこへ後戻りをした時、私は実際それを忘れていた。(本文)

*

*

さて、「私」という人は、「……事実で差支えありませんが、私の伺いたいのには、いざという間際という意味なんです。一体どんな場合を指すのですか」と聞くと、先生は、笑い出した。あたかも時機の過ぎた今、もう熱心に説明する張合いがないといった風に。そして、「……金さ君。金を見ると、どんな君子でもすぐ悪人になるのさ」と答えるのであつた。(先生は本気で答えているのであるが)、私には先生の返事があまりに平凡過ぎて詰まらなかつた。先生が調子に乗らないごとく、私も拍子抜けの気味になつて、不満の気持ちが残つてしまつた。そこで、「私」という人は、何とか言つて一つ先生をやつ付けてみたくなつて来た。——「先生」、「何ですか」、「……先生はさつき少し昂奮なさいましたね。あの植木屋の庭で休んでいる時に。私は先生の昂奮したのを滅多に見た事がないんです、今日は珍らしいところを拝見したような気がします」と言うのであつた。

すると、先生は、「……すぐ(には)返事をしなかつた。私はそれを手応えのあつたようにも思つた。また的が外れたようにも感じた。仕方がないから後は言わない事にした。すると先生がいきなり道の端へ寄つて行つた。そうして綺麗に刈り込んだ生垣の下で、裾をまくつて小便をした。私は先生が用を足す間ぼんやりそこに立っていた。「やあ失敬」、——先生はこう言つてまた歩き出した。私はどうとう先生をやり込める事を断念した。私たちの通る道は段々賑やかになつた。今までちらほらと見えた広い畠の斜面や平地が、全く眼に入らないように左右の家並が揃つて来た。それでも所々宅地の隅などに、豌豆の蔓を竹に絡ませたり、金網で鶏を囲い飼いにしたりするのが閑静に眺められた。市中から帰る駄馬が仕切りなく擦れ違つて行つた。こんなものに始終気を奪られがちな私は、さつきまで胸の中にあつた問題をどこかへ振り落してしまつた。先生が突然そこへ後戻りをした時、私は実際それを忘れていたとある。——これは、一体、どのような「意味合い」のものになるのかと問えば、それは、段々と賑やかになる方向(町中)へと向かつて、二人が道を歩いている間じゆう、「先生」という人は、ずつと、「……先生はさつき少し昂奮なさいましたね。あの植木屋の庭で休んでいる時に。私は先生の昂奮したのを滅多に見た事がないんですが、今日は珍らしいところを拝見したような気がします」という、「言葉」を、先生は「頭の中」(或いは「心の中」)で何度も何度も繰り返しながらずつと「考えていた」ということである。

五三、私は他に欺かれたのです(三十)

先生は、突然、「……私は先刻そんなに昂奮したように見えませんか」、「……そんなにと言う程でもありませんが、少し……」、「……いや見えても構わない。実際昂奮するんだから。私は財産の事を言うときつと昂奮するんです。君にはどう見えるか知らないが、

私はこれで大変執念深い男なんだから。人から受けた屈辱や損害は、十年立つても二十年立つても忘れやしないんだから」と言うのであった。

先生の言葉は元よりもなお昂奮していた。しかし私の驚いたのは、決してその調子ではなかった。むしろ先生の言葉が私の耳に訴える意味そのものであった。先生の口からこんな告白を聞くのは、いかな私にも全くの意外に相違なかった。私は先生の性質の特色として、こんな執着力を未だ嘗て想像した事さえなかった。私は先生をもっと弱い人と信じていた。そうしてその弱くて高い処に、私の懐かしの根を置いていた。一時の気分が先生にちよつと盾を突いて見ようとした私は、この言葉の前に小さくなった。先生はこう言った。

「……私は他に欺かれたのです。しかも血のつづいた親戚のものから欺かれたのです。私は決してそれを忘れないのです。私の父の前には善人であつたらしい彼等は、父の死ぬや否や許しがたい不徳義漢に変わったのです。私は彼等から受けた屈辱と損害を小供の時から今日まで背負わされている。恐らく死ぬまで背負われ通しでしょう。私は死ぬまでそれを忘れる事が出来ないんだから。しかし私はまだ復讐をせずにいる。考えると私は個人に対する復讐以上の事を現にやっているんだ。私は彼等を憎むばかりじゃない、彼等が代表している人間というものを、一般に憎む事を覚えたのだ。私はそれで沢山だと思ふ」、私は慰藉の言葉さえ口へ出せなかった。(本文)

さて、先生は、「……私は先刻そんなに昂奮したように見えませんか」、「……そんなにと言う程でもありませんが、少し……」、「……いや見えても構わない。実際昂奮するんだから。私は財産の事を言うときつと昂奮するんです。君にはどう見えるか知らないが、私はこれで大変執念深い男なんだから。人から受けた屈辱や損害は、十年立つても二十年立つても忘れやしないんだから」とある。——これは、つまり、「先生」が受けた「心の傷」がいかに「深いもの」であつたかを極めて如実に物語っているものである。

さて、「私」という人は、「……先生の言葉は元よりもなお昂奮していた。しかし私の驚いたのは、決してその調子ではなかった。むしろ先生の言葉が私の耳に訴える意味そのものであった。先生の口からこんな告白を聞くのは、いかな私にも全くの意外に相違なかった。私は先生の性質の特色として、こんな執着力を未だ嘗て想像した事さえなかった。私は先生をもっと弱い人と信じていた。そうしてその弱くて高い処に、私の懐かしの根を置いていた。一時の気分が先生にちよつと盾を突いて見ようとした私は、この言葉の前に小さくなった。先生はこう言った。

「……私は他に欺かれたのです。しかも血のつづいた親戚のものから欺かれたのです。私は決してそれを忘れないのです。私の父の前には善人であつたらしい彼等は、父の死ぬや否や許しがたい不徳義漢に変わったのです。私は彼等から受けた屈辱と損害を小供の時から今日まで背負わされている。恐らく死ぬまで背負われ通しでしょう。私は死ぬまでそれを忘れる事が出来ないんだから。しかし私はまだ復讐をせずにいる。考えると私は個人に対する復讐以上の事を現にやっているんだ。私は彼らを憎むばかりじゃない、彼らが代表している人間というものを、一般に憎む事を覚えたのだ。私はそれで沢山だと思ふ」、私は慰藉(慰め)の言葉さえ口へ出せなかったとある。

* *
これは、まだ中学三年生であった「先生」が、父親も母親も心から信頼していたので、「先生」自身も、そのまま信じ切っていた、その親戚の「叔父」（父親の実の弟）にその実家の旧家の恐らく何億何十億という「財産」の多くをまさに「欺し取られてしまった」のである。その結果、その親戚の「叔父」（父親の実の弟）を一生涯恨み続けなければならぬという「重荷」を背負わされたとともに、そのような絶対許せない苦しい「経験」（つまり「生々しい実体験」）からこそ、やがて、「先生」という人は、「人間嫌い」や「人間不信」などになって行く。「大きな要因」の一つになっているのである。それが、つまり、「……私は彼等から受けた屈辱と損害を小供の時から今日まで背負わされている。恐らく死ぬまで背負わされ通しでしょう。私は死ぬまでそれを忘れる事が出来ないんだから。しかし私はまだ復讐をせずにいる。考えると私は個人に対する復讐以上の事を現にやっているんだ。私は彼等を憎むばかりじゃない、彼らが代表している人間というものを、一般に憎む事を覚えたのだ。私はそれで沢山だと思ふ」となるのである。

五四、やがて二人は電車に乗って帰る（三十一）

その日の談話も遂にこれぎりで発展せずじまつた。私はむしろ先生の態度に畏縮して、先へ進む気が起らなかったたのである。——二人は市の外れから電車に乗ったが、車内では殆ど口を聞かなかった。電車を降りると間もなく別れなければならなかった。別れる時の先生は、また変っていた。常よりは晴やかな調子で、「……これから六月までは一番気楽な時ですね。ことによると生涯で一番気楽かも知れない。精出して遊びたまえ」と言った。私は笑って帽子を脱した。その時私は先生の顔を見て、先生は果して心のどこかで、一般の人間を憎んでいるのだろうかと思つた。その眼、その口、どこにも厭世的の影は射していないかった。

私は思想上の問題について、大いなる利益を先生から受けた事を自白する。しかし同じ問題について、利益を受けようとしても、受けられない事が間々あったと言わなければならぬ。先生の談話は時として不得要領に終つた。その日二人の間に起つた郊外の談話も、この不得要領の一例として私の胸の裏に残つた。（本文）

* *
さて、「……その日の談話も遂にこれぎり発展せずじまつた。私はむしろ先生の態度に畏縮して、先へ進む気が起らなかった」とある。そして、「……二人は市の外れから電車に乗ったが、車内では殆ど口を聞かなかった。電車を降りると間もなく別れなければならなかった。別れる時の先生は、また変っていた。常よりは晴やかな調子で、『……これから六月までは一番気楽な時ですね。ことによると生涯で一番気楽かも知れない。精出して遊びたまえ』と言つた。（今は五月）、私は笑って帽子を脱した。その時私は先生の顔を見て、先生は果して心のどこかで、一般の人間を憎んでいるのだろうかと思つた。その眼、その口、どこにも厭世的の影は射していないかった」とある。

* *
これは、まさに外から見た「外的事実」であり、その時々表れる先生の様々な「外的事実」（例えば様々な顔の表情や言動その他）というものは、われわれ人間の「五感」を

通じて、いくらでも「見聞き嗅ぎ味ひ触れ感じ知る」ことができ得るとともに、それらをもとにして、われわれ人間というものは、とかく、あの人は、ああいう人、この人は、こういう人と、勝手に決めつけているところがあるかと思うが、一方、先生の奥深くにある「内的事実」というものは、前述の「内容のようなもの」であり、それは、先生自身が「素直に告白しない限り」は、誰にも分かりようがないものである。そして、その「告白」を聞いて、「私」という人は、その余りの「衝撃」のために、いわば「言葉」を失っているのである。それを見ていて、先生は、少しでも元気づかせようとして、常よりは晴やかな調子で、まさに「……これから六月までは一番気楽な時ですね。ことによると生涯で一番気楽かも知れない。精出して遊びたまえ！」と、明るい顔で言うのであった。

私は思想上の問題について、大いなる利益を先生から受けた事を自白する。しかし同じ問題について、利益を受けようとしても、受けられない事が間々あったと言わなければならぬ。先生の談話は時として「不得要領」（肝心な所が分からないまま）に終わった。その日、二人の間に起った郊外の談話も、この「不得要領」（肝心な所が分からないままに終わった）「二例」として私の胸の裏に残ったということである。

五五、あなたはほんとうに真面目ですか（三十一）

さて、無遠慮な私は、ある時遂にそれを先生の前に打ち明けた。先生は笑っていた。私はいこう言った。「……頭が鈍くて要領を得ないのは構いませんが、ちゃんと解つてる癖に、はつきり言ってくれないのは困ります」、「……私は何にも隠してやしません」、「……隠していらいっしやいます」、「……あなたは私の思想とか意見とかいうものと、私の過去とを、ごちゃごちゃに考えているんじゃないやありませんか。私は貧弱な思想家ですけれども、自分の頭で纏め上げた考えを無闇に人に隠しやしません。隠す必要がないんだから。けれども私の過去を悉くあなたの前に物語らなくてはならないとなると、それはまた別問題になります」、「……別問題とは思われません。先生の過去が生み出した思想だから、私は重きを置くのです。二つのものを切り離したら、私には殆ど価値のないものになります。私は魂の吹き込まれていない人形を与えられただけで、満足は出来ないのです」、「先生はあきれたと言った風に、私の顔を見た。巻煙草を持っていたその手が少し顫えた。「……あなたは大胆だ」、「……ただ真面目なんです。真面目に人生から教訓を受けたのです」、「……私の過去を許してもですか」、「許くという言葉が、突然恐ろしい響きを以て、私の耳を打った。私は今私の前に坐っているのが、一人の罪人であって、不断から尊敬している先生でないような気がした。先生の顔は蒼かった。「……あなたは本当に真面目なんでしょうか」と先生が念を押した。「……私は過去の因果で、人を疑りつけている。だから実はあなたも疑っている。しかしどうもあなただけは疑りたくない。あなたは疑るには余りに単純過ぎるようだ。私は死ぬ前にたった一人で好いから、他を信用して死にたいと思っている。あなたはそのたった一人になれますか。なつてくれますか。あなたは腹の底から真面目ですか」、「……もし私の命が真面目なものなら、私の今言った事も真面目です」、「私の声は顫えた。「よろしい」と先生が言った。「……話しましょう。私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう。その代り……。いやそれは構わない。しかし私の過去はあなたに取ってそれほど有益でないかも知れませんよ。聞かない方が増かも知れませんよ。

それから、——今は話せないんだから、そのつもりでいて下さい。適當の時機が来なくつちや話さないんだから」、私は下宿へ帰ってから一種の圧迫を感じた。(本文)

*

さて、無遠慮な私は、ある時遂にそれを先生の前に打ち明けた。先生は笑っていた。私はこう言った。「……頭が鈍くて要領を得ないのは構いませんが、ちゃんと解つてる癖に、はつきり言ってくれないのは困ります」、「……私は何にも隠してやしません」、「……隠していらいつしやいます」と言う。——これは、まだ若い「私」という人から見ると、例えば、「……私の伺いたいののは、いざという間際という意味なんです。一体どんな場合を指すのですか」と聞いた時にも、先生は、笑い出し、そして、「……金さ君。金を見ると、どんな君子でもすぐ悪人になるのさ」と答えるのを聞いて、先生の返事があまりに平凡過ぎて詰まらなかつた。つまり、「……ちゃんと解つてる癖に、はつきり言ってくれない」と不満に思うわけである。ところが、先生は、まさに「……本気で答えているのである」、「つまり、「……私は何にも隠してやしません」となるのであるが、まだ若い「私」という人には「お金ではないもつと何かがあるはずだ」と思うのである。

*

*

そこで、先生は、「……あなたは私の思想とか意見とかいうものと、私の過去とを、ごちやごちやに考えているんじゃないやありませんか。私は貧弱な思想家ですけれども、自分の頭で纏め上げた考えを無闇に人に隠しやしません。隠す必要がないんだから。けれども私の過去を悉くあなたの前に物語らなくてはならないとなると、それはまた別問題になります」、「……別問題とは思われません。先生の過去が生み出した思想だから、私は重きを置くのです。二つのものを切り離したら、私には殆ど価値のないものになります。私は魂の吹き込まれていない人形を与えられただけで、満足は出来ないので」と言うのであった。——つまり、何らの「体験も経験」も踏まえない、ただその人の「頭の中」(或いは「心の中」)だけであれこれ想像したり考え出した「思想や意見」というものがあるとするれば、一方、その人の過去の様々な生々しい「体験や経験」などを踏まえて、その人の「頭の中」(或いは「心の中」)であれこれ厳密に纏め上げた「思想や意見」というものがあるということである。そして、「先生」という人の「思想や意見」というのは、言うまでもなく、先生の過去の様々な生々しい「体験や経験」などを踏まえて、先生の「頭の中」(或いは「心の中」)であれこれ厳密に纏め上げた「思想や意見」になっているということがある。

そこで、先生は、「……あなたは私の思想とか意見とかいうものと、私の過去とを、ごちやごちやに考えているんじゃないやありませんか。私は貧弱な思想家ですけれども、自分の頭で纏め上げた考えを無闇に人に隠しやしません。隠す必要がないんだから。けれども私の過去を悉くあなたの前に物語らなくてはならないとなると、それはまた別問題になります」と言う。——つまり、先生の過去の様々な生々しい「体験や経験」などを踏まえて、先生の「頭の中」(或いは「心の中」)であれこれ厳密に纏め上げた「思想や意見」というものがあり、その「思想や意見」を無闇に人に隠しやしません。隠す必要がないんだから。けれども、私の過去を悉くあなたの前に物語らなくてはならないとなると、それはまた別問題になる」と言う。——つまり、自分の「思想や意見」を人に語るということ、自分の「過去」を人に語ることは、全く「別々のこと」だと言っているのである。

一方、「私」という人は、「……別問題とは思われません。先生の過去が生み出した思想だから、私は重きを置くのです。二つのものを切り離したら、私には殆ど価値のないものになります。私は魂の吹き込まれていない人形を与えられただけで、満足は出来ないのです」と言うのである。——これは、先生の「思想や意見」だけではなく、先生の過去の一体どのような「体験や経験」から、このような「思想や意見」が生み出されて来たのか、その「両方」を「合わせて知りたい」と言っているのである。

すると、先生は、「……あきれたと言った風に、私の顔を見た。巻煙草を持っていたその手が少し顫えた」とある。——これは、先生は、自分の「過去の或る事」をこれだけは、決して誰にも妻にさへ絶対に語らずと心の奥深くに隠して来たものであり、それを「いきなり語れ！」と言われて、思わず、「……あなたは大胆だ」と言うのである。すると、「私」という人は、先生の「過去の事情」などは何も知らないもので、「……ただ真面目なんです。真面目に人生から教訓を受けたのです」と言うのである。すると、先生は、「……私の過去を許してもですか」と聞くのであった。……

まず、「私」という人は、先生の「過去の事情」などは何も知らないもので、「……ただ真面目なんです。真面目に人生から教訓を受けたのです」と言うのであった。……

ところで、まだ若い「私」という人、この書生（大学生）は、帝国大学（つまり東大）の「三年生」だと思いが、この人は、一体、何のために「先生の宅」に頻繁にやって来ては、先生と親しく「話をしている」のだらうか？ それはもちろん、「遊興」のためではなく、それは、まさに「……先生から人生の教訓を得るため、しかも、それは、ふつう一般的なものでは決してなく、真面目に、『人生から（真の）教訓』を受けたのです」と語るるのである。すると、先生は、「……私の過去を許してもですか」と聞くのであった。

すると、まだ若い「私」という人にとつて、この「……私の過去を許してもですか」という言葉が、突然、恐ろしい「響き」を以て、私の耳を打ったとある。——それは、全く「想像すらし得なかった言葉」であったからであり。だからこそ、まだ若い「私」という人は、「……今、私の前に坐っているのが、一人の罪人であつて、不断から尊敬している先生でないような気がした」となるのである。一方、先生の方はと言えば、それは、「……先生の顔は蒼かった」（蒼ざめていた）ということになるのである。

先生は、「……あなたは本当に真面目ですか」と念を押した。「……私は過去の因果で、人を疑りつけている。だから実はあなたも疑っている。しかしどうもあなただけは疑りたくない。あなたは疑るにはあまりに単純過ぎるようだ。私は死ぬ前にたった一人で好いから、他を信用して死にたいと思っている。あなたはそれのたった一人になれますか。なつてくれますか。あなたは腹の底から真面目ですか」と聞く。

例えば、「先生」という人は、（去年の）夏、鎌倉の海岸（海水浴場）で偶然にも出逢った、この「若者」を、なぜ、どうして自宅に「受け入れる」ようなことにしたのだからか？ というのも、先生は、自ら「人間嫌い」とも「人間不信」だとも言っていたからである。それなのに、なぜこの「若者」を受け入れたのだらうか？ むろん、それにも幾つかの理由があったかと思うが、その「最大の理由」としては、やはり「話し相手」が欲しかったということである。しかも、その「話し相手」というのは、ごく「一般的な世間

話」などをするような相手ではなく、もっと「……人生を深く語り合える相手である」ともに、人間としても真面目であり、真に信用でき得るような相手」というものを、知らず識らずのうちに、先生は長年探し求めていたということである。そして、一年近く、この「若者」と親身に「付き合つて」みた結果、次のように想うようになったのである。

それが、すなわち、「……私は過去の因果で、人を疑りつけている。だから実はあなたも疑っている。しかしどうもあなただけは疑りたくない。あなたは疑るにはあまりに単純過ぎるようだ。私は死ぬ前にたった一人で好いから、他を信用して死にたいと思つている。あなたはそれのたった一人になれますか。なつてくれませんか。あなたは腹の底から真面目ですか」と聞く。——ここにこそ、先生の「長年の想い」があるということである。つまり、このまま自分の「思いや考え」などを誰にも語らず、また、誰にも知られず死んで行く、それには堪えられないということである。それゆえ、たった「一人」でもいい、真面目で、信用できる相手に自分の「思いや考え」などをすべて語つてから死にたいということである。だからこそ、先生は、「……あなたは本当に真面目ですか」と、何度も何度も念を押して聞いているのである。そして、もしあなたがうそ偽りなく真に「真面目で、信用できる相手」であるならば、その時は、自分の「過去のすべて」をあなたにすべて語つて上げててもよいと言っているのである。

それが、まさに「……あなたは腹の底から真面目ですか」と先生が聞いた時に、「私」という人は、「……もし私の命が真面目なものなら、私の今言つた事も真面目です」と、その声は震えていたとある。(それだけ緊張感があつたということである)。すると、先生は、「よろしい」と言った。そして、「……話しましょう。私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう。その代り……。いやそれは構わない。しかし私の過去はあなたに取つてそれほど有益でないかも知れませんよ。聞かない方が増かも知れませんよ。それから、——今は話せないんだから、そのつもりでいて下さい。適当の時機が来なくつちや話さないんだから」となるのである。それでは、その適当の時期とは、一体、どのような時期かと問えば、それは、実は、「……自分が死んでもよいと思える時期」ということになのである。一方、「私」という人は、下宿へ帰つてからも一種の「圧迫」(ただ事ではないという感じ)を感じていたということである。

*

*

五六、大学を無事に卒業する

五六、大学を無事に卒業する (三十二)

私の論文は自分が評価していたほどに、教授の眼にはよく見えなかったらしい。それでも私は予定通り及第した。卒業式の日、私は黴臭くなった古い冬服を行李の中から出して着た。式場にならぶと、どれもこれもみな暑そうな顔ばかりであった。私は風の通らない厚羅紗の下に密封された自分の身体を持って余した。しばらく立っているうちに手に持ったハンケチがぐしょぐしょになった。

私は式が済むとすぐ帰って裸体になった。下宿の二階の窓をあけて、遠眼鏡のようにぐるぐる巻いた卒業証書の穴から、見えるだけの世の中を見渡した。それからその卒業証書を机の上に放り出した。そうして大の字なりになって、室の真中に寝そべった。私は寝ながら自分の過去を顧みた。また自分の未来を想像した。するとその間に立って一区切りを付けているこの卒業証書なるものが、意味のあるような、また意味のないような変な紙に思われた。(本文)

*

*

さて、「私」という人は、いよいよ「大学を無事に卒業する」ことになるが、当時の「大学」というのは、「三年制」であり、「私」という人も、今年の一月から、二月、三月、四月一杯をかけて、ひたすら「卒業論文」を書くことに専念をして、ようやく完成させることになる、その間は、先生宅の「敷居を跨がなかった」とある。そして、五月になって、さっそく先生宅を訪ねては、先生を郊外に散歩に誘い出し、そこで「財産」の談話などをすることになるのである。そして、六月になると、「口述試験」があり、また、大学の「卒業式」は、当時は、「七月」(本書では六月)であった。だからこそ、「……私は黴臭くなった古い冬服を行李の中から出して着た。式場にならぶと、どれもこれもみな暑そうな顔ばかりであった。私は風の通らない厚羅紗の下に密封された自分の身体を持って余した。しばらく立っているうちに手に持ったハンケチがぐしょぐしょになった」となるのである。

そして、「私」という人は、「……式が済むとすぐ帰って裸体になった。下宿の二階の窓をあけて、遠眼鏡のようにぐるぐる巻いた卒業証書の穴から、見えるだけの世の中を見渡した。それからその卒業証書を机の上に放り出した。そうして大の字なりになって、室の真中に寝そべった。私は寝ながら自分の過去を顧みた。また自分の未来を想像した。するとその間に立って一区切りを付けているこの卒業証書なるものが、意味のあるような、また意味のないような変な紙に思われた」とある。——例えば、大学の「卒業証書」というものは、一体、どれほどの意味のあるものなのか、それとも、それほど意味などないものなのか、という問題であるが、ふつう一般的に言って、大学を卒業した当人にとっては、何々大学(例えば有名校など)を卒業したからと言って、それほどどうということもないものであるが、しかし、世渡りをする時には、これが意外と「大きな役割」を果たすことになるのである。というのも、結局、その人の「……年齢、性別、出身地、学歴、職歴、趣味、その他」、何であれ、それは、結局、その人の様々な「外的事実」(つまりその人の学校や職場或いは趣味や生活や遊びなどでの色々な言動や学歴或いは職歴その他)などからこそ、その人をあれこれ「判断し、評価する」方法しかないからである。一方、その人の様々な「内的事実」などがどのようになっていくかなどは、本人が「自分の心の中を素直に告白しない限り」は、誰にも分かりようがないものである。それゆえ、世間一般的

には、その人の「履、歴書」（その中の「学歴」というものが、その人を判断する一つの「ものさし」にもなっている）のである。

五七、先生の家へ御馳走に招かれていた（三十二）

私はその晩先生の家へ御馳走に招かれて行った。これはもし卒業したらその日の晩餐は余所で喰わずに、先生の食卓で済ますという前からの約束であった。——食卓は約束通り座敷の縁近くに据えられてあった。模様の織り出された厚い糊の硬い卓布が美しくかつ清らかに電燈の光を射返していた。先生のうちで飯を食うと、きつとこの西洋料理店に見るような白いリンネルの上に、箸や茶碗が置かれた。そうしてそれが必ず洗濯したての真白なものに限られていた。「……カラやカフスと同じ事さ。汚れたのを着るくらいなら、一層始めから色の着いたものを使うが好い。白ければ純白でなくっちゃ」、こう言われて見ると、なるほど先生は潔癖であった。書斎なども実に整然と片付いていた。無頓着な私には、先生のそういう特色が折々著しく眼に留まった。「……先生は癩性ですね」とかつて奥さんに告げた時、奥さんは、「……でも着物などは、それほど気にしないようですよ」と答えた事があつた。それを傍に聞いていた先生は、「……本当を言うと、私は精神的に癩性なんです。それで始終苦しいんです。考えると実に馬鹿馬鹿しい性分だ」と言つて笑つた。精神的に癩性という意味は、俗に言う神経質という意味か、又は倫理的に潔癖だという意味か、私には解らなかつた。奥さんにも能く通じないらしかつた。（本文）

*

*

さて、私は、「……その晩、先生の家へ御馳走に招かれて行った。これはもし卒業したらその日の晩餐は余所で喰わずに、先生の食卓で済ますという前からの約束であつた」とある。むろん、これは、「私」の「卒業祝い」の為のものであるが、一方、作者（夏目漱石）としては、この三人揃つた「晩餐の席」で、最後、私の「父親の病氣から二人のうちどちらが先に死ぬか」という問題を提示する為のものでもあるが、それはともかく、——食卓は約束通り座敷の縁近くに据えられてあつた。模様の織り出された厚い糊の硬い卓布が美しくかつ清らかに電燈の光を射返していた。先生のうちで飯を食うと、きつとこの西洋料理店に見るような白いリンネルの上に、箸や茶碗が置かれた。そうしてそれが必ず洗濯したての真白なものに限られていた」とある。——ところで、御馳走として、こういう具体的な「料理」があつたと描写してもよい場面であるが、何も描かれていないという事は、夏目漱石自身、料理への「こだわり」は、それ程はなかつたのかも知れない。それはともかく、先生は、「……カラやカフスと同じ事さ。汚れたのを着るくらいなら、一層始めから色の着いたものを使うが好い。白ければ純白でなくっちゃ」と言う。こゝろを言われてみると、なるほど先生は「潔癖」であつた。書斎なども実に整然と片付いていて、無頓着な私には、先生のそういう特色が折々著しく眼に留まつたとある。——これは、「先生」という人の「性格や性質」などがどういふものであるかを、まさに「卓布の純白さ」で表現しているところである。つまり、「不純」を非常に嫌う「潔癖症」ところがあり、それがまた、先生を「苦しめる大きな要因の一つ」にもなっているところである。それが、まさに「……先生は癩性ですね」とかつて奥さんに告げた時、奥さんは、「……

「でも着物などは、それほど気にしないですよ」と答えた事があった。それを傍に聞いていた先生は、「……本当を言う」と、私は精神的に癩性なんです。それで始終苦しいんです。考えると実に馬鹿馬鹿しい性分だ」と言つて笑つた。精神的に癩性という意味は、俗に言う「……神経質」という意味か、または倫理的に潔癖だという意味か、私には解らなかつた。奥さんにも能く通じないらしかつたのである。

つまり、先生は、自ら「……本当を言う」と、私は精神的に癩性なんです。それで始終苦しいんです。考えると実に馬鹿馬鹿しい性分だ」と言つて笑つた。これは、夏目漱石の「神経衰弱」とも共通するところがあるのかも知れない。——一方、「私」という人は、先生の「精神的に癩性」という意味については、「……俗にいう神経質」という意味か、または倫理的に潔癖だという意味か、私には解らなかつた」とあるが、それは、恐らく、両方であり、だからこそ、「先生」という人は、いわゆる「罪の意識」(或いは「良心の呵責」)などに長年悩まされ続けるのである。

五八、先生の家で御馳走にあずかる(三十二)

その晩、私は先生と向い合せに、例の白い卓布の前に坐つた。奥さんは二人を左右に置いて、独り庭の方を正面にして席を占めた。——「御目出とう」と言つて、先生が私のために杯を上げてくれた。私はこの盃に対してそれ程嬉しい気を起さなかつた。無論私自身の心がこの言葉に反響するように、飛び立つ嬉しさをもっていなかつたのが、一つの原因であつた。けれども先生の言い方も決して私の嬉しさを唆る浮々した調子を帯びていなかつた。先生は笑つて杯を上げた。私はその笑いのうちに、些とも意地の悪いアイロニーを認めなかつた。同時に目出たという真情も汲み取る事が出来なかつた。先生の笑いは、「……世間はこんな場合によく御目出とうと言いたがるものです」と私に物語つていた。奥さんは私に「……結構ね。さぞお父さんやお母さんはお喜びでしょう」と言つてくれた。私は突然病気の父の事を考えた。早くあの卒業証書を持って行つて見せてやろうと思つた。「……先生の卒業証書はどうしました」と私が聞いた。「……どうしたかね。——まだどこかにしまつてあつたかね」と先生が奥さんに聞いた。「……ええ、たしかしまつてある筈ですが」、卒業証書の在処は二人ともよく知らなかつた。(本文)

*

*

さて、「御目出とう」と言つて、先生が私のために杯を上げてくれた。私はこの盃に対してそれほど嬉しい気を起さなかつた。無論私自身の心がこの言葉に反響するように、飛び立つ嬉しさをもっていなかつたのが、一つの原因であつたとある。——それでは、なぜ、そうなのかと問えば、まず、希望する大学に入学できた時には、まさに「飛び上がるほどの嬉しさ」があつたかと思つたが、一方、大学を卒業する時というのは、多くの場合、ごくふつうに講義に出て、必要な単位を修得すれば、(むろん卒業論文を書く大変さはあるが)、大体、「卒業」出来るようになってるのであり、それゆえ、何か特別に大騒ぎをしてまで喜ばなければならぬほどのものではないからであり、それは、先生も大学を卒業しているのです。そのような「心理」はよく解つていたのである。だからこそ、次のようになるのである。「……けれども先生のいい方も決して私の嬉しさを唆る浮々した調子を帯びていなかつた。先生は笑つて杯を上げた。私はその笑いのうちに、些とも意地の

悪いアイロニー（皮肉）を認めなかったが、同時に目出たいという眞情も汲み取る事が出来なかった。先生の笑いは、『……世間はこんな場合によく御目出とうと言いたがるものです』と私に物語っていた」となるのである。

一方、奥さんの方は、私に、「……結構ね。さぞお父さんやお母さんはお喜びでしょう」と言ってくれた。——これは、いかにも「女性の視点」からであり、大学を卒業出来た当人も「結構」ではあるが、それ以上に、「……さぞお父さんやお母さんはお喜びでしょう」という見方になるのである。——一般に、男の場合、先生もそうであるが、そこまでは「気が回らない」ものである。すると、私は突然病気の父の事を考えた。早くあの卒業証書を持って行って見せてやろうと思った。「……先生の卒業証書はどうしました」と私が聞くと、「……どうしたかね。——まだどこかにしまつてあつたかね」と先生が奥さんに聞いた。「……ええ、たしかしまつてある筈ですが」、卒業証書の在処は二人ともよく知らなかったとある。——つまり、何々大学を卒業したという「学歴」こそが大事であり、それを証明する「卒業証書」というものは、多くの場合、どこかにしまい忘れていくという、（なぜか）そのような「扱い」を受けているのである。

五九、これから何をする気ですか（三十三） 其の一

飯になった時、奥さんは傍に坐っている下女を次へ立たせて、自分で給仕の役をつとめた。これが表立たない客に対する先生の家の仕来りらしかった。始めの一、二回は私も窮屈を感じたが、度数の重なるにつけ、茶碗を奥さんの前へ出すのが、何でもなくなつた。「……お茶？ ご飯？ ずいぶんよく食べるのね」、奥さんの方でも思い切つて遠慮のない事を言うことがあつた。しかしその日は、時候が時候なので、そんなに調戲される程食欲が進まなかつた。「……もうお仕舞。あなた近頃大変小食になつたのね」、「……小食になつたんじゃないやありません。暑いで食われないうです」、奥さんは下女を呼んで食卓を片付けさせた後へ、改めてアイスクリームと水菓子を運ばせた。「……これは家で拵えたのよ」、用のない奥さんには、手製のアイスクリームを客に振舞うだけの余裕があると見えた。私はそれを二杯更えてもらった。「……君もいよいよ卒業したが、これから何をやる気ですか」と先生が聞いた。先生は半分縁側の方へ席をずらして、敷居際で背中を障子に靠たせていた。（本文）

さて、飯になった時、奥さんは傍に坐っている下女を次へ立たせて、自分で給仕の役をつとめた。これが表立たない（内々の）客に対する先生の家の仕来りらしかった。始めの一、二回は私も窮屈を感じたが、度数の重なるにつけ、茶碗を奥さんの前へ出すのが、何でもなくなつた。「……お茶？ ご飯？ ずいぶんよく食べるのね」、奥さんの方でも思い切つて遠慮のない事を言うことがあつた。（それだけお互いに打ち解けた関係になっているのである）。しかし、その日は、時候が時候なので、そんなに調戲されるほど食欲が進まなかつた。「……もうお仕舞。あなた近頃大変小食になつたのね」、「……小食になつたんじゃないやありません。暑いで食われないうです」とある。例えば、日本最初の「扇風機」は、一八九四年（明治二十七年）に発売したものが最初とあるので、この「小説」が書かれる「大正三年」頃は、金持ちであれば、或いは持つていたかも知れない時期に当たる

のかも知れない。すると、奥さんは下女を呼んで食卓を片付けさせた後へ、改めてアイスクリームと水菓子^{みずがし}を運ばせた。「……これは宅で拵^{こしら}えたのよ」、用のない奥さんには、手製のアイスクリームを客に振舞^{ふるま}うだけの余裕があると見えた。私はそれを二杯更^かえてもらったとある。明治時代は、アイスクリームはかなり高価な食べ物であったが、大正時代になると、かなり一般化して行くことになるのである。「……君もいよいよ卒業したが、これから何をする気ですか」と先生が聞いた。先生は半分縁側の方へ席をずらして、敷居^{しきいざわ}で背中を障子^{しょうじ}に靠^もたせていたとある。

五九、これから何をする気ですか（三十三）其の二

私にはただ卒業したという自覚があるだけで、これから何をしようという目的^{あて}もなかった。返事^{へんじ}にためらっている私を見た時、奥さんは「教師？」と聞いた。それにも答えずにいると、今度は、「じゃお役人^{やくにん}？」とまた聞かれた。私も先生も笑い出した。「……本当言うと、まだ何をする考えもないんです。実は職業というものについて、全く考えた事がないくらいなんです。だいちどれが善いか、どれが悪いか、自分がやって見た上でないと解^{わか}らないんだから、選択に困る訳だと思えます」、「……それもそうね。けれどもあなたは必^{ひつ}竟^{きやう}財産があるからそんな呑気^{のんき}な事を言っているよ。これが困る人でご覧なさい。なかなかあなたのように落ち付いちゃいられないから」、私の友達には卒業しない前から、中学教師の口を探している人があった。私は腹の中で奥さんの言う事実を認めた。しかしこう言った。「……少し先生にかぶれたんでしよう」、「……碌^{ろく}なかぶれ方をし下さらないのね」、先生は苦笑した。「……かぶれても構わないから、その代りこの間言った通り、お父さんの生きてるうちに、相当の財産を分けてもらってお置きなさい。それでない^{あて}と決して油断はならない」とある。（本文）

*

*

さて、私にはただ卒業したという自覚があるだけで、これから何をしようという目的^{あて}もなかった。返事^{へんじ}にためらっている私を見た時、奥さんは「教師？」と聞いた。それにも答えずにいると、今度は、「じゃお役人^{やくにん}？」とまた聞かれた。私も先生も笑い出したとある。——これは、非常に面白いところであり、例えば、当時、帝国大学（東大など）の「文化系」を出ると、一般的には、「先生か役人」などになる場合が多かったのだらう。夏目漱石も、学校の先生になっている。むろん、政治家や司法界或いは銀行や一流会社、その他、実に様々な職種はあるが、それはともかく、「私」という人は、「……本當言うと、まだ何をする考えもないんです。実は職業というものについて、全く考えた事がないくらいなんです。だいちどれが善^いいか、どれが悪^いいか、自分がやって見た上でないと解^{わか}らないんだから、選択に困る訳だと思えます」、「……それもそうね。けれどもあなたは必^{ひつ}竟^{きやう}財産があるからそんな呑気^{のんき}な事を言っているよ。これが困る人でご覧なさい。なかなかあなたのように落ち付いちゃいられないから」と言う。私の友達には卒業しない前から、中学教師の口を探している人があった。私は腹の中で奥さんの言う事実を認めた。しかしこう言った。「……少し先生にかぶれたんでしよう」、「……碌^{ろく}なかぶれ方をし下さらないのね」、先生は苦笑した。「……かぶれても構わないから、その代りこの間言った通り、お父さんの生きてるうちに、相当の財産を分けてもらってお置きなさい。それでない^{あて}と決

して油断はならない」とある。——先生は、一貫して「このこと」を気にかけている。

五九、これから何をする気ですか（三十三）其の三

私は先生と一緒に、郊外の植木屋の広い庭の奥で話した、あの躑躅の咲いている五月の初めを思い出した。あの時帰り途に、先生が昂奮した語気で、私に物語った強い言葉を、再び耳の底で繰り返した。それは強いばかりでなく、むしろ凄（すこ）い言葉であった。けれども事実を知らない私には同時に徹底しない言葉でもあった。「……奥さん、お宅の財産は余ッ程あるんですか」、「……何だってそんな事を御聞きになるの」、「……先生に聞いても教えて下さらないから」、奥さんは笑いながら先生の顔を見た。「……教えて上げるほどないからでしょう」、「……でもどのくらいあったら先生のようにしていただけるか、宅へ帰って一つ父に談判する時の参考にしますから聞かして下さい」、先生は庭の方を向いて、澄まして烟草を吹かしていた。相手は自然奥さんでなければならなかった。「……どのくらいってほどありやしませんわ。まあこうしてどうかこうか暮（ま）してゆかれるだけよ、あなた。——そりやどうでも宜いとして、あなたはこれから何か為（な）さなくっちゃ本当にいいませんよ。先生のようにごろごろばかりしていちゃ……」、「……ごろごろばかりしていいやしないさ」、先生はちよつと顔だけ向け直して、奥さんの言葉を否定した。（本文）

*

*

さて、先生は、「……かぶれても構わないから、その代りこの間言つた通り、お父さんの生きてるうちに、相当の財産（自分に見合つた財産）を分けてもらつてお置きなさい。それでないと決して油断はならない」と言う。これは、うまく欺（だま）されて、「自分に見合つた財産」以下になってしまう可能性は常にあるからである。——それを聞いて、「私」という人は、「……先生と一緒に、郊外の植木屋の広い庭の奥で話した、あの躑躅の咲いている五月の初めを思い出した。あの時帰り途に、先生が昂奮した語気で、私に物語った強い言葉を、再び耳の底で繰り返した。それは強いばかりでなく、むしろ凄（すこ）い言葉であった。けれども事実を知らない私には同時に徹底しない言葉でもあった」。

そこで、改めて、「私」という人は、「……奥さん、お宅の財産は余ッ程あるんですか」と聞くと、「……何だってそんな事を御聞きになるの」と訊く。「……先生に聞いても教えて下さらないから」と言うと、奥さんは笑いながら先生の顔を見た。「……教えて上げるほどないからでしょう」、「……でもどのくらいあったら先生のようにしていただけるか、宅へ帰って一つ父に談判する時の参考にしますから聞かして下さい」と言う。先生は庭の方を向いて、澄まして烟草を吹かしていた。相手は自然奥さんでなければならなかった。「……どのくらいってほどありやしませんわ。まあこうしてどうかこうか暮（ま）してゆかれるだけよ、あなた。——そりやどうでも宜いとして、あなたはこれから何か為（な）さなくっちゃ本当にいいませんよ。先生のようにごろごろばかりしていちゃ……」と言うのであった。

これは、意外と面白いところであり、まず、自分の「財産」については、誰であれ、他人からあれこれ聞かれても、ふつうあまり語りたがらないものであるが、それは、やはり自然と「警戒心」が働くことになるからだろう。それと、もう一つ、奥さんは、「……あなたはこのから何か為（な）さなくっちゃ本当にいいませんよ。先生のようにごろごろばかりしていちゃ……」と言うと、「……ごろごろばかりしていいやしないさ」と言う。つまり、

奥さんは、先生が世に出て働かないことに対しては、まあ仕方ないかなあと思いながらも、やはり「心の底」では、「夫」（先生）には世に出て何か仕事をして欲しいと思っただけである。だからこそ、「……あなたはこれから何か為なささなくっちゃ本当に、いけませんよ」という言葉になるのである。

五九、これから何をする気ですか（三十四） 其の四

私はその夜十時過ぎに先生の家を辞した。二、三日うちに帰国する筈はずになっていたので、座を立つ前に私はちよつと暇いとま乞こいの言葉を述べた。「……また自分お目にかかれませんか」「……九月には出ていらつしやるんでしようね」、私はもう卒業したのだから、必ず九月に出て来る必要もなかった。しかし暑い盛りの八月を東京まで来て送ろうとも考えていなかった。私には位置を求めるための貴重な時間というものがなかった。「……まあ九月頃ころになるでしょう」、「……じゃ随分ずいぶんご機嫌きげんよう。私たちもこの夏はことによると何処どこかへ行くかも知れないのよ。随分暑そうだから。行ったらまた絵端書えがきでも送って上げましょう」、「……どちらの見当です。若しいらつしやるとすれば」、先生はこの問答をにやにや笑って聞いていた。「……何まだ行くとも行かないとも極めていやしいんです」と言うのであった。——席を立とうとした時、先生は急に私をつらまえて、「……時にお父さんの病気はどうなんです」と聞いた。私は父の健康について殆ど知るところがなかった。何とも言うて来ない以上、悪くはないのだろう位くらいに考えていた。（本文）

さて、ここまでの「内容」は、そのまま書いてある通りかと思うが、ここで大事なところは、先生は急に私をつらまえて、「……時にお父さんの病気はどうなんですか」と聞いて来たことであり、それを「切つ掛け」として、再び、「父の病気」の話になるとともに、やがて、「……先生と奥さんのどちらが先に死ぬか」という問題へと展開して行くのである。——これは、以前に、「……奥さんが先に死んだら、先生はどうなるでしょうか」という談義があり、その時には、奥さんは、「……先生は私を離れば不幸になるだけです。あるいは生きていられないかも知れませんか」と言っていたが、今度は、「……先生が先に死んだら奥さんはどうなるのか」という問題であり、先生は、この話を何気なく持ち出してはいるが、実は、先生が何よりも知りたいと思っただけのこと、まさに「このこと」だったのである。

*

*

六十、父の病気の話からどちらが先に死ぬか

六十、父の病氣の話からどちらが先に死ぬか(三十四)

先生は、「……そんなに容易く考えられる病氣じゃありませんよ。尿毒症が出ると、もう駄目なんだから」、尿毒症という言葉も意味も私には解らなかつた。この前の冬休みに国で医者と会見た時に、私はそんな術語をまるで聞かなかつた。「……本当に大事にしてお上げなさいよ」と奥さんも言った。「……毒が脳へ廻るようになると、もうそれつきりよ、あなた。笑い事じゃないわ」、無経験な私は氣味を悪がりながらも、にやにやしていた。「……どうせ助からない病氣ですから、いくら心配したって仕方がありません」、「……そう思い切りよく考えれば、それまでですけれども」、奥さんは昔同じ病氣で死んだという自分のお母さんの事でも憶い出したのか、沈んだ調子でこう言ったなり下を向いた。私も父の運命が本当に氣の毒になつた。

すると、先生が突然奥さんの方を向いた。「……静、お前はおれより先へ死ぬだろうかね」、「なぜ」、「……なぜでもない、ただ聞いてみるのさ。それとも己の方がお前より前に片付くかな。大抵世間じゃ旦那が先で、細君が後へ残るのが当り前ようになってるね」、「……そう極つた訳でもないわ。けれども男の方はどうしても、そら年が上でしよう」、「……だから先へ死ぬという理屈なのかね。すると己もお前より先にあの世へ行かなくっちゃならない事になるね」、「……あなたは特別よ」、「そうかね」、「……だって丈夫なんですもの。ほとんど煩らつた例がないじゃありませんか。そりやどうしたつて私の方が先だわ」、「先かな」、「……え、きつと先よ」、先生は私の顔を見た。私は笑つた。「……しかしもしおれの方が先へ行くとするね。そうしたらお前どうする」、「……どうするつて……」、奥さんはそこで口籠つた。先生の死に対する想像的な悲哀が、ちよつと奥さんの胸を襲つたらしかつた。けれども再び顔をあげた時は、もう氣分を更えていた。「……どうするつて、仕方がないわ、ねえあなた。老少不定つていうくらいだから」、奥さんはことさらに私の方を見て笑談らしくこう言つた。(本文)

さて、先生は、「……そんなに容易く考えられる病氣じゃありませんよ。尿毒症が出ると、もう駄目なんだから」と言う。尿毒症という言葉も意味も私には解らなかつた。この前の冬休みに国で医者と会見た時に、私はそんな「術語」をまるで聞かなかつたのである。——さて、この「尿毒症」というのは、「……主に慢性腎不全の末期や、急性腎不全によつて、腎臓の機能が落ち、本来ならば排出される毒素や老廢物が血中にたまることの原因でおこる」とある。そして、今日では、それを防ぐために、いわゆる「人工透析」を定期的に行なつているのである。——ところが、当時は、まだそういう治療は受けられず、「……本当に大事にしてお上げなさいよ」と奥さんも言った。「……毒が脳へ廻るようになると、もうそれつきりよ、あなた。笑い事じゃないわ」となるのである。一方、無経験な私は氣味を悪がりながらも、にやにやしていた。「……どうせ助からない病氣ですから、いくら心配したつて仕方がありません」、「……そう思い切りよく考えれば、それまでですけれども」、奥さんは昔同じ病氣で死んだという自分のお母さんの事でも憶い出したのか、沈んだ調子でこう言つたなり下を向いた。私も父の運命が本当に氣の毒になつたとある。——そして、この場面で大事なのは、次からの「内容」である。

*

*

すると、先生が突然奥さんの方を向いた。「……静、お前はおれより先へ死ぬだろうかね」、「なぜ」、「……なぜでもない、ただ聞いてみるのさ。それとも己の方がお前より前に片付くかな。大抵世間じゃ旦那が先で、細君が後へ残るのが当り前のようになってるね」とある。——まず、先生は、「……静、お前はおれより先へ死ぬだろうかね」と何気なく遠回しに聞いている。これは、むろん、自分の「本心」(本当は己が死んだらお前はどうか)と聞きたいのだが)それを奥さんに悟られないためであり、すると、奥さんは、当然の如くに「なぜ」と聞き返すので、先生は、「……なぜでもない、ただ聞いてみるのさ。それとも己の方がお前より前に片付くかな。大抵世間じゃ旦那が先で、細君が後へ残るのが当り前のようになってるね」と、話を「先生が一番聞きたいところ」へと持って来るのである。すると、奥さんは、それに気づかず、「……そう極った訳でもないわ。けれども男の方はどうしても、そら年が上でしよう」と言う。先生は、「……だから先へ死ぬという理屈なのかね。すると己もお前より先にあの世へ行かなくっちゃならない事になるね」と言うと、「……あなたは特別よ」、「そうかね」、「……だつて丈夫なんですもの。ほとんど煩らつた例がないじゃありませんか。そりやどうしたつて私の方が先だわ」、「先かな」、「……え、きつと先よ」と言う。先生は私の顔を見た。私は笑つたとある。

むろん、これでは、先生が「本当に知りたいこと」が少しも聞き出せていないので、あらためて、次のように「聞き直す」のである。それは、「……しかしもしおれの方が先へ行くとするね。そうしたらお前どうする」と。今度は、直球を投げて来たのである。すると、奥さんは、さすがに動揺が生じてきて、「……どうするつて……」と、奥さんはそこで口籠つた、となるのである。先生の死に対する「想像的な悲哀」が、ちよつと奥さんの胸を襲つたらしかなかった。けれども再び顔をあげた時は、もう気分を更えていた。「……どうするつて、仕方がないわ、ねえあなた。老少不定(ろうしやうふじょう)(人の寿命は、決まつたものではなく、老人でも若者であつても、いつ死ぬかは分からない)つて言うくらいだから」と、奥さんはことさらに私の方を見て笑談らしく言うつたとある。——これは、もちろん、奥さんは、いわば「本心」(答え)を避けたということになるが、その「本心」とは、すなわち、「……天下に一人しかいないと心の底から愛している夫を失えば、それは大変な悲しみに襲われることは間違いない」ことになるのである。

六一、先生が先へ死ぬか、奥さんが早く亡くなるか(三十五)

私は立て掛けた腰をまたおろして、話の区切りの付くまで二人の相手になつていた。「……君はどう思います」と先生が聞いた。——先生が先へ死ぬか、奥さんが早く亡くなるか、固より私に判断のつくべき問題ではなかった。私はただ笑つていた。「……寿命は分りませぬね。私にも」、「……こればかりは本当に寿命ですからね。生れた時にちゃんと極つた年数をもらつて来るんだから仕方がないわ。先生のお父さんやお母さんなんか、ほとんど同じよ、あなた、亡くなつたのが」、「……亡くなられた日ですか」、「……まさか日までも同じじゃないけれども。でもまあ同じよ。だつて続いて亡くなつちまつたんですもの」、「この知識は私にとつて新しいものであつた。私は不思議に思つた。「……どうしてそう一度に死なれたんですか」、奥さんは私の問いに答えようとした。先生はそれを遮つた。「……そんな話はお止しよ。つまらないから」、先生は手に持つた団扇をわざとばたばたいわ

せた。そうしてまた奥さんを顧みた。「……静、おれが死んだらこの家をお前にやろう」、奥さんは笑い出した。「……ついでに地面も下さいよ」、「……地面は他のものだから仕方がない。その代りおれの持つてるものは皆なお前にやるよ」、「……どうも有難う。けれども横文字の本なんか貰っても仕様がないわね」、「……古本屋に売るさ」、「……売ればいくらぐらいになって」、先生はいくらとも言わなかった。けれども先生の話は、容易に自分の死という遠い問題を離れなかった。そうしてその死は必ず奥さんの前に起るものと仮定されていた。奥さんも最初のうちは、わざとたわいのない受け答えをしているらしく見えた。それがいつの間にか、感傷的な女の心を重苦しくした。「……おれが死んだら、おれが死んだらつて、まあ何遍おっしゃるの。後生だからもう好い加減にして、おれが死んだら止して頂戴。縁喜でもない。あなたが死んだら、何でもあなたの思い通りにして上げるから、それで好いじゃありませんか」。(本文)

さて、私は立て掛けた腰をまたおろして、話の区切りの付くまで二人の相手になっていたとある。これは、席を立とうとした時、先生は急に私をつらまえて、「……時にお父さんの病気はどうなんです」と聞かれて、そのままずっと「……話の区切りの付くまで二人の相手になっていた」ことになるが、そこには先生の「このような展開」に持っていたという「思惑」(企て)があったのかどうかは判別しがたいが、先生は、「……君はどう思います」と聞くのであった、「私」という人は、——先生が先へ死ぬか、奥さんが早く亡くなるか、固より私に判断のつくべき問題ではなかった。私はただ笑っていた。「……寿命は分りませんね。私にも」、「……こればかりは本当に寿命ですからね。生れた時にちゃんと極った年数をもらって来るんだから仕方がないわ。先生のお父さんやお母さんなんか、ほとんど同じよ、あなた、亡くなったのが」、「……亡くなられた日ですか」、「……まさか日まで同じじゃないけれども。でもまあ同じよ。だって続いて亡くなつちまつたんですもの」、「この知識は私にとつて新しいものであったとある。

これは、第三部(先生と遺言)を読めば、すぐにも分かることであるが、先生が「中学三年」の終わりの頃に、父親が「腸チフス」の病気になり、それを看護していた「奥さん」もその「腸チフス」の病気になってしまい、結局、二人とも「ほぼ同じ時期」に死んでしまったということである。一方、私にとつてはこの「知識」は新しいものであったので、私は不思議に思った。「……どうしてそう一度に死なれたんですか」と聞くと、奥さんは私の問いに答えようとしたが、先生はそれを遮った。「……そんな話はお止しよ。つまりないから」と言い、先生は手に持った団扇をわざとばたばた言わせたのである。——それでは、なぜそのようなことを敢えてしたのか問えば、それは、「先生」にはまだ「言うべき言葉」が残っていたからであり、それは、次のようなものである。

さて、大事なのは、この後であり、先生は、奥さんの方をまた顧みて、「……静、おれが死んだらこの家をお前にやろう」と言う。すると、奥さんは笑い出した。「……ついでに地面も下さいよ」と言うと、先生は、「……地面は他のものだから仕方がない。その代りおれの持つてるものは皆なお前にやるよ」と言う。奥さんは、「……どうも有難う。けれども横文字の本なんか貰っても仕様がないわね」と言うと、先生は、「……古本屋に売るさ」と言う。奥さんは、「……売ればいくらぐらいになって」と聞くと、先生はいくら

とも言わなかったとある。——これは、一体、何かと問えば、これは、結局、先生が死んだ後の、いわば「先生の遺言」のような「内容」になっているのである。

そのように、先生の話は、容易に「自分の死」という「遠い問題」を離れなかった。そして、その「死」は、必ず「奥さんの前に起るもの」（つまり「先生が先に死ぬもの」と仮定されていたのである。——これは、結局、先生には「自殺願望」があつて、それゆえ、先生の「本心」というのは、一つは、「……己が死んだらお前はどうかと、奥さんの本心が聞きたいのであり」、そして、もう一つは、「……静、おれが死んだらこの家をお前にやろう」と言い、また、「……地面は他のものだから仕方がないが、その代りおれの持つてるものは皆なお前にやるよ」と言う。これは、結局、先生が死んだ後の、いわば「先生の遺言」のような「内容」になっているのである。

一方、奥さんも、最初のうちは、わざとたわいのない受け答えをしているらしく見えたが、それがいつの間にか、感傷的な女の心を重苦しくした。（これは「実際に夫が先に死んだらと思つたら、急に心が重苦しくなった」ということである）。だからこそ、次のように言うのである。つまり、「……おれが死んだら、おれが死んだらつて、まあ何遍おっしゃるの。後生だからもう好い加減にして、おれが死んだら止して頂戴。縁喜でもない。あなたが死んだら、何でもあなたの思い通りにして上げるから、それで好いじゃありませんか」と言う。——これは、奥さんは、本気で怒つて、いるのであり、それだけ奥さんは、心の底から先生のことを大事に思い、そして、心から愛しているのである。

六二、先生宅の玄関先にある木犀の木を見て（三十五）

先生は庭の方を向いて笑つた。しかしそれぎり奥さんの厭がる事を言わなくなった。私もあまり長くなるので、すぐ席を立つた。先生と奥さんは玄関まで送つて出た。「……病人をお大事に」と奥さんが言つた。「……また九月に」と先生が言つた。——私は挨拶をして格子の外へ足を踏み出した。玄関と門の間にあるこんもりした木犀の一株が、私の行手を塞ぐように、夜陰のうちに枝を張つていた。私は二、三步動き出しながら、黒ずんだ葉に被われているその梢を見て、来たるべき秋の花と香りを想い浮べた。私は先生の宅とこの木犀とを、以前から心のうちで、離す事の出来ないもののように、いつしよに記憶していた。私が偶然その樹の前に立つて、再びこの宅の玄関を跨ぐべき次の秋に思いを馳せた時、今まで格子の間から射していた玄関の電燈がふつと消えた。先生夫婦はそれぎり奥へ這入つたらしかなかった。私は一人暗い表へ出た。

私はすぐ下宿へは戻らなかつた。国へ帰る前に調える買物もあつたし、ご馳走を詰めた胃袋にくつろぎを与える必要もあつたので、ただ賑やかな町の方へ歩いて行つた。町はまだ宵の口であつた。用事もなさそうな男女がぞろぞろ動く中に、私は今日私といつしよに卒業したなにかしに会つた。彼は私を無理やりある酒場へ連れ込んだ。私はそこで麦酒の泡のような彼の気餼を聞かされた。私の下宿へ帰つたのは十二時過ぎであつた。（本文）

*

*

さて、先生は庭の方を向いて笑つた。しかしそれぎり奥さんの厭がる事を言わなくなつたとある。——これは、先生がぜひとも「……聞きたかつたこと、また、言い残しておきたかつたこと」は、一通り言えたからであろう。私はあまり長くなるので、すぐ席を立つ

たとある。先生と奥さんは玄関まで送って出た。「……ご病人をお大事に」と奥さんが言った。「……また九月に」と先生が言った。——これは、非常に「大事な言葉」であり、先生は、この時にはまだ「……自殺のことなど考えてはいなかった」ということである。私は、挨拶をして格子の外へ足を踏み出した。「玄関と門」との間にあるこんもりした木犀の一株が、私の行手を塞ぐように、夜陰のうちに枝を張っていたとある。——まず、「木犀」の木であるが、これは、中国から入って来た「木」であり、一般には、有名な「金木犀」と「銀木犀」とがあり、「金木犀」は、小さな橙色の花を無数に咲かせて、甘い香りが漂う。一方、「銀木犀」は、小さな白い花を無数に咲かせて、香りは、金木犀に比べると弱い。どちらも実は結ばず、花は、毎年秋の十月頃に咲き匂うことになるのである。

私は二、三步動き出しながら、黒ずんだ葉に被われていたその梢を見て、来たるべき秋の花と香りを想い浮べた。私は先生の宅とこの木犀とを、以前から心のうちで、離す事のできないもののように、一所に記憶していた。私が偶然その樹の前に立って、再びこの宅の玄関を跨ぐべき次の秋に思いを馳せた時、今まで格子の間から射していた玄関の電燈がふつと消えた。先生夫婦はそれぎり奥へ這入ったらしかった。私は一人暗い表へ出たとある。——例えば、「……私が偶然その樹の前に立って、再びこの宅の玄関を跨ぐべき次の秋に思いを馳せた時、今まで格子の間から射していた玄関の電燈がふつと消えた」とある。これなどはほとんど誰も気づかないほどの自然な描写であるが、しかし、これは、実は暗に「或る事」を暗示しているのである。それは、次のようなことである。

つまり、この「私」という人が、再び、九月、この「先生の宅」にやって来るのは、実は、先生からの「……この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう」という「長い手紙」（先生の遺書）を受け取って、急遽、慌てて「汽車」に乗り込んで、「先生の宅」へと駆けつけるといふ展開になるのである。

また、「……私は一人暗い表へ出た」とあるが、これなども先生が亡くなりいなくなれば、再び、この「先生の宅」を、再び、訪ねることもなく、また、親しく人生を語り合える唯一無二の「話し相手」もいなくなり、結局は、「……私は一人暗い表（世の中）へ出る（放り出される）」しかないということである。

*

*

私はすぐ下宿へは戻らなかった。国へ帰る前に調える買物もあったし、ご馳走を詰めた胃袋にくつろぎを与える必要もあったので、ただ賑やかな町の方へ歩いて行った。町はまだ宵の口であった。用事もなさそうな男女がぞろぞろ動く中に、私は今日私といっしょに卒業したなにかしに会った。彼は私を無理やりにある酒場へ連れ込んだ。私はそこで麦酒の泡のような彼の気餼を聞かされた。私の下宿へ帰ったのは十二時過ぎであったとある。

例えば、「……町はまだ宵の口であった。用事もなさそうな男女がぞろぞろ動く中に、私は今日私といっしょに卒業したなにかしに会った。彼は私を無理やりにある酒場へ連れ込んだ。私はそこで麦酒の泡のような彼の気餼を聞かされた」とある。——例えば、用事もなさそうな男女がぞろぞろ動く姿や、今日私といっしょに卒業したなにかしに、私は無理やりにある酒場へ連れ込まれ、そこで「麦酒の泡のような彼の気餼を聞かされた」とあるが、これなども、先生の「……ものの方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などと比べてみると、ほとんど取るに足らない「麦酒の泡のようなものに見えていた」ということになるのだろう。

*

*

六三、帰郷への準備

私はその翌日も暑さを冒して、頼まれものを買集めて歩いた。手紙で注文を受けた時は何でもないように考えていたのが、いざとなると大変臆劫に感ぜられた。私は電車の中で汗を拭きながら、他の時間と手数に気の毒という観念をまるでもっていない田舎者を憎らしく思った。

私はこの一夏を無為に過ごす気はなかった。国へ帰ってからの日程というようなものをあらかじめ作っておいたので、それを履行するに必要な書物も手に入れなければならなかった。私は半日を丸善の二階で潰す覚悟でいた。私は自分に関係の深い部門の書籍棚の前に立って、隅から隅まで一冊ずつ点検して行った。

買物のうちで一番私を困らせたのは女の半襟であった。小僧に言うと、いくらでも出してはくれるが、さてどれを選んでいいのか、買う段になっては、ただ迷うだけであった。その上価が極めて不定であった。安かろうと思つて聞くと、非常に高かつたり、高かろうと考えて、聞かずにいると、かえつて大変安かつたりした。あるいはいくら比べて見ても、どこから価格の差違が出るのか見当の付かないのもあった。私は全く弱らせられた。そうして心のうちで、なぜ先生の奥さんを煩わさなかつたかを悔いた。

私は鞆を買った。無論和製の下等な品に過ぎなかつたが、それでも金具やなどがびかびかしているので、田舎ものを威嚇かすには充分であった。この鞆を買うという事は、私の母の注文であった。卒業したら新しい鞆を買つて、そのなかに一切の土産ものを入れて帰るようにと、わざわざ手紙の中に書いてあった。私はその文句を読んだ時に笑い出した。私には母の料簡が解らないと言うよりも、その言葉が一種の滑稽として訴えたのである。(本文)

*

*

さて、私は、「……その翌日も暑さを冒して、頼まれものを買集めて歩いた。手紙で注文を受けた時は何でもないように考えていたのが、いざとなると大変臆劫に感ぜられた。私は電車の中で汗を拭きながら、他の時間と手数に気の毒という観念をまるでもっていない田舎者を憎らしく思った」とある。——これは、夏の「暑さ」とともに、もともと男性というものは、他人から頼まれた「買い物」などをあちこち買いまわること自体、女性とは違つて、それほど楽しいことではないのである。しかも、自分の時間を奪われ体も疲れるばかり、それが、まさに「……他の時間と手数に気の毒という観念をまるでもっていない田舎者(そういうことが全く分かつていない人)を憎らしく思った」ということである。

一方、私は、一夏を無為に過ごす気はなかった。国へ帰ってからの日程というようなものをあらかじめ作っておいたので、それを履行するに必要な書物も手に入れなければならなかった。私は半日を丸善の二階で潰す覚悟でいた。私は自分に関係の深い部門の書籍棚の前に立って、隅から隅まで一冊ずつ点検して行ったとある。——例えば、「私」という人は、すでに「大学を卒業」しているのである。それゆえ、しばらくは「学問」から離れてもよいのであるが、この「私」という人は、まじめな性格で、「遊ぶ」ことよりは、むしろ「勉学」にこだわっている。また、「就職」はどうするのか? 全くその気がないとすれば、しばらくはぶらぶらするのか、それとも、さらに上の「大学院」へと進むのか、この辺のところは全く分らない。

また、買物のうちで一番私を困らせたのは女の半襟であった。小僧に言うと、いくらでも出してはくれるが、さてどれを選んでいいのか、買う段になっては、ただ迷うだけであった。その上価が極めて不定であった。安かろうと思つて聞くと、非常に高かつたり、高かろうと考えて、聞かずにいると、かえつて大変安かつたりした。あるいはいくら比べて見ても、どこから価格の差違が出るのか見当の付かないのもあった。私は全く弱らせられた。そうして心のうちで、なぜ先生の奥さんを煩わさなかったかを悔いたとある。

例えば、まだ大学出たての若者が、女性の「衣服類」などをあれこれ買い求めるとなれば、まさに「……さてどれを選んでいいのか、買う段になつては、ただ迷うだけであった。その上価が極めて不定であった。安かろうと思つて聞くと、非常に高かつたり、高かろうと考えて、聞かずにいると、かえつて大変安かつたりした。あるいはいくら比べて見ても、どこから価格の差違が出るのか見当の付かないのもあった。私は全く弱らせられた。そうして心のうちで、なぜ先生の奥さんを煩わさなかったかを悔いた」となるのである。

また、私は靴を買つた。無論和製の下等な品に過ぎなかつたが、それでも金具やなどがぴかぴかしているので、田舎ものを威嚇かすには充分であつた。この靴を買うという事は、私の母の注文であつた。卒業したら新しい靴を買つて、そのなかに一切の土産ものを入れて帰るようにと、わざわざ手紙の中に書いてあつた。私はその文句を読んだ時に笑い出した。私には母の料簡が解らないと言うよりも、その言葉が一種の滑稽として訴えたのである。——これは、わが子が「東京の帝国大学」を立派に卒業して晴れがましいぴかぴかの姿で帰つて来る。それは、田舎の人たち（郷里の人たち）にも「自分の息子」をこれでもかと自慢出来るとともに、そのようなことが出来るのが、実の母親にとつては何よりも嬉しく誇らしいことでもあるのだろう。一方、それを「息子」から見れば、一種の滑稽のように感じられたということである。

六四、汽車で故郷へと帰る（三十六）

私は暇乞いをする時先生夫婦に述べた通り、それから三日目の汽車で東京を立つて国へ帰つた。この冬以来父の病氣について先生から色々の注意を受けた私は、一番心配しなければならぬ地位にありながら、どういうものか、それが大して苦にならなかつた。私はむしろ父がいなくなつたあとの母を想像して氣の毒に思つた。そのくらいだから私は心のどこかで、父はすでに亡くなるべきものと覚悟していたに違ひなかつた。九州にいる兄へやつた手紙のなかにも、私は父の到底故のような健康体になる見込みのない事を述べた。一度などは職務の都合もあるうが、出来るなら繰り合せてこの夏ぐらい一度顔だけでも見に帰つたらどうだとまで書いた。その上年寄が二人ぎりでも田舎にいるのは定めて心細いだろう、我々も子として遺憾の至りであるというような感傷的な文句さえ使つた。私は實際心に浮ぶままを書いた。けれども書いたあとの気分は書いた時とは違つていた。

私はそうした矛盾を汽車の中で考えた。考えているうちに自分が自分に氣の変わりやすい軽薄もののように思われて来た。私は不愉快になつた。私はまた先生夫婦の事を想ひ浮べた。ことに二、三日前晩食に呼ばれた時の会話を憶ひ出した。「……どつちが先に死ぬだろう」、私はその晩先生と奥さんの間に起つた疑問を独り口の内でも繰り返して見た。そうしてこの疑問には誰も自信をもつて答える事が出来ないのだと思つた。しかしどつちが先

へ死ぬと判然分っていたならば、先生はどうするだろう。奥さんはどうするだろう。先生も奥さんも、今のような態度でいるより外に仕方がないだろうと思った。(死に近づきつつある父を国元に控えながら、この私がどうする事も出来ないように)。私は人間を果敢ないものに観じた。人間のどうする事も出来ない持つて生れた軽薄を、果敢ないものに観じた。(本文)

*

*

さて、私は暇乞いをする時先生夫婦に述べた通り、それから三日目の汽車で東京を立つて国へ帰った。(だとすれば、七月ということになる)。この冬以来父の病気について先生から色々の注意を受けた私は、一番心配しなければならぬ地位にありながら、どういうものか、それが大して苦にならなかったとある。——これは、まだ若い生命力に満ち溢れている「私」という人にとっては、総じて「人の死」というものは、すべて「他人事」のように見えていて、たとえ「自分の父親」であつても、どこか「真実味」が感じられないようなところがあるのである。それは、なぜかと問えば、それはまだ若いので「死に直結する病気とか老いとか死への恐怖」などは経験もなく、それゆえ、実感として分かりやうがないからである。そして、私はむしろ父がいなくなったあとの母を想像して気の毒に思ったとある。(これはこれでもっともなことではあるが)、そのくらいだから私は心のどこかで、父はずでに亡くなるべきものと覚悟していたに違いなかったとあるが、これは、そのように「父親の死」を軽々しく決めつけて考えてしまうのも、父は、やがて病気で死んでいくという、その医学的「事実」だけを見ていて、今、現に苦しんでいる父親の「悲しみや苦しみ」などが全く実感として理解できていないからである。ただ「頭の中」(或いは「心の中」)であれこれ考えているだけに過ぎないからである。それゆえ、大事なことは、父親の身になって、考えて見れば、今、現に苦しんでいる父親の「悲しみや苦しみ」などがわが身に感じて実感として感じる事ができ得るようになるのである。

*

*

また、九州にいる兄へやった手紙のなかにも、私は父の到底故のような健康体になる見込みのない事を述べた。一度などは職務の都合もあるうが、できるなら繰り合せてこの夏ぐらい一度顔だけでも見に帰ったらどうだとまで書いた。その上年寄が二人ぎりでも田舎にいらぬのは定めて心細いだろう、我々も子として遺憾の至りであるというような感傷的な文句さえ使った。私は實際心に浮ぶまを書いたとある。——これなども、ただ「頭の中」(或いは「心の中」)であれこれ思っているだけに過ぎないのであり、今、現に苦しんでいる父親の「悲しみや苦しみ」などは何一つ実感として理解出来ていないのである。それゆえ、父親の身になって、考えてみる事によつてこそ、初めて、今、現に苦しんでいる父親の「悲しみや苦しみ」などがわが身に感じて実感として感じる事ができ得るようになるのである。——つまり、ただ単に「頭の中」(或いは「心の中」)だけであれこれ考えることと、相手の身になってあれこれ真剣に親身に考えることでは、全く全然違うことになるのである。

それはともかく、「私」という人は、「……私は實際心に浮ぶまを書いた。けれども書いたあとの気分は書いた時とは違っていた」とある。——これは、一方では、「父の病気」をあれこれ心配している自分と、一方では、もう治らないのだとあきらめているさめた自分とがいて、その「矛盾」を感じているということである。

私はそうした矛盾を汽車の中で考えた。考えているうちに自分が自分に気の変りやすい軽薄もののように思われて来た。私は不愉快になった。私はまた先生夫婦の事を想い浮べた。ことに二、三日前晩食に呼ばれた時の会話を憶い出した。「……どっちが先へ死ぬだろう」、私はその晩先生と奥さんの間に起った疑問をひとり口の内で繰り返してみた。そうしてこの疑問には誰も自信をもって答える事が出来ないのだと思った。しかしどっちが先へ死ぬと判然分つていたならば、先生はどうするだろう。奥さんはどうするだろう。先生も奥さんも、今のような態度でいるより外に仕方がないだろうと思つた。(死に近づきつつある父を国元に控えながら、この私がどうする事も出来ないように)。私は人間を果敢ないものに観じた。人間のどうする事も出来ない持つて生れた軽薄を、果敢ないものに観じたとある。——例えば、私は人間を果敢ないものに観じた。それは、人の「生命の果敢なさ」とともに、死に近づきつつある父を前にして、当人も私も医師も、その他、誰でも、どうすることも出来ないままでいるからである。

例えば、人は、やがて「死ぬもの」である。これは、もう何を以てしてもどうにもならない事実である。しかし、生きている間は、誰でも出来るだけ「幸せ」であるべきであり、また、出来るだけ「痛みや苦しみ」などから少しでも解放されているべきである。

例えば、末期ガンのため、死を待つばかりの人がいるとする。この人は、やがて死ぬのだから、苦しんで死のうが楽に死のうがどっちでも結局同じではないかと考えてはいけないのである。——人間は、生きている限りは、死ぬその瞬間まで、出来るだけ「幸せ」であるべきであり、死ぬのは仕方がない。しかし、生きている限りは、少しでもその「痛みや苦しみ」などから解放されて、出来るだけ「幸せな状態」のまま、そして、みんなに「感謝」しながら死んでいく。それが、その人にとっては一番幸せなことであり、また、残された人たちにとっても一番幸せなことになるのである。——これが、まさに「ホスピス」(末期ケア)の根本的な「考え方」になるのである。

上「先生と私」のまとめ

さて、「私」という人が、初めて「先生」とめぐり逢ったのは、夏の鎌倉の海岸（浜辺）の海水浴場であった。そして、その「先生」と何回か浜辺で会って話をするようになるに連れて親しくなり、その後、東京に帰ったあとも、「私」という人は、なぜか「心惹かれる」その「先生」の家を頻繁に訪ねるようになって行くのである。そして、最初、訪ねた時には、留守であり、二度目も留守であると「下女」に言われるが、やがて「奥さん」が出てきて、奥さんは、美しい人であったが、先生は例月その日になると雑司ヶ谷の墓地にある「或る仏」へ花を手向けに行く習慣があるということ、……たった今出たばかりで、十分になるか、ならないかでございませう」と奥さんは氣の毒そうに言うのであった。そこで、私も散歩がてら雑司ヶ谷の「墓地」へと行ってみると、茶店の中から先生らしい人がふいと出て来たので、出し抜けに「先生」と大きな声を掛けると、先生は突然立ち留まって私の顔を見るなり、「どうして……、どうして……」と、異様な調子をもって繰り返されるのであった。もちろん、この墓地の「仏」（親友）との関係においてこそ、先生の「謎」が奥深く隠されているのであるが、私は私がどうしてここへ来たかを先生に話すとともに、その先生の「奥さん」とも次第に親しくなるに連れて、いろいろと話をするようにもなるが、その前に、まず最初は、「恋」（恋愛）は罪悪である、について考えてみたいと思う。

一、恋（恋愛）は罪悪である

まず、本文から引用してみると、「……或る時花時分に私は先生といっしよに上野へ行った。そうしてそこで美しい一对の男女を見た。彼らは睦まじそうに寄り添って花の下を歩いていた。場所が場所なので、花よりもそちらを向いて眼を峙だてている人が沢山あった」とある。そして、「……新婚の夫婦のようだね」と先生が言った。「仲が好さそうです」と私が答えた。そのあと、「……君は恋をした事がありますか」と聞くので、私はないと答えた。「……恋をしたくはありませんか」と言われて、私は答えなかった。「……したくない事はないでしょう」と言うので、「ええ」と答えると、「……君は今あの男と女を見て、冷評しましたね。あの冷評のうちには君が恋を求めながら相手を得られないという不快の声が交っていますよ」と言うので、「……そんな風に聞こえましたか」と応えると、「……聞こえました。恋の満足を味わっている人はもつと暖かい声を出すものです。しかし……しかし君、恋は罪悪ですよ。解っていますか」と先生は言うのであった。私は急に驚かされた。何とも返事をしなかったとある。

さて、先生は、最後のところで、「……君、恋は罪悪ですよ。解っていますか」と言っている。それを聞いて、「私」という人は、「……私は急に驚かされた。何とも返事をしなかった」とある。——これは、まだ若い「私」という人にとっては、確かに「驚くべき言葉」かも知れないが、しかし、人生経験の長い「先生」にとっては、それは、それほど「驚くべき言葉」ではなく、むしろ、「恋」（恋愛）というものは、一方では、実に「花やかなロマンスの一面」を持ちながら、しかし、もう一方では、実に恐ろしい「悲劇の一面」をも持ち合わせていることを、先生は、まさにわが身を以って誰よりも骨身に染みて

よく知っているものであり、だからこそ、「恋」(恋愛)は、罪悪です、と言うのである。

* さて、まだ若い「私」という人は、先生の「恋は罪悪です」という言葉を聞いて、当然の如く、「……なぜですか」と聞くと、「……なぜだか今に解ります。今にじやない、もう解っているはずですよ。あなたの心はとつくの昔からすでに恋で動いているじやありませんか」と言うので、私は一応自分の胸の中を調べて見た。しかし、「……私の胸の中にこれという目的物は一つもありません。私は先生に何も隠してはいないつもりです」と言うと、先生は、「……目的物が無いから動くのです。あれば落ち付けるだろうと思って動きなくなるのです」とある。

* これは、非常に「興味深い言葉」であり、つまり、「恋」というのは、すなわち、何であれ！ ある対象に「心惹かれる」ことであるが、例えば、自分は、「お金」がないから、恐らく、不幸なのだろう。だから、その「お金」(大金)が手に入れば、きっと幸せになれるだろうと思つて、多くの人たちは、まさに「金儲け」に動き出すのである。また、自分は、「恋」(恋愛)をしていないから不幸なのだろう。だから、「恋」(恋愛)をして「恋人」でも出来れば、きっと幸せになれるだろうと思つて、「恋」(恋愛)へと動き出すのである。しかし、「恋」(恋愛)というものは、一方では、確かに、心ときめく、実に「花やかなロマンスの一面」を持ち合わせてはいるが、しかし、もう一方では、実に恐ろしい「悲劇の一面」をも持ち合わせていることを、誰でも、遅かれ早かれ、嫌が上でもまさに「思い知る」ことになるとともに、何らかの「罪の意識」(或いは「良心の呵責」)などにさいなまれることにもなるのである。——つまり、何かが欠けているから、自分は不幸なのだろう。だから、その「欠けているもの」を充たせば、きっと幸せになれるだろうと思つて、われわれ人間というのは、まさにその方向へと「動き出す」のである。

* それはともかく、先生は、「……しかし気を付けないといけない。恋は罪悪なんだから。私の所では満足が得られない代りに危険もないが。——君、黒い長い髪で縛られた時の心持を知っていますか」と聞く、私は想像で知っていた。しかし事実としては知らなかった。いずれにしても先生の言う罪悪という意味は朦朧としてよく解らなかつたとある。——例えば、先生は、「……君、黒い長い髪で縛られた時の心持を知っていますか」と聞いている。これは、例えば、この『こころ』という作品の中でも、例えば、親友とお嬢さんが親しく話をしている場面などに出つくわすと、「先生」という人の「心の中」では、抑え難いほどの「嫉妬心」や「不平・不満」、その他の「負の感情」(恨みや憎しみ)などに襲われてしまうのである。それは、誰の「心の中」でも全く同じことである。——つまり、とても「正気」ではいられないほどの「精神的状態」に深く陥ってしまうのである。それが、まさに「恋」(恋愛)なのである。

* これは、まだ若い「私」という人にとっては、男女間の「恋」(恋愛)については、どうしても、心ときめく、実に「花やかなロマンスの一面」の方ばかりを見てしまう傾向があり、もう一方の、実に恐ろしい「悲劇の一面」の方は、まだ経験がないからなかなかイメージ出来難いのである。——ところが、一方の、先生の方は、男女間の「恋」(恋愛)

については、その実に恐ろしい「悲劇の一面」を、まさに「わが身を以って誰よりも骨身に染みてよく知っている」のであり、だからこそ、「恋」（恋愛）は、罪悪です、と言うのである。しかも、ここで最も大事なことは、——これは、先生だけの問題ではなく、実は、この世の誰であれ、遅かれ早かれ、やがては、嫌が上でもそのことを「思い知る」ことになるとともに、何らかの「罪の意識」（或いは「良心の呵責」）などにさいなまれることにもなるのである。

二、私と奥さんとの最も重要な会話部分

それでは、第一部の「先生と私」という作品の中から、私と奥さんとの最も重要な会話部分を、その「本文」から少し引用してみたいと思うが、それは、次のようなものである。まず、「……先生はなぜああやって、宅で考えたり勉強したりなさるだけで、世の中へ出て仕事をなさらないんでしょう」、「……あの人は駄目ですよ。そういう事が嫌いなんですから」、「……つまり下らない事だと悟っていらつしやるんでしょうか」、「……悟るの悟らないのって、——おそらくそんな意味じゃないでしょう。やっぱり何かやりたいのでしょう。それでいて出来ないんです。だから気の毒ですわ」、「……しかし先生は健康から言って、別にどこも悪いところはないでしょ」、「……丈夫ですとも。何にも持病はありません」、「……それでなぜ活動が出来ないんでしょう」、「……それが解らないのよ、それが解るくらいなら私だって、こんなに心配しやしません。わからないから気の毒でたまらないんです」、「……若い時はあんな人じゃなかったんですよ。若い時はまるで違っていました。それが全く変ってしまったんです」、「……若い時ついでいつ頃ですか」、「書生時代よ」と言うのであった。

では、「……どんなだったんですか」、それは、「……あなたの希望なさるような、また私の希望するような頼もしい人だったんです」、「……それがどうして急に変化なすったんですか」、「……急にじゃありません、段々あななって来たのよ」、「……じゃ先生がそう変って行かれる原因がちゃんと解るべきはずですがね」、「……あなたからそう言われると実に辛いんですが、私にはどう考えても、考えようがないんですもの。私は今まで何遍あの人に、どうぞ打ち明けて下さいって頼んで見たか分りやしません」、「……先生は何とおっしゃるんですか」、「……何にも言う事はない、何にも心配する事はない、おれはこういう性質になったんだからというだけで、取り合ってくれないんです」、「……これでも私は先生のため出来るだけの事はしているつもりなんです」、「……私はどうとう辛防し切れなくなつて、先生に聞きました。私に悪い所があるなら遠慮なく言つて下さい、改められる欠点なら改めるからつて、すると先生は、お前に欠点なんかありやしない、欠点はおれの方にあるだけだと言うんです。そう言われると、私悲しくなつて仕様がなないんです、涙が出てなおの事自分の悪い所が聞きたくなるんです」とある。

すると、「……実は私すこし思いあたる事があるんですけど」、「……先生がああいう風になつた原因についてですか」、「……ええ。もしそれが原因だとすれば、私の責任だけはなくなるんだから、それだけでも私大変楽になれるんですが」、「……どんな事ですか」、「……先生がまだ大学にいる時分、大変仲の好いお友達が一人あつたのよ。その方がちやうど卒業する少し前に死んだんです。急に死んだんです」、「……実は変死したんです」、

そして、「……その事があつてから後のちなんです。先生の性質が段々變つて来たのは。なぜその方が死んだのか、私には解らないの。先生にもおそらく解っていないでしょう。けれどもそれから先生が變つて来たと思えば、そう思われたい事もないのよ」、「……しかし人間は親友を一人亡くしただけで、そんなに變化出来るものでしょうか。私はそれが知りたくって堪たまらないんです。だから、そこを一つあなたに判断して頂きたいと思うの」、私の判断はむしろ否定の方に傾いていた。

三、「外的事実」と「内的事実」

さて、これらが、まさに「先生と私」という第一部における、「私」(或いは「奥さん」という第三者から見た(つまり「外から見た」)時の「先生」という存在の描写(理解)であり、それは、まさに「外的事実」にあたるものである。そして、その最も「核心部分」については、第三者である「私」(或いは「奥さん」)からは、どうしても解くことができ得ない、まさに大きな「謎」として残されたままになるのである。

むろん、この問題は、彼らだけに限ったことではなく、実は、すべての人間に当てはまることなのである。——つまり、われわれ人間というのは、その人の「表面的な現象」(つまりその人の表面的な「姿・形」すがたかたち)やその人の表面的な「言動」などを見聞きしては、この人は、こういう人、あの人は、ああいう人と、勝手に決めてかかっているところがあるかと思う。そして、そのような傾向がはつきりとあるからこそ、われわれ人間というのは、どうしても「外的事実」というものを、より重視するようになるとともに、結局は、それによつて、自分というものを少しでもよく見せようとするにもなるのである。

つまり、「外的事実」というのは、その人の「身体的特徴」(容姿・容貌)などをはじめ、外に現われる様々な言動、例えば、仕事、生活、趣味、娯楽、遊び、その他等で、その時々表れる、その人の「顔の表情、しぐさ、言葉や行動、その他」、それらに加えて、その人の「生い立ち、年齢、学歴、職歴、生活状況、時代的背景、その他」等である。

一方、「内的事実」というのは、われわれ人間の「頭の中」(或いは「心の中」)に生じて来る様々な「思いや考えあるいは欲望や感情」などであるが、それを大きく三つに分けてみると、一つは、「表面的部分」として、その時々生じる様々な「思いや考えあるいは欲望や感情、その他」などがあり、一つは、「中間的部分」として、永続して持ち続けている様々な「思いや考えあるいは欲望や感情」などがあり、そして、もう一つは、「深層的部分」としての、今日まで生きてきたその「全過去」(つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」)などの膨大な量の蓄積(蓄え)と遺伝子等があるかと思う。

さて、われわれ人間というのは、どうしてもその人の様々な「外的事実」を見ているのであり、その人の「内的事実」が、一体、どのようなものであるかは、よく分からないものである。それゆえ、われわれ人間は、どうしてもその人の様々な「外的事実」を見ては、それをもとにして、その人に関してあれこれ判断し、評価しているということである。

一方、その人自身というのは、逆に、その人の「内的事実」を生きているということであり、それゆえ、「外的事実」と「内的事実」との間には、当然のことながら、多かれ少なかれ、ズレがあるということである。——そして、残された「謎」の部分には、まさに第三部の「先生と遺書」というその中なかで、はつきりと語られることになるのである。それは、

先生（自分）という第一者から見た（つまり「内から見た」）時の「先生」（自分自身）という存在の「内的世界」の描写であり、それが、まさに「内的事実」になるのである。

*

*

さて、第一部の終盤（二十一）の「本文」に戻りたいと思うが、それは、次のようなものである。――秋が暮れて、冬が来た時、私は偶然国へ帰らなければならぬ事になった。父はかねてから腎臓を病んで慢性化していたのである。そこで、冬休みになる少し前、先生の所へ行つて、必要な金を一時立て替えてもらい、その晩の汽車で東京を立つたが、父の病気は思ったほど悪くはなかった。私という人は、三人兄妹であり、兄は、九州にいて仕事が多忙、また、妹は他国へ嫁にいき、今は妊娠中であり、二人とも「万一の時」ぐらいしか帰れないという状況であり、一番便利なのは書生をしている私だけであり、母の言いつけ通り、休み前に帰つて来たということが、父には大きな満足であつたとある。

これは、「父親と私」との関係であり、父親の病気は、今は健康そうに見えても、すでに末期に近く、やはりどこかに「心細さ」があつたに違ひなく、一方、「私」という人は、父親と将棋を差しながら、その父親と先生とを比較対照してみると、「……両方とも世間から見れば、生きているか死んでいるか分らないほど大人しい男であつた。他に認められるという点から言えばどっちも零であつた。それでいて、この将棋を差したがる父は、単なる娯楽の相手としても私には物足りなかつた。かつて遊興のために往来をした覚えのない先生は、娯楽の交際から出る親しみ以上に、いつか私の頭（や胸）に影響を与えていた」のである。これは、人間として父親よりも、むしろ先生の方に心惹かれていたということである。そこで、冬休みの尽きる少し前に故郷を立ち、東京へ帰つてみると、松飾はいつか取り払われていて、私は早速先生のうちへ椎茸も手土産に金を返しに行くと、父親の「病気」の話になり、実は奥さんの「母親」も「腎臓病」で亡くなつていたので、その病気のことをよく知つていて、この病気は、「……病気に罹つていながら、気が付かないで平氣でいるのが特徴」であり、十分に注意しなければならぬという話になるのである。

ところで、「私」という人は、その年の六月に卒業を控えていたので、何が何でも四月いっぱいまでには、まさに「卒業論文」を仕上げなければならず、それに専念することとなるが、予定通り書き上げるまでは、先生の敷居を跨がなかつた。そして、「私」が自由になつたのは、初夏の季節（五月）であり、私はすぐ先生の家へ行つたとある。すると、先生は、「……もう論文は片付いたんですか、結構ですね」ということになり、解放された気分だったので、先生を郊外に散歩へと誘い出し、一時間後、蕨とした小高い所には、門の柱に「何々園」（それは「植木屋」であつたが）という標札があり、その中へと二人して入つて行つた。そして、植込の中をうねりして奥へ上ると左側に家があつたが、静かで誰もいなかった。ここで、先生は、「……突然だが、君の家には財産がよっぽどあるんですか」と聞くので、「……あるというほどありません」という展開になるが、先生は、「……君のうちに財産があるなら、今のうちによく始末をつけてもらつておかないといけない。君のお父さんが達者なうちに、貰うものはちゃんと貰つておくようにしたらどうですか。万一の事があつたあとで、一番面倒の起るのは財産の問題だから」と言うのであつた。これは、先生にしては、あまりに実際的なので私は少し驚かされたのである。

しかし、これこそは、まさに「作者」（夏目漱石）がどうしても書き遺しておきたかつ

た「本題」の一つであり、それは、次のようなことである。まず、本文では、「……君は今、君の親戚なぞの中に、これと言って、悪い人間はいないようだといいましたね。しかし悪い人間という一種の人間が世の中にあると君は思っているんですか。そんな鑄型に入れたような悪人は世の中にあるはずがありませんよ。平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざという間に、急に悪人になるんだから恐ろしいのです。だから油断が出来ないんです」と言うのであった。

これに対して、「私」という人は、「……さきほど先生の言われた、人間は誰でもいざという間に悪人になるんだという意味ですね。あれはどういう意味ですか」と聞くと、先生は、「……意味と言って、深い意味はありません。——つまり事実なんです。理屈じゃないんだ」、「……事実で差支えありませんが、私の伺いたいのには、いざという間にという意味なんです。一体どんな場合を指すのですか」と聞くと、先生は笑い出して、「……金さ君。金を見ると、どんな君子でもすぐ悪人になるのさ」と答えた。私には先生の返事があまりに平凡過ぎて詰らなかつたとある。

四、人に裏切られる

やがて、先生は、「……私は他に欺かれたのです。しかも血のつづいた親戚のものから欺かれたのです。私は決してそれを忘れないのです。私の父の前には善人であつたらしい彼らは、父の死ぬや否や許しがたい不徳義漢に変わったのです。私は彼らから受けた屈辱と損害を小供の時から今日まで背負わされている。恐らく死ぬまで背負わされ通してしよう。私は死ぬまでそれを忘れる事が出来ないんだから。しかし私はまだ復讐をしにいます。考えると私は個人に対する復讐以上の事を現にやっているんだ。私は彼らを憎むばかりじゃない、彼らが代表している人間というものを、一般に憎む事を覚えたのです」とある。これは、一体、どういう「意味合い」になるのかと問えば、それは、次のようなことである。つまり、「……（心から）信じていた人間から思いも寄らず裏切られてしまうと、その衝撃は、あまりにも強烈であり、そのために、心は深く傷つき、やがて、人間不信や人間嫌いなどに深く陥りやすい」ということである。——それは、例えば、（心の底から）信じていた「……祖父母、両親（父や母）、夫、妻、兄弟（姉妹）、わが子、孫、親戚、その他」などをはじめ、（心から）信じていた「……恩師、先生、監督、コーチ、リーダー、上司、部下、同僚、親友、友だち、仲間、恋人、愛人、その他」などから思いも寄らず裏切られてしまうと、その衝撃は、あまりにも強烈となり、そのために、心は深く傷つき、やがて、人間不信や人間嫌いなどに深く陥りやすい」ということである。

ふつう、われわれ人間というのは、「他人」というものをそれほど深くは信用していないものである。それゆえ、それほど信用していない「他人」からたとえ裏切られても、われわれ人間というのは、（ある程度はそういうこともある）とあり得るだろうと想定している（ので）、それほど深くは傷つかないものであり、確かに、その時には相手を心から強く恨んだり憎んだり呪つたりもするが、やがてはうすれていくものである。それゆえ、ここで最も大事なことは、われわれ人間が真に深く傷つくのは、まさに（心の底から）信じていた人間に裏切られた時であり、それは、先生のように、その衝撃は、あまりにも強烈となり、そのために、心は深く傷つき、やがて、人間不信や人間嫌いに深く陥りやすいということである。

ある。(むろん、これだけでは、まだ「先生のような人間」にはならないのである。)

さて、本文に戻りたいと思うが、それは、「……あなたは私の思想とか意見とかいうものと、私の過去とを、ごちゃごちゃに考えているんじゃないやありませんか。私は貧弱な思想家ですけれども、自分の頭で纏め上げた考えを無闇に人に隠しやしません。隠す必要がないんだから。けれども私の過去を、悉くあなたの前に物語らなくてはならないとなると、それはまた別問題になります」、「……別問題とは思われません。先生の過去が生み出した思想だから、私は重きを置くのです。二つのものを切り離したら、私にはほとんど価値のないものになります。私は魂の吹き込まれていない人形を与えられただけで、満足は出来ないのです」と言う。先生はあきれたと言った風に、私の顔を見ては、「……あなたは大胆だ」と言い、「……ただ真面目なんです。真面目に人生から教訓を受けたのです」と言う、「……私の過去を許してもですか」と、突然、恐ろしい響きを以て、私の耳を打った。「……あなたは本当に真面目ですか」と先生は念を押した。「……私は過去の因果で、人を疑りつけている。だから実はあなたも疑っている。しかしどうもあなただけは疑りたくない。あなたは疑るにはあまりに単純過ぎるようだ。私は死ぬ前にたった一人で好いから、他を信用して死にたいと思っている。あなたはそのたった一人になれますか。なつてくれますか。あなたは腹の底から真面目ですか」、「……もし私の命が真面目なものなら、私の今言った事も真面目です」、私の声は顫えた。「……よろしい」と先生が言った。「……話しましょう。私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう。しかし私の過去はあなたに取ってそれほど有益でないかも知れませんよ。聞かない方が増しかも知れません。ただ、今は話せないんだから、そのつもりでいて下さい」と言うのであった。

その後は、私が卒業したらと、先生の家へ御馳走に招かれていたので、その晩、訪ねてみると、先生は、「御目出とう」と杯を上げ、奥さんは、「結構ね。さぞお父さんやお母さんはお喜びでしょう」と言ってくれた。先生から、「……君は卒業して、これから何をする気ですか」と聞かれ、奥さんは、「先生？ 役人？」と聞くが、「……本当言うと、まだ何を考える考えもないんです。実は職業というものについて、全く考えた事がないからです」と答えると、「……財産があるからそんな呑気な事を言っていられるのですわ」となり、また、財産の問題になるが、これは、やはり家族等が財産(お金)で「骨肉の争い」をする悲惨さを骨身に染みてよく知っていたからであり、その後、夜の十時頃、席を立とうとした時、先生は急に私をつかまえて、「……時にお父さんの病気はどうなんですか」と聞いて来た。そして、「……尿毒症が出ると、もう駄目なんだから」と言うところから、今度は、「……先生と奥さんのどちらが先に死ぬか？」という問題になり、先生は、「……もしおれの方が先へ行くとするね。そうしたらお前どうする」と聞くと、「……どうするって」と、奥さんはそこで口籠り、そして、「……どうするって、仕方がないわ、ねえあなた。老少不定(人の寿命は、決まったものではなく、老人でも若者であっても、いつ死ぬかは分からない) って言うくらいだから」と、奥さんはことさらに私の方を見て笑談らしくこう言ったとある。

さて、ここでの「最大の問題」というのは、もちろん、先生の「……もしおれの方が先

へ行くとするね。そうしたらお前どうする」というこの言葉(問いかけ)であり、これは、まさに先生の心の底からの「問いかけ」であり、それゆえ、この「言葉」に対する反応(答え)が、先生は、ぜひとも知りたかったということである。——一方、奥さんは、通り一遍のありきたりの「答え方」しかしていない。それは、一体、なぜなのか？ それは、先生が近い将来「死ぬ」ということが全く考えられないからであり、若しも先生が病気がちでもあれば、少しは「真実味」を持つが、全くの健康体では、奥さんは、むしろ「自分の方が先に死ぬ」と思っている位なのである。そして、先生は、「……静、おれが死んだらこの家をお前にやろう」、また、「……おれの持っているものも皆お前にやるよ」と、(まるで遺言みたいに)言うのを聞いて、奥さんは、「……おれが死んだら、おれが死んだらって、まあ何遍おっしゃるの。後生だからもう好い加減にして、おれが死んだら止して頂戴。縁喜でもない。あなたが死んだら、何でもあなたの思い通りにして上げるから、それで好いじゃありませんか」と言い、先生は庭の方を向いて笑ったとある。これが奥さんの心の底からの「本心」であり、奥さんは、本気で怒っているのであり、それだけ、いわば「先生」を心の底から愛しているということにもなるのだろう。

*

*

一方、若しも「……奥さんが先に死んだら先生はどうなるのだろうか？」という問題が残されているが、これは、もつとずつと前の段階で、すでに「奥さんと私」との対話の中に出てきたものであり、それは、次のようなものである。——つまり、「私」という人から、「……奥さんは、先生をどのくらい愛していらっしゃるんですか？」と聞かれた時に、奥さんは、「……何もそんな事を聞き直って聞かなくとも好いじゃありませんか」、「……つまり、分り切っているとおっしゃるんですか」、「まあそうよ」、「……そのくらい先生に忠実なあなたが急にいなくなったら、先生はどうなるんでしょう。世の中のどっちを向いても面白そうでない先生は、あなたが急にいなくなったら後でどうなるでしょう。先生から見てじゃない。あなたから見てですよ。あなたから見て、先生は幸福になるでしょうか、不幸になるでしょうか」、「……そりゃ私から見れば分っています。先生は私を離れば不幸になるだけです。あるいは生きていられないかも知れませんよ。そういうと、己惚(おのぼれ)になるようですが、私は今先生を人間として出来るだけ幸福にしているんだと信じていますわ。どんな人があっても私ほど先生を幸福に出来るものはないとまで思い込んでいますわ。それだからこうして落ち付いていられるんです」。「……私は嫌われているとは思いません。嫌われる訳がないんですもの。しかし先生は世間が嫌いなんです。世間というより近頃(ちかごろ)では人間が嫌いになっていくんでしょう。だからその人間の一人として、私も好かれるはずがないじゃありませんか」と答えるのであった。——これが、先生の「謎」に対する、いわば「奥さん」なりの「一つの解釈」(答え)であり、このような「解釈」によって、奥さんの「心」は、いわば「落ち付いていられた」ということになるのだろう。

*

*

夏目漱石の世界
（両親と私）

はじめに

さて、今回は、夏目漱石の世界『こころ』という作品の中の『両親と私』という第二部の「内容」であるが、それは、まず、「私」という人は、東京の帝国大学を無事に卒業をしたので、七月、汽車で故郷へと帰ることになる。その実家での「両親」（父親と母親）、それに父親の「病状悪化」で駆けつける「兄と妊婦の妹代わりの夫」との対話などが主であり、あとは、先生からの電報と手紙、私からの二、三通の手紙という内容である。それは、本文では、次のようになっていいる。

まず、宅へ帰って案外に思ったのは、父の元気がこの前見た時と大して変っていない事であった。そこで、母に「父親」の様子を聞くと、「もう何ともないようだよ。大方好くおなりなんだろう」と、母は案外平気であった。しかし、この「慢性腎臓病」の恐ろしさは、「本人の自覚のないまま病状はどんどん悪化していく病であること」である。

さて、両親は、息子の「卒業祝い」の相談を始めるが、「私」という人は、それには反対で、「あんまり仰山な事は止してください」と言うと、母親は、「仰山仰山とお言いだが、些とも仰山じゃないよ。そう遠慮をお為でない」と言い、また、父親も、「呼ばなくとも好いが、呼ばないとまた何とか言うから」、「東京と違って田舎は蒼蠅からね」と、こうも言うのであった。その結果、「卒業祝い」の日取りは決まるが、その日取りが来る前に、新聞による明治天皇の御病気の報知を受けて、「まあ、（今回は）ご遠慮申した方がよからう」と取りやめになるのであった。

やがて、明治天皇の「崩御」とともに、父親の病状も悪化し、母親は、（夫を少しでも元気づけさせようと）、息子に「先生に就職口を頼んだら」と言うので、「私」という人は、先生に条件の好い「就職口をお願い」の手紙を出す。先生からの返事はいつまで経っても来ない。そこで、九月初め、東京へ出ようと決めるが、その出発日の二日前の夕方に、父親が風呂場で突然に倒れる。しかも、三、四日後、再び風呂場で倒れるという事態となり、そこで最初は兄や妹に父の現状を知らせる長い手紙を出す。やがて急を知らせる電報を兄や妹に急遽打つこととなり、やがて、兄と妊婦の妹代わりの夫が急ぎ駆けつけることになる。そして、天皇の「崩御」から約一ヶ月半後の明治天皇の「御大葬の夜」に「乃木大将の殉死」という大きな出来事が起こるのである。

もちろん、東京にいた先生も、当然のことながら、この「乃木大将の殉死」を、正にその夜の号外で知り、そして、翌「朝」、新聞で乃木大将の死ぬ前に書き残して行ったものを読むことになって、先生は、ある「決心」をして、その日（午前中）に、「私」に「……ちよつと会いたい。来られるかという」電報を打ち、その「電報」が、その日のうちに「私」（実家）へと届くのである。ところが、「私」という人は、父親が重篤であるので、先生に（東京へは）「……行かない」という電報を打つと、その電報を受けた先生は、失望して、二日間、あれこれ深く考え悩み抜いた末に、今度は「……来ないでもよろしい」という「電報」（急報）を打って来るのである。

やがて、父親の病気は最後の一撃を待つ間際まで進んで来て、家のものは運命の宣告が、今日下るか、今日下るかと思つて、毎夜床に這入る、そのような状態が続くなかで、「私」という人は、看護婦を相手に、父の水枕を取り更え、新しい氷を入れた氷嚢を頭の上へ載せていると、兄が廊下伝いに這入って来て、一通の郵便を私の手に渡した。その先生から

の「分厚い郵便物」を看護の合間、合間を見ては、自分の部屋でただ最初から最後までさつと頁を急ぎ開けて見て、それを元の通りに机の上に置こうとした時、ふと結末に近い一旬が眼に入り、それは、「……この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう」というこの言葉に衝撃を受けて、夢中で医者の家へ馳け込み、父はあど何日保つのか聞こうとするが、医者は生憎留守で、そこですぐ俵を停車場へ急がせ、その停車場で紙切れに母や兄宛ての簡単な手紙を書き、それを急ぎ宅へ届けるよう車夫に頼むとともに、思い切った勢いで東京行き汽車に飛び乗り、ごうごう鳴る三等列車の中で、先生の手紙を漸く最初から最後まで読むという内容であり、興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねて見てください。

令和五年一月吉日（決定版）

如月翔悟

目次

二二二

序 はじめに

中、 両親と私

- 一、 冒頭の文章（父親の想い）
- 二、 母親に父の病状を尋ねる（前）
- 二、 父親にその病状を直接聞く（後）
- 三、 赤い飯を炊いて客を呼ぶ相談（前）
- 三、 日取り決めるも天皇の御病気の報知（後）
- 四、 友達や先生に葉書や手紙を書く（前）
- 四、 陛下の御病気と父親の病状（後）
- * * *
- 五、 父親の元気が衰えて行く（前）
- 五、 天皇の崩御と父親の病状の悪化（後）
- 六、 「私」の就職口の問題について（前）
- 六、 母は就職口を先生に頼んだらと（後）
- 七、 先生に就職口のお願いの手紙を出す（前）
- 七、 先生からの返事を待つも来なかった（後）
- * * *
- 八、 九月初め、東京へ出ようと考えた（前）
- 八、 蟬の鳴き声に人の運命の変化も感じ（後）
- 九、 父親が風呂場で突然に倒れる（前）
- 九、 三四日後、再び風呂場で倒れる（後）
- 十、 兄や妹に長い手紙を出す（前）
- 十、 兄や妹に急遽電報を打つ（後）
- * * *
- 十一、 母は先生への手紙をもう一度と（前）
- 十一、 先生への手紙は結局出さなかった（後）
- 十二、 兄や妹の夫が急ぎ駆けつける（前）
- 十二、 先生から最初の電報を受け取る（後）
- 十三、 先生から二度目の電報が来る（前）
- 十三、 作さんという人が見舞いに来る（後）
- * * *
- 十四、 最期の一撃を待つ間際まで（前）
- 十四、 兄と床を並べて寝る私（後）
- 十五、 先生先生とは一体誰の事だ（前）

十五、父の死後、母親を誰が見るのか（後）
十六、父は時々譚言^{うわごと}を言うようになる（前）
十六、先生から分厚い郵便物が届く（後）

*

十七、父親は危険な状態へと陥る（前）
十七、手紙の冒頭部分を読むと（後）

十八、この手紙があなたの手に落ちる頃には（前）
十八、慌^{あわ}てて三等列車に乗り込む（後）

*
*

※ 中 両親と私（概略）

※ 参考文献

中(両親と私)

うさぎ

さて、今度の『両親と私』という第二部の「内容」であるが、それは、次のようなものである。まず、「私」という人は、大学を無事に卒業をしたので、母親に頼まれていた「買い物」（「半襟や鞆」など）と「本や卒業証書」などを新しい鞆につめて、汽車で故郷へと帰る。その実家での「両親」（父親と母親）、それに父親の「病状悪化」で駆けつける「兄と妊婦の妹代わりの夫」との対話などが主であり、あとは、先生からの電報と手紙、私からの二、三通の手紙という内容である。それは、本文では、次のようになっている。

一、冒頭の文章

宅へ帰って案外に思ったのは、父の元気がこの前見た時と大して変っていない事であった。「……ああ帰ったかい。そうか、それでも卒業が出来てまあ結構だった。ちよつとお待ち、今顔を洗って来るから」と言うのであった。

父は庭へ出て何かしていたところであった。古い麦藁帽の後へ、日除のために括り付けた薄汚ないハンケチをひらひらさせながら、井戸のある裏手の方へ廻って行った。

学校を卒業するのを普通の人間として当然のように考えていた私は、それを予期以上に喜んでくれる父の前に恐縮した。「……卒業が出来てまあ結構だ」と、父はこの言葉を何遍も繰り返した。——私は心のうちでこの父の喜びと、卒業式のあった晩先生の家の食卓で、「御目出とう」と言われた時の先生の顔付とを比較した。私には口で祝ってくれながら、腹の底でけなしている先生の方が、それ程にもないものを珍しそうに嬉しがる父よりも、却って高尚に見えた。私は仕舞いに父の無知から出る田舎臭いところに不快を感じ出した。そこで、「……大学ぐらい卒業したって、それ程結構でもありません。卒業するものは毎年何百人だつてあります」と、私はついにこんな口の利きようをした。すると父が変な顔をした。「……何も卒業したから結構とばかり言うんじゃない。そりや卒業は結構に違いなが、おれの言うのはもう少し意味があるんだ。それがお前に解つていてくれさえすれば、……」と言うのであった。

私は父からその後を聞こうとした。父は話したくなさそうであったが、とうとうこう言った。「……つまり、おれが結構という事になるのさ。おれはお前の知ってる通りの病気だろう。去年の冬お前に会った時、ことによるともう三月か四月ぐらいなものだろうと思っていたのさ。それがどういう仕合せか、今日までこうしている。起居に不自由なくこうしている。そこへお前が卒業してくれた。だから嬉しいのさ。せつかく丹精した息子が、自分のいなくなつた後で卒業してくれるよりも、丈夫なうちに学校を出てくれる方が親の身になれば嬉しいだろうじゃないか。大きな考えをもっているお前から見たら、高が大学を卒業したぐらいで、結構だ結構だと言われるのは余り面白くもないだろう。しかしおれの方から見てご覧、立場が少し違っているよ。つまり卒業はお前に取つてより、このおれに取つて結構なんだ。解ったかい」と言うのであった。（本文）

*

*

まず、冒頭で、「……宅へ帰って案外に思ったのは、父の元気がこの前見た時と大して変わっていない事であった」とあるが、これは、まさに「安心」ということであり、父親は、「……ああ帰ったかい。そうか、それでも卒業が出来てまあ結構だった。ちよつとお待ち、今顔を洗って来るから」と、父は庭へ出て何かしていたところであった。そして、父親は、何遍も「……卒業が出来てまあ結構だった」と繰り返すのであったが、その言葉の「真意」(本当の「意味合い」)は、「……おれはお前の知ってる通りの病気だろう。去年の冬お前に会った時、ことによるともう三月か四月ぐらいなものだろうと思っていたのさ。それがどういふ仕合せか、今日までこうしている。起居に不自由なくこうしている。そこへお前が卒業してくれた。だから嬉しいのさ。せつかく丹精した息子が、自分のいなくなつた後で卒業してくれるよりも、丈夫なうちに学校を出てくれる方が親の身になれば嬉しいだろう。大きな考えをもっているお前から見たら、高が大学を卒業したぐらいで、結構だ結構だと言われるのは余り面白くもないだろう。しかしおれの方から見てご覧、立場が少し違っているよ。つまり卒業はお前に取つてより、このおれに取つて結構なんだ。解つたかい」と言うのであった。これは、まさに世の中のすべての「親心」を代弁したような言葉であり、私は一言もなかったとある。

*

*

さて、本文に戻つて、「……私は一言もなかった。詫まる以上に恐縮して俯向いていた。父は平気なうちに自分の死を覚悟していたものと見える。しかも私の卒業する前に死ぬだろうと思ひ定めていたと見える。その卒業が父の心にどのくらい響くかも考えずにいた私は全く愚ものであった。私は靴の中から卒業証書を取り出して、それを大事そうに父と母に見せた。証書は何かに押し潰されて、元の形を失っていた。父はそれを鄭重に伸した。「……こんなものは巻いたなり手に持つて来るものだ」、「……中に心でも入れると好かつたのに」と母も傍から注意した。

父はしばらくそれを眺めた後、起つて床の間の所へ行つて、誰の目にもすぐ這入るような正面へ証書を置いた。何時もの私ならすぐ何とかという筈であったが、その時の私はまるで平生と違つていた。父や母に対して少しも逆らう気が起らなかつた。私はだまつて父の為すがままに任せておいた。一旦癖のついた鳥の子紙(上質の和紙)の証書は、なかなか父の自由にならなかつた。適当な位置に置かれるや否や、すぐ己れに自然な勢いを得て倒れようとした。(本文)

*

*

これは、両親にとつて、長い歳月をかけて、大変な「思いや苦勞」などをしながら育て上げてきたわが子が、めでたくも東京の「帝国大学」(今の東大)を無事に卒業出来たという事で、わが子の将来も「前途洋々」であり、まさに感無量の思ひになっているのであり、(そこが「他人の先生」とは全く違ふところである)。そして、その「証拠」(明かし)としての「卒業証書」に対する両親の「考え方や価値観」と、卒業などは当り前で、ましてやその「証書」などにどれほどの「意味や価値」があるのかと軽く見ていたまだ若い「私」という人の「考え方や価値観」とは全く違つていたということである。

二、母親に父の病状を尋ねる(前)

私は母を蔭へ呼んで父の病状を尋ねた。「……お父さんはあんなに元気そうに庭へ出たり何かしているが、あれでいいんですか」と聞くと、「……もう何ともないようだよ。大方好くおなりなんだろう」と、母は案外平気であった。都会から懸け隔たった森や田の中に住んでいる女の常として、母はこういう事に掛けてはまるで無知識であった。それにしてもこの前父が卒倒した時には、あれほど驚いて、あんなに心配したものを、と私は心のうちで独り異なる感じを抱いた。「……でも医者はその時到底むずかしいって宣告したじやありませんか」と言うと、「……だから人間の身体ほど不思議なものはないと思うんだよ。あれほどお医者が手重く言ったものが、今までしゃんしゃんしているんだからね。お母さんも始めのうちは心配して、なるべく動かさないように思ってたんだがね。それ、あの気性だろう。養生はしなざるけれども、強情でねえ。自分が好いと思ひ込んだら、なかなか私の言う事なんか、聞きそうにもなさらないんだからね」と言うのであった。

私はこの前帰った時、無理に床を上げさして、髭を剃った父の様子と態度を思い出した。「……もう大丈夫、お母さんがあんまり仰山過ぎるからいけないんだ」と言ったその時の言葉を考えてみると、満更母ばかり責める気にもなれなかった。「……しかし傍でも少しは注意しなくっちゃ」と言おうとした私は、とうとう遠慮して何にも口へ出さなかつた。ただ父の病の性質について、私の知る限りを教えるように話して聞かせた。しかしその大部分は先生と先生の奥さんから得た材料に過ぎなかつた。母は別に感動した様子も見せなかつた。ただ「……へえ、やっぱり同じ病気でね。お気の毒だね。いくつでお亡くなりかえ、その方は」などと聞いた。(本文)

*

*

さて、「私」という人は、「……私は母を蔭へ呼んで父の病状を尋ねた」とある。これは、余りにも当然のことであり、この「私」という人が、今、何よりも知りたく心から心配していることは、まさに「……父親の病状が一体どうなっているのか？」ということであり、そこで、「……お父さんはあんなに元気そうに庭へ出たり何かしているが、あれでいいんですか」と聞くと、「……もう何ともないようだよ。大方好くおなりなんだろう」と、母は案外平気であった。都会から懸け隔たった森や田の中に住んでいる女の常として、母はこういう事に掛けてはまるで無知識であったとある。これは、この「病氣」(腎臓病)がいかに「恐ろしいものか」(それは「本人の自覚のないまま病状はどんどん悪化していく病であること」)を知らないということである。

一方、「私」という人は、「……でも医者はあの時到底むずかしいって宣告したじやありませんか」と言うと、「……だから人間の身体ほど不思議なものはないと思うんだよ。あれ程お医者の手重く言ったものが、今までしゃんしゃんしているんだからね。お母さんも始めのうちは心配して、なるべく動かさないように思ってたんだがね。それ、あの気性だろう。養生はしなざるけれども、強情でねえ。自分が好いと思ひ込んだら(つまり『自覚、症状があまりない』)ので、なかなか私の言う事なんか、聞きそうにもなさらないんだからね」と言うのであった。

そこで、私はこの前帰った時、無理に床を上げさして、髭を剃った父の様子と態度を思い出した。「……もう大丈夫、お母さんがあんまり仰山過ぎるからいけないんだ」と言ったその時の言葉を考えると、満更母ばかり責める気にもなれなかつたとある。これは、「見た目」には、父親はいかにも「元気そうに見えた」からであり、それゆえ、「……

：しかし傍でも少しは注意しなくっちゃ」と言おうとした私は、とうとう遠慮して何にも口へ出さなかったとなるのである。ただ父の病の性質について、私の知る限りを教えるように話して聞かせた。(それはこの「病の特徴」を説明したのである)。しかしその大部分は先生と先生の奥さんから得た材料に過ぎなかったとある。

つまり、先生は、「……そんなに容易く考えられる病気じゃありませんよ。尿毒症が出る時、もう駄目なんだから」と言う。尿毒症という言葉も意味も私には解らなかつた。

この前の冬休みに国で医者と会見た時に、私はそんな「術語」をまるで聞かなかつたのである。——さて、この「尿毒症」というのは、「……主に慢性腎不全の末期や、急性腎不全によって、腎臓の機能が落ち、本来ならば排出される毒素や老廃物が血中にたまることの原因でおこる」とある。そして、今日では、それを防ぐために、いわゆる「人工透析」を定期的に行なっているのである。——ところが、当時は、まだそういう治療は受けられず、「……本当に大事にしてお上げなさいよ」と奥さんも言った。「……毒が脳へ廻るようになる時、もうそれつきりよ、あなた。笑い事じゃないわ」となるのである。

しかし、「……母は別に感動した様子も見せなかつた」とあり、ただ「……へえ、やっぱり同なじ病気でね。お気の毒だね。いくつでお亡くなりかえ、その方は」などと聞いたということである。

二、父親にその病状を直接聞く(後)

さて、私は仕方がないから、母をそのままにしておいて直接父に向かつた。父は私の注意を母よりは真面目に聞いてくれた。「……尤もだ。お前の言う通りだ。けれども、己の身体は必竟己の身体で、その己の身体についての養生法は、多年の経験上、己が一番能く心得ているはずだからね」と言うのであつた。それを聞いた母は苦笑した。「……それご覧」と言った。「……でも、あれでお父さんは自分でちやんと覚悟だけはしているんですよ。今度私が卒業して帰つたのを大変喜んでるのも、全くそのためなんです。生きてるうちに卒業は出来まいと思つたのが、達者なうちに免状を持つて来たから、それが嬉しいんだつて、お父さんは自分でそう言っていましたぜ」と言うつと、

母親は、「……そりや、お前、口でこそそうお言いだけれどもね。お腹のなかではまだ大丈夫だと思つてお出なのだよ」、「……そうでしようか」と言うつと、「……まだまだ十年も二十年も生きる気でお出なのだよ。尤も時々はわたしにも心細いような事をお言いだがね。おれもこの分じやもう長い事もあるまいよ、おれが死んだら、お前はどうする、一人でこの家にいる気かなんて」と言うのだと言う。

私は急に父がいなくなつて母一人が取り残された時の、古い広い田舎家を想像して見た。この家から父一人を引き去つた後は、そのまま立ち行くだろうか。兄はどうするだろうか。母は何と言うだろうか。そう考える私はまたこの土を離れて、東京で気楽に暮らして行けるだろうか。私は母を眼の前に置いて、先生の注意——父の丈夫でいるうちに、分けて貰うものは、分けて貰つておけつてという注意を、偶然思い出した。

母親は、「……なにね、自分で死ぬ死ぬつて言う人に死んだ試しはないんだから安心だよ。お父さんなんぞも、死ぬ死ぬつて言いながら、これから先まだ何年生きなさるか分るまいよ。それよりか黙つてる丈夫の人の方が剣呑さ(危険さ)」と言うのであつた。私は

理屈から出たとも統計から来たとも知れない、この陳腐ちんぷなような母の言葉を黙然もくねんと（黙つて）聞いていた。（本文）

*

*

さて、「……私は仕方がないから、母をそのままにしておいて直接父に向かった」とある。そして、父は私の注意を母よりは真面目まじめに聞いてくれた。「……尤もともだ。お前の言う通りだ。けれども、己おれの身体からだは必竟ひつきよう己おれの身体からだで、その己おれの身体からだについての養生法ようじようは、多年の経験上、己おれが一番能く心得ているはずだからね」と言うのであった。これは、まさに「その通り」ではあるが、しかし、父親は、母親と同じように、この「病氣」（腎臓病）（腎臓病）というものがいかに「恐ろしいものか」（それは「本人の自覚のないまま病状はどんどん悪化していく病やまいであること」）を知らないでいるのである。

父親の言葉ことばを聞いた母親は、苦笑をして、「……それご覧な」と言うが、「私」という人は、「……でも、あれでお父さんは自分でちゃんと覚悟かくごだけはしているんですよ。今度私が卒業して帰ったのを大変喜んでるのも、全くそのためなんです。生きてるうちに卒業は出来まいと思つたのが、達者たつしやなうちに免状めんじやうを持つて来たから、それが嬉しいんだって、お父さんは自分でそう言っていましたぜ」と言うのと、

母親は、「……そりや、お前、口でこそそうお言いだけれどもね。お腹なかのなかではまだ大丈夫だと思つてお出いでなのだよ」、「……そうでしょうか」と言うのと、「……まだまだ十年も二十年も生きる気でお出いでなのだよ。尤もとも時々はわたしにも心細いような事をお言いだがね。おれもこの分じやもう長い事もあるまいよ、おれが死んだら、お前はどうする、一人でこの家うちにいる気かなんて」と言うのだと言う。——つまり、母親は、すっかり「樂觀的」（楽観的）になっているが、一方、父親は、むしろ「樂觀と不安」とか複雑くわんざんに入り交じつた「心的状態」（心的状態）になっているのである。

私は急に父がいなくなつて母一人が取り残された時の、古い広い田舎家いなかやを想像して見た。この家いえから父一人を引き去つた後は、そのまま立ち行くだろうか。兄はどうするだろうか。母は何と言うだろうか。そう考える私はまたこの土を離れて、東京で気楽に暮らして行けるだろうか。私は母を眼の前に置いて、先生の注意——父の丈夫たふしでいるうちに、分けて貰もらうものは、分けて貰もらつておけという注意を、偶然思ひ出したとある。——これは、父親が死んだ後、家族は、一体、どうなるのだろうか？ 遺産相続問題を初めとして、実に様々な問題が発生することになるが、しかし、今は、そういう問題はあまり考えたくないという心状こころざしでもあるのだろうか。

また、母親は、「……なにね、自分で死ぬ死ぬつていう人に死んだ試たましはないんだから安心だよ。お父さんなんぞも、死ぬ死ぬつて言いながら、これから先まだ何年生きなさるか分るまいよ。それよりか黙つてる丈夫のの方が剣呑けんおんさ（危険さ）」と言う。これはもちろん、何ら「科学的根拠」も何もないものだが、ただ今は、「夫の病状悪化や死」というものは出来るだけ考えたくないという「心理」でもあり、それゆえ、「樂觀的な発言」が多くなるが、しかし、一方では、若しも「夫の病状が悪化したら」という、一抹いちまつの「不安」も決して消し去ることはでき得ないのである。

三、赤い飯めしを炊たいて客を呼ぶ相談（前）

私のために赤い飯を炊いて客をするという相談が父と母の間に起った。私は帰った当日から、或はこんな事になるだろうと思つて、心のうちで暗にそれを恐れていた。私はすぐ断つた。「……あんまり仰山な事は止してください」と。……

私は田舎の客が嫌いだった。飲んだり食ったりするのを、最後の目的としてやって来る彼らは、何か事があれば好いと言つた風の人ばかり揃つていた。私は子供の時から彼らの席に侍するのを心苦しく感じていた。まして自分のために彼らが来るとなると、私の苦痛は一層甚しいように想像された。しかし私は父や母の手前、あんな野鄙な人を集めて騒ぐのは止せとも言いかねた。それで私はただあまり仰山だからとばかり主張した。

すると、「……仰山仰山とお言のだが、些ども仰山じゃないよ。生涯に二度とある事じゃないんだからね、お客ぐらいするのは当り前だよ。そう遠慮をお為でない」と言うのである。母は私が大学を卒業したのを、ちょうど嫁でも貰つたと同じ程度に、重く見ているらしかつた。「……呼ばなくつても好いが、呼ばないとまた何とか言うから」と、これは父の言葉であつた。父は彼らの陰口を気にしていた。実際彼らはこんな場合に、自分の予期通りにならないと、すぐ何とか言いたがる人々であつた。「……東京と違つて田舎は蒼蠅からね」と、父はこうも言つた。「……お父さんの顔もあるんだから」と母がまた付け加えた。

私は我を張る訳にも行かなかつた。どうでも二人の都合の好いようにしたらと思ひ出した。「……つまり私のためなら、止して下さいと言うだけなんです。陰で何か言われるのが厭だからというご注意なら、そりやまた別です。あなたがたに不利益な事を私が強い主張したつて仕方がありません」と言つと、「……そう理屈を言われると困る」と、父は苦い顔をした。「……何もお前の為にするんじゃないとお父さんがおっしゃるんじゃないけれども、お前だつて世間への義理ぐらひは知つているだろう」と言つ。母はこうなると女だけにしどろもどろな事を言つた。その代り口数から言つと、父と私を二人寄せてもなかなか敵うどころではなかつた。(本文)

*

*

さて、この場面は、所謂「卒業祝い」をどうするかで、三人三様の「考え方」が披瀝されているところであるが、まず、「私」という人は、次のように考えるわけである。つまり、私は帰つた当日から、或はこんな事になるだろうと思つて、心のうちで暗にそれを恐れていた。私はすぐ断つた。「……あんまり仰山な事は止してください」と。

その理由として、「……私は田舎の客が嫌いだった。飲んだり食つたりするのを、最後の目的としてやって来る彼らは、何か事があれば好いと言つた風の人ばかり揃つていた」とある。これは、例えば、「私」の「大学卒業」を心から祝つてくれるような人達ではなく、その「最後の目的」(つまり「真の目的」)は、結局、飲めや歌えのどんちゃん騒ぎの宴会などがしたいだけであり、そういう「どんちゃん騒ぎの宴会」などが出来るような「行事や祝い」その他などがあればよいと思つていような人たちばかりだと思つているのであり、「……私は子供の時から彼らの席に侍するのを心苦しく感じていた。まして自分のために彼らが来るとなると、私の苦痛は一層甚しいように想像された。しかし私は父や母の手前、あんな野鄙(下品で卑しい人)を集めて騒ぐのは止せとも言いかねた。それで私はただあまり仰山だからとばかり主張した」とある。もちろん、これは、この「私」という人がまだ世間をよく知らない若い人ならではの「考え方」に沿つているのであり、

むしろ「飲み食い」だけで人が集まって来るのではなく、むしろ「社会的な付き合い」として人が集まって来るのである。また、「卒業祝い」をするのも、親戚や近所の人たちに自分の息子が無事に「大学を卒業することが出来た」ということでの感謝とそのことを広く知ってもらうためのものでもあるのである。

例えば、「結婚式」や「披露宴」なども全く同じことであるが、それは、今までの「恋人関係」から正式の「夫婦関係」になるためのいわば一つの「社会的な儀式」であり、これによって、二人の「関係」は国や地方自治体などをはじめ、家族や親戚或いは友達関係や世間一般の人たちに認められたまさに正式な「社会的な結びつき」の関係」となり、それによって、地方自治体などからも実に様々な「社会保障」などが得られると共に、いつでもどのようなことを夫婦で行なおうと、それが犯罪的なことでもない限りは、基本的には認められていることであり、早く子供を作った方が良いなどと勧められたりするものだが、それもこれも、まさに「社会的に認められた結びつきの関係」であるからである。

つまり、「恋人関係」と「夫婦関係」との「決定的な違い」は、一体、どこにあるのかと問えば、それは、「恋人関係」とは、すなわち、二人だけが認め合っている「個人的な結びつき」に過ぎず、社会的に認められた関係ではないので、それゆえ、他人から絶えずああでもないこうでもないといふ色々なことを言われ続けることにもなりかねないが、一方、「夫婦関係」の場合は、まさに国や地方自治体などが正式に認めた「社会的な結びつき」であり、それゆえ、夫婦でいつでもどのようなことを行なっても、それが何か犯罪的な事でもない限りは、基本的には認められている「社会的な結びつきの関係」にあり、であり、それゆえ、世間の人たちも、その夫婦が二人でいるのをあれこれ言う人は一人もいないのである。

一方、母親は、「……仰山仰山とお言いだが、些とも仰山じゃないよ。生涯に二度とある事じゃないだからね、お客ぐらいするのは当たり前だよ。そう遠慮をお為でない」と言うのである。母は私が大学を卒業したのを、ちょうど嫁でも貰ったと同じ程度に、重く見ているらしかったとある。それでは、なぜ、母親はこのような「考え方」になるのだろうか？ それは、次のようなことである。

まず、一般論として、父親はふつう「外に働き」に出、子供は「幼稚園」や「学校」などに通うことになる。一方、家に残るのは、ふつう母親であり、実に様々な「家事や育児或いは介護その他」などを行なうことになる。また、昼間、近所の人や知り合いの人などに会えば、そこでいろいろなおしゃべりなどをするにもなるが、その内容の多くは、今日の天気や最近の社会の出来事、また、それぞれの家庭でこういうことがあった、例えば、子供がどうした孫がどうしたなどの話になるかと思うが、そのように「母親」というのは、一般に、最も「近所付き合い」が多いのであり、時には他人の「子供自慢」などを聞かされることもあるかと思うが、そのような中で、「……お宅のお子さんはどうなんですか？」と聞かれた時に、自慢出来るような子供であれば、母親としては誇らしいことにもなるのだろう。ましてや東京の「帝国大学」（今の東大）を無事に卒業出来たということとは、何よりも自慢になるものであり、それゆえ、「……仰山仰山とお言いだが、些とも仰山じゃないよ。生涯に二度とある事じゃないんだからね、お客ぐらいするのは当たり前だよ。そう遠慮をお為でない」と言うことにもなるのである。

また、父親は、「……呼ばなくつても好いが、呼ばないとまた何とか言うから」と、こ

れは父の言葉であった。父は彼らの陰口を気にしていた。実際彼らはこんな場合に、自分たちの予期通りにならないと、すぐ何とか言いたがる人々であった。「……東京と違って田舎は蒼蠅からね」と、父はこうも言った。「……お父さんの顔もあるんだから」と母がまた付け加えたのである。——つまり、日本の「村社会」では、何よりも「しきたりや人間関係」などが最も大事であり、それゆえ、いわば「やるべきこと」を怠れば、村の人たちから、それこそ、何だかんだと陰口を言われることにもなるのである。

それゆえ、私は我を張る訳にも行かなかった。どうでも二人の都合の好いようにしたらと思ひ出した。「……つまり私のためなら、止して下さいと言うだけなんです。陰で何か言われるのが厭だからというご主意なら、そりやまた別です。あなたがたに不利益な事が私が強いて主張したって仕方がありません」と言うのと、「……そう理屈を言われると困る」と、父は苦い顔をした。「……何もお前の為にするんじゃないとお父さんがおっしゃるんじゃないけれども、お前だって世間への義理（社会的な付き合い）ぐらいは知っているだろう」と言う。母はこうなると女だけにしどろもどろな事を言った。その代り口数から言うると、父と私を二人寄せてもなかなか敵うどころではなかったのである。

三、日取り決めるも天皇の御病気の報知（後）

さて、「……学問をさせると人間がとかく理屈っぽくなっていけない」と、父はただこれだけしか言わなかった。しかし私はこの簡単な一句のうちに、父が平生から私に対してもっている不平の全体を見た。私はその時自分の言葉使いの角張ったところに気が付かず、父の不平の方ばかりを無理のように思った。

父はその夜また気を更えて、客を呼ぶなら何日にするかと私の都合を聞いた。都合の好いも悪いもなしにただぶらぶら古い家の中に寝起きしている私に、こんな問いを掛けるのは、父の方が折れて出たのと同じ事であった。私はこの穏やかな父の前に拘泥らない頭を下げた。私は父と相談の上招待の日取りを極めた。

その日取りのまだ来ないうちに、ある大きな事が起った。それは明治天皇の御病気の報知であった。新聞紙ですぐ日本中へ知れ渡ったこの事件は、一軒の田舎家のうちに多少の曲折を経てようやく纏まろうとした私の卒業祝いを、塵のごとくに吹き払った。「……まあ、ご遠慮申した方がよからう」と、眼鏡を掛けて新聞を見ていた父はこう言った。父は黙って自分の病気の事も考えているらしかった。私はついこの間の卒業式に例年の通り大挙へ行幸になった陛下を憶い出したりした。（本文）

*

*

さて、「……学問をさせると人間がとかく理屈っぽくなっていけない」と、父はただこれだけしか言わなかった。しかし私はこの簡単な一句のうちに、父が平生から私に対してもっている不平の全体を見たのである。——これは、もし「学問」（高等教育）などを受けなければ、もっと素直に「親の言うことを聞いてくれる子になった」だろうに、却って「学問」（大学）などを出たがために、親の言うことに対して、いちいち「ああでもないこうでもない」と理屈を付けて反対して来る」ような子になってしまい、それに対して、父親としてははつきりと「不平・不満」を持っているのである。

しかも、「……私はその時自分の言葉使いの角張ったところに気が付かず」とあるが、

これは、いわば親に対して「口幅くちばしつたいことを言う」(つまり「身の程もわきまえず、大きなことや生意気なことを言ったりしていること」)に気づかず、「……父の不平の方ばかりを無理のように思った」とあるが、これも、自分の論理(言い分)の方こそが正しいのに、父親がそれに対して「不平・不満」を持つのは「無理のように」(つまり「間違っている」)ように思ったということである。

ところが、その日取りのまだ来ないうちに、ある大きな事が起った。それは明治天皇の御病気の報知であつた。新聞紙ですぐ日本中へ知れ渡つたこの事件は、一軒の田舎家のうちに多少の曲折を経てようやく纏まとまろうとした私の卒業祝いを、塵ちりのごとくに吹き払つた。「……まあ、(今回は)ご遠慮申した方がよかるう」と、眼鏡を掛けて新聞を見ていた父はこう言つたとある。——この「……明治天皇の御病気とその後崩御その約一ヶ月半後に明治天皇の『御大葬の夜』の乃木大将の殉死」などが、先生の「自殺への決心」への大きな一つの切っ掛けになつて行くものである。ちなみに、「……私はついこの間の卒業式に例年の通り大学へ行幸(天皇のおでかけ)になつた陛下を憶い出したりした」とあるが、これは、当時の「東京帝国大学」の卒業式には、直接、明治天皇が臨席して、成績優秀な卒業生には「銀時計」などを授与したのである。

四、友達や先生に葉書や手紙を書く(前)

小勢こせいな人数にんずには広過ぎる古い家がひっそりしている中に、私は行李こしりを解いて書物を繕ひもとき始めた。何故か私は気が落ち付かなかつた。あの目眩めまぐるしい東京の下宿の二階で、遠く走る電車の音を耳にしながら、頁ページを一枚一枚にまくつて行く方が、気に張りがあつて心持よく勉強が出来た。

私は稍ややともすると机にもたれて仮寝うたたねをした。時にはわざわざ枕まくらさえ出して本式に昼寝を貪むさぼる事もあつた。眼が覚めると、蟬せみの声を聞いた。うつつから続いているようなその声は、急にやかましく耳の底を掻き乱した。私は凝じつとそれを聞きながら、時に悲しい思いを胸むねに抱いだいた。

私は筆を執とつて友達のだれかれに短い端書はがき又は長い手紙を書いた。その友達のあるものは東京に残つていた。あるものは遠い故郷に帰つていた。返事の来るのも、音信たよりの届かないのもあつた。私はもとより先生を忘れなかつた。原稿紙へ細字さいじで三枚ばかり国へ帰つてから以後の自分というようなものを題目にして書き綴つづつたのを送る事にした。私はそれを封じる時、先生は果してまだ東京にいるだろうかと疑うたぐつた。先生が奥さんといつしよに宅うちを空あける場合には、五十恰好がっこうの切下きりさげの女の人がどこからか来て、留守番をするのが例になつていた。私がかつて先生にあの人は何ですかと尋ねたら、先生は何と見えますかと聞き返した。私はその人を先生の親類しんるいと思ひ違えていた。先生は「……私には親類しんるいはありませんよ」と答えた。先生の郷里きょうりにいる続きつづきあいの人々と、先生は一向いっこう音信の取り遣やりりをしていなかった。私の疑問にしたその留守番の女の人は、先生とは縁のない奥さんの方の親戚しんせきであつた。私は先生に郵便を出す時、ふと幅の細い帯を楽たのしに後ろで結んでいるその人の姿を思い出した。もし先生夫婦がどこかへ避暑にでも行つたあとへこの郵便が届いたら、あの切下きりさげのお婆おばさんは、それをすぐ転地先へ送つてくれるだけの気転きてんと親切があるだろうかなどと考えた。そのくせその手紙のうちにはこれという程ほどの必要の事も書いてないのを、

私は能く承知していた。ただ私は淋しかった。そうして先生から返事の来るのを予期してかかった。しかしその返事はついに来なかった。(本文)

*

*

さて、「私」という人は、無事に「大学」を卒業して「実家」に戻っている状態であるが、その実家は、「……小勢な人数には広過ぎる古い家のひっそりしている中に、私は行李を解いて書物を繻き始めた。何故か私は気が落ち付かなかった。あの目眩しい東京の下宿の二階で、遠く走る電車の音を耳にしながら、頁を一枚一枚まくって行く方が、気に張りがあつて心持よく勉強が出来た。私は稍ともすると机にもたれて仮寝をした。時にはわざわざ枕さえ出して本式に昼寝を貪ぼる事もあった。眼が覚めると、蟬の声を聞いた。うつつから続いているようなその声は、急にやかましく耳の底を掻き乱した。私は凝とそれを聞きながら、時に悲しい思いを胸に抱いた」とある。

これは、大学を無事に卒業出来て、今は「ゆつたりとした気分」の状態にあるかと思ふが、しかも、これというはつきりとした「目標」がないために、逆に、毎日だからだと時を過ごしている状態であり、また、「……私は凝と蟬の声を聞きながら、時に悲しい思いを胸に抱いた」とあるが、これも、いわば「……鳴く蟬の明日は無き身の激しさか」ということであり、それは、父親の病状などとも重ね合わせて聞いているのだろう。

そして、暇なので、「……私は筆を執つて友達のだれかれに短い端書又は長い手紙を書いた。その友達のあるものは東京に残っていた。あるものは遠い故郷に帰っていた。返事の来るのも、音信の届かないのもあった。私はもとより先生を忘れなかった。原稿紙へ細字で三枚ばかり国へ帰ってから以後の自分というようなものを題目にして書き綴つたのを送る事にした。私はそれを封じる時、先生は果してまだ東京にいるだろうかと思つた。先生が奥さんといつしよに宅を空ける場合には、五十恰好の切下の女の人はどこから来て、留守番をするのが例になつていた。私がかつて先生にあの人は何ですかと尋ねたら、先生は何と見えますかと聞き返した。私はその人を先生の親類と思ひ違えていた。先生は「……私には親類はありませんよ」と答えた。先生の郷里にいる続きあいの人々と、先生は一向音信の取り遣りをしていなかった。私の疑問にしたその留守番の女の人は、先生とは縁のない奥さんの方の親戚であつた。(これは「先生は親類とは完全に縁を絶つて、」ということである)。私は先生に郵便を出す時、ふと幅の細い帯を楽に後ろで結んでいるその人の姿を思い出した。もし先生夫婦がどこかへ避暑にでも行ったあとへこの郵便が届いたら、あの切下(髪)のお婆さんは、それをすぐ転地先へ送ってくれるだけの気転と親切があるだろうかなどと考えた。そのくせその手紙のうちにはこれという程の必要の事も書いてないのを、私は能く承知していた。ただ私は淋しかった。そうして先生から返事の来るのを予期してかかった。しかしその返事はついに来なかったとある。(その理由は、その頃、先生は「自分の身をどうしたらよいのか?」と深く真剣に考え悩んでいて、それどころではなかったということである。)

四、陛下の御病氣と父親の病状(後)

父はこの前の冬に帰つて来た時ほど将棋を差したがらなくなった。将棋盤はほこりの溜つたまま、床の間の隅に片寄せられてあつた。ことに陛下の御病氣以後父は凝と考え込ん

でいるように見えた。毎日新聞の来るのを待ち受けて、自分が一番先へ読んだ。それからその読がらをわざわざ私のいる所へ持って来てくれた。「……おいご覧、今日も天子様の事が詳しく出ている」と、父は陛下のことを、つねに天子様と言っていた。

「……勿体ない話だが、天子様の御病気も、お父さんのとまあ似たものだろうな」と、こういう父の顔には深い掛念の曇がかかっていた。こう言われる私の胸にはまた父がいっ艶れるか分らないという心配がひらめいた。「……しかし大丈夫だろう。おれのような下らないものでも、まだこうしていられるくらいだから」と、父は自分の達者な保証を自分で与えながら、今にも己れに落ちかかかって来そうな危険を予感しているらしかった。

「……お父さんは本当に病気を怖がってるんですよ。お母さんのおっしゃる通りに、十年も二十年も生きる気じやなさそうですぜ」と言うのと、母は私の言葉を聞いて当惑するような顔をした。「……ちよつとまた将棋でも差すように勧めてご覧な」と言うので、私は床の間から将棋盤を取り卸して、ほこりを拭いた。(本文)

*

*

さて、「……父はこの前の冬に帰って来た時ほど将棋を差したがらなくなった。将棋盤はほこりの溜ったまま、床の間の隅に片寄せられてあった」とある。これは、一体、何を意味するかと問えば、それは、次のようなことである。つまり、前の時には、「将棋」それ自体を差して楽しむことが出来るようなまだ「心の余裕」があつたのである。だからこそ、勝つても負けても、必ず「もう一番」やろうとなるのである。ところが、今回は、「将棋」を差して楽しめるような「心の余裕」はもう無くなっているのである。

ことに陛下の御病氣以後父は凝と考え込んで見るように見えた。そして、「……毎日新聞の来るのを待ち受けて、自分が一番先へ読んだ」とある。——これは、いったい何を意味するかと言えば、この頃は、まだ「ラジオ放送」(大正十四年開始)もなく、それゆえ、世の中の毎日の出来事の「情報源」は、まさにほとんど「新聞紙」によつていたのである。しかも、この頃には、すでに「新聞配達」は行なわれていたので、新聞紙を毎日「朝」読むことが出来たのである。そして、自分が一番先へ読んだ。それからその読がらをわざわざ私のいる所へ持って来てくれた。「……おいご覧、今日も天子様の事が詳しく出ている」と、父は陛下のことを、つねに天子様と言っていた、となるのである。

そして、「……勿体ない話だが、天子様の御病気も、お父さんのとまあ似たものだろうな」と、こういう父の顔には深い掛念の曇がかかっていた。こう言われる私の胸にはまた父がいっ艶れるか分らないという心配がひらめいた。「……しかし大丈夫だろう。おれのような下らないものでも、まだこうしていられるくらいだから」と、父は自分の達者な保証を自分で与えながら、今にも己れに落ちかかかって来そうな危険を予感しているらしかった。「……お父さんは本当に病気を怖がってるんですよ。お母さんのおっしゃる通りに、十年も二十年も生きる気じやなさそうですぜ」と言うのと、母は私の言葉を聞いて当惑するような顔をした。「……ちよつとまた将棋でも差すように勧めてご覧な」と言うので、私は床の間から将棋盤を取り卸して、ほこりを拭いたとある。(この場面は、父親もまた「私」という人も、その病状をかなり深刻に受け止め始めているが、一方、母親は、むしろ不安はよぎっていないながらも、まだ大丈夫だろうと信じたいのである。)

*

*

五、父親の元気が衰^{おと}ろえて行く（前）

五、父親の元気が衰ろえて行く(前)

父の元気は次第に衰えて行つた。私を驚かせたハンケチ付の古い麦藁帽子が自然と閉却されるようになった。私は黒い煤けた棚の上に載っているその帽子を眺めるたびに、父に対して気の毒な思いをした。父が以前のように、軽々と動く間は、もう少し慎んでくれたらと心配した。父が凝と坐り込むようになると、やはり元の方が達者だったのだという気が起つた。私は父の健康についてよく母と話し合った。

「……全く気のせいだよ」と母が言った。母の頭は陛下の病と父の病とを結び付けて考えていた。私にはそうばかりとも思えなかった。「……気じゃない。本当に身体が悪くないんでしょか。どうも気分より健康の方が悪くなって行くらしい」と、私はこう言つて、心のうちでまた遠くから相当の医者でも呼んで、一つ見せようかしらと思案した。「……今年の夏はお前もつまらなからう。せつかく卒業したのに、お祝いもして上げる事が出来ず、お父さんの身体もあの通りだし。それに天子様のご病気で。——いつその事、帰るすぐにお客でも呼ぶ方が好かつたんだよ」と言うのであつた。

私が帰つたのは七月の五、六日で、父や母が私の卒業を祝うために客を呼ぼうと言ひ出したのは、それから一週間後であつた。そうして愈と極めた日はそれからまた一週間の余も先になつていた。時間に束縛を許さない悠長な田舎に帰つた私は、お蔭で好もしくない社交上の苦痛から救われたも同じ事であつたが、私を理解しない母は少しもそこに気が付いていないらしかつた。(本文)

*

*

さて、父の元気は次第に衰えて行つた。その「象徴的なもの」として、「……私を驚かせたハンケチ付の古い麦藁帽子が自然と閉却されるようになった。私は黒い煤けた棚の上に載っているその帽子を眺めるたびに、父に対して気の毒な思いをした。父が以前のように、軽々と動く間は、もう少し慎んでくれたらと心配した。父が凝と坐り込むようになると、やはり元の方が達者だったのだという気が起つた」。私は父の健康についてよく母と話し合った。「……全く気のせいだよ」と母が言った。母の頭は陛下の病と父の病とを結び付けて考えていた。これは、むろん不安ははつきりとよぎつていながらも、まだ大丈夫だろうと信じたのである。

一方、「私」という人は、「……気じゃない。本当に身体が悪かないんでしょか。どうも気分より健康の方が悪くなって行くらしい」と、私はこう言つて、心のうちでまた遠くから相当の医者でも呼んで、一つ見せようかしらと思案した。すると、母親は、「……今年の夏はお前もつまらなからう。せつかく卒業したのに、お祝いもして上げる事が出来ず、お父さんの身体もあの通りだし。それに天子様のご病気で。——いつその事、帰るすぐにお客でも呼ぶ方が好かつたんだよ」と言うのであつた。

これは、母親の「頭の中」(或いは「心の中」)では、息子の晴れ舞台にもなつたであろう「卒業祝い」というものが出来なかつたことを未だ残念がつているのである。一方、「私」という人は、むしろ「……お蔭で好もしくない社交上の苦痛から救われたも同じ事であり」、その中止を密かに喜んでいるのである。

五、天皇の崩御と父親の病状の悪化(後)

さて、崩御の報知が伝えられた時、父はその新聞を手にして、「……ああ、ああ」と言った。「……ああ、ああ、天子様もとうとう御かくれになる。己も……」と、父はその後を言わなかった。

私は黒いすものを買うために町へ出た。それで旗竿の球を包んで、それで旗竿の先へ三寸幅のひらひらを付けて、門の扉の横から斜めに往来へさし出した。旗も黒いひらひらも、風のない空気のなかにだらりと下がった。私の宅の古い門の屋根は藁で葺いてあった。雨や風に打たれたりまた吹かれたりしたその藁の色はとくに変色して、薄く灰色を帯びた上に、所々の凸凹さえ眼に着いた。私はひとり門の外へ出て、黒いひらひらと、白いめりんすの地と、地のなかに染め出した赤い日の丸の色とを眺めた。それが薄汚ない屋根の藁に映るのも眺めた。私はかつて先生から「……あなたの宅の構えはどんな体裁ですか。私の郷里の方とは大分趣が違っていませんか」と聞かれた事を思い出した。私は自分の生れたこの古い家を、先生に見せたくもあつた。また先生に見せるのが恥ずかしくもあつた。

私はまた一人家のなかへ這入った。自分の机の置いてある所へ来て、新聞を読みながら、遠い東京の有様を想像した。私の想像は日本一の大きな都が、どんなに暗いなかでどんなに動いているだろうかの画面に集められた。私はその黒いなりに動かなければ仕末のつかなくなった都会の、不安でざわざわしているなかに、一点の燈火の如くに先生の家を見た。私はその時この燈火が音のしない渦の中に、自然と捲き込まれている事に気が付かなかった。しばらくすれば、その灯もまたふっと消えてしまふべき運命を、眼の前に控えているのだとは固より気が付かなかった。

私は今度の事件について先生に手紙を書こうかと思つて、筆を執りかけた。私はそれを十行ばかり書いて已めた。書いた所は寸々に引き裂いて屑籠へ投げ込んだ。(先生に宛ててそういう事を書いても仕方がないとも思つたし、前例に徴して見ると、とても返事をくれそうになかったから)。私は淋しかった。それで手紙を書くのであつた。そうして返事が来れば好いと思うのであつた。(本文)

*

*

まず、天皇の崩御の報知が伝えられた時、父はその新聞を手にして、「……ああ、ああ」と言った。「……ああ、ああ、天子様もとうとう御かくれになる。己も……」と、父はその後を言わなかった。——これは、父親の受けた「衝撃」がいかに大きかつたかを物語っていると共に、天皇と一緒に何とか頑張つて来たつもりでいたが、天皇の崩御の報知によつて、今度は「己も……」(つまり今度は「己の番か!」)という想いに襲われているのである。そして、「……私は黒いすものを買うために町へ出た。それで旗竿の球を包んで、それで旗竿の先へ三寸幅のひらひらを付けて、門の扉の横から斜めに往来へさし出した。旗も黒いひらひらも、風のない空気のなかにだらりと下がった」とある。

例えば、昔は、祝日には、国旗を掲げる習慣があつたが、今は、どうなのか? それはともかく、旗竿の先端に付いているのは「金色の球」であるが、その旗竿の球を(黒いすもの)で包んで、それで旗竿の先へ三寸幅のひらひらを付けて、門の扉の横から斜めに往来へさし出した。(これは、弔旗で、天皇様への哀悼の意を表す)。旗も黒いひらひらも、風のない空気のなかにだらりと下がった。

私の宅の古い門の屋根は藁で葺いてあった。雨や風に打たれたりまた吹かれたりしたその藁の色はとくに変色して、薄く灰色を帯びた上に、所々の凸凹さえ眼に着いた。私はひとり門の外へ出て、黒いひらひらと、白いめりんすの地と、地のなかに染め出した赤い日の丸の色とを眺めた。それが薄汚ない屋根の藁に映るのも眺めた。私はかつて先生から「……あなたの宅の構えはどんな体裁ですか。私の郷里の方とは大分趣が違っていますかね」と聞かれた事を思い出した。私は自分の生れたこの古い家を、先生に見せたくもなかった。また先生に見せるのが恥ずかしくもあった。——それは、一体、なぜなのか？ 先生の家は、新潟県の地元ではよく知られた「旧家」（名家）であったが、「私」の郷里の宅は、一体、何県にあるのか？ はつきりと明記されていないので、それを敢えて推測してみると、恐らく、次のようになるかと思う。

まず、「私」という人は、友達から鎌倉の海水浴場に来ないかと葉書を受け取る。その友達は、中国（地方）のある資産家の息子で金に不自由のない男であったとある。この友達とはかなり「親しい友達関係」にあるからこそ、わざわざ呼び出されているのだろう。だとすれば、「私」という人は、同じ「中国」（地方）の出身かも知れない。次に、兄は、学問をした結果、今は遠国にいとあり、それは「九州」（地方）である。だとすれば、「私」という人は、当然、九州の人ではない。そして、もう一つは、母親は、「仰山」という言葉（方言）を多用している。この「方言」は、例えば、愛知県、岐阜県、関西方面などでも使われているとあるが、「私」という人には、「名古屋訛りも関西訛りも全くない」ので、「恐らく」この地方の人ではない。また、「中国」（地方）では、岡山や広島の方言として、「仰山」という言葉があるとある。これらを総合してみると、例えば、中国地方（五県）は、鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口県であるが、島根県と山口県は九州に近いので、違うかも知れない。だとすれば、残るは、鳥取県、岡山県、広島県のどれかになるが、恐らく、岡山県か広島県になるのではないかと思う。

ちなみに、昔は「近国、中国、遠国」という呼び方があり、「近国」は、京都や奈良や大阪を中心とした関西地方、「遠国」は、「九州」（地方）（七県）、そして、その中間にあるので「中国」（地方）五県となり、それに「四国」（地方）四県があるのである。

私はまた一人家のなかへ這入った。自分の机の置いてある所へ来て、新聞を読みながら、遠い東京の有様を想像した。私の想像は日本一の大きな都が、どんなに暗いなかでどんなに動いているだろうかの画面に集められた。私はその黒いなりに動かなければ仕末のつかなくなった都会の、不安でざわざわしているなかに、一点の燈火の如くに先生の家を見た。私はその時この燈火が音のしない渦の中に、自然と捲き込まれている事に気が付かなかった。しばらくすれば、その灯もまたふつと消えてしまふべき運命を、眼の前に控えているのだとは固より気が付かなかった。（それは、「先生」の突然の「自殺」であった。）

私は今度の事件（天皇の崩御）について先生に手紙を書こうかと思つて、筆を執りかけた。私はそれを十行ばかり書いて已めた。書いた所は寸々に引き裂いて屑籠へ投げ込んだ。（先生に宛ててそういう事を書いてでも仕方がないとも思つたし、前例に倣して見ると、とても返事をくれそうになかったから）私は淋しかった。それで手紙を書くのであった。そうして返事が来れば好いと思うのであった。「これは、一体、どのような心理かと問えば、それは、先生をいわば「心の抛り所」（一点の燈火）として見ているのであり、それ

ゆえ、手紙を出して、先生から何らの返事も来なければ、淋しいし、また、手紙を出して、先生から何らかの返事が来れば好い（嬉しい）という心理になるのである。」

六、「私」の就職口の問題について（前）

八月の半ばごろになって、私はある朋友から手紙を受け取った。その中に地方の中学教員の口があるが行かないかと書いてあった。この朋友は経済の必要上、自分でそんな地位を探し廻る男であった。この口も始めは自分の所へかかって来たのだが、もつと好い地方へ相談が出来たので、余った方を私に譲る気で、わざわざ知らせて来てくれたのであった。私はすぐ返事を出して断った。知り合いの中には、随分骨を折って、教師の職にあり付きたがっているものがあるから、その方へ廻してやったら好かろうと書いた。

私は返事を出した後で、父と母にその話をした。二人とも私の断った事に異存はないようであった。「……そんな所へ行かないでも、まだ好い口があるだろう」と言うのであった。こう言ってくれる裏に、私は二人が私に対してもっている過分な希望を読んだ。迂闊な父や母は、不相当な地位と収入とを卒業したての私から期待しているらしかったのである。「……相当の口つて、近頃じゃそんな旨い口はなかなかあるものじゃありません。ことに兄さんと私とは専門も違うし、時代も違うんだから、二人を同じように考えられちゃ少し困ります」と言うのと、「……しかし卒業した以上は、少なくとも独立してやって行ってくれなくっちゃ此方も困る。人からあなたの所のご二男は、大学を卒業なすつて何をしてお出でですかと聞かれた時に返事が出来ないようじゃ、おれも肩身が狭いから」と言う。父は洪面をつくった。父の考えは、古く住み慣れた郷里から外へ出る事を知らなかった。その郷里の誰彼から、大学を卒業すればいくら位月給が取れるものだろうと聞かれたり、まあ百円位なものだろうかと言われたりした父は、こういう人々に対して、外聞の悪くないように、卒業したての私を片付けたかったのである。広い都を根拠地として考えている私は、父や母から見ると、まるで足を空に向けて歩く奇体な人間に異ならなかった。私の方でも、実際そういう人間のような気持を折々起した。私はあからさまに自分の考えを打ち明けるには、あまりに距離の懸隔の甚しい父と母の前に黙然としていた。（本文）

*

*

さて、八月の半ばごろになって、私はある朋友から手紙を受け取った。その中に地方の中学教員の口があるが行かないかと書いてあった。この朋友は経済の必要上、自分でそんな地位を探し廻る男であった。この口も始めは自分の所へかかって来たのだが、もつと好い地方へ相談が出来たので、余った方を私に譲る気で、わざわざ知らせて来てくれたのであった。私はすぐ返事を出して断った。知り合いの中には、随分骨を折って、教師の職にあり付きたがっているものがあるから、その方へ廻してやったら好かろうと書いたとある。（例えば、第一部でも、先生や奥さんとの会話の中で、卒業してこれからどうするのという問題が出て来た時に、奥さんが、「……先生？ それともお役人？」という場面があるが、「私」という人は、就職のことはまだ何も考えてはいないと言うのであった。）

私は返事を出した後で、父と母にその話をした。二人とも私の断った事に異存はないようであった。「……そんな所へ行かないでも、まだ好い口があるだろう」と言うのであつ

た。こう言ってくれる裏に、私は二人が私に對してもっている過分な希望を読んだ。迂闊な父や母は、不相当な地位と収入とを卒業したての私から期待しているらしかったのである。「……相当の口つて、近頃じゃそんな旨い口はなかなかあるものじゃありません。ことに兄さんと私とは専門も違うし、時代も違うんだから、二人を同じように考えられちゃ少し困ります」と言くと、「……しかし卒業した以上は、少なくとも独立してやって行つてくれなくっちゃ此方も困る。人からあなたの所のご二男は、大学を卒業なすって何をしてお出でするかと聞かれた時に返事が出来ないようじゃ、おれも肩身が狭いから」と。

父は洪面をつくつた。父の考えは、古く住み慣れた郷里から外へ出る事を知らなかった。その郷里の誰彼から、大学を卒業すればいくら位月給が取れるものだろうと聞かれたり、まあ百円位なものだろうかと言われたりした父は、こういう人々に対して、外聞の悪くないように、卒業したての私を片付けたかったのである。広い都を根拠地として考えている私は、父や母から見ると、まるで足を空に向けて歩く奇体な人間に異ならなかった。私の方でも、実際そういう人間のような気持を折々起した。私はあからさまに自分の考えを打ち明けるには、あまりに距離の懸隔の甚しい父と母の前に黙然としていたとある。——これは、ふつう父や母の方が世間一般の常識的な「考え方」になるかと思うが、それでは、なぜ、「私」という人は、いわゆる「就職」のことを考えようとはしないのだろうか？ それは、恐らく、次のようなことではないかと思う。つまり、「私」という人は、先生から心の底から納得の行くような「人生の教訓」のようなものを得てから、それから「就職先」のことは考えてみたいと思つているのかも知れない。

六、母は就職口を先生に頼んだらと（後）

母は、「……お前のよく先生先生という方にもお願いしたら好いじゃないか。こんな時こそ」と言うのであった。母はこうより外に先生を解釈する事が出来なかった。その先生は私に国へ帰ったら父の生きていううちに早く財産を分けて貰えと勧める人であった。卒業したから、地位の周旋（幹旋）をしてやろうという人ではなかった。「……その先生は何をしているのかい」と父が聞いた。「……何にもしていないんです」と私が答えた。私はとくの昔から先生の何もしていないという事を父にも母にも告げたつもりでいた。そうして父はたしかにそれを記憶している筈であった。「……何もしていないというのは、またどういう訳かね。お前がそれほど尊敬するくらいな人なら何かやっていそうなものがね」と言うのであった。

父はこう言つて、私を諷した。父の考えでは、役に立つものは世の中へ出てみんな相当の地位を得て働いている。必竟やくざだから遊んでいるのだと結論しているらしかった。「……おれのような人間だつて、月給こそ貰つちやいないが、これでも遊んでばかりいるんじゃない」と、父はこうも言った。私はそれでもまだ黙っていた。「……お前の言うような偉い方なら、きつと何か口を探して下さるよ。頼んでご覧なのかい」と母が聞いた。「……いいえ」と私は答えた。「……じゃ仕方がないじゃないか。何故頼まないんだい。手紙でも好いからお出しな」、「ええ」と、私は生返事をして席を立った。（本文）

*

*

さて、母は、「……お前のよく先生先生という方にもお願いしたら好いじゃないか。

こんな時こそ」と言うのであった。母はこうより外に先生を解釈する事が出来なかった。その先生は私に国へ帰ったら父の生きているうちに早く財産を分けて貰えと勧める人であった。卒業したから、地位の周旋（しゅうせん）（斡旋）をしてやろうという人ではなかった。「……その先生は何をしているのかい」と父が聞いた。「……何にもしていないんです」と私が答えた。私はとくの昔から先生の何もしていないという事を父にも母にも告げたつもりでいた。そうして父はたしかにそれを記憶している筈であった。「……何もしないというのは、またどういう訳かね。お前がそれほど尊敬するくらいな人なら何かやっていそうなものだがね」と言うのであった。

父はこう言って、私を諷した。父の考えでは、役に立つものは世の中へ出てみんな相当の地位を得て働いている。必竟（ひつじやう）やくざだから遊んでいるのだと結論しているらしかった。「……おれのような人間だつて、月給こそ貰（もら）つちやいないが、これでも遊んでばかりいるんじゃない」と、父はこうも言った。私はそれでもまだ黙っていた。「……お前の言うような偉い方なら、きつと何か口を探して下さるよ。頼んでご覧なのかい」と母が聞いた。「……いいえ」と私は答えた。「……じゃ仕方がないじゃないか。何故頼まないんだい。手紙でも好（こ）いからお出しな」「ええ」と、私は生返事（なまへんじ）をして席を立ったとある。

これらは、一体、何を意味するのかと問えば、それは、次のようなことである。つまり、「私」という人にとって、「先生」という人は、いわば「人生の何たるかを教えてくれる存在」であり、だからこそ、まさに「先生」と呼んでいるのであり、それゆえ、ただ単に、社会的地位があるとか、人生の成功者であるとか、或いは大学の教授であるとか、その他、そのような人たちを「先生」と呼ぶのとは全く違う意味合いになるのである。例えば、中国の有名な「孔子」という人は、まさに「先生」と呼ばれていたかと思うが、そのような意味合いの「先生」になるのである。

七、先生に就職口のお願いの手紙を書く（前）

父は明らかに自分の病気を恐れていた。しかし医者の方の来るたびに蒼蠅（そうろう）質問を掛けて相手を困らす質（たち）でもなかった。医者の方でもまた遠慮して何とも言わなかった。

父は死後の事を考えているらしかった。少なくとも自分がいなくなった後のわが家を想像して見るらしかった。「……小供（こども）に学問をさせるのも、好（よ）し悪（あ）しだね。せつかく修業をさせると、その小供は決して宅（うち）へ帰って来ない。これじゃ手もなく親子を隔離するために学問させるようなものだ」と言うのであった。

学問をした結果兄は今遠国（えんこく）にいた。教育を受けた因果で、私はまた東京に住む覚悟を固くした。こういう子を育てた父の愚痴（ぐち）はもとより不合理ではなかった。永年（ながねん）住み古した田舎（なかや）家の中に、たった一人取り残されそうな母を描き出す父の想像はもとより淋（さび）しいに違（ちが）いなかった。

わが家は動かす事の出来ないものと父は信じ切っていた。その中に住む母もまた命のある間は、動かす事の出来ないものと信じていた。自分が死んだ後、この孤獨（こどく）な母を、たった一人伽藍堂（がらんどう）のわが家に取り残すのもまた甚（はなは）だしい不安であった。それなのに、東京で好い地位を求めると言って、私を強（し）いたがる父の頭には矛盾があった。私はその矛盾をおかしく思ったと同時に、そのお蔭（かげ）でまた東京へ出られるのを喜んだ。

私は父や母の手前、この地位を出来るだけの努力で求めつつある如くに装おわなくてはならなかった。私は先生に手紙を書いて、家の事情を精しく述べた。もし自分の力で出来る事があったら何でもするから周旋してくれと頼んだ。私は先生が私の依頼に取り合うまいと思いつながらこの手紙を書いた。また取り合うつもりでも、世間の狭い先生としてはどうする事も出来まいと思いつながらこの手紙を書いた。しかし私は先生からこの手紙に対する返事がきつと来るだろうと思つて書いた。(本文)

*

*

さて、父は明らかに自分の病気を恐れていた。しかし医者 of 来るたびに蒼蠅質問を掛けて相手を困らす質でもなかった。医者の方でもまた遠慮して何とも言わなかった。

父は死後の事を考えているらしかった。少なくとも自分がいなくなった後のわが家を想像して見るらしかった。「……小供に学問をさせるのも、好し悪だね。せつかく修業をさせる、その小供は決して宅へ帰つて来ない。これじゃ手もなく親子を隔離するために学問させるようなものだ」と言うのであった。

学問をした結果兄は今遠国にいた。教育を受けた因果で、私はまた東京に住む覚悟を固くした。こういう子を育てた父の愚痴はもとより不合理ではなかった。永年住み古した田舎家の中に、たった一人取り残されそうな母を描き出す父の想像はもとより淋しいに違ひなかつたとある。(親は、子を大事に育て、その子は、すくすくと育ち、やがて巣立つていく。それは、親としては、嬉しいことであるが、また、寂しいことでもあるのだろう。)

わが家は動かす事の出来ないものと父は信じ切っていた。その中に住む母もまた命の間は、動かす事の出来ないものと信じていた。自分が死んだ後、この孤独な母を、たった一人伽藍堂のわが家に取り残すのもまた甚しい不安であった。それなのに、東京で好い地位を求めると言つて、私を強いたがる父の頭には矛盾があつた。私はその矛盾をおかしく思つたと同時に、そのお蔭でまた東京へ出られるのを喜んだ。(母親の面倒は、兄も私も妹も出来そうにないので、当面、親戚の叔父さんにも頼むかという展開へとなるのである……)。

私は父や母の手前、この地位を出来るだけの努力で求めつつある如くに装おわなくてはならなかった。私は先生に手紙を書いて、家の事情を精しく述べた。もし自分の力で出来る事があったら何でもするから周旋してくれと頼んだ。私は先生が私の依頼に取り合うまいと思いつながらこの手紙を書いた。また取り合うつもりでも、世間の狭い先生としてはどうする事も出来まいと思いつながらこの手紙を書いた。しかし私は先生からこの手紙に対する返事がきつと来るだろうと思つて書いたとある。(これらは、まだ若いので、親のことその他のことでも、どうしても自分のことを「第一」《中心》に考えてしまう傾向があるのかも知れない。)

七、先生からの返事を待つも来なかつた(後)

私はそれを封じて出す前に母に向つて言つた。「……先生に手紙を書きましたよ。あなたの仰しやつた通り。一寸読んでご覧なさい」と言つた。

母は私の想像した如くそれを読まなかつた。「……そうかい、それじゃ早くお出し。そんな事は他が気を付けないでも、自分で早くやるものだよ」と言うのであつた。

母は私をまだ子供のように思っていた。私も実際子供のような感じがした。「……しかし手紙じや用は足りませんよ。どうせ、九月にでもなって、私が東京へ出てからでなくっちゃ」と言うと、「……そりゃそうかも知れないけれども、またひよつとして、どんな好い口がないとも限らないんだから、早く頼んでおくに越した事はないよ」と言う。「……ええ。とにかく返事は来るに極つてますから、そうしたらまたお話ししましょう」と。私はこんな事に掛けて几帳面な先生を信じていた。私は先生の返事の来るのを心待ちに待った。けれども私の予期はついに外れた。先生からは一週間経つても何の音信もなかった。「……大方どこかへ避暑にでも行っているんでしよう」と言った。

私は母に向かって言訳らしい言葉を使わなければならなかった。そうしてその言葉は母に対する言訳ばかりでなく、自分の心に対する言訳でもあった。私は強いても何かの事情を仮定して先生の態度を弁護しなければ不安になった。

私は時々父の病気を忘れた。いつそ早く東京へ出てしまおうかと思ったりした。その父自身もおのれの病気を忘れる事があった。未来を心配しながら、未来に対する所置は一向取らなかつた。私はついに先生の忠告通り財産分配の事を父に言い出す機会を得ずに過ぎた。(本文)

*

*

さて、先生からの「返事」は来なかつたが、それには、次のような事情があつたのである。それは、第三部の「先生と遺書」の冒頭部分に出て来るものであるが、それは、次のようなものである。つまり、「……私はこの夏あなたから二、三度手紙を受け取りました。東京で相当の地位を得たいから宜しく頼むと書いてあつたのは、たしか二度目に手に入つたものと記憶しています。私はそれを読んだ時何とかしたいと思つたのです。少なくとも返事を上げなければ濟まんとは考えたのです。しかし自由すると、私はあなたの依頼に対して、まるで努力をしなかつたのです。ご承知の通り、交際区域の狭いというよりも、世の中にたつた一人で暮していると言つた方が適切なくらいの私には、そういう努力を敢えてする余地が全くないのです。しかしそれは問題ではありません。実を言うと、私はこの自分をどうすれば好いのかと思ひ煩らつていたところなのです。このまま人間の中に取り残されたミイラのように存在して行こうか、それとも……その時分の私は『それとも』という言葉を中心で繰り返すたびにぞつとしました。(中略)

その時の私には、あなたというものが殆んど存在していなかつたと言つても誇張ではありません。一歩進めて言うと、あなたの地位、あなたの糊口の資、そんなものは私にとつてまるで無意味なものでした。どうでも構わなかつたのです。私はそれどころの騒ぎでなかつたのです。——宅に相応の財産があるものが、何を苦しんで、卒業するかしないのに、地位地位と言つて藻掻き廻るのか。私はむしろ苦々しい気分で、遠くにいるあなたにこんな一瞥を与えただけでした。私は返事を上げなければ濟まないあなたに対して、言訳のためにこんな事を打ち明けるのです。あなたを怒らすためにわざと無様な言葉を弄するのではありません。私の本意は後をご覧になればよく解る事と信じます。とにかく私は何とか挨拶すべきところを黙っていたのですから、私はこの怠慢の罪をあなたの前に謝したいと思ひます」となるのである。

*

*

八、九月始め、東京へ出ようと考えた（前）

八、九月始め、東京へ出ようと考えた（前）

九月始めになって、私はいよいよまた東京へ出ようとした。私は父に向って当分今まで通り学資を送ってくれるようにと頼んだ。

「……此所こゝにこうしていったって、あなたの仰おつしやる通りの地位が得られるものじゃないですから」と、私は父の希望する地位を得るために東京へ行くような事を言った。「……無論口の見付かるまでで好いですから」とも言った。私は心のうちで、その口は到底私の頭の上に落ちて来ないと思っていた。けれども事情にうとい父はまたあくまでもその反対を信じていた。「……そりや僅わずかの間あいだの事ことだろうから、どうにか都合してやろう。その代り永ながくはいけないよ。相当の地位を得次第しだい独立しなくっちゃ。元来学校を出た以上、出たあくる日から他の世話ひとになんぞなるものじゃないんだから。今の若いものは、金を使う道だけ心得ていて、金を取る方は全く考えていないようだね」と言うのであった。

父はこの外ほかにもまだ色々の小言こごとを言った。その中には、「……昔の親は子に食わせてもらったのに、今の親は子に食われるだけだ」などという言葉があった。それらを私はただ黙って聞いていた。小言が一通り済んだと思つた時、私は静かに席を立とうとした。父はいつ行くかと私に尋ねた。私には早いだけが好かつた。「……お母さんに日を見てもらいなさい」と言うので、「……そうしましょう」と言った。その時の私は父の前に存外おとな大人しかつた。私はなるべく父の機嫌に逆らわずに、田舎いなかを出ようとした。父はまた私を引き留めた。「……お前が東京へ行くと宅うちはまた淋さみしくなる。何しろ己おれとお母さんだけなんだからね。そのおれも身体からださえ達者なら好いが、この様子じゃいつ急にどんな事がないとも言えないよ」と言うのであった。（本文）

*

*

さて、九月始めになって、私はいよいよまた東京へ出ようとした。私は父に向って当分今まで通り「学資」（生活費）を送ってくれるようにと頼んだ。

「……此所こゝにこうしていったって、あなたの仰おつしやる通りの地位が得られるものじゃないですから」と、私は父の希望する地位を得るために東京へ行くような事を言った。「……無論口の見付かるまでで好いですから」とも言った。私は心のうちで、その口は到底私の頭の上に落ちて来ないと思っていた。（これは、言うまでもなく、仕事を探しに行くのではなく、何よりも先生に会いに行くためであり、また、そこで生活するための資金を得るための方便でもある）。けれども事情にうとい父はまたあくまでもその反対を信じていた。「……そりや僅わずかの間あいだの事ことだろうから、どうにか都合してやろう。その代り永ながくはいけないよ。相当の地位を得次第しだい独立しなくっちゃ。元来学校を出た以上、出たあくる日から他の世話になんぞなるものじゃないんだから。今の若いものは、金を使う道だけ心得ていて、金を取る方は全く考えていないようだね」と言うのであった。（これは、まさにその通りであり、若い頃は、親がどれほど苦勞をして金を稼いでいるかなどは全く考えずに、親が金を出すのは当然当たり前あたりまえの如くに考えているのである。）

父はこの外ほかにもまだ色々の小言こごとを言った。その中には、「……昔の親は子に食わせてもらったのに、今の親は子に食われるだけだ」などという言葉があった。（これも非常に興味深い言葉であり、昔は、家のために年季奉公などに出されたりしたものである）。それらを私はただ黙って聞いていた。小言が一通り済んだと思つた時、私は静かに席を立とう

とした。父はいつ行くかと私に尋ねた。私には早いだけが好かった。「……お母さんに日を見てもらいなさい」と言うので、「……そうしましょう」と言った。（これは、よく「その日が大安か仏滅か或いは友引かなど」を見たりするものである）。その時の私は父の前に存外大人しかった。私はなるべく父の機嫌に逆らわずに、田舎を出ようとした。父はまた私を引き留めた。「……お前が東京へ行くと宅はまた淋しくなる。何しろ己とお母さんだけなんだからね。そのおれも身体さえ達者なら好いが、この様子じゃいつ急にどんな事がないとも言えないよ」と言うのであった。（これは、意外と父親は、このまま田舎にいてくれることを密かに望むところも（母親の為にも）少しはあったのかも知れない。しかし、子供の夢や希望また将来のことなどを考え合わせれば、この小さな田舎町に引き留めておくことには、やはり躊躇いが生じているのだろう。）

八、私を取り巻く人の運命が動いているように（後）

私は出来るだけ父を慰めて、自分の机を置いてある所へ帰った。私は取り散らした書物の間に坐って、心細そうな父の態度と言葉とを、幾度か繰り返し眺めた。私はその時また蝉の声を聞いた。その声はこの間、中聞いたのと違って、つくつく法師の声であった。私は夏郷里に帰って、煮え付くような蝉の声の中に凝と坐っていると、変に悲しい心持になる事がしばしばあった。私の哀愁はいつもこの虫の烈しい音と共に、心の底に沁み込むように感ぜられた。私はそんな時にはいつも動かずに、一人で一人を見詰めていた。

私の哀愁はこの夏帰省した以後次第に情調を変えて来た。油蝉の声がつくつく法師の声に変る如くに、私を取り巻く人の運命が、大きな輪廻のうちに、そろそろ動いているように思われた。私は淋しそうな父の態度と言葉を繰り返しながら、手紙を出しても返事を寄こさない先生の事をまた憶い浮べた。先生と父とは、まるで反対の印象を私に与える点において、比較の上にも、連想の上にも、いっしょに私の頭に上り易かった。

私はほとんど父のすべても知り尽くしていた。もし父を離れるとすれば、情合の上に親子の心残りがあるだけであった。先生の多くはまだ私に解っていないかった。話す約束されたその人の過去もまだ聞く機会を得ずにいた。要するに先生は私にとって薄暗かった。私はぜひともそこを通り越して、明るい所まで行かなければ気が済まなかった。先生と関係の絶えるのは私にとって大いな苦痛であった。私は母に日を見てもらって、東京へ立つ日取りを極めた。（本文）

*

*

さて、私は出来るだけ父を慰めて、自分の机を置いてある所へ帰った。私は取り散らした書物の間に坐って、心細そうな父の態度と言葉とを、幾度か繰り返し眺めた。私はその時また蝉の声を聞いた。その声はこの間、中聞いたのと違って、つくつく法師の声であった。私は夏郷里に帰って、煮え付くような蝉の声の中に凝と坐っていると、変に悲しい心持になる事がしばしばあった。私の哀愁はいつもこの虫の烈しい音と共に、心の底に沁み込むように感ぜられた。私はそんな時にはいつも動かずに、一人で一人を見詰めていたとある。——まず、蝉は、ふつうアブラゼミからミンミンゼミへそれからツクツクボウシへと鳴き移って行くものであるが、「……私の哀愁は、いつもこの虫の烈しい音と共に、心の底に沁み込むように感ぜられた」とある。それは、結局、「……鳴く蝉の明日は無き身

の激しさか」ということであり、あれほど激しく鳴いていた蝉も、やがて亡骸となつて死んでしまふ運命であり、そこに「生命の儂さ」を感じているのであり、だからこそ、それが「私の哀愁」となつて行くのである。

つまり、「……私の哀愁は、この夏帰省した以後次第に情調を変えて来た。油蟬の声がつくつく法師の聲に変わる如くに、私を取り巻く人の運命が、大きな輪廻のうちに、そろそろ動いているように思われた」とあるが、それは、明治天皇の崩御をはじめ、父親の病状の悪化、そして、先生のまさかの自殺という、そのような私を取り巻く人の運命の変化を、「私」という人は、なぜか蝉の鳴き声の変化から感じていたのである。

そして、父と先生とは、まるで反対の印象を私に与える点において、比較の上にも、連想の上にも、いっしょに私の頭に上り易かった。——私はほとんど父のすべても知り尽くしていた。もし父を離れるとすれば、情合の上に親子の心残りがあただけであった。先生の多くはまだ私に解つていなかった。話すと約束されたその人の過去もまだ聞く機会を得ずにいた。要するに先生は私にとつて薄暗かった。(だからこそ、もつと知りたいという強い欲求となり)、私はぜひともそこを通り越して、明るい所まで行かなければ気が済まなかった。先生と関係の絶えるのは私にとつて大いな苦痛であった。私は母に目を見てもらつて、東京へ立つ日取りを極めた。(それは早く先生に会いたいということでもある。)

ちなみに、蝉については、「子供の遊び4」で書いた内容があるので、それを参考程度に引用してみると、それは、次のようなものである。

まず、初夏から秋にかけては、様々な『セミ』の鳴き声が聞こえて来ると思うが、例えば、ジージーと鳴くアブラゼミや、チーチーと鳴くのが、ニンニンゼミであり、カナカナと鳴くのは、ヒグラシ(カナカナ)であり、また、ミンミンと鳴くのは、ミンミンゼミであり、そして、オーシーシクシクと鳴くのが、ツクツクボウシである。

ところで、その「セミの一生」というのは、まず樹皮の下などに産みつけられたタマゴは、翌年の梅雨の時期に「幼虫」となり、その「幼虫」は、木から下りて、土の中で生活をするようになるが、その「土の中」での生活がかなり長くて、主に木の根の汁などを吸つて生活している。——例えば、ツクツクボウシは、約一〜二年、アブラムシとミンミンゼミは、約二〜四年、クマゼミは、約二〜五年、そして、ニイニイゼミは、約四〜五年ぐらいとされているが、むしろ、それらは、それぞれ育つ「環境や個体差」などによつても違いは生じて来るものであり、長い間、その「土の中」で十分に成長した「幼虫」から、やがて、夕方頃、地上に出て来て、近くの木の幹に登り、そこで日没頃から「脱皮」を始めて、約二、三時間ぐらいで「成虫」(セミ)となるのだそうである。そして、その「成虫」(セミ)というのは、木の幹の「樹液」を吸つて生きているが、オスもメスも「種族保存欲」(それは「交尾と産卵」とを終えて、約二週間から一ヶ月ぐらいで死んでしまふのだそうである。また、セミの「発音器」は、オスのセミの「腹の基部」にあり、その「発音筋」を収縮させて音を出し、それが「共鳴室」で拡大されて、大きな音となつて外に出て来るのだそうであるが、鳴くのはオスだけである。

九、父親が風呂場で倒れる(前)

私がいよいよ立とうという間際になつて、(たしか二日前の夕方の事であつたと思うが、)

また繰り返した。その時は果して口で言った通りまあ大丈夫であった。私は今度も或はそうなるかも知れないと思った。しかし医者はまだ用心が肝要だと注意するだけで、念を押しても判然した事を話してくれなかった。私は不安のために、出立の日が来てもついに東京へ立つ気が起らなかった。(これは、緊急事態発生でもう仕方のないことである。)

「……もう少し様子を見てからにしましょうか」と私は母に相談した。「……そうしておくれ」と母が頼んだ。母は父が庭へ出たり背戸へ下りたりする元気を見ている間だけは平気でいるくせに、こんな事が起るとまた必要以上に心配したり気を揉んだりした。「……お前は今日東京へ行く筈じゃなかったか」と父が聞いた。「……ええ、少し延ばしました」と私が答えた。「……おれのためにかい」と父が聞き返した。

私はちよつと躊躇した。そうだと云えば、父の病気の重いのを裏書きするようなものであった。私は父の神経を過敏にしたくなかった。しかし父は私の心をよく見抜いているらしかった。「……気の毒だね」と言つて、庭の方を向いたとある。

これは、父親も、自分の「病状の悪化」をはっきりと自覚しているとともに、息子に「余計な心配」をかけていることに「済まないね」(気の毒だね)と言っているのである。

九、三、四日後、再び風呂場で倒れる(後)

私は自分の部屋に這入つて、そこに放り出された行李を眺めた。行李はいつ持ち出しても差支ないように、堅く括られたままであった。私はぼんやりその前に立つて、また繩を解こうかと考えた。

私は坐つたまま腰を浮かした時の落ち付かない気分で、また三、四日を過ぎた。すると父がまた卒倒した。医者は絶対に安臥を命じた。「……どうしたものだろうね」と母が父に聞こえないような小さな声で私に言った。母の顔は如何にも心細そうであった。私は兄と妹に電報を打つ用意をした。けれども寝ている父には殆んど何の苦悶もなかった。話をするところなどを見ると、風邪でも引いた時と全く同じ事であった。その上食欲は不断よりも進んだ。傍のものが、注意しても容易に言う事を聞かなかった。「……どうせ死ぬんだから、旨いものでも食つて死ななくっちゃ」と言うのであった。

私には旨いものという父の言葉が滑稽にも悲酸にも聞こえた。父は旨いものを口に入れられる都には住んでいなかったのである。夜に入つてかき餅などを焼いてもらつてぼりぼり噛んだ。「……どうしてこう渴くのかね。やっぱりに心に丈夫の所があるのかも知れないよ」と、母は失望していいところに却つて頼みを置いた。そのくせ病気の時にしか使われない渴くという昔風の言葉を、何でも食べたがる意味に用いていた。

伯父が見舞に来たとき、父はいつまでも引き留めて帰さなかった。淋しいからもつと居てくれというのが重なる理由であったが、母や私が、食べたいだけ物を食べさせないという不平を訴えるのも、その目的の一つであつたらしい。(本文)

*

*

さて、私は自分の部屋に這入つて、そこに放り出された行李を眺めた。行李はいつ持ち出して差支ないように、堅く括られたままであった。私はぼんやりその前に立つて、また繩を解こうかと考えた。——私は坐つたまま腰を浮かした時の落ち付かない気分で、また三、四日を過ぎた。すると父がまた卒倒した。医者は絶対に安臥を命じた。(この

ように頻繁に「卒倒」が起こるのは、末期の症状になるのだろう。「……どうしたものだろうね」と母が父に聞こえないような小さな声で私に言った。母の顔は如何にも心細うであつた。私は兄と妹に電報を打つ用意をした。けれども寝ている父には殆んど何の苦悶もなかった。話をするところなどを見ると、風邪でも引いた時と全く同じ事であつた。その上食欲は不断よりも進んだ。傍のものが、注意しても容易に言う事を聞かなかつた。「……どうせ死ぬんだから、旨いものでも食つて死ななくっちゃ」と言うのであつた。

私には旨いものという父の言葉が滑稽にも悲酸にも聞こえた。父は旨いものを口に入られるするには住んでいなかったのである。夜に入つてかき餅などを焼いてもらつてぼりぼり嚙んだ。「……どうしてこう渴くのかね。やつぱり心に丈夫の所があるのかも知れないよ」と、母は失望していいところへ却つて頼みを置いた。そのくせ病氣の時にしか使わな

い渴くという昔風の言葉を、何でも食べたがる意味に用いていた。伯父が見舞に来たとき、父はいつまでも引き留めて帰さなかつた。淋しいからもつと居てくれというのが重なる理由であつたが、母や私が、食べたいただけ物を食べさせないという不平を訴えるのも、その目的の一つであつたらしいとある。

ちなみに、今日の医学では、一般に、「……腎臓機能の低下が進むと、夜間の頻尿をはじめ、吐き気や食欲不振、むくみやかゆみ、皮膚の色素沈着や息苦しさ、高血圧など尿毒症と呼ばれる症状が現れると共に、痙攣、感覚の喪失、手足のしびれ、その他などの神経症状のほか、心不全、肺水腫など致命的な合併症も懸念される」となっている。一方、食欲が異常に進む病氣として、初期の糖尿病を初めとして、ストレスや鬱状態或いは睡眠不足などの精神的要因から過食になる場合もあれば、また、軽い胃炎や胃潰瘍、そして、甲状腺機能亢進病、その他などがあるということである。

十、兄や妹に手紙とやがて電報を打つ（前）

父の病氣は同じような状態で一週間以上つづいた。私はその間に長い手紙を九州にいる兄宛で出した。妹へは母から出させた。私は腹の中で、恐らくこれが父の健康に関して二人へやる最後の音信だろうと思つた。それで両方へいよいよという場合には電報を打つから出て来いという意味を書き込めた。

兄は忙しい職にいた。妹は妊娠中であつた。だから父の危険が眼の前に逼らないうちに呼び寄せる自由は利かなかつた。と言つて、折角都合して来たには来たが、間に合わなかつたと言われるのも辛かつた。私は電報を掛ける時機について、人の知らない責任を感じた。「……そう判然した事になると私にも分りません。しかし危険はいつ来るか分らないという事だけは承知して下さい」と、

停車場のある町から迎えた医者は私にこう言つた。私は母と相談して、その医者の周旋（仲立ち）で、町の病院から看護婦を一人頼む事にした。父は枕元へ来て挨拶する白い服を着た女を見て変な顔をした。

父は死病に罹っている事をとうから自覚していた。それでいて、眼前にせまりつつある死そのものには気が付かなかつた。「……今に癒つたらもう一返東京へ遊びに行つてみよう。人間はいつ死ぬか分らないからな。何でもやりたい事は、生きてるうちにやっておくに限る」と言うのであつた。母は仕方なしに「……その時は私もいっしょに伴れて行つて

頂きましょう」などと調子を合せていた。時とするとまた非常に淋しがった。

「……おれが死んだら、どうかお母さんを大事にしてやってくれ」と、私はこの「……おれが死んだら」という言葉に一種の記憶をもっていた。東京を立つ時、先生が奥さんに向かつて何遍もそれを繰り返したのは、私が卒業した日の晩の事であった。私は笑いを帯びた先生の顔と、縁喜でもない耳を塞いだ奥さんの様子とを憶い出した。あの時の「……おれが死んだら」は単純な仮定であった。今私が聞くのはいつ起るか分らない事実であった。私は先生に対する奥さんの態度を学ぶ事が出来なかった。しかし口の前では何とか父を紛らさなければならなかった。

「……そんな弱い事を仰しやっちゃいけませんよ。今に癒ったら東京へ遊びにいらつしやるはずじやありませんか。お母さんといっしょに。今度いらつしやる時と吃驚しますよ、変っているんで。電車の新しい線路だけでも大変増えていますからね。電車が通るようになれば自然町並も変るし、その上に市区改正もあるし、東京が凝としていた時は、まあ二六時中一分もないと言っているくらいです」と、私は仕方がないから言わないでいい事まで喋舌った。父はまた、満足らしくそれを聞いていた。(本文)

*

*

さて、父の病気は同じような状態で一週間以上つづいた。私はその間に長い手紙を九州にいる兄宛で出した。妹へは母から出させた。私は腹の中で、恐らくこれが父の健康に関して二人へやる最後の音信だろうと思つた。それで両方へいよいよという場合には電報を打つから出て来いという意味を書き込めたのである。

ところで、当時(明治天皇崩御の頃)の「伝達手段」としては、新聞や雑誌或いは書物などをはじめ、個人的には「葉書と手紙それに急報の電報」ぐらいで、電話はまだ一般には普及していない。それゆえ、作品の中には電話のことは全く出て来ない。また、ラジオ放送は、大正十四年(一九二五年)であり、最初は「東京」で始まったとある。

さて、兄は忙しい職にいた。妹は妊娠中であつた。だから父の危険が眼の前に逼らないうちに呼び寄せる自由は利かなかつた。と言つて、折角都合して来たには来たが、間に合わなかつたと言われるのも辛かなかつた。私は電報を掛ける時機について、人の知らない責任を感じた。「……そう判然とした事になると(つまりいつかは)私にも分りません。しかし危険はいつ来るか分らないという事だけは承知して下さい」と、停車場のある町から迎えた医者には私にこう言つた。私は母と相談して、その医者の周旋(仲立ち)で、町の病院から「看護婦」を一人頼む事にした。父は枕元へ来て挨拶する白い服を着た女を見て変な顔をした。(この「看護婦」を一人頼むというのは、谷崎潤一郎の「鍵」の中にも、主人公の大学教授が「脳卒中」で倒れた時にもそのような対応をしている。)

父は死病に罹っている事をとうから自覚していた。それでいて、眼前にせまりつつある死そのものには気が付かなかつた。「……今に癒つたらもう一返東京へ遊びに行つてみよう。人間はいつ死ぬか分らないからな。何でもやりたい事は、生きてるうちにやっておくに限る」と言うのであつた。母は仕方なしに「……その時は私もいっしょに伴れて行つて頂きましょう」などと調子を合せていた。時とするときとまた非常に淋しがつた。

「……おれが死んだら、どうかお母さんを大事にしてやってくれ」と、私はこの「……おれが死んだら」という言葉に一種の記憶をもっていた。東京を立つ時、先生が奥さんに向かつて何遍もそれを繰り返したのは、私が卒業した日の晩の事であつた。私は笑いを帯

びた先生の顔と、縁喜でもない耳を塞いだ奥さんの様子とを憶い出した。あの時の「……おれが死んだら」は単純な仮定であった。(ところが、先生は本気であり、何が何でも妻の本心を聞いておきたかったのである。だからこそ、何度もしつこく聞いているのである)。今私が聞くのはいつ起るか分らない事実であった。私は先生に対する奥さんの態度を学ぶ事が出来なかった。しかし口の先では何とか父を紛らさなければならなかった。

「……そんな弱い事を仰しゃつちやいけませんよ。今に癒たら東京へ遊びにいらつしやるはずじゃありませんか。お母さんといっしょに。今度いらつしやるときつと吃驚しますよ、変っているんで。電車の新しい線路だけでも大変増えていますからね。電車が通るようになれば自然町並も変るし、その上に市区改正もあるし、東京が凝としている時は、まあ二六時中一分もないと言つていくらいです」と、私は仕方がないから言わないでいい事まで喋舌った。父はまた、満足らしくそれを聞いていた。

ところで、日本の場合、江戸時代までは、人や物の運びは、ほとんど「水路」を利用して、「陸路」は、歩くか籠か輿か馬か荷車を引くしかなく、余りにも未発達であったのである。やがて、明治時代に入ると、今度は、人力車や馬車或いは鉄道その他などの普及によって、人や物の運びは、今までの「水路」から、やがて「陸路」が非常に発達して来て、今日へと至っているのである。特に、明治時代の「鉄道」(汽車)の登場は、まさに画期的なものであり、それは、人や物を「陸路」で「大量に運ぶ」ことを始めて可能にしたのである。

十、病人があるので家の出入りも多くなった(後)

病人があるので自然家の出入りも多くなった。近所にいる親類などは、二日に一人ぐらの割で代る代る見舞に came。中には比較的遠くにいて平生疎遠なものもあった。「……どうかと思つたら、この様子じゃ大丈夫だ。話も自由だし、だいち顔がちつとも瘖せていないじゃないか」などと言つて帰るものがあった。私の帰った当時はひっそりし過ぎるほど静かであった家庭が、こんな事で段々ざわざわし始めた。

その中に動かずにいる父の病氣は、ただ面白くない方へ移つて行くばかりであった。私は母や伯父と相談して、とうとう兄と妹に電報を打つた。兄からはすぐ行くという返事が came。妹の夫からも立つという報知があった。妹はこの前懐妊した時に流産したので、今度こそは癖にならないように大事を取らせるつもりだと、かねて言い越したその夫は、妹の代りに自分で出て来るかも知れなかった。(本文)

*

*

さて、病人があるので自然家の出入りも多くなった。近所にいる親類などは、二日に一人ぐらの割で代る代る見舞に came。中には比較的遠くにいて平生疎遠なものもあった。「……どうかと思つたら、この様子じゃ大丈夫だ。話も自由だし、だいち顔がちつとも瘖せていないじゃないか」などと言つて帰るものがあった。私の帰った当時はひっそりし過ぎるほど静かであった家庭が、こんな事で段々ざわざわし始めたのである。

ここまでの内容は、ごく自然に思われるが、しかし、今日であれば、多くの場合、いわゆる「病院に入院する」ことが多いのではないかと思う。その医療の歴史を見てみると、次のようなことらしいのです。――まず、江戸時代の医療は、漢方が中心で、自宅療養し

ている病人を医師が往診し、薬を処方する方法が一般的だったそうで、病院はなかったそうである。唯一の例外は、徳川吉宗が始めた「小石川養生所」があり、ここでは、貧しい病人を収容して薬草園から採った薬を与えて、看護していたらしい。その後、明治に入ると、官（国）公立病院、公的病院、民間（私立）病院などが出来て来ることになる。

まず、官（国）公立病院には、軍事病院をはじめ、伝染病に関する病院や精神疾患の病院その他などがあり、また、公的病院では、経済的困窮者への治療を理念としたものが多く、その代表として、日赤病院や済生会病院があり、そして、民間（市立）病院としては、最初は、西洋留学帰りの名医の経営する個人病院という色彩が強く、治療費は高額で、主に富裕層相手の治療が行われていたらしい。一方、民間病院のもう一つの流れとして、貧困者に無料或いは低額で医療を提供する慈善病院などがあったとある。（この文章は第六三巻第十一号「厚生の指標」二〇一六年九月からの引用である。）

ただ、当時の日本では、一部の大病院を別にすれば、小規模なものが多数を占めており、大正二年（一九一三年）時点で、一病院当たりの平均病床数は十三床に過ぎなかったとある。それゆえ、この頃は、多くの場合、自宅で「療養」し、かかり付けの「医師」などがいわば定期的に往診して治療し、最期は「自宅で息を引き取る」という形式の方が遙かに多かったのである。例えば、谷崎潤一郎の「鍵」の場合も、看護婦一人を頼み、最期は、自宅で「息を引き取る」という形になっている。

その中に動かずにいる父の病気は、ただ面白くない方へ移って行くばかりであった。私は母や伯父と相談して、とうとう兄と妹に「電報」を打った。兄からはすぐ行くという返事が来た。妹の夫からも立つという報知があった。妹はこの前懐妊した時に流産したので、今度こそは癖にならないように大事を取らせるつもりだと、かねて言い越したその夫は、妹の代りに自分で出て来るかも知れなかったとあり、その通り、妹の夫がやって来ることになるが、妹は「他国」に嫁いだというだけで、具体的に「何県」とは明記されていないのである。

*

*

十一、母親は先生への手紙をもう一度と（前）

十一、母親は先生への手紙をもう一度と(前)

こうした落ち付きのない間にも、私はまだ静かに坐る余裕をもっていた。偶には書物を開けて十頁もつづけざまに読む時間さえ出て来た。一旦堅く括られた私の行李は、何時の間にか解かれてしまった。私は要るに任せて、その中から色々なものを取り出した。私は東京を立つ時、心のうちで極めた、この夏中の日課を顧みた。私のやった事はこの日課の三が一にも足らなかつた。私は今までもこういう不愉快を何度となく重ねて来た。しかしこの夏ほど思つた通り仕事の運ばない例も少なかつた。これが人の世の常だろうと思ひながらも私は厭な気持ちに抑え付けられた。

私はこの不快の裏に坐りながら、一方に父の病気を考えた。父の死んだ後の事を想像した。そうしてそれと同時に、先生の事を一方に思い浮べた。私はこの不快な心持の両端に地位、教育、性格の全然異なつた二人の面影を眺めた。

私が父の枕元を離れて、独り取り乱した書物の中に腕組をしているところへ母が顔を出した。「……少し午睡でもおしよ。お前もさぞ草臥れるだろう」と、母は私の気分を了解していながつた。私も母からそれを予期するほどの子供でもなかつた。私は単簡に礼を述べた。母はまだ室の入口に立つていた。「……お父さんは？」と私が聞いた。「……今よく寝てお出いでだよ」と母が答えた。

母は突然這入つて来て私の傍に坐つた。「……先生からまだ何とも言つて来ないかい」と聞いた。——母はその時の私の言葉を信じていた。その時の私は先生からきつと返事があると母に保証した。しかし父や母の希望するような返事が来るとは、その時の私もまるで期待しなかつた。私は心得があつて母を欺いたと同じ結果に陥つた。「……もう一遍手紙を出してご覧な」と母が言つた。

役に立たない手紙を何通書こうと、それが母の慰安になるなら、手数を厭うような私ではなかつた。けれどもこういう用件で先生にせまるのは私の苦痛であつた。私は父に叱られたり、母の機嫌を損じたりするよりも、先生から見下げられるのを遙に恐れていた。あの依頼に対して今まで返事の貰えないのも、或はそうした訳からじゃないかしらという邪推もあつた。(本文)

*

*

さて、こうした落ち付きのない間にも、私はまだ静かに坐る余裕をもっていた。偶には書物を開けて十頁もつづけざまに読む時間さえ出て来た。一旦堅く括られた私の行李は、何時の間にか解かれてしまった。私は要るに任せて、その中から色々なものを取り出した。私は東京を立つ時、心のうちで極めた、この夏中の日課を顧みた。私のやった事はこの日課の三が一にも足らなかつた。私は今までもこういう不愉快を何度となく重ねて来た。しかしこの夏ほど思つた通り仕事の運ばない例も少なかつた。これが人の世の常だろうと思ひながらも私は厭な気持ちに抑え付けられた。

それでは、なぜ、そうなのかと敢えて問えば、それは、次のようなことである。例えば、「私」という人は、いわゆる「卒業論文」を書き上げるためには、毎日毎日、それこそ「論文」に崇られた精神病者のように眼を赤くして苦しみ、そして、「……ついに四月の下旬が来て、やつと予定通りのものを書き上げるまで、あれほど頻繁に行き来していた、先生の敷居をも跨がなかつた」とあるように、これというはつきりとした、「目標(目的)」が

ある時には、誰でもそれに向かつて「一生懸命になれる」ものであるが、今の「私」という人は、無事に東京の「帝京大学」を卒業したばかりで、まだこれという新たな「目標（目的）」が、はつきりと見つからないために、それゆえ、毎日をだらだらと無為に過ごしてしまふような傾向があったということである。

私はこの不快の裏に坐りながら、一方に父の病気を考えた。父の死んだ後の事を想像した。そうしてそれと同時に、先生の事を一方に思い浮べた。私はこの不快な心持の両端に「地位、教育、性格」の全然異なつた二人の面影を眺めたのである。

私が父の枕元を離れて、独り取り乱した書物の中に腕組をしているところへ母が顔を出した。「……少し午睡でもおしよ。お前もさぞ草臥れるだろう」と、母は私の気分を了解していかなかった。私も母からそれを予期するほどの子供でもなかった。（これは「自分の複雑な気分を母親に理解してもらえぬ」と期待するほど子供でもなかった）。私は単簡（簡単）に礼を述べた。母はまだ室の入口に立っていた。「……お父さんは？」と私が聞いた。「……今よく寝てお出いでだよ」と母が答えた。

母は突然這入つて来て私の傍に坐つた。「……先生からまだ何とも言つて来ないかい」と聞いた。——母はその時の私の言葉を信じていた。その時の私は先生からきつと返事があると母に保証した。しかし父や母の希望するような返事が来るとは、その時の私もまるで期待しなかつた。私は心得があつて母を欺いたと同じ結果に陥つた。「……もう一遍手紙を出してご覧な」と母が言つた。（母親がこの事にこだわる理由については、やがて次のところで自らその理由を語ることになるのである。）

役に立たない手紙を何通書こうと、それが母の慰安になるなら、手数を厭うような私ではなかつた。けれどもこういう用件（就職口）で先生にせまるのは私の苦痛であつた。私は父に叱られたり、母の機嫌を損じたりするよりも、先生から見下げられるのを遙に恐れていたとある。（例えば、尊敬する孔子という先生からは「本来人生の何たるかを教えてもらふ存在」であり、その先生に最も俗にまみれたお金や地位などの条件のいい「就職口」などをお願いするなどは、何とも苦痛であり耐えられないという心理である。先生から「……あの依頼に対して今まで返事の貰えないのも、或はそうした訳からじゃないかしらという邪推もあつた」と続くのである。

十一、先生への手紙は結局出さなかつた（後）

「……手紙を書くのは訳はないですが、こういう事は郵便じゃとても埒は明きませんよ。どうしても自分で東京へ出て、じかに頼んで廻らなくっちゃ」と言つと、「……だつてお父さんがあの様子じゃ、お前、いつ東京へ出られるか分らないじゃないか」と言つので、「……だから出やしません。癒るとも癒らないとも片付かないうちは、ちゃんとこうしてゐるつもりです」と言つと、「……そりゃ解り切つた話だね。今にもむずかしいという大病人を放ちらかして置いて、誰が勝手に東京へなんか行けるものかね」と言つ。

私は始め心のなかで、何も知らない母を憐れんだ。しかし母がなぜこんな問題をこのさわざわした際に持ち出したのか理解出来なかつた。私が父の病気をよそに、静かに坐つたり書見したりする余裕のある如くに、母も眼の前の病人を忘れて、外の事を考えるだけ、胸に空地があるのかしらと疑つた。その時、「……実はね」と母が言い出した。

「……実はお父さんの生きてお出のうちに、お前の口が極つたらさぞ安心なさるだろうと思うんだがね。この様子じゃ、とても間に合わないかも知れないけれども、それにしても、まだああやって口も慥なら気も慥なんだから、ああしてお出のうちに喜ばして上げるように親孝行をおしな」と言うのであった。憐れな私は親孝行の出来ない境遇にいた。私はついに一行の手紙も先生に出さなかった。(本文)

*

*

さて、「……手紙を書くのは訳はないですが、こういう事は郵便じゃとても埒は明きませんよ。どうしても自分で東京へ出て、じかに頼んで廻らなくっちゃ」と言うのと、「……だつてお父さんがあの様子じゃ、お前、いつ東京へ出られるか分らないじゃないか」と言うので、「……だから出やしません。癒るとも癒らないとも片付かないうちは、ちゃんとこうしているつもりです」と言うのと、「……そりゃ解り切った話だね。今にもむずかしいという大病人を放ちらかしておいて、誰が勝手に東京へなんか行けるものかね」と言う。

私は始め心のなかで、何も知らない母を憐れんだ。(これは「私がなぜ東京に出るのかその本当の理由を知らないからである」)。しかし母がなぜこんな問題をこのざわざわした際に持ち出したのか理解出来なかった。私が父の病気をよそに、静かに坐ったり書見したりする余裕のある如くに、母も眼の前の病人を忘れて、外の事を考えるだけ、胸に空地があるのかしらと疑った。その時、「……実はね」と母が(本心)を言い出した。

「……実はお父さんの生きてお出のうちに、お前の口が極つたらさぞ安心なさるだろうと思うんだがね。この様子じゃ、とても間に合わないかも知れないけれども、それにしても、まだああやって口も慥なら気も慥なんだから、ああしてお出のうちに喜ばして上げるように親孝行をおしな」と言うのであった。憐れな私は親孝行の出来ない境遇にいた。私はついに一行の手紙も先生に出さなかったとある。(それは「書くこと自体苦痛であると共に、たとえ書いても返事は来ないだろう」と思うからである。)

十二、兄と妹の夫が駆けつける(前)

兄が帰って来た時、父は寝ながら新聞を読んでいた。父は平生から何を措いても新聞だけには眼を通す習慣であったが、床についてからは、退屈のため猶更それを読みたがった。母も私も強いては反対せずに、なるべく病人の思い通りにさせておいた。「……そういう元気なら結構なものだ。よっぽど悪いかと思つて来たら、大変好いようじゃありませんか」と、兄はこんな事を言いながら父と話をした。その賑やか過ぎる調子が私には却つて不調和に聞こえた。それでも父の前を外して私と差し向いになった時は、むしろ沈んでいた。

「……新聞なんか読ましちやいけなかないか」と言うので、「……私もそう思うんだけど、読まないで承知しないんだから、仕様がな」と応えると、兄は私の弁解を黙つて聞いていた。やがて、「……よく解るのかな」と言った。兄は父の理解力が病氣のために、平生よりは余程鈍っているように観察したらしい。「……そりゃ慥です。私はさつき二十分ばかり枕元に坐つて色々話してみたが、調子の狂つたところは少しもありません。あの様子じゃことによるとまだなかなか持つかも知れませんよ」と言うのであった。

兄と前後して着いた妹の夫の意見は、我々よりもよほど樂觀的であった。父は彼に向かって妹の事をあれこれと尋ねていた。「……身体が身体だからむやみに汽車になんぞ乗

って揺れない方が好い。無理をして見舞に来られたりすると、却ってこっちが心配だから」と言っていた。「……なに今に治ったら赤ん坊の顔でも見に、久しぶりにこっちから出掛けるから差支えない」とも言っていた。(本文)

*

*

さて、兄が帰って来た時、父は寝ながら新聞を読んでいた。父は平生から何を措いても新聞だけには眼を通す習慣であったが、床についてからは、退屈のため猶更それを読みたがった。母も私も強いては反対せずに、なるべく病人の思い通りにさせておいた。「……そういう元氣なら結構なものだ。よつほど悪いかと思つて来たら、大変好いようじゃありませんか」と、兄はこんな事を言いながら父と話をした。その賑やか過ぎる調子が私には却って不調和に聞こえた。(これは、当然の対応であり、ひどそうだねと言う人はいないのである)。それでも父の前を外して私と差し向いになった時は、むしろ沈んでいた。

「……新聞なんか読ましちやいけなかないか」と言うので、「……私もそう思うんだけど、読まないで承知しないんだから、仕様がな」と応え、兄は私の弁解を黙って聞いていた。やがて、「……よく解るのかな」と言った。兄は父の理解力が病氣のために、平生よりは余程鈍っているように観察したらしい。「……そりや慥です。私はさつき二十分ばかり枕元に坐つて色々話してみたが、調子の狂つたところは少しもありません。あの様子じゃことによるとまだなかなか持つかも知れませんよ」と言うのであった。

兄と前後して着いた妹の夫の意見は、我々よりもよほど樂觀的であつた。父は彼に向かつて妹の事をあれこれと尋ねていた。「……身体が身体だからむやみに汽車になんぞ乗って揺れない方が好い。無理をして見舞に来られたりすると、却ってこっちが心配だから」と言っていた。「……なに今に治ったら赤ん坊の顔でも見に、久しぶりにこっちから出掛けるから差支えない」とも言っていたとある。(こころ辺の場面は、このような重い病氣になつた時にはごく一般的に交わされる「患者と見舞客或いは身内」などとの会話であり、それゆえ、大事なものは、実は「この次の場面」からであり、それは、次のようなものである。

十二、最初の電報を受け取る(後)

乃木大将の死んだ時も、父は一番先きに新聞でそれを知つた。「……大変だ大変だ」と言つた。何事も知らない私たちはこの突然な言葉に驚かされた。「……あの時はいよいよ頭が変になつたのかと思つて、ひやりとした」と後で兄が私に言つた。「……私も実は驚きました」と妹の夫も同感らしい言葉つきであつた。

その頃の新聞は実際田舎ものには日毎に待ち受けられるような記事ばかりであつた。私は父の枕元に坐つて鄭寧にそれを読んだ。読む時間のない時は、そつと自分の室へ持つて来て、残らず眼を通した。私の眼は長い間、軍服を着た乃木大将と、それから官女みたような服装をしたその夫人の姿を忘れる事が出来なかつた。

悲痛な風が田舎の隅まで吹いて来て、眠たそうな樹や草を震わせている最中に、突然私は一通の電報を先生から受け取つた。洋服を着た人を見ると犬が吠えるような所では、一通の電報すら大事件であつた。それを受け取つた母は、果して驚いたような様子をして、わざわざ私を人のいない所へ呼び出した。「……何だい」と言つて、私の封を開くのを傍

に立って待っていた。

電報には一寸会いたいが来られるかという意味が簡単に書いてあった。私は首を傾けた。「……きつとお頼もうしておいた口の事だよ」と母が推断してくれた。

私も或はそうかも知れないと思った。しかしそれにしても少し変だとも考えた。とにかく兄や妹の夫まで呼び寄せた私が、父の病気を打遣って、東京へ行く訳には行かなかった。私は母と相談して、行かれないという返電を打つ事にした。出来るだけ簡略な言葉で父の病気の危篤に陥りつつある旨も付け加えたが、それでも気が済まなかったから、委細手紙として、細かい事情をその日のうちに認ためて郵便で出した。頼んだ位地の事とばかり信じ切った母は、「……本当に間の悪い時は仕方ないものだね」と言って残念そうな顔をした。(本文)

*

*

さて、大事なのは、まさにここからであり、それは、明治天皇の「崩御」は、明治四十五年(一九一二年)の「七月三十日」であり、それから約一ヶ月半ほど経った「九月十八日」は、まさに明治天皇の「御大葬の夜」、それを「第三部」(先生と遺書)の本文で見ると、先生は、「……御大葬の夜、私はいつもの通り書斎に坐って、相図の号砲を聞きました。私にはそれが明治が永久に去った報知のごとく聞こえました。後で考えると、それが乃木大将の永久に去った報知にもなっていたのです。私は号外を手にして、思わず妻に殉死だ殉死だと言いました」とある。一方、田舎では、「……乃木大将の死んだ時も、父が一番先きに新聞でそれを知った。そして、『大変だ大変だ』と言って、何事も知らない私たちはこの突然な言葉に驚かされた。その頃の新聞は実際田舎ものには日ごとに待ち受けられるような記事ばかりであった。私は父の枕元に坐って鄭寧にそれを読んだ。読む時間のない時は、そつと自分の室へ持って来て、残らず眼を通した。私の眼は長い間、軍服を着た乃木大将と、それから官女みたような服装をしたその夫人の姿を忘れる事が出来なかった」とある。——つまり、この頃は、まだ「ラジオ放送」もなく、(ラジオ放送は大正十四年に東京で始まり、三年後の昭和三年には全国放送の開始)、それゆえ、世の中の毎日の出来事の「情報源」は、まさにほとんど「新聞紙」によっていたのである。

そして、(乃木大将の死という)悲痛な風が田舎の隅まで吹いて来て、眠たそうな樹や草を震わせている最中に、突然私は一通の電報を先生から受け取った。その電報には、「……ちよつと会いたいに来られるかという意味が簡単に書いてあった」とある。それに対して、「私」という人は、父の病気の悪化により、「行かれない」という返電を打つ事にしたのである。そして、細かい事情は、その日に手紙に書いて郵便で送ることにした。

さて、ここで確認すべきことは、次のようなことである。まず、この頃には、すでに「新聞配達」は行なわれていたので、新聞紙を毎日「朝」読むことが出来た。だとすれば、病気の父親が「乃木大将の殉死」を新聞で読んで知り、大変だ大変だと騒いだのは、恐らく、「朝」であり。しかも、東京にいる先生も、当然のことながら、「乃木大将の殉死」を、この時は夜号外で知り、そして、翌「朝」、新聞で乃木大将の死ぬ前に書き残して行ったものを読むことよって、先生は、ある「決心」をして、その日(午前中)に、「私」に「……ちよつと会いたいに来られるかという」電報を打ち、その「電報」が、その日のうちに「私」(実家)へと届くのである。それでは、なぜ、この「事実関係」が何よりも大事なことになるのかと問えば、それは、「この日」こそは、まさに先生が「……(よろし

い)、話ししましょう。私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう」と、まさにそう「決心した日」になるからである。だからこそ、「電報」で、「……ちよつと会いたいのが来られるかという」内容の「電報」(急報)になるのである。——つまり、先生は、この段階では、まだ「私」という人に直接会って、まさに「……私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう」という「気持ち」でいたということである。

ところが、「私」という人は、父親が重篤であるので、先生に(東京へは)「……行かない」という電報を打つと、その電報を受けた先生は、失望して、二日間、あれこれ深く考え悩み抜いた末に、先生の「考え方」は、まさに「……直接、相手(私)に会って、話をするという方法」から、やがて、それは、「遺書」(つまり「手紙」という形で、まさに「……私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう」という「気持ち」へと大きく変わってしまったのである。その「絶対的証拠」となるものは、それは、二日後、先生は、まさに「……来ないでもよろしい」という「電報」(急報)を打って来るからである。

十三、二度目の電報が来る(前)

私の書いた手紙はかなり長いものであった。母も私も今度こそ先生から何とか言ってくるだろうと考えていた。すると手紙を出して二日目にまた電報が私宛で届いた。それには来ないでもよろしいという文句だけしかなかった。私はそれを母に見せた。「……大方手紙で何とか言つて来て下さるつもりだろうよ」と言つた。母はどこまでも先生が私のために衣食の口を周旋してくれるものとはかり解釈しているらしかった。私も或はそうかとも考えたが、先生の平生から推してみると、どうも変に思われた。「……先生が口を探してくれる」、これはあり得べからざる事のように私には見えた。「……とにかく私の手紙はまだ向うへ着いていないはずだから、この電報はその前に出したものに違いないですね」と、私は母に向つてこんな分り切つた事を言つた。

母はまた尤もらしく思案しながら「……そうだね」と答えた。私の手紙を読まない前に、先生がこの電報を打つたという事が、先生を解釈する上において、何の役にも立たないのは知れているに……。その日は丁度主治医が町から院長を連れて来るはずになっていたので、母と私はそれぎりこの事件について話をする機会がなかった。二人の医者は立ち合ひの上、病人に浣腸などをして帰つて行つた。

父は医者から安臥を命ぜられて以来、両便とも寝たまま他の手で始末してもらつていた。潔癖な父は、最初の間こそ甚しくそれを忌み嫌つたが、身体が利かないので、やむを得ずいやいや床の上で用を足した。それが病気の加減で頭がだんだん鈍くなるのか何だか、日を経るに従つて、無精な排泄を意としないようになった。たまには蒲団や敷布を汚して、傍のものが眉を寄せるのに、当人は却つて平気でいたりした。尤も尿の量は病気の性質として、極めて少なくなつた。医者はそれを苦にした。食欲も次第に衰えた。たまに何か欲しがつても、舌が欲しがらただけで、咽喉から下へはごく僅しか通らなかつた。好きな新聞も手に取る気力がなくなつた。枕の傍にある老眼鏡は、いつまでも黒い鞆に納められたままであつた。(本文)

*

*

さて、私の書いた手紙はかなり長いものであつた。母も私も今度こそ先生から何とか言

って来るだろうと考えていた。すると手紙を出して二日目にまた電報が私宛で届いた。それには「……来ないでもよろしい」という文句だけしかなかったとある。

まず、先生から「……ちよつと会いたいのが来られるかという」電報（急報）を受ける。この時の先生は、「私」という人に直接会って、まさに「……私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう」という「気持ち」でいたのである。それゆえ、この時、「私」という人が、直ぐにも東京へと行き、そして、先生に会って直接話を聞いていたら、（少なくとも）この時期での「先生の自殺」ということは回避されたかも知れない。ところが、「私」という人は、父親の病状が重篤であるので、（東京には）「……行かれない」という電報（急報）を先生へと打つ。先生は、その電報（急報）を受けて、失望し、その後、二日間、あれこれ考え悩み抜いた末に、先生の「考え方」は、まさに「……直接、相手（私）に会って、話をするという方法」から、やがて、それは、「遺書」（つまり「手紙」という形で、まさに「……私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう」という「気持ち」へと大きく変化してしまうのである。それが、まさに「……来ないでもよろしい」という電報（急報）の「意味合い」になるのである。

ところで、私の母親という人は、この「電報」（急報）を条件のいい「就職口」のことだろうと思ひ込んでいて、それゆえ、それを母親に見せると、「……大方手紙で何とか言つて来て下さるつもりだろうよ」と言った。母はどこまでも先生が私のために衣食の口を周旋してくれるものとはかり解釈しているらしかった。私も或はそうかとも考えたが、先生の平生から推してみると、どうも変に思われた。「……先生が口を探してくれる」、これはあり得べからざる事のように私には見えた。「……とにかく私の手紙はまだ向うへ着いていないはずだから、（だとすれば二日間では葉書や手紙などは届かない距離であり）、この電報はその前に出したものに違いないですね」と、私は母に向つてこんな分り切った事を言った。母はまた尤もらしく思案しながら「そうだね」と答えた。私の手紙を読まない前に、先生がこの電報を打つたという事が、先生を解釈する上において、何の役にも立たないのは知れているのに。その日は丁度主治医が町から院長を連れて来るはずになつていたので、母と私はそれぎりこの事件について話をする機会がなかった。二人の医者 は立ち合ひの上、病人に浣腸などをして帰つて行つた。

父は医者から安臥を命ぜられて以来、両便とも寝たまま他の手で始末してもらつていた。潔癖な父は、最初の間こそ甚しくそれを忌み嫌つたが、身体が利かないので、やむを得ずいやいや床の上で用を足した。それが病気の加減で頭がだんだん鈍くなるのか何だか、日を経るに従つて、無精な排泄を意としないようになった。たまには蒲団や敷布を汚して、傍のものが眉を寄せるのに、当人は却つて平気でいたりした。尤も尿の量は病気の性質として、極めて少なくなつた。医者はそれを苦にした。食欲も次第に衰えた。たまに何か欲しがつても、舌が欲しがらるだけで、咽喉から下へはごく僅しか通らなかつた。好きな新聞も手に取る気力がなくなつた。枕の傍にある老眼鏡は、いつまでも黒い鞆に納められたままであつたとある。（父親の病状は、まさにここまで悪化したということである。）

十三、作さんという人が見舞いに来る（後）

子供の時分から仲の好かつた作さんという今では一里ばかり隔たつた所に住んでいる人

が見舞に來た時、父は「ああ作さんか」と言つて、どんよりした眼を作さんの方に向けた。父は、「……作さんよく來てくれた。作さんは丈夫で羨ましいね。己はもう駄目だ」と言うのと、「……そんな事はないよ。お前なんか子供は二人とも大学を卒業するし、少しぐらい病氣になつたつて、申し分はないんだ。おれをご覧よ。かかあには死なれるし、子供はなしさ。ただこうして生きていくだけの事だよ。達者だつて何の楽しみもないじゃないか」と言うのであつた。

浣腸をしたのは作さんが來てから二、三日あとの事であつた。父は医者のお蔭で大變樂になつたと言つて喜んだ。少し自分の壽命に対する度胸が出來たという風に機嫌が直つた。傍にいる母は、それに釣り込まれたのか、病人に氣力を付けるためか、先生から電報の來た事を、あたかも私の位置が父の希望する通り東京にあつたように話した。傍にいる私はむずがゆい心持がしたが、母の言葉を遮る訳にもゆかないので、黙つて聞いていた。病人は嬉しそうな顔をした。「……そりや結構です」と妹の夫も言った。「……何の口だかまだ分らないのか」と兄が聞いた。私は今更それを否定する勇氣を失つた。自分にも何とも訳の分らない曖昧な返事をして、わざと席を立つた。(本文)

さて、子供の時分から仲の好かつた作さんという今では一里ばかり隔たつた所に住んでいる人が見舞に來た時、父は「ああ作さんか」と言つて、どんよりした眼を作さんの方に向けた。父は、「……作さんよく來てくれた。作さんは丈夫で羨ましいね。己はもう駄目だ」と言うのと、「……そんな事はないよ。お前なんか子供は二人とも大学を卒業するし、少しぐらい病氣になつたつて、申し分はないんだ。おれをご覧よ。かかあには死なれるし、子供はなしさ。ただこうして生きていくだけの事だよ。達者だつて何の楽しみもないじゃないか」と言うのであつた。(この二人は、まさに「幼なじみ」の親友であり、それゆえ、お互いの「氣心」はよく知れているかと思うが、それゆえ、いわば「氣さくに」話が出てくるのかも知れない。)

浣腸をしたのは作さんが來てから二、三日あとの事であつた。父は医者のお蔭で大變樂になつたと言つて喜んだ。少し自分の壽命に対する度胸が出來たという風に機嫌が直つた。傍にいる母は、それに釣り込まれたのか、病人に氣力を付けるためか、先生から電報の來た事を、あたかも私の位置が父の希望する通り東京にあつたように話した。(これは、夫を何とか元氣づけようとする妻の必死の愛情の表れなのかも知れない)。傍にいる私はむずがゆい心持がしたが、母の言葉を遮る訳にもゆかないので、黙つて聞いていた。病人は嬉しそうな顔をした。「……そりや結構です」と妹の夫も言った。「……何の口だかまだ分らないのか」と兄が聞いた。私は今更それを否定する勇氣を失つた。自分にも何とも訳の分らない曖昧な返事をして、わざと席を立つたとある。(これは、病氣の父親が喜んでくれるのであれば、それは、それで(うそでも)よいのかも知れないということである。)

*

*

十四、最後の一撃を待つ間際まぎわまで（前）

十四、最後の 一撃を待つ間際まで（前）

父の病気は最後の 一撃を待つ間際まで進んで来て、そこでしばらく躊躇するようにみえた。家のものは運命の宣告が、今日下るか、今日下るかと思つて、毎夜床に這入った。父は傍のものを辛くするほどの苦痛をどこにも感じていなかった。その点になると看病はむしろ楽であった。要心のために、誰か一人ぐらいつ代る代る起きてはいたが、あとのものは相当の時間に各自の寢床へ引き取つて差支えなかった。何かの拍子で眠れなかつた時、病人の唸るような声を微かに聞いたと思ひ誤つた私は、一遍半夜に床を抜け出して、念のため父の枕元まで行つてみた事があつた。その夜は母が起きている番に當つていた。しかしその母は父の横に肱を曲げて枕としたなり寝入つていた。父も深い眠りの裏にそつと置かれた人のように静かにしていた。私は忍び足でまた自分の寢床へ歸つた。

私は兄といつしよの蚊帳の中に寝た。妹の夫だけは、客扱いを受けているせいか、独り離れた座敷に入つて休んだ。「……関さんも気の毒だね。ああ幾日も引つ張られて帰れなくつちやあ」と、関というのはその人の苗字であつた。「……しかしそんな忙しい身体でもないんだから、ああして泊つていてくれるんでしょう。関さんよりも兄さんの方が困るでしょう、こう長くなつちや」と言つと、「……困つても仕方がない。外の事と違ふからな」と言うのであつた。（本文）

さて、父の病気は最後の 一撃を待つ間際まで進んで来て、そこでしばらく躊躇するように見えた。家のものは運命の宣告が、今日下るか、今日下るかと思つて、毎夜床に這入つたとある。（これは、終にその時を待つばかりの段階へと入つたということである。）

父は傍のものを辛くするほどの苦痛をどこにも感じていなかった。その点になると看病はむしろ楽であつた。要心のために、誰か一人ぐらいつ代る代る起きてはいたが、あとのものは相当の時間に各自の寢床へ引き取つて差支えなかった。何かの拍子で眠れなかつた時、病人の唸るような声を微かに聞いたと思ひ誤つた私は、一遍半夜に床を抜け出して、念のため父の枕元まで行つてみた事があつた。その夜は母が起きている番に當つていた。しかしその母は父の横に肱を曲げて枕としたなり寝入つていた。（これは、實際誰にもよくある事ではないかと思ふ）。父も深い眠りの裏にそつと置かれた人のように静かにしていた。私は忍び足でまた自分の寢床へ歸つた。

私は兄といつしよの蚊帳の中に寝た。妹の夫だけは、客扱いを受けているせいか、独り離れた座敷に入つて休んだ。「……関さんも気の毒だね。ああ幾日も引つ張られて帰れなくつちやあ」と、関というのはその人の苗字であつた。「……しかしそんな忙しい身体でもないんだから、ああして泊つていてくれるんでしょう。関さんよりも兄さんの方が困るでしょう、こう長くなつちや」と言つと、「……困つても仕方がない。外の事と違ふからな」と言うのであつた。（やがて兄弟二人の關係が語られていくのである。）

十四、兄と床を並べて寝る私（後）

兄と床を並べて寝る私は、こんな寝物語をした。兄の頭にも私の胸にも、父はどうせ助からないという考えがあつた。どうせ助からないものならばという考えもあつた。我々は

子として親の死ぬのを待っているようなものであった。しかし子としての我々はそれを言葉の上に表わすのを憚^{はば}かった。そうしてお互にお互がどんな事を思っているかをよく理解し合っていた。「……お父さんは、まだ治る気であるようだな」と兄が私に言った。

実際兄の言う通りに見えるところでもないではなかった。近所のものが見舞にくると、父は必ず会うと言って承知しなかった。会えばきつと、私の卒業祝いに呼ぶ事が出来なかったのを残念がった。その代り自分の病気が治ったらというような事も時々付け加えた。

「……お前の卒業祝いは已^やめになって結構だ。おれの時には弱ったからね」と兄は私の記憶を突ツついた。私はアルコールに煽^{あお}られたその時の乱雑な有様を想い出して苦笑した。飲むものや食うものを強^しいて廻^{まわ}る父の態度も、にがにがしく私の眼に映った。

私たちはそれほど仲の好い兄弟ではなかった。小さいうちは好く喧嘩^{けんか}をして、年の少ない私の方がいつでも泣かされた。学校へ這^{はい}入^いってからの専門の相違も、全く性格の相違から出ていた。大学にいる時分の私は、ことに先生に接触した私は、遠くから兄を眺^{なが}めて、常に動物的だと思っていた。私は長く兄に会わなかったので、また懸^たけ隔^だたつた遠くいたので、時から言っても距離から言っても、兄はいつでも私には近くなかったのである。それでも久しぶりにこう落ち合ってみると、兄弟の優^{やさ}しい心持がどこからか自然に湧^わいて出た。場合が場合なのもその大きな原因^{げんいん}になっていた。二人に共通な父、その父の死のうとして枕^{まくら}元^{もと}で、兄と私は握手したのであった。

「……お前^{まへ}これからどうする」と兄は聞いた。私はまた全く見当の違つた質問を兄に掛けた。「……一家^{いっか}の財産はどうなってるんだろう」と言うと、「……おれは知らない。お父さんはまだ何とも言わないから。しかし財産^{ざいぜん}って言ったところで金としては高^{たか}の知れたものだろう」と言い、母はまた母で先生の返事の来るのを苦しめていた。「……まだ手紙は来ないかい」と私を責めた。(本文)

*

*

さて、兄と床を並べて寝る私は、こんな寝物語をした。兄の頭にも私の胸にも、父はどうせ助からないという考えがあった。どうせ助からないものならばという考えもあった。我々は子として親の死ぬのを待っているようなものであった。しかし子としての我々はそれを言葉の上に表わすのを憚^{はば}かった。そうしてお互にお互がどんな事を思っているかをよく理解し合っていた。「……お父さんは、まだ治る気であるようだな」と兄が私に言った。実際兄の言う通りに見えるところでもないではなかった。近所のものが見舞にくると、父は必ず会うと言って承知しなかった。会えばきつと、私の卒業祝いに呼ぶ事が出来なかったのを残念がった。その代り自分の病気が治^なつたらというような事も時々付け加えたのである。(これは、最後の最後の最後まで、「……自分が何年何月何日の何時頃^{なんじ}に死ぬのかは？」本人ですらも極めて分かり難^{がた}いことになるのである。)

また、「……お前の卒業祝いは已^やめになって結構だ。おれの時には弱ったからね」と兄は私の記憶を突ツついた。私はアルコール(酒)に煽^{あお}られたその時の乱雑な有様(いわば「狂乱の宴会」)を想い出して苦笑した。飲むものや食うものを強^しいて廻^{まわ}る父の態度も、にがにがしく私の眼に映った。(このような「過去の記憶」があるからこそ、「私」という人は、いわゆる「卒業祝い」というものを殊更^{ことさら}に嫌う大きな要因の一つになっているだろう。いわば「トラウマ」に近いものになっているのかも知れない。)

ところで、私たちはそれほど仲の好い兄弟ではなかった。小さいうちは好く喧嘩^{けんか}をして、

年の少ない私の方がいつでも泣かされた。学校へ這入^{はい}つてからの専門の相違も、全く性格の相違から出ていた。大学にいる時分の私は、ことに先生に接触した私は、遠くから兄を眺めて、常に動物的だと思っていた。私は長く兄に会わなかったのも、また懸^{くた}け隔^{へだ}たった遠くにいたので、時から言っても距離から言っても、兄はいつでも私には近くなかったのである。それでも久しぶりにこう落ち合^あってみると、兄弟の優しい心持がどこからか自然に湧いて出た。場合が場合なのもその大きな原因^{げんいん}になっていた。二人に共通な父、その父の死のうとしている枕^{まくらもと}元^{もと}で、兄と私は握手したのであったとある。(此所^{ここ}には、兄弟二人の子供の頃からの関係が簡単に語られていると共に、先生が言っていた「財産の問題」も遂に「私」という人の口を突いて出て来ているのである。)

それは、本文では、「……お前^{まへ}これからどうする」と兄は聞いた。私はまた全く見当の違^{ちが}った質問を兄に掛けた。「……一家^{いっか}の財産はどうなってるんだろう」と言うのと、「……おれは知らない。お父さんはまだ何とも言わないから。しかし財産^{ざいぜん}って言ったところで金としては高^{たか}の知れたものだろう」と言い、そして、母はまた母で先生の返事の来るのを苦^{くる}にしている、「……まだ手紙は来ないかい」と私を責めるのであった。

十五、先生先生とは一体誰^{だれ}の事^{こと}だい (前)

「……先生先生というの^{だれ}は一体誰^{だれ}の事^{こと}だい」と兄が聞いた。「……こないだ話したじゃないか」と私は答えた。私は自分で質問をしておきながら、すぐ他の説明^{せつめい}を忘れてしまう兄に対して不快の念を起した。「……聞いた事は聞いたけれども」と、兄は必^{ひつ}竟^{きやう}聞いても解^{わか}らないと言^いうのであった。私から見ればなにも無理に先生を兄に理解^{りかい}してもら^らう必要^{ひつ}はな^かかった。けれども腹は立^たった。また例^{れい}の兄らしい所^{ところ}が出てきたと思^{おも}った。

先生先生と私が尊敬する以上、その人は必ず著名の士でなくてはならないように兄は考^{かん}えていた。少なくとも大学の教授^{けう}ぐらいだろうと推察^{すいさつ}していた。名もない人、何もしていない人、それがどこに価値^{かち}をもっているだろう。兄の腹はこの点^{てん}において、父と全く同じものであった。けれども父が何も出来ないから遊^{あそ}んでいるのだと速断^{すみだん}するのに引きかえて、兄は何かやれる能力があるのに、ぶらぶらしているのは詰^{つま}らん人間^{じんがう}に限^{かぎ}りと言^いった風の口^{くち}吻^{くち}を洩^もらした。「……イゴイストはいけないね。何もしないで生きていようというの^は横^{よこ}着^ぎな^な了^り簡^{かん}だからね。人は自分^{みづか}のも^もつて^ている才能^{さいのう}を出来るだけ働^{はたら}かせなくつちや嘘^{うそ}だ」と言^いう。私は兄に向^{むか}かって、自分の使^{つか}っているイゴイストという言葉^{ことば}の意味^{いみ}がよく解^{わか}るか^かと聞き返^{かえ}してやりた^たかった。「……それでもその人のお蔭^{かげ}で地位^{ちゐ}が出来ればまあ結構^{けつこう}だ。お父^{とう}さんも喜^{よろこ}んでるようじゃないか」と言^いった。(本文)

*

*

さて、「……先生先生というの^{だれ}は一体誰^{だれ}の事^{こと}だい」と兄が聞いた。「……こないだ話したじゃないか」と私は答えた。私は自分で質問をしておきながら、すぐ他の説明^{せつめい}を忘れてしまう兄に対して不快の念を起した。「……聞いた事は聞いたけれども」と、兄は必^{ひつ}竟^{きやう}聞いても解^{わか}らないと言^いうのであった。私から見ればなにも無理に先生を兄に理解^{りかい}してもら^らう必要^{ひつ}はな^かかった。けれども腹は立^たった。また例^{れい}の兄らしい所^{ところ}が出てきたと思^{おも}った。

先生先生と私が尊敬する以上、その人は必ず著名の士でなくてはならないように兄は考^{かん}えていた。少なくとも大学の教授^{けう}ぐらいだろうと推察^{すいさつ}していた。(この「先生」という言

葉については、何度も説明して来ているので、ここでは省略したいと思う。名もない人、何もしていない人、それがどこに価値をもっているだろう。兄の腹はこの点において、父と全く同じものであった。けれども父が何も出来ないから遊んでいるのだと速断するのに引きかえて、兄は何かやれる能力があるのに、ぶらぶらしているのは詰らん人間に限ると言った風の口吻を洩らした。「……イゴ（エゴ）イストはいけないね。何もしないで生きていようというのは横着な了簡だからね。人は自分のもっている才能を出来るだけ働かせなくっちゃ嘘だ」と言う。私は兄に向かって、自分の使っているイゴ（エゴ）イストという言葉の意味がよく解るかと言返してやりたかったとあるが、兄は、恐らく、イゴ（エゴ）イストを「横着やわがまま或いは身勝手ぐらい」に考えているのだろう。

ちなみに、「検索」で引いてみると、それは「利己主義者」（自己の利益を重視し、他者の利益を軽視、無視する考え方の人であり、それにより、他者が不利益や損害を被ることも少なくない）とある。

十五、父の死後、母親を誰が見るのか（後）

「……それでもその人のお蔭で地位が出来ればまあ結構だ。お父さんも喜んでるようじゃないか」と、（兄は）後からこんな事を言った。先生から明瞭な手紙の来ない以上、私はそう信ずる事も出来ず、またその口に出す勇氣もなかった。それを母の早呑み込みでみんなにそう吹聴してしまった今となって見ると、私は急にそれを打ち消す訳に行かなくなった。私は母に催促されるまでもなく、先生の手紙を待ち受けた。そうしてその手紙に、どうかみんなの考えているような衣食の口の事が書いてあればいいがと念じた。私は死に瀕している父の手前、その父に幾分でも安心させてやりたいと祈りつつある母の手前、働かなければ人間でないようにいう兄の手前、その他妹の夫だの伯父だの叔母だのの手前、私のちっとも頓着していない事に、神経を悩まさなければならなかった。

さて、父が変な黄色いものも嘔いた時、私はかつて先生と奥さんから聞かされた危険を思い出した。「……ああして長く寝ているんだから胃も悪くなる筈だね」と言った母の顔を見て、何も知らないその人の前に涙ぐんだ。兄と私が茶の間で落ち合った時、兄は「……聞いたか」と言った。それは医者が帰り際に兄に向って言った事を聞いたかという意味であった。私には説明を待たないでもその意味がよく解っていた。「……お前ここへ帰って来て、宅の事を監理する気がないか」と兄が私を顧みた。私は何とも答えなかった。

「……お母さん一人じゃ、どうする事も出来ないだろう」と兄がまた言った。兄は私を土の臭いを嗅いで朽ちて行っても惜しくないように見ていた。「……本を読むだけなら、田舎でも充分出来るし、それに働く必要もなくなるし、ちょうど好いだろう」と言うので、「……兄さんが帰って来るのが順ですね」と私が言った。「……おれにそんな事が出来るものか」と兄は一口に斥けた。兄の腹の中には、世の中でこれから仕事をしようという気が充ち満ちていた。「……お前がいやなら、まあ伯父さんにでも世話を頼むんだが、それにしてもお母さんはどつちかで引き取らなくっちゃなるまい」と言うので、「……お母さんがここを動かかないかがすでに大きな疑問ですよ」と私は言った。兄弟はまだ父の死なない前から、父の死んだ後について、こんな風に語り合った。（本文）

*

*

さて、「……それでもその人のお蔭で地位が出来ればまあ結構だ。お父さんも喜んでようじゃないか」と、(兄は)後からこんな事を言った。先生から明瞭な手紙の来ない以上、私はそう信ずる事も出来ず、またその口に出す勇氣もなかった。それを母の早呑み込みでみんなにそう吹聴してしまつた今となつて見ると、私は急にそれを打ち消す訳に行かなくなつた。私は母に催促されるまでもなく、先生の手紙を待ち受けた。そうしてその手紙に、どうかみんなの考えているような衣食の口の事が書いてあればいいかと念じた。私は死に瀕している父の手前、その父に幾分でも安心させてやりたいと祈りつつある母の手前、働かなければ人間でないようにいう兄の手前、その他妹の夫だの伯父だの叔母だのの手前、私のちつとも頓着していかない事に、神経を悩まさなければならなかつた。

これは、世間一般的に考えれば、例えば、どのような大学を卒業し、どのような職業に就き、そして、どのくらいの収入を得て、どれくらいの社会的地位についているのか、また、どのくらい社会的に認められている存在であるのか、いわばその人の「社会的な評価」になつているかと思う。一方、先生の場合は、大学は、東京帝国大学を卒業しているが、それ以外は、社会的な活動は全くしていない存在であり、そのような存在に、一体、どのような「価値」があるのかと問えば、それは、次のようなことである。

まず、前者の「学歴、職歴、所得、社会的地位、知名度、生活ぶり、その他」などは、いわば俗人の「世俗的評価」に過ぎず、それは、人間として真に優れているかどうかとは全く違うものになるのである。一方、先生は、人間として真に「内的(成長)成熟」しているということであり、それは、例えば、孔子をはじめ、ソクラテス、釈迦、イエス、その他、実に様々な人物がいるかと思うが、そのように人間として真に「内的(成長)成熟」を遂げている人たちであれば、いわゆる「……人生の何たるかを教えてくれる存在」でもあり、そのような「存在」こそは、まさに「先生」と呼ぶにふさわしいということである。

さて、父が変な黄色いもの嘔吐した時、私はかつて先生と奥さんから聞かされた危険を思い出した。「……ああして長く寝ているんだから胃も悪くなる筈だね」と言つた母の顔を見て、何も知らないその人の前に涙ぐんだ。兄と私が茶の間で落ち合つた時、兄は「……聞いたか」と言つた。それは医者が帰り際に兄に向つて言つた事を聞いたかという意味であつた。私には説明を待たないでもその意味がよく解つていた。「……お前ここへ帰つて来て、宅の事を監理する気がないか」と兄が私を顧みた。私は何とも答えなかつた。

「……お母さん一人じゃ、どうする事も出来ないだろう」と兄がまた言つた。兄は私を土の臭いを嗅いで朽ちて行つても惜しくないように見ていた。「……本を読むだけなら、田舎でも充分出来るし、それに働く必要もなくなるし、ちょうど好いだろう」と言うので、「……兄さんが帰つて来るのが順ですね」と私が言つた。「……おれにそんな事が出来るものか」と兄は一口に斥けた。兄の腹の中には、世の中でこれから仕事をしようという気が充ち満ちていた。「……お前がいやなら、まあ伯父さんにでも世話を頼むんだが、それにしてもお母さんはどつちかで引き取らなくっちゃなるまい」と言うので、「……お母さんの死なない前から、父の死んだ後について、こんな風に語り合つた。

例えば、父親の死後、葬儀を無事に終えて、やがて「財産分与」が始まることになるが、その場合、家や土地或いは現金その他などをどのように分配するのか、先生が心配していたようなことが起こり得るのかどうか、また、兄も私も妹も母親の面倒を見ないとすると、

当面は、「……まあ伯父さんにでも世話を頼むんだが、それにしてもお母さんは（最終的には）どっちかで見えなくなっちゃうるまい」となるのである。

十六、父は時々囁語を言うようになった（前）

父は時々囁語を言うようになった。「……乃木大将に済まない。実に面目次第がない。いえ私もすぐお後から」と、こんな言葉をひよいひよい出した。母は気味を悪がった。なるべくみんなを枕元へ集めておきたがった。気のたしかな時は頻りに淋しがる病人にもそれが希望らしく見えた。ことに室の中を見廻して母の影が見えないと、父は必ず「御光は」と聞いた。聞かないでも、眼がそれを物語っていた。私はよく起って母を呼びに行つた。「……何かご用ですか」と、母が仕掛た用をそのままにしておいて病室へ来ると、父はただ母の顔を見詰めるだけで何も言わない事があつた。そうかと思うと、まるで懸け離れた話をした。突然「……御光お前にも色々世話になつたね」などと優しい言葉を出す時もあった。母はそういう言葉の前につきつと涙ぐんだ。そうした後ではまたきつと丈夫であつた昔の父をその対照として想い出すらしかなかった。「……あんな憐れっぽい事をお言いだがね、あれでもとは随分酷かつたんだよ」と言うのであつた。

母は父のために箒で背中をどやされた時の事などを話した。今まで何遍もそれを聞かされた私と兄は、何時もとはまるで違つた気分で、母の言葉を父の記念のように耳へ受け入れた。

父は自分の眼の前に薄暗く映る死の影を眺めながら、まだ遺言らしいものを口に出さなかつた。「……今のうち何か聞いておく必要はないかな」と兄が私の顔を見た。「……そうだなあ」と私は答えた。私はこちらから進んでそんな事を持ち出すのも病人のためには好し悪しだと考えていた。二人は決しかねてついに伯父に相談をかけた。伯父も首を傾けた。「……言いたい事があるのに、言わないで死ぬのも残念だろうし、と言つて、こつちから催促するのも悪いかも知れず」と、話はどうとう愚図愚図になつてしまつた。そのうちに昏睡が来た。例の通り何も知らない母は、それをただの眠りと思ひ違えて却つて喜んだ。「……まあああして楽に寝られれば、傍にいるものも助かります」と言つた。（本文）

*

*

さて、父は時々囁語を言うようになった。「……乃木大将に済まない。実に面目次第がない。いえ私もすぐお後から」と、こんな言葉をひよいひよい出した。母は気味を悪がった。なるべくみんなを枕元へ集めておきたがった。気のたしかな時は頻りに淋しがる病人にもそれが希望らしく見えた。ことに室の中を見廻して母の影が見えないと、父は必ず「御光は」と聞いた。聞かないでも、眼がそれを物語っていた。私はよく起つて母を呼びに行つた。「……何かご用ですか」と、母が仕掛た用をそのままにしておいて病室へ来ると、父はただ母の顔を見詰めるだけで何も言わない事があつた。そうかと思うと、まるで懸け離れた話をした。突然「……御光お前にも色々世話になつたね」などと優しい言葉を出す時もあった。母はそういう言葉の前につきつと涙ぐんだ。（これは、夫婦だけの《子供達には知りようもない》実に膨大の「過去の記憶」があり、その実に膨大な過去の様々な喜怒哀楽の記憶の中の幾つかがふと甦つて来るのである）。そうだからこそ、そうした後ではまたきつと丈夫であつた昔の父をその対照として想い出すらしかなかった。「……あんな憐

れつばい事をお言いだがね、あれでもとは随分酷かったんだよ」と言うのであった。母は父のために箒で背中をどやされた時の事などを話した。今まで何遍もそれを聞かされた私と兄は、何時もとはまるで違った気分で、母の言葉を父の記念のように耳へ受け入れた。父は自分の目の前に薄暗く映る死の影を眺めながら、まだ遺言らしいものを口に出さなかつた。「……今のうち何か聞いておく必要はないかな」と兄が私の顔を見た。「……うだなあ」と私は答えた。私はこちらから進んでそんな事を持ち出すのも病人のために好し悪しだと考えていた。二人は決しかねてついに伯父に相談をかけた。伯父も首を傾けた。「……言いたい事があるのに、言わないで死ぬのも残念だろうし、と言って、こつちから催促するのも悪いかも知れず」と、話はどうとう愚図愚図になつてしまつたとある。

例えば、まさに死の間際に、「……お父さん、何か言つておくことある？」などと聞かれて、たとえ「……何々」と応えたとしても、それは、もう意識や精神の混濁している状態からの言葉になり、どこまで本人の意思かは厳密には判別しがたくなる。それゆえ、本来であれば、頭や精神などがまだ健全に働いているうちに、例えば、弁護士など同席の上の「遺言書」などを（動画と共に）残して置けば、より確かな本人の意思表示になるのかも知れない。たとえそうしたとしても、むろん、骨肉の「相続争い」というものは、起きる時には起きてしまうものであり、それだけ「財産」（或いは「お金」）へのわれわれ人間の執着というものは、まさに「凄まじいもの」があるということである。

そのうちに昏睡が来た。例の通り何も知らない母は、それをただの眠りと思い違えて却つて喜んだ。（これは、昏睡状態という、いわば専門的《医学的》知識などから冷静に見ているむしろ冷たい目であり、《つまり知識のある人が知識のない人を見て軽蔑するようなものであるが》、一方、母親は、たとえ専門的《医学的》知識などはないとしても、苦しまずにやすやすと眠っている夫の姿を見て、素直に喜んでいるのであり、そういう温かな眼差しであり、「……まあああして楽に寝られれば、傍にいるもの（自分をも含めて）助かります（気が楽になります）」と言っているのである。

十六、先生から分厚い郵便物が届く（後）

父は時々眼を開けて、誰はどうしたなどと突然聞いた。その誰はつい先刻までそこに坐つていた人の名に限られていた。父の意識には暗い所と明るい所とできて、その明るい所だけが、闇を縫う白い糸のように、ある距離を置いて連続するように見えた。母が昏睡状態を普通の眠りと取り違えたのも無理はなかつた。

そのうち舌が段々纏れて来た。何か言い出しても尻が不明瞭に了るために、要領を得ないでしまう事が多くあつた。そのくせ話し始める時は、危篤の病人とは思われない程、強い声を出した。我々は固より不断以上に調子を張り上げて、耳元へ口を寄せるようにしなければならなかつた。「……頭を冷やすと好い心持ですか」と聞くと、「うん」と答えるのであつた。

私は看護婦を相手に、父の水枕を取り更えて、それから新しい氷を入れた氷嚢を頭の上へ載せた。がさがさに割られて尖り切つた氷の破片が、囊の中で落ちつく間、私は父の禿上つた額の外でそれを柔らかに抑えていた。その時兄が廊下伝いに這入つて来て、一通の郵便を無言のまま私の手に渡した。空いた方の左手を出して、その郵便を受け取つ

た私はすぐ不審を起した。

それは普通の手紙に比べるとよほど目方の重いものであった。並の状袋にも入れてなかった。また並の状袋に入れられべき分量でもなかった。半紙で包んで、封じ目を鄭寧に糊で貼り付けてあった。私はそれを兄の手から受け取った時、すぐその書留である事に気が付いた。裏を返して見るとそこに先生の名がつつしんだ字で書いてあった。手の放せない私は、すぐ封を切る訳に行かないので、ちよつとそれを懐に差し込んだ。(本文)

*

*

さて、父は時々眼を開けて、誰はどうしたなどと突然聞いた。その誰はつい先刻までそこに坐っていた人の名に限られていた。父の意識には暗い所と明るい所とできて、その明るい所だけが、闇を縫う白い糸のように、ある距離を置いて連続するように見えた。母が昏睡状態を普通の眠りと取り違えたのも無理はなかった。(精神が混濁を始める。)

そのうち舌が段々纏れて来た。何か言い出しても尻が不明瞭に了るために、要領を得ないでしまう事が多くあった。そのくせ話し始める時は、危篤の病人とは思われない程、強い声を出した。我々は固より不断以上に調子を張り上げて、耳元へ口を寄せるようにしなければならなかった。「……頭を冷やすと好い心持ですか」と聞くと、「うん」と答えるのであった。(舌の動きが悪くなり呂律が回らなくなり、意味も不明瞭になって来た。)

私は看護婦を相手に、父の水枕を取り更えて、それから新しい氷を入れた氷嚢を頭の上へ載せた。がさがさに割られて尖り切った氷の破片が、囊の中で落ちつく間、私は父の禿上った額の外でそれを柔らかに抑えていた。(これは、子供の頃、熱が出た時などには、よく枕に氷の入った水枕と額の上に氷を入れた氷嚢などを載せると、その冷たさが非常に心地よかつたという経験を持つ人も非常に多いのではないかと思う。)

その時兄が廊下伝いに這入って来て、一通の郵便を無言のまま私の手に渡した。空いた方の左手を出して、その郵便を受け取った私はすぐ不審を起した。

それは普通の手紙に比べるとよほど目方の重いものであった。並の状袋にも入れてなかった。また並の状袋に入れられべき分量でもなかった。半紙で包んで、封じ目を鄭寧に糊で貼り付けてあった。私はそれを兄の手から受け取った時、すぐその書留である事に気が付いた。裏を返して見るとそこに先生の名がつつしんだ字で書いてあった。手の放せない私は、すぐ封を切る訳に行かないので、ちよつとそれを懐に差し込んだとある。

さて、この尋常ではない「分厚い郵便物」こそは、いわば「先生の遺書」であり、第三部(下)の『先生と遺書』の、まさに「全文の原稿」になっているのである。)

十七、父親は危険な状態へと陥る(前)

その日は病人の出来がことに悪いように見えた。私が廁へ行こうとして席を立った時、廊下で行き合った兄は、「……どこへ行く」と番兵のような口調で誰何した。「……どうも様子が少し変だからなるべく傍にるようにしなくっちゃいけないよ」と注意した。

私もそう思っていた。懐中した手紙はそのままにしてまた病室へ帰った。父は眼を開けて、そこに並んでいる人の名前を母に尋ねた。母があれば誰、これは誰と一々説明してやると、父はそのたびに首肯いた。首肯かない時は、母が声を張りあげて、何々さんです、分りましたかと念を押した。「……どうも色々お世話になります」と、父はこう言った。

そうしてまた昏睡状態に陥った。枕辺を取り巻いている人は無言のまましばらく病人の様子を見詰めていた。やがてその中の一人が立って次の間へ出た。するとまた一人立った。私も三人目にととう席を外して、自分の室へ来た。私には先刻懐へ入れた郵便物の中を開けて見ようという目的があった。それは病人の枕元でも容易に出来る所作には違いなかった。しかし書かれたものの分量があまりに多過ぎるので、一息にそこで読み通す訳には行かなかった。私は特別の時間を偷んでそれに充てた。(本文)

*

*

さて、その日は病人の出来がことに悪いように見えた。私が厠へ行こうとして席を立った時、廊下で行き合った兄は、「……どこへ行く」と番兵のような口調で誰何した。「……どうも様子が少し変だからなるべく傍にるようにしなくっちゃいけないよ」と注意した。私もそう思っていた。懐中した手紙はそのままにしてまた病室へ帰った。

父は眼を開けて、そこに並んでいる人の名前を母に尋ねた。母があれば誰、これは誰と一々説明してやると、父はそのたびに首肯した。首肯かない時は、母が声を張りあげて、何々さんです、分りましたかと念を押した。「……どうも色々お世話になります」と、父はこう言った。(これは、病人の最期を看取るために、親戚などがみな枕元に集まっている状態なのか知れない)。そうしてまた昏睡状態に陥った。枕辺を取り巻いている人(たち)は無言のまましばらく病人の様子を見詰めていた。やがてその中の一人が立って次の間へ出た。するとまた一人立った。私も三人目にととう席を外して、自分の室へ来た。私には先刻懐へ入れた郵便物の中を開けて見ようという目的があった。それは病人の枕元でも容易に出来る所作には違いなかった。しかし書かれたものの分量があまりに多過ぎるので、一息にそこで読み通す訳には行かなかった。私は特別の時間を偷んでそれに充てたとある。(この「特別の時間を偷んで」というのは、いわば看護の合間合間の「空いた時間を偷んで《利用して》」、「私」という人は、自分の室へ来て、その誰もいない自分の室で、まさにその「分厚い郵便物」を読んだという事になるのだろう。)

十七、手紙の冒頭部分を読むと(後)

私は繊維の強い包み紙を引き掻くように裂き破った。中から出たものは、縦横に引いた罫の中へ行儀よく書いた原稿様のものであった。そうして封じる便宜のために、四つ折りに畳まれてあった。私は癖のついた西洋紙を、逆に折り返して読みやすいように平たくした。私の心はこの多量の紙と印気が、私に何事を語るのだろうかと思つて驚いた。私は同時に病室の事が気にかかった。私がかきものを読み始めて、読み終らない前に、父はきつとどうかなる、少なくとも、私は兄からか母からか、それでなければ伯父からか、呼ばれるに極まっているという予覚があった。私は落ち付いて先生の書いたものを読む気になれなかった。私はそわそわしながらただ最初の一頁を読んだ。その頁は下のように綴られていた。

「……あなたから過去を問いただされた時、答える事の出来なかつた勇氣のない私は、今あなたの前に、それを明白に物語る自由を得たと信じます。しかしその自由はあなたの上京を待っているうちにはまた失われてしまう世間的の自由に過ぎないのであります。従つて、それを利用出来る時に利用しなければ、私の過去をあなたの頭に間接の経験として

教えて上げる機会を永久に逸するようになります。そうすると、あの時あれほど堅く約束した言葉がまるで嘘になります。私はやむを得ず、口で言うべきところを、筆で申し上げる事にしました」とあった。

私はそこまで読んで、始めてこの長いものが何のために書かれたのか、その理由を明らかに知る事が出来た。私の衣食の口、そんなものについて先生が手紙を寄こす気遣いはないと、私は初手から信じていた。しかし筆を執ることの嫌いな先生が、どうしてあの事件をこう長く書いて、私に見せる気になったのだろうか。先生はなぜ私の上京するまで待つていられないのだろうか。「……自由が来たから話す。しかしその自由はまた永久に失われなければならぬ」とある。

私は心のうちでこう繰り返しながら、その意味を知るに苦しんだ。私は突然不安に襲われた。私はつづいて後を読もうとした。その時病室の方から、私を呼ぶ大きな兄の声が聞こえた。私はまた驚いて立ち上った。廊下を駆け抜けるようにしてみんなのいる方へ行った。私はいよいよ父の上に最後の瞬間が来たのだと覚悟した。(本文)

*

*

さて、私は繊維の強い包み紙を引き掻くように裂き破った。中から出たものは、縦横に引いた罫の中へ行儀よく書いた「原稿様」のものであった。そうして封じる便宜のために、四つ折りに畳まれてあった。私は癖のついた西洋紙を、逆に折り返して読みやすいように平たくした。……

私の心はこの多量の紙と印気が、私に何事を語るのだからかと思つて驚いた。私は同時に病室の事が気にかかった。私がかきものを読み始めて、読み終らない前に、父はきつとどうかなる、少なくとも、私は兄からか母からか、それでなければ伯父からか、呼ばれるに極まっているという予覚があった。私は落ち付いて先生の書いたものを読む気になれなかった。私はそわそわしながらただ最初の一頁を読んだ。その頁は下のように綴られていた。(それは、第三部の『先生と遺書』へと連なる内容になるものである。)

「……あなたから過去を問いただされた時、答える事の出来なかつた勇氣のない私は、今あなたの前に、それを明白に物語る自由を得たと信じます。しかしその自由はあなたの上京を待つているうちにはまた失われてしまう世間的の自由に過ぎないのであります。従つて、それを利用出来る時に利用しなければ、私の過去をあなたの頭に間接の経験として教えて上げる機会を永久に逸するようになります。そうすると、あの時あれほど堅く約束した言葉がまるで嘘になります。私はやむを得ず、口で言うべきところを、筆で申し上げる事にしました」とある。(ちなみに、文中の「世間的の自由」というのは、先生の奥さんの叔母が病気で手が足りないというので、私が(妻を)勧めて行かせ、十日ばかり前から市ヶ谷の叔母の所へ行つてゐるその間のこと)であり、その「間」に、「……この長いものの大部分を書きました」ということになるのである。)

私はそこまで読んで、始めてこの長いものが何のために書かれたのか、その理由を明らかに知る事が出来た。私の衣食の口、そんなものについて先生が手紙を寄こす気遣いはないと、私は初手から信じていた。しかし筆を執ることの嫌いな先生が、どうしてあの事件をこう長く書いて、私に見せる気になったのだろうか。先生はなぜ私の上京するまで待つていられないのだろうか。「……自由が来たから話す。しかしその自由はまた永久に失われなければならぬ」とは、一体、どういうことなのだろうか?

私は心のうちでこう繰り返しながら、その意味を知るに苦しんだ。私は突然不安に襲われた。(それは何かいやな予感が突然襲って来たのである)。私はつづいて後を読もうとした。その時病室の方から、私を呼ぶ大きな兄の声がか聞こえた。私はまた驚いて立ち上った。廊下を駆け抜けるようにしてみんなのいる方へ行った。私はいよいよ父の上に最後の瞬間が来たのだと覚悟したが、(実は兄に代って、浣腸のため油紙を父の尻の下に宛てがう手助けで呼ばれたのであった。)

十八、この手紙があなたの手に落ちる頃には(前)

病室には何時の間にか医者が出て来た。なるべく病人を楽にするという主意からまた浣腸を試みるころであった。看護婦は昨夜の疲れを休める為に別室で寝ていた。慣れない兄は起つてまごまごしていた。私の顔を見ると、「……ちよつと手をお貸し」と言つたまま、自分は席に着いた。私は兄に代って、油紙を父の尻の下に宛てがつたりした。父の様子は少しくつろいで来た。三十分ほど枕元に坐つていた医者は、浣腸の結果を認めた上、また来ると言つて、帰って行った。帰り際に、もしもの事があつたらいつでも呼んでくれるようにわざわざ断つていた。

私は今にも変がありそうな病室を退ぞいでまた先生の手紙を読もうとした。しかし私はすこしも寛くした気分になれなかった。机の前に坐るや否や、また兄から大きな声で呼ばれそうでならなかった。そうして今度呼ばれば、それが最後だという畏怖が私の手を顫わした。私は先生の手紙をただ無意味に頁だけ剥繰つて行った。私の眼は几帳面に枠の中に篋められた字画を見た。けれどもそれを読む余裕はなかった。拾い読みにする余裕すら覚束なかった。私は一番しまいの頁まで順々に開けて見て、またそれを元の通りに畳んで机の上に置こうとした。その時ふと結末に近い一句が私の眼に這入った。

「……この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう。とくに死んでいるでしょう」とあつた。

私ははつと思つた。今までわざわざと動いていた私の胸が一度に凝結したように感じた。私はまた逆に頁をはぐり返した。そうして一枚に一句位ずつの割で倒に読んで行つた。私は咄嗟の間に、私の知らなければならぬ事を知ろうとして、ちらちらする文字を、眼で刺し通そうと試みた。その時私の知ろうとするのは、ただ先生の安否だけであつた。先生の過去、かつて先生が私に話そうと約束した薄暗いその過去、そんなものは私に取つて、全く無用であつた。私は倒まに頁をはぐりながら、私に必要な知識を容易に与えてくれないこの長い手紙を自然たそうに畳んだ。(本文)

*

*

さて、病室には何時の間にか医者が出て来た。なるべく病人を楽にするという主意からまた浣腸を試みるころであつた。看護婦は昨夜の疲れを休める為に別室で寝ていた。慣れない兄は起つてまごまごしていた。私の顔を見ると、「……ちよつと手をお貸し」と言つたまま、自分は席に着いた。私は兄に代って、油紙を父の尻の下に宛てがつたりした。(つまり「浣腸の為の準備をする手助けとして呼ばれた」のであつた。)

父の様子は少しくつろいで来た。三十分ほど枕元に坐つていた医者は、浣腸の結果を認めた上、また来ると言つて、帰って行った。帰り際に、もしもの事があつたらいつでも

呼んでくれるようにわざわざ断っていた。(つまり「その瞬間がいつ来るのかは誰にもまた本人ですら分からない」ということである。)

私は今にも変がありそうな病室を退ぞいてまた先生の手紙を読もうとした。しかし私はすこしも寛ぐりした気分になれなかった。机の前に坐るや否や、また兄から大きな声で呼ばれそうでならなかった。そうして今度呼ばれば、それが最後だという畏怖が私の手を顫わした。私は先生の手紙をただ無意味に頁だけ剥繰って行った。私の眼は几帳面に枠の中に箝められた字画を見た。けれどもそれを読む余裕はなかった。拾い読みにする余裕すら覚束なかった。私は一番しまいの頁まで順々に開けて見て、またそれを元の通りに畳んで机の上に置こうとした。その時ふと結末に近い一句が私の眼に這入った。

「……この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう。とくに死んでいるでしょう」とあった。(これは、実に「衝撃的な言葉」であり、というのも、先生には、これという「健康上の問題」もなく、また、自殺を決行しなければならぬほどの「精神上の問題」も全く感じられなかったからである。)

私ははつと思つた。今までざわざわと動いていた私の胸が一度に凝結したように感じた。私はまた逆に頁をはぐり返した。そうして一枚に一句位ずつの割で倒に読んで行った。私は咄嗟の間に、私の知らなければならぬ事を知ろうとして、ちらちらする文字を、眼で刺し通そうと試みた。その時私の知ろうとするのは、ただ先生の安否だけであった。先生の過去、かつて先生が私に話そうと約束した薄暗いその過去、そんなものは私に取つて、全く無用であった。私は倒まに頁をはぐりながら、私に必要な知識を容易に与えてくれないこの長い手紙を自烈たそうに畳んだ。(例えば、東日本大震災の大津波の後、自分の「家族や親戚或いは知人や親友その他」などの「安否」を一刻も早く知ろうとしても、なかなかその「安否の確認」が想うように出来ず、もうイライラ自烈たく感じているような心理に近いのも知れない。)

十八、慌てて三等列車に乗り込む(後)

私はまた父の様子を見に病室の戸口まで行った。病人の枕辺は存外静かであった。頼りなさそうに疲れた顔をしてそこに坐っている母を手招きして、「……どうですか様子は」と聞いた。母は「……今少し持ち合つてるようだよ」と答えた。私は父の眼の前へ顔を出して、「……どうです、浣腸して少しは心持が好くなりましたか」と尋ねた。父は首肯した。父ははつきり「……有難う」と言った。父の精神は存外朦朧としていなかった。

私はまた病室を退ぞいて自分の部屋に帰った。そこで時計を見ながら、汽車の発着表を調べた。私は突然立つて帯を締め直して、袂の中へ先生の手紙を投げ込んだ。それから勝手口から表へ出た。私は夢中で医者の家へ駆け込んだ。私は医者から父がもう二、三日保つたろうか、そのところを判然聞こうとした。注射でも何でもして、保たしてくれと頼もうとした。医者は生憎留守であった。私には凝として彼の帰るのを待ち受ける時間がなかった。心の落ち付きもなかった。私はすぐ俵を停車場へ急がせた。

私は停車場の壁へ紙片を宛てがって、その上から鉛筆で母と兄あてで手紙を書いた。手紙はごく簡単なものであったが、断らないで走るよりまだ増しだろうと思つて、それを急いで宅へ届けるように車夫に頼んだ。そうして思い切つた勢で東京行き汽車に飛び乗

ってしまった。私はごうごう鳴る三等列車の中で、また袂たもとから先生の手紙を出して、漸ようやく始めから仕舞まで眼を通した。(第一部・完)

*

*

さて、私はまた父の様子を見に病室の戸口まで行った。病人の枕辺まくらべは存外ぞんがい静かであった。頼りなきように疲れた顔をしてそこに坐っている母を手招てまねぎして、「……どうですか様子は」と聞いた。母は「……今少し持ち合っているようだよ」と答えた。私は父の眼の前へ顔を出して、「……どうです、浣腸して少しは心持が好くなりましたか」と尋ねた。父は首肯うなずいた。父ははつきり「……有難う」と言った。父の精神は存外ぞんがい朦朧もろうとしていなかった。(それゆえ、何日かは保つかも知れないと思い、次のような行動に出たのかも知れない。)

私はまた病室を退しりぞいて自分の部屋に帰った。そこで時計を見ながら、汽車の発着表を調べた。(まだ間に合うので)、私は突然立って帯を締め直して、袂たもとの中へ先生の手紙を投げ込んだ。それから勝手口から表へ出た。私は夢中で医者の家へ馳かけ込んだ。私は医者から父がもう二、三日保つだろうか、そのところ(あと何日保つか)を判然はつきり聞こうとした。注射でも何でもして、保たしてくれと頼もうとした。医者は生憎あいにく留守であった。私には凝じつとして彼の帰るのを待ち受ける時間がなかった。(それは「汽車の発車時間があるからであり」、心の落ち付きもなかった。私はすぐ俵くろまを停車場ステーションへ急がせた。)

私は停車場の壁へ紙片かみざれを宛あてがって、その上から鉛筆で母と兄あてで手紙を書いた。手紙はごく簡単なものであったが、断らないで走るよりまだ増しだろうと思つて、それを急いで宅うちへ届けるように車夫しやふに頼んだ。(突然、黙つていなくなれば、後々大きな問題にもなり兼ねないからである)。そうして思い切った勢いきおいで東京行きの汽車に飛び乗ってしまった。私はごうごう鳴る三等列車の中で、また袂たもとから先生の手紙を出して、漸ようやく始めから仕舞まで眼を通した。(これは、結局、先生の安否あんひが気になって気になって、どうにも自分を止めようがなかったということである。)(第二部「両親と私」完)

*

*

中 両親と私（概略）

さて、今度の「両親と私」という第二部の「内容」であるが、それは、次のようなものである。まず、「私」という人は、大学を無事に卒業をしたので、母親に頼まれていた「買い物」（「半襟や鞆」など）と「本や卒業証書」などを新しい鞆につめて、汽車で故郷へと帰る。その実家での「両親」（父親と母親）、それに父親の「病状悪化」で駆けつける「兄と妊婦の妹代わりの夫」との対話などが主であり、あとは、先生からの電報と手紙、私からの二、三通の手紙という内容である。それは、本文では、次のようになってい

まず、その冒頭は、「……宅へ帰って案外に思ったのは、父の元気がこの前見た時と大して変っていない事であった」。父親は、「……ああ帰ったかい。そうか、それでも卒業が出来てまあ結構だった。ちよっとお待ち、今顔を洗って来るから」と、父は庭へ出て何かしていたところであった。そして、父親は、何遍も「卒業が出来てまあ結構だ」と繰り返すのであったが、その言葉の「真意」（本当の「意味合い」）は、「……おれはお前の知ってる通りの病気だろう。去年の冬お前に会った時、ことによるともう三月か四月ぐらいなものだろうと思っていたのさ。それがどういいう仕合せか、今日までこうしている。起居に不自由なくこうしている。そこへお前が卒業してくれた。だから嬉しいのさ。せっかく丹精した息子が、自分のいなくなった後で卒業してくれるよりも、丈夫なうちに学校を出てくれる方が親の身になれば嬉しいだろう。大きな考えをもっているお前から見たら、高が大学を卒業したぐらいで、結構だ結構だと言われるのは余り面白くもないだろう。しかしおれの方から見てご覧、立場が少し違っているよ。つまり卒業はお前に取ってより、このおれに取って結構なんだ。解ったかい」と言うのであった。これは、まさに世の中のすべての「親心」を代弁したような言葉であり、私は一言もなかったとある。

そこで、私は、父や母に「卒業証書」を大事そうに見せると、父は、誰の目にもすぐ這入るような正面へ証書を置き、一方、私は、母を蔭へ呼んで父の病状を尋ねた。「……お父さんはあんなに元気そうに庭へ出たり何かしているが、あれでいいんですか」と聞くと、「……もう何ともないようだ。大方好くおなりなんだろう」と、母は案外平気であった。（しかし、この病気は、むしろ、そういうものではなかったのである）。しかも、両親は、私のために赤い飯を炊いて客を呼ぶという相談までしているのである。母親も、「……仰山仰山とお言いたが、些とも仰山じゃないよ。生涯に二度とある事じゃないんだからね、お客ぐらいするのは当たり前だよ。そう遠慮をお為でない」と言い、父親も、「……呼ばなくとも好いが、呼ばないとまた何とか言うから」、「……東京と違って田舎は蒼蠅からね」と言う。仕方なく、私は父と相談の上、招待の「日取り」を決めるのであった。

ところが、その「日取り」のまだ来ないうちに、ある大きな事が起った。それは明治天皇の御病気の報知であり、それは新聞紙ですぐ日本中へ知れ渡り、結局、「……まあ、（祝いは）ご遠慮申した方がよからう」ということになるのである。やがて、崩御の報知が伝えられた時、父はその新聞を手にして、「……ああ、ああ、天子様もとうとうお隠れになる。己も……」と、父の元気は、急速に衰えて行くのであった。（ちなみに、この「天子様がお隠れになる」という言葉は、太宰治の『思ひ出』という作品の冒頭にも出て来るものであり、それは、叔母が「……天子様がお隠れになったと言いなさい」と、幼い太宰治に言う場面である）。それはともかく、——母親は、父親を安心させるためにも、「……

：お前の先生先生という方にでも（就職先を）お願いしたら好いじゃないか。こんな時こそ」と言われて、そこで仕方なく、先生に手紙を書くが、いつまで経っても返事は来ない。それは、一体、なぜかと問えば、まず、なぜここに明治天皇の「崩御」という話題が登場するのかと言えば、それは、まさに先生の「自殺」の一つの大きな「切っ掛け」となるものであり、そのための「伏線」になっているとともに、先生は、この時、自分をどうしたらよいか深く悩んでいて、私の就職先どころではなかったということである。

そして、「私」という人は、九月になると、また東京へ出ようとしたが、父はまた私を引き留めたとある。「……お前が東京へ行く宅はまた淋しくなる。何しろ己とお母さんだけなんだからね。そのおれも身体さえ達者なら好いが、この様子じゃいつ急にどんな事がないとも言えないよ」と言い、私は出来るだけ父を慰めたとある。これは、（死を間近にしている）父親のこの「心細さ」や「淋しさ」というものには、恐らく、計り知れない程のものがあるに違いない。つまり、誰もがやがては（人生の最期には）いやでも味わうことになる「思いや感情」になるのだろう。——ところが、私がいよいよ立とうという間際になって、（たしか二日前の夕方であったが）、父は（風呂場で）突然引つ繰り返ったのである。そこで、東京行きは、もう少し様子を見てからということになり、しかも、三、四日後、再び風呂場で倒れるという事態となり、そこで兄に父の現状を知らせる長い手紙を出し、また、妹には母が同じような内容の手紙を書いて出すことになる。また、母と相談して、父の枕元へは、町の病院から看護婦を一人頼む事にし、しかも、病人がいるので、自然と家への見舞の出入りも多くなつたとある。

さて、父の病状は、面白くない方へ移っていくばかりで、ついに私は母や伯父と相談して、とうとう兄と妹に電報を打ち、兄からはすぐ行くという返事が来、一方、妹の方は、流産を恐れて、妹の夫が来ることになるのである。もちろん、こちら辺の内容は、それほど重要なものはそれほどはなく、いわば世間一般で「よく交わされる会話」の内容になっているかと思うが、それゆえ、何よりも大事な場面は、むしろその次の「場面」からなのである。それは、次のようなものである。——まず、「兄」と「妹の夫」がやって来て、父の病状を見ると、「兄」は、新聞紙を読んでいる父親を見て、「……よつほど悪いかと思つて来たら、大変好いようじゃないか」と言い、一方、「妹の夫」も、「……さつき二十分ばかり枕元に坐つて色々話してみたが、調子の狂つたところは少しもなく。あの様子じゃことによるとまだなかなか持つかも知れませんよ」と言うのであった。

*

*

さて、大事なのは、まさにここからであり、それは、明治天皇の「崩御」は、明治四十五年（一九一二年）の「七月三十日」であり、それから約一ヶ月半ほど経つた「九月十八日」は、まさに明治天皇の「御大葬の夜」、それを「第三部」（先生と遺書）の本文で見ると、先生は、「……御大葬の夜、私はいつもの通り書斎に坐つて、相図の号砲を聞きました。私にはそれが明治が永久に去つた報知のごとく聞こえました。後で考えると、それが乃木大将の永久に去つた報知にもなつていたのです。私は号外を手にして、思わず妻に殉死だ殉死だと言いました」とある。一方、田舎では、「……乃木大将の死んだ時も、父は一番さきに新聞でそれを知つた。そして、『大変だ大変だ』と言つて、何事も知らない私たちはこの突然な言葉に驚かされた。その頃の新聞は実際田舎ものには日ごとに待ち受けられるような記事ばかりあつた。私は父の枕元に坐つて鄭寧にそれを読んだ。読む

時間のない時は、そつと自分の室へ持って来て、残らず眼を通した。私の眼は長い間、軍服を着た乃木大将と、それから官女みたような服装をしたその夫人の姿を忘れる事が出来なかつた」とある。——つまり、この頃は、まだ「ラジオ放送」もなく、(ラジオ放送は大正十四年に東京で始まり、三年後の昭和三年には全国放送の開始)、それゆえ、世の中の毎日の出来事の「情報源」は、まさにほとんど「新聞紙」によつていたのである。

そして、(乃木大将の死という)悲痛な風が田舎の隅まで吹いて来て、眠たそうな樹や草を震わせている最中に、突然私は一通の電報を先生から受け取った。その電報には、「……ちよつと会いたいのが来られるかという意味が簡単に書いてあつた」とある。それに対して、「私」という人は、父の病気の悪化により、「行かれない」という返電を打つ事にしたのである。そして、細かい事情は、その日に手紙に書いて郵便で送ることにした。

さて、ここで確認すべきことは、次のようなことである。まず、この頃には、すでに「新聞配達」は行なわれていたので、新聞紙を毎日「朝」読むことが出来た。だとすれば、病気の父親が「乃木大将の殉死」を新聞で読んで知り、大変だ大変だと騒いだのは、恐らく、「朝」であり。しかも、東京にいる先生も、当然のことながら、「乃木大将の殉死」を、この時は夜号外で知り、そして、翌「朝」、新聞で乃木大将の死ぬ前に書き残して行つたものを読むことによつて、先生は、ある「決心」をして、その日(午前中)に、「私」に「……ちよつと会いたいのが来られるかという」電報を打ち、その「電報」が、その日のうちに「私」(実家)へと届くのである。それでは、なぜ、この「事実関係」が何よりも大事なことになるのかと問えば、それは、「この日」こそは、まさに先生が「……(よろしい)、話しましよう。私の過去を残らず、あなたに話して上げましよう」と、まさにそう「決心した日」になるからである。だからこそ、「電報」で、「……ちよつと会いたいのが来られるかという」内容の「電報」(急報)になるのである。——つまり、先生は、この段階では、まだ「私」という人に直接会つて、まさに「……私の過去を残らず、あなたに話して上げましよう」という「気持ち」でいたということである。

ところが、「私」という人は、父親が重篤であるので、先生に(東京へは)「……行かない」という電報を打つと、その電報を受けた先生は、失望して、二日間、あれこれ深く考え悩み抜いた末に、先生の「考え方」は、まさに「……直接、相手(私)に会つて、話をするという方法」から、やがて、それは、「遺書」(つまり「手紙」という形で、まさに「……私の過去を残らず、あなたに話して上げましよう」という「気持ち」へと大きく変わってしまったのである。その「絶対的証拠」となるものは、それは、二日後、先生は、まさに「……来ないでもよろしい」という「電報」(急報)を打つて来るからである。

*

*

やがて、「……父の病気は最後の二撃を待つ間際まで進んで来て、そこでしばらく躊躇するようになつた。家のものは運命の宣告が、今日下るか、今日下るかと思つて、毎夜床に這入つた。父は傍のものを辛くするほどの苦痛をどこにも感じていなかった。その点になると看病はむしろ楽であつた。要心のために、誰か一人ぐらいつ代る代る起きてはいたが、あとのものは相当の時間に各自の寢床へ引き取つて差支えなかつた。(中略)、そして、私と兄は、一緒に蚊帳の中に寝て、妹の夫だけは、客扱いを受けて、独り離れた座敷に入つて休んだ」とある。——一人は、それほど仲の好い兄弟ではなかつたとある。小さいうちはよく喧嘩をして、年の少ない私の方がいつでも泣かされた。学校へ這入つて

からの専門の相違も、全く性格の相違から出ていた。私は長く兄に会わなかったのも、兄はいつでも私には近くなかった。それでも久しぶりにこう落ち合ってみると、兄弟の優しい心持がどこからか自然に湧いて出た。場合が場合なのもその大きな原因になっていた。二人に共通な父、その父の死のうとしている枕元で、兄と私は握手したのであった。「…お前これからどうする」と兄は聞いた。一方、私は、「…：…一家の財産はどうなってるんだらう」と聞いた。すると、兄は、「…：…おれは知らない。お父さんはまだ何とも言わないから。しかし財産って言ったところで金としては高の知れたものだらう」となるが、これらの一連の内容を見ると、先生が心配したような「財産」をめぐる「骨肉の争い」は、この「家族」の場合には、起こりそうもないという感じを受けるが、それとも、先生が言うように、「…：…いざという間際で、最後の最後で、悪人になる人が出て来るのだからか」、それらのことについては、「作者」（夏目漱石）は、何も書いてはいないのである。

さて、父親の病状は、変な黄色いものも嘔いたり、時々嚙語を言ったり、そのうち舌が段々縫れて来て、何か言い出しても尻が不明瞭に了るために、要領を得ないでしまう事が多くあったとある。そして、父の水枕を取り更て、新しい氷を入れた氷嚢を頭の上へ載せている、その時、兄が廊下伝いに這入って来て、一通の郵便を無言のまま私の手に渡した。空いた方の左手を出して、その郵便を受け取った私はすぐ不審を起した。

それは普通の手紙に比べるとよほど目方の重いものであった。並の状袋にも入れてなかった。また並の状袋に入れられべき分量でもなかった。半紙で包んで、封じ目を鄭寧に糊で貼り付けてあった。私はそれを兄の手から受け取った時、すぐその書留である事に気が付いた。裏を返して見るとそこに先生の名がつつしんだ字で書いてあった。手の放せない私は、すぐ封を切る訳に行かないので、ちよつとそれを懐に差し込んだとある。

そして、父親のいる病室から自分の室へ戻ってから、私は早速郵便物の中を開けて見ると、中から出たものは、いわば「原稿」のようなものであるが、その分量があまりに多過ぎて、一気に読み通す訳には行かず、また、同時に病室の事が気にかかっていたので、落ちついて読む気にもなれず、私はそわそわしながらただ最初の二頁を読んでみた。その冒頭の文章は、「…：…あなたから過去を問いたされた時、答える事の出来なかつた勇氣のない私は、今あなたの前に、それを明白に物語る自由を得たと信じます。しかしその自由はあなたの上京を待っているうちにはまた失われてしまう世間的の自由に過ぎないのであります。従って、それを利用してできる時に利用しなければ、私の過去をあなたの頭に間接の経験として教えて上げる機会を永久に逸するようになります。そうすると、あの時あれほど堅く約束した言葉がまるで嘘になります。私はやむを得ず、口で言うべきところを、筆で申し上げる事にしました」とある。（ちなみに、文中の「世間的の自由」というのは、先生の奥さんの叔母が病気で手が足りないというので、私が（妻を）勧めて行かせ、十日ばかり前から市ヶ谷の叔母の所へ行っているその間のこと」であり、その「間」に、「…：…この長いものの大部分を書きました」ということになるのである。）

さて、一度、父親の浣腸の手助けに病室に呼ばれ、また、自分の室へ戻っては、長い手紙を拾い読みする余裕すらなく、ただ最初から最後までその頁を順に開けて見て、それを元の通りに机の上に置こうとした時、ふと結末に近い一句が私の眼に入り、それは、「…：…この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう」というものであり、この瞬間、今までざわざわと動いていた私の胸が一度に凝結したような感じ

になり、ただ「先生の安否だけが気になった」とある、その結果、私は夢中で医者の家へ馳
け込み、父はあと何日保つのか聞こうとしたが、医者は生憎留守であり、私はすぐ俵を
停車場へ急がせた。その停車場で紙切れに母や兄あての簡単な手紙を書き、それを急いで宅
へ届けるように車夫に頼んだ。そして、思い切った勢いで東京行きの汽車に飛び乗ってし
まった。私はごうごう鳴る三等列車の中で、また袂から先生の手紙を出して、漸く始め
からしまいまで眼を通したのであった。(中・完)

*

*

夏目漱石の世界
こころ（先生と遺書）

はじめに

さて、今回の夏目漱石の世界『こころ』という作品の中の『先生と遺書』（下）という第三部の「内容」であるが、それは、まず、冒頭は、先生からの「長い手紙」であり、それは、「……（以前）あなたは私の過去を絵巻物のように、あなたの前に展開してくれと逼ったが、その時は、他日を約して、あなたの要求を斥けてしまった。その義務からとは別として私の過去を書いておきたいのです。私の過去は私だけの経験であり、私だけの所有と言っても差支ないものであり、それを人に与えないで死ぬのは、私にも惜しいという多少そんな心持があるのです。ただし受け入れる事の出来ない人に与える位なら、私はむしろ私の経験を私の生命と共に葬った方が好いと思うのです。実際ここにあなたという一人の男が存在していないならば、私の過去はついに私の過去で、間接にも他人の知識にはならないで済んだでしょう。私は何千万という日本人のうちで、ただあなただけに、私の過去を物語りたいのです。あなたは真面目だから。あなたは真面目に人生そのものから生きた教訓を得たいと言ったから。私は暗い人世の影を遠慮なくあなたの頭の上に投げかけて上ますと、その「生い立ち」から語り始めるのである。

*

*

先ず、先生という人の「生い立ち」であるが、先生が両親を亡くしたのは、まだ二十歳にならない時分（恐らく中学三年の頃）であり、二人は同じ病氣（それは腸チフス）で死んだのでした。しかも、殆んど同時と言っていくくらいであり、それが傍にいて看護した母に伝染したのでした。先生は二人の間に出来たたった一人の男の子であり、家には相当の財産（旧家）であったので、むしろ鷹揚に育てられました。

さて、両親の死後、先生という人は、東京へ出て高等学校に入ります。そして、財産の管理は、すべて伯父に任せ、三年の間、夏休みは、実家に帰るといふ形で過ごしましたが、やがて、実家には伯父夫婦が住むようになり、伯父は私の財産を誤魔化していたのです。そのことを抗議すると、彼らは私のために、私の所有にかかわる一切のものを纏めてくれました。それは金額に見つみると、私の予想より遙かに少ないものでしたが、再び、東京に戻ってからは、その手にした「財産」は、出来るだけ金に換えたので、学生一人東京で生活するには困らないほどの「お金（財産）」を手にすることが出来たのです。そこで、騒々しい下宿屋を出て、新しく住む家を探していると、たまたま軍人の未亡人とそのお嬢さんそれに一人の下女が住む家の話を聞いて、そこに下宿することになるのである。

つまり、先生(当時は大学生)という人は、軍人の未亡人とそのお嬢さんそれに一人の下女が住む家に下宿するようになるが、その結果として、未亡人の奥さんとそのお嬢さんとも親しくなれるとともに、そのお嬢さんのことが好きになっていくが、そのことをなかなか言い出せずにいたのです。——その頃、子供の頃からの親友であった「K」という人物が、大学生であった「先生」と同じ「家」に下宿することになるが、その「K」という人物は、もともとはお寺の子であったが、中学の頃、養子として医師の家にもらわれて行き、大学では「医学」を専攻するように言われていたが、それを守らなかったため、養子縁組みは取り消され、また、実家からも勘当されて、行き場がなくなり、親友である「先生」が未亡人の奥さんに事情を説明すると、最初は、だめだと反対されるが、結局は、同じ「家」に下宿するようになる。そして、恐らく、未亡人の奥さんも「心の中」では密かに心配し

ていたことだろうと思うが、やがて、親友である「K」という人も、お嬢さんのことが好きになり、いわば「三角関係」の問題が発生するという「展開」になるのである。

さて、学業の方は、二人とも大学二年を終えて、大学三年（九月新学期）になる前の「夏休み」にどこかへ行くこうかとKとあれこれ相談し議論するも決まらず、奥さんが仲に入り、結局、二人で「房州への旅」へ出ることになるが、やがて、二人は真黒になって東京へと帰って来る。宅へ着いた時、奥さんは二人の姿を見て驚くが、それは、ただ色が黒くなっただけではなく、むやみと歩いたので大変瘡（やせ）ってしまったのです。奥さんはそれでも丈夫そうになったと言って賞（ほめ）てくれるが、一方、お嬢さんは母親の矛盾がおかしいと言ってまた笑い出すのでした。ところで、お嬢さんの態度が前とは少し違って、私の方をすべて先にして、Kを後廻し（わじまわ）しにするように見えたのです。——しかし、そのようなことも数ヶ月経つと、やがてお嬢さんの態度がだんだん平気になって来て、Kと私がいっしょに宅にいる時でも、よくKの室（へや）の縁側へ来て彼の名を呼んだり、そこへ入って、ゆっくりしていました。むろん、郵便を持って来る事もあるし、洗濯物を置いてゆく事もあるので、そのくらいの交通は同じ宅にいる二人の関係上、当然と見なければならぬのでしようが、ぜひお嬢さんを専有（せんゆう）したいという強烈な一念に動かされている私には、どうしてもそれが当然以上に見えて、先生は親友の「K」に対する嫉妬（しよ）心をより深めていくのである。

やがて、年が開けて正月になり、ある日、内々（うちうち）だけで歌留多（かるた）をすることがあったが、それから二、三日経った頃、奥さんとお嬢さんは朝から親類の所へ出かけて行き、一方、Kも私もまだ学校の始まらない頃で、二人は室（へや）で静かにしていたが、十時頃、Kは不意に仕切りの襖（ふすま）を開けて、Kの方から私の座敷へ入って来て、私のあたっている火鉢の前に坐（すわ）り、奥さんとお嬢さんはどこへ行ったのか、その他、いろいろ質問するが、やがて、Kから「お嬢さんへの切ない恋心」を聞かされた時に、先生は、「あつ、しまった！」という想いに強く襲（おそ）われるのである。それは、前々からKに「自分のお嬢さんへの恋心」を打ち明けようと思いつつも、なかなか言い出せざるところを、Kに先越（さきこ）されてしまったからであり、また、Kの「告白」を聞いたあとも、実は、自分もお嬢さんのことが好きだということ、なかなか言い出せざるところです。

そして、このままでは「K」にお嬢さんを取られてしまうかも知れない、すぐにも何らかの手を打たなければ、大変なことになるといふ、そういう悶々とした「想い」の状態のまま暫（しばら）くは続くが、その後、深く悩み続けていた「K」という人は、再び、図書館にいる「先生」を呼び出しては、力弱く、「……ただ漠然と、どう思うという」のであった。それに対して、親友である「先生」は、ことばかりに一気に「反撃」に出るのである。それはお嬢さんを絶対に失いたくない、という一心からだったと思うが、この時の「対応（策略）」と、もう一つは、とにかく、Kよりも先に奥さんに「……お嬢さんを下さい」と「結婚の申し入れ」をすることで、奥さんの承諾を得ようとする、この二つの「反撃」によって、親友である「K」を攻撃し、その結果として、先生は、お嬢さんを得、一方、「K」という人は、「自殺」をしてしまう。そのために、親友である「K」を「自殺」へと追いやってしまったという「意識」に襲（おそ）われ、その「罪の意識」（或いは「良心の呵責（かじやく）」）というものに長く悩まされ苦しむことになるのである。

やがて、奥さんもお嬢さんも前の所にいるのを厭（いや）がり、私もその夜の記憶を毎晩繰り返すのが苦痛だったので、相談の上今おる家へ引越（ひっこ）すことになる。移って二カ月ほどして

私は無事に大学を卒業し、そして、卒業して半年も経たないうちに、私はとうとうお嬢さんと結婚したのです。外側から見れば、万事が予期通りに運んだのですから目出度と言わなければなりません。奥さんもお嬢さんもいかにも幸福らしく見えましたし、私も幸福だったのです。けれども私の幸福には「黒い影」が随きまどつていました。

しかも、一年経ってもそのKを忘れる事の出来なかった私の心は常に不安であり、私はこの不安を駆逐するために書物に溺れようと力めたり、また、酒に魂を浸して、己れを忘れようと試みた時期もありましたが、結局はうまくいかなかったのです。そのうち、妻の母が病気になり、医者に見せると到底癒らないという診断であり、私は力の及ぶかぎり懇切に看護をしました。これは病人自身のためでもあり、愛する妻のためでもあり、もつと大きな意味から言うと、ついに人間のためでした。そして、幾分でも善い事をしたという自覚を得たのはこの時でした。私は罪滅しとでも名づけなければならぬ、一種の気分支配されていたのです。

すると、夏の暑い盛りに明治天皇が崩御され、それから約一カ月半ほど後、御大葬の夜、私はいつも通り書齋に坐って、相図の号砲を明治が永久に去った報知のごとく聞き、また、それが乃木大将の永久に去った報知(殉死)にもなっていたのです。私は号外を手にして、思わず妻に殉死だ殉死だと言いました。それから二、三日して、私はとうとう自殺する決心をしました。——私が死のうと決心してから、もう十日以上になりますが、その大部分はあなたにこの長い自叙伝の一節を書き残すために使用されたものと思つて下さい。「…この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう」という内容になっていくのである。

ところで、この第三部の「先生と遺書」というのは、それぞれ「本文」＋「*」＋「解説」という構成になっていて、「…：最初から最後まで、一字一句、丁寧に読み辿りながら深く考察したもの」であり、それゆえ、興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねて見てください。

令和五年一月吉日（決定版）

如月翔悟

目次

二二二

序 はじめに

下、 先生と遺書

- 一、 冒頭の文章（長い手紙）
- 二、 私の過去のすべてを……
- 三、 先生の生い立ち
- 四、 父親と叔父（その実の弟）との関係
- 五、 最初の夏休みの帰省
- 六、 二度目の夏休みの帰省
- 七、 三度目の夏休みの帰省
- 八、 家の財産のこと
- 九、 叔父に財産を誤魔化される
- * *
- 十、 新たな下宿先を見つける
- 十一、 八畳の部屋の様子
- 十二、 先生の心の状態
- 十三、 奥さんとお嬢さんと先生との関係
- 十四、 奥さんの思い
- 十五、 奥さんの態度と先生の心模様
- 十六、 茶の間がお嬢さんの室で男の声がすると
- 十七、 三人で着物を買に出る
- 十八、 奥さんとお嬢さんの気持ち
- * *
- 十九、 Kという親友の登場
- 二十、 Kの三年間の夏休みの過ごし方
- 二十一、 Kの養子縁組の破綻
- 二十二、 先生の下宿先に同居するまでの経緯
- 二十三、 Kが四畳の室に移り住む
- 二十四、 Kの性格と特徴
- 二十五、 Kの心が段々打ち解けて来る
- 二十六、 Kとお嬢さんだけの状況
- 二十七、 二度目のKとお嬢さんだけの状況
- * *
- 二十八、 房州への夏休みの旅
- 二十九、 Kと自分とを比較してみると

- 三十、日蓮の誕生寺と鯉たんじょうでら こい
- 三一、人間らしさについての議論
- 三二、旅行後のお嬢さんの態度
- 三三、糠ぬかる道でKとお嬢さんに遭う
- 三四、先生のKに対する嫉妬心
- *
- 三五、正月に歌留多かるた取りをする
- 三六、Kのお嬢さんへの恋心の告白
- 三七、Kの告白後の先生の心の状態
- 三八、二人は寡黙かもくで夕飯ゆうめしを食べて、床に就く
- 三九、Kに告白の真意を聞く
- *
- 四十、学校の図書館にいる時にKがやって来る
- 四十、上野公園で先生にどう思うかと尋ねる
- 四一、先生のKに対する最初の反撃
- 四二、先生の最初の反撃に対するKの反応
- 四三、上野うえのから帰った晩、二人は……
- 四四、覚悟という言葉と奥さんへの談判
- 四五、お嬢さんを下さいと奥さんに言う
- 四六、外を歩き回まわって、宅うちに帰る
- 四七、奥さんはKに二人の結婚話をする
- 四八、二、三日後、Kの自殺
- 四九、奥さんにKの自殺を告げる
- 五十、Kの自殺後の奥さんと先生の対処
- * *
- 五一、Kはなぜ自殺したかと問われる
- 五二、Kの亡霊から逃のがれるために読書を……
- 五三、Kの亡霊から逃のがれるために飲酒を……
- 五四、やがて奥さんの病氣と死
- 五五、うつ脳の牢獄らうごくに閉じ込められて
- 五六、乃木大将のぎの殉死じゆんじを契機けいに自殺じくを決心する

※ 参考文献

第三部 (先生と遺書)

三三三

下 先生と遺書

序

さて、いよいよ「先生と遺書」という第三部の「内容」になるが、それは、まさに「先生」（自分）という第一者から見た（つまり「内から見た」）時の「先生」（自分自身）という存在の「内的世界」の描写であり、それは、いわば「内的事実」であり、例えば、「先生」（自分）という人間の「頭の中」（或いは「心の中」）に生じる様々な「思いや考えあるいは欲望や感情、その他」の描写である。そして、その「内的世界」を敢えて「三つ」に分けてみると、一つは、「表面的部分」であり、それは、その時々を生じる様々な「思いや考えあるいは欲望や感情、その他」であり、一つは、「中間的部分」であり、それは、永続して持ち続けている様々な「思いや考えあるいは欲望や感情、その他」であり、そして、もう一つは、「深層的部分」であり、それは、その人（先生）の「頭の中」（或いは「心の中」）に蓄えられている、今日まで生きてきたその「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」）などの膨大な量の蓄積（蓄え）であるが、その中から様々な「経験や想い出その他」などを自ら語る（描写）するというものである。そして、『こころ』という作品の主人公である「先生」の場合には、次のような「内容」になっているのである。

一、冒頭の文章（長い手紙）

「……私はこの夏あなたから二、三度手紙を受け取りました。東京で相当の地位を得たいから宜しく頼むと書いてあったのは、たしか二度目に手に入ったものと記憶しています。私はそれを読んだ時何とかしたいと思ったのです。少なくとも返事を上げなければ済まんとは考えたのです。しかし自白すると、私はあなたの依頼に対して、まるで努力をしなかったのです。ご承知の通り、交際区域の狭いというよりも、世の中にたった一人で暮していると言った方が適切なくらいの私には、そういう努力を敢えてする余地が全くないのです。しかしそれは問題ではありません。実を言うと、私はこの自分をどうすればいいのかと思ひ煩らっていたところなのです。このまま人間の中に残り残されたミイラのように存在して行こうか、それとも……その時分の私は「それとも」という言葉を心のうちで繰り返すたびにぞつとしました。馳足で絶壁の端まで来て、急に底の見えない谷を覗き込んだ人のように。私は卑怯でした。そうして多くの卑怯な人と同じ程度において煩悶したのです。遺憾ながら、その時の私には、あなたというものが殆んど存在していなかったと言っても誇張ではありません。一歩進めて言うと、あなたの地位、あなたの糊口の資、そんなものは私にとってまるで無意味なものでした。どうでも構わなかったのです。私はそれどころの騒ぎでなかったのです。私は状態へあなたの手紙を差したなり、依然として腕組をして考え込んでいました。宅に相応の財産があるものが、何を苦しんで、卒業するかしないのに、地位地位と言って藻掻き廻るのか。私はむしろ苦しい気分です、遠くにいるあなたにこんな一瞥を与えただけでした。私は返事を上げなければ済まないあなたに対して、言訳のためにこんな事を打ち明けるのです。あなたを怒らすためにわざと無難な

言葉を弄するのではありません。私の本意は後をご覧になればよく解る事と信じます。とにかく私は何とか挨拶すべきところを黙っていたのですから、私はこの怠慢の罪をあなたの前に謝したいと思います。

その後私はあなたに電報を打ちました。有体に言えば、あの時私は一寸あなたに会いたかったのです。それからあなたの希望通り私の過去をあなたのために物語りたかったのです。あなたは返電を掛けて、今東京へは出られないと断って来ましたが、私は失望して永らくあの電報を眺めていました。あなたも電報だけでは気が済まなかったと見えて、また後から長い手紙を寄こしてくれたので、あなたの出京出来ない事情がよく解りました。私はあなたを失礼な男だとも何とも思う訳がありません。あなたの大事なお父さんの病気をそっち退けにして、何であなたが宅を空けられるのですか。そのお父さんの生死を忘れているような私の態度こそ不都合です。——私は実際あの電報を打つ時に、あなたのお父さんの事を忘れていたのです。その癖あなたが東京にいる頃には、難症だからよく注意しなくつてはいけなないと、あれほど忠告したのは私です。私はこういう矛盾な人間なのです。或は私の脳髓よりも、私の過去が私を圧迫する結果こんな矛盾な人間に私を変化させるのかも知れません。私はこの点においても充分私の我を認めています。あなたに許して貰わなくてはなりません。

あなたの手紙、——あなたから来た最後の手紙——を読んだ時、私は悪い事をしたと思いました。それでその意味の返事を出そうかと考えて、筆を執りかけましたが、一行も書かずに已めました。どうせ書くなら、この手紙を書いて上げたかったから、そうしてこの手紙を書くにはまだ時機が少し早過ぎたから、已めにしたのです。私がただ来るに及ばないという簡単な電報を再び打つたのは、それがためです。(本文)

*

*

では、いよいよ第三部の「先生と遺書」であるが、その「冒頭の文章」は、次のようなものである。つまり、「……私はこの夏あなたから二、三度手紙を受け取りました。東京で相当の地位を得たいから宜しく頼むと書いてあったのは、たしか二度目に手に入ったものと記憶しています。私はそれを読んだ時何とかしたいと思ったのです。しかし、自白すると、私はあなたの依頼に対して、まるで努力をしなかつたのです。(中略)、実をいうと、私はこの自分をどうすれば好いのかと思ひ煩っていたところなのです。このまま人間の中に取り残されたミイラのように存在して行こうか、「それとも……」という言葉を中心のうちで繰り返すたびにぞつとしました。その時の私には、あなたの地位、あなたの糊口の資、そんなものは私にとってまるで無意味であり、どうでも構わなかつたのです。私はそれどころの騒ぎでなかつたのです。宅に相応の財産があるものが、何を苦しんで、卒業するかしないのに、地位地位といって藻掻き廻るのか。私はむしろ苦々しい気分、遠くにいるあなたにこんな一瞥を与えただけでした。

その後、私はあなたに電報を打ちました。有体に言えば、あの時私は一寸あなたに会いたかつたのです。それからあなたの希望通り私の過去をあなたのために物語りたかつたのです。ところが、今、東京へは出られないと断って来ましたが、私は失望して永らくあの電報を眺めていました。後からの手紙で、出京出来ない事情がよく解りました。あなたの大事なお父さんの病気をそっち退けにして、何であなたが宅を空けられるのですか。

——私は実際あの電報を打つ時に、あなたのお父さんの事を忘れていたのです。

あなたの手紙、——あなたから来た最後の手紙——を読んだ時、私は悪い事をしたと思
いました。それでその意味の返事を出そうかと考えて、筆を執りかけましたが、一行も書
かずに已めました。どうせ書くなら、この手紙を書いて上げたかったから、そうしてこの
手紙を書くにはまだ時機が少し早過ぎたから、已めにしたのです。私がただ来るに及ばな
いという簡単な電報を再び打ったのは、それがためです」とある。

*

*

先ず、ここまでの文章で大事なことは、次のようなことである。それは、「私」という
人が「先生」に条件の好い（就職先の依頼の）手紙を出した時、先生は、まさに「……こ
の自分をどうすれば好いのかと思ひ煩うていたところであり、このまま人間の中に取り
残されたミイラのように存在して行こうか、それともいっそ『自殺』しようかと深く悩み
苦しんでいたところだった」のである。そのような時に、まさに明治天皇の「崩御」の報
道を新聞で読み、それから約一ヶ月半後、「御大葬の夜」の時、（夜八時ごろ）、今度は「乃木
大将の殉死」を号外で知り、思わず妻に殉死だ殉死だと言ったことや、また、新聞で乃木
大将の死ぬ前に書き残して行ったものを読むことによつて、先生の「心の中」に或る「決
定的な想ひ」が生じて来たということである。それは、この時、先生は、はっきりと「私」
という人に「自分の過去をすべて語ること」を決心したということである。

そこで、先生は、「私」に電報を打つが、それは、「……あの時私は一寸あなたに会
たかつたのです。それからあなたの希望通り私の過去をあなたのために物語りたかつたの
です」とある。まず、ここまでは、最初、先生は、「……相手（私）に直接会つて、希望
通り私の過去の話をしようと考えていた」のである。それゆえ、この時は、まだ「自殺」
までは考えてはいなかつた。ところが、「……今、東京へは出られないと断つて来たので、
私は失望して永らくあの電報を眺めていた」が、二日後、今度は、「来ないでもよるしい」
という電報を打つて来ることになる。それは、一体、どういう理由からかと問えば、それ
は、この「二日間」のうちに、先生の「考え方」が大きく変化したからである。それは、
「……相手（私）に直接会つて、私の過去の話が出来ないならば、むしろ遺書という手紙
の形で自分の思いを語ることができないか」という、そういう「想ひ」がふと
浮かんで来たのである。それは、一体、なぜなのか？ その最も根源的な「理由」の一つ
には、やはり先生には長年の「自殺願望」があり、その「自殺願望」を「遺書」という形
で、まさに遂行でき得るからであるが、それに加えて、相手（私）に直接会つて話をする
よりも、むしろ「遺書」という形の方が、まさに自分の「考えや想ひ」などをすべて（一
つ残らず）正直に語ることができ得るとともに、いつまでも「遺書」（手紙）として「私」
という人の手元に残ることにもなるからである。

二、私の過去のすべてを……

さて、「……私はそれからこの手紙を書き出しました。平生筆を持ちつけない私には、
自分の思うように、事件なり思想なりが運ばないのが重い苦痛でした。私はもう少しで、
あなたに対する私のこの義務を放擲するところでした。しかしいくら止そうと思つて筆を
擱いても、何にもなりません。私は一時間経たないうちにまた書きたくなりました。
あなたから見たら、これが義務の遂行を重んずる私の性格のように思われるかも知れませ

ん。私もそれは否みません。私はあなたの知っている通り、殆んど世間と交渉のない孤独な人間ですから、義務というほどの義務は、自分の左右前後を見廻しても、どの方角にも根を張っておられません。故意か自然か、私はそれを出来るだけ切り詰めた生活をしていたのです。けれども私は義務に冷淡だからこうなったのではありません。むしろ鋭敏過ぎて刺戟に堪えるだけの精力がないから、御覧のように消極的な月日を送る事になったのです。だから一旦約束した以上、それを果たさないのは、大変厭な心持です。私はあなたに対してこの厭な心持を避けるためにでも、擱いた筆をまた取り上げなければならぬのです。

その上私は書きたいのです。義務は別として私の過去を書きたいのです。私の過去は私だけの経験だから、私だけの所有と言っても差支ないでしょう。それを人に与えないで死ぬのは、惜しいとも言われるでしょう。私にも多少そんな心持があります。ただし受け入れる事の出来ない人に与える位なら、私はむしろ私の経験を私の生命と共に葬った方が好いと思います。実際ここにあなたという一人の男が存在していないならば、私の過去はついに私の過去で、間接にも他人の知識にはならないで済んだでしょう。私は何千万といる日本人のうちで、ただあなただけに、私の過去を物語りたいのです。あなたは真面目だから。あなたは真面目に人生そのものから生きた教訓を得たいと言ったから。

私は暗い人世の影を遠慮なくあなたの頭の上に投げかけて上ます。しかし恐れてはいけません。暗いものを凝と見詰めて、その中からあなたの参考になるものをお攫みなさい。私の暗いというのは、固より倫理的に暗いのです。私は倫理的に生れた男です。また倫理的に育てられた男です。その倫理上の考えは、今の若い人と大分違ったところがあるかも知れません。しかしどう間違っても、私自身のものです。間に合せに借りた損料着ではありません。だからこれから発達しようというあなたには幾分か参考になるだろうと思ふのです。

あなたは現代の思想問題について、よく私に議論を向けた事を記憶しているでしょう。私のそれに対する態度もよく解っているでしょう。私はあなたの意見を軽蔑までしなかつたけれども、決して尊敬を払い得る程度にはなれなかつた。あなたの考えには何らの背景もなかつたし、あなたは自分の過去を持つには余りに若過ぎたからです。私は時々笑った。あなたは物足りなそうな顔をちよいちよい私に見せた。その極あなたは私の過去を絵巻物のように、あなたの前に展開してくれと逼った。私はその時心のうちで、始めてあなたを尊敬した。あなたが無遠慮に私の腹の中から、或る生きたものを捕まえようという決心を見せたからです。私の心臓を立ち割って、温かく流れる血潮を啜ろうとしたからです。その時私はまだ生きていた。死ぬのが厭であった。それで他日を約して、あなたの要求を斥けてしまった。私は今自分で自分の心臓を破って、その血をあなたの顔に浴びせかけようとしているのです。私の鼓動が停った時、あなたの胸に新しい命が宿る事が出来るなら満足です。(本文)

* * *

さて、先生は、二度目の電報を打つてから「この手紙」を書き出したとある。「……平生筆を持ちつけない私には、自分の思うように事件なり思想なりが運ばないのが重い苦痛でもあり、何度か筆を擱こうとしましたが、——結局、私は書きたいのです。あなたへの義務は別として、私の過去を書きたいのです。私の過去は私だけの経験だから、私だけの所有と言つてもよいでしょう。それを人に与えないで死ぬのは、惜しいとも言われるが、私に

も多少そんな心持があります。ただし受け入れる事の出来ない人に与えるくらいなら、私はむしろ私の経験を私の生命と共に葬った方が好いと思います。実際ここにあなたという一人の男が存在していないならば、私の過去はついに私の過去で、間接にも他人の知識にはならないで済んだでしょう。私は何千万という日本人のうちで、ただあなただけに、私の過去を物語りたいのです。あなたは真面目だから。あなたは真面目に人生そのものから生きた教訓を得たいと言ったから」とある。

まず、先生という人は、まさに「孤独な人間」であり、自分の「想い」を語れる「相手」は誰もいなかった。ところが、「私」という若者と親しく心を通わすことで、この「若者」になれば、自分の「心の底」にある「想い」を語ってもよいと思えて来たということである。そこで、最初は、彼に直接話そうとして電報を打ったが、父親が重篤で来れないというので、そこで、先生「頭の中心」(或いは「心の中心」)ではふと「遺書」という形で語ることもでき得るのではないかという「想い」に襲われたということである。そして、この「方法」ならば、自分の「心の底」にある「想い」をすべて語ることができ得るとともに、それを讀んだ若者も、きっと自分の「想い」をしつかり受け留めてくれるだろう。「……私は何千万という日本人のうちで、ただ貴方だけに、私の過去を物語りたいのです。あなたは真面目だから。あなたは真面目に人生そのものから生きた教訓を得たいと言ったから……」とある。つまり、先生という人は、一体、誰のためにこのような「遺書」を書き遺したのかと敢えて問えば、それは、人生を真面目に真剣に生きようとする人のためにこそ、自分(先生)が実際の人生の中で経験した「心の闇」(「罪と罰」)とを、敢えてここに書き遺しておきたかったのである。

私は暗い人世の影を遠慮なくあなたの頭の上に投げかけて上ります。しかし恐れてはいけません。暗いものを凝と見詰めて、その中からあなたの参考になるものをお攫みなさい。私の暗いというのは、固より倫理的に暗いのです。私は倫理的に生れた男です。また倫理的に育てられた男です。その倫理上の考えは、今の若い人と大分違ったところがあるかも知れません。しかしどう間違っても、私自身のものです。間に合せに借りた損料着ではありません。だからこれから発達しようというあなたには幾分か参考になるだろうと思うのです。——私は(若い)あなたの意見を軽蔑までしなかつたけれども、決して尊敬を払い得る程度にはなれなかつた。あなたの考えには何らの背景もなかつたし、あなたは自分の過去を持つには余りに若過ぎたからです。私は時々笑った。あなたは物足りなそうな顔をちよよいちよい私に見せた。その極あなたは私の過去を絵巻物のように、あなたの前に展開してくれと逼った。その時、初めてあなたを尊敬した。あなたが無遠慮に私の腹の中から、或る生きたものを捕まえようという決心を見せたからです。私の心臓を立ち割って、温かく流れる血潮を吸ろうとしたからです。(これは先生の実際の人生の中で経験して得た「生きた教訓」を得たいと言ったから)。その時私はまだ生きていた。死ぬのが厭であった。それで他日を約して、あなたの要求を斥けてしまった。私は今自分で自分の心臓を破って、その血をあなたの顔に浴びせかけようとしているのです。私の鼓動が停った時、あなたの胸に新しい命が宿る事が出来るなら満足です」とある。

これは、もう「作者」(夏目漱石)の『「ころ」』という作品の、まさに「核部分」そのものである、——つまり、自分の「過去」の経験から、このような「思想」(或いは「作品」)が生み出されたということであり、「……私は暗い人世の影を遠慮なくあなた(読

者)の頭の上に投げかけて上げます。しかし恐れてはいけません。暗いものを凝じと見詰め
て、その中から貴方の参考になるものをお攫つかみなさい」と言っているのである。
* * *

三、先生の生い立ち

三、先生の生い立ち

「……私が両親を亡くしたのは、まだ私の廿歳にならない時分でした。何時か妻があなたに話していたようにも記憶していますが、二人は同じ病気で死んだのです。しかも妻があなたに不審を起させた通り、殆んど同時と言っていていくらいに、前後して死んだのです。実を言うと、父の病気は恐るべき腸窒扶斯でした。それが傍にいて看護をした母に伝染したのです。」

私は二人の間に出来たたった一人の男の子でした。宅には相当の財産があつたので、むしろ鷹揚に育てられました。私は自分の過去を顧みて、あの時両親が死なずにいてくれたなら、少なくとも父か母かどつちか、片方で好いから生きていてくれたなら、私はあの鷹揚な気分を今まで持ち続ける事が出来たろうにと思います。

私は二人の後に茫然として取り残されました。私には知識もなく、経験もなく、また分別もありませんでした。父の死ぬ時、母は傍にいた事が出来ませんでした。母の死ぬ時、母には父の死んだ事さえまだ知らせてなかったのです。母はそれを覺っていたか、又は傍のものの言うごとく、實際父は回復期に向いつつあるものと信じていたか、それは分かりません。母はただ叔父に万事を頼んでいました。そこに居合せた私を指さすようにして、「……この子をどうぞ何分」と言いました。私はその前から両親の許可を得て、東京へ出る筈になっていましたので、母はそれも序でに言うつもりらしかったのです。それで「東京へ」とだけ付け加えましたら、叔父がすぐ後を引き取って、「……よろしい決して心配しないがいい」と答えました。母は強い熱に堪え得る体質の女なんでしょうか、叔父は「確かりしたものだ」と言つて、私に向つて母の事を褒めていました。しかしこれが果して母の遺言であつたのかどうだか、今考えると分らないのです。母は無論父の罹つた病気の恐るべき名前を知っていたのです。そうして、自分がそれに伝染していた事も承知していたのです。けれども自分はきつとこの病気で命を取られるとまで信じていたかどうか、そこになると疑う余地はまだ幾らでもあるだろうと思われるのです。その上熱の高い時に出る母の言葉は、いかにそれが筋道の通つた明らかなものにせよ、一向記憶となつて母の頭に影さえ残していない事がしばしばあつたのです。だから……しかしそんな事は問題ではありません。ただこういう風に物を解きほいで見たり、またぐるぐる廻して眺めたりする癖は、もうその時分から、私にはちゃんと備わっていたのです。それはあなたにも始めからお断わりしておかなければならないと思いますが、その実例としては当面の問題に大した関係のないこんな記述が、却つて役に立ちほしくないかと考えます。あなたの方でもまあそのつもりで読んでください。この性分が倫理的に個人の行為やら動作の上に及んで、私は後来ますます他の徳義心を疑うようになったのだろうと思うのです。それが私の煩悶や苦悩に向つて、積極的に大きな力を添えているのは慥です。ですから覚えていて下さい。

話が本筋をはずれると、分り悪くなりますからまたあとへ引き返しましょう。これでも私はこの長い手紙を書くのに、私と同じ地位に置かれた他の人と比べたら、或は多少落ち付いていやしくないかと思つていられるのです。世の中が眠ると聞こえだすあの電車の響きももう途絶えました。雨戸の外にはいつの間にか憐れな虫の声が、露の秋をまた忍びやかに思い出させるような調子で微かに鳴いています。何も知らない妻は次の室で無邪気にすやすや寝入っています。私が筆を執ると、一字一劃が出来上りつつペンの先で鳴っています。

私はむしろ落付いた気分です。紙に向っているのです。不馴のためにペンが横へ外れるかも知れませんが、頭が悩乱して筆がしどろに走るのではないように思います。(本文)

*

*

まず最初は、主人公である「先生」という人の「生い立ち」であるが、それは、次のようなものである。それを要約すると、「……私が両親を亡くしたのは、まだ私の二十歳にならない時分でした。二人は同じ病気で死んだのです。しかも殆んど同時と言っているくらいであり、父の病気は、腸チフスでした。それが傍にいて看護した母に伝染したのです。私は二人の間に出来た一人の男の子でした。家には相当の財産があったので、むしろ鷹揚に育てられました。私は自分の過去を顧みて、あの時両親が死なずにいてくれたなら、少なくとも父か母かどつちか、片方で好いから生きていてくれたなら、私はあの鷹揚な気分を今まで持ち続ける事が出来たらうにと思えます」とある。

これは、つまり、あの時、少なくとも父か母かどつちか、片方で好いから生きていくれたならば、当然のことながら、叔父(父親の実の弟)に家の相当の財産の多くを騙し取られることもなく、それゆえ、(人を深く疑ったり恨むようなことも知らずに)、私はあの鷹揚な気分を今まで持ち続ける事が出来たらうに思うのです。ところが、実際は、両親をほぼ当時に失い、私は二人のあとに茫然として取り残されました。私には知識もなく、経験もなく、また分別もありませんでした。とにかくたった一人残された私は、母の言い分け通り、伯父を頼るよりほかに途はなかつたのです。しかし、その伯父によって、家の財産の多くを騙し取られてしまい、それ以来、他人の徳義心を疑うようになったのです。簡単に言えば、人間が信じられなくなったということなのです。

それには、「……こういう風に物を解きほどこいて見たり、またぐるぐる廻して眺めたりする癖は、もうその時分から、私にはちゃんと備わっていたのです。それはあなたにも始めからお断わりしておかなければならないと思いますが、その実例としては当面の問題に大した関係のないこんな記述が、却って役に立ちほしくないかと考えます。あなたの方でもまあそのつもりで読んでください。この性分が倫理的に個人の行為やら動作の上に及んで、私は後来ますます他の徳義心を疑うようになったのだらうと思うのです。それが私の煩悶や苦悩に向って、積極的に大きな力を添えているのは慥です。だから覚えていて下さい」とあるが、それは、つまり、もともと先生にはあれこれ物事を疑ったりあれやこれやと考えをめぐらしたりする性分があり、それに、伯父による家の財産の多くを騙し取られるという様なことなどが加わり、私は後来ますます他の徳義心を疑うようになったのだらうと思うのです。そして、今、先生は、深夜、何も知らない妻は、次の室で無邪気にすやすやや寝入っているその中で、私が筆を執ると、一字一劃が出来上りつつペンの先で鳴っています。私はむしろ落付いた気分です。紙に向っているのです。不馴のためにペンが横へ外れるかも知れませんが、頭が悩乱して筆がしどろに走るのではないように思いますとあり、それは、一度、(心の底からの)「決心」(覚悟)が出来れば、あとはむしろ落ち着いた気分になれるということなのかも知れない。

四、父親と叔父(その実の弟)との関係

「……とにかくたった一人取り残された私は、母の言い付け通り、この叔父を頼るより外

に途はなかったのです。叔父はまた一切を引き受けて凡ての世話をしてくれました。そうして私を私の希望する東京へ出られるように取り計らってくれました。

私は東京へ来て高等学校へ這入りました。その時の高等学校の生徒は今よりも余程殺伐で粗野でした。私の知ったものに、夜中職人と喧嘩をして、相手の頭へ下駄で傷を負わせたのがありました。それが酒を飲んだ揚句の事なので、夢中に擲り合をしてる間に、学校の制帽をとうとう向うのものに取られてしまったのです。ところがその帽子の裏には当人の名前がちゃんと、菱形の白いきれの上に書いてあったのです。それで事が面倒になって、その男はもう少しで警察から学校へ照会されるところでした。しかし友達の色々と骨を折って、ついに表沙汰にせざるに済むようにして遣りました。こんな乱暴な行為を、上品な今の空気のなかに育ったあなた方に聞かせたら、定めて馬鹿馬鹿しい感じを起すでしょう。私も実際馬鹿馬鹿しく思います。しかし彼らは今の学生にない一種質朴な点をその代りにもつていたのです。当時私の月々叔父から貰っていた金は、あなたが今、お父さんから送ってもらう学資に比べると遥かに少ないものでした。(無論物価も違いました。が)。それでいて私は少しの不足も感じませんでした。のみならず数ある同級生のうちで、経済の点にかけては、決して人を羨ましがらる方だったのでしよう。というのは、私は月々極ら回顧すると、むしろ人に羨ましがられる方だったのでしよう。というのは、私は月々極つた送金の外に、書籍費、(私はその時分から書物を買う事が好きでした)、及び臨時の費用を、よく叔父から請求して、ずんずんそれを自分の思う様に消費する事が出来たのですから。

何も知らない私は、叔父を信じていたばかりでなく、常に感謝の心をもって、叔父をありがたいもののように尊敬していました。叔父は事業家でした。県会議員にもなりました。その関係からでもありましよう、政党にも縁故があったように記憶しています。父の実の弟ですけれども、そういう点で、性格から言う父とはまるで違つた方へ向いて発達した様にも見えます。父は先祖から譲られた遺産を大事に守って行く篤実一方の男でした。楽しみに、茶だの花だのをやりました。それから詩集などを読む事も好きでした。書画骨董と言つた風のものにも、多くの趣味をもっている様子でした。家は田舎にありましたけれども、二里ばかり隔つた市、——その市には叔父が住んでいたのです、——その市から時々道具屋が懸物だの、香炉だのを持って、わざわざ父に見せに来ました。父は一口に言う、まあマン・オフ・ミーンズ(資産家)とでも評したら好いのでしょうか。比較的上品な嗜好をもつた田舎紳士だったので。だから気性から言う、闊達な叔父とは余程の懸隔がありました。それでいて二人はまた妙に仲が好かつたのです。父はよく叔父を評して、自分よりも遥かに働きのある頼もしい人のように言っていました。自分のように、親から財産を譲られたものは、どうしても固有の材幹が鈍る、つまり世の中と闘う必要がないからいけないのだとも言っていました。この言葉は母も聞きました。私も聞きました。父は寧ろ私の心得になるつもりで、それを言つたらしく思われます。「……お前もよく覚えていたが好い」と父はその時わざわざ私の顔を見たのです。だから私はまだそれを忘れずにいます。このくらい私の父から信用されたり、褒められたりしていた叔父を、私がどうして疑う事が出来るでしょう。私にはただでさえ誇りになるべき叔父でした。父や母が亡くなって、万事その人の世話にならなければならぬ私には、もう単なる誇りではなかったのです。私の存在に必要な人間になつていたので。 (本文)

* * *

さて、「……私は東京へ来て高等学校へ這入りました。その時の高等学校の生徒は今よりも余程殺伐で粗野でした。私の知ったものに、夜中職人と喧嘩をして、相手の頭へ下駄で傷を負わせたのがありました。それが酒を飲んだ揚句の事なので、夢中に擲り合をしている間に、学校の制帽をとうとう向うのものに取られてしまったのです。ところがその帽子の裏には当人の名前がちゃんと、菱形の白いきれの上に書いてあったのです。それで事が面倒になって、その男はもう少しで警察から学校へ照会されるどころでした。しかし友達の色々と骨を折って、ついに表沙汰にせず済むようにして遣りました。こんな乱暴な行為を、上品な今の空気のなかに育ったあなた方に聞かせたら、定めて馬鹿馬鹿しい感じを起すでしょう。私も実際馬鹿馬鹿しく思います。しかし彼らは今の学生にない一種質朴な点をその代りにもっていたのです。（当然先生もその質朴をもっていたのだらう）。当時私の月々叔父から貰っていた金は、あなたが今、お父さんから送ってもらう学資に比べると遥かに少ないものでした。（無論物価も違いまししょうが）。それでいて私は少しの不足も感じませんでした。のみならず数ある同級生のうちで、経済の点にかけては、決して人を羨ましがらぬ憐れな境遇にいた訳ではないのです。今から回顧すると、むしろ人に羨ましがられる方だったのでしょう。というのは、私は月々極った送金の外に、書籍費、（私はその時分から書物を買う事が好きでした）、及び臨時の費用を、よく叔父から請求して、ずんずんそれを自分の思う様に消費する事が出来たのですから。

何も知らない私は、叔父を信じていたばかりでなく、常に感謝の心をもって、叔父をありがたいたいもののように尊敬していました。叔父は事業家でした。県会議員にもなりました。その関係から、政党にも縁故があったように記憶しています。父の「実の弟」ですが、そういう点で、性格から言うと父とはまるで違った方向へと発達したようにも見えます。父は先祖から譲られた遺産を大事に守って行く篤実一方の男でした。楽しみに、茶だの花だの、また、詩集などを読む事も好きでした。書画骨董といった風のものにも、多くの趣味をもっている様子でした。家は田舎にありましたが、二里ばかり隔たった市には、叔父が住んでいたのです。父は、比較的上品な嗜好をもった田舎紳士だったので、だから気性から言うと、闊達な叔父とはよほどの懸隔がありました。それでいて二人はまた妙に仲が好かつたのです。父はよく叔父を評して、自分よりも遥かに働きのある頼もしい人のように言っていました。自分のように、親から財産を譲られたものは、どうしても固有の材幹が鈍る、つまり世の中と闘う必要がないからいけないのだとも言っていました。この言葉は母も聞きました。私も聞きました。「……お前もよく覚えているが好い」と父はその時わざわざ私の顔を見たのです。このくらい私の父から信用されたり、褒められたりしていた叔父を、私がどうして疑う事が出来るでしょうか。

つまり、両親の死後、私（先生）は、東京へ出て高等学校に入りました。そして、財産の管理は、すべて伯父に任せ、三年の間、夏休みは、実家に帰るといふ形で過ごしたが、やがて、実家には伯父夫婦が住むようになり、その三年の間に、伯父は私の財産を誤魔化していたのです。そのところの「本文」は、次の章からであるが、当時の入学（新学期）は、九月であり、卒業（学期末）は、七月であり、それから夏休みに入るのである。

* * *

五、最初の夏休みの帰省

五、最初の夏休みの帰省

「……私が夏休みを利用して始めて国へ帰った時、両親の死に断えた私の住居には、新しい主人として、叔父夫婦が入れ代って住んでいました。これは私が東京へ出る前からの約束でした。たった一人取り残された私が家にいない以上、それでもするより外に仕方がなかったのです。」

叔父はその頃市にある色々な会社に関係していたようです。業務の都合から言えば、今までの居宅に寝起きする方が、二里も隔った私の家に移るより遙かに便利だと言っていました。これは私の父母が亡くなった後、どう邸を始末して、私が東京へ出るかという相談の時、叔父の口を洩れた言葉であります。私の家は古い歴史をもっているのです、少しはその界限で人に知られていました。あなたの郷里でも同じ事だろうと思いますが、田舎では由緒のある家を、相続人があるのに壊したり売ったりするのは大事件です。今の私ならその位の事は何とも思いませんが、その頃はまだ子供でしたから、東京へは出たし、家はそのままにして置かなければならず、甚だ処置に苦しんだのです。

叔父は仕方なしに私の空家へ這入る事を承諾してくれました。しかし市の方にある住居もそのままにしておいて、両方の間を往ったり来たりする便宜を与えてもらわなければ困ると言いました。私に固より異議のありよう筈がありません。私はどんな条件でも東京へ出られればいい位に考えていたのです。

子供らしい私は、故郷を離れても、まだ心の眼で、懐かしげに故郷の家を望んでいました。固よりそこにはまだ自分の帰るべき家があるという旅人の心で望んでいたのです。休みが来れば帰らなくてはならないという気分は、いくら東京を恋しがって出て来た私にも、力強くあつたのです。私は熱心に勉強し、愉快に遊んだ後、休みには帰れると思うその故郷の家をよく夢に見ました。

私の留守の間、叔父はどんな風に両方の間を往き来していたか知りません。私の着いた時は、家族のものが、みんな一つ家の内に集まっていました。学校へ出る子供などは平生恐らく市の方にいたのでしょうか、これも休暇のために田舎へ遊び半分と言った格で引き取られていました。

みんな私の顔を見て喜びました。私はまた父や母のいた時より、却って賑やかで陽気になった家の様子を見て嬉しがりやりました。叔父はもと私の部屋になっていた一間を占領している一番目の男の子を追い出して、私をそこへ入れました。座敷の数も少くないのだから、私はほかの部屋で構わないと辞退したのですけれども、叔父は御前の宅だからと言って、聞きませんでした。

私は折々亡くなった父や母の事を思い出す外に、何の不愉快もなく、その一夏を叔父の家族と共に過ごして、又東京へ帰ったのです。ただ一つその夏の出来事として、私の心にむしる薄暗い影を投げたのは、叔父夫婦が口を揃えて、まだ高等学校へ入ったばかりの私に結婚を勧める事でした。それは前後で丁度三、四回も繰り返されたでしょう。私も始めはただその突然なのに驚いただけでした。二度目には判然断りました。三度目には此方からとうとうその理由を反問しなければならなくなりました。彼らの主意は単純でした。早く嫁を貰ってこの家へ帰って来て、亡くなった父の後を相続しろと言うだけなのです。家は休暇になって帰りさえすれば、それでいいものと私は考えていました。父の後を相続

する、それには嫁が必要だから貰う、両方とも理屈としては一通り聞こえます。ことに田舎の事情を知っている私には、よく解ります。私も絶対にそれを嫌ってはいなかったのでしょう。しかし東京へ修業に出たばかりの私には、それが遠眼鏡で物を見るように、遙か先の距離に望まれるだけでした。私は叔父の希望に承諾を与えないで、ついにまた私の家を去りました。(本文)

*

*

さて、私は、最初の夏休み、初めて国へ帰った時、両親の死に断えた私の住居には、叔父夫婦が住んでいました。これは私が東京へ出る前からの約束であり、叔父は、その頃、市にある色々な会社に関係していて、業務の都合から言えば、今までの居宅の方が、私の家に移るより遥かに便利だと言って笑いましたが、私の家は古い歴史をもち、由緒ある家でもあり、田舎では勝手に壊したり売ったりするのは大事件で、そこで、叔父は、仕方なしに私の空家へはいることを承諾し、それは、両方の間を(自由に)行き来できる便宜を与えてほしいという条件のもと、私はどんな条件でも東京へ出られれば好いくらいに考えていたのです。(これは叔父を信じ切っていたので、仕方のない判断になるのだろうが、もしここに何らかの教訓があるとすれば、それは、たとえ誰であれ、「……人間を百%信じ切って、すべてを相手に任せ、きるようなことは極めて危険である」ということである。)

子供らしい私は、故郷を離れても、まだ心の眼で、懐かしげに故郷の家を望んでいました。固よりそこにはまだ自分の帰るべき家があるという旅人の心で望んでいたのです。休みが来れば帰らなくてはならないという気分は、いくら東京を恋しがって出て来た私にも、力強くあつたのです。私は熱心に勉強し、愉快に遊んだ後、休みには帰れると思うその故郷の家をよく夢に見ましたとある。——例えば、今日でも北は北海道から南は沖縄まで実に様々な地方から東京の大学へと入学した大学生たちは、夏休みになれば、もちろん、そのまま東京に残る人たちも多いだろうが、また、自分の実家へと帰省する人たちも実に数多くいるかと思うが、それは、すでに「明治の時代」から盛んに行われていたということであり、それを可能にしたのは、まさに「鉄道」(汽車)の全国的な普及であり、第二部の終わり、のところでも、「私」という人は、停車場まで人力車を急がせ、それから「三等列車」に乗って東京へと向かったとあるのです。

私の留守の間、叔父はどんな風に両方の間を往き来していたか知りません。私の着いた時は、家族のものが、みんな一つ家の内に集まっていて、みんな私の顔を見て喜びました。私は父母の時よりも、かえって賑やかで陽気になった家の様子を見て嬉しがりました。私は折々亡くなった父や母の事を思い出す外に、何の不愉快もなく、その一夏を、叔父の家族と共に過ごして、また東京へ帰ったのです。ただ一つ、私の心に薄暗い影を投げたのは、叔父夫婦が口を揃えて、まだ高等学校へ入ったばかりの私に結婚を勧める事でした。それは前後で丁度三、四回も繰り返されたでしょう。私は、初めは驚いただけでしたが、二度目ははつきり断り、三度目はその理由を反問したほどである。彼らの主意は単簡で、早く嫁を貰ってこの家へ帰って来て、亡くなった父の後を相続しろというだけなのです。田舎の事情を知っている私には、よく解り、私も絶対にそれを嫌ってはいなかったが、承諾を与えないまま、その家を去りました。

六、二度目の夏休みの帰省

「……私は縁談の事をそれなり忘れてしまいました。私の周囲を取り捲いている青年の顔を見ると、世帯染みたものは一人もいません。みんな自由です、そうして悉く単独らしく思われたのです。こういう気楽な人の中にも、裏面に這入り込んだら、或は家庭の事情に余儀なくされて、すでに妻を迎えていたものがあつたかも知れませんが、子供らしい私は其所に気が付きませんでした。それからそういう特別な境遇に置かれた人の方でも、四辺に気兼ねをして、なるべくは書生に縁の遠いそんな内輪の話はしないように慎んでいたのです。後から考えると、私自身が既にその組だったので、私はそれさえ分らずに、ただ子供らしく愉快に修学の道を歩いて行きました。

学年の終りに、私はまた行李を絡げて、親の墓のある田舎へ帰って来ました。そうして去年と同じように、父母のいたわが家の中で、また叔父夫婦とその子供の変わらない顔を見ました。私は再びそこで故郷の匂を嗅ぎました。その匂は私に取って依然として懐かしいものでありました。一学年の単調を破る変化としても有難いものに違ひなかつたのです。

しかしこの自分を育て上げたと同じような匂の中で、私はまた突然結婚問題を叔父から鼻の先へ突き付けられました。叔父の言う所は、去年の勧誘を再び繰り返したのみです。理由も去年と同じでした。ただこの前勧められた時には、何らの目的物がなかつたのに、今度はちゃんと肝心の当人を捕まえていたので、私はなお困らせられたのです。その当人というのは叔父の娘すなわち私の従妹に当る女でした。その女を貰ってくれば、お互いのために便宜である、父も存生中そんな事を話していた、と叔父が言うのです。私もそうすれば便宜だとは思いました。父が叔父にそういう風な話をしたというのもあり得べき事と考えました。しかしそれは私が叔父に言われて、始めて気が付いたので、言われない前から、覺つていた事柄ではないのです。だから私は驚きました。驚いたけれども、叔父の希望に無理のないところも、それがためによく解りました。私は迂闊なのでしようか。或はそうなのかも知れませんが、恐らくその従妹に無頓着であつたのが、おもな原因になつていたのでしよう。私は小供のうちから市にいる叔父の家へ始終遊びに行きました。ただ行くばかりでなく、よくそこに泊りました。そうしてこの従妹とはその時分から親しかつたのです。あなたも御承知でしょう、兄妹の間に恋の成立した例のないのを。私はこの公認された事実を勝手に布衍しているかも知れないが、始終接触して親しくなり過ぎた男女の間には、恋に必要な刺戟の起る清新な感じが失われてしまうように考えています。香をかぎ得るのは、香を焚き出した瞬間に限る如く、酒を味わうのは、酒を飲み始めた刹那にある如く、恋の衝動にもこういう際どい一点が、時間の上に存在していると思われぬのです。一度平気でそこを通り抜けたら、馴れれば馴れるほど、親しみが増すだけで、恋の神経はだんだん麻痺して来るだけです。私はどう考え直しても、この従妹を妻にする気にはなれませんでした。

叔父はもし私が主張するならば、私の卒業まで結婚を延ばしてもいいと言いました。けれども善は急げという諺もあるから、出来るなら今のうちに祝言の盃だけは済ませておきたいとも言いました。当人に望みのない私にはどつちにしたって同じ事です。私はまた断りました。叔父は厭な顔をしました。従妹は泣きました。私に添われぬから悲しいのではありません。結婚の申し込みを拒絶されたのが、女として辛かつたからです。私が従妹を愛していないごとく、従妹も私を愛していない事は、私によく知れていました。私

はまた東京へ出ました。(本文)

*

*

さて、「……私は縁談の事をそれなり忘れてしまいました。私の周囲を取り捲いている青年の顔を見ると、世帯染みたものは一人もいません。みんな自由です、そうして悉く単独らしく思われたのです。こういう気楽な人の中にも、裏面に這入り込んだら、或は家庭の事情に余儀なくされて、すでに妻を迎えていたものがあつたかも知れませんが、子供らしい私は其所に気が付きませんでした。それからそういう特別の境遇に置かれた人の方でも、四辺に気兼ねをして、なるべくは書生に縁の遠いそんな内輪の話はしないように慎んでいたのでしよう。後から考えると、私自身が既にその組だったのですが、私はそれさえ分らずに、ただ子供らしく愉快に修学の道を歩いて行きました。(これは漱石自身の学生の頃の書生の雰囲気などを思い出しながら書いているのかも知れない。)

学年の終りに、私はまた行李を絡げて、親の墓のある田舎へ帰って来ました。そうして去年と同じように、父母のいたわが家の中で、また叔父夫婦とその子供の変わらない顔を見ました。私は再びそこで故郷の匂を嗅ぎました。その匂は私に取って依然として懐かしいものでありました。一学年の単調を破る変化としても有難いものに違ひなかつたのです。

しかしこの自分を育て上げたと同じような匂の中で、私はまた突然結婚問題を叔父から鼻の先へ突き付けられました。叔父の言う所は、去年の勧誘を再び繰り返したのみです。理由も去年と同じでした。ただこの前勧められた時には、何らの目的物がなかつたのに、今度はちゃんと肝心の当人を捕まえていたので、私はなお困らせられたのです。その当人というのは叔父の娘すなわち私の従妹に当る女でした。その女を貰ってくれば、お互いのために便宜である、父も存生中そんな事を話していた、と叔父が言うのです。私もそうすれば便宜だとは思いました。父が叔父にそういう風な話をしたというのもあり得べき事と考えました。しかしそれは私が叔父に言われて、始めて気が付いたので、言われぬ前から、覺っていた事柄ではないのです。だから私は驚きました。驚いたけれども、叔父の希望に無理のないところも、それがためによく解りました。

さて、叔父は、その「結婚相手」として、叔父の「娘」すなわち私の従妹に当る女性を言つて来たが、その時に、先生がもし自分には密かに「心に決めた女性」がいて、その女性と結婚する約束になつていると言つたらどうだつたのだからか? というのも、叔父が結婚を勧める理由は、「……彼らの主意は単簡(簡單)で、早く嫁を貰つてこの家へ帰つて来て、亡くなつた父の後を相続しろというだけなのです」とあるからです。それに対して、叔父が「……いや、自分の娘とせ、ひともし結婚してほしい」と強く迫るとすれば、それは、一体、なぜなのか? 例えば、叔父の「娘」が先生のことを死ぬほど好きだと言うのだろうか? もちろん、そうではない。(このことは、やがて後で出てくるが、「……結局、叔父は、市の方に妾をもつようになるが、父の生きているうちに、そんな評判を耳に入れた覚えのない私は驚きました」とある。また、その外にも色々叔父についての噂はあつて、一時事業で失敗しかかつていたように他から思われていたのに、この二、三年来また急に盛り返して来たというのも、その一つとしてあり、つまり、先生の家の「財産」をそのようなところにすでに使い込んでいたのである。)

私は迂闊なのでしようか。或はそうなのかも知れませんが、恐らくその従妹に無頓着であつたのが、おもな原因になつているのでしよう。私は小供のうちから市にいる叔父の家

へ始終遊びに行きました。ただ行くばかりでなく、よくそこに泊りました。そうしてこの従妹とはその時分から親しかつたのです。あなたも御承知でしょう、兄妹の間に恋の成立した例のないのを。私はこの公認された事実を勝手に布衲しているかも知れないが、始終接触して親しくなり過ぎた男女の間には、恋に必要な刺戟の起る清新な感じが失われてしまうように考えています。『……香をかぎ得るのは、香を焚き出した瞬間に限る如く、酒を味わうのは、酒を飲み始めた刹那にある如く、恋の衝動にもこういう際どい一点が、時間の上に存在しているとしか思われたいのです』とある。一度平気でそこを通り抜けたら、馴れれば馴れるほど、親しみが増すだけで、恋の神経はだんだん麻痺して来るだけです。(例えば、恋人や新婚の頃と、何年も経った夫婦とでは当然違って来るようなものである)。私はどう考え直しても、この従妹を妻にする気にはなれませんでした。

叔父はもし私が主張するなら、私の卒業まで結婚を延ばしてもいいと言いました。けれども善は急げという諺もあるから、出来るなら今のうちに祝言の盃だけは済ませておきたいとも言いました。(これは先生にまだ分別のないうちに早く決めてしまいたいのだが)、当人に望みのない私にはどっちにしたって同じ事です。私はまた断りました。叔父は「厭な顔」をしました。(それは自分の思い通りにならないからであり)、従妹は泣きました。私に添われぬから悲しいのではありません。結婚の申し込みを拒絶されたのが、女として辛かったからです。(拒絶されるのは、自分に女としての魅力がないからかとうような思ひである)。私が従妹を愛していない如く、従妹も私を愛していない事は、(親しい気持ちと愛する気持ちとは別であることは)、私によく知れていました。私はまた東京へ出ました。

七、三度目の夏休みの帰省

「……私が三度目に帰国したのは、それからまた一年経った夏の取付でした。私は何時でも学年試験の済むのを待ちかねて東京を逃げました。私には故郷がそれほど懐かしかったからです。貴方にも覚えがあるでしょう、生れた所は空気の色が違います、土地の句も格別です、父や母の記憶も濃かに漂っています。一年のうちで、七、八の二月をその中に包まれて、穴に入った蛇のように凝として居るのは、私に取って何よりも温かい好い心持だったのです。

単純な私は従妹との結婚問題について、さほど頭を痛める必要がないと思っていました。厭なもの断る、断つてさえしまえば後には何も残らない、私はこう信じていたのです。だから叔父の希望通りに意志を曲げなかつたにも関わらず、私はむしろ平気でした。過去一年の間未だかつてそんな事に屈託した覚えもなく、相変らずの元気で国へ帰つたのです。

ところが帰つて見ると叔父の態度が違っています。元のように好い顔をして私を自分の懐に抱こうとしません。それでも鷹揚に育つた私は、帰つて四、五日の間は気が付かずにいました。ただ何かの機会にふと変に思い出したのです。すると妙なのは、叔父ばかりではないのです。叔母も妙なのです。従妹も妙なのです。中学校を出て、これから東京の高等商業へ這入る積もりだと言って、手紙でその様子を聞き合せたりした叔父の男の子まで妙なのです。

私の性分として考えずにはいられなくなりました。どうして私の心持がこう変わったのだろう。いやどうして向うがこう変わったのだろう。私は突然死んだ父や母が、鈍い私の眼を洗って、急に世の中が判然見えるようにしてくれただけではないかと疑いました。私は父や母がこの世に居なくなつた後でも、居た時と同じように私を愛してくれるものと、何処か心の奥で信じていたのです。尤もその頃でも私は決して理に暗い質ではありませんでした。しかし先祖から譲られた迷信の塊も、強い力で私の血の中に潜んでいたので。今でも潜んでいるでしょう。

私はたった一人山へ行つて、父母の墓の前に跪きました。半は哀悼の意味、半は感謝の心持で跪いたのです。そうして私の未来の幸福が、この冷たい石の下に横たわる彼らの手にまだ握られてでもいるような気分、私の運命を守るべく彼らに祈りました。あなたは笑うかも知れない。私も笑われても仕方がないと思います。しかし私はそうした人間だったのです。

私の世界は掌を翻すように変わりました。尤もこれは私に取つて始めての経験ではなかつたのです。私が十六、七の時でしたらう、始めて世の中に美しいものがあるという事実を発見した時には、一度にはと驚きました。何遍も自分の眼を疑つて、何遍も自分の眼を擦りました。そうして心の中でああ美しいと叫びました。十六、七と言え、男でも女でも、俗にいう色気の付く頃です。色気の付いた私は世の中にある美しいもの代表者として、始めて女を見る事が出来たのです。今までその存在に少しも気の付かなかつた異性に対して、盲目の眼が忽ち開いたのです。それ以来私の天地は全く新しいものとなりました。

私が叔父の態度に心づいたのも、全くこれと同じなんでしょう。俄然として心づいたのです。何の予感も準備もなく、不意に來たのです。不意に彼と彼の家族が、今までとはまるで別物のように私の眼に映つたのです。私は驚きました。そうしてこのままにしておいては、自分の行先がどうなるか分らないという気になりました。(本文)

*

*

さて、「……私が三度目に帰国したのは、それからまた一年経つた夏の取付でした。私はいつでも学年試験の済むのを待ちかねて東京を逃げました。私には故郷がそれほど懐かしかつたからです。貴方にも覚えがあるでしょう、生れた所は空気が色が違います、土地の匂も格別です、父や母の記憶も濃かに漂っています。一年のうちで、七、八の二月をその中に包まれて、穴に入った蛇のように凝としてゐるのは、私に取つて何よりも温かい好い心持だったのです。(これは今でも夏のお盆休みなどには帰省、《民族の大移動》などが行なわれている)。——単純な私は従妹との結婚問題について、さほど頭を痛める必要がないと思つていました。厭なもの断る、断つてさえしまえば後には何も残らない、私はこう信じていたのです。だから叔父の希望通りに意志を曲げなかつたにも関わらず、私はむしろ平氣でした。過去一年の間未だかつてそんな事に屈託した覚えもなく、相変らずの元氣で国へ帰つたのです。(だが実際は大きな問題が待つていたのである。)

ところが帰つて見ると叔父の態度が違つています。元のように好い顔をして私を自分の懐に抱こうとしません。それでも鷹揚に育つた私は、帰つて四、五日の間は気が付かずにはいません。ただ何かの機会にふと変に思い出したのです。すると妙なのは、叔父ばかりではないのです。叔母も妙なのです。従妹も妙なのです。中学校を出て、これから東京の

高等商業へ這入る積もりだと言つて、手紙でその様子を聞き合せたりした叔父の男の子まで妙なのです。

私の性分として考えずにはいられなくなりました。どうして私の心持がこう変わったのだろう。いやどうして向うがこう変わったのだろう。私は突然死んだ父や母が、鈍い私の眼を洗つて、急に世の中が判然見えるようにしてくれたのではないかと疑いました。私は父や母がこの世に居なくなつた後でも、居た時と同じように私を愛してくれるものと、何処か心の奥で信じていたのです。尤もその頃でも私は決して理に暗い質ではありませんでした。しかし先祖から譲られた迷信の塊も、強い力で私の血の中に潜んでいたので。今でも潜んでいよう。——私はたった一人山へ行つて、父母の墓の前に跪きました。半は哀悼の意味、半は感謝の心持で跪いたのです。そうして私の未来の幸福が、この冷たい石の下に横たわる彼らの手にまだ握られてもいるような気分、私の運命を守るべく彼らに祈りました。あなたは笑うかも知れない。私も笑われても仕方がないと思います。しかし私はそうした人間だったので。これは死んだ両親があゝの世から自分を見守つていてくれるというような、いわば純朴かつ伝統的な「考え方」である。

私の世界は掌を翻すように変りました。尤もこれは私に取つて始めての経験ではなかつたのです。私が十六、七の時でしたらう、始めて世の中に美しいものがあるという事実を発見した時には、一度にはと驚きました。何遍も自分の眼を疑つて、何遍も自分の眼を擦りました。そうして心の中でああ美しいと叫びました。十六、七と言えば、男でも女でも、俗にいう色気の付く頃です。色気の付いた私は世の中にある美しいもの代表者として、始めて女を見る事が出来たのです。今までその存在に少しも気の付かなかつた異性に対して、盲目の眼が忽ち開いたのです。それ以来私の天地は全く新しいものとなりましたとある。

これらは、一体、どういうことかと問えば、それは、次のようなことである。つまり、この「時期」(中・高時代)というのは、まさに「第二性徴」とともに、自我がはつきりと目覚めて、異性への関心も一気に高まるだけではなく、それに加えて、自我の発達とともに、どういうことでも自分で考え、そして、自分で判断したがるような傾向が強くなり、それゆえ、今までは親や先生あるいは大人たちの言うことや考え方などに対して、それほどその真偽を深く厳密に問うことも少なく、比較的素直に受け入れることが多かったのに対して、次第に親や先生あるいは大人たちの考え方などのなかにある「矛盾や不合理」その他などに対して、はつきりと「不平や不満」などを感じるようになり、時には非常に強く「反発や反抗」などをするようになるという、いわゆる「第二反抗期」に入ることもなるわけである。そして、このことは同時に、今までのような親や大人への「強い依存」から次第に離れ始め、それに代わつて、まさに「友達との関係」などがより親密なものになつて行くという時期でもあるということである。

私が叔父の態度に心づいたのも、全くこれと同じなんですよ。俄然として心づいたのです。何の予感も準備もなく、不意に來たのです。不意に彼と彼の家族が、今までとはまるで別物のように私の眼に映つたのです。私は驚きました。そうしてこのままにしておいては、自分の行先がどうなるか分らないという氣になつたということである。

*

*

八、家の財産のこと

八、家の財産のこと

「……私は今まで叔父任せにしておいた家の財産について、詳しい知識を得なければ、死んだ父母に対して済まないという気を起したのです。叔父は忙しい身体だと自称することく、毎晩同じ所に寝泊はしていませんでした。二日家へ帰ると三日は市の方で暮らすと言った風に、両方の間を往來して、その日その日を落ち付きのない顔で過ごしていました。そうして忙しいという言葉を口癖のように使いました。何の疑いも起らない時は、私も実際に忙しいのだろうと思っていたのです。それから、忙しがらなくては当世流でないのだらうと、皮肉にも解釈していたのです。けれども財産の事について、時間の掛る話をしようという目的が出来た眼で、この忙しがる様子を見ると、それが単に私を避ける口実しか受け取れなくなつて来たのです。私は容易に叔父を捕まえる機会を得ませんでした。」

私は叔父が市の方に妾をもっているという噂を聞きました。私はその噂を昔中学の同級生であつたある友達から聞いたのです。妾を置くぐらいの事は、この叔父として少しも怪しむに足らないのですが、父の生きているうちに、そんな評判を耳に入れた覚えのない私は驚きました。友達はその外にも色々叔父についての噂を語って聞かせました。一時事業で失敗しかかつていたように他から思われていたのに、この二、三年来また急に盛り返して来たというのも、その一つでした。しかも私の疑惑を強く染め付けたものの一つでした。

私はどうとう叔父と談判を開きました。談判というのは少し不穩当かも知れませんが、話の成行から言うと、そんな言葉で形容するより外に途のないところへ、自然の調子が落ちて来たのです。叔父はどこまでも私を子供扱いにしようとしています。私はまた始めから猜疑の眼で叔父に対しています。穏やかに解決のつく筈はなかったのです。

遺憾ながら私は今その談判の顛末を詳しくここに書く事の出来ないほど先を急いでいます。実を言うと、私はこれより以上に、もっと大事なものを控えているのです。私のペンは早くからそこへ辿りつきたがっているのを、やっとの事で抑えつけているくらいです。あなたに会つて静かに話す機会を永久に失つた私は、筆を執る術に慣れないばかりでなく、貴い時間を惜しむという意味からして、書きたい事も省かなければなりません。

あなたは未だ覚えていてでしょう、私がいつかあなたに、造り付けの悪人が世の中にいるものではないと言つた事を。多くの善人がいざという場合に突然悪人になるのだから油断してはいけないと言つた事を。あの時あなたは私に昂奮していると注意してくれました。そうしてどんな場合に、善人が悪人に変化するのかと尋ねました。私がただ一口金と答えた時、あなたは不満な顔をしました。私はあなたの不満な顔をよく記憶しています。私は今あなたの前に打ち明けるが、私はあの時この叔父の事を考えていたのです。普通のも金が金を見て急に悪人になる例として、世の中に信用するに足るものが存在し得ない例として、憎悪と共に私はこの叔父を考えていたのです。私の答えは、思想界の奥へ突き進んで行こうとするあなたに取つて物足りなかつたかも知れませんが、陳腐だつたかも知れませんが、けれども私にはあれが生きた答えでした。現に私は昂奮していたではありませんか。私は冷やかな頭で新しい事を口にするよりも、熱した舌で平凡な説を述べる方が生きています。冷かかいます。血の力で体が動くからです。言葉が空気に波動を伝えるばかりでなく、もっと強い物にもっと強く働き掛ける事が出来るからです。(本文)

*

*

さて、「……私は今まで叔父任せにしておいた家の財産について、詳しい知識を得なければ、死んだ父母に対して済まないという気を起したのです。叔父は忙しい身体だと自称するごとく、毎晩同じ所に寝泊はしていませんでした。二日家へ帰ると三日は市の方で暮らすと言った風に、両方の間を往来して、その日その日を落ち付きのない顔で過ごしていました。そうして忙しいという言葉が口癖のように使いました。何の疑いも起らない時は、私も実際に忙しいのだろうと思っていたのです。それから、忙しがらなくては当世流でないのだろうと、皮肉にも解釈していたのです。けれども財産の事について、時間の掛る話をしようという目的が出来た眼で、この忙しい様子を見ると、それが単に私を避ける口実としか受け取れなくなつて来たのです。私は容易に叔父を捕まえる機会を得ませんでした。この「忙しい忙しい」と言つて真面に会おうとしない、或いは真面に話し合おうとしないのは、相手に何か「やましいこと」(つまり後ろめたいことや良心がとがめるようなこと)がある場合が殆んどではないかと思う。

私は叔父が市の方に妾をもつていてという噂を聞きました。私はその噂を昔中学の同級生であつたある友達から聞いたのです。妾を置くぐらいの事は、この叔父として少しも怪しむに足らないのですが、父の生きているうちに、そんな評判を耳に入れた覚えのない私は驚きました。友達はその外にも色々叔父についての噂を語つて聞かせました。一時事業で失敗しかかつていたように他から思われていたのに、この二、三年来また急に盛り返して来たというのも、その一つでした。しかも私の疑惑を強く染め付けたものの一つでした。(つまり妾を持てるようなお金や一時失敗しかかつていた事業を立て直すようなお金などは、一体、どこから出ているのかという疑惑である。)

私はどうとう叔父と談判を開きました。談判というのは少し不穩当かも知れませんが、話の成行から言うと、そんな言葉で形容するより外に途のないところへ、自然の調子が落ちて来たのです。叔父はどこまでも私を子供扱いにしようとします。私はまた始めから猜疑の眼で叔父に対しています。穏やかに解決のつく筈はなかつたのです。

遺憾ながら私は今その談判の顛末を詳しくここに書く事の出来ないほど先を急いでいます。実を言うと、私はこれより以上に、もつと大事なものを控えているのです。私のペンは今早くからそこへ辿りついたがつていてのを、やつとの事で抑えつけているくらいです。あなたに会つて静かに話す機会を永久に失つた私は、筆を執る術に慣れないばかりでなく、貴い時間を惜しむという意味からして、書きたい事も省かなければなりません。

あなたは未だ覚えていてでしょう、私がいつかあなたに、造り付けの悪人が世の中にいるものではないと言つた事を。多くの善人がいざという場合に突然悪人になるのだから油断してはいけないと言つた事を。あの時あなたは私に昂奮していると注意してくれました。そうしてどんな場合に、善人が悪人に変化するのかと尋ねました。私がただ一口金と答えた時、あなたは不満な顔をしました。私はあなたの不満な顔をよく記憶しています。私は今あなたの前に打ち明けるが、私はあの時この叔父の事を考えていたのです。普通のものが金を見て急に悪人になる例として、世の中に信用するに足るものが存在し得ない例として、憎悪と共に私はこの叔父を考えていたのです。私の答えは、思想界の奥へ突き進んで行こうとするあなたに取つて物足りなかつたかも知れませんが、陳腐だつたかも知れませんが、けれども私にはあれが生きた答えでした。現に私は昂奮していたではありませんか。私は

冷かな頭で新しい事を口にするよりも、熱した舌で平凡な説を述べる方が生きています。信じています。血の力で体が動くからです。言葉が空気に波動を伝えるばかりでなく、もっと強い物にもっと強く働き掛ける事が出来るからです。

*

*

つまり、第一部で、先生という人は、「……君は今、君の親戚なぞの中に、これと言って、悪い人間はいないようだといいましたね。しかし悪い人間という一種の人間が世の中にあると君は思っているんですか。そんな鑄型に入れたような悪人は世の中にある筈がありませんよ。平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざという間際に、急に悪人になるんだから恐ろしいのです。だから油断が出来ないんです」と語るのであった。それに対して、「私」という人は、「……さきほど先生の言われた、人間は誰でもいざという間際に悪人になるんだという意味ですね。あれはどういう意味ですか」と聞くと、「……意味と言つて、深い意味はありません。——つまり事実なんですよ。理屈じゃないんだ」、「……事実で差支えありませんが、私の伺いたいのは、いざという間際という意味なんです。一体どんな場合を指すのですか」と聞くので、先生は笑い出した。あたかも時機の過ぎた今、もう熱心に説明する張合いがないと言った風に。「……金さ君。金を見ると、どんな君子でもすぐ悪人になるのさ」と言うのであった。私には先生の返事があまりに平凡過ぎて詰まらなかつたとある。

そこで、敢えて、「……思想界の奥へ突き進んでみる」と、それは、次のようなことである。つまり、われわれ人間というのは、ふだんは「理性的部分」(それは知性や理性その他など)によつて強く支配されていて、様々な「欲望や感情」などは、それなりにコントロールされている状態であるが、それがまさに「……平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人間なんです」ということである。一方、何らかの問題を起こすようなその時には、その人の「理性的部分」(それは知性や理性その他など)による支配よりも、その時の「欲望や感情」などのほうが勝つてしまい、結果として、様々な「問題」を起こしてしまうということである。それでは、「……いざという間際」ということであるが、それは、多くの場合、いわば「精神的に追い詰められているような時」が多く、例えば、どうしてもお金が欲しいという時には、(悪いとは知りつつも)、目の前のお金について手を出してしまうということである。ふだんならばそんなことはしないのである。

それは、何も「お金」に限ったことではなく、例えば、食欲、性欲、物欲、金銭欲、社会的地位欲、出世欲、名誉欲、名声欲、その他、何であれ、どうしてもそれを得たいという余りにも強い欲求に襲われているような時には、嘘も裏切りもまた様々な策略も不正も、その他、もういかなる手段を尽くしてもそれを何としてでも手に入れたいとする傾向があるということである。

九、叔父に財産を胡魔化される

「……一口で言うと、叔父は私の財産を胡魔化したのです。事は私が東京へ出て三年の間に容易く行なわれたのです。凡てを叔父任せにして平気でいた私は、世間的に言えば本当の馬鹿でした。世間的以上の見地から評すれば、或は純なる尊い男とも言えましょうか。私はその時の己れを顧みて、何故もっと人が悪く生れて来なかつたかと思うと、

正直過ぎた自分が口惜しくって堪りません。しかしまたどうかして、もう一度ああいう生れたままの姿に立ち帰って生きて見たいという心持も起るのです。記憶して下さい、あなた知っている私は塵に汚れた後の私です。きたなくなつた年数の多いものを先輩と呼ぶならば、私はたしかに貴方より先輩でしょう。

若し私が叔父の希望通り叔父の娘と結婚したならば、その結果は物質的に私に取って有利なものでしたろうか。これは考えるまでもない事と思います。叔父は策略で娘を私に押し付けようとしたのです。好意的に両家の便宜を計るというよりも、ずっと下卑た利害心に駆られて、結婚問題を私に向けたのです。私は従妹を愛していません、嫌ってはいなかったのですが、後から考えてみると、それを断つたのが私には多少の愉快になると思います。胡魔化されるのはどつちにしても同じでしょうけれども、載せられ方から言えば、従妹を貰わない方が、向うの思い通りにならないという点から見ても、少しは私の我が通つた事になるのですから。しかしそれは殆んど問題とするに足りない些細な事柄です。ことに関係のないあなたに言わせたなら、さぞ馬鹿げた意地に見えるでしょう。

私と叔父の間に他の親戚のものが這入りました。その親戚のものも私はまるで信用していませんでした。信用しないばかりでなく、むしろ敵視していました。私は叔父が私を欺むいたと覺ると共に、他のものも必ず自分を欺くに違いないと思ひ詰めました。父があれだけ賞め抜いていた叔父ですらこうだから、他のものはというのが私の論理でした。

それでも彼らは私のために、私の所有にかかる一切のものを纏めてくれました。それは金額に見積ると、私の予期より遙かに少ないものでした。私としては黙ってそれを受け取るか、でなければ叔父を相手取って公沙汰にするか、二つの方法しかなかったのです。私は憤りました。また迷いました。訴訟にすると落着きか、長い時間のかかる事も恐れしました。私は修業中のからだですから、学生として大切な時間を奪われるのは非常の苦痛だとも考えました。私は思案の結果、市における中学の旧友に頼んで、私の受け取ったものを、すべて金の形に変えようとなりました。旧友は止した方が得だと言って忠告してくれましたが、私は聞きませんでした。私は永く故郷を離れる決心をその時に起したのです。叔父の顔を見まいと心のうちで誓つたのです。

私は国を立つ前に、また父と母の墓へ参りました。私はそれぎりその墓を見た事がありません。もう永久に見る機会も来ないでしょう。

私の旧友は私の言葉通りに取計らってくれました。尤もそれは私が東京へ着いてからよほど経つた後の事です。田舎で畠地などを売ろうとしたって容易には売れませんし、いざとなると足元を見て踏み倒される恐れがあるので、私の受け取った金額は、時価に比べるとよほど少ないものでした。自白すると、私の財産は自分が懐にして家を出た若干の公債と、後からこの友人に送ってもらった金だけなのです。親の遺産としては固より非常に減っていたに相違ありません。しかも私が積極的に減らしたのでないから、なお心持が悪かったです。けれども学生として生活するにはそれで充分以上でした。実を言うと私はそれから出る利子の半分も使えませんでした。この余裕ある私の学生生活が私を思いも寄らない境遇に陥し入れたのです。(本文)

*

*

さて、「……」口で言うと、叔父は私の財産を胡魔化したのです。事は私が東京へ出ている三年の間に容易く行なわれたのです。凡てを叔父任せにして平気でいた私は、世間的

に言えば本當の馬鹿でした。世間的以上の見地から評すれば、或は純なる尊い男とでも言えましようか。私はその時の己れを顧みて、何故もつと人が悪く生れて来なかつたかと思つと、正直過ぎた自分が口惜しくつて堪りません。しかしまたどうかして、もう一度あいう生れたままの姿に立ち帰つて生きて見たいという心持も起るのです。記憶して下さい、あなたの知っている私は塵に汚れた後の私です。きたなくなつた年数の多いものを先輩と呼ぶならば、私はたしかに貴方より先輩でしょう。

若し私が叔父の希望通り叔父の娘と結婚したならば、その結果は物質的に私に取つて有利なものでしたろうか。これは考えるまでもない事と思ひます。叔父は策略で娘を私に押し付けようとしたのです。好意的に両家の便宜を計るというよりも、ずっと下卑た利害心に駆られて、結婚問題を私に向けたのです。私は従妹を愛してはいないだけで、嫌つてはいなかつたのですが、後から考へてみると、それを断つたのが私には多少の愉快になると思ひます。胡魔化されるのはどつちにしても同じでしょうけれども、載せられ方から言えば、従妹を貰わない方が、向うの思い通りにならないという点から見ても、少しは私の我が通つた事になるのですから。しかしそれは殆んど問題とするに足りない些細な事柄です。ことに關係のないあなたに言わせたら、さぞ馬鹿氣た意地に見えるでしょう。

私と叔父の間に他の親戚のものが這入りました。(これは極めて大事なことであり、本来、信頼出来る「第三者」(例えば弁護士その他)などを立てて、問題の解決を図るのがベストである)。その親戚のものも私はまるで信用していませんでした。信用しないばかりでなく、むしろ敵視してました。私は叔父が私を欺むいと覺ると共に、他のものも必ず自分を欺くに違ひないと思ひ詰めました。父があれだけ賞め抜いていた叔父ですらこうだから、他のものはというのが私の論理でした。

それでも彼らは私のために、私の所有にかかると一切のものを纏めてくれました。それは金額に見積ると、私の予期より遙かに少ないものでした。私としては黙つてそれを受け取るか、でなければ叔父を相手取つて公沙汰にするか、二つの方法しかなかつたのです。私は憤りました。また迷いました。訴訟にすると落着ままでに長い時間のかかる事も恐れしました。私は修業中の中からですから、学生として大切な時間を奪われるのは非常の苦痛だとも考へました。私は思案の結果、市における中学の旧友に頼んで、私の受け取つたものを、すべて金の形に変えようとなりました。旧友は止した方が得だと言つて忠告してくれましたが、私は聞きませんでした。私は永く故郷を離れる決心をその時に起したのです。叔父の顔を見まいと心のうちで誓つたのです。

私は国を立つ前に、また父と母の墓へ参りました。私はそれぎりその墓を見た事がありませぬ。もう永久に見る機会も来ないでしょう。

私の旧友は私の言葉通りに取計らつてくれました。尤もそれは私が東京へ着いてからよほど経つた後の事です。田舎で「畠地」などを売ろうとしたつて容易には売れませぬし、いざとなると足元を見て踏み倒される恐れがあるので、私の受け取つた金額は、時価に比べるとよほど少ないものでした。自由すると、私の財産は自分が懐にして家を出た若干の公債と、後からこの友人に送つてもらつた金だけなのです。親の遺産としては固より非常に減つていたに相違ありません。しかも私が積極的に減らしたのでないから、なお心持が悪かつたのです。けれども学生として生活するにはそれで充分以上でした。実を言つと私はそれから出る利子の半分も使へませんでした。(これは凄いことで利子だけで生活が

出来ていたということであり、この余裕ある私の学生生活が私を思いも寄らない境遇に陥し入れたのです。

一、三度目の帰省部分の要約

まず、私が三度目に帰国したのは、それからまた一年経った夏の取付でした。私はいつでも学年試験の済むのを待ちかねて東京を逃げました。私には故郷（実は新潟県）がそれほど懐かしかったからです。生れた所は空気が色が違います、土地の匂いも格別です、父や母の記憶も濃やかに漂っています。——単純な私は、従妹との結婚問題について、さほど重大とは考えておらず、厭なものとは断る、断ってしまえば後には何も残らない、私はこう信じていたので、（私はなんの心配をせず）、相変らずの元気で国へ帰ったのです。

ところが帰って見ると叔父の態度が違っています。元のように好い顔をして私を自分の懐に抱こうとしません。それでも鷹揚に育った私は、帰って四、五日の間は気が付かずにいましたが、妙なのは、叔父ばかりではなく、叔母も妙であり、従妹も妙であり、そして、東京の高等商業へはいるつもり、男の子まで妙なのです。

*

*

私の性分として考えずにはいられなくなりました。どうして私の心持がこう変わったのだろう。いやどうして向うがこう変わったのだろう。私が叔父の態度に心づいたのも、それは、何の予感も準備もなく、不意に来たのです。不意に彼と彼の家族が、今まではまるで別物のように私の眼に映ったのです。私は驚きました。そして、このままほっておいては、自分の行先がどうなるか分らないという気になりました。また、このままでは、死んだ父母に対しても済まないという気を起したのです。私は叔父が市の方に妾をもち、また、一時事業で失敗しかかっていたのに、この二、三年来また急に盛り返して来たという噂などを聞いたのも、私の疑惑を強くしたものの一つでした。（つまり「家の財産を女遊びや事業などに使い込んでいた」ということである）。私はどうとう叔父と談判を開きました。一口で言うと、叔父は私の財産を胡魔化していったのです。事は私が東京へ出ている三年の間に容易く行なわれたのです。すべてを叔父任せにして平気でいた私は、世間的に言えば本当の馬鹿でした。訴訟も考えましたが、時間がかかるので、市における中学の旧友に頼んで、私の受け取ったものを、すべて金の形に変えることにしたのです。（ちなみに、今日の「金額」にすれば、恐らく、何億何十億という「財産」をだまし取られたことになるのだろう）。此所までの推移は、次のようなものである。

二、高等学校時代のまとめ

まず、両親の死後、私は、東京へ出て高等学校に入りました。そして、財産の管理は、すべて伯父に任せ、三年の間、夏休みは、実家に帰るといふ形で過ごしたが、やがて、実家には伯父夫婦が住むようになり、伯父は私の財産を誤魔化していったのです。そのことを抗議すると、彼らは私のために、私の所有にかかわる一切のものを纏めてくれました。それは金額に見つみると、私の予想より遙かに少ないものでしたが、再び、東京に戻ってからは、その手にした「財産（畠地）」などは、市における中学の旧友がすべて「金」に換え

てくれたので、学生一人東京で生活するには困らないほどの「お金（財産）」を手にする
ことが出来たのです。そこで、騒々しい下宿屋を出て、新しく住む家を探していると、た
またま軍人の未亡人とそのお嬢さんそれに一人の下女が住む家の話を聞いて、そこに下宿
することになるという展開である。

*

*

十、新たな下宿先を見つける

十、新たな下宿先を見つける

「……金に不自由のない私は、騒々しい下宿を出て、新しく一戸を構えて見ようかという気になったのです。しかしそれには世帯道具を買う面倒もありますし、世話をしてくれる婆さんの必要も起りますし、その婆さんがまた正直でなければ困るし、宅を留守にしても大丈夫なものでなければ心配だし、と言った訳で、ちよくらちよいと実行する事は覚束なく見えたのです。ある日私はまあ宅だけでも探して見ようかというそぞろ心から、散歩がてらに本郷台を西へ下りて小石川の坂を真直に伝通院の方へ上がりました。電車の通路になってから、あそこいらの様子がまるで違ってしまいました。その頃は左手が砲兵工廠の土塀で、右は原とも丘ともつかない空地に草が一面に生えていたものです。私はその草の中に立って、何心なく向うの崖を眺めました。今でも悪い景色ではありませんが、その頃はまたずっとあの西側の趣が違っていました。見渡す限り緑が一面に深く茂っているだけでも、神経が休まります。私はふとここいらに適当な宅はないだろうかと思いました。それで直ぐ草原を横切って、細い通りを北の方へ進んで行きました。いまだにいい町になり切れないで、がたぴししているあの辺の家並は、その時分の事ですから随分汚ならしいものでした。私は露次を抜いたり、横丁を曲ったり、ぐるぐる歩き廻りました。仕舞に駄菓子屋の上さんに、ここいらに小ぢんまりした貸家はないかと尋ねてみました。上さんは「……そうですね」と言って、少時首をかしげていましたが、「……かし家はちよいと……」と全く思い当らない風でした。私は望みのないものと諦めて帰り掛けました。すると上さんがまた、「……素人下宿じゃいけませんか」と聞くのです。私は一寸気が変わりました。静かな素人屋に一人で下宿しているのは、かえって家を持つ面倒がなくて結構だろうと考え出したのです。それからその駄菓子屋の店に腰を掛けて、上さんに詳しい事を教えてもらいました。

それはある軍人の家族、というよりもむしろ遺族、の住んでいる家でした。主人は何でも日清戦争の時か何かに死んだのだと上さんが言いました。一年ばかり前までは、市ヶ谷の士官学校の傍とかに住んでいたのだが、厩などがあって、邸が広過ぎるので、そこを売り払って、ここへ引越して来たけれども、無人で淋しくて困るから相当の人があつたら世話をしてくれと頼まれていたのだそうです。私は上さんから、その家には未亡人と一人娘と下女より外にいないのだという事を確かめました。私は閑静で至極好かうと心の中に思いました。けれどもそんな家族のうちに、私のようなものが、突然行つた処で、素性の知れない書生さんという名称のもとに、すぐ拒絶されはしまいかという掛念もありました。私は止そうかとも考えました。しかし私は書生としてそんなに見苦しい服装はしていませんでした。それから大学の制帽を被っていました。あなたは笑うでしょう、大学の制帽がどうしたんだと言って。けれどもその頃の大学生は今と違って、大分世間に信用のあつたものです。私はその場合この四角な帽子に一種の自信を見出した位です。そうして駄菓子屋の上さんに教わつた通り、紹介も何もなしにその軍人の遺族の家を訪ねました。

私は未亡人に会って来意を告げました。未亡人は私の身元やら学校やら専門やらについて色々質問しました。そうしてこれなら大丈夫だということをごに握つたのでしよう、いつでも引越して来て差支えないという挨拶を即坐に与えてくれました。未亡人は

正しい人でした、また判然した人でした。私は軍人の妻君というものはみんなこんなものかと思つて感服しました。感服もしたが、驚きもしました。この気性でどこが淋しいのだろうと疑いもしました。(本文)

*

*

さて、「……金に不自由のない私は、騒々しい下宿を出て、新しく一戸を構えて見ようかという気になったのです。しかしそれには世帯道具を買う面倒もありますし、世話をしてくれる婆さんの必要も起りますし、その婆さんがまた正直でなければ困るし、宅を留守にしても大丈夫なものでなければ心配だし、と言つた訳で、ちよくらちよいと実行する事は覚束なく見えたのです。(警戒心の表れであり)、ある日私はまあ宅だけでも探して見ようかというそぞろ心から、散歩がてらに本郷台を西へ下りて小石川の坂を真直に伝通院の方へ上がりました。電車の通路になつてから、あそこいらの様子がまるで違つてしまいました。が、その頃は左手が砲兵工廠の土堀で、右は原とも丘ともつかない空地に草が一面に生えていたものです。私はその草の中に立つて、何心なく向うの崖を眺めました。今でも悪い景色ではありませんが、その頃はまたずつとあの西側の趣が違つていました。見渡す限り緑が一面に深く茂っているだけでも、神経が休まります。私はふとここいらに適当な宅はないだろうかと思ひました。それで直ぐ草原を横切つて、細い通りを北の方へ進んで行きました。いまだに好い町になり切れないで、がたびししているあの辺の家並は、その時分の事です。随分汚ならしいものでした。私は露次を抜けたり、横丁を曲つたり、ぐるぐる歩き廻りました。仕舞に駄菓子屋の上さんに、ここいらに小ぢんまりした貸家はないかと尋ねてみました。上さんは「……そうですね」と言つて、少時首をかしげていました。が、「……かし家はちよいと……」と全く思ひ当らない風でした。私は望みのないものと諦めて帰り掛けました。すると上さんがまた、「……素人下宿じゃいけませんか」と聞かれました。私は一寸気が変わりました。静かな素人屋に一人で下宿しているのは、かえつて家を持つ面倒がなくなつて結構だろうと考え出したのです。それからその駄菓子屋の店に腰を掛けて、上さんに詳しい事を教えてもらいました。(人の運命を変える最初のきっかけというものは、多くの場合、ほんのちよつとしたことから始まるものである。)

それはある軍人の家族、というよりもむしろ遺族、の住んでいる家でした。主人は何でも日清戦争の時か何かに死んだのだと上さんが言いました。一年ばかり前までは、市ヶ谷の士官学校の傍とかに住んでいたのだが、厩などがあつて、邸が広過ぎるので、そこを売り払つて、ここへ引越して来たけれども、無人で淋しく困るから相当の人があつたら世話をしてくれと頼まれていたのだそうです。私は上さんから、その家には未亡人と一人娘と下女より外にいないのだという事を確かめました。私は閑静で至極好かろうと心の中に思いました。けれどもそんな家族のうちに、私のようなものが、突然行つた処で、素性の知れない書生さんという名称のもとに、すぐ拒絶されはしまいかという掛念もありました。私は止そうかとも考えました。しかし私は書生としてそんなに見苦しい服装はしていませんでした。それから大学の制帽を被つていました。あなたは笑うでしょう、大学の制帽がどうしたんだと言つて。けれどもその頃の大学生は今と違つて、大分世間に信用のあつたものです。私はその場合この四角な帽子に一種の自信を見出した位です。そうして駄菓子屋の上さんに教わつた通り、紹介も何もなしにその軍人の遺族の家を訪ねました。(この頃は、まだ自分に自信を持つていて、まさに快活かつ積極的に行動をしてい

たのである。

私は未亡人に会って来意を告げました。未亡人は私の「身元やら学校やら専門」やらについて色々質問しました。そうしてこれなら大丈夫だというところをどこかに握ったのでしよう、いつでも引つ越して来て差支えないという挨拶を即座に与えてくれました。未亡人は正しい人でした、また判然とした人でした。私は軍人の妻君というものはみんなこんなものかと思つて感服しました。感服しましたが、驚きもしました。この気性でどこが淋しいのかと「疑い」もしました。(これは娘の「婿選び」でもあつたのかも知れない。)

さて、奥さんという人は、先生(当時は大学生)と初めて会つた時から、この人ならばという直感がすぐに働いて、先生(当時は大学生)を即座に下宿させたということである。それは、最初から、奥さんの「お目」にかなつた、まさに「好ましい人物」に見えたということであり、それは、また、お嬢さんの「目」にも、恐らく、同じような印象で見えていたことになるのだろう。つまり、先生(当時は大学生)という人は、軍人の未亡人とそのお嬢さんそれに一人の下女が住む家に下宿するようになるが、その結果として、未亡人の奥さんとお嬢さんとも親しくなれるとともに、そこのお嬢さんのことが好きになつていくという展開になるのです。

十一、八畳の部屋の様子

「……私は早速その家へ引き移りました。私は最初来た時に未亡人と話をした座敷を借りたのです。そこは宅中で一番好い室でした。本郷辺に高等下宿と言つた風の家がぼつぼつ建てられた時分の事ですから、私は書生として占領し得る最も好い間の様子を心得ていました。私の新しく主人となつた室は、それらよりもずっと立派でした。移つた当座は、学生としての私には過ぎるくらいに思われたのです。

室の広さは八畳でした。床の横に違い棚があつて、縁と反対の側には一間(約一、八畳)の押入れが付いていました。窓は一つもなかつたのですが、その代り南向きの縁に明るい日がよく差しました。

私は移つた日に、その室の床に活けられた花と、その横に立て懸けられた琴を見ました。どつちも私の気に入りませんでした。私は詩や書や煎茶を嗜む父の傍で育つたので、唐めいた趣味を小供のうちからもつていました。そのためでもありませんか、こういう艶めかしい装飾をいつの間にか軽蔑する癖が付いていたのです。

私の父が存生中にあつめた道具類は、例の叔父のために滅茶滅茶にされてしまつたのですが、それでも多少は残つていました。私は国を立つ時それを中学の旧友に預かつてもらいました。それからその中で面白そうなものも四、五幅裸にして行李の底へ入れて来ました。私は移るや否や、それを取り出して床へ懸けて楽しむつもりでいたのです。ところが今言つた琴と活花を見たので、急に勇気がなくなつてしまいました。後から聞いて始めてこの花が私に対する御馳走に活けられたのだという事を知つた時、私は心のうちで苦笑しました。尤も琴は前からそこにあつたのですから、これは置き所がないため、やむを得ずそのままに立て懸けてあつたのでしよう。

こんな話をする、自然その裏に若い女の影があなたの頭を掠めて通るでしよう。移つた私にも、移らない初めからそういう好奇心がすでに動いていたのです。こうした邪気が

予備的に私の自然を損なつたためか、または私がまだ人慣れなかつたためか、私は始めてそこのお嬢さんに会つた時、へどもどした挨拶をしました。その代りお嬢さんの方でも赤い顔をしました。

私はそれまで未亡人の風采や態度から推して、このお嬢さんのすべてを想像していたのです。しかしその想像はお嬢さんに取つてあまり有利なものではありませんでした。軍人の妻君だからああなのだろう、その妻君の娘だからこうだろうと言つた順序で、私の推測は段々延びて行きました。ところがその推測が、お嬢さんの顔を見た瞬間に、悉く打ち消されました。そうして私の頭の中へ今まで想像も及ばなかつた異性の匂が新しく入つて来ました。私はそれから床の正面に活けてある花が厭でなくなりました。同じ床に立て懸けてある琴も邪魔にならなくなりました。

その花はまた規則正しく凋れる頃になると活け更えられるのです。琴も度々鍵の手に折れ曲がつた筋違の室に運び去られるのです。私は自分の居間で机の上に頰杖を突きながら、その琴の音を聞いていました。私にはその琴が上手なのか下手なのかよく解らないのです。けれども余り込み入つた手を弾かないところを見ると、上手なのじやなかうと考えました。まあ活花の程度ぐらいなものだろうと思ひました。花なら私にも好く分るのですが、お嬢さんは決して旨い方ではなかつたのです。

それでも臆面なく色々の花が私の床を飾つてくれました。尤も活方はいつ見ても同じ事でした。それから花瓶もついぞ変つた例がありませんでした。しかし片方の音楽になると花よりもっと変でした。ぽつんぽつん糸を鳴らすだけで、一向肉声を聞かせないのです。唄わないのではありませんが、まるで内所話でもするように小さな声しか出さないのです。しかも叱られると全く出なくなるのです。

私は喜んでこの下手な活花を眺めては、まずそんな琴の音に耳を傾けました。(本文)

*

*

さて、「……私は早速その家へ引き移りました。私は最初来た時に未亡人と話をした座敷を借りたのです。そこは宅中で一番好い室でした。本郷辺に高等下宿と言つた風の家がぼつぼつ建てられた時分の事ですから、私は書生として占領し得る最も好い間の様子を心得ていました。私の新しく主人となつた室は、それらよりもずっと立派でした。(それは、一年ばかり前までは、市ヶ谷の士官学校の傍とかに住んでいたのだが、厩などがあつて、邸が広過ぎるので、そこを売り払つて、ここへ引越して来たという、ちゃんとした軍人未亡人の一戸建の家)」「二室」であり、それゆゑ、移つた当座は、学生としての私には過ぎるくらいに思われたのです。

室の広さは八畳でした。床の横に違い棚があつて、縁と反対の側には一間(約一、八畳)の押入れが付いていました。窓は一つもなかつたのですが、その代り南向きの縁(側)に明るい日がよく差しました。(下宿は、「二室」借りる間借りであり、例えば、三畳、四畳、六畳、八畳などがあり、アパートやマンションなどに住むのとは全く違うのである。)私は移つた日に、その室の床に活けられた花と、その横に立て懸けられた琴を見ました。どつちも私の気に入りませんでした。私は詩や書や煎茶を嗜む父の傍で育つたので、唐めいた趣味を小供のうちからもつていました。そのためもありましようか、こういう艶めかしい装飾をいつの間にか軽蔑する癖が付いていたのです。

私の父が存生中にあつめた道具類は、例の叔父のために滅茶滅茶にされてしまつたの

ですが、それでも多少は残っていました。私は国を立つ時それを中学の旧友に預かってもらいました。それからその中で面白そうなものを四、五幅裸にして行李の底へ入れて来ました。私は移るや否や、それを取り出して床へ懸けて楽しむつもりでいたのです。ところが今言った琴と活花を見たので、急に勇気がなくなってしまうました。後から聞いて始めてこの花が私に対する御馳走（客への供応・もてなしの意）で活けられたのだという事を知った時、私は心のうちで苦笑しました。尤も琴は前からそこにあつたのですから、これは置き所がないため、やむを得ずそのままに立て懸けてあつたのでしょう。

こんな話をすると、自然その裏に若い女の影があなたの頭を掠めて通るでしょう。移った私にも、移らない初めからそういう好奇心がすでに動いていたのです。こうした邪気が予備的に私の自然を損なつたためか、または私がまだ人慣れなかつたためか、私は始めてそこのお嬢さんに会つた時、へどもどした挨拶をしました。その代りお嬢さんの方でも赤い顔をしました。（この最初の「出会い」の時から、先生という人は、まさにお嬢さんに心惹かれてしまつたのかも知れない。それが次の本文になるかと思う。）

私はそれまで未亡人の風采や態度から推して、このお嬢さんのすべてを想像していたのです。しかしその想像はお嬢さんに取つてあまり有利なものではありませんでした。軍人の妻君だからあなのだろう、その妻君の娘だからこうだろうと言つた順序で、私の推測は段々延びて行きました。ところがその推測が、お嬢さんの顔を見た瞬間に、悉く打ち消されました。そうして私の頭の中へ今まで想像も及ばなかつた異性の匂が新しく入つて来ました。私はそれから床の正面に活けてある花が厭でなくなりました。同じ床に立て懸けてある琴も邪魔にならなくなりましたとある。

*

*

例えば、よく『一目惚れ』というものを経験することがあるかと思う。それは、一体、どういふものかと言へば、それは、ある日、ある時、ある場所で、まったく思いがけないような感じであつたりとめぐり逢つた相手を見た時に、その人は、その一瞬、「アッ！」という感じの衝撃を受けると同時に、今までの「動きを奪われ」て、しばらく動けなくなるというものである。それは、なぜかと言へば、それは、その人の「心の中」では相手の異性に対して、「あつ、きれいだな！」とか、「あつ、カッコいいなあ！」というように思いに襲われて一杯になつてゐるために、しばらく「動き」を奪われてしまうものなのである。しかも、一方だけがそういう「一目惚れ」に深く陥るのではなく、二人が同時にそのような「一目惚れ」に深く陥つた時には、その瞬間、「時計が止まつた」ような感じ、相手の姿だけが「鮮明に見え」て、それ以外のまわりのものは、ほとんど薄れてしまうものなのである。しかも、お互いがそういう状態で、「相手を見つめながら、立ち止まつてゐる」状態になるということである。もちろん、それは、一瞬のことかも知れないが、その時、一種の「心から心へのテレパシー」のようなものが働いている感じにもなるものである。それは、お互いが「同じような心の波長」を出し合つていて、それが「深く響き合つてゐる」ような感じになる場合も時にはあるのだろう。先生の場合にも、そのような「一目惚れ」のような感じがあつたのかも知れない。

*

*

その花はまた規則正しく凋れる頃になると活け更えられるのです。琴も度々鍵の手に折れ曲がつた筋違の室に運び去られるのです。私は自分の居間で机の上に頬杖を突きながら、

その琴の音を聞いていました。私にはその琴が上手なのか下手なのかよく解らないのです。けれども余り込み入った手を弾かないところを見ると、上手なのじゃなからうと考えました。まあ活花の程度ぐらいなものだろうと思いました。花なら私にも好く分るのですが、お嬢さんは決して旨い方ではなかったのです。

それでも臆面なく色々の花が私の床を飾ってくれました。尤も活方はいつ見ても同じ事でした。それから花瓶もついぞ変わった例がありませんでした。(この「活方も花瓶」も変わらないのは、奥さんもお嬢さんも「活花」にはこれという特別の思い入れの「興味や関心」はなかったのかも知れない。もし何か特別の思い入れの「興味や関心」があれば、その「活方や花瓶」なども換えたりしたかも知れない。その目的は、八畳の室を活花で飾って、先生に少しでも和んでもらえればそれで好いということである)。しかし片方の音楽になると花よりもっと変でした。ぼつんぼつん糸を鳴らすだけで、一向肉声を聞かせないのです。唄わないのではありませんが、まるで内所話でもするように小さな声しか出さないのです。しかも叱られると全く出なくなるのです。(それでは、一体、誰が、「叱る」のか？ それは奥さんであり、その理由は、先生という人の「勉強の邪魔」などにならないようにという配慮からになるのだろう)。——私は喜んでこの下手な活花を眺めては、まずそんな琴の音に耳を傾けたのでした。

十二、先生の心の状態

「……私の気分は国を立つ時すでに厭世的になっていました。他は頼りにならないものだという観念が、その時骨の中で染み込んでしまったように思われたのです。私は私の敵視する叔父だの叔母だの、その他の親戚だのを、あたかも人類の代表者のごとく考え出しました。汽車へ乗ってさえ隣のものの様子を、それとなく注意し始めました。たまに向うから話し掛けられでもすると、なおの事警戒を加えたくまりました。私の心は沈鬱でした。鉛を呑んだように重苦しくなる事が時々ありました。それでいて私の神経は、今言った如くに鋭く尖ってしまつたのです。

私が東京へ来て下宿を出ようとしたのも、これが大きな原因になつているように思われます。金に不自由がなければこそ、一戸を構えてみる気にもなつたのだと言えばそれまでですが、元の通りの私ならば、たとい懷中に余裕が出来ても、好んでそんな面倒な真似はしなかつたでしょう。

私は小石川へ引き移つてからも、当分この緊張した気分に見まわされていようと思つて来ました。私は自分で自分が恥ずかしい程、きよときよと周囲を見廻して来ました。不思議にもよく働くのは頭と眼だけで、口の方はそれと反対に、段々動かなくなつて来ました。私は家のものの様子を猫のようによく観察しながら、黙つて机の前に坐っていました。時々彼らに対して気の毒だと思ふほど、私は油断のない注意を彼らの上に注いでいたのです。おれは物を偷まない巾着切みたようなものだ、私はこう考えて、自分が厭になる事さえあつたのです。

あなたは定めて変に思うでしょう。その私がそこのお嬢さんをどうして好く余裕をもっているか。そのお嬢さんの下手な活花を、どうして嬉しがって眺める余裕があるか。同じく下手なその人の琴をどうして喜んで聞く余裕があるか。そう質問された時、私はただ

両方とも事実であつたのだから、事実としてあなたに教えて上げるといふより外に仕方がないのです。解釈は頭のあるあなたに任せるとして、私はただ一言付け足しておきましょう。私は金に対して人類を疑つたけれども、愛に対しては、まだ人類を疑わなかつたのです。だから他から見ると変なものでも、また自分で考えてみて、矛盾したものでも、私の胸のなかでは平気で両立していたのです。

私は未亡人の事を常に奥さんと言っていましたから、これから未亡人と呼ばずに奥さんと言います。奥さんは私を静かな人、大人しい男と評しました。それから勉強家だとも褒めてくれました。けれども私の不安な眼つきや、きよときよとした様子については、何事も口へ出しませんでした。気が付かなかつたのか、遠慮していたのか、どっちだかよく解りませんが、何しろそこにはまるで注意を払っていないらしく見えました。そのみならず、ある場合に私を鷹揚な方だと言って、さも尊敬したらしい口の利き方をした事があります。その時正直な私は少し顔を赤らめて、向うの言葉を否定しました。すると奥さんは「……あなたは自分で気が付かないから、そうおっしゃるんです」と真面目に説明してくれました。奥さんは始め私のような書生を宅へ置くつもりではなかつたらしいのです。どこかの役所へ勤める人か何かに坐敷を貸す料簡で、近所のものに周旋（幹旋）を頼んでいたらしいのです。俸給が豊かでなくって、やむを得ず素人屋に下宿するくらいの人だからという考えが、それで前から奥さんの頭のどこかに這入っていたのでしょうか。奥さんは自分の胸に描いたその想像のお客と私とを比較して、こつちの方を鷹揚だと言って褒めるのです。成る程そんな切り詰めた生活をする人に比べたら、私は金銭にかけて、鷹揚だつたかも知れません。しかしそれは気性の問題ではありませんから、私の内生活に取って殆んど関係のないのと一般でした。奥さんはまた女だけにそれを私の全体に推し広げて、同じ言葉を応用しようと力めるのです。（本文）

*

*

さて、「……私の気分は国を立つ時すでに厭世的になつていました。他は頼りにならないものだ」といふ觀念が、その時骨の中まで染み込んでしまつたように思われたのです。私は私の敵視する叔父だの叔母だの、その他の親戚だのを、あたかも人類の代表者のごとく考え出しました。汽車へ乗つてさえ隣のものの様子を、それとなく注意し始めました。たまに向うから話し掛けられでもすると、なおの事警戒を加えたくなりました。私の心は沈鬱でした。鉛を呑んだように重苦しくなる事が時々ありました。それでいて私の神経は、今言つた如くに鋭く尖つてしまつたのです。

私が東京へ来て下宿を出ようとしたのも、これが大きな原因になつてゐるように思われます。金に不自由がなければこそ、一戸を構えてみる気にもなつたのだと言えばそれまでですが、元の通りの私ならば、たとい懷中に余裕が出来ても、好んでそんな面倒な真似はしなかつたでしょうとある。

私は小石川へ引き移つてからも、当分この緊張した気分に見まわす事が出来ませんでした。私は自分で自分が恥ずかしい程、きよときよと周囲を見廻してゐました。不思議にもよく働くのは頭と眼だけで、口の方はそれと反対に、段々動かなくなつて来ました。私は家のものの様子を猫のようによく観察しながら、黙つて机の前に坐つてゐました。時々は彼らに対して気の毒だと思ふほど、私は油断のない注意を彼らの上に注いでいたのです。おれは物を偷まない巾着切みたやうなものだ、私はこう考えて、自分が厭になる事

さえあったのです。

これは、一体、何かと問えば、それは、信じ切っていた叔父に裏切られて、今日の「金額」にすれば、恐らく、何億何十億という「家の財産」の多くを騙し取られてしまったことから、先生という人は、「……他は頼りにならないものだ」という観念が、その時骨の中まで染み込んでしまったように思われたのです」とある。つまり、それが「トラウマ」となって、まさに「人間不信」へと深く陥ってしまったということである。

あなたは定めて変に思うでしょう。その私がそのお嬢さんをどうして好く余裕をもっているか。そのお嬢さんの下手な活花を、どうして嬉しがって眺める余裕があるか。同じく下手なその人の琴をどうして喜んで聞く余裕があるか。そう質問された時、私はただ両方とも事実であったのだから、事実としてあなたに教えて上げるというより外に仕方がないので。解釈は頭のあるあなたに任せるとして、私はただ一言付け足しておきましょう。私は金に対して人類を疑ったけれども、愛に対しては、まだ人類を疑わなかったのです。だから他から見ると変なものでも、また自分で考えてみて、矛盾したもので、私の胸のなかでは平気で両立していたのです。

私は未亡人の事を常に奥さんと言っていましたから、これから未亡人と呼ばずに奥さんと言います。奥さんは私を静かな人、大人しい男と評しました。それから勉強家だとも褒めてくれました。けれども私の不安な眼つきや、きよときよとした様子については、何事も口へ出しませんでした。気が付かなかったのか、遠慮していたのか、どっちだかよく解りませんが、何しろそこにはまるで注意を払っていないらしく見えました。そのみならず、ある場合に私を鷹揚な方だと言って、さも尊敬したらしい口の利き方をした事があります。その時正直な私は少し顔を赤らめて、向うの言葉を否定しました。すると奥さんは「……あなたは自分で気が付かないから、そうおっしゃるんです」と真面目に説明してくれました。奥さんは始め私のような書生を宅へ置くつもりではなかったらしいのです。どこかの役所へ勤める人（公務員）か何かに坐敷を貸す料簡で、近所のものに周旋（幹旋）を頼んでいたらしいのです。俸給が豊かでなくて、やむを得ず素人屋に下宿するくらいの人だから（裕福な人が好んで素人屋などに下宿するはずがない）という考えが、それ以前から奥さんの頭のどこかに這入っていたのでしよう。奥さんは自分の胸に描いたその想像のお客（例えば平の公務員）と私とを比較して、こっちの方を鷹揚だと言って褒めるのです。成る程そんな切り詰めた生活をする人に比べたら、私は金銭にかけて、鷹揚だったかも知れません。しかしそれは気性の問題ではありませんから、私の内生活に取って殆ど関係のないのと同様でした。奥さんはまた女だけにそれを私の全体（人間性）にまで押し広げて、同じ言葉を応用しようとするのです。

十三、奥さんとお嬢さんと先生との関係

「……奥さんのこの態度が自然私の気分に影響して来ました。しばらくするうちに、私の眼はもとほぎよる付かなくなりました。自分の心が自分の坐っている所に、ちゃんと落ち付いているような気にもなれました。要するに奥さん始め家のものが、僻んだ私の眼や疑い深い私の様子に、てんから取り合わなかったのが、私に大きな幸福を与えたのでしよう。私の神経は相手から照り返して来る反射のないために段々静まりました。

奥さんは心得のある人でしたから、わざと私をそんな風に取り扱ってくれたものとも思われますし、また自分で公言する如く、実際私を鷹揚だと観察していたのかも知れません。私のこせつき方は頭の中の現象で、それ程外へ出なかつたようにも考えられますから、或は奥さんの方で胡魔化されていたのかも解りません。

私の心が静まると共に、私は段々家族のものと接近して来ました。奥さんともお嬢さんとも笑談を言うようになりました。茶を入れたからと言って向うの室へ呼ばれる日もありません。また私の方で菓子を買つて来て、二人をこちへ招いたりする晩もありました。私は急に交際の区域が殖えたように感じました。それがために大切な勉強の時間を潰される事も何度となくありました。不思議にも、その妨害が私には一向邪魔にならなかつたのです。奥さんはもとより閑人でした。お嬢さんは学校へ行く上に、花だの琴だのを習っているんだから、定めて忙しかろうと思うと、それがまた案外なもので、いくらでも時間に余裕をもっているように見えました。それで三人は顔さえ見るといっしょに集まつて、世間話をしながら遊んだのです。

私を呼びに来るのは、大抵お嬢さんでした。お嬢さんは縁側を直角に曲つて、私の室の前に立つ事もありますし、茶の間を抜けて、次の室の襖の影から姿を見せる事もありました。お嬢さんは、そこへ来て一寸留まります。それからきつと私の名を呼んで、「……ご勉強？」と聞きます。私は大抵むずかしい書物を机の前に開けて、それを見詰めていますから、傍で見たらさぞ勉強家のように見えたのでしょう。しかし實際を言うと、それほど熱心に書物を研究してはいなかつたのです。頁の上に眼は着けていながら、お嬢さんの呼びに来るのを待っているくらいなものでした。待っていて来ないと、仕方がないから私の方で立ち上がるのです。そうして向うの室の前へ行って、こちから「……ご勉強ですか」と聞くのです。

お嬢さんの部屋は茶の間と続いた六畳でした。奥さんはその茶の間にいる事もあるし、またお嬢さんの部屋にいる事もありました。つまりこの二つの部屋は仕切があつても、なにと同じ事で、親子二人が往つたり来りして、どっち付かずと占領していたのです。私を外から声を掛けると、「お這入んなさい」と答えるのはきつと奥さんでした。お嬢さんはそこにおいても滅多に返事をした事がありませんでした。

時たまお嬢さん一人で、用があつて私の室へ這入つたついでに、そこに坐つて話し込むような場合もその内に出て来りました。そういう時には、私の心が妙に不安に冒されて来るのです。そうして若い女とただ差向いで坐っているのが不安なのだとは思えませんでした。私は何だかそわそわし出すのです。自分で自分を裏切るような不自然な態度が私を苦しめるのです。しかし相手の方はかえつて平気でした。これが琴を浚うのに声さえ碌に出せなかつたあの女かしらと疑われるくらい、恥ずかしがらないのです。あまり長くなるので、茶の間から母に呼ばれても、「……はい」と返事をするだけで、容易に腰を上げない事さえありました。それでいてお嬢さんは決して子供ではなかつたのです。私の眼にはよくそれが解つていました。よく解るように振舞つて見せる痕迹さえ明らかでした。(本文)

*

*

さて、「……奥さんのこの態度が自然私の気分に影響して来ました。しばらくするうちに、私の眼はもとほどこよる付かなくなりました。自分の心が自分の坐っている所に、ち

やんと落ち付いているような気にもなれました。要するに奥さん始め家のものが、僻んだ私の眼や疑い深い私の様子に、てんから取り合わなかったのが、私に大きな幸福を与えたのでしよう。私の神経は相手から照り返して来る反射のないために段々静まりました。

奥さんは心得のある人でしたから、わざと私をそんな風に取り扱ってくれたものとも思われますし、また自分で公言する如く、実際私を鷹揚だと観察していたのかも知れません。私のこせつき方は頭の中の現象で、それ程外へ出なかつたようにも考えられますから、或は奥さんの方で胡魔化されていたのかも解りません。(これは「外的事実」と「内的事実」との違いであり、他人から見れば、落ち着いているように見えても、本人の「心の中」では大変なことになっているようなことはよくあることである。)

私の心が静まると共に、私は段々家族のものと接近して来ました。奥さんともお嬢さんとも笑談を言うようになりました。茶を入れたからと言って向うの室へ呼ばれる日もありました。また私の方で菓子を買つて来て、一人をこちへ招いたりする晩もありました。私は急に交際の区域が殖えたように感じました。それがために大切な勉強の時間を潰される事も何度となくありました。不思議にも、その妨害が私には一向邪魔にならなかつたのです。奥さんはもとより閑人でした。お嬢さんは学校へ行く上に、花だの琴だのを習っているんだから、定めて忙しかろうと思うと、それがまた案外なもので、いくらでも時間に余裕をもっているように見えました。それで三人は顔さえ見るといつしよに集まつて、世間話をしながら遊んだのです。(これはお互いに急速に親しさを増して行つたということであり、このまま先生とお嬢さんとが結婚をして、三人で「新しい生活」を始めていたら、恐らく、誰もが羨むような「幸せな夫婦(家族)」になつていたかも知れないのである。しかし、実際は、そうはならなかつたのである。)

私を呼びに来るのは、大抵お嬢さんでした。お嬢さんは縁側を直角に曲つて、私の室の前に立つ事もありませんし、茶の間を抜けて、次の室の襖の影から姿を見せる事もありました。お嬢さんは、そこへ来て一寸留まります。それからきつと私の名を呼んで、「……ご勉強？」と聞きます。私は大抵むずかしい書物を机の前に開けて、それを見詰めていましたから、傍で見たらさぞ勉強家のように見えたのでしよう。しかし實際を言うと、それほど熱心に書物を研究してはいなかつたのです。頁の上に眼は着けていながら、お嬢さんの呼びに来るのを待つているくらいなものでした。待つて来ないと、仕方がないから私の方で立ち上がるのです。そうして向うの室の前へ行つて、こちから「……ご勉強ですか」と聞くのです。(これは想いがより募っている「心の状態」にあるからである。)

お嬢さんの部屋は茶の間と続いた六畳でした。奥さんはその茶の間にいる事もあるし、またお嬢さんの部屋にいる事もありました。つまりこの二つの部屋は仕切があつても、なにと同じ事で、親子二人が往つたり来りして、どっち付かず占領していたのです。私を外から声を掛けると、「お這入んなさい」と答えるのはきつと奥さんでした。お嬢さんはそこにおいても滅多に返事をした事がありませんでした。

時たまお嬢さん一人で、用があつて私の室へ這入つたついでに、そこに坐つて話し込むような場合もその内に出て来ました。そういう時には、私の心が妙に不安に冒されて来るのです。そうして若い女とただ差向いで坐っているのが不安なのだとはかりは思えませんでした。私は何だかそわそわし出すのです。自分で自分を裏切るような不自然な態度が私を苦しめるのです。(これは自分の心とは違う様なことを言動し兼ねないということなの

か？）、しかし相手の方はかえって平気でした。これが琴を浚うのに声さえ碌に出せなかったあの女かしらと疑われるくらい、恥ずかしがらないのです。あまり長くなるので、茶の間から母に呼ばれても、「……はい」と返事をするだけで、容易に腰を上げない事さえありました。それでいてお嬢さんは決して子供ではなかったのです。私の眼にはよくそれが解っていました。よく解るように振舞って見せる痕迹さえ明らかでした。（これはもうお嬢さんの方も先生のごが好きになつて、いるということである。）

*

*

十四、奥さんの想い

十四、奥さんの想い

「……私はお嬢さんの立つたあとで、ほっと一息するのです。それと同時に、物足りないようなまた済まないような気持ちになるのです。私は女らしかったのかも知れません。今の青年のあなたがたから見たらなおそう見えるでしょう。しかしその頃の私たちは大抵そんなものだったのです。」

奥さんは滅多に外出した事がありませんでした。たまに宅を留守にする時でも、お嬢さんと私を二人ぎり残して行くような事はなかったのです。それがまた偶然なのか、故意なのか、私には解らないのです。私の口から言うのは変ですが、奥さんの様子を能く観察していると、何だか自分の娘と私とを接近させたがっているらしくも見えます。それでいて、或る場合には、私に対して暗に警戒するところもあるようなのですから、始めてこんな場合に出会った私は、時々心持を悪くしました。

私は奥さんの態度をどつちかに片付てもらいたかったのです。頭の働きから言えば、それが明らかな矛盾に違いなかったのです。しかし叔父に欺かれた記憶のまだ新しい私は、もう一步踏み込んだ疑いを挟まずにはいられません。私は奥さんのこの態度のどつちかが本場で、どつちかが偽りだろうと推定しました。そうして判断に迷いました。ただ判断に迷うばかりでなく、何でそんな事をするかその意味が私には呑み込めなかったのです。理由を考え出そうとしても、考え出せない私は、罪を女という一字に塗り付けて我慢した事もありました。必竟女だからあなのだ、女というものはどうせ愚なものだ。私の考えは行き詰ればいつでもここへ落ちて来ました。

それほど女を見縊っていた私が、またどうしてもお嬢さんを見縊る事が出来なかったのです。私の理屈はその人の前に全く用を為さないほど動きませんでした。私はその人に対して、殆んど信仰に近い愛をもっていたのです。私が宗教だけに用いるこの言葉を、若い女に応用するのを見て、あなたは変に思うかも知れませんが、私は今でも固く信じているのです。本当の愛は宗教心とそう違ったものでないという事を固く信じているのです。私はお嬢さんの顔を見るたびに、自分が美しくなるような心持がしました。お嬢さんの事を考えると、気高い気分がすぐ自分に乗り移って来るように思いました。もし愛という不可思議なものに両端があつて、その高い端には神聖な感じが働いて、低い端には性欲が動いているとすれば、私の愛はたしかにその高い極点を捕まえたものです。私はもとより人間として肉を離れる事の出来ない身体でした。けれどもお嬢さんを見る私の眼や、お嬢さんを考える私の心は、全く肉の臭いを帯びていませんでした。

私は母に対して反感を抱くと共に、子に対して恋愛の度を増して行つたのですから、三人の関係は、下宿した始めよりは段々複雑になって来ました。尤もその変化は殆んど内面的で外へは現れて来なかったのです。そのうち私はあるひよつとした機会から、今まで奥さんを誤解していたのではなからうかという気になりました。奥さんの私に対する矛盾した態度が、どつちも偽りではないのだろうと考え直して来たのです。その上、それが互い違いに奥さんの心を支配するのではなくて、いつでも両方が同時に奥さんの胸に存在しているのだと思うようになったのです。つまり奥さんが出来るだけお嬢さんを私に接近させようとしているながら、同時に私に警戒を加えているのは矛盾のようだけれども、その警戒を加える時に、片方の態度を忘れるのでも翻すのでも何でもなく、やはり依然として

二人を接近させたがっていただけだと観察したのです。ただ自分が正当と認める程度以上に、二人が密着するのを忌むのだと解釈したのです。お嬢さんに対して、肉の方面から近づく念の萌さなかった私は、その時入らぬ心配だと思いました。しかし奥さんを悪く思う気はそれから無くなりました。(本文)

*

*

さて、「……私はお嬢さんの立つたあとで、ほっと一息するのです。それと同時に、物足りないようなまた済まないような気持ちになるのです。私は女らしくなかったのかも知れませんが。(それは自分から積極的に行動に出ないこと)。今の青年のあなたがたから見たらなおそう見えるでしょう。しかしその頃の私たちは大抵そんなもの(純朴)だったのです。

奥さんは滅多に外出した事がありませんでした。たまに宅を留守にする時でも、お嬢さんと私を二人ぎり残して行くような事はなかったのです。それがまた偶然なのか、故意なのか、私には解らないのです。私の口から言うのは変ですが、奥さんの様子を能く観察していると、何だか自分の娘と私とを接近させたがっているらしくも見えるのです。それでいて、或る場合には、私に対して暗に警戒するところもあるようですから、始めてこんな場合に会った私は、時々心持を悪くしました。

私は奥さんの態度をどつちかに片付てもらいたかったです。頭の働きから言えば、それが明らかで矛盾に違いなかったのです。しかし叔父に欺かれた記憶のまだ新しい私は、もう一步踏み込んだ疑いを挟まずにはいられません。私は奥さんのこの態度のどつちかが本場で、どつちかが偽りだろうと推定しました。そうして判断に迷いました。ただ判断に迷うばかりでなく、何でそんな事をするかその意味が私には呑み込めなかつたのです。理由を考え出そうとしても、考え出せない私は、罪を女という一字に塗り付けて我慢した事もありました。必竟女だからあなのだ、女というものはどうせ愚なものだ。私の考えは行き詰ればいつでもここへ落ちて来ました。(この奥さんの態度は、実に当然のことであり、二人が親しくなるのはよいが、肉体関係を持つ様なことには警戒したのである。)

それほど女を見縊っていた私が、またどうしてもお嬢さんを見縊る事が出来なかったのです。私の理屈はその人の前に全く用を為さないほど動きませんでした。私はその人に対して、殆んど信仰に近い愛をもっていたのです。私が宗教だけに用いるこの言葉を、若い女に応用するのを見て、あなたは変に思うかも知れませんが、私は今でも固く信じているのです。本当の愛は宗教心とそう違ったものでないという事を固く信じているのです。私はお嬢さんの顔を見るたびに、自分が美しくなるような心持がしました。お嬢さんの事を考えると、気高い気分がすぐ自分に乗り移って来るように思いました。もし愛という不可思議なものに両端があつて、その高い端には神聖な感じが働いて、低い端には性欲が動いているとすれば、私の愛はたしかにその高い極点を捕まえたものです。私はもとより人間として肉を離れる事の出来ない身体でした。けれどもお嬢さんを見る私の眼や、お嬢さんを考える私の心は、全く肉の臭いを帯びていませんでした。(昔は、若い女性は処女で結婚するのが普通であり、だからこそ、母親が警戒するのも当然であり、また当時の書生気質として、その頃の私たちは大抵そんなもの《純朴》だったのである。)

私は母に対して反感を抱くと共に、子に対して恋愛の度を増して行ったのですから、三人の関係は、下宿した始めよりは段々複雑になって来ました。尤もその変化は殆んど内

面的で外へは現れて来なかったのです。そのうち私はあるひよつとした機会から、今まで奥さんを誤解していたのではなからうかという気になりました。奥さんの私に対する矛盾した態度が、どっちも偽りではないのだからと考え直して来たのです。その上、それが互い違いに奥さんの心を支配するのではなくて、いつでも両方が同時に奥さんの胸に存在しているのだと思うようになったのです。つまり奥さんが出来るだけお嬢さんを私に接近させようとしているながら、同時に私に警戒を加えているのは矛盾のようだけれども、その警戒を加える時に、片方の態度を忘れるのでも翻すのでも何でもなく、やはり依然として二人を接近させたがっていたのだと観察したのです。ただ自分が正当と認める程度以上に、二人が密着するのを忌むのだと解釈したのです。お嬢さんに対して、肉の方面から近づく念の萌さなかった私は、その時入らぬ心配だと思いました。しかし奥さんを悪く思う気はそれから無くなりました。

一、奥さんの想い

さて、奥さんの「想い」であるが、軍人の未亡人である奥さんという人は、当然のことながら、これからの「人生」をどうしたらよいかを考えていたかと思うが、その場合、軍人の未亡人であるので、奥さん自身が「再婚」するということは、当時としては、なかなか考えにくかっただろう。だとすれば、自分の「娘」(お嬢さん)が、一体、どのような男性と「結婚」するのが、まさに「最大の関心事」であったことは、容易に想像できることである。——例えば、その「相手の男性」が「長男」であれば、当然のことながら、自分の「娘」(お嬢さん)を「嫁」に出さなければならぬ。それでは、自分(奥さん)は、いわば「独り暮らし」(独りぼっち)になってしまふ。出来ることならば、「婿」を迎えて、まさに「三人で暮らせるような生活」というものを望んでいただろう。もちろん、「相手の男性」の「……家柄、家族構成、年齢、人柄、学歴、職種、才能、社会的地位、収入、その他」、それらを含めて「候補者選び」を行なうことになるだろうが、しかし、何よりも大事なことは、相手の男性がどういう性格の「男性」であり、また、自分の「娘」(お嬢さん)が「心の底から相手を好きになれるかどうか」であり、さらに大事なことは、若し、「三人で生活した場合、果たしてうまくやっていけるかどうか」ということである。そのような奥さんの「条件」にぴったりと合っていたのが、まさに「先生」(当時は大学生)という人であったということである。

十五、奥さんの態度と先生の心模様

「……私は奥さんの態度を色々総合して見て、私がこの家で充分信用されている事を確かめました。しかもその信用は初対面の時からあったのだという証拠さえ発見しました。他を疑り始めた私の胸には、この発見が少し奇異なくらいに響いたのです。私は男に比べる女の方がそれだけ直覚に富んでいるのだらうと思いました。同時に、女が男のために、欺されるのもここにあるのではなからうかと思いました。奥さんをそう観察する私が、お嬢さんに対して同じような直覚を強く働かせていたのだから、今考えるところとおかしいのです。私は他を信じないと心に誓いながら、絶対にお嬢さんを信じていたのですから。それ

でいて、私を信じている奥さんを奇異に思ったのですから。

私は郷里の事について余り多くを語らなかつたのです。ことに今度の事件については何も言わなかつたのです。私はそれを念頭に浮べてさえすでに一種の不愉快を感じました。私はなるべく奥さんの方の話だけを聞こうと力めました。ところがそれでは向うが承知しません。何かに付けて、私の国元の事情を知りたがるのです。私はとうとう何もかも話してしまいました。私は二度と国へは帰らない。帰っても何にもない、あるのはただ父と母の墓ばかりだと告げた時、奥さんは大変感動したらしい様子を見せました。お嬢さんは泣きました。私は話して好い事をしたと思えました。私は嬉しかったのです。

私のすべてを聞いた奥さんは、はたして自分の直覚が的中したと言わないばかりの顔をし出しました。それから私は私を自分の親戚に当る若いものか何かを取り扱うように待遇するのです。私は腹も立ちませんでした。むしろ愉快に感じたくらいです。ところがそのうちに私の猜疑心がまた起つて来ました。

私が奥さんを疑り始めたのは、ごく些細な事からでした。しかしその些細な事を重ねて行くうちに、疑惑は段々と根を張つて来ます。私はどういう拍子かふと奥さんが、叔父と同じような意味で、お嬢さんを私に接近させようと力めるのではないかと考え出したのです。すると今まで親切に見えた人が、急に狡猾な策略家として私の眼に映じて来たのです。私は苦々しい唇を噛みました。

奥さんは最初から、無人で淋しいから、客を置いて世話をするのだと公言していました。私もそれを嘘とは思いませんでした。懇意になつて色々打ち明け話を聞いた後でも、そこに間違いはなかつたように思われます。しかし一般の経済状態は大して豊かだという程ではありませんでした。利害問題から考えてみて、私と特殊の關係をつけるのは、先方に取つて決して損ではなかつたのです。

私はまた警戒を加えました。けれども娘に対して前言った位の強い愛をもっている私が、その母に対していくら警戒を加えたつて何になるでしょう。私は一人で自分を嘲笑しました。馬鹿だと言つて、自分を罵つた事もあります。しかしそれだけの矛盾ならいくら馬鹿でも私は大した苦痛も感ぜずに済んだのです。私の煩悶は、奥さんと同じようにお嬢さんも策略家ではなからうかという疑問に会つて始めて起るのです。二人が私の背後で打ち合せをした上、万事をやっているのだらうと思つと、私は急に苦しくつて堪らなくなるのです。不愉快なではありません。絶体絶命のような行き詰まつた心持になるのです。それでいて私は、一方にお嬢さんを固く信じて疑わなかつたのです。だから私は信念と迷いの途中に立つて、少しも動く事が出来なくなつてしまいました。私にはどつちも想像であり、またどつちも真実であつたのです。(本文)

*

*

さて、「……私は奥さんの態度を色々綜合して見て、私がこの家で充分信用されてい

る事を確かめました。しかもその信用は初対面の時からあつたのだという証拠さえ発見しました。他を疑り始めた私の胸には、この発見が少し奇異なくらいに響いたのです。私は男に比べると女の方がそれだけ直覚に富んでいるのだらうと思ひました。同時に、女が男のために、欺されるのもここにあるのではなからうかと思ひました。奥さんをそう観察する私が、お嬢さんに対して同じような直覚を強く働かせていたのだから、今考えるとおかしいのです。私は他を信じないと心に誓ひながら、絶対にお嬢さんを信じていたのです

から（それが恋心であり、心から好きになると、誰が何と言おうと相手を手を信じたくなるのである）。それでいて、私を信じている奥さんを奇異に思ったのですから。

私は郷里の事について余り多くを語らなかつたのです。ことに今度の事件（叔父の件）については何も言わなかつたのです。私はそれを念頭に浮べてさえずで一種の不愉快を感じました。私はなるべく奥さんの方の話だけを聞こうと力めました。ところがそれでは向うが承知しません。——奥さんは、「……何かに付けて、私の国元の事情を知りたがるのです。私はとうとう何もかも話してしまいました。私は二度と国へは帰らない。帰っても何にもない、あるのはただ父と母の墓ばかりだと告げた時、奥さんは大変感動したらしい様子を見せました。お嬢さんは泣きました。私は話して好い事をしたと思ひました。私のすべてを聞いた奥さんは、はたして自分の直覚が的中したといわんばかりの顔をしました。それから私は私を自分の親戚に当る若いものか何かを取り扱うように待遇するのです。私は腹も立ちませんでした。むしろ愉快に感じたくらいでした」とある。

これらは、いったい何を意味するのかと問えば、それは、軍人の未亡人の奥さんにしてみれば、いわゆる「先生」（當時は大学生）を自分の「娘」（お嬢さん）の「花婿」として迎えて、まさに「三人で暮らす」には最適な「家庭状況」だったということである。——逆に、例えば、両親が健在で、先生が「長男」（一人息子）であれば、当然のことながら、自分の「娘」（お嬢さん）は、どうしても「花嫁」として嫁がせなければならぬことになる。そうなれば、軍人の未亡人の奥さんという人は、まさに「独り暮らし」（つまり独りぼっち）になってしまうのである。

ところが、そのうちに私の猜疑心（疑う心）がまた起つて来ました。私が奥さんを疑り始めたのは、ごく些細な事からでした。しかしその些細な事を重ねて行くうちに、疑惑は段々と根を張つて来ます。私はどういふ拍子かふと奥さんが、叔父と同じような意味で、お嬢さんを私に接近させようと力めるのではないかと考え出したのです。すると今まで親切に見えた人が、急に狡猾な策略家（お金目当て）として私の眼に映じて来たのです。私は苦々しい唇を噛みました。——奥さんは最初から、無人で淋しいから、客を置いて世話をすのだと公言していました。私もそれを嘘とは思いませんでした。懇意になつて色々打ち明け話を聞いた後でも、そこに間違いはなかつたように思われます。しかし一般の経済状態は大して豊かだという程ではありませんでした。利害問題から考えてみて、私と「特殊の關係」を付けるのは、先方に取つて決して損ではなかつたのです。

私はまた警戒を加えました。けれども娘に対して前言った位の強い愛をもっている私が、その母に対していくら警戒を加えたつて何になるでしょう。私は一人で自分を嘲笑しました。馬鹿だと言つて、自分を罵つた事もあります。しかしそれだけの矛盾ならいくら馬鹿でも私は大した苦痛も感ぜずに済んだのです。私の煩悶は、奥さんと同じようにお嬢さんも策略家（お金目当て）ではなからうかという疑問に会つて初めて起るのです。二人が私の背後で打ち合せをした上、万事をやっているのだらうと思つくと、私は急に苦しくつて堪らなくなるのです。不愉快なのではありません。絶体絶命のような行き詰まった心持になるのです。それでいて私は、一方にお嬢さんを固く信じて疑わなかつたのです。だから私は信念と迷いの途中に立つて、少しも動く事が出来なくなつてしまいました。私にはどつちも想像であり、またどつちも眞実であつたのです。

十六、茶の間かお嬢さんの室(へや)で男の声がすると……

「……私は相変らず学校へ出席していました。しかし教壇に立つ人の講義が、遠くの方で聞こえるような心持がしました。勉強もその通りでした。眼の中へ這入る活字は心の底まで浸み渡らないうちに烟のごとく消えて行くのです。私はその上無口になりました。それを二、三の友達が誤解して、冥想に耽(ふけ)ってでもいるかのように、他の友達に伝えました。私はこの誤解を解こうとはしませんでした。都合の好い仮面を人が貸してくれたのを、却(かえ)って仕合として喜びました。それでも時々は気が済まなかったのでしょうか、発作的に焦燥(はしや)ぎ廻(まわ)って彼らを驚かした事もあります。

私の宿は人出入りの少ない家でした。親類も多くはないようでした。お嬢さんの学校友達がときたま遊びに来る事はありませんでしたが、極めて小さな声で、居るのだから居ないのだから分らないような話をして帰ってしまうのが常でした。それが私に対する遠慮からだとは、いかな私にも気が付きませんでした。私の所へ訪ねて来るものは、大した乱暴者でもありませんでしたけれども、宅の人に気兼(きがね)をするほどの男は一人もなかったのですから。そんなところになると、下宿人の私は主人のようなもので、肝心のお嬢さんが却(かえ)って食客(いせうろう)の位地にいたと同じ事です。

しかしこれはただ思い出した序(ついで)に書いただけで、実はどうでも構わない点です。ただ其所(そこ)にどうでもよくない事が一つあったのです。茶の間か、さもなければお嬢さんの室(へや)で、突然男の声が聞こえるのです。その声がまた私の客と違って、頗る低いのです。だから何を話しているのかまるで分らないのです。そうして分らなければ分らないほど、私の神経に一種の昂奮(こうふん)を与えるのです。私は坐(すわ)っていて変にいらいらし出します。私はあれは親類なのだろうか、それとも唯(ただ)の知り合いなのだろうかとまず考えて見るのです。それから若い男だろうか年輩の人だろうかと思案(しあん)して見るのです。坐(すわ)っていてそんな事の知れよう筈(はず)がありません。そうかと言って、起(た)って行って障子(しょうじ)を開けて見る訳には猶(なほ)行きません。

私の神経は震(ふる)えるというよりも、大きな波動を打って私を苦しめます。私は客の帰った後で、きつと忘れずにその人の名を聞きました。お嬢さんや奥さんの返事は、また極めて簡単でした。私は物足りない顔を二人に見せながら、物足りるまで追窮(ついきゆう)する勇氣をもつていなかったのです。権利は無論もつていなかったのでしょうか。私は自分の品格を重んじなければならぬという教育から来た自尊心と、現にその自尊心を裏切(うらみきり)している物欲(ぶつよく)しそうな顔付(かおつき)とを同時に彼らの前に示すのです。彼らは笑いました。それが嘲笑(ちやうしやう)の意味でなくって、好意から来たものか、また好意らしく見せるつもりなのか、私は即坐(すわ)に解釈の余地を見出し得ないほど落付(おちつき)を失ってしまうのです。そうして事が済んだ後で、いつまでも、馬鹿にされたのだ、馬鹿にされたんじゃないやなかるうかと、何遍(なんべん)も心のうちで繰り返すのです。

私は自由な身体(からだ)でした。たとい学校を中途で已(や)めようが、またどこへ行つてどう暮らそうが、或(ある)はこの何者と結婚しようが、誰(だれ)とも相談する必要のない位地に立っていました。私は思い切つて奥さんにお嬢さんを貰(もら)い受ける話をして見ようかという決心をした事がそれまでに何度となくありました。けれどもその度毎(たびごと)に私は躊躇(ちゆうちよ)して、口へはとうとう出さずにしまったのです。断られるのが恐ろしいからではありません。もし断られたら、私の運命がどう変化するか分りませんけれども、その代り今までは方角の違った場所に立って、新しい世の中を見渡す便宜も生じて来るのですから、そのくらいの勇氣は出せば

出せたのです。しかし私は誘き寄せられるのが厭でした。他の手に乗るのは何よりも業腹でした。叔父に欺された私は、これから先どんな事があっても、人には欺されまいと決心したのです。(本文)

*

*

さて、「……私は相変わらず学校へ出席していました。しかし教壇に立つ人の講義が、遠くの方で聞こえるような心持がしました。勉強もその通りでした。眼の中へ這入る活字は心の底まで浸み渡らないうちに烟のごとく消えて行くのです。(それは外のことに気を取られてゐるからである)。私はその上無口になりました。それを二、三の友達が誤解して、冥想に耽つてもゐるかのよう、他の友達に伝えました。私はこの誤解を解こうとはしませんでした。都合の好い仮面を人が貸してくれたのを、却つて仕合として喜びました。それでも時々気が済まなかつたのでしよう、発作的に焦燥ぎ廻つて彼らを驚かした事もあります。(これはお嬢さんのことばかりを考えていたということである。)

私の宿は人出入りの少ない家でした。親類も多くはないようでした。お嬢さんの学校友達がときたま遊びに来る事はありましたが、極めて小さな声で、居るのだから居ないのだから分らないような話をして帰ってしまうのが常でした。それが私に対する遠慮(気遣い)からだとは、いかな私にも気が付きませんでした。私の所へ訪ねて来るものは、大した乱暴者でもありませんでしたけれども、宅の人に気兼ねをするほどな男は一人もなかつたのですから。そんなところになると、下宿人の私は主人のようなもので、肝心のお嬢さんが却つて食客の位地にいたと同じ事です。(つまり、お嬢さんが友達と小さな声でしゃべるのは、何も自的にそうしているのではなく、母親から先生の「勉強の邪魔」にならないようにと言われているのであり、だからこそ、下宿人の私は主人のようなもので、肝心のお嬢さんが却つて食客の位地にいたと同じ事になるのです。)

しかしこれはただ思い出した序でに書いただけで、実はどうでも構わない点です。ただ其所にどうでもよくない事が一つあつたのです。茶の間か、さもなければお嬢さんの室で、突然男の声が聞こえるのです。その声がまた私の客と違つて、頗る低いのです。だから何を話しているのかまるで分らないのです。そうして分らなければ分らないほど、私の神経に一種の昂奮を与えるのです。私は坐つていて変にいらいらし出します。私はあれは親類なのだろうか、それとも唯の知り合いなのだろうかとまず考えて見るのです。それから若い男だろうか年輩の人だろうかと思案してみるのです。坐つていてそんな事の知れよう筈がありません。そうかと言つて、起つて行つて障子を開けて見る訳には猶行きません。私の神経は震えるというよりも、大きな波動を打つて私を苦しめます。私は客の帰つた後で、きつと忘れずにその人の名を聞きました。お嬢さんや奥さんの返事は、また極めて簡単でした。私は物足りない顔を二人に見せながら、物足りるまで追窮する勇氣をもつていなかったのです。権利は無論もつていなかったのでしょうか。私は自分の品格を重んじなければならぬという教育から来た自尊心と、現にその自尊心を裏切つてゐる物欲しそうな顔付とを同時に彼らの前に示すのです。彼らは笑いました。それが嘲笑の意味でなくつて、好意から来たものか、また好意らしく見せるつもりなのか、私は即坐に解釈の余地を見出し得ないほど落付を失つてしまふのです。そうして事が済んだ後で、いつまでも、馬鹿にされたのだ、馬鹿にされたんじゃないやなからうかと、何遍も心のうちで繰り返すのです。(これがまさに恋に深く陥つてゐる時の「嫉妬心」というものであり、誰もが経験するこ

となるが、例えば、恋する女が外の男と親しげに話をしている姿などを見ると、自分でも自分がコントロール出来ないほどの凄まじいまでの嫉妬心に襲われてしまうものであり、それは女性の場合でも全く同じことになるのである。

私は自由な身体でした。たとい学校を中途で已めようが、またどこへ行つてどう暮らそうが、或はこの何者と結婚しようが、誰とも相談する必要のない位地に立っていました。私は思い切つて奥さんにお嬢さんを貰い受ける話をして見ようかという決心をした事がそれまでに何度となくありました。けれどもその度毎に私は躊躇して、口へはどうとう出さずにしまつたのです。断られるのが恐ろしいからではありません。もし断られたら、私の運命がどう変化するか分りませんけれども、その代り今までとは方角の違つた場所に立つて、新しい世の中を見渡す便宜も生じて来るのですから、そのくらいの勇氣は出せば出せたのです。しかし私は誘き寄せられるのが厭でした。他の手に乗るのは何よりも業腹でした。叔父に欺された私は、これから先どんな事があつても、人には欺されまいと決心したのです。(この「……他の手に乗るのは何よりも業腹《厭》であつた。叔父に欺された私は、これから先どんな事があつても、人には欺されまいと決心したのです、この一つの「トラウマ」が、先生の正常の判断を先生の人生を狂わせることになるのです。)

十七、三人で着物を買ひに出る

「……私が書物ばかり買うのを見て、奥さんは少し着物を拵えろと言いました。私は實際田舎で織つた木綿ものしかもつていなかったのです。その頃の学生は絹の入つた着物を肌に着けませんでした。私の友達に横浜の商人か何かで、宅はなかなか派出所に暮しているものがありました。其所へある時羽二重の胴着が配達で届いた事があります。すると皆ながそれを見て笑いました。その男は恥ずかしがつて色々弁解しましたが、折角の胴着を行李の底へ放り込んで利用しないのです。それをまた大勢が寄つてたかつて、わざと着せました。すると運悪くその胴着に蝨がたかりました。友達は丁度幸いとも思つたのでしよう、評判の胴着をぐるぐる丸めて、散歩に出たついでに、根津の大きな泥溝の中へ棄ててしまいました。その時いっしょに歩いていた私は、橋の上に立つて笑いながら友達の所作を眺めていました。私の胸のどこにも勿体ないという気は少しも起りませんでした。その頃から見ると私も大分大人になっていました。けれどもまだ自分で余所行の着物を拵えろという程の分別は出なかつたのです。私は卒業して髻を生やす時代が来なければ、服装の心配などはするに及ばないものだといふ変な考えをもつていたのです。それで奥さんに書物は要るが着物は要らないと言いました。奥さんは私の買う書物の分量を知っていました。買った本をみんな読むのかと聞くのです。私の買うものの中には字引きもありますが、当然眼を通すべき筈でありながら、頁さえ切つてないのも多少あつたのですから、私は返事に窮しました。私はどうせ要らないものを買うなら、書物でも衣服でも同じだといふ事に気が付きました。その上私は色々世話になるという口実の下に、お嬢さんの気に入るような帯か反物を買つてやりたかつたのです。それで万事を奥さんに依頼しました。奥さんは自分一人で行くとは言いません。私にもいっしょに来いと命令するのです。お嬢さんも行かなくてはいけないと言うのです。今と違つた空気の中に育てられた私どもは、学生の身分として、あまり若い女などといっしょに歩き廻る習慣をもつていなかったもの

です。その頃の私は今よりもまだ習慣の奴隷でしたから、多少躊躇しましたが、思い切って出掛けました。

お嬢さんは大層着飾っていました。地体が色の白い癖に、白粉を豊富に塗ったものだからなお目立ちます。往來の人がじろじろ見て行くのです。そうしてお嬢さんを見たものはきつとその視線をひるがえして、私の顔を見るのだから、変なものでした。

三人は日本橋へ行って買いたいものを買いました。買う間にも色々気が変わるので、思ったより暇がかかりました。奥さんはわざわざ私の名を呼んでどうだろうと相談をします。時々反物をお嬢さんの肩から胸へ豎に宛てておいて、私に二、三步遠退いて見てくださいと言うのです。私はその度毎に、それは駄目だとか、それはよく似合うとか、とにかく一人前の口を聞きました。

こんな事で時間が掛って帰りは夕飯の時刻になりました。奥さんは私に対するお札に何かご馳走すると言って、木原店という寄席のある狭い横丁へ私を連れ込みました。横丁も狭いが、飯を食わせる家も狭いものでした。この辺の地理を一向心得ない私は、奥さんの知識に驚いたくらいです。

我々は夜に入って家へ帰りました。その翌日は日曜でしたから、私は終日室の中に閉じ籠っていました。月曜になって、学校へ出ると、私は朝っぱらそうそう級友の一人から調戲われました。何時妻を迎えたのかと言ってわざとらしく聞かれるのです。それから私の細君は非常に美人だと言って賞めるのです。私は三人連で日本橋へ出掛けたところを、その男に何処かで見られたものと見えます。(本文)

*

*

さて、「……私が書物ばかり買うのを見て、奥さんは少し着物を拵えろと言いました。私は実際田舎で織った木綿ものしかもっていなかったのです。その頃の学生は絹の入った着物を肌に着けませんでした。私の友達に横浜の商人か何かで、宅はなかなか派出に暮しているものがありました。其所へある時羽二重の胴着が配達で届いた事があります。すると皆ながそれを見て笑いました。その男は恥ずかしくて色々弁解しましたが、折角の胴着を行李の底へ放り込んで利用しないのです。それをまた大勢が寄ってたかって、わざと着せました。すると運悪くその胴着に蝨がたかりました。友達は丁度幸いとも思ったのでしよう、評判の胴着をぐるぐると丸めて、散歩に出たついでに、根津の大きな泥溝の中へ棄ててしまいました。その時いっしょに歩いていた私は、橋の上に立って笑いながら友達の所作を眺めていましたが、私の胸のどこにも勿体ないという気は少しも起りませんでしたとある。

まず、明治時代、大学生《書生》の姿は、例えば、三四郎の袴姿などが一般的だったかと思うが、そこに「羽二重の胴着」となれば、それは、いわば「高級なもの」になり、それゆえ、みんながそれを見て笑い出し、また、大勢が寄ってたかって、面白がって、わざと着せたりしたとある。一方、女性の場合、袴姿は、明治四年頃から女学塾長や教授などが用い、十一年には女学校の「女学生」たちが「紫の袴」をつけ、三十三年頃から「行灯袴」という中仕切りのないスカートのような袴（女袴）が誕生して、それがやがて制服となり、華族女学校などでは「海老茶色」を用いたとある。そして、女学校に通っていたこの作品のお嬢さんなども、まさに髪にリボンを付けた「典型的な袴姿」（女学生スタイル）をしていたのである。ちなみに、近世（主に江戸時代の）の武士たちは、

「馬乗り袴」(中が二股に分かれている袴)をつけて、それは馬に乗りやすいようになつていたそうであるが、今日の「男袴」では、「馬乗り袴」と「行灯袴」の両方があり、例えば、茶道、弓道、剣道、書道、生け花、冠婚葬祭、芸能、その他、それぞれの用途に応じて、使い分けているということである。

その頃から見ると私も大分大人になっていました。けれどもまだ自分で余所行の着物を拵えるという程の分別は出なかつたのです。私は卒業して髻を生やす時代が来なければ、服装の心配などはするに及ばないものだといふ変な考えをもっていたのです。それで奥さんに書物は要るが着物は要らないと言いました。奥さんは私の買う書物の分量を知っていました。買った本をみんな読むのかと聞くのです。私の買うものの中には字引きもありますが、当然眼を通すべき筈でありながら、頁さえ切つてないのも多少あつたのですから、私は返事に窮しました。私はどうせ要らないものを買うなら、書物でも衣服でも同じだといふ事に気が付きました。その上私は色々世話になるといふ口実の下に、お嬢さんの気に入るような帯か反物を買つてやりたかつたのです。それで万事を奥さんに依頼しました。

奥さんは自分一人で行くとは言いません。私にもいっしょに来いと命令するのです。お嬢さんも行かなくてはいけないと言ふのです。今と違つた空気の中に育てられた私どもは、学生の身分として、あまり若い女などいっしょに歩き廻る習慣をもつていなかったものです。その頃の私は今よりもまだ習慣の奴隷でしたから、多少躊躇しましたが、思い切つて出掛けました。(奥さんは、いったい何を考へているのだろうか？ それは先生とお嬢さんとの關係を「より強く結びつけ」ようとしているのである。)

お嬢さんは大層着飾っていました。地体が色の白い癖に、白粉を豊富に塗つたものだからなお目立ちます。往來の人がじろじろ見て行くのです。そうしてお嬢さんを見たものはきつとその視線をひるがえして、私の顔を見るのだから、変なものでした。

三人は日本橋へ行つて買いたいものを買いました。買う間にも色々気が変わるので、思つたより暇がかかりました。奥さんはわざわざ私の名を呼んでどうだろうと相談をします。時々反物をお嬢さんの肩から胸へ堅に宛てておいて、私に二、三步遠退いて見てくれると言ふのです。私はその度毎に、それは駄目だとか、それはよく似合うとか、とにかく一人前の口を聞きました。(例えば、お嬢さんが自分の気に入つたものをただ買うのではなく、先生見立ての、先生が好む、これがお嬢さんに一番似合うというものを選んで買うことにより、お嬢さんは、先生お気に入り反物を手に入れ、それをやがて着物として着ることになり、お嬢さんにとっては一生の宝物《想い出》になるのである。)

こんな事で時間が掛つて帰りは夕飯の時刻になりました。奥さんは私に対するお札に何かご馳走すると言つて、木原店という寄席のある狭い横丁へ私を連れ込みました。横丁も狭いが、飯を食わせる家も狭いものでした。この辺の地理を一向心得ない私は、奥さんの知識に驚いたくらいです。(これは、通りががりの店ではなく、奥さんの行きつけの店であり、しかも、奥さんのお気に入り、の店でもあるのだらう。)

我々は夜に入つて家へ帰りました。その翌日は日曜でしたから、私は終日室の中に閉じ籠つていました。月曜になつて、学校へ出ると、私は朝っぱらそうそう級友の一人から調戲われました。何時妻を迎へたのかと言つてわざとらしく聞かれるのです。それから私の細君は非常に美人だと言つて賞めるのです。私は三人連で日本橋へ出掛けたところを、その男に何処かで見られたものと見えますとある。

まず、今と違つた、空気のの中に育てられた私どもは、学生の身分として、あまり若い女などといつしよに歩き廻る習慣をもっていなかつたものです。そういう中で、お嬢さんは大層着飾っていました。地体が色の白い癖に、白粉を豊富に塗つたものだからなお目立ちました。往來の人がじろじろ見て行くのです。(これは余程の美人であり)、そうしてお嬢さんを見たものはきつとその視線をひるがえして、私の顔を見るのだから、変なものでしたとある。それは、この「美人」の相手がこの「男性」なのかという感じで見ているのである。そして、月曜になつて、学校へ出ると、私は朝つばらそうそう級友の一人から調戲われました。何時妻を迎えたのかと言つてわざとらしく聞かれるのです。それから私の細君は非常に美人だと言つて賞めるのです。私は三人連で日本橋へ出掛けたところを、その男に何処かで見られたものと見えますとある。

さて、此所までは、まさに「理想的な展開」であり、それゆえ、このまま二人が結婚していたら、恐らく、この上もない「幸せな夫婦」になれたかも知れない。しかし、それは、「小説」にはならないのです。「小説」になるためには、何らかの「問題」が生じなければならぬ、それがこれからの内容になつていくのである。

十八、奥さんとお嬢さんの気持ち

「……私は宅へ帰つて奥さんとお嬢さんにその話をしました。奥さんは笑いました。しかし定めて迷惑だろうと言つて私の顔を見ました。私はその時腹のなかで、男はこんな風にして、女から氣を引いて見られるのかと思ひました。奥さんの眼は充分私にそう思わせるだけの意味をもつていたのです。私はその時自分の考へてゐる通りを直截に打ち明けてしまえば好かつたかも知れません。しかし私にはもう狐疑という薩張しない塊がこびり付いていました。私は打ち明けようとして、ひよいと留まりました。そうして話の角度を故意に少し外らしました。

私は肝心の自分というものを問題の中から引き抜いてしまいました。そうしてお嬢さんの結婚について、奥さんの意中を探つたのです。奥さんは二、三そういう話のないでもないような事を、明らかに私に告げました。しかしまだ学校へ出ているくらいで年が若いから、こちらではさほど急がないのだと説明しました。奥さんは口へは出さないけれども、お嬢さんの容色に大分重きを置いてゐるらしく見えました。極めようと思へばいつでも極められるんだからというような事さえ口外しました。それからお嬢さんより外に子供がないのも、容易に手離したがる源因になつていました。嫁にやるか、贅を取るか、それにさえ迷つてゐるのではなからうかと思はれるところもありました。

話してゐるうちに、私は色々の知識を奥さんから得たような気がしました。しかしそれがために、私は機会を逸したと同様の結果に陥つてしまいました。私は自分について、ついに一言も口を開く事が出来ませんでした。私は好い加減なところで話を切り上げて、自分の室へ帰ろうとしました。

さつきまで傍にいて、あんまりだわとか何とか言つて笑つたお嬢さんは、何時の間にか向うの隅に行つて、背中をこつちへ向けていました。私は立とうとして振り返つた時、その後姿を見たのです。後姿だけで人間の心が読めるはずはありません。お嬢さんがこの問題についてどう考へてゐるか、私には見当が付きませんでした。お嬢さんは戸棚を前

にして坐すわっていました。その戸棚しやくの一尺ばかり開あいている隙間すきまから、お嬢お嬢さんは何か引き出して膝ひざの上へ置いて眺ながめているらしかったのです。私の眼はその隙間はじの端おとこに、一昨日買った反物たんものを見付け出しました。私の着物もお嬢お嬢さんのものと同じ戸棚とだなの隅すみに重ねてあったのです。

私が何とも言わずに席を立ち掛けると、奥おくさんは急に改かまった調子てうしになって、私にどう思うかと聞くのです。その聞き方は何をどう思うのかと反問はんもんしなければ解わからないほど不意ふいでした。それがお嬢お嬢さんを早く片付けた方が得策とくさくだろうかという意味だと判然はつきりした時、私はなるべく緩ゆるくならな方が言いだろうと答えました。奥おくさんは自分もそう思うと言いいました。

奥おくさんとお嬢お嬢さんと私の関係がこうなっている所へ、もう一人男が入り込まなければならぬ事になりました。その男がこの家庭の一員となった結果は、私の運命に非常な変化を来きたしています。もしその男が私の生活の行路こうろを横切らなかつたならば、恐らくこういう長いものをあなたに書き残す必要も起らなかつたでしょう。私は手もなく、魔の通る前に立って、その瞬間の影に一生を薄暗くされて気が付かずにいたのと同じ事です。自白すると、私は自分でその男を宅うちへ引張ひくって来たのです。無論奥おくさんの許諾きょだくも必要です。私は最初何もかも隠かくさず打ち明けて、奥おくさんに頼たのんだのです。ところが奥おくさんは止よせと言いいました。私には連れて来なければ済まない事情が充分あるのに、止よせという奥おくさんの方には、筋の立つた理屈はまるでなかつたのです。だから私は私の善よいと思うところを強しいて断行だんぎやうしてしまいました。(本文)

*

*

さて、「……私は宅うちへ帰かえって奥おくさんとお嬢お嬢さんにその話をしました。奥おくさんは笑わらいました。しかし定めて迷惑めいわくだろうと言いって私の顔を見ました。私はその時腹はらのなかで、男おとこはこんな風ふうにして、女おんなから気を引ひいて見られるのかと思おもいました。奥おくさんの眼は充分私わたしにそう思おもわせるだけの意味をもっていたのです。私はその時自分の考かんがえている通とほりを直截ちやくせつに打ち明けてしまえば好よかったかも知れません。(むろんその通りであるが)、しかし私にはもう狐疑こぎ(疑ぎつてためらう)という薩張さつぱりしない塊かたまりがこびり付ついていました。私は打ち明あけようとして、ひよいと留とどまりました。そうして話の角度を故意こぎに少し外そらしました。

私は肝心かんじんの自分というものを問題の中から引き抜ひいてしまいました。そうしてお嬢お嬢さんの結婚けっこんについて、奥おくさんの意中いぢゆうを探たづねたのです。奥おくさんは二、三という話のないでもないような事を、明らかに私に告つげました。しかしまだ学校へ出でているくらいで年が若いから、こちらではさほど急いそがないのだと説明せつめいしました。奥おくさんは口へは出でさないけれども、お嬢お嬢さんの容色ようしきに大分重おもきを置おいているらしく見みえました。極きめようと思おもえばいつでも極きめられるんだからというような事ことさえ口外くちがいしました。それからお嬢お嬢さんより外ほかに子供こどもがないのも、容易ゆいに手離てりしたがない源因げんいんになつていました。嫁よめにやるか、簪むすを取るか、それにさえ迷まよっているのではなからうかと思おもわれるところもありました。(これは先生が気付かないだけで、奥おくさんは「三人で暮くらす」ことをすすでに考かんがえていたのである。)

話わしているうちに、私は色々の知識ちしきを奥おくさんから得えたような気がしました。しかしそれがために、私は機会きかいを逸いしたと同様の結果けつこに陥おちつてしまいました。私は自分について、ついに一言いちごんも口を開ひらく事が出来できませんでした。私は好いい加減かげんなところで話を切り上げて、自分の室むろへ帰かえろうとしました。

さつきまで傍そばにいて、あんまりだわとか何とか言いって笑わらったお嬢お嬢さんは、何時いつの間にか

向うの隅に行つて、背中をこつちへ向けていました。私は立とうとして振り返つた時、その後姿を見たのです。後姿だけで人間の心が読めるはずはありません。お嬢さんがこの問題についてどう考えているか、私には見当が付きませんでした。お嬢さんは戸棚を前にして坐つていました。その戸棚の一尺ばかり開いている隙間から、お嬢さんは何か引き出して膝の上へ置いて眺めているらしかったのです。私の眼はその隙間の端に、一昨日買った反物を見付け出しました。私の着物もお嬢さんののも同じ戸棚の隅に重ねてあったのです。(お嬢さんは、先生と結婚することを「心の中」ではすでに強く望んでいたのです。それを知っている奥さんは、次のような問いかけを敢えて先生にするのです。)

それは、私が何とも言わずに席を立ち掛けると、奥さんは急に改まった調子になつて、「私にどう思うか」と聞くのです。(これはむしろお嬢さんのことをどう思うかと聞いているのであるが)、その聞き方は何をどう思うのかと反問しなければ解らないほど不意でした。それがお嬢さんを早く片付けた方が得策だろうかという意味だと判然した時、私はなるべく緩くいな方が言いだろうと答えました。奥さんは自分もそう思うと言いました。(しかし、この場面は、(先生と)娘の結婚は早い方がよいか遅い方がよいかと訊いているのであり、しかも、奥さんがぜひとも聞きたかつたのは、先生の「本心」であり、娘のことをどう思っているのか、もし好きならば、結婚してもよいと思つていのかどうか、そこがぜひとも知りたかつたのであるが、それを直接(露骨に)聞くことはさすがに避けたということである。)

奥さんとお嬢さんと私の関係がこうなつていゝる所へ、もう一人男が入り込まなければならぬ事になりました。その男がこの家庭の一員となつた結果は、私の運命に非常な変化を来しています。もしその男が私の生活の行路を横切らなかつたならば、恐らくこういう長いものをあなたに書き残す必要も起らなかつたでしょう。私は手もなく、魔の通る前に立つて、その瞬間の影に一生を薄暗くされて気が付かずにいたのと同じ事です。自白すると、私は自分でその男を宅へ引張つて来たのです。無論奥さんの許諾も必要ですから、私は最初何もかも隠さず打ち明けて、奥さんに頼んだのです。ところが奥さんは止せと言いました。私には連れて来なければ済まない事情が充分あるのに、止せという奥さんの方には、筋の立つた理屈はまるでなかつたのです。だから私は私の善いと思うところを強いて断行してしまいました。(ここで最も大事な言葉は、「止せ」という奥さんの言葉であり、もし「その通りに止して」いたら、何の問題も起こらずに済んだのである。しかし、それではむしろ「小説」にはならない。それゆえ、「小説」になるためには、どうしても何らかの「問題」が生じる必要があり、それがこれからの作品(内容)の新たな展開部分になるのである。

*

*

十九、Kという親友の登場

十九、Kという親友の登場

「……私はその友達の名をここにKと呼んでおきます。私はこのKと小供の時から仲好でした。小供の時からと言えば断らないでも解っているでしょう、二人には同郷の縁故があったのです。Kは真宗の坊さんの子でした。もつとも長男ではありません、次男でした。それである医者の方へ養子にやられたのです。私の生れた地方は大変本願寺派の勢力の強い所でしたから、真宗の坊さんは他のものに比べると、物質的に割が良かったようです。一例を挙げると、もし坊さんに女の子があつて、その女の子が年頃になつたとすると、檀家のものが相談して、どこか適当な所へ嫁にやってくれます。無論費用は坊さんの懐から出るものではありません。そんな訳で真宗寺は大抵有福でした。

Kの生れた家も相応に暮らしていたのです。しかし次男を東京へ修業に出すほどの余力があつたかどうか知りません。また修業に出られる便宜があるので、養子の相談が纏まつたものかどうか、そこも私には分りません。とにかくKは医者の方へ養子に行つたのです。それは私たちがまだ中学にいる時の事でした。私は教場で先生が名簿を呼ぶ時に、Kの姓が急に変つていたので驚いたのを今でも記憶しています。

Kの養子先もかなりな財産家でした。Kはそこから学資を貰つて東京へ出て来たのです。出て来たのは私といつしよでなかつたけれども、東京へ着いてからは、すぐ同じ下宿に入りました。その時分は一つ室によく二人も三人も机を並べて寝起したものです。Kと私も二人で同じ間にいました。山で生捕られた動物が、檻の中で抱き合いながら、外を覗めるようなものでしたろう。二人は東京と東京の人を畏れました。それでいて六畳の間の中では、天下を睥睨するような事を言つていたのです。

しかし我々は真面目でした。我々は實際偉くなるつもりでいたのです。ことにKは強かつたのです。寺に生れた彼は、常に精進という言葉を使いました。そうして彼の行為動作は悉くこの精進の一語で形容されるように、私には見えたのです。私は心のうちで常にKを畏敬していました。

Kは中学にいた頃から、宗教とか哲学とかいうむずかしい問題で、私を困らせました。これは彼の父の感化なのか、または自分の生れた家、即ち寺という一種特別な建物に属する空気の影響なのか、解りません。ともかくも彼は普通の坊さんよりは遥かに坊さんらしい性格をもつていたように見受けられます。元来Kの養家では彼を医者にするつもりで東京へ出したのです。しかるに頑固な彼は医者にはならない決心をもつて、東京へ出て来たのです。私は彼に向つて、それでは養父母を欺くと同じ事ではないかと詰りました。大胆な彼はそうだと答えるのです。道のためなら、その位の事をして構わないというのです。その時彼の用いた道という言葉は、恐らく彼にもよく解つていなかったでしょう。私は無論解つたとは言えません。しかし年の若い私たちには、この漠然とした言葉が尊と響いたのです。よし解らないにしても気高い心持に支配されて、そちらの方へ動いて行くこうとする意気組に卑しいところの見える筈はありません。私はKの説に賛成しました。私の同意がKに取つてどの位有力であつたか、それは私も知りません。一凶な彼は、たとい私がいくら反対しようとも、やはり自分の思い通りを貫いたに違ひなからうとは察せられます。しかし万一の場合、賛成の声援を与えた私に、多少の責任が出来てくる位の事は、子供ながら私はよく承知していたつもりです。よしその時にそれだけの覚悟がない

にしても、成人した眼で、過去を振り返る必要が起った場合には、私に割り当てられただけの責任は、私の方で帯びるのが至当になる位な語気で私は賛成したのです。(本文)

*

*

さて、「……私はその友達の名をここにKと呼んでおきます。私はこのKと小供の時から仲好でした。小供の時からと言えば断らないでも解っているでしょう、二人には同郷(新潟)の縁故があったのです。Kは真宗の坊さんの子でした。もつとも長男ではありません、次男でした。それである医者(の)所へ養子にやられたのです。私の生れた地方は大変本願寺派の勢力の強い所でしたから、真宗の坊さんは他のものに比べると、物質的に割が好かったようです。一例を挙げると、もし坊さんに女の子があつて、その女の子が年頃になったとすると、檀家のものが相談して、どこか適当な所へ嫁にやってくれます。無論費用は坊さんの懐から出るではありません。そんな訳で真宗寺は大抵有福でした。

Kの生れた家も相応に暮らしていたのです。しかし次男を東京へ修業に出すほどの余力があつたかどうか知りません。また修業に出られる便宜があるので、養子の相談が纏まつたものかどうか、そこも私には分かりません。とにかくKは医者(の)家へ養子に行ったのです。それは私たちがまだ中学にいる時の事でした。私は教場で先生が名簿を呼ぶ時に、Kの姓が急に變つていたので驚いたのを今でも記憶しています。

Kの養子先もかなりな財産家でした。Kはそこから学資を貰つて東京へ出て来たのです。出て来たのは私といつしよでなかつたけれども、東京へ着いてからは、すぐ同じ下宿に入りました。(この時は高校時代で)、その時分は一つ室によく二人も三人も机を並べて寝起したものです。Kと私も二人で同じ間にいました。山で生捕られた動物が、檻の中で抱き合いながら、外を覗めるようなものでしたろう。二人は東京と東京の人を畏れました。それでいて六畳の間の中では、天下を睥睨するような事を言っていたのです。

しかし我々は真面目でした。我々は實際偉くなるつもりでいたのです。ことにKは強かつたのです。寺に生れた彼は、常に精進という言葉を使いました。そうして彼の行為動作は悉くこの精進の一語で形容されるように、私には見えたのです。私は心のうちで常にKを畏敬していました。

Kは中学にいた頃から、宗教とか哲学とかいうむずかしい問題で、私を困らせました。これは彼の父の感化なのか、または自分の生れた家、即ち寺という一種特別な建物に属する空気の影響なのか、解りません。ともかくも彼は普通の坊さんよりは遙かに坊さんらしい性格をもっていたように見受けられます。元来Kの養家では彼を医者にするつもりで東京へ出したのです。しかるに頑固な彼は医者にはならない決心をもって、東京へ出て来たのです。私は彼に向つて、それでは養父母を欺くと同じ事ではないかと詰りました。大胆な彼はそうだと答えるのです。道のためなら、その位の事をして構わないというのです。その時彼の用いた道という言葉は、恐らく彼にもよく解つていなかったでしょう。私は無論解つたとは言えません。しかし年の若い私たちには、この漠然とした言葉が尊と響いたのです。よし解らないにしても気高い心持に支配されて、そちらの方へ動いて行くこうとする意気組に卑しいところの見える筈はありません。私はKの説に賛成しました。私の同意がKに取つてどの位有力であつたか、それは私も知りません。一凶な彼は、たとい私がいくら反対しようとも、やはり自分の思い通りを貫いたに違ひなからうとは察せられません。しかし万一の場合、賛成の声援を与えた私に、多少の責任が出来てくる位の

事は、子供ながら私はよく承知していたつもりです。よしその時にそれだけの覚悟がないにしても、成人した眼で、過去を振り返る必要が起った場合には、私に割り当てられただけの責任は、私の方で帯びるのが至当になる位な語気で私は賛成したのです。

*

*

さて、先生とKという人は、高校時代は、同じ下宿屋の六畳に一緒に暮らしていたらしく、その後、その下宿を離れて、先生（当時は大学生）という人は、軍人の未亡人とそのお嬢さんそれに一人の下女が住む家に下宿するようになるが、その結果として、未亡人の奥さんとお嬢さんとも親しくなれたとともに、そのお嬢さんのことが好きになっていくが、そのことをなかなか言い出せずにいたわけである。——その頃、子供の頃からの親友であった「K」という人物が、大学生であった「先生」と同じ「家」に下宿することになるが、その「K」という人物は、もともとはお寺の子であったが、中学の頃、養子として、医師の家にもらわれて行き、大学では「医学」を専攻するように言われていたが、それを守らなかつたので、養子縁組みは取り消され、また、実家からも勘当されて、行き場がなくなり、親友である「先生」が未亡人の奥さんに事情を説明すると、最初は、だめだと反対されるが、結局は、同じ「家」に下宿するようになるのである。そして、恐らく、未亡人の奥さんも「心の中」では密かに心配していたことだろうと思うが、（それが「止せ」という言葉であるが）、やがて、親友である「K」という人も、お嬢さんのことが好きになり、いわば「三角関係」の問題が発生するという「展開」（内容）になっていくのである。

二十、Kの三年間（高校）の夏休みの過ごし方

「……Kと私は同じ科へ入学しました。Kは澄ました顔をして、養家から送ってくれる金で、自分の好きな道を歩き出したのです。知れはしないという安心と、知れたって構うものかという度胸とが、二つながらKの心にあつたものと見るよりほか仕方ありません。Kは私よりも平気でした。

最初の夏休みにKは国へ帰りませんでした。駒込のある寺の一間を借りて勉強するのだと言っていました。私が帰って来たのは九月上旬でしたが、彼ははたして大観音の傍の汚い寺の中に閉じ籠っていました。彼の座敷は本堂のすぐ傍の狭い室でしたが、彼はそこで自分の思う通りに勉強が出来たのを喜んでいるらしく見えました。私はその時彼の生活の段々坊さんらしくなつて行くのを認めたように思います。彼は手頸に珠数を懸けていました。私がそれは何のためだと尋ねたら、彼は親指で一つ二つと勘定する真似をして見せました。彼はこうして日に何遍も珠数の輪を勘定するらしかったのです。ただしその意味は私には解りません。円い輪になつているものを一粒ずつ数えて行けば、どこまで数えて行つても終局はありません。Kはどんな所でどんな心持がして、爪繰る手を留めたでしょう。詰らない事ですが、私はよくそれを思うのです。

私はまた彼の室に聖書を見ました。私はそれまでにお経の名を度々彼の口から聞いた覚えがありますが、基督教については、問われた事も答えられた例もなかつたのですから、一寸驚きました。私はその理由を訊ねずにはいられませんでした。Kは理由はないと言いました。これほど人の有難がる書物なら読んで見るのが当たり前だろうとも言いました。

その上彼は機会があったら、『コーラン』も読んで見るつもりだと言いました。彼はモハメッドと剣という言葉に大いなる興味をもっているようでした。

二年目の夏に彼は国から催促を受けてようやく帰りました。帰っても専門の事は何にも言わなかったものと見えます。家でもまたそこに気が付かなかったのです。あなたは学校教育を受けた人だから、こういう消息をよく解しているでしょうが、世間は学生の生活だの、学校の規則だのに関して、驚くべく無知なものです。我々に何でもない事が一向外部へは通じていません。我々はまた比較的内部的な空気ばかり吸っているのです、校内の事は細大ともに世の中に知れ渡っている筈だと思ひ過ぎる癖があります。Kはその点にかけて、私より世間を知っていたのでしよう、澄ました顔でまた戻って来ました。国を立つ時は私もいつしよでしたから、汽車へ乗るや否やすぐどうだったとKに問いました。Kはどうでもなかったと答えたのです。

三度目の夏は丁度私が永久に父母の墳墓の地を去ろうと決心した年です。私はその時Kに帰国を勧めましたが、Kは応じませんでした。そう毎年家へ帰って何をするのだというのです。彼はまた踏み留まって勉強するつもりらしかったのです。私は仕方なしに一人で東京を立つ事にしました。私の郷里で暮らしたその二カ月間が、私の運命にとって、いかに波瀾に富んだものかは、前に書いた通りですから繰り返しません。私は不平と幽鬱と孤独の淋しさを一つ胸に抱いて、九月に入ってまたKに逢いました。すると彼の運命もまた私と同様に変調を示していました。彼は私の知らないうちに、養家先へ手紙を出して、此方から自分の詐を白状してしまつたのです。彼は最初からその覚悟でいたのだそうです。今更仕方がないから、お前の好きなものをやるより外に途はあるまいと、向うに言わせるつもりもあつたのでしようか。とにかく大学へ入ってまでも養父母を欺き通す気はなかつたらしいのです。また欺こうとしても、そう長く続くものではないと見抜いたのかも知れません。(本文)

*

*

さて、「……Kと私は同じ科へ入学しました。Kは澄ました顔をして、養家から送ってくる金で、自分の好きな道を歩き出したのです。知れはしないという安心と、知れたつて構うものかという度胸とが、二つながらKの心にあつたものと見るよりほか仕方がありません。Kは私よりも平気でした」とある。(先ず、高校であるので、恐らく、普通科になるかと思う。ここで最も大事なことは、普通科であれば、養父母に知られる心配はない。ただ、Kという人は、この高校の時から、養父母が希望する「大学の医学部」へは行かないと決めていて、自分の好きな道(学業)へと歩き出していたのである。)

最初の夏休みにKは国へ帰りませんでした。駒込のある寺の一間を借りて勉強するのだと言っていました。私が帰って来たのは九月上旬でしたが、彼ははたして大観音の傍の汚い寺の中に閉じ籠っていました。彼の座敷は本堂のすぐ傍の狭い室でしたが、彼はそこで自分の思う通りに勉強が出来たのを喜んでいるらしく見えました。私はその時彼の生活の段々坊さんらしくなつて行くのを認めたように思います。彼は手頸に珠数を懸けていました。私がそれは何のためだと尋ねたら、彼は親指で一つ二つと勘定する真似をして見せました。彼はこうして日に何遍も珠数の輪を勘定するらしかったのです。ただしその意味は私には解りません。円い輪になつているものを一粒ずつ数えて行けば、どこまで数えて行つても終局はありません。Kはどんな所でどんな心持がして、爪繰る手を留めたでしよう。

詰らない事ですが、私はよくそれを思うのです。(本来、数珠はお経を読んだ回数数を数える道具であるが、Kという人が一体何を数えていたかは誰にも解りようがない。むしろ手に数珠を持つてることが何か安心や手慰めになつていたのかも知れない。)

私はまた彼の室に聖書を見ました。私はそれまでにお経の名を度々彼の口から聞いた覚えがありますが、基督教については、問われた事も答えられた例もなかったのですから、一寸驚きました。私はその理由を訊ねずにはいられませんでした。Kは理由はないと言いました。これほど人の有難がる書物なら読んで見るのが当り前だろうとも言いました。その上彼は機会があつたら、『コーラン』も読んで見るつもりだと言いました。彼はモハメッドと剣という言葉に大なる興味をもっているようでした。(これは、Kという人は、宗教や哲学などへの向上心がより強かつたということになるのだろう。)

二年目の夏に彼は国から催促を受けてようやく帰りました。帰つても専門の事は何にも言わなかつたものと見えます。家でもまたそこに気が付かなかつたのです。あなたは学校教育を受けた人だから、こういう消息をよく解しているでしょうが、世間は学生の生活だの、学校の規則だのに関して、驚くべく無知なものです。我々に何でもない事が一向外部へは通じていません。我々はまた比較的内部的な空気ばかり吸っているのです。校内の事は細大ともに世の中に知れ渡っている筈だと思ひ過ぎる癖があります。Kはその点にかけて、私より世間を知っていたのでしよう、澄ました顔でまた戻つて来ました。国を立つ時は私もいつしよでしたから、汽車へ乗るや否やすぐどうだったとKに問いました。Kはどうでもなかつたと答えたのです。(これは、今日でも、世間は一般に学生の生活や学校の規則の詳細などについては、驚くほど無知であることが多いのだろう。)

三度目の夏は丁度私が永久に父母の墳墓の地を去ろうと決心した年です。私はその時Kに帰国を勧めましたが、Kは応じませんでした。そう毎年家へ帰つて何をするのだというのです。彼はまた踏み留まつて勉強するつもりらしかつたのです。私は仕方なしに一人で東京を立つ事にしました。私の郷里で暮らしたその二カ月間が、私の運命にとつて、いかに波瀾に富んだものかは、前に書いた通りですから繰り返しません。私は不平と幽鬱と孤独の淋しさを一つ胸に抱いて、九月に入つてまたKに逢いました。すると彼の運命もまた私と同様に、変調を示していました。彼は私の知らないうちに、養父先へ手紙を出して、此方から自分の詐を白状してしまつたのです。彼は最初からその覚悟でいたのださうです。今更仕方がないから、お前の好きなものをやるより外に途はあるまいと、向うに言わせるつもりもあつたのでしようか。とにかく大学へ入つて、までも養父母を欺き通す気はなかつたらしいのです。また欺こうとしても、そう長く続くものではないと見抜いたのかも知れません。(これは、大学の入学の時に、医学部かそうでないかはすぐ分かつてしまふものであり、だからこそ、その前に、養父母へ手紙を出しているのである。そして、最悪の場合、養子縁組が破綻した場合でも、「自力」で(何か仕事をして)学費を稼いで、でも、大学へは行く覚悟でいたということである。)

二十一、Kの養子縁組の破綻

「……Kの手紙を見た養父は大変怒りました。親を騙すような不埒なものに学資を送る事は出来ないという厳しい返事をすぐ寄こしたのです。Kはそれを私に見せました。Kは

またそれと前後して実家から受け取った書翰も見せました。これにも前に劣らないほど厳しい詰責の言葉がありました。養家先へ対して済まないという義理が加わっているからでもありませんが、こつちでも一切構わないと書いてありました。Kがこの事件のために復籍してしまうか、それとも他に妥協の道を講じて、依然養家に留まるか、そこはこれから起る問題として、差し当りどうかしなければならぬのは、月々に必要な学資でした。

私はその点についてKに何か考えがあるのかと尋ねました。Kは夜学校の教師でもするつもりだと答えました。その時分は今に比べると、存外世の中が寛ろいでいましたから、内職の口はあなたが考えるほど拵底でもなかったのです。私はKがそれで充分やっけて行くだろうと考えました。しかし私には私の責任があります。Kが養家の希望に背いて、自分の行きたい道を行こうとした時、賛成したものは私です。私はそうかと言って手を拱いでいる訳に行きません。私はその場で物質的の補助をすぐ申し出しました。するとKは一も二もなくそれを跳ね付けました。彼の性格から言って、自活の方が友達達の保護の下に立つより遙かに快よく思われたのでしよう。彼は大学へ這入った以上、自分一人ぐらいどうか出来なければ男でないような事を言いました。私は私の責任を完うするために、Kの感情を傷つけるに忍びませんでした。それで彼の思う通りにさせて、私は手を引きました。

Kは自分の望むような口を程なく探し出しました。しかし時間を惜しむ彼にとつて、この仕事かどのくらい辛かったかは想像するまでもない事です。彼は今まで通り勉強の手をちつとも緩めずに、新しい荷を背負って猛進したのです。私は彼の健康を気遣いました。しかし剛気な彼は笑うだけで、少しも私の注意に取り合いませんでした。

同時に彼と養家との関係は、段々こん絡がつて来ました。時間に余裕のなくなった彼は、前のように私と話す機会を奪われたので、私はついにその顛末を詳しく聞かずにしまいました。したが、解決のますます困難になつて行く事だけは承知していました。人が仲に入って調停を試みた事も知っていました。その人は手紙でKに帰国を促したのですが、Kは到底駄目だと言って、応じませんでした。この剛情なところが、——Kは学年中で帰れないのだから仕方がないと言いましたけれども、向うから見れば剛情でしょう。そこが事態をますます険悪にしたようにも見えました。彼は養家の感情を害すると共に、実家の怒りも買うようになりました。私が心配して双方を融和するために手紙を書いた時は、もう何の効果もありませんでした。私の手紙は一言の返事さえ受けずに葬られてしまったのです。私も腹が立ちました。今までも行掛り上、Kに同情していた私は、それ以後は理否を度外に置いてKの味方をする気になりました。

最後にKはどうとう復籍に決しました。養家から出してもらった学資は、実家で弁償する事になったのです。その代り実家の方でも構わないから、これからは勝手にしろというのです。昔の言葉で言えば、まあ勘当なのでしょう。或はそれほど強いものでなかったかも知れませんが、当人はそう解釈していました。Kは母のない男でした。彼の性格の一面は、たしかに継母に育てられた結果とも見る事が出来るようです。もし彼の実の母が生きていたら、或は彼と実家との関係に、こうまで隔りが出来ずに済んだかも知れないと思います。彼の父は言うまでもなく僧侶でした。けれども義理堅い点において、むしろ武士に似たところがありませんかと疑われます。(本文)

*

*

さて、「……Kの手紙を見た養父は大変怒りました。親を騙すような不埒なものに学資を送る事は出来ないという厳しい返事をすぐ寄こしたのです。Kはそれを私に見せました。Kはまたそれと前後して実家から受け取った書翰も見せました。これにも前に劣らないほど厳しい詰責の言葉がありました。養家先へ対して済まないという義理が加わっているからでもありませんが、こっちでも一切構わないと書いてありました。Kがこの事件のために復讐してしまうか、それとも他に妥協の道を講じて、依然養家に留まるか、そこはこれから起る問題として、差し当りどうかしななければならぬのは、月々に必要な学資でし「とある。(差し当り必要なものは、月々に必要な学資と生活費になるのである。)

私はその点についてKに何か考えがあるのかと尋ねました。Kは夜学校の教師でもするつもりだと答えました。その時分は今に比べると、存外世の中が寛ろいでいましたから、内職の口はあなたが考えるほど払底(全く無い)でもなかったのです。私はKがそれで充分やっけて行けるだろうと考えました。しかし私には私の責任があります。Kが養家の希望に背いて、自分の行きたい道を行こうとした時、賛成したものは私です。私はそうかと言って手を拱いている訳に行きません。私はその場で物質的の補助(お金の援助)をすぐ申し出しました。するとKは二も三もなくそれを跳ね付けました。彼の性格から言って、自活の方が友達達の保護の下に立つより遙かに快よく思われたのでしよう。彼は大学へ這入った以上、自分一人ぐらいか出来なければ男でないような事を言っていました。私は私の責任を完うするために、Kの感情を傷つけるに忍びませんでした。それで彼の思う通りにさせて、私は手を引きました。(つまり、Kという人は、高校さえ卒業出来れば、あとの大学は自力で何とかなると考えていたのである。だからこそ、彼は大学へ這入った以上、自分一人ぐらいか出来なければ男でないような事を言っているのである。)

そして、Kは自分の望むような口を程なく探し出しました。しかし時間を惜しむ彼にとって、この仕事がどのくらい辛かったかは想像するまでもない事です。彼は今まで通り勉強の手をちつとも緩めずに、新しい荷を背負って猛進したのです。私は彼の健康を気遣いました。しかし剛氣な彼は笑うだけで、少しも私の注意に取り合いませんでした。

同時に彼と養家との関係は、段々こん絡がつて来ました。時間に余裕のなくなった彼は、前のように私と話す機会を奪われたので、私はついにその顛末を詳しく聞かずにしまいました。したが、解決のますます困難になつて行く事だけは承知していました。人が仲に入つて調停を試みた事も知っていました。その人は手紙でKに帰国を促したのですが、Kは到底駄目だと言って、応じませんでした。この剛情なところが、——Kは学年中で帰れないのだから仕方がないと言いましたけれども、向うから見れば剛情でしょう。そこが事態をますます険悪にしたようにも見えました。彼は養家の感情を害すると共に、実家の怒りも買うようになりました。私が心配して双方を融和するために手紙を書いた時は、もう何の効果もありませんでした。私の手紙は一言の返事さえ受けずに葬られてしまったのです。私も腹が立ちました。今までも行掛り上、Kに同情していた私は、それ以後は理否を度外に置いてKの味方をする気になりました。(これは、先生の勝手な思い入れであり、この勝手な思い入れが、Kという人を何が何でも自分の下宿先へと引き入れてしまい、その結果、いわば三角関係が生じて、深く悩み苦しむことにもなるのである。)

最後にKはどうとう復讐に決しました。養家から出してもらった学資は、実家で弁償する事になったのです。その代り実家の方でも構わないから、これからは勝手にしろという

のです。昔の言葉で言えば、まあ勘当かんとうなのでしょう。或はそれほど強いものでなかったかも知れませんが、当人はそう解釈していました。Kは母のない男でした。彼の性格の一面は、たしかに継母けいぼに育てられた結果とも見る事が出来るようです。もし彼の実の母が生きていたら、或は彼と実家との関係に、こうまで隔りへだたが出来ずに済んだかも知れないと私は思うのです。彼の父は言うまでもなく僧侶そうりよでした。けれども義理堅い点において、むしろ武士さむらいに似たところがありませんか？と疑われます。

さて、ここで最も大事な言葉は、「……Kは母のない男でした。彼の性格の一面は、たしかに継母けいぼに育てられた結果とも見る事が出来るようです。もし彼の実の母が生きていたら、或は彼と実家との関係に、こうまで隔りへだたが出来ずに済んだかも知れないと私は思うのです」とあり、Kという人の実の母親は、すでに死んでいて、二番目の母親（継母けいぼ）との仲は、（恐らく）あまりよくなかったからこそ、養子やしこに出されたとも言えるのである。というのも、Kという人の実家（お寺）では、生活には全く困っていなかったからである。むしろ「継母けいぼ」との確執（不仲ふなか）から、Kという人は、養子やしこに出されたとも言えるのである、実の父親は、実の息子（K）より「継母けいぼ」の方を選んだということで、Kという人は、自分は実の父親に捨てられたという意識を持っていたかも知れないのである。だからこそ、自力じりきで生きるという意識が非常に強くなったのかも知れない。この問題は、あとで改めて考えてみたいと思う。

二十二、先生の下宿先に同居するまでの経緯

「……Kの事件が一段落あとついた後で、私は彼の姉の夫から長い封書を受け取りました。Kの養子に行った先は、この人の親類に当るのですから、彼を周旋した時にも、彼を復讐ふくしゅうさせた時にも、この人の意見が重きをなしていたのだと、Kは私に話して聞かせました。

手紙にはその後Kがどうしているか知らせてくれと書いてありました。姉が心配しているから、なるべく早く返事を貰もらいたいという依頼も付け加えてありました。Kは寺を嗣ついでいだ兄あによりも、他家へ縁ゆかりづいたこの姉を好すっていました。彼らはみんな一つ腹はらから生れた姉弟きょうだいですけれども、この姉とKとの間には大分年齒としの差があつたのです。それでKの小供こどもの時分には、継母まははよりもこの姉の方が、却かえつて本當の母らしく見えたのでしよう。

私はKに手紙を見せました。Kは何とも言いませんでしたけれども、自分の所へこの姉から同じような意味の書状が二、三度来たという事を打ち明けたけれども、自分の度たぎに心配するに及ばないと答えてやったのだそうです。運悪くこの姉は生活に余裕のない家に片付いたために、いくらKに同情があつても、物質的に弟をどうしてやる訳にも行かなかつたのです。

私はKと同じような返事を彼の義兄宛あてで出しました。その中に、万一の場合には私がどうでもするから、安心するようにという意味を強い言葉で書き現あらわしました。これは固もとより私の一存いちぞんでした。Kの行先ゆくさきを心配するこの姉に安心を与えようという好意は無む論含もまれていましたが、私を輕蔑けいべつしたとより外ほかに取りようのない彼の実家や養家ようかに対する意地もあつたのです。

Kの復讐ふくしゅうしたのは一年生の時でした。それから二年生の中頃なかごろになるまで、約一年半の間、彼は独力おので己れを支えて行つたのです。ところがこの過度の労力が次第に彼の健康と精神

の上に影響して来たように見え出しました。それには無論養家を出る出ないの蒼蠅の問題も手伝っていたでしょう。彼は段々感傷的になつて来たのです。時によると、自分だけが世の中の不幸を一人で背負つて立つているような事を言います。そうしてそれを打ち消せばすぐ激するのです。それから自分の未来に横たわる光明が、次第に彼の眼を遠退いて行くようにも思つて、いらいらするのです。学問をやり始めた時には、誰しも偉大な抱負をもつて、新しい旅に上るのが常ですが、一年と立ち二年と過ぎ、もう卒業も間近になると、急に自分の足の運びの鈍いのに気が付いて、過半はそこで失望するのが当り前になつていきますから、Kの場合も同じなのですが、彼の焦慮り方はまた普通に比べると遙かに甚しかったです。私はついに彼の気分を落ち付けるのが専一だと考えました。

私は彼に向つて、余計な仕事をするのは止せと言いました。そうして自分身体を楽にして、遊ぶ方が大きな将来のために得策だと忠告しました。剛情なKの事ですから、容易に私の言う事などは聞くまいと、かねて予期していたのですが、實際言い出して見ると、思つたよりも説き落すのに骨が折れたので弱りました。Kはただ学問が自分の目的ではないと主張するのです。意志の力を養つて強い人になるのが自分の考えだと言うのです。それにはなるべく窮屈な境遇にいらなくてはならないと結論するのです。普通の人から見れば、まるで酔興です。その上窮屈な境遇にいる彼の意志は、ちつとも強くなつていないのです。彼はむしろ神経衰弱に罹っている位なのです。私は仕方がないから、彼に向つて至極同感であるような様子を見せました。自分もそういう点に向つて、人生を進むつもりだったとついに明言しました。(もつともこれは私に取つてまんざら空虚な言葉でもなかったのです。Kの説を聞いてみると、段々そういうところに釣り込まれて来るくらい、彼には力があつたのですから)。最後に私はKといつしよに住んで、いつしよに向上の路を辿つて行きたいと発議しました。私は彼の剛情を折り曲げるために、彼の前に跪く事を敢てしたのです。そうして漸との事で彼を私の家に連れて来ました。(本文)

*

*

さて、「……Kの事件が一段落ついた後で、私は彼の姉の夫から長い封書を受け取りました。Kの養子に行った先は、この人の親類に当るのですから、彼を周旋した時にも、彼を復籍させた時にも、この人の意見が重きをなしていたのだと、Kは私に話して聞かせました。(つまり、Kという人が養子に出された医師の家というのは、実は、Kという人の姉が嫁いだ相手(その夫)の親戚先でもあつたということである。)

手紙にはその後Kがどうしているか知らせてくれと書いてありました。姉が心配しているから、なるべく早く返事を貰いたいという依頼も付け加えてありました。Kは寺を嗣いだ兄よりも、他家へ縁づいたこの姉を好いていました。彼らはみんな一つ腹から生れた姉弟ですけれども、この姉とKとの間には大分年齒の差があつたのです。それでKの小供の時分には、継母よりもこの姉の方が、却つて本當の母らしく見えたのでしよう。(この「……継母よりもこの姉の方が、却つて本當の母らしく見えたのでしよう」という、この言葉こそは、まさに「継母」との「確執」(不仲)を裏付ける言葉にもなるのである。)

私はKに手紙を見せました。Kは何とも言いませんでしたけれども、自分の所へこの姉から同じような意味の書状が二、三度来たという事を打ち明けました。Kはその度に心配するに及ばないと答えてやったのだそうです。運悪くこの姉は生活に余裕のない家に片付いたために、いくらKに同情があつても、物質的に弟をどうしてやる訳にも行かなかつた

のです。(つまり、Kの姉は、Kへの金銭的援助をしたくても出来ない生活状況にあった。それでは、なぜここに敢えてKの姉が出て来るのかと問えば、それは、素朴な疑問として、先生が好んでKの面倒などを見なくても、外に誰か兄弟か親戚の人の中でKの金銭的面倒を見られる人もいたのではないかという、その様な疑問を払拭するためのものである。) 私はKと同じような返事を彼の義兄宛で出しました。その中に、万一の場合には私がどうでもするから、安心するようにという意味を強い言葉で書き現わしました。これは固より私の一存でした。Kの行先を心配するこの姉に安心を与えようという好意は無論含まれていましたが、私を軽蔑したとより外に取りようのない彼の実家や養家に対する意地もあつたのです。(この章で書かれている一連のことが、結局、先生がどうしてもKの面倒を見るしかなかったという大きな理由付けになつているのである。)

Kの復籍したのは一年生の時でした。それから二年生の中頃になるまで、約一年半の間、彼は独力で己れを支えて行つたのです。ところがこの過度の労力が次第に彼の健康と精神の上に影響して来たように見え出しました。それには無論養家を出る出来ない蒼蠅の問題も手伝つていたでしょう。彼は段々感傷的になつて来たのです。時によると、自分だけが世の中の不幸を一人で背負つて立っているような事を言います。そうしてそれを打ち消せばすぐ激するのです。それから自分の未来に横たわる光明が、次第に彼の眼を遠退いて行くようにも思つて、いらいらするのです。学問をやり始めた時には、誰しも偉大な抱負をもつて、新しい旅に上るのが常ですが、一年と立ち二年と過ぎ、もう卒業も間近になると、急に自分の足の運びの鈍いのに気が付いて、過半はそこで失望するのが当たり前なつていきますから、Kの場合も同じなのですが、彼の焦慮り方はまた普通に比べると遙かに甚しかったです。私はついに彼の気分を落ち付けるのが専一だと考えました。

私は彼に向つて、余計な仕事をするのは止せと言いました。そうして当分身体を楽にして、遊ぶ方が大きな将来のために得策だと忠告しました。剛情なKの事ですから、容易に私の言う事などは聞かまいと、かねて予期していたのですが、実際言い出して見ると、思ったよりも説き落すのに骨が折れたので弱りました。Kはただ学問が自分の目的ではないと主張するのです。意志の力を養つて強い人になるのが自分の考えだと言ふのです。それにはなるべく窮屈な境遇にいななくてはならないと結論するのです。普通の人から見れば、まるで酔興です。その上窮屈な境遇にいる彼の意志は、ちつとも強くなつていないのです。彼はむしろ神経衰弱に罹っている位なのです。私は仕方がないから、彼に向つて至極同感であるような様子を見せました。自分もそういう点に向つて、人生を進むつもりだつたとついに明言しました。(もつともこれは私に取つてまんざら空虚な言葉でもなかつたのです。Kの説を聞いてみると、段々そういうところに釣り込まれて来るくらい、彼には力があつたのですから)。最後に私はKといつしよに住んで、いつしよに向上の路を辿つて行きたいと発議しました。私は彼の剛情を折り曲げるために、彼の前に跪く事を敢てしたのです。そうして漸との事で彼を私の家に連れて来ました。

さて、ここで気になる文章は、「……Kの復籍したのは一年生の時でした。それから二年生の中頃になるまで、約一年半の間、彼は独力で己れを支えていた」とある。これは、一体、何を意味するのかと問えば、それは、次のようなことである。――まず、高校三年間は、二人は、同じ下宿屋の六畳で一緒に生活をしていた。ところが、大学に入ると、先生という人は、未亡人の奥さんとお嬢さんそれに一人の下女のいる下宿屋へと移ることに

なり、やがてお嬢さんのことが好きになっていく。この期間、(先生一人の下宿は)、大学一年から大学二年半までの間であり、一方、Kは、先生と離れ、独力で己れを^{おの}支えていたとある。ところが、例の「養子縁組み破綻」と「実家との不和(勘当)」同然の状態となり、その結果として、先生とKという人は、大学二年の中頃(恐らく一、二月頃)から一緒に住み始めるようになり、その年の「夏休み」(二年生の終わり)は、二人で房州の方へ旅をし、帰って来ると、いよいよ九月から「新学期」(大学三年生)が始まり、二人とも学業に励むことになる。翌年の正月には、歌留多遊びなどをしたりするが、すでにKという人もお嬢さんのことが好きになっていて、先生とお嬢さんそれにKとの「三角関係」もより深まって行くという展開であるが、ただ、お嬢さんは、Kが自分に好意を寄せているという事は、全く全然知らないという展開になるのである。

*

*

二十三、Kが四疊の室に移り住む

二十三、Kが四畳の室に移り住む

「……私の座敷には控えの間というような四畳が付属していました。玄関を上つて私のいる所へ通ろうとするには、ぜひこの四畳を横切らなければならぬのだから、実用の点から見ると、至極不便な室でした。私は此所へKを入れたのです。もともと最初は同じ八畳に二つ机を並べて、次の間を共有にして置く考えだったのですが、Kは狭苦しくつても一人でいる方が好いと言つて、自分でそつちのほうを択んだのです。

前にも話した通り、奥さんは私のこの所置に対して始めは不賛成だったのです。下宿屋ならば、一人より二人が便利だし、二人より三人が得になるけれども、商売でないのだから、なるべくなら止した方が好いと言つたのです。私が決して世話の焼ける人でないから構うまいと言つと、世話は焼けないでも、気心の知れない人は厭だと答えるのです。それでは今厄介になつてゐる私だつて同じ事ではないかと詰ると、私の気心は初めからよく分つてゐると弁解して已まないので。私は苦笑しました。すると奥さんはまた理屈の方向を更えます。そんな人を連れて来るのは、私のために悪いから止せと言ひ直します。なぜ私のために悪いかと聞くと、今度は向うで苦笑するのです。

実を言つと私だつて強いてKといつしよにゐる必要はなかつたのです。けれども月々の費用を金の形で彼の前に並べて見せると、彼はきつとそれを受け取る時に躊躇するだろふと思つたのです。彼はそれほど独立心の強い男でした。だから私は彼を私の宅へ置いて、二人前の食料を彼の知らない間にそつと奥さんの手に渡そうとしたのです。しかし私はKの経済問題について、一言も奥さんに打ち明ける気はありませんでした。

私はただKの健康について云々しました。一人で置くこととますます人間が偏屈になるばかりだからと言ひました。それに付け足して、Kが養家と折合の悪かつた事や、実家と離れてしまつた事や、色々話して聞かせました。私は溺れかかつた人を抱いて、自分の熱を向うに移してやる覚悟で、Kを引き取るのだと告げました。そのつもりであつたか、面倒を見てやつてくれと、奥さんにもお嬢さんにも頼みました。私はここまで来て漸々奥さんを説き伏せたのです。しかし私から何にも聞かないKは、この顛末をまるで知らずにいました。私も却つてそれを満足に思つて、のっそり引き移つて来たKを、知らん顔で迎えました。

奥さんとお嬢さんは、親切に彼の荷物を片付ける世話や何かをしてくれました。凡てそれを私に対する好意から来たのだと解釈した私は、心のうちで喜びました。——Kが相変らずむつちりした様子をしてゐるにもかかわらず。

私がKに向つて新しい住居の心持はどうだと聞いた時に、彼はただ一言悪くないと言つただけでした。私から言わせれば悪くないどころではないのです。彼の今までの所は北向きの湿っぽい臭いのする汚い室でした。食物も室相応に粗末でした。私の家へ引き移つた彼は、幽谷から喬木に移つた趣があつたくらいです。それをさほどに思う気色を見せないのは、一つは彼の強情から來てゐるのですが、一つは彼の主張からも出てゐるのです。仏教の教義で養われた彼は、衣食住についてとかくの贅沢を言うのをあたかも不道德のよゝうに考へてゐました。なまじい昔の高僧だとか聖徒だとかの伝を読んだ彼には、ややともすると精神と肉体とを切り離したがる癖がありました。肉を鞭撻すれば靈の光輝が増すよゝうに感ずる場合さえあつたのかも知れませんが。

私はなるべく彼に逆らわぬ方針を取りました。私は水を日向へ出して溶かす工夫をしたのです。今に融けて温かい水になれば、自分で自分に気が付く時機が来るに違いないと思つたのです。(本文)

*

*

さて、「……私の座敷には控えの間というような四畳が付属していました。玄関を上つて私のいる所へ通ろうとするには、ぜひこの四畳を横切らなければならぬのだから、実用の点から見ると、至極不便な室でした。私は此所へKを入れたのです。もつとも最初は同じ八畳に二つ机を並べて、次の間を共有にして置く考えだったので、Kは狭苦しくつても一人でいる方が好いと言って、自分でそつちのほうを扱んだのです。

前にも話した通り、奥さんは私のこの所置に対して始めは不賛成だったので、下宿屋ならば、一人より二人が便利だし、二人より三人が得になるけれども、商売でないのだから、なるべくなら止した方が好いと言うのです。私が決して世話の焼ける人でないから構うまいと言うと、世話は焼けないでも、気心の知れない人は厭だと答えるのです。それでは今厄介になつてゐる私だつて同じ事ではないかと詰ると、私の気心は初めからよく分つてゐると弁解して已まないので、私は苦笑しました。すると奥さんはまた理屈の方向を更えます。そんな人を連れて来るのは、私のために悪いから止せと言ひ直します。なぜ私のために悪いかと聞くと、今度は向うで苦笑するのです。(この苦笑は、奥さんにしてみれば、なぜ「……私の気持ちに分らないのか?」という苦笑なのである。)

つまり、奥さんの「想い」は、ただ一つ、先生という人が大学を無事に卒業して何らかの職業に就いた頃合いを見て、先生とお嬢さんとがめでたく結婚をして、この家で三人で暮らすことを夢見てゐるのである。そこに何でわけの分からない他人などを入れて問題を起す必要があるのか? 奥さんが強く反対するのはあたり前のことであり、そこ(つまりなぜそこまで反対するのか?)に気付かない先生の方が余程おかしいのである。

実を言うと私だつて強いてKといつしよにゐる必要はなかつたのです。けれども月々の費用を金の形で彼の前に並べて見せると、彼はきつとそれを受け取る時に躊躇するだろうと思つたのです。彼はそれほど独立心の強い男でした。だから私は彼を私の宅へ置いて、二人前の食料を彼の知らない間にそつと奥さんの手に渡そうとしたのです。しかし私はKの経済問題について、一言も奥さんに打ち明ける気はありませんでした。

私はただKの健康について云々しました。一人で置くこととますます人間が偏屈になるばかりだからと言ひました。それに付け足して、Kが養家と折合の悪かつた事や、実家と離れてしまつた事や、色々話して聞かせました。私は溺れかかつた人を抱いて、自分の熱を向うに移してやる覚悟で、Kを引き取るのだと告げました。そのつもりであつたか、面倒を見てやつてくれと、奥さんにもお嬢さんにも頼みました。私はここまで来て漸々奥さんを説き伏せたのです。しかし私から何にも聞かないKは、この顛末をまるで知らずにいました。私も却つてそれを満足に思つて、のっそり引き移つて来たKを、知らん顔で迎えました。(例えば、「善かれ」と思つて行なつたことが、逆に、「悲惨な結果」になるのを、一般に「悲劇」と呼ぶのである。先生の場合も、「善かれ」と思つて行なつたことが、結果として、自分(或いはK)への「悲劇」となつてしまうのである。)

奥さんとお嬢さんは、親切に彼の荷物を片付ける世話や何かをしてくれました。凡てそれを私に対する好意から来たのだと解釈した私は、心のうちで喜びました。——Kが相変

らずむっちりした様子をしているにもかかわらず（です）。

私がKに向って新しい住居の心持はどうだと聞いた時に、彼はただ一言悪くないと言っただけでした。私から言わせれば悪くないどころではないのです。彼の今までいた所は北向きの湿っぽい臭いのする汚い室でした。食物も室相応に粗末でした。私の家へ引き移った彼は、幽谷から喬木に移った趣があつたくらいです。それをさほどに思う気色を見せないのは、一つは彼の強情から来ているのですが、一つは彼の主張からも出ているのです。仏教の教義で養われた彼は、衣食住についてとかくの贅沢を言うのをあたかも不道德のように考えていました。なまじい昔の高僧だとか聖徒だとかの伝を読んだ彼には、ややとすると精神と肉体とを切り離したがる癖がありました。肉を鞭撻すれば霊の光輝が増すように感ずる場合さえあつたのかも知れません。

私はなるべく彼に逆らわない方針を取りました。私は水を日向へ出して溶かす工夫をしたのです。今に融けて温かい水になれば、自分で自分に気が付く時機が来るに違いないと思つたのです。（これは、奥さんやお嬢さんの「温かな心」に触れれば、自然と「心の中」の水も溶けて、やがて「人間らしい心」を取り戻すだろうと考えたということであり、これは、これでもっともなことであるが、ただ、その結果、この時、先生には全く想像すら出来なかつたことが、やがてKという人の「心の中」に生じて来てしまうのである。それを誰よりも「恐れていた」のが、まさに「奥さん」だったのである。）

二十四、Kの性格と特徴

「……私は奥さんからそういう風に取扱かわれた結果、段々快活になって来たのです。それを自覚していたから、同じものを今度はKの上に応用しようと試みたのです。Kと私とが性格の上において、大分相違のある事は、長く交際して来た私によく解つていましたけれども、私の神経がこの家庭に入ってから多少角が取れた如く、Kの心も此所に置けばいつか沈まる事があるだろうと考えたのです。

Kは私より強い決心を有している男でした。勉強も私の倍ぐらいいはしたでしょう。その上持つて生れた頭の質が私よりもずつと可かつたのです。後では専門が違いましたから何とも言えませんが、同じ級にいる間は、中学でも高等学校でも、Kの方が常に上席を占めていました。私には平生から何をしてもKに及ばないという自覚があつた位です。けれども私が強いてKを私の宅へ引張つて来た時には、私の方がよく事理を弁えていると信じていました。私に言わせると、彼は我慢と忍耐の区別を了解していないように思われたのです。これはとくに貴方のために付け足して置きたいのですから聞いて下さい。肉体的なり精神なり凡て我々の能力は、外部の刺戟で、発達もするし、破壊されるでしょうが、何方にしても刺戟を段々に強くする必要のあるのは無論ですから、よく考えないと、非常に険悪な方向へむいて進んで行きながら、自分は勿論傍のものも気が付かずにいる恐れが生じて来ます。医者の説明を聞くと、人間の胃袋ほど横着なものはないそうです。粥ばかり食っていると、それ以上の堅いものを消化す力が何時の間になくなってしまふのだそうです。だから何でも食う稽古をしておくと医者は言うのです。けれどもこれはただ慣れるという意味ではなからうと思ひます。次第に刺戟を増すに従つて、次第に營養機能の抵抗力が強くなるという意味でなくてはなりません。もし反対に胃の力の方がじりじ

り弱って行ったなら結果はどうなるだろうと想像して見ればすぐ解る事です。Kは私より偉大な男でしたけれども、全くここに気が付いていなかったのです。ただ困難に慣れてしまえば、しまいにその困難は何でもなくなるものだと思えていたらしいのです。艱苦を繰り返せば、繰り返すというだけの功德で、その艱苦が気にかからなくなる時機に邂逅するものと信じ切っていたらしいのです。

私はKを説くときに、ぜひ其所を明らかにしてやりたかったのです。しかし言えばきつと反抗されるに極っていました。また昔の人の例などを、引合に持って来るに違いないと思いました。そうなれば私だって、その人達とKと違っている点を明白に述べなければならなくなります。それを首肯してくれるようなKならいいのですけれども、彼の性質として、議論がそこまで行くと容易に後へは返りません。なお先へ出ます。そうして、口で先へ出た通りを、行為で実現しに掛ります。彼はこうなると恐るべき男でした。偉大でした。自分で自分を破壊しつつ進みます。結果から見れば、彼はただ自己の成功を打ち砕く意味において、偉大なのに過ぎないのですけれども、それでも決して平凡ではありませんでした。彼の気性をよく知った私はついに何とも言う事が出来なかつたのです。その上私から見ると、彼は前にも述べた通り、多少神経衰弱に罹っていたように思われたのです。よし私が彼を説き伏せたところで、彼は必ず激するに違いないのです。私は彼と喧嘩をする事は恐れてはいませんでしたけれども、私が孤独の感に堪えなかつた自分の境遇を顧みると、親友の彼を、同じ孤独の境遇に置くのは、私に取って忍びない事でした。一步進んで、より孤独な境遇に突き落すのはなお厭でした。それで私は彼が宅へ引き移ってから、自分の間は批評がましい批評を彼の上に加えずにいました。ただ穏やかに周囲の彼に及ぼす結果を見る事にしたのです。(本文)

*

*

さて、「……私は奥さんからそういう風に取扱かわれた結果、段々快活になつて来たのです。それを自覚していたから、同じものを今度はKの上に応用しようと試みたのです。(それは奥さんやお嬢さんの「温かな心」に触れば、やがてKも「人間らしい心」を取り戻すだろうということである)。Kと私とが性格の上において、大分相違のある事は、長く交際して来た私によく解っていましたけれども、私の神経がこの家庭に入ってから多少角が取れた如く、Kの心も此所に置けばいつか沈まる事があるだろうと考えたのです。Kは私より強い決心を有している男でした。勉強も私の倍ぐらいはしたでしょう。その上持つて生れた頭の質が私よりもずっと可かつたのです。後では専門が違いましたから何とも言えませんが、同じ級にいる間は、中学でも高等学校でも、Kの方が常に上席を占めていました。私には平生から何をしてもKに及ばないという自覚があつた位です。けれども私が強いてKを私の宅へ引張つて来た時には、私の方がよく事理(物事の道理)を弁えていると信じていました。(つまりKは頭が良いが世間のことはまだよく知らないのです)。私に言わせると、彼は我慢と忍耐の区別を了解していないように思われたのです。これはとくに貴方のために付け足して置きたいのですから聞いて下さい。肉体なり精神なり凡て我々の能力は、外部の刺戟で、発達もするし、破壊されるでしようが、何方にしても刺戟を段々に強くする必要のあるのは無論ですから、よく考えないと、非常に陰悪な方向へむいて進んで行きながら、自分は勿論傍のものも気が付かずにいる恐れが生じて来ます。医者の説明を聞くと、人間の胃袋ほど横着なものはないそうです。粥ばかり食つ

ていると、それ以上の堅いものを消化す力が何時の間になくなってしまふのだそうです。だから何でも食う稽古をしておけと医者は言うのです。けれどもこれはただ慣れるという意味ではなからうと思えます。次第に刺戟を増すに従って、次第に營養機能の抵抗力が強くなるという意味でなくてはなりません。もし反対に胃の力の方がじりじり弱って行つたなら結果はどうなるだろうと想像して見ればすぐ解る事です。Kは私より偉大な男でしたけれども、全くここに気が付いていなかったのです。ただ困難に慣れてしまえば、しまいにその困難は何でもなくなるものだと思つていたらしいのです。艱苦を繰り返せば、繰り返すというだけの功德で、その艱苦が気にかからなくなる時機に邂逅するものと信じ切つていたらしいのです。(つまり、肉体であれ精神であれ、その他、何であれ、それを鍛えるのに、無茶な「鍛え方」をすれば、かえつて心身を壊すことにもなり兼ねない。だからこそ、理に叶つた「鍛え方」をしなければならぬのです。)

私はKを説く時に、ぜひ其所を明らかにしてやりたかつたのです。しかし言えばきつと反抗されるに極つていました。また昔の人の例などを、引合に持つて来るに違ひないと思ひました。そうなれば私だつて、その人達とKと違つている点を明白に述べなければならなくなりません。それを首肯してくれるようなKならいいのですけれども、彼の性質として、議論がそこまで行くと容易に後へは返りません。なお先へ出ます。そうして、口で先へ出た通りを、行為で実現しに掛ります。彼はこうなると恐るべき男でした。偉大でした。自分で自分を破壊しつゝ進みます。結果から見れば、彼はただ自己の成功を打ち砕く意味において、偉大なのに過ぎないのですけれども、それでも決して平凡ではありませんでした。彼の気性をよく知つた私はいかに何とも言う事が出来なかつたのです。その上私から見ると、彼は前にも述べた通り、多少神経衰弱に罹つていたように思われたのです。よし私が彼を説き伏せたと、彼は必ず激するに違ひないのです。私は彼と喧嘩をする事は恐れてはいませんでしたけれども、私が孤独の感に堪えなかつた自分の境遇を顧みると、親友の彼を、同じ孤独の境遇に置くのは、私に取つて忍びない事でした。一歩進んで、より孤独な境遇に突き落すのはなお厭でした。

例えば、先生という人は、親戚との關係をすべて絶つてゐる。一方、Kという人も養家や実家との關係をすべて絶つてゐる。そういう意味では、二人ともこれという頼る所の全く無い、まさに「孤独の身」であつたのである。だからこそ、「……一歩進んで、より孤独な境遇に突き落すのはなお厭でした」となるのである。それで私は彼が宅へ引き移つてからも、当分の間は批評がましい批評を彼の上に加えずにいました。ただ穏やかに周囲の彼に及ぼす結果を見る事にしたのです。

二十五、Kの心が段々打ち解けて来る

「……私は蔭へ廻つて、奥さんとお嬢さんに、なるべくKと話をする様に頼みました。私は彼のこれまで通つて来た無言生活が彼に崇つてゐるのだらうと信じたからです。使わない鉄が腐るように、彼の心には錆が出ていたとしか、私には思われなかつたのです。

奥さんは取りつき把の無い人だと言つて笑つていました。お嬢さんはまたわざわざその例を挙げて私に説明して聞かせるのです。火鉢に火があるかと尋ねると、Kはないと答えるそうです。では持つて来ようと言うと、要らないと断るそうです。寒くはないかと聞く

と、寒いけれども要らないんだと言ったぎり応対をしないのだそうです。私はただ苦笑している訳にも行きません。気の毒だから、何とか言つてその場を取り繕つておかなければ済まなくなります。尤もそれは春の事ですから、強いて火にあたる必要もなかったのですが、これでは取り付き把がないと言われるのも無理はないと思ひました。

それで私はなるべく、自分が中心になつて、女二人とKとの連絡をはかる様に力めました。Kと私が話している所へ家の人を呼ぶとか、または家の人と私が一つ室に落ち合った所へ、Kを引つ張り出すとか、何方でもその場合に應じた方法をとつて、彼らを接近させようとしたのです。勿論Kはそれをあまり好みませんでした。ある時はふいと起つて室外へ出ました。またある時はいくら呼んでもなかなか出て来ませんでした。Kはあんな無駄話をしてどこが面白いと言うのです。私はただ笑つていました。しかし心の中では、Kがそのために私を軽蔑していることがよく解りました。

私はある意味から見て實際彼の軽蔑に耐へていたかも知れません。彼の眼の着け所は私より遙かに高いところにあつたとも言われるでしょう。私もそれを否みはしません。しかし眼だけ高くつて、外が釣り合わないのは手もなく不具です。私は何を措いても、この際彼を人間らしくするのが専一だと考えたのです。いくら彼の頭が偉い人の影像で埋まつていても、彼自身が偉くなつて行かない以上は、何の役にも立たないという事を発見したのです。私は彼を人間らしくする第一の手段として、まず異性の傍に彼を坐らせる方法を講じたのです。そうしてそこから出る空気に彼を曝した上、錆び付きかかった彼の血液を新しくしようと思ひました。

この試みは次第に成功しました。初のうち融合しにくいように見えたものが、段々一つに纏まつて来出しました。彼は自分以外に世界のある事を少しずつ悟つて行くようでした。彼はある日私に向つて、女はそう軽蔑すべきものでないというような事を言いました。Kははじめ女からも、私同様の知識と学問を要求していたらしいのです。そうしてそれが見付からないと、すぐ軽蔑の念を生じたものと思われまふ。今までの彼は、性によつて立場を変える事を知らずに、同じ視線ですべての男女を一樣に観察していたのです。私は彼に、もし我ら二人だけが男同志で永久に話を交換しているならば、二人はただ直線的に先へ延びて行くに過ぎないだろうと言ひました。彼は尤もだと答えました。私はその時お嬢さんの事で、多少夢中になつてゐる頃でしたから、自然そんな言葉も使うようになったのでしよう。しかし裏面の消息は彼には一口も打ち明けませんでした。

今まで書物で城壁をきずいてその中に立て籠つていたようなKの心が、段々打ち解けて来るのを見ているのは、私に取つて何よりも愉快でした。私は最初からそうした目的で事をやり出したのですから、自分の成功に伴う喜び(心からの喜び)を感じずにはいられたかったです。私は本人に言わない代りに、奥さんとお嬢さんに自分の思つた通りを話しました。二人も満足の様子でした。(本文)

*

*

さて、「……私は陰へ廻つて、奥さんとお嬢さんに、なるべくKと話をする様に頼みました。私は彼のこれまで通つて来た無言生活が彼に崇つてゐるのだろうと信じたからです。使わない鉄が腐るように、彼の心には錆が出ていたとしか私には思われなかつたのです。

奥さんは「取りつき把のない」(取り付く島もない)人だと言つて笑つていました。お嬢さんはまたわざわざその例を挙げて私に説明して聞かせるのです。火鉢に火があるかと

尋ねると、Kはないと答えるそうです。では持つて来ようと言うと、要らないと断るそうです。寒くはないかと聞くと、寒いけれども要らないんだと言ったぎり応対をしないのだそうです。私はただ苦笑している訳にも行きません。気の毒だから、何とか言つてその場を取り繕うっておかなければ済まなくなります。尤もそれは春の事ですから、強いて火にあたる必要もなかったのですが、これでは「取りつき把がない」（取り付く島もない）と言われるのも無理はないと思いました。

それで私はなるべく、自分が中心になつて、女二人とKとの連絡をはかる様に力めました。Kと私が話している所へ家の人を呼ぶとか、または家の人と私が一つ室に落ち合った所へ、Kを引つ張り出すとか、何方でもその場合に応じた方法をとつて、彼らを接近させようとしたのです。勿論Kはそれをあまり好みませんでした。ある時はふいと起つて室の外へ出ました。またある時はいくら呼んでもなかなか出て来ませんでした。Kはあんな無駄話をしてどこが面白いと言うのです。私はただ笑つていました。しかし心の中では、Kがそのために私を軽蔑していることがよく解りました。

私はある意味から見ても實際彼の軽蔑に働いていたかも知れません。彼の眼の着け所は私より遥かに高いところにあつたとも言われるでしょう。私もそれを否みはしません。しかし眼だけ高くつて、外が釣り合わないのは手もなく不具です。私は何を措いても、この際彼を人間らしくするのが専一だと考えたのです。いくら彼の頭が偉い人の影像で埋まつていても、彼自身が偉くなつて行かない以上は、何の役にも立たないという事を発見したのです。私は彼を人間らしくする第一の手段として、まず異性の傍に彼を坐らせる方法を講じたのです。そうしてそこから出る空気に彼を曝した上、錆び付きかかった彼の血液を新らしくしようと思つたのです。（もちろん、先生のこの「努力」は、決して間違ひではなかつたが、ただ、その結果として、まさかKという人の「心の中」にお嬢さんへの想いが生じて来るとは、恐らく、先生も全く夢にも想像すらできなかつたに違ひない。）

この試みは次第に成功しました。初のうち融合しにくいように見えたものが、段々一つに纏まつて来出しました。彼は自分以外に世界のある事を少しづつ悟つて行くようでした。彼はある日私に向つて、女はそう軽蔑すべきものでないというような事を言いました。Kははじめ女からも、私同様の「知識と学問」を要求していたらしいのです。そうしてそれが見付からないと、すぐ「軽蔑の念」を生じたものと思われまふ。今までの彼は、性によつて立場を変える事を知らずに、同じ視線ですべての男女を一樣に観察していたのです。私は彼に、もし我ら二人だけが男同志で永久に話を交換しているならば、二人はただ直線的に先へ延びて行くに過ぎないだろうと言いました。彼は尤もだと答えました。私はその時お嬢さんの事で、多少夢中になつている頃でしたから、自然そんな言葉も使うようになったのでしよう。しかし裏面の消息は彼には一口も打ち明けませんでした。

今まで「書物」で城壁を築いてその中に立て籠つていたようなKの心が、段々打ち解けて来るのを見ているのは、私に取つて何よりも愉快でした。私は最初からそうした目的（Kが「人間らしい心」を取り戻す）ことをやり出したのですから、自分の成功に伴う喜悅（心からの喜び）を感じずにはいられなかつたのです。私は本人に言わない代りに、奥さんとお嬢さんに自分の思つた通りを話しました。二人も「満足の様子」でした。（此所までは、先生の「思惑」《思い通り》に物事が進み、まさに「喜悅」《心からの喜び》を感じている状態であるが、勿論、やがて先生の「思惑」《思い通り》に物事が進まない事態が起き

て来るのである。)

二十六、Kとお嬢さんだけの状況

「……Kと私は同じ科におりながら、専攻の学問が違っていましたが、自然出る時や帰る時に遅速がありました。私の方が早ければ、ただ彼の空室を通り抜けるだけですが、遅いと簡単な挨拶をして自分の部屋へ這入るのを例にしています。Kはいつもの眼を書物からはなして、襖を開ける私をちよつと見ます。そうしてきつと今帰ったのかと言います。私は何も答えないで點頭く事もありませんし、或はただ「うん」と答えて行き過ぎる場合もあります。

ある日私は神田に用があつて、帰りが何時もよりずっと後れました。私は急ぎ足に門前まで来て、格子をがらりと開けました。それと同時に、私はお嬢さんの声を聞いたのです。声は慥にKの室から出たと思ひました。玄関から真直に行けば、茶の間、お嬢さんの部屋と二つ続いていて、それを左へ折れると、Kの室、私の室、という間取なのです。どこで誰の声がしたくらいは、久しく厄介になつていて私にはよく分るのです。私はすぐ格子を締めました。するとお嬢さんの声もすぐ已みました。私が靴を脱いでいるうち、——私はその時分からハイカラで手数のかかる編上を穿いていたのですが、——私がごころでその靴紐を解いているうち、Kの部屋では誰の声もしませんでした。私は変に思ひました。ことによると、私の疝違かも知れないと考えたのです。しかし私がつもの通りKの室を抜けようとして、襖を開けると、そこに二人はちゃんと坐っていました。Kは例の通り今帰つたかと言ひました。お嬢さんも「お帰り」と坐つたままで挨拶しました。私には気のせいかその簡単な挨拶が少し硬いように聞こえました。どこかで自然を踏み外しているような調子として、私の鼓膜に響いたのです。私はお嬢さんに、奥さんはと尋ねました。私の質問には何の意味もありませんでした。家のうちが平常より何だかひっそりしていたから聞いて見ただけの事です。

奥さんははたして留守でした。下女も奥さんといつしよに出たのでした。だから家に残つているのは、Kとお嬢さんだけだったので。私は一寸首を傾けました。今まで長い間世話になつていたけれども、奥さんがお嬢さんと私だけを置き去りにして、宅を空けた例はまだなかったのですから。私は何か急用でも出来たのかとお嬢さんに聞き返しました。お嬢さんはただ笑つています。私はこんな時に笑う女が嫌いでした。若い女に共通な点だと言へばそれまでかも知れませんが、お嬢さんも下らない事によく笑いたがる女でした。しかしお嬢さんは私の顔色を見て、すぐ不断の表情に帰りました。急用ではないが、一寸用があつて出たのだと真面目に答えました。下宿人の私にはそれ以上問ひ詰める権利はありません。私は沈黙しました。

私が着物を改めて席に着くか着かないうちに、奥さんも下女も帰つて来ました。やがて晩食の食卓でみんなが顔を合せる時刻が来ました。下宿した当座は万事客扱いだったので、食事のたびに下女が膳を運んで来てくれたのですが、それが何時の間にか崩れて、飯時には向うへ呼ばれて行く習慣になつていたので。Kが新しく引き移つた時も、私が主張して彼を私と同じように取り扱わせる事に極めました。その代り私は薄い板で造つた足の畳み込める華奢な食卓を奥さんに寄附しました。今ではどこの宅でも使っているようですが、

その頃そんな卓の周囲に並んで飯を食う家族は殆んどなかったのです。私はわざわざ御茶の水の家具屋へ行って、私の工夫通りにそれを造り上げさせたのです。

私はその卓上で奥さんからその日いつもの時刻に着屋が来なかつたので、私たちに食わせるものを買いに町へ行かなければならなかつたのだという説明を聞かされました。なるほど客を置いている以上、それも尤もな事だと私が考えた時、お嬢さんは私の顔を見てまた笑い出しました。しかし今度は奥さんに叱られてすぐ已めました。(本文)

*

*

さて、「……Kと私は同じ科におりながら、専攻の学問が違っていましたから、自然出る時や帰る時に遅速がありました。私の方が早ければ、ただ彼の空室を通り抜けるだけですが、遅いと簡単な挨拶をして自分の部屋へ這入るのを例にしてみました。Kはいつもの眼を書物からはなして、襖を開ける私をちよつと見ます。そうしてきつと今帰つたのかと言います。私は何も答えないで點頭く事もありませんし、或はただ「うん」と答えて行き過ぎる場合もあります。(この家の「見取り図」は、次にはつきりと明記されている。)

ある日私は神田に用があつて、帰りが何時もよりずつと後れました。私は急ぎ足に門前まで来て、格子をがらりと開けました。それと同時に、私はお嬢さんの声を聞いたのです。声は慥にKの室から出たと思ひました。玄関から真直に行けば、茶の間、お嬢さんの部屋と二つ続いていて、それを左へ折れると、Kの室、私の室、という間取なのですから、どこで誰の声がしたくらいは、久しく厄介になつてゐる私にはよく分るのです。私はすぐ格子を締めました。するとお嬢さんの声もすぐ已まりました。私が靴を脱いでいるうち、——私はその時分からハイカラで手数のかかる編上を穿いていたのですが、——私がごこんでその靴紐を解いているうち、Kの部屋では誰の声もしませんでした。私は変に思ひました。ことによると、私の疝違かも知れないと考えたのです。しかし私がいつもの通りKの室を抜けようとして、襖を開けると、そこに二人はちゃんと坐つていました。Kは例の通り「今帰つたか」と言ひました。お嬢さんも「お帰り」と坐つたままで挨拶しました。私には気のせいとその簡単な挨拶が少し硬いように聞こえました。どこかで自然を踏み外しているような調子として、私の鼓膜に響いたのでした。私はお嬢さんに、奥さんとはと尋ねました。私の質問には何の意味もありませんでした。家のうちが平常より何だかひっそりしていたから聞いて見ただけの事です。(ふと一抹の疑問と不安が生じたのである。)

奥さんははたして留守でした。下女も奥さんといつしよに出たのでした。だから家に残つてゐるのは、Kとお嬢さんだけだったのでした。私は一寸首を傾けました。今まで長い間世話になつていたけれども、奥さんとお嬢さんと私だけを置き去りにして、宅を空けた例はまだなかつたのですから。私は何か急用でも出来たのかとお嬢さんに聞き返しました。お嬢さんはただ笑つてゐるのです。私はこんな時に笑う女が嫌いでした。若い女に共通な点だと言へばそれまでかも知れませんが、お嬢さんも下らない事によく笑いたがる女でした。(例えば、夏目漱石という人は、有名な「神経衰弱」持ちでしたので、或いは「女性の笑い声」が気に障ることもあつたのかも知れない)。しかしお嬢さんは私の顔色を見て、すぐ不断の表情に帰りました。急用ではないが、一寸用があつて出たのだと真面目に答えました。下宿人の私にはそれ以上問い詰める権利はありません。私は沈黙しました。

私が着物を改めて席に着くか着かないうちに、奥さんも下女も帰つて来ました。やがて晩食の食卓でみんなが顔を合せる時刻が来ました。下宿した当座は万事客扱いだったので、

食事のたびに下女が膳（一人用の四角いお膳）を運んで来てくれたのですが、それが何時の間にか崩れて、飯時には向うへ呼ばれて行く習慣になっていたので。Kが新しく引き移った時も、私が主張して彼を私と同じように取り扱わせる事に極めました。その代り私は薄い板で造った足の畳み込める華奢な食卓を奥さんに寄附しました。今ではどの宅でも使っているようですが、（例えば、太宰治も幼少の頃、食事の時は、全員が「一人用の四角いお膳」で食べていたという記述がある）。これは、その頃そんな卓の周囲に並んで飯を食う家族は殆どなかったのです。私はわざわざ御茶の水の家具屋へ行つて、私の工夫通りにそれを造り上げさせたのです。（ちなみに、チャボ台は、一般に方形か円形をしていて、折り畳み式も多く、一八八七年《明治二〇年》頃から使用されるようになり、一九二〇年代後半《つまり大正末から昭和初期》に全国的な普及を見たのである。）

私はその卓上で奥さんからその日いつもの時刻に着屋が来なかつたので、私たちに食わせるものを買いに町へ行かなければならなかつたのだという説明を聞かされました。なるほど客を置いている以上、それも尤もな事だと私が考えた時、お嬢さんは私の顔を見てまた笑い出しました。しかし今度は奥さんに叱られてすぐ已めました。

このお嬢さんの「笑い」は、先生は「二人の関係」を何か「気にしている」（或いは「疑っている」と思つて、それを笑つているのであるが、むろん、お嬢さんにはそんな気は全くないのであり、だからこそ、笑えるのである。）

二十七、二度目のKとお嬢さんだけの状況

「……一週間ばかりして私はまたKとお嬢さんがいっしょに話している室を通り抜けました。その時お嬢さんは私の顔を見るや否や笑い出しました。私はすぐ何がおかしいのかと聞けばよかつたのでしよう。それをつい黙つて自分の居間まで来てしまつたのです。だからKもいつものように、今帰つたかと声を掛ける事が出来なくなりました。お嬢さんはすぐ障子を開けて茶の間へ入つたようでした。

夕飯の時、お嬢さんは私を変な人だと言いました。私はその時もなぜ変なのか聞かずにしまいました。ただ奥さんが睨めるような眼をお嬢さんに向けるのに気が付いただけでした。

私は食後Kを散歩に連れ出しました。二人は伝通院の裏手から植物園の通りをぐるりと廻つてまた富坂の下へ出ました。散歩としては短い方ではありませんでしたが、その間に話した事は極めて少なかつたのです。性質から言うと、Kは私よりも無口な男でした。私も多弁な方ではなかつたのです。しかし私は歩きながら、出来るだけ話を彼に仕掛けてみました。私の問題は重に二人の下宿している家族についてでした。私は奥さんやお嬢さんを彼がどう見ているか知りたかつたのです。ところが彼は海のものとも山のものとも見分の付かないような返事ばかりするのです。しかもその返事は要領を得なくせに、極めて簡単でした。彼は二人の女に関してよりも、専攻の学科の方に多くの注意を払っているように見えました。尤もそれは二学年目の試験が目の前に逼っている頃でしたから、普通の人間の立場から見ても、彼の方が学生らしい学生だったのでしよう。その上彼はシュエデンボルグがどうかこうだとか言つて、無学な私を驚かせました。

我々が首尾よく試験を済ました時、二人とももう後一年だと言つて奥さんは喜んで

くれました。そういう奥さんの唯一の誇りとも見られるお嬢さんの卒業も、間もなく来る順になつていたのです。Kは私に向つて、女というものは何にも知らないで学校を出るのだと言いました。Kはお嬢さんが学問以外に稽古している縫針だの琴だの活花だのを、まるで眼中に置いていないようでした。私は彼の迂闊を笑つてやりました。そうして女の価値はそんな所にあるものでないという昔の議論をまた彼の前で繰り返しました。彼は別段反駁もしませんでした。その代り成程という様子も見せませんでした。私にはそこが愉快でした。彼のふんと言つたような調子が、依然として女を軽蔑しているように見えたからです。女の代表者として私の知つているお嬢さんを、物の数とも思つていないらしかつたからです。今から回顧すると、私のKに対する嫉妬は、その時にもう充分萌していたのです。

私は夏休みにどこかへ行こうかとKに相談しました。Kは行きたくないような口振を見せました。無論彼は自分の自由意志でどこへも行ける身体ではありませんが、私が誘いさえすれば、またどこへ行つても差支えない身体だったのです。私はなぜ行きたくないのかと彼に尋ねてみました。彼は理由も何にもないと言ふのです。家で書物を読んだ方が自分の勝手だと言ふのです。私が避暑地へ行つて涼しい所で勉強した方が、身体のためだと主張すると、それなら私一人行つたらよからうと言ふのです。しかし私はK一人をここに残して行く気にはなれないのです。私はただでさえKと宅のものが段々親しくなつて行くのを見て居るのが、余り好い心持ではなかつたのです。私が最初希望した通りになるのが、何で私の心持を悪くするのかと言われればそれまでです。私は馬鹿に違ひないのです。果しのつかない二人の議論を見るに見かねて奥さんが仲へ入りました。二人はどうとういっしよに房州へ行く事になりました。(本文)

*

*

さて、「……一週間ばかりして私はまたKとお嬢さんがいつしよに話している室を通り抜けました。その時お嬢さんは私の顔を見るや否や笑い出しました。私はすぐ何がおかしいのかと聞けばよかつたのでしよう。それをつい黙つて自分の居間まで来てしまつたのです。だからKもいつものように、今帰つたかと声を掛ける事が出来なくなりました。お嬢さんはすぐ障子を開けて茶の間へ入つたようでした。

夕飯の時、お嬢さんは私を変な人だと言いました。私はその時なぜ変なのか聞かずにしまいました。ただ奥さんが睨めるような眼をお嬢さんに向けるのに気が付いただけでした。(お嬢さんは、先生が「二人の関係」を何か「気にしている」《或いは「疑つている」》ような様子を見て、むしろ面白がる《可笑しがる》一面もあつたのかも知れない。)

私は食後Kを散歩に連れ出しました。二人は伝通院の裏手から植物園の通りをぐるりと廻つてまた富坂の下へ出ました。散歩としては短い方ではありませんでしたが、その間に話した事は極めて少なかつたのです。性質から言つと、Kは私よりも無口な男でした。私も多弁な方ではなかつたのです。しかし私は歩きながら、出来るだけ話を彼に仕掛てみました。私の問題は重に二人の下宿している家族についてでした。私は奥さんやお嬢さんを彼がどう見ているか知りたかつたのです。ところが彼は海のものとも山のものとも見分の付かないような返事ばかりするのです。しかもその返事は要領を得なくせに、極めて簡単でした。彼は二人の女に関してよりも、専攻の学科の方に多くの注意を払つていように見えました。尤もそれは二学年目の試験が目の前に逼つていゝ頃でしたから、普通

の人間の立場から見ても、彼の方が学生らしい学生だったのでしよう。その上彼はシュエデンボルグがどうだとかこうだとか言つて、無学な私を驚かせました。

我々が首尾よく試験を済ませました時、二人とももう後一年だと言つて奥さんは喜んでくれました。そういう奥さんの唯一の誇りとも見られるお嬢さんの卒業も、間もなく来る順になつていたので。Kは私に向つて、女というものは何にも知らないで学校を出るのだと言いました。Kはお嬢さんが学問以外に稽古している縫針だの琴だの活花だのを、まるで眼中に置いていないようでした。私は彼の迂闊を笑つてやりました。そうして女の価値はそんな所にあるものでない、という昔の議論をまた彼の前で繰り返しました。彼は別段反駁もしませんでした。その代り成程という様子も見せませんでした。私にはそこが愉快でした。彼のふんと言つたような調子が、依然として女を軽蔑しているように見えたからです。女の代表者として私の知つてのお嬢さんを、物の数とも思つていないらしかつたからです。今から回顧すると、私のKに対する嫉妬は、その時にもう充分萌していたので。この「……私のKに対する嫉妬は、その時にもう充分萌していたので」とあるが、

私は夏休みにどこかへ行こうかとKに相談しました。Kは行きたくないような口振を見せました。無論彼は自分の自由意志でどこへも行ける身体ではありませんが、私が誘いさえすれば、またどこへ行つても差支えない身体だったので。私はなぜ行きたくないのかと彼に尋ねてみました。彼は理由も何にもないと言つたのです。家で書物を読んだ方が自分の勝手だと言つたのです。私が避暑地へ行つて涼しい所で勉強した方が、身体のためだと主張すると、それなら私一人行つたらよからうと言つたのです。しかし私はK一人をここに残して行く気にはなれないのです。私はただでさえKと宅のものが段々親しくなつて行くのを見て、余り好い心持ではなかつたのです。私が最初希望した通りになるのが、何で私の心持を悪くするのかと言われればそれまでです。私は馬鹿に違いないのです。(これは当然、Kとお嬢さんとが親しくなるのを、何よりも怖れているのである)。果しのつかない二人の議論を見かねて奥さんが仲へ入りました。二人はどうとういっしょに房州へ行く事になりました。

*

*

二十八、房州ぼうしゅうへの夏休みの旅

「……Kはあまり旅へ出ない男でした。私にも房州は始めてでした。二人は何にも知らないで、船が一番先へ着いた所から上陸したのです。たしか保田とか言いました。今ではどんなに変っているか知りませんが、その頃はひどい漁村でした。第一何処も彼処も腥さいのです。それから海へ入ると、波に押し倒されて、すぐ手だの足だのを擦り剥くのです。拳こぶしのような大きな石が打ち寄せる波に揉まれて、始終ごろごろしているのです。

私はすぐ厭いやになりました。しかしKは好いとも悪いとも言いません。少なくとも顔付だけは平気なものでした。その癖彼は海へ入るたんびに何処かに怪我をしない事はなかったのです。私はとうとう彼を説き伏せて、そこから富浦に行きました。富浦からまた那古に移りました。すべてこの沿岸はその時分から重おもに学生の集まる所でしたから、どこでも我々にはちようど手頃てびらの海水浴場だったのです。Kと私はよく海岸の岩の上に坐すわって、遠い海の色や、近い水の底を眺ながめました。岩の上から見下す水は、また特別に綺麗なものでした。赤い色だの藍あゐの色だの、普通市場しじょうに上らないような色をした小魚こおが、透き通る波の中をあちらこちらと泳いでいるのが鮮やかに指さされました。

私はそこに坐すわって、よく書物をひろげました。Kは何もせずに黙もくっている方が多かったのです。私にはそれが考えに耽ふけっているのか、景色に見惚みとれているのか、もしくは好きな想像えがを描かいているのか、全く解わからなかつたのです。私は時々眼を上げて、Kに何をしているのだと聞きました。Kは何もしていないと一口答こたえるだけでした。私は自分の傍そばにこうじつとして坐すわっているものが、Kでなくって、お嬢さんだったらさぞ愉快だろうと思う事がよくありました。それだけならまだいいのですが、時にはKの方でも私と同じような希望を抱いだいて岩の上に坐すわっているのではないかしらと忽然疑ごつぜんい出すのです。すると落ち付いてそこに書物をひろげているのが急に厭いやになります。私は不意に立ち上ります。そうして遠慮のない大きな声を出して怒鳴どなります。纏まとまった詩だの歌だのを面白そうに吟ぎんずるような手緩てぬるい事は出来ないのです。ただ野蛮人の如ごとくにわめくのです。ある時私は突然彼の襟えり頭くびを後うしろからぐいと攫つかみました。こうして海の中へ突き落したらどうすると言いってKに聞きました。Kは動きませんでした。後向うしろむきのまま、ちようど好いいい、やってくれと答こたえました。私はすぐ首筋を抑おさえた手を放はなしました。

Kの神経衰弱はこの時もう大分よくなっていたらしいのです。それと反比例に、私の方は段々過敏かびんになって来ていたのです。私は自分より落ち付おちついているKを見て、羨うらやましがりました。また憎にくらしがりました。彼はどうしても私に取り合あう気色けしきを見せなかつたからです。私にはそれが一種の自信のごとく映うつりました。しかしその自信を彼に認めたところで、私は決して満足出来なかつたのです。私の疑うたがいはもう一歩前へ出て、その性質を明あらめたがりました。彼は学問なり事業なりについて、これから自分の進んで行くべき前途の光明こうみやうを再び取り返した心持になったのだろうか。単にそれだけならば、Kと私との利害に何の衝突の起る訳はないのです。私は却かえって世話のし甲斐ががあつたのを嬉うれしく思う位なものです。けれども彼の安心がもしお嬢さんに対してであるとすれば、私は決して彼を許す事が出来なくなるのです。不思議にも彼は私のお嬢さんを愛している素振すがりに全く気が付いていないように見えました。無論私もそれがKの眼に付くようにわざとらしくは振舞いませんでしたけれども。Kは元来そういう点にかけてと鈍にぶい人なのです。私には最初か

らKなら大丈夫という安心があったので、彼をわざわざ宅へ連れて来たのです。(本文)

*

*

さて、「……Kはあまり旅へ出ない男でした。私にも房州は始めてでした。二人は何にも知らないで、船が一番先へ着いた所から上陸したのです。たしか保田とか言いまして。今ではどんなに変っているか知りませんが、その頃はひどい漁村でした。第一何処も彼処も腥さいのです。それから海へ入ると、波に押し倒されて、すぐ手だの足だのを擦り剥くのです。拳のような大きな石が打ち寄せる波に揉まれて、始終ごろごろしているのです。(一般に、海水浴に適した場所は、波が静かで遠浅の砂浜がきれいな所かと思う。)

私はすぐ厭になりました。しかしKは好いとも悪いとも言いません。少なくとも顔付だけは平気なものでした。その癖彼は海へ入るたんびに何処かに怪我をしない事はなかったのです。私はとうとう彼を説き伏せて、そこから富浦に行きました。富浦からまた那古に移りました。すべてこの沿岸はその時分から重に学生の集まる所でしたから、どこでも我々にはちようど手頃の海水浴場だったのです。Kと私はよく海岸の岩の上に坐って、遠い海の色や、近い水の底を眺めました。岩の上から見下す水は、また特別に綺麗なものでした。赤い色だの藍の色だの、普通市場に上らないような色をした小魚が、透き通る波の中をあちらこちらと泳いでいるのが鮮やかに指さされました。(夏目漱石という人は、実際、房州(千葉県南部)の方へ旅行に行った経験があり、その時に見たり聞いたり経験したりしたことなどを思い出しながら、この場面を書いているのかも知れない。)

私はそこに坐って、よく書物をひろげました。Kは何もせずに黙っている方が多かったのです。私にはそれが考えに耽っているのか、景色に見惚れているのか、もしくは好きな想像を描いているのか、全く解らなかつたのです。私は時々眼を上げて、Kに何をしているのだと聞きました。Kは何もしてないと一口答えるだけでした。私は自分の傍にこうじつとして坐っているものが、Kでなくって、お嬢さんだったらさぞ愉快だろうと思う事がよくありました。それだけならまだいいのですが、時にはKの方でも私と同じような希望を抱いて岩の上に坐っているのではないかしらと忽然疑い出すのです。すると落ち付いてそこに書物をひろげているのが急に厭になります。私は不意に立ち上ります。そうして遠慮のない大きな声を出して怒鳴ります。纏まった詩だの歌だのを面白そうに吟ずるような手緩い事は出来ないのです。ただ野蛮人の如くにわめくのです。

例えば、ムンクに有名な「叫び」という絵画があるが、それは、思い出したくもないこと(例えばおぞましい過去の経験や記憶)などが突然思い出されて来た時、また、考えたくもないことを突然考え始めた時、(例えば、自分はこの病気で若しかしたら死ぬかも知れないという、そのようなぞつとするような思いに襲われた時)、人間は、突然、「わあー」と野蛮人の如くにわめいて、それを意識から消し去ろうとするのである。

ある時、私は突然彼の襟頸を後からぐいと攫みました。こうして海の中へ突き落したらどうすると言ってKに聞きました。Kは動きませんでした。後向のまま、ちようど好い、やってくれと答えました。私はすぐ首筋を抑えた手を放しました。(この「……ちようど好い、やってくれ」という言葉は、Kという人の「心の最も奥深い処」には、もしかしたら「自殺願望」のようなものが眠っていたのかも知れない。むろん、これだけでは何とも断定は出来ない。……)

Kの神経衰弱はこの時もう大分よくなっていらしいのです。それと反比例に、私の方

は段々過敏になって来ていたのです。私は自分より落ち付いているKを見て、羨ましがりました。また憎らしがりました。彼はどうしても私に取り合う気色を見せなかったからです。私にはそれが一種の自信のごとく映りました。しかしその自信を彼に認めたところで、私は決して満足出来なかったのです。私の疑いはもう一步前へ出て、その性質を明らかにしてみました。彼は学問なり事業なりについて、これから自分の進んで行くべき前途の光明を再び取り返した心持になったのだろうか。単にそれだけならば、Kと私の利害に何の衝突の起る訳はないのです。(それなら親友のままではいられない)。私は却つて世話のし甲斐があつたのを嬉しく思う位なものです。けれども彼の安心がもしお嬢さんに対してであるとするれば、私は決して彼を許す事が出来なくなるのです。(それでは、なぜ「：私は決して彼を許す事が出来なくなるのか？」、それは今までの「親友」からお嬢さんめぐつての「恋敵」《敵同士》となつてしまふからである。そして、先生としては、(心から愛する)お嬢さんをKに奪われることだけは、何が何でも断固として阻止しなければならぬからである)。不思議にも彼は私のお嬢さんを愛している素振に全く気が付いていないように見えました。無論私もそれがKの眼に付くようにわざとらしくは振舞いませんでしたけれども。Kは元来そういう点にかけてと鈍い人なのです。私には最初からKなら大丈夫という安心があつたので、彼をわざわざ宅へ連れて来たのです。

さて、先生は、奥さんやお嬢さんになるべくKと話をするように頼みました。そして、その奥さんやお嬢さんの「温かな心」に触れて、Kという人の「心の中」に「人間らしい心」を取り戻してやろうと試みたわけである。その結果、Kという人の「心の中」に「人間らしい心」が少しずつ戻ってきて、それ自体は、むしろ世話のし甲斐があつたと嬉しく思う位なものであるが、ただ、先生が夢にも想像すらできなかつたことは、まさかKという人の「心の中」に何と「お嬢さんへの恋心」が生じてしまつたかも知れないという疑念であり、その「疑念や嫉妬心」などで先生は深く悩み苦しむことになるのである。

二十九、Kと自分とを比較対照して見ると

「……私は思い切つて自分の心をKに打ち明けようと思いました。尤もこれはその時に始まつた訳でもなかつたのです。旅に出ない前から、私にはそうした腹が出来ていたのですけれども、打ち明ける機会をつかまえる事も、その機会を作り出す事も、私の手際では旨く行かなかつたのです。今から思うと、その頃の私の周囲にいた人間はみんな妙でした。女に関して立ち入つた話などをするものは一人もありませんでした。中には話す種をもたないのも大分いたでしょうが、たといもついても黙っているのが普通のようにでした。比較的自由な空気を呼吸している今のあなた方から見たら、定めし変に思われるでしょう。それが道学の余習なのか、または一種のはにかみなのか、判断はあなたの理解に任せて置きます。

Kと私は何でも話し合える中でした。偶には愛とか恋とかいう問題も、口に上らないではありませんでしたが、いつでも抽象的な理論に落ちてしまふだけでした。それも滅多には話題にならなかつたのです。大抵は書物の話と学問の話と、未来の事業と、抱負と、修養の話ぐらいで持ち切つていたのです。いくら親しくつてもこう堅くなつた日には、突然調子を崩せるものではありません。二人はただ堅いなりに親しくなるだけです。私はお嬢

さんの事をKに打ち明けようと思ひ立ってから、何遍齒がゆい不快に悩まされたか知れませんが。私はKの頭のどこか一カ所を突き破って、そこから柔らかない空気を吹き込んでやりたい気がしました。

あなた方から見て笑止千萬な事もその時の私には実際大困難だったのです。私は旅先でも宅にいた時と同じように卑怯でした。私は始終機会を捕える気でKを観察していながら、変に高踏的な彼の態度をどうする事も出来なかったのです。私に言わせると、彼の心臓の周囲は黒い漆で重く塗り固められたのも同然でした。私の注ぎ懸けようとする血潮は、一滴もその心臓の中へは入らないで、悉く弾き返されてしまうのです。

或る時はあまりKの様子が強くて高いので、私は却って安心した事もあります。そうして自分の疑いを腹の中で後悔すると共に、同じ腹の中で、Kに詫びました。詫びながら自分が非常に下等な人間のように見えて、急に厭な心持になるのです。しかし少時すると、以前の疑いがまた逆戻りをして、強く打ち返して来ます。すべてが疑いから割り出されるのですから、すべてが私には不利益でした。容貌もKの方が女に好かれるように見えましたが。性質も私のようにこせこせしていないところが、異性には気に入らるうと思われました。どこか間が抜けていて、それでどこかに確かりした男らしいところのある点も、私よりは優勢に見えました。学力になれば専門こそ違いますが、私は無論Kの敵でないと感じていました。——すべて向うの好いところだけがこう一度に眼先へ散らつき出すと、ちよつと安心した私はすぐ元の不安に立ち返るのです。

Kは落ち付かない私の様子を見て、厭ならひとまず東京へ帰ってもいいと言ったのですが、そう言われると、私は急に帰らなくなりました。実はKを東京へ帰したくなかったのかも知れません。二人は房州の鼻を廻つて向う側へ出ました。我々は暑い日に射られながら、苦しい思いをして、上総の其所一里に騙されながら、うんうん歩きました。私にはそうして歩いている意味がまるで解らなかつたくらいです。私は冗談半分Kにそう言いました。するとKは足があるから歩くのだと答えました。そうして暑くなると、海に入って行こうと言って、どこでも構わず潮へ漬りました。その後をまた強い日で照り付けられるのですから、身体が倦怠くてぐたぐたになりました。(本文)

*

*

さて、「……私は思い切って自分の心をKに打ち明けようと思いました。尤もこれはその時に始まった訳でもなかったのです。旅に出ない前から、私にはそうした腹が出来ていたのですけれども、打ち明ける機会をつかまえる事も、その機会を作り出す事も、私の手際では旨く行かなかつたのです。今から思うと、その頃私の周囲にいた人間はみんな妙でした。女に関して立ち入った話などをするものは一人もありませんでした。中には話す種をもたないのも大分いたでしょうが、たといもついても黙っているのが普通のようにでした。比較的自由的な空気を呼吸している今のあなた方から見たら、定めし変に思われるでしょう。それが道学の余習なのか、または一種のはにかみなのか、判断はあなたの理解に任せて置きます。(明治という時代の、空気がその人の性格や事情などにもよるのでしよう。)

Kと私は何でも話し合える中でした。偶には愛とか恋とかいう問題も、口の上にはありませんでしたが、いつでも抽象的な理論に落ちてしまうだけでした。それも滅多には話題にならなかつたのです。大抵は書物の話と学問の話と、未来の事業と、抱負と、修養の話ぐらいで持ち切っていたのです。いくら親しくつてもこう堅くなつた日には、突然

調子を崩せるものではありません。二人はただ堅いなりに親しくなるだけです。私はお嬢さんの事をKに打ち明けようと思ひ立つてから、何遍歯がゆい不快に悩まされたか知れませんが。(若しもこの先生という人にどこか問題があるとすれば、それは、この「躊躇」かも知れない。どうしても必要な時には、思い切つて、一步を踏み出す勇氣が必要になるかと思うが、この時の先生にはそれが不十分だったのかも知れない)。私はKの頭(堅い頭)のどこか一カ所を突き破つて、そこから柔らかない空気(柔らかない考え方など)を吹き込んでやりたい気がしました。

あなたの方から見て笑止千萬な事もその時の私には実際大困難だったので。私は旅先でも宅にいた時と同じように卑怯でした。私は始終機会を捕える気でKを観察していながら、変に高踏的な彼の態度をどうする事も出来なかつたのです。私に言わせると、彼の心臓の周囲は黒い漆で重く塗り固められたのも同然でした。私の注ぎ懸けようとする血潮は、一滴もその心臓の中へは入らないで、悉く弾き返されてしまうのです。

或る時はあまりKの様子が強くて高いので、私は却つて安心した事もあります。そうして自分の疑いを腹の中で後悔すると共に、同じ腹の中で、Kに詫びました。詫びながら自分が非常に下等な人間のように見えて、急に厭な心持になるのです。しかし少時すると、以前の疑いがまた逆戻りをして、強く打ち返して来ます。すべてが疑いから割り出されるのですから、すべてが私には不利益でした。容貌もKの方が女に好かれるように見えましたが。性質も私のようにこせこせしていないところが、異性には気に入らうと思われました。どこか間が抜けていて、それでどこかに確かりした男らしいところのある点も、私よりは優勢に見えました。学力になれば専門(Kの専攻は宗教学か哲学か?)こそ違いますが、私は無論Kの敵でないと自覚していました。——すべて向うの好いところだけがこう一度に眼先へ散らつき出すと、ちよつと安心した私はすぐ元の不安に立ち返るのです。(つまり、自分とKとを比較対照してみたら、Kの方が異性には好かれそうなので、もしかしたらお嬢さんも「Kの方を選ぶ」のではないかと心配しているのである。)

さて、この一連の「先生とKとの様々な比較対照」は、まさにKという「人物像」を知る上では極めて、「貴重な記述」ではあるが、ただ、これは先生から見た「Kという人物像」に過ぎず、実際の「Kという人物」が一体どういう人物であつたかはまた別の問題になるのである。——例えば、太宰治という人は、自分の「人間恐怖」(人間が怖いという)ことを隠す為に、有名な「道化」を演じたとあり、また、自分の「心の弱さ」を隠すために、有名な「無頼派」を装つたともある。つまり、人間を外から見た「事実」(外的事実)と、その人自身の心の中の「事実」(内的事実)とは、もちろん、一致する場合もあるだろうし、また、全然違うという場合もあり得るといふことである。つまり、他人の「心の中」というのは、誰にとつても分かりようのないまさに「ブラックボックス」なのである。

Kは落ち付かない私の様子を見て、厭ならひとまず東京へ帰つてもいいと言つたのですが、そう言われると、私は急に帰らなくなりました。実はKを東京(お嬢さんがいる処)へ帰したくなかつたのかも知れませんが。(それはKとお嬢さんがより接近することを怖れているからである)。二人は房州の鼻を廻つて向う側へ出ました。我々は暑い日に射られながら、苦しい思いをして、上総の其所一里(すぐ其所が実は一里ある)に騙されながら、

うんうん歩きました。私にはそうして歩いていく意味がまるで解らなかつたくらいです。私は冗談半分Kにそう言いました。するとKは足があるから歩くのだと答えました。そうして暑くなると、海に入って行こうと言って、どこでも構わず潮へ漬りました。その後をまた強い日で照り付けられるのですから、身体が倦怠くてぐたぐたになりました。(これは、結局、これというはつきりとした「目的や目的地」などを決めずに、二人でふらつと旅に出ってしまった結果ということである。)

三十、日蓮の誕生寺と鯉

「……こんな風にして歩いてみると、暑さと疲労とで自然身体の調子が狂って来るものです。尤も病気とは違います。急に他の身体の中へ、自分の靈魂が宿替をしたような気分になるのです。私は平生の通りKと口を利きながら、どこかで平生の心持と離れるようになりました。彼に対する親しみも憎しみも、旅中限りという特別な性質を帯る風になったのです。つまり二人は暑さのため、潮のため、また歩行のため、在来と異なった新しい関係に入る事が出来たのでしょう。その時の我々はあたかも道づれになった行商のようなものでした。いくら話をしていとも違って、頭を使う込み入った問題には触れませんでした。

我々はこの調子でどうとう銚子まで行つたのですが、道中たつた一つの例外があつたのを今に忘れる事が出来ないのです。まだ房州を離れない前、二人は小湊という所で、鯛の浦を見物しました。もう年数も余程経っていますし、それに私にはそれ程興味のない事です。それから、判然とは覚えていませんが、何でも其所は日蓮の生れた村だとかいう話でした。日蓮の生れた日に、鯛が二尾磯に打ち上げられていたとかいう言伝えになつて居るのです。それ以来村の漁師が鯛をとる事を遠慮して今に至つたのだから、浦には鯛が沢山居るので。我々は小舟を備つて、その鯛をわざわざ見に出掛けたのです。

その時私はただ一図に波を見ていました。そうしてその波の中に動く少し紫がかつた鯛の色を、面白い現象の一つとして飽かず眺めました。しかしKは私ほどそれに興味をもち得なかつたものと見えます。彼は鯛よりも却つて日蓮の方を頭の中で想像していたらしいのです。丁度そこに誕生寺という寺がありました。日蓮の生れた村だから誕生寺とでも名を付けたものでしょう、立派な伽藍でした。Kはその寺に行つて住持に会つてみると言い出しました。実を言うと、我々は随分変な服装をして居たのです。ことにKは風のために帽子を海に吹き飛ばされた結果、菅笠を買つて被つて居ました。着物は固より双方とも垢じみた上に汗で臭くなつて居ました。私は坊さんなどに会うのは止そうと言いました。Kは強情だから聞きません。厭なら私だけ外に待つていろと言つたのです。私は仕方がないからいっしょに玄関にかかりましたが、心のうちではきつと断られるに違いないと思つて居ました。ところが坊さんというものは案外丁寧なもので、広い立派な座敷へ私たちを通して、すぐ会つてくれました。その時分の私はKと大分考えが違つて居ましたから、坊さんとKの談話にそれほど耳を傾ける気も起りませんでした。Kはしきりに日蓮の事を聞いていたようです。日蓮は草日蓮と言われる位で、草書が大変上手であつたと坊さんが言つた時、字の拙いKは、何だ下らないという顔をしたのを私はまだ覚えて居ます。Kはそんな事よりも、もっと深い意味の日蓮が知れたかつたのでしよう。坊さんがその点

でKを満足させたかどうかは疑問ですが、彼は寺の境内を出ると、しきりに私に向って日蓮の事を云々出ししました。私は暑くて草臥れて、それどころではありませんでしたから、ただ口の先で好い加減な挨拶をしていました。それも面倒になつてしまひには全く黙つてしまつたのです。

たしかその翌る晩の事だと思ひますが、二人は宿へ着いて飯を食つて、もう寝ようという少し前になつてから、急にむずかしい問題を論じ合ひ出しました。Kは昨日自分の方から話しかけた日蓮の事について、私を取り合なかつたのを、快く思つていながつたのです。精神的に向上心がないものは馬鹿だと言つて、何だか私をさも軽薄もののようにやり込めるのです。ところが私の胸にはお嬢さんの事が蠕蠕していますから、彼の侮蔑に近い言葉をただ笑つて受け取る訳に行きません。私は私で弁解を始めたのです。(本文)

*

*

さて、「……こんな風にして歩いてみると、暑さと疲労とで自然身体の調子が狂つて来るものです。尤も病氣とは違います。急に他の身体の中へ、自分の靈魂が宿替をしたような気分になるのです。私は平生の通りKと口を利きながら、どこかで平生の心持と離れるようになりました。彼に対する親しみも憎しみも、旅中限りという特別な性質を帯びる風になつたのです」。つまり二人は暑さのため、潮のため、また歩行のため、在来と異なつた新しい関係に入る事が出来たのでしよう。その時の我々はあたかも道づれになつた行商のようなものでした。いくら話をしていとも違つて、頭を使う込み入つた問題には触れませんでした。——それは、普段の日常的な生活の中の「思考(思索)活動」と、旅や旅行先で実際に様々な事物を「見聞き嗅ぎ味ひ触れ感じ経験」しながらの「思考(思索)活動」では、その話す「内容」も気持ちも自然と違つたものになるのである。

我々はこの調子でとうとう銚子まで行つたのですが、道中たつた一つの例外があつたのを今に忘れる事が出来ないのです。まだ房州を離れない前、二人は小湊という所で、鯛の浦を見物しました。もう年数も余程経つていますし、それに私にはそれ程興味のない事です。判然とは覚えていませんが、何でも其所は日蓮の生れた村だとかいふ話でした。日蓮の生れた日に、鯛が二尾磯に打ち上げられていたとかいふ言伝えになつて居るのです。それ以来村の漁師が鯛をとる事を遠慮して今に至つたのだから、浦には鯛が沢山居るので。我々は小舟を備つて、その鯛をわざわざ見に出掛けたのです。

その時私はただ一図に波を見ていました。そうしてその波の中に動く少し紫がかつた鯛の色を、面白い現象の一つとして飽かず眺めました。しかしKは私ほどそれに興味をもち得なかつたものと見えます。彼は鯛よりも却つて日蓮の方を頭の中で想像していたらしいのです。丁度そこに誕生寺という寺がありました。日蓮の生れた村だから誕生寺とも名を付けたものでしよう、立派な伽藍でした。Kはその寺に行つて住持に会つてみると言ひ出しました。実を言うと、我々は随分変な服装をして居たのです。ことにKは風のために帽子を海に吹き飛ばされた結果、菅笠を買つて被つて居ました。着物は固より双方とも垢じみた上に汗で臭くなつて居ました。私は坊さんなどに会ふのは止そうと言ひました。Kは強情だから聞きません。厭なら私だけ外に待つていろと言ひます。私は仕方がないからいっしょに玄関にかかりましたが、心のうちではきつと断られるに違ひないと思つて居ました。ところが坊さんというものは案外丁寧なもので、広い立派な座敷へ私たちを通して、すぐ会つてくれました。その時分の私はKと大分考えが違つて居ましたから、

坊さんとKの談話にそれほど耳を傾ける気も起りませんでした。Kはしきりに日蓮の事を聞いていたようです。日蓮は草日蓮と言われる位で、草書が大変上手であったと坊さんが言った時、字の拙いKは、何だ下らないという顔をしたのを私はまだ覚えています。Kはそんな事よりも、もつと深い意味の日蓮が知りたかつたのでしよう。坊さんがその点でKを満足させたかどうかは疑問ですが、彼は寺の境内を出ると、しきりに私に向つて日蓮の事を云々し出しました。私は暑くて草臥れて、それどころではありませんでしたから、ただ口の先で好い加減な挨拶をしていました。それも面倒になつてしまひには全く黙つてしまつたのです。(これは、Kにしてみれば、自分がまじめに話をしているのに、先生はそれを真面に聞こうともしない、そのことに腹を立てているのかも知れない。)

たしかその翌る晩の事だと思ひますが、二人は宿へ着いて飯を食つて、もう寝ようという少し前になつてから、急にむずかしい問題を論じ合ひ出しました。Kは昨日自分の方から話しかけた日蓮の事について、私を取り合なかつたのを、快く思つていなかつたのです。精神的に向上心がないものは馬鹿だと言つて、何だか私をさも軽薄もののようにやり込めるのです。ところが私の胸にはお嬢さんの事が蠕蠕していますから、彼の侮蔑に近い言葉をただ笑つて受け取る訳に行きません。私は私で弁解を始めたのです。

さて、これは先生とKとの関係は、今までのような「親友関係」から、むしろお嬢さんをめぐつての「恋敵」(敵同士)になりかかつているのであり、彼の侮蔑に近い言葉をただ笑つて受け取る訳には行かず、私は私で弁解を始めたのである。

三十一、人間らしさについての議論

「……その時私はしきりに人間らしいという言葉を使ひました。Kはこの人間らしいという言葉のうちに、私が自分の弱点のすべてを隠していると申すのです。成る程後から考へれば、Kの言う通りでした。しかし人間らしくない意味をKに納得させるためにその言葉を使い出した私には、出立点がすでに反抗的でしたから、それを反省するような余裕はありません。私はなおの事自説を主張しました。するとKが彼のどこをつらまえて人間らしくないのかと私に聞くのです。私は彼に告げました。——君は人間らしいのだ。或は人間らし過ぎるかも知れないのだ。けれども口の先だけでは人間らしくないような事を言うのだ。また人間らしくないように振舞おうとするのだ。」

私がこう言った時、彼はただ自分の修養が足りないから、他にはそう見えるかも知れないと答へただけで、一向私を反駁しようとしませんでした。私は張合いが抜けたというよりも、却つて気の毒になりました。私はすぐ議論をそこで切り上げました。彼の調子もだんだん沈んで来ました。もし私が彼の知つている通り昔の人を知るならば、そんな攻撃はしないだろうと言つて悵然としていました。Kの口にした昔の人とは、無論英雄でもなければ豪傑でもないのです。霊のために肉を虐げたり、道のために体を鞭つたりしたいわゆる難行苦行の人を指すのです。Kは私に、彼がどのくらいそのために苦しんでいるか解らないのが、いかにも残念だと明言しました。

Kと私とはそれぎり寝てしまいました。そうしてその翌る日からまた普通の行商の態度に返つて、うんうん汗を流しながら歩き出したのです。しかし私は路々その晩の事をひよひよいと思ひ出しました。私にはこの上もない好い機会が与えられたのに、知らない振

りをしてなぜそれをやり過ぎたのだろうという悔恨の念が燃えたのです。私は人間らしいという抽象的な言葉を用いる代りに、もっと直截で簡単な話をKに打ち明けてしまえば好かつたと思ひ出したのです。実を言うと、私がそんな言葉を創造したのも、お嬢さんに対する私の感情が土台になっていたのですから、事実を蒸溜して拵えた理論などをKの耳に吹き込むよりも、原の形そのままを彼の眼の前に露出した方が、私にはたしかに利益だったでしょう。私にそれが出来なかつたのは、学問の交際が基調を構成している二人の親しみに、自から一種の惰性があつたため、思い切つてそれを突き破るだけの勇氣が私に欠けていたのだという事をここに自白します。氣取り過ぎたと言つても、虚栄心が崇つたと言つても同じでしょうが、私の言う氣取るとか虚栄とかいう意味は、普通のは少し違います。それがあなたに通じさえすれば、私は満足なのです。

我々は真黒になつて東京へ帰りました。帰つた時は私の氣分がまた變つていました。人間らしいとか、人間らしくないとかいう小理屈は殆んど頭の中に残つていませんでした。Kにも宗教家らしい様子が全く見えなくなりました。恐らく彼の心のどこにも靈がどうの肉がどうのという問題は、その時宿つていなかったでしょう。二人は異人種のような顔をして、忙しそうに見える東京をぐるぐる眺めました。それから兩國へ来て、暑いのに軍鶏を食いました。Kはその勢いで小石川まで歩いて帰ろうと言つたのです。体力から言えばKよりも私の方が強いのですから、私はすぐ応じました。

宅へ着いた時、奥さんは二人の姿を見て驚きました。二人はただ色が黒くなつたばかりでなく、無闇に歩いていたうちに大變瘠せてしまつたのです。奥さんはそれでも丈夫そうになつたと言つて賞めてくれるのです。お嬢さんは奥さんの矛盾がおかしいと言つてまた笑い出しました。旅行前時々腹の立つた私も、その時だけは愉快な心持がしました。場合が場合なると、久しぶりに聞いたせいでしょう。(本文)

*

*

さて、「……その時私はしきりに人間らしいという言葉を使いました」。Kはこの人間らしいという言葉のうちに、私が「自分の弱点のすべてを隠している」と言うのです。(それは、なぜかと問えば、それは、目の前の実に様々な「欲望や感情」などに振りまわされてしまうのが、まさに「人間らしい」ということになるからである)。成る程後から考えれば、Kの言う通りでした。しかし「人間らしくない」意味をKに納得させるためにその言葉を使い出した私には、出立点がすでに反抗的でしたから、それを反省するような余裕はありません。私はなおの事自説を主張しました。するとKが「彼のどこをつかまえて人間らしくない」というのかと私に聞くのです。私は彼に告げました。「……君は人間らしいのだ。或は人間らし過ぎるかも知れないのだ。けれども口の先だけでは人間らしくないような事を言うのだ。また人間らしくないように振舞おうとするのだ」とある。これは、実に見事な言葉であり、まさに「的のど真ん中」を射貫いているのである。

つまり、Kという人は、目の前の様々な「欲望や感情」などには振りまわされないようなことを言つたり振る舞つたりしているが、しかし、人間としての様々な「弱さ」は当然持ち合わせているのであり、その「弱さ」を修養で克服して、まさに「精神的に強い人間」になろうとしているのである。というのも、彼自身、「……Kはただ学問が自分の目的ではないと主張するのです。意志の力を養つて強い人になるのが自分の考えだと言つたのです。それには(精神を鍛えるには)なるべく窮屈な境遇にいななくてはならないと結論するので

す」とあり、彼が目指したものは、恐らく、（誰にも依存しない）「独立独歩の道」（或いは「精神の自立」）のようなことではないかと思う。）

私がこう言った時、彼はただ「自分の修養が足りない」から、他にはそう見えるかも知れないと答えただけで、一向私を反駁しようとしませんでした。私は張合いが抜けたというよりも、却って気の毒になりました。私はすぐ議論をそこで切り上げました。彼の調子もだんだん沈んで来ました。もし私が彼の知っている通り昔の人を知るならば、そんな攻撃はしないだろうと言って悵然としていました。Kの口にした昔の人とは、無論英雄でもなければ豪傑でもない。（英雄や豪傑は所詮俗人に過ぎない）。霊のために肉を虐げたり、道のために体を鞭ったりしたいわゆる難行苦行の人を指すのです。Kは私に、彼がどのくらいそのために苦しんでいるか解らないのが、いかにも残念だと明言しました。（つまりKもそのような道を歩んでいるということである。）

Kと私とはそれぎり寝てしまいました。そうしてその翌日からまた普通の行商の態度に返って、うんうん汗を流しながら歩き出したのです。しかし私は路々その晩の事をひよいひよいと思ひ出しました。私にはこの上もない好い機会が与えられたのに、知らない振りをしてなぜそれをやり過ぎたのだろうという悔恨の念が燃えたのです。私は人間らしいという抽象的な言葉を用いる代りに、もっと直截で簡単な話をKに打ち明けてしまえば好かったと思ひ出したのです。これは実を言うと、私がそんな言葉を創造したのも、お嬢さんに対する私の感情が土台になっていたのですから、事実を蒸溜して拵えた理論などをKの耳に吹き込むよりも、原の形そのままを彼の眼の前に露出した方が、私にはたしかに利益だったでしょう。（それは「自分はお嬢さんのことが好きだとKに打ち明けること」であるが）、私にそれが出来なかつたのは、学問の交際が基調を構成している二人の親しみに、自から一種の惰性があつたため、思い切つてそれを突き破るだけの勇氣が私に欠けていたのだという事をここに自白します。氣取り過ぎたと言つても、虚栄心が祟つたと言つても同じでしょうが、私の言う氣取るとか虚栄とかいう意味は、普通のとは少し違います。（ここは先生ならではの「微妙な心理」であり、氣取つているのでも、虚栄心からでもなく、ただ思い切つて自分はお嬢さんが好きだと真つ正面からKにぶつかつていくだけの勇氣が欠けていた）。それがあなたに通じさえすれば、私は満足なのです。

我々は真黒になつて東京へ帰りました。帰つた時は私の氣分がまた變つていました。人間らしいとか、人間らしくないとかいう小理屈は殆んど頭の中に残つていませんでした。Kにも宗教家らしい様子が全く見えなくなりました。恐らく彼の心のどこにも霊がどうの肉がどうのという問題は、その時宿つていなかったでしょう。（つまり旅先の「思考」《思索》活動から普段の「思考」《思索》活動へと戻つたということである）。二人は異人種のような顔をして、忙しそうに見える東京をぐるぐる眺めました。それから両国へ来て、暑いのに軍鶏を食いました。Kはその勢いで小石川まで歩いて帰ろうと言つたのです。体力から言えばKよりも私の方が強いのですから、私はすぐ応じました。

宅へ着いた時、奥さんは二人の姿を見て驚きました。二人はただ色が黒くなつたばかりでなく、無闇に歩いていたらうちに大変瘡やせてしまつたのです。奥さんはそれでも丈夫そうになつたと言つて賞めてくれるのです。お嬢さんは奥さんの矛盾がおかしいと言つてまた笑ひ出しました。旅行前時々腹の立つた私も、その時の（お嬢さんの笑ひ）だけは愉快な心持がしました。場合が場合なのと、久しぶりに聞いたせいでしょう。

*

*

三十二、旅行後のお嬢さんの態度

三十二、旅行後のお嬢さんの態度

「……そのみならず私はお嬢さんの態度の少し前と変っているのに気が付きました。久し振りで旅から帰った私たちが平生の通り落ち付くまでには、万事について女の手が必要だったので、その世話をしてくれる奥さんとはとにかく、お嬢さんが凡て私の方を先にして、Kを後廻しにするように見えたのです。それを露骨にやられては、私も迷惑したかも知れません。場合によっては却って不快の念さえ起しかねなかつたらうと思うのですが、お嬢さんの所作はその点で甚だ要領を得ていたから、私は嬉しかつたのです。つまりお嬢さんは私だけに解るように、持前の親切を余分に私の方へ割り宛ててくれたのです。だからKは別に厭な顔もせず平気でいました。私は心の中でひそかに彼に対する愷歌を奏しました。

やがて夏も過ぎて九月の中頃から我々はまた学校の課業に出席しなければならぬ事になりました。Kと私とは各自の時間の都合で出入りの刻限にまた遅速が出来てきました。私がKより後れて帰る時は一週に三度ほどありましたが、いつ帰ってもお嬢さんの影をKの室に認める事はないようになりました。Kは例の眼を私の方に向けて、「……今帰ったのか」を規則の如く繰り返しました。私の会釈も殆んど器械の如く簡単でかつ無意味でした。

たしか十月の中頃と思います。私は寢坊をした結果、日本服のまま急いで学校へ出た事があります。穿物も編上などを結んでいる時間が惜しいので、草履を突っかけたなり飛び出したのです。その日は時間割から言うと、Kよりも私の方が先へ帰るはずになっていました。私は戻って来ると、そのつもりで玄関の格子をがらりと開けたのです。するといいと思っていたKの声がひよいと聞こえました。同時にお嬢さんの笑い声が私の耳に響きました。私はいつものように手数のかかる靴を穿いていないから、すぐ玄関が上がって仕切の襖を開けました。私は例の通り机の前に坐っているKを見ました。しかしお嬢さんはもうそこには居なかつたのです。私はあたかもKの室から逃れ出るように去るその後ろ姿をちらりと認めただけでした。私はKにどうして早く帰つたのかと問いました。Kは心持が悪いから休んだのだと答えました。私が自分の室に這入ってそのまま坐っていると、間もなくお嬢さんが茶を持って来てくれました。その時お嬢さんは始めてお帰りと云って私に挨拶をしました。私は笑いながらさつきはなぜ逃げたんですと聞けるような捌けた男ではありません。それでいて腹の中では何だかその事が気にかかるような人間だつたのです。お嬢さんはすぐ座を立てて縁側伝いに向うへ行つてしまいました。しかしKの室の前に立ち留まつて、二言三言内と外とで話をしていました。それは先刻の続きらしかつたのですが、前を聞かない私にはまるで解りませんでした。

そのうちお嬢さんの態度がだんだん平気になつて来ました。Kと私がいっしょに宅にいる時でも、よくKの室の縁側へ来て彼の名を呼びました。そうしてそこへ入つて、ゆつくりしていました。無論郵便を持つて来る事もあるし、洗濯物を置いて行く事もあるのですから、そのくらの交通は同じ宅にいる二人の關係上、当然と見なければならぬのです。ところが、ぜひお嬢さんを専有したいという強烈な一念に動かされている私には、どうしてもそれが当然以上に見えたのです。ある時はお嬢さんがわざわざ私の室へ来るのを回避して、Kの方ばかりへ行くように思われる事さえあつたくらいです。それならなぜKに宅を

出てもらわないのかとあなたは聞くでしょう。しかしそうすれば私がKを無理に引張って来た主意が立たなくなるだけです。私にはそれが出来ないのです。(本文)

*

*

さて、「……そのみならず私はお嬢さんの態度の少し前と変わっているのに気が付きました。久し振りで旅から帰った私たちが平生の通り落ち付くまでには、万事について女の手が必要だったのですが、その世話をしてくれる奥さんとはかく、お嬢さんが凡て私の方を先にして、Kを後廻しにするように見えたのです。それを露骨にやられては、私も迷惑したかも知れません。場合によっては却って不快の念さえ起しかねなかったろうと思うのですが、お嬢さんの所作はその点で甚だ要領を得ていたから、私は嬉しかったのです。つまりお嬢さんは私だけに解るように、持前の親切を余分に私の方へ割り宛てくれたのです。だからKは別に厭な顔もせず平気でいました。私は心の中でひそかに彼に対する慥歌を奏しました」とある。

これはもちろん、二人が旅に出ている間、奥さんが「お嬢さん」にそうするように注意を促したのであり、その理由は、お嬢さんがKという人に必要以上に優しく過ぎてKに変な誤解を与えないためと、もう一つは、奥さんもお嬢さんも結婚する相手は「先生」と決めているからである。これは最初から一貫して少しも変わることはないのに、先生だけがああでもないこうでもない余りに余計なことを考え過ぎてしまって、自ら問題を複雑にして勝手に深く悩み苦しむことになるのである。」

やがて夏も過ぎて九月の中頃から(大学三年の新学期で)我々はまた学校の課業に出席しなければならぬ事になりました。Kと私とは各自の時間の都合で出入りの刻限にまた遅速が出来てきました。私がKより後れて帰る時は一週に三度ほどありましたが、いつ帰ってもお嬢さんの影をKの室に認める事はないようになりました。Kは例の眼を私の方に向けて、「……今帰ったのか」を規則の如く繰り返しました。私の会釈も殆んど器械の如く簡単でかつ無意味でした。(ここまでは奥さんの言いつけを守っていたのである。)

たしか十月の中頃と思います。私は寝坊をした結果、日本服のまま急いで学校へ出た事があります。穿物も編上などを結んでいる時間が惜しいので、草履を突っかけたなり飛び出したのです。その日は時間割から言うと、Kよりも私の方が先へ帰るはずになっていました。私は戻って来ると、そのつもりで玄関の格子をがらりと開けたのです。するといまいと思っていたKの声がひよいと聞こえました。同時にお嬢さんの笑い声が私の耳に響きました。私はいつものように手数のかかる靴を穿いていないから、すぐ玄関に上がって仕切の襖を開けました。私は例の通り机の前に坐っているKを見ました。しかしお嬢さんはもうそこには居なかつたのです。私はあたかもKの室から逃れ出るように去るその後ろ姿をちらりと認めただけでした。私はKにどうして早く帰ったのかと問いました。Kは心持が悪いから休んだのだと答えました。私が自分の室に這入ってそのまま坐っていると、間もなくお嬢さんが茶を持って来てくれました。その時お嬢さんは始めてお帰りと行って私に挨拶をしました。私は笑いながらさっきはなぜ逃げたんですと聞けるような捌けた男ではありません。それでいて腹の中では何だかその事が気にかかるような人間だったのです。お嬢さんはすぐ座を立って縁側伝いに向うへ行ってしまうました。しかしKの室の前に立ち留まって、二言三言内と外とで話をしていました。それは先刻の続きらしかったのですが、前を聞かない私にはまるで解りませんでした。

そのうちお嬢さんの態度がだんだん平気になって来ました。Kと私がいつしよに宅にいる時でも、よくKの室の縁側へ来て彼の名を呼びました。そうしてそこへ入って、ゆつくりしていました。無論郵便を持って来る事もあるし、洗濯物を置いて行く事もあるのでから、そのくらの交通は同じ宅にいる二人の関係上、当然と見なければならぬのでしようが、ぜひお嬢さんを専有したいという強烈な一念に動かされている私には、どうしてもそれが当然以上に見えたのです。ある時はお嬢さんがわざわざ私の室へ来るのを回避して、Kの方ばかりへ行くように思われる事さえあつたくらいです。それならなぜKに宅を出してもらわないのかとあなたは聞くでしょう。しかしそうすれば私がKを無理に引張つて来た主意が立たなくなるだけです。私にはそれが出来ないのです。

*

*

さて、「……ぜひお嬢さんを専有したい」という強烈な一念に動かされている私」とあるが、これは、第一部の「恋（恋愛）」のところ、先生の「……君、黒い長い髪で縛られた時の心持を知っていますか」と聞いている場面があつたが、今、まさに親友（K）とお嬢さんが親しく話をしてる場面などに出つくわすと、「先生」という人の「心の中」では、抑え難いほどの凄まじいまでの「嫉妬心」や「不平・不満」、その他の「負の感情」（恨みや憎しみ）などに襲われてしまうのである。それは、誰の「心の中」でも全く同じことであり、とても「正気」ではいられないほどの「精神的状態」に深く陥つてしまうのである。それが、まさに「恋」（恋愛）であり、今、まさに「Kとお嬢さんとの関係」が一体どうなっているのか？ 気になって気になつてどうにもしようがない「精神的状態」であり、それは、次のような「出来事」で、さらに「ピーク」へと達するのである、

三十三、糠る道でKとお嬢さんに遭う

「……十一月の寒い雨の降る日の事でした。私は外套を濡らして例の通り蒟蒻閣魔を抜けて細い坂路を上つて宅へ帰りました。Kの室は空虚うでしたけれども、火鉢には継ぎたての火が暖かそうに燃えていました。私も冷たい手を早く赤い炭の上に翳そうと思つて、急いで自分の室の仕切を開けました。すると私の火鉢には冷たい灰が白く残っているだけで、火種さえ尽きているのです。私は急に不愉快になりました。

その時私の足音を聞いて出て来たのは、奥さんでした。奥さんは黙つて室の真中に立っている私を見て、気の毒そうに外套を脱がせてくれたり、日本服を着せてくれたりしました。それから私が寒いというのを聞いて、すぐ次の間からKの火鉢を持って来てくれました。私がKはもう帰つたのかと聞きましたら、奥さんは帰つてまた出たと答えました。その日もKは私より後れて帰る時間割だったのでから、私はどうした訳かと思ひました。奥さんは大方用事でも出来たのだろうと言っていました。

私はしばらくそこに坐つたまま書見をしました。宅の中がしんと静まつて、誰の話す声も聞こえないうちに、初冬の寒さと佗びしさとが、私の身体に食い込むような感じがしました。私はすぐ書物を伏せて立ち上りました。私はふと賑やかな所へ行きたくなつたのです。雨はやつと歇つたようですが、空はまだ冷たい鉛のように重く見えたので、私は用心のため、蛇の目を肩に担いで、砲兵工廠の裏手の土塀について東へ坂を下りました。その時分はまだ道路の改正が出来ない頃なので、坂の勾配が今よりもずっと急でした。道幅

も狭くて、ああ真直ではなかったのです。その上あの谷へ下りると、南が高い建物で塞がっているのと、放水がよくないので、往来はどろどろでした。ことに細い石橋を渡って柳町の通りへ出る間が非道かつたのです。足駄でも長靴でも無闇に歩く訳には行きませんが、誰でも路の真中に自然と細長く泥が掻き分けられた所を、後生大事に辿って行かなければならないのです。その幅は僅か一、二尺しかないのですから、手もなく往来に敷いてある帯の上を踏んで向うへ越すのと同じ事です。行く人はみんな一列になってそろそろ通り抜けます。私はこの細帯の上で、はたりとKに出合いました。足の方にばかり気を取られていた私は、彼と向き合うまで、彼の存在にまるで気が付かずでした。私は不意に自分の前が塞がったので偶然眼を上げた時、始めてそこに立っているKを認めたのです。私はKにどこへ行ったのかと聞きました。Kは一寸そこままで言ったがりでした。彼の答えはいつもの通りふんという調子でした。Kと私は細い帯の上で身体を替せました。するとKのすぐ後に一人の若い女が立っているのが見えました。近眼の私には、今までそれがよく分らなかつたのですが、Kをやり越した後で、その女の顔を見ると、それが宅のお嬢さんだったので、私は少なからず驚きました。お嬢さんは心持薄赤い顔をして、私に挨拶をしました。その時分の束髪は今と違って廂が出ていないのです、そうして頭の真中に蛇のようにぐるぐる巻きつけてあったものです。私はぼんやりお嬢さんの頭を見ていましたが、次の瞬間に、どっちか路を譲らなければならぬのだという事に気が付きました。私は思い切つてどろどろの中へ片足踏ん込みました。そうして比較的通りやすい所を空けて、お嬢さんを渡してやりました。

それから柳町の通りへ出た私はどこへ行って好いか自分にも分らなくなりました。どこへ行っても面白くないような心持がするのです。私は飛泥の上がるのも構わずに、糠る海の中を自暴にどしどし歩きました。それから直ぐ宅へ帰って来ました。(本文)

*

*

さて、「……十一月の寒い雨の降る日の事でした。私は外套を濡らして例の通り蒟蒻閣魔を抜けて細い坂路を上って宅へ帰りました。Kの室は空虚うでしたけれども、火鉢には継ぎたての火が暖かそうに燃えていました。私も冷たい手を早く赤い炭の上に翳そうと思つて、急いで自分の室の仕切を開けました。すると私の火鉢には冷たい灰が白く残っているだけで、火種さえ尽きているのです。私は急に不愉快になりました。(先生は、ふと差別を受けたような感じがしたのかも知れないが、しかし、事情を聞けば、Kは帰ってまた出たということ、Kの室の火鉢に火が燃えていても不思議はないのである。)

その時私の足音を聞いて出て来たのは、奥さんでした。奥さんは黙って室の真中に立っている私を見て、気の毒そうに外套を脱がせてくれたり、日本服を着せてくれたりしました。それから私が寒いというのを聞いて、すぐ次の間からKの火鉢を持って来てくれました。私がKはもう帰つたのかと聞きましたら、奥さんは帰つてまた出たと答えました。その日もKは私より後れて帰る時間割だったので、私はどうした訳かと思いました。

(疑念が生じたが)、奥さんは大方用事でも出来たのだろうと言っていました。

私はしばらくそこに坐つたまま書見をしました。宅の中がしんと静まつて、誰の話し声も聞こえないうちに、初冬の寒さと佗びしさとが、私の身体に食い込むような感じがしました。私はすぐ書物を伏せて立ち上りました。私はふと賑やかな所へ行きたくなつたのです。雨はやつと歇つたようですが、空はまだ冷たい鉛のように重く見えたので、私は用心

のため、蛇の目を肩に担いで、砲兵工廠の裏手の土塀について東へ坂を下りました。その時分はまだ道路の改正が出来ない頃なので、坂の勾配が今よりもずっと急でした。道幅も狭くて、ああ真直ではなかったのです。その上あの谷へ下りると、南が高い建物で塞がっているのと、放水がよくないので、往来はどろどろでした。ことに細い石橋を渡って柳町の通りへ出る間が非道かつたのです。足駄でも長靴でも無闇に歩く訳には行きません。誰でも路の真中に自然と細長く泥が掻き分けられた所を、後生大事に辿って行かなければならないのです。その幅は僅か一、二尺（三十〜六十センチ）しかないのですから、手もなく往来に敷いてある帯の上を踏んで向うへ越すのと同じ事です。行く人はみんな一列になってそろそろ通り抜けます。私はこの細帯の上で、はたりとKに出合いました。足の方にばかり気を取られていた私は、彼と向き合うまで、彼の存在にまるで気が付かずにいたのです。私は不意に自分の前が塞がったので偶然眼を上げた時、始めてそこに立っているKを認めたのです。私はKにどこへ行ったのかと聞きました。Kは一寸そこまてと言ったぎりでした。彼の答えはいつもの通りふんという調子でした。Kと私は細い帯の上で身体を替せました。（ここまでは偶然Kに出合ったということは何の問題もない。問題なのは、次である）。するとKのすぐ後に一人の若い女が立っているのが見えました。近眼の私には、今までそれがよく分らなかったのですが、Kをやり越した後で、その女の顔を見ると、それが宅のお嬢さんだったので、私は少なからず驚きました。お嬢さんは心持薄赤い顔をして、私に挨拶をしました。その時分の束髪は今と違って廂が出ていないのです、そうして頭の真中に蛇のようにぐるぐる巻きつけてあったものです。私はぼんやりお嬢さんの頭を見ていましたが、次の瞬間に、どっちか路を譲らなければならぬのだという事に気が付きました。私は思い切ってどろどろの中へ片足踏ん込みました。そうして比較的通りやすい所を空けて、お嬢さんを渡してやりました。（この時、先生の「頭の中」にあつたものは、なぜ二人は一緒にいるのだろ、うかという疑念である。）

それから柳町の通りへ出た私はどこへ行って好いか自分にも分らなくなりました。どこへ行っても面白くないような心持がするのです。私は飛泥の上がるのも構わずに、糠る海の中を自暴にどしどし歩きました。それから直ぐ宅へ帰って来ました。

三十四、先生のKに対する嫉妬心

「……私はKに向ってお嬢さんといっしょに出たのかと聞きました。Kはそうではないと答えました。真砂町で偶然出会ったから連れ立って帰って来たのだと説明しました。私はそれ以上に立ち入った質問を控えなければなりません。しかし食事の時、またお嬢さんに向って、同じ問いを掛けたくになりました。するとお嬢さんは私の嫌いな例の笑い方をするのです。そうしてどこへ行ったか中てみるとしまいに言うのです。その頃の私はまだ癩癩持ちでしたから、そう不真面目に若い女から取り扱われると腹が立ちました。ところがそこに気の付くのは、同じ食卓に着いているものうちで奥さん一人だったのです。Kはむしろ平気でした。お嬢さんの態度になると、知ってわざとやるのか、知らないで無邪気にやるのか、その区別がちよっと判然しない点がありました。若い女としてお嬢さんは思慮に富んだ方でしたけれども、その若い女に共通な私の嫌いなところも、あると思えば思えなくなかったのです。そうしてその嫌いなところは、Kが宅へ来てから、

始めて私の眼に着き出したのです。私はそれをKに対する私の嫉妬に帰していいものか、または私に対してお嬢さんの技巧と見做してしかるべきものか、ちよつと分別に迷いました。私は今でも決してその時の私の嫉妬心を打ち消す気はありません。私はたびたび繰り返した通り、愛の裏面にこの感情の働きを明らかに意識していたのですから。しかも傍のものから見ると、殆んど取るに足りない瑣事に、この感情がきつと首を持ち上げたがるのでしたから。これは余事ですが、こういう嫉妬は愛の半面じゃないでしょうか。私は結婚してから、この感情がだんだん薄らいで行くのを自覚しました。その代り愛情の方も決して元のように猛烈ではないのです。

私はそれまで躊躇していた自分の心を、一思いに相手の胸へ擲き付けようかと考え出しました。私の相手というのはお嬢さんではありません、奥さんの事です。奥さんにお嬢さんを呉れると明白な談判を開こうかと考えたのです。しかしそう決心しながら、一日一日と私は断行の日を延ばして行つたのです。そういうと私はいかにも優柔な男のように見えます、また見えても構いませんが、実際私の進みかねたのは、意志の力に不足があつたためではありません。Kの来ないうちは、他の手に乗るのが厭だという我慢が私を抑えて、一歩も動けないようにしていました。Kの来た後は、もしかするとお嬢さんがKの方に意があるのではなからうかという疑念が絶えず私を制するようになったのです。果してお嬢さんが私よりもKに心を傾けているならば、この恋は口へ言い出す価値のないものと私は決心していたのです。恥を掻かせられるのが辛いなどというのとは少し訳が違います。こつちでいくら思つても、向うが内心他の人に愛の眼を注いでいるならば、私はそんな女といつしよになるのは厭なのです。世の中では否応なしに自分の好いた女を嫁に貰つて嬉しがっている人もありますが、それは私たちよりよっぽど世間ずれのした男か、さもなければ愛の心理がよく呑み込めない鈍物のする事と、当時の私は考えていたのです。一度貰つてしまえばどうかこうか落ち付くものだらうの哲理では、承知する事が出来ないくらい私は熱していました。つまり私は極めて高尚な愛の理論家だったのです。同時に最も迂遠な愛の実家だったのです。

肝心のお嬢さんに、直接この私というものを打ち明ける機会も、長くいつしよにいるうちには時々出て来たのですが、私はわざとそれを避けました。日本の習慣として、そういう事は許されていないのだという自覚が、その頃の私には強くありました。しかし決してそればかりが私を束縛したとは言えません。日本人、ことに日本の若い女は、そんな場合に、相手に気兼ねなく自分の思った通りを遠慮せず口にするだけの勇氣に乏しいものと私は見込んでいたのです。(本文)

*

*

さて、「……私はKに向つてお嬢さんといつしよに出たのかと聞きました。Kはそうではないと答えました。真砂町で偶然出会つたから連れ立って帰つて来たのだと説明しました。私はそれ以上に立ち入った質問を控えなければなりませんでした。(先生としては少しほつとしたが)、しかし食事の時、またお嬢さんに向つて、同じ問いを掛けたくありませんでした。(それはお嬢さんの証言も得て、安心しなかったのである)。するとお嬢さんは私の嫌いな例の笑い方をするのです。そうしてどこへ行ったか中てみるとしまいに言うのです。(この時のお嬢さんの心理は、一人の仲を気にしている(疑っている)先生を見て笑い、一方、自分がそれほど信じられないのかと腹を立ててもいるのである)。その頃の

私はまだ癩癩持ちでしたから、そう不真面目に若い女から取り扱われると腹が立ちました。ところがそこに気の付くのは、同じ食卓に着いているものうちで奥さん一人だけたのです。Kはむしろ平気でした。お嬢さんの態度になると、知ってわざとやるのか、知らないで無邪気にやるのか、その区別がちよつと判然しない点がありました。若い女としてお嬢さんは思慮に富んだ方でしたけれども、その若い女に共通な私の嫌いなところも、あると思えば思えなくもなかったのです。そうしてその嫌いなところは、Kが宅へ来てから、始めて私の眼に着き出したのです。私はそれをKに対する私の嫉妬に帰していいものか、または私に対するお嬢さんの技巧と見倣してしかるべきものか、ちよつと分別に迷いました。私は今でも決してその時の私の嫉妬心を打ち消す気はありません。私はたびたび繰り返した通り、愛の裏面にこの感情の働きを明らかに意識していたのですから。しかも傍のものから見ると、殆んど取るに足りない瑣事に、この感情がきつと首を持ち上げたがるのでしたから。これは余事ですが、こういう嫉妬は愛の半面じゃないでしょうか。私は結婚してから、この感情がだんだん薄らいで行くのを自覚しました。その代り愛情の方も決して元のように猛烈ではないのです」とある。

例えば、お嬢さんを専有したいという、「強烈な一念」（つまり独占欲）が強ければ強いほど、それだけ殆んど取るに足りない些細なことにも、もの凄い「嫉妬心」に襲われてしまうものであるが、結婚をすれば、彼女は「すでに手に入れている」（つまり専有は当たり前前の状態）になっているので、それゆえ、彼女を何が何でも専有したいという、「強烈な一念」（つまり独占欲）も自然と弱まって行き、そして、その「独占欲」が弱まれば、その分「嫉妬心」も弱まって行くのである。

私はそれまで躊躇していた自分の心を、一思いに相手の胸へ擲き付けようかと考え出しました。私の相手というのはお嬢さんではありません、奥さんの事です。奥さんにお嬢さんを呉れると明白な談判を開こうかと考えたのです。しかしそう決心しながら、一日一日と私は断行の日を延ばして行つたのです。そういうと私はいかにも優柔な男のように見えます、また見えても構いませんが、実際私の進みかねたのは、意志の力に不足があったためではありません。Kの来ないうちには、他の手に乗るのが厭だという我慢が私を抑えて、二度と他人には騙されぬぞという決心が、一歩も動けないようにしていました。Kの来た後は、もしかするとお嬢さんがKの方に意があるのではなからうかという疑念が絶えず私を制するようになったのです。（先生はもつと自分に自信を持ってよかつたのである）。果してお嬢さんが私よりもKに心を傾けているならば、この恋は口へ言い出す価値のないものと私は決心していたのです。恥を掻かせられるのが辛いなどというのと少し訳が違います。こつちでいくら思つても、向うが内心他の人に愛の眼を注いでいるならば、私はそんな女といつしよになるのは厭なのです。（そうであるならば、なぜお嬢さんに自分のことが好きかどうかを直接確かめなかつたのだろうか？）

世の中では否応なしに自分の好いた女を嫁に貰って嬉しがっている人もありますが、それは私たちよりよっぽど世間ずれのした男か、さもなければ愛の心理がよく呑み込めない鈍物のする事と、当時の私は考えていたのです。一度貰つてしまえばどうかこうか落ち付くものだらうの哲理では、承知する事が出来ないくらい私は熱していました。つまり私は極めて高尚な愛の理論家だったので。同時に最も迂遠な愛の実際家だったので。つまり、先生という人は、いわゆる「相思相愛」であることを強く望んだのである。

肝心のお嬢さんに、直接この私というものを打ち明ける機会も、長く一緒にいるうちには時々出て来たのですが、私はわざとそれを避けました。日本の習慣として、そういう事は許されていないのだという自覚が、その頃の私には強くありました。(これは一体どういう意味なのか? 例えば、先生という人は、お嬢さんに直接「愛の告白」はしていない。奥さんに直接(お嬢さんへの)「愛の告白と結婚の申し込み」をしている。そして、先生という人は、お嬢さんの気持ちも確かめた方がいいと進言すると、奥さんは「……大丈夫です」と言う。つまり、お嬢さんも先生との結婚は納得済みであったということである。

しかし決してそればかりが私を束縛したとは言えません。日本人、ことに日本の若い女は、そんな場合に、相手に気兼ねなく自分の思った通りを遠慮せず口にするだけの勇氣に乏しいものと私は見込んでいたのです。——例えば、先生がお嬢さんに直接「愛の告白と結婚の申し込み」をしたとしても、(日本の習慣として、そういう事は許されていないとあるのは)、お嬢さんは自分の判断だけでは答えることは出来ず、結局、母親に相談してみなければ答えられないと言ふことになるからである。また、昔は、多くの場合、親が結婚相手を決めていたのであり、それゆえ、たとえ二人が好き合っている、親が認めなければ、結婚は出来ないのである。また、若い女性の場合、自分の方から「愛の告白や結婚の申し込み」をするのではなく、相手からの「愛の告白や結婚の申し込み」を待つということでもあったのだろう。

*

*

三十五、正月に歌留多取りをする

三十五、正月に歌留多取りをする

「……こんな訳で私はどちらの方面へ向つても進む事が出来ずに立ち竦んでいました。身体の悪い時に午睡などをすると、眼だけ覚めて周囲のものが判然見えるのに、どうしても手足の動かせない場合があります。私は時としてああいう苦しみを人知れず感じたのです。」

その内年が暮れて春になりました。ある日奥さんがKに歌留多をやるから誰か友達を連れて来ないかと言った事があります。するとKはすぐ友達なぞは一人もないと答えたので、奥さんは驚いてしまいました。なるほどKに友達というほどの友達は一人もなかったのです。往来で会った時挨拶をするくらいのもは多少ありましたが、それらだつて決して歌留多などを取る柄ではなかったのです。奥さんはそれじゃ私の知ったものでも呼んで来たらどうかと言ひ直しましたが、私も生憎そんな陽気な遊びをする心持になれないので、好い加減な生返事をしたなり、打ちやつておきました。ところが晩になつてKと私はとうとうお嬢さんに引つ張り出されてしまいました。客も誰も来ないのに、内々の小人数だけ取ろうという歌留多ですからさぶる静かなものでした。その上こういう遊技をやり付けないKは、まるで懐手をしている人と同様でした。私はKに一体百人一首の歌を知っているのかと尋ねました。Kはよく知らないと言へました。私の言葉を聞いたお嬢さんは、大方Kを軽蔑するでも取つたのでしよう。それから眼に立つようにKの加勢をし出しました。しまいには二人が殆んど組になつて私に当るといふ有様になつて来ました。私は相手次第では喧嘩を始めたかも知れなかつたのです。幸いにKの態度は少しも最初と変わりませんでした。彼のどこにも得意らしい様子を認めなかつた私は、無事にその場を切り上げる事が出来ました。

それから二、三日経つた後の事でしたらう、奥さんとお嬢さんは朝から市ヶ谷にいる親類の所へ行くと言つて宅を出ました。Kも私もまだ学校の始まらない頃でしたから、留守居同様あとに残っていました。私は書物を読むのも散歩に出るのも厭だつたので、ただ漠然と火鉢の縁に肱を載せて凝と顛を支えたなり考えていました。隣の室にいるKも一向音を立てませんでした。双方ともいるのだから分らないくらい静かでした。尤もこういう事は、二人の間柄として別に珍しくも何ともなかつたのですから、私は別段それを気にも留めませんでした。

十時頃になつて、Kは不意に仕切りの襖を開けて私と顔を見合せました。彼は敷居の上に立つたまま、私に何を考えていると聞きました。私はもとより何も考えていなかったのです。もし考えていたとすれば、いつもの通りお嬢さんが問題だつたかも知れませんが。そのお嬢さんには無論奥さんも食つ付いていますが、近頃ではK自身が切り離すべからざる人のように、私の頭の中をぐるぐる回つて、この問題を複雑にしているのです。Kと顔を見合せた私は、今まで臍氣に彼を一種の邪魔ものの如く意識してしながら、明らかにそうと答える訳にいかなくなつたのです。私は依然として彼の顔を見て黙っていました。するとKの方からつかつかと私の座敷へ入つて来て、私のあたつてゐる火鉢の前に坐りました。私はすぐ両肱を火鉢の縁から取り除けて、心持それをKの方へ押しやるようにしました。

Kはいつもに似合わない話を始めました。奥さんとお嬢さんは市ヶ谷のどこへ行ったのだらうと言うのです。私は大方叔母さんの所だらうと答えました。Kはその叔母さんは何だとまた聞きます。私はやはり軍人の細君だと教えてやりました。すると女の年始は大抵十五日過だのに、なぜそんなに早く出掛けたのだらうと質問するのです。私はなぜだか知らないとお嬢するより外に仕方がありませんでした。(本文)

*

*

さて、「……こんな訳で私はどちらの方面へ向つても進む事が出来ずに立ち竦んでいました。身体からだの悪い時に午睡ひるねなどをすると、眼まなこだけ覚めて周囲しゅういのものが判然はつきり見えるのに、どうしても手足の動かせない場合がありましよう。私は時としてああいう苦しみくるしみを人知れず感じたのです。(この停滞たいせき状態を一気に吹き飛ばす或る出来事できごとが起きるのである。)

その内年うちねんが暮れて春になりました。ある日奥さんがKに歌留多かるとをやるから誰か友達だれを連れて来ないかと言った事があります。するとKはすぐ友達ともだちなどは一人もないと答えたので、奥さんは驚いてしまいました。なるほどKに友達というほどの友達は一人もなかったのです。往來わらいで会った時挨拶あいさつをするくらいのもは多少ありましたが、それらだつて決して歌留多かるとなどを取る柄がらではなかったのです。(つまりKの友達「親友」は先生せんせいだけなのである)。奥さんはそれじゃ私の知ったものでも呼んで来たらどうかと言ひ直しましたが、私も生憎あいにくそんな陽気な遊びをする心持こころもちになれないので、好い加減なまへんじな生返事なまへんじをしたなり、打ちやっておきました。ところが晩ばんになつてKと私はとうとうお嬢さんに引つ張り出されてしまいました。客も誰も来ないのに、内々うちうちの小人こじん数かずだけで取ろうという歌留多かるとですからさぶる静かなものでした。その上うへこういふ遊技あそびをやり付けないKは、まるで懐手ふところをしている人と同様どうようでした。私はKに一体ひやくにん百一首ひゃくいっしゆの歌を知っているのかと尋ねました。Kはよく知らないと答えました。(だとすれば、文学への興味はそれ程ではなかったのかも知れない。日蓮の時とは全く違ふ)。私の言葉を聞いたお嬢さんは、大方Kを軽蔑けいべつするとても取つたのでしよう。それから眼まなこに立つようにKの加勢かぜいをもしました。しまいに二人が殆んど組くみになつて私に当るといふ有様ありさまになつて来ました。私は相手次第あいてしだいでは喧嘩けんかを始めたかも知れなかつたのです。幸いにKの態度は少しも最初と変わりませんでした。彼のどこにも得意らしい様子を認めなかつた私は、無事にその場を切り上げる事が出来ました。(この場面は、いかにも正月しょうげつという雰圍氣ふんゐきを出すためのものかも知れない。)

*

*

それから二、三日経たつた後の事のちでしたらう、奥さんとお嬢さんは朝あさから市ヶ谷いちがやにいる親類しんるいの所へ行くと言つて宅うちを出しました。Kも私もまだ学校の始まらない頃ころでしたから、留守居くしゅい同様あとに残つていました。私は書物しよぶつを読むのも散歩さんぽに出るのも厭いやだつたので、ただ漠然もくぜんと火鉢ひばちの縁えりに肱ひじを載のせて凝じつと頤あごを支たえたり考かんえていました。隣の室むろにいるKも一向いっかう音ねを立てませんでした。双方ふたうともいるのだかいらないのか分わらないくらい静しずかでした。尤もつともこういふ事は、二人の間柄まがらひとして別に珍めづしくも何ともなかつたのですから、私は別段べつたうそれを気にも留とどめませんでした。(まず、この場面の設定ていせつは、奥さんとお嬢さんは朝あさから市ヶ谷いちがやにいる親類しんるいの所へ出でかけて行き、一方、Kも私もまだ学校の始はじまらない頃ころだつたので、二人は室むろで静しずかにしていた。つまり、ここに「二人だけの設定」が出来上こゝろがるのである。)

十時頃じゅうじころになつて、Kは不意ふいに仕切りしきりの襖ふすまを開ひらけて私と顔かほを見合みあわせました。彼は敷居しきいの上うへに立つたまま、私に何を考かんえていると聞ききました。私はもとより何も考かんえていなかつた

のです。もし考えていたとすれば、いつもの通りお嬢さんが問題だったかも知れません。そのお嬢さんには無論奥さんも食つ付いていますが、近頃ではK自身が切り離すべからざる人のように、私の頭の中をぐるぐる回って、この問題を複雑にしているのです。Kと顔を見合せた私は、今まで臍氣に彼を、一種の邪魔ものの如く意識していながら、明らかにそうと答える訳にいかなかったのです。私は依然として彼の顔を見て黙っていました。するとKの方からつかつかと私の座敷へ入って来て、私のあたっている火鉢の前に坐りました。私はすぐ両腕を火鉢の縁から取り除けて、心持それをKの方へ押しやるようにしました。(Kは、十時頃、不意に仕切りの襖を開けて、私に何を考えていると聞き、私はもとより何も考えていなかったが、Kの方からつかつかと私の座敷へ入って来て、私のあたっている火鉢の前に坐りました。つまり、二人は火鉢の前に坐った状態になる。)

すると、Kはいつもに似合わない話を始めました。奥さんとお嬢さんは市ヶ谷のどこへ行ったのだろうかと言うのです。私は大方叔母さんの所だろうと答えました。Kはその叔母さんは何だとまた聞きます。私はやはり軍人の細君だと教えてやりました。すると女の年始は大抵十五日過ぎなのに、なぜそんなに早く出掛けたのだろうかと質問するのです。私はなぜだか知らないかと挨拶するより外に仕方がありませんでした。(先生はもちろん、なぜKは今日に限って、そんなことを聞きたがるのだろうか、不思議に思ったに違いない。)

三十六、Kのお嬢さんへの恋心の告白

「……Kはなかなか奥さんとお嬢さんの話を已めませんでした。しまいには私も答えられないような立ち入った事まで聞くのです。私は面倒よりも不思議の感に打たれました。以前私の方から二人を問題にして話しかけた時の彼を思い出すと、私はどうしても彼の調子の変つているところに気が付かずにはいられないのです。私はどうしてなぜ今日に限ってそんな事ばかり言うのかと彼に尋ねました。その時彼は突然黙りました。しかし私は彼の結んだ口元の肉が顫えるように動いているのを注視しました。彼は元来無口な男でした。平生から何か言おうとすると、言う前によく口のあたりをもぐもぐさせる癖がありました。彼の唇がわざと彼の意志に反抗するように容易く開かないところに、彼の言葉の重みも籠っていたのでしよう。一旦声が口を破って出るとなると、その声には普通の人よりも倍の強い力がありました。

彼の口元を一寸眺めた時、私はまた何か出て来るなどすぐ疝付いたのですが、それがはたして何の準備なのか、私の予覚はまるでなかったのです。だから驚いたのです。彼の重々しい口から、彼のお嬢さんに対する切ない恋を打ち明けられた時の私を想像して見て下さい。私は彼の魔法棒のために一度に化石されたようなものです。口をもぐもぐさせる働きさえ、私にはなくなってしまったのです。

その時の私は恐ろしさの塊りと言いましようか、または苦しみの塊りと言いましようか、何しろ一つの塊りでした。石か鉄のように頭から足の先までが急に固くなったのです。呼吸をする弾力性さえ失われたくらいに堅くなったのです。幸いな事にその状態は長く続きませんでしたが。私は一瞬間の後に、また人間らしい気分を取り戻しました。そうして、すぐ失策だったと思えました。先を越されたなと思えました。

しかしその先をどうしようという分別はまるで起りません。恐らく起るだけの余裕がな

かったのでしよう。私は腋の下から出る気味のわるい汗が襯衣に滲み透るのを凝と我慢して動かずにいました。Kはその間いつもの通り重い口を切っては、ぼつりぼつりと自分の心を打ち明けて行きます。私は苦しくって堪りませんでした。恐らくその苦しさは、大きな広告のように、私の顔の上に判然とした字で貼り付けられてあつたらうと私は思うのです。いくらKでもそこに気の付かないはずはないのですが、彼はまた彼で、自分の事に一切を集中しているから、私の表情などに注意する暇がなかったのでしょうか。彼の自白は最初から最後まで同じ調子で貫いていました。重くて鈍い代りに、とても容易な事では動かせないという感じを私に与えたのです。私の心は半分その自白を聞いていながら、半分どうしようどうしようという念に絶えず掻き乱されていきましたから、細かい点になると殆んど耳へ入らないと同様でしたが、それでも彼の口に出す言葉の調子だけは強く胸に響きました。そのために私は前言った苦痛ばかりでなく、時には一種の恐ろしさを感ずるようになったのです。つまり相手は自分より強いのだという恐怖の念が萌し始めたのです。

Kの話が一通り済んだ時、私は何とも言う事が出来ませんでした。こつちも彼の前に同じ意味の自白をしたものだろうか、それとも打ち明けずにいる方が得策だろうか、私はそんな利害を考えて黙っていたのではありません。ただ何事も言えなかったのです。また言う気にもならなかったのです。

午食の時、Kと私は向い合せて席を占めました。下女に給仕をしてもらって、私はいいない不味い飯を済ませました。二人は食事中も殆んど口を利きませんでした。奥さんとお嬢さんはいつ帰るのだから分りませんでした。(本文)

*

*

さて、「……Kはなかなか奥さんとお嬢さんの話を已めませんでした。しまいに私も答えられないような立ち入った事まで聞くのです。私は面倒よりも不思議の感に打たれました。以前私の方から二人を問題にして話しかけた時の彼を思い出すと、私はどうしても彼の調子の変つているところに気が付かずにはいられないのです。

私はどうとうなせ今日に限ってそんな事ばかり言うのかと彼に尋ねました。その時彼は突然黙りました。しかし私は彼の結んだ口元の肉が顫えるように動いているのを注視しました。彼は元来「無口な男」でした。平生から「……何か言おうとすると、言う前によく口のあたりをもぐもぐさせる癖がありました」。彼の唇がわざと彼の意志に反抗するように容易く開かないところに、彼の言葉の重みも籠っていたのでしよう。一旦声が口を破つて出るとなると、その声には普通の人よりも倍の強い力がありました。

彼の口元を一寸眺めた時、私はまた「何か出て来るな」とすぐ瘡付いたのですが、それはたして何の準備なのか、私の予覚(予感)はまるでなかったのです。だから驚いたのです。彼の重々しい口から「……彼のお嬢さんに対する切ない恋を打ち明けた時の私を想像して見て下さい」とある。私は彼の魔法棒のために一度に化石(石に)されたようなものです。口をもぐもぐさせる働きさえ、私にはなくなってしまうのです。

その時の私は「恐ろしさの塊り」と言いましようか、または「苦しみの塊り」と言いましようか、何しろ「一つの塊り」でした。石か鉄のように頭から足の先までが急に固くなったのです。呼吸をする弾力性さえ失われたくらいに堅くなったのです。幸いな事にその状態は長く続きませんでした。私は一瞬間の後に、また人間らしい気分を取り戻しました。そうして、すぐ「失策だった」と思いました。先を越されたなと思いました。

しかしその先をどうしようという分別はまるで起りません。恐らく起るだけの余裕がなかったのでしょう。私は腋の下から出る気味のわるい汗が襯衣に滲み透るのを凝と我慢して動かずにいました。Kはその間いつもの通り重い口を切つては、ぼつりぼつりと自分の心を打ち明けて行きます。私は苦しくって堪りませんでした。恐らくその苦しさは、大きな広告のように、私の顔の上に判然とした字で貼り付けられてあつたらうと私は思うのです。いくらKでもそこに気の付かないはずはないのですが、彼はまた彼で、自分の事に一切を集中しているから、私の表情などに注意する暇がなかったのでしょう。彼の自白は最初から最後まで同じ調子で貫いていました。重くて鈍い代りに、とても容易な事では動かせないという感じを私に与えたのです。私の心は半分その自白を聞いていながら、半分どうしようどうしようという念に絶えず掻き乱されていきましたから、細かい点になると殆んど耳へ入らないと同様でしたが、それでも彼の口に出す言葉の調子だけは強く胸に響きました。そのために私は前言った苦痛ばかりでなく、時には一種の恐ろしさを感じずるようになったのです。つまり相手は自分より強いのだという恐怖の念が萌し始めたのです。

Kの話が一通り済んだ時、私は何とも言う事が出来ませんでした。こつちも彼の前に同じ意味の自白をしたものだろうか、それとも打ち明けずにいる方が得策だろうか、私はそんな利害を考えて黙っていたわけではありません。ただ「……何事も言えなかつたのです。また言う気にもならなかつたのです」とある。

午食の時、Kと私は向い合せに席を占めました。下女に給仕をしてもらつて、私はいつにない不味い飯を済ませました。二人は食事中も殆んど口を利きませんでした。奥さんとお嬢さんはいつ帰るのだから分りませんでした。(此所までの一連の場面を簡単に要約してみると、次のようになるかと思う。)

*

*

さて、年が開けて正月になり、ある日、内々だけで歌留多をすることがあつたが、それから二、三日経つた頃、奥さんとお嬢さんは朝から市ヶ谷にいる親類の所へ出かけて行き、一方、Kも私もまだ学校の始まらない頃だったので、二人は室で静かにしていたが、十時頃、Kは不意に仕切りの襖を開けて、私に何を考えているのかと聞き、私はもとより何も考えていなかったが、Kの方からつかつかと私の座敷へ入つて来て、私のあたつている火鉢の前に坐り、奥さんとお嬢さんは市ヶ谷のどこへ行ったのか、その他、いろいろ質問するので、私はなぜ今日に限つてそんな事ばかり言うのかと彼に尋ねると、彼は突然黙つたが、彼の結んだ口元の肉が顫えるように動いているのを注視した。彼は元来無口な男で、平生から何か言おうとすると、言う前によく口のあたりをもぐもぐさせる癖があつたのです。彼の口元をちよつと眺めた時、私はまた何か出て来るなどすぐ瘡付いたのですが、それがはたして何の準備なのか、私の予覚(予感)はまるでなかつたのです。だから驚いたのです。彼の重々しい口から、彼のお嬢さんに対する切ない恋を打ち明けられた時の私を想像してみして下さい。私は彼の魔法棒のために一度に化石(石に)されたようなものです。その時の私は恐ろしさの塊りというか、苦しさの塊りというか、何しろ一つの塊りでした。石か鉄のように頭から足の先までが急に固くなつて、呼吸をする弾力性さえ失われたくらいに堅くなつたのです。幸いな事に、私は一瞬間の後に、また人間らしい気分を取り戻しましたが、すぐ「失策つた」と思いました。先を越されたなと思ひました。

しかしその先をどうしようという分別はまるで起らず、恐らく起るだけの余裕がなかつ

たのでしよう。Kはその間いつもの通り重い口を切っては、ぼつりぼつりと自分の心を打ち明けて行き、私は苦しくって堪りませんでした。おそらくその苦しさは、私の顔の上にはつきりと表れていたはずであり、いくらKでもそこに気の付かないはずはないのですが、彼はまた彼で、自分の事に集中しているので、私の表情などに注意する暇がなかったのでしよう。彼の自白は最初から最後まで同じ調子で、重くて鈍い代りに、とても容易な事では動かせないという感じを受け、私の心は半分その自白を聞きながら、半分どうしよう、どうしようという念に絶えず掻き乱されていたので、細かい点になるとほとんど耳へ入らないと同様でしたが、それでも彼の口に出す言葉の調子だけは強く胸に響き、そのために私は前言った苦痛ばかりでなく、時には一種の恐ろしさを感ずるようになったのです。つまり相手は自分より強いのだという恐怖の念が萌し始めたのです。

Kの話が一通り済んだ時、私は何とも言う事が出来ませんでした。こつちも彼の前に自白をしたものか、それとも打ち明けずにいる方が得策か、私はそんな利害などを考えて黙っていたのではなく、ただ何事も言えなかったのです。(それだけ「驚きの衝撃」が余りに大き過ぎたという事である)。午食の時、Kと私は向い合せに席を占め、下女が給仕をしてくれたが、二人は食事中ほとんど口を利きませんでした。

そして、この時から、二人は子供の頃からの親しい「親友関係」から、はつきりとお嬢さんをめぐつての「恋敵」(敵同士)に決定的になつてしまつたのである。

三十七、Kの告白後の先生の心の状態

「……二人は各自の室に引き取つたぎり顔を合わせませんでした。Kの静かな事は朝と同じでした。私も凝と考え込んでいました。

私は当然自分の心をKに打ち明けるべき筈だと思ひました。しかしそれにはもう時機が後れてしまつたという気も起りました。なぜ先刻Kの言葉を遮つて、こつちから逆襲しなかつたのか、そこが非常な手落りのように見えて来ました。せめてKの後に続いて、自分は自分の思う通りをその場で話してしまつたら、まだ好かつたらうにとも考えました。

Kの自白に一段落が付いた今となつて、こつちからまた同じ事を切り出すのは、どう思案しても変でした。私はこの不自然に打ち勝つ方法を知らなかつたのです。私の頭は悔恨に揺られてぐらぐらしました。

私はKが再び仕切りの襖を開けて向うから突進して来てくれれば好いと思ひました。私に言わせれば、先刻はまるで不意撃に会つたも同じでした。私にはKに応ずる準備も何もなかつたのです。私は午前に失つたものを、今度は取り戻そうという下心を持つていました。それで時々眼を上げて、襖を眺めました。しかしその襖はいつまで経つても開きません。そうしてKは永久に静かなのです。

その内私の頭は段々この静かさに掻き乱されるようになって来ました。Kは今襖の向うで何を考へているだろうと思つと、それが気になつて堪らないのです。不断もこんな風にお互いが仕切一枚を間に置いて黙り合つている場合は始終あつたのですが、私はKが静かであればあるほど、彼の存在を忘れるのが普通の状態だったので、その時の私はよほど調子が狂つていたものと見なければなりません。それでいて私はこつちから進んで襖を開ける事が出来なかつたのです。一旦言いそびれた私は、また向うから働き掛けら

れる時機を待つより外に仕方がなかったのです。

しまいに私は凝としておられなくなりました。無理に凝としていれば、Kの部屋へ飛び込みたくなるのです。私は仕方なしに立って縁側へ出ました。そこから茶の間へ来て、何という目的もなく、鉄瓶の湯を湯呑に注いで一杯呑みました。それから玄關へ出ました。私はわざとKの室を回避するようにして、こんな風に自分を往來の真中に見出したのです。私には無論どこへ行くという的もありません。ただ凝としていられないだけでした。それで方角も何も構わずに、正月の町を、むやみに歩き廻ったのです。私の頭はいくら歩いてもKの事でいっぱいになっていました。私もKを振り落す気で歩き廻る訳ではなかったのです。むしろ自分から進んで彼の姿を咀嚼しながらうろついていたのです。

私には第一に彼が解しがたい男のように見えませんでした。どうしてあんな事を突然私に打ち明けたのか、またどうして打ち明けなければいけないほどに、彼の恋が募って来たのか、そうして平生の彼はどこに吹き飛ばされてしまったのか、すべて私には解しにくい問題でした。私は彼の強い事を知っていました。また彼の真面目な事を知っていました。私はこれから私の取るべき態度を決する前に、彼について聞かなければならない多くをもつていと信じました。同時にこれからさき彼を相手にするのが変に気味が悪かったです。私は夢中に町の中を歩きながら、自分の室に凝と坐っている彼の容貌を始終眼の前に描き出しました。しかもいくら私が歩いても彼を動かす事は到底出来ないのだという声はどこかで聞こえるのです。つまり私には彼が一種の魔物のように思えたからでしょう。私は永久彼に崇られたのではなからうかという気さえしました。

私が疲れて宅へ帰った時、彼の室は依然として人氣のないように静かでした。(本文)

*

さて、その後、二人はそれぞれの室に戻った後、私は当然自分の心をKに打ち明けるべきはずだと思いました。また、なぜ先刻Kの言葉を遮って、こつちから逆襲しなかったのか、せめてKの後に続いて、自分は自分の思う通りをその場で話していたら、まだ好かつたろうにとも考えました。Kの自白に一段落が付いた今となって、こつちからまた同じ事を切り出すのは、どう思案しても変でしたし、私はこの不自然に打ち勝つ方法を知らなかったのです。私の頭は悔恨(後悔)に揺られてぐらぐらしました。(中略)

私には第一に彼が解しがたい男のように見えました。どうしてあんな事を突然私に打ち明けたのか、またどうして打ち明けなければいけないほどに、彼の恋が募って来たのか、そうして平生の彼はどこに吹き飛ばされてしまったのか、すべて私には解しにくい問題でした。私は彼の強い事を知っていました。また彼の真面目な事を知っていました。私はこれから私の取るべき態度を決する前に、彼について聞かなければならない多くをもつていと信じました。同時にこれからさき彼を相手にするのが変に気味が悪かったです。つまり私には彼が一種の魔物のように思えたからでしょう。私は永久彼に崇られたのではなからうかという気さえしました。(ふと、このような時に無意識のうちに生じて来る予感、というものは、意外と当たることが多く、結局、先生という人は、Kという親友に永久に崇られることになるのである。)

*

*

一、先生の想い

一、先生の想い

さて、この『こころ』という作品のなかで、最も大事な部分というのは、一体、どこにあるのかと問えば、それは、親友である「K」が、親友である「先生」に、ある日、突然、「お嬢さんへの切ない恋心」を打ち明けるといふ部分である。ここがまさに「分岐点」であり、これによって、まさに事態が「大きく動く」ことになるからである。つまり、その当時はまだ大学生であった「先生」という人は、軍人の未亡人である奥さんとお嬢さんそれに一人の下女が住んでいる所に「下宿」することになるのである。そして、そのことが、結果として、まさに一つの「運命的な出逢い」ともなるわけだが、それは、その奥さんとお嬢さんと一緒に生活を親しくなっていくに連れて、やがてその「お嬢さんのことが好きになっていく」ということである。もちろん、それ自体は、むしろ「自然な流れ」であり、何も不思議なことでも何でもない。それゆえ、むしろ最大の「問題」なのは、そのことをいつまでも「言いつまみ出せずにいる」状態が、ずっと長く続いたということである。その理由として、Kの来ないうちは、他的手（奥さんの手）に乗るのが厭だという我慢が私を抑え付けて、一歩も動けないようにしていたとある。——この時、勇気を奮って、奥さんに向かって、「……お嬢さんが好きです。お嬢さんを愛しています。お嬢さんを私にください」とはつきりと言っていたならば、恐らく、「先生」という人の「人生」は、今とは全く違った「人生」が開けていたかも知れない。それは、お嬢さんとの「関係」においても、また、社会との「関係」においても、そして、人間との「関係」においても、すべてにおいて積極的になれたかも知れないのです。なぜなら、奥さんもお嬢さんも、その「言葉」（愛の告白と結婚の申し込み）をずっと待っていたからである。

二、中心テーマは

つまり、「先生」（当時は大学生）という人が、そのまま素直にお嬢さんに「愛を告白」していたならば、それで何らの「事件」も起こることもなかったのである。しかし、それでは、所謂「小説」にはならない。「小説」となるためには、むしろ「事件（問題）が起こる」必要がどうしてもあったということである。そこで、その「下宿」先に「先生」の親友である「K」という人物を同居させて、いわゆる「先生とお嬢さんとK」とのいわば「三角関係」というものを生じさせることになる。それでは、なぜ、そのようなことをするのかと問えば、それは、次のようなことである。——つまり、作者（夏目漱石）自身、いわゆる「三角関係」という「問題」（もちろん、その「三角関係」にも実に様々な「組み合わせ」があるだろうが）、その中でも、一人の女性をめぐる二人の「親友同士」との「三角関係」というものを、何が何でも書いておきたかった。それは、文字通り、まさに自分の「遺言」として書いておきたかった。それは、なぜなのか？ 作者（夏目漱石）自身、そのような「経験」があったからなのか？ それとも、同じような「心的状態」（つまり倫理的に、「罪を背負う」という「心の葛藤」）を宿していたからなのか？ それは、何とも言えないが、ただ、作者（夏目漱石）自身、正確には「先生」という人は、まさに「恋は罪悪である」と言っている。それは、一体、なぜなのか？ それは、人を本気で愛すれば、必ず、誰かが傷つくことになる。人を傷つけずにはおかないものだからである。

誰もが「罪の意識」（或いは「良心の呵責」）というものを、多かれ少なかれ、背負うことになる。だからこそ、「恋（恋愛）は罪悪である」とともに、人間の「罪」（悪業）というものを誰もが嫌が上でも「思い知る」ことになるのである。

それをもっと広げれば、例えば、友達関係、同居関係、恋人関係、夫婦関係、愛人関係、その他、すべて同じことである。つまり、「男女」（或いは「同性」）同士が、本気で相手と深く「関わる」（或いは「愛する」）ことになれば、必ず、お互いの「利己的自我（エゴ）」と利己的自我（エゴ）」とが本気でぶつかり合うことになる。そして、お互いの関係が「うまくいっている」時には、まさに「楽しい、うれしい、幸せ、その他」という「喜びの感情」を味わうことができ得るかも知れないが、一方、お互いの関係が「うまくいかなかった」時には、逆に、「不平、不満、怒り、嫌悪、嫉妬、恨み、憎しみ、憎悪、怨念、その他」の感情に変わってしまうということである。つまり、本気で相手と深く「関わる」ということは、まさにそういうことであり、しかも、それが「男女の関係」であれば、それだけより「どろどろとした生々しいもの」になっていくということである。

それは、『こころ』という作品の中でも、例えば、Kとお嬢さんが親しく話をしている場面などに出つくわすと、「先生」という人の「心の中」では、押さえ難いほどの「嫉妬心」や「不平・不満」、その他の「負の感情」（恨みや憎しみ）などに襲われてしまう。それは、誰の「心の中」でも全く同じことである。——それは、いったい何を意味しているのかと問えば、それは、相手の「愛情」が「他の対象」へと向かうことを「恐れている」のである。それでは、なぜ、それを「恐れる」のだろうか？ それは、相手の「愛情」が自分に向かっているからこそ、まさに「楽しい、うれしい、幸せ、その他」という「喜びの感情」を味わうことができ得るのであり、逆に、相手の「愛情」が自分以外の「他の対象」へと向かってしまうということは、今まで得ていたその様々な「喜びの感情」を味わうことが出来なくなってしまうとともに、今度は、逆に、実に様々な「不平、不満、怒り、嫌悪、嫉妬、恨み、憎しみ、憎悪、怨念、その他」の感情に変わってしまうということである。

三、Kの告白の理由

それでは、親友である「K」は、なぜ、親友である「先生」にお嬢さんへの切ない恋心を敢えて「告白」（打ち明けた）のだろうか？ ここが「最大」の問題である。というのも、わざわざ「告白」などしなくてもよかったからである。それを敢えて「告白」することによって、一体、何を考えていたのだろうか？ 可能性としては、もちろん、実に様々なことが考えられるかと思うが、まず、Kという人は、いわゆる「理想」（それは「道のためには一心に精進すること」と「現実」（それは「お嬢さんへの切ない恋心」）との間を頼りなく揺れ動いている「心的状態」であったが、しかし、ふつうに考えれば、「K」という人が、「お嬢さんのことを好きになった」からと言って、そのことで深く悩む理由は何もない。深く悩む理由の一つは、いわゆる「理想」との関係があるからであり、そして、もう一つは、親友である「先生」との関係もあるからである。

それは、先生という人も（恐らく）「お嬢さんのことが好きなんだろう」ぐらいのことは、Kという人もうすうすは感じていたであろう。もしそうだとすれば、いったいどうし

たらよいのかと「深く悩む」ことにもなるだろう。——つまり、「先生」との「親友関係」（或いは「信頼関係」）を最優先させるならば、「お嬢さん」を諦めて、「先生」に譲るしかない。というよりは、もともと「二人の仲」の方が先だったからである。しかし、「お嬢さん」への「想い」（愛情）も何とも断ち難いものがある。だからこそ、まさに「深く悩む」のである。一方、「お嬢さん」への「想い」（愛情）を最優先させるならば、「先生」との「親友関係」（或いは「信頼関係」）には決定的なヒビが入る（或いは「崩壊する」）ことを覚悟しなければならぬ。それも非常に辛いことである。なぜなら、一生「恨まれる」ことになるからである。このような場合、一体、どうしたらよいのかと問えば、ふつうであれば、それは、結局、「男同士」で何らかの形で決着をつけるのか、それとも、相手の「女性」に決めてもらうのか、あるいは、誰か「第三者」を介して、まさに「問題の解決」を図るのか、何とも難しい問題であるが、もしそれが出来なければ、いわゆる「三角関係」というものは、延々と続いていくことになる。つまり、この（男女の）「三角関係」というものは、必ず、誰かが（或いは「三人とも」）、多かれ少なかれ、傷つくことになるのである。

ところで、ここで「考え方」を少し変えてみると、それは、「K」という人間は、やがて「自殺」することになるが、それは、余程のことであり、それゆえ、一つの「賭け」（或いは「勝負」）だったのかも知れない。それは、親友である「先生」の反応がぜひとも知りたかったということである。——つまり、「K」は、親友である「先生」が「お嬢さんのことが好きである」ということは、直接には聞いてはいなくても、当然のことながら、うすうすは感じていただろう。それゆえ、その「二人の仲」にいきなり割って入るといふことには、やはり「ためらい」が生じたのかも知れない。つまり、いわゆる「ぬけがけ」は避けたかったということである。それは、一人の「親友関係」（或いは「信頼関係」）に決定的なヒビが入る（或いは「崩壊させること」）にも直結するからである。

つまり、親友である「K」は、親友である「先生」（当時は大学生）の「反応」がぜひとも知りたかった。どういう「反応」を示すのか？　つまり、お嬢さんのことが好きになった、という告白を聞いた時に、親友である「先生」（当時は大学生）がどのような「反応」を示すかによって、いわゆる「先生」の「心の中」がぜひとも知りたかった。それによつて、自分もどうしたらよいかが見えて来るからである。そして、もし、その告白を聞いて、「……いいじゃないか、それなら、お嬢さんと付き合ったらいいよ」というような、いわば「肯定的な反応」であれば、それは、親友である「先生」からの「承諾を得た」ということであり、それゆえ、堂々と「お嬢さんと交際ができる」ということにもなるだろう。——ところが、親友である「先生」の反応は、そういうものではなかった。それは、ショックが余りにも大き過ぎて、その時、「何も言えなかった」という反応である。

四、先生の反応

さて、先生は、Kから「お嬢さんへの切ない恋心」を聞かされた時に、「あつ、失策だった！」という想いで一杯になっていたのである。それは、前々からKに「自分のお嬢さんへの恋心」を打ち開けようと思いがながらも、なかなか言い出せずにいたところを、Kに先越されてしまったからであり、また、Kの「告白」を聞いたあとも、実は、自分もお嬢さ

んのが好きなんだということを、なかなか言い出せずにいたわけである。そして、このままでは「K」にお嬢さんを取られてしまうかも知れない、すぐにも何らかの手を打たなければ、大変なことになるという、そういう悶々とした「想い」の状態のまま、その後、二人の間には、表面上、それほど変わらないような関係が続くことになるが、やがて、深く悩み続けていた「K」という人は、再び、図書館にいる「先生」を呼び出しては、力弱く、「……ただ漠然と、どう思うという」のであった。それに対して、親友である「先生」という人は、まさにこことばかりに、一気に「反撃」に出るのである。それはもちろん、お嬢さんを絶対に失いたくないという、一心からだっと思いが、この時の「対応（策略）」が、結果として、親友を「死」へと追いやったという「意識」へとつながっていくのである。

*

*

三十八、二人は寡黙かもくで夕飯ゆうめしを食べて床に就つく

三十八、二人は寡黙で夕飯を食べて床に就く

「……私が家へ這入ると間もなく俵（人力車）の音が聞こえました。今のよう護謨輪のない時分でしたから、がらがらいう厭な響がかなりの距離でも耳に立つのです。車はやがて門前で留まりました。

私が夕飯に呼び出されたのは、それから三十分ばかり経った後の事でしたが、まだ奥さんとお嬢さんの晴着が脱ぎ棄てられたまま、次の室を乱雑に彩っていました。二人は遅くなると私たちに濟まないというので、飯の支度に間に合うように、急いで帰って来たのだそうです。しかし奥さんの親切はKと私とに取って殆んど無効も同じ事でした。私は食卓に坐りながら、言葉を惜しがる人のように、素気ない挨拶ばかりしていました。Kは私よりもなお寡言（寡黙）でした。たまに親子連で外出した女二人の気分が、また平生よりは勝れて晴れやかだったので、我々の態度はなおの事眼に付きます。奥さんは私にどうかしたのかと聞きました。私は少し心持が悪いと答えました。実際私は心持が悪かったので。すると今度はお嬢さんがKと同じ問いを掛けました。Kは私のように心持が悪いとは答えません。ただ口が利きたくないからだと言いました。お嬢さんはなぜ口が利きたくないのかと追窮しました。私はその時ふと重たい臉を上げてKの顔を見ました。私にはKが何と答えるだろうかという好奇心があつたのです。Kの唇は例のように少し顫えていました。それが知らない人から見ると、まるで返事に迷つておられるかと思われぬのです。お嬢さんは笑いながらまた何かむずかしい事を考えているのだろうかと言いました。Kの顔は心持薄赤くなりました。

その晩私はいつもより早く床へ入りました。私が食事の時気分が悪いと言つたのを気にして、奥さんは十時頃蕎麦湯を持つて来てくれました。しかし私の室はもう真暗でした。奥さんはおやおやと言つて、仕切りの襖を細目に開けました。洋燈の光がKの机から斜めにぼんやりと私の室に差し込みました。Kはまだ起きていたものと見えます。奥さんは枕元に坐つて、大方風邪を引いたのだから身体を暖めるがいいと言つて、湯呑を顔の傍へ突き付けるのです。私はやむを得ず、どろどろした蕎麦湯を奥さんの見ている前で飲みました。

私は遅くなるまで暗いなかで考えていました。無論一つ問題をぐるぐる廻転させるだけで、外に何の効力もなかったのです。私は突然Kが今隣りの室で何をしているだろうと思ひ出しました。私は半ば無意識においと声を掛けました。すると向うでもおいと返事をしました。Kもまだ起きていたのです。私はまだ寝ないのかと襖ごしに聞きました。もう寝るといふ簡単な挨拶がありました。何をしているのだと私は重ねて問いました。今度はKの答えがありません。その代り五、六分経つたと思う頃に、押入をがらりと開けて、床を延べる音が手に取るように聞こえました。私はもう何時かとまた尋ねました。Kは一時二十分だと答えました。やがて洋燈をふつと吹き消す音がして、家中が真暗なうちに、しんと静まりました。

しかし私の眼はその暗いなかでいよいよ冴えて来るばかりです。私はまた半ば無意識な状態で、おいとKに声を掛けました。Kも以前と同じような調子で、おいと答えました。私は今朝彼から聞いた事について、もっと詳しい話をしたいが、彼の都合はどうだと、とうとうこつちから切り出しました。私は無論襖越にそんな談話を交換する気はなかった

のですが、Kの返答だけは即坐に得られる事と考えたのです。ところがKは先刻から二度おいと呼ばれて、二度おいと答えたような素直な調子で、今度は応じません。そうだなあと低い声で渋っています。私はまたはつと思わせられました。(本文)

*

*

さて、「……私が家へ這入ると間もなく俾(人力車)の音が聞こえました。今のように護謨輪のない時分でしたから、がらがらいう厭な響がかなりの距離でも耳に立つのです。車はやがて門前で留まりましたとある。(人力車の車輪は、一九〇七年《明治四十年》代になり、ようやく木製の車輪は、「ゴム輪」へと代わったそうです。)

私が夕飯に呼び出されたのは、それから三十分ばかり経った後の事でしたが、まだ奥さんとお嬢さんの晴着が脱ぎ棄てられたまま、次の室を乱雑に彩っていました。二人は遅くなると私たちに済まないというので、飯の支度に間に合うように、急いで帰って来たのだそうです。しかし奥さんの親切はKと私とに取って殆んど無効も同じ事でした。(二人とも食事が楽しめる気分ではなかったのです)。私は食卓に坐りながら、言葉を惜しがる人のように、素気ない挨拶ばかりしていました。Kは私よりもなお寡言(寡黙)でした。たまに親子連で外出した女二人の気分が、また平生よりは勝れて晴れやかだったので、我々の態度はなおの事眼に付きます。奥さんは私にどうかしたのかと聞きました。私は少し心持が悪いと答えました。実際私は心持が悪かったのです。すると今度はお嬢さんがKに同じ問いを掛けました。Kは私のように心持が悪いとは答えません。ただ口が利きたくないからだと言いました。お嬢さんはなぜ口が利きたくないのかと追窮しました。私はその時ふと重たい瞼を上げてKの顔を見ました。私にはKが何と答えるだろうかという好奇心があつたのです。Kの唇は例のように少し顫えていました。それが知らない人から見ると、まるで返事に迷っているとか思われぬのです。お嬢さんは笑いながらもまた何かむずかしい事を考えているのだろうと言いました。Kの顔は心持薄赤くなりました。(お嬢さんにそう言われたことで敏感に反応しているのかも知れない。)

その晩私はいつもより早く床へ入りました。私が食事の時気分が悪いと言つたのを気にして、奥さんは十時頃蕎麦湯を持って来てくれました。しかし私の室はもう真暗でした。奥さんはおやおやと言つて、仕切りの襖を細目に開けました。洋燈の光がKの机から斜めにぼんやりと私の室に差し込みました。Kはまだ起きていたものと見えます。奥さんは枕元に坐つて、大方風邪を引いたのだろうから身体を暖めるがいいと言つて、湯呑を顔の傍へ突き付けるのです。私はやむを得ず、どろどろした蕎麦湯を奥さんの見ている前で飲みました。(この蕎麦湯は、江戸時代から飲まれていて、蕎麦を茹で続けると「茹で湯」に蕎麦の「香りや栄養」も蕎麦湯に移つてしまう。そこでその栄養のある「蕎麦湯」を飲むと、「胃腸に良い」とか「元気になる」とか信じられていたのです。)

私は遅くなるまで暗いなかで考えていました。無論一つ問題をぐるぐる廻転させるだけで、外に何の効力もなかったのです。私は突然Kが今隣りの室で何をしているだろうと思ひ出しました。私は半ば無意識においと声を掛けました。すると向うでもおいと返事をしました。Kもまだ起きていたのです。私はまだ寝ないのかと襖ごしに聞きました。もう寝るといふ簡単な挨拶がありました。何をしているのだと私は重ねて聞きました。今度はKの答えがありません。その代り五、六分経つたと思う頃に、押入をがらりと開けて、床を延べる音が手に取るように聞こえました。私はもう何時かとまた尋ねました。Kは一時

二十分だと答えました。やがて洋燈をふっと吹き消す音がして、家中が真暗なうちに、しんと静まりました。(一九一二年《大正元年》東京市内に電灯がほぼ完全普及する。)

しかし私の眼はその暗いなかでいよいよ冴えて来るばかりです。私はまた半ば無意識な状態で、おいとKに声を掛けました。Kも以前と同じような調子で、おいと答えました。私は今朝彼から聞いた事について、もっと詳しい話をしたいが、彼の都合はどうだと、とうとうこつちから切り出しました。私は無論襖越にそんな談話を交換する気はなかったのですが、Kの返答だけは即坐に得られる事と考えたのです。ところがKは先刻から二度おいと呼ばれて、二度おいと答えたような素直な調子で、今度は応じません。「……そう、だなあ」と低い声で渋っています。私はまたはつと思わせられました。(Kが曖昧な返事ばかりを繰り返すので、先生という人はイライラするばかりなのかも知れない。)

三十九、Kに告白の真意を聞く

「……Kの生返事は翌日になっても、その翌日になっても、彼の態度によく現われていました。彼は自分から進んで例の問題に触れようとする気色を決して見せませんでした。尤も機会もなかったのです。奥さんとお嬢さんが揃って一日宅を空けでもしなければ、二人はゆっくり落ち付いて、そういう事を話し合う訳にも行かないのですから。私はそれをよく心得ていました。心得ていながら、変にいらいらし出すのです。その結果始めは向うから来るのを待つつもりで、暗に用意をしていた私が、折があったらこつちで口を切ろうと決心するようになったのです。」

同時に私は黙って家のものの様子を観察して見ました。しかし奥さんの態度にもお嬢さんの素振にも、別に平生と変わった点はありませんでした。Kの自白以前と自白以後とで、彼らの挙動にこれという差違が生じないならば、彼の自白は単に私だけに限られた自白で、肝心の本人にも、またその監督者たる奥さんにも、まだ通じていないのは慥でした。そう考えた時私は少し安心しました。それで無理に機会を拵えて、わざとらしく話を持ち出すよりは、自然の与えてくれるものを取り逃さないようにする方が好かろうと思つて、例の問題にはしばらく手を着けずにそつとしておく事にしました。

こう言つてしまえば大変簡単に聞こえますが、そうした心の経過には、潮の満干と同じように、色々の高低があったのです。私はKの動かない様子を見て、それにさまざまの意味を付け加えました。奥さんとお嬢さんの言語動作を観察して、二人の心がはたしてそこに現われている通りなのだろうかと疑つても見ました。そうして人間の胸の中に装置された複雑な器械が、時計の針のように、明瞭に偽りなく、盤上の数字を指し得るものだろうかと考えました。要するに私は同じ事をこうも取り、ああも取りした揚句、漸くここに落ち付いたものと思つて下さい。更にむずかしく言えば、落ち付くなどという言葉は、この際決して使われた義理でなかったのかも知れません。

その内学校がまたろ始まりました。私たちは時間の同じ日には連れ立って宅を出ます。都合がよければ帰る時にもやはりいつしよに帰りました。外部から見たKと私は、何にも前と違つたところがないように親しくなつたのです。けれども腹の中では、各自に各自の事を勝手に考えていたに違いありません。ある日私は突然往來でKに肉薄しました。私が第一に聞いたのは、この間の自白が私だけに限られてるか、または奥さんやお嬢さんに

も通じているかの点にあったのです。私のこれから取るべき態度は、この問いに対する彼の答え次第で極めなければならぬと、私は思ったのです。すると彼は外の人にはまだ誰にも打ち明けていないと明言しました。私は事情が自分の推察通りだったので、内心嬉しがりました。私はKの私より横着なのをよく知っていました。彼の度胸にも敵わないという自覚があったのです。けれども一方ではまた妙に彼を信じていました。学資の事で養家を三年も欺むていた彼ですけれども、彼の信用は私に対して少しも損われていなかったのです。私はそれがために却って彼を信じ出したくらいです。だからいくら疑い深い私でも、明白な彼の答えを腹の中で否定する気は起りようがなかったのです。

私はまた彼に向って、彼の恋をどう取り扱うつもりかと尋ねました。それが単なる自白に過ぎないのか、またはその自白について、実際の効果をも収める気なのかと問うたのです。しかるに彼はそこになると、何にも答えません。黙って下を向いて歩き出します。私は彼に隠し立てをしてくれるな、すべて思った通りを話してくれと頼みました。彼は何も私に隠す必要はないと判然断言しました。しかし私の知ろうとする点には、一言の返事も与えないのです。私も往來だからわざわざ立ち留まって底まで突き留める訳に行きません。ついそれなりにしてしまいました。(本文)

*

*

さて、「……Kの生返事は翌日になっても、その翌日になっても、彼の態度によく現われていました。彼は自分から進んで例の問題に触れようとする気色を決して見せませんでした。尤も機会もなかったのです。奥さんとお嬢さんが揃って一日宅を空けでもしなれば、二人はゆっくり落ち付いて、そういう事を話し合う訳にも行かないのですから。私はそれをよく心得ていました。心得ていながら、変にいらいらし出すのです。その結果始めは向うから来るのを待つつもりで、暗に用意をしていた私が、折があったらこつちで口を切ろうと決心するようになったのです。(少し積極的に出て見ようという決心である。)

同時に私は黙って家のものの様子を観察して見ました。しかし奥さんの態度にもお嬢さんの素振にも、別に平生と変った点はありませんでした。Kの自白以前と自白以後とで、彼らの挙動にこれという差違が生じないならば、彼の自白は単に私だけに限られた自白で、肝心の本人にも、またその監督者たる奥さんにも、まだ通じていないのは慥でした。そう考えた時私は少し安心しました。それで無理に機会を拵えて、わざとらしく話を持ち出すよりは、自然の与えてくれるものを取り逃さないようにする方が好かろうと思つて、例の問題にはしばらく手を着けずにとっとしておく事にしました。

こう言つてしまえば大変簡単に聞こえますが、そうした心の経過には、潮の満干と同じように、色々の高低があつたのです。私はKの動かない様子を見て、それにさまざまの意味を付け加えました。奥さんとお嬢さんの言語動作を観察して、二人の心がはたしてそこに現われている通りなのだろうかと疑つても見ました。そうして人間の胸の中に装置された複雑な器械が、時計の針のように、明瞭に偽りなく、盤上の数字を指し得るものだろうかと考えました。要するに私は同じ事をこうも取り、ああも取りした揚句、漸くここに落ち付いたものと思つて下さい。更にむずかしく言えば、落ち付くなどという言葉は、この際決して使われた義理でなかったのかも知れません。

その内学校がまたる始まりました。(正月明けの後半の学期)、私たちは時間の同じ日には連れ立って宅を出ます。都合がよければ帰る時にもやはりいっしょに帰りました。外

部から見たKと私は、何にも前と違ったところがないように親しくなったのです。けれども腹の中では、各自に各自の事を勝手に考えていたに違いありません。ある日私は突然往来でKに肉薄しました。私が第一に聞いたのは、この間の自白が私だけに限られているか、または奥さんやお嬢さんにも通じているかの点にあったのです。私のこれから取るべき態度は、この問いに対する彼の答え次第で極めなければならぬと、私は思ったのです。すると彼は「……外の人にはまだ誰にも打ち明けていない」と明言しました。私は事情が自分の推察通りだったので、内心嬉しがりました。私はKの私より横着なのをよく知っていました。彼の度胸にも敵わないという自覚があったのです。けれども一方ではまた妙に彼を信じていました。学資の事で養家を三年も欺むいていた彼ですけれども、彼の信用は私に対して少しも損われていなかったのです。私はそれがために却って彼を信じ出したくらいです。だからいくら疑い深い私でも、明白な彼の答えを腹の中で否定する気は起りようがなかったのです。(つまり、Kの「……外の人にはまだ誰にも打ち明けていない」というこの言葉を、先生という人は、そのまま「信じた」と言うことである。)

私はまた彼に向って、彼の恋を「……どう取り扱うつもりか？」と尋ねました。それが「……単なる自白に過ぎないのか？」、またはその自白について、「……実際的な効果を、も収める気なのか？」と問うたのです。(先生が知りたいのは、まさにそこである)。しかるに彼はそこになると、何にも答えません。黙って下を向いて歩き出します。私は彼に隠し立てをしてくれるな、すべて思った通りを話してくれと頼みました。彼は何も私に隠す必要はないと判然断言しました。しかし私の知ろうとする点には、一言の返事も与えないのです。私も往来だからわざわざ立ち留まって底まで突き留める訳に行きません。ついそれなりにしてしまいました。(ここまでの内容は、まさに「書いてある通り」であるが、大事なのは、次の「図書館」の場面からである。)

*

*

四十、学校の図書館にいる時にKがやって来る(前半部)

四十、学校の図書館にいる時にKがやって来る（前半部）

「……ある日私は久しぶりに学校の図書館に入りました。私は広い机の片隅で窓から射す光線を半身に受けながら、新着の外国雑誌を、あちらこちらと引つ繰り返して見ていました。私は担任教師から専攻の学科に関して、次の週までにある事項を調べて来いと命ぜられたのです。しかし私に必要な事柄がなかなか見付からないので、私は二度も三度も雑誌を借り替えなければなりませんでした。最後に私はやっと自分に必要な論文を探し出して、一心にそれを読み出しました。すると突然幅の広い机の向う側から小さな声で私の名を呼ぶものがあります。私はふと眼を上げてそこに立っているKを見ました。Kはその上半身を机の上に折り曲げるようにして、彼の顔を私に近付けました。ご承知の通り図書館では他の人の邪魔になるような大きな声で話をする訳に行かないのですから、Kのこの所作は誰でもやる普通の事なのですが、私はその時に限って、一種変な心持がしました。

Kは低い声で勉強かと聞きました。私はちよつと調べものがあるのだと答えました。それでもKはまだその顔を私から放しません。同じ低い調子でいっしょに散歩をしないかと言うのです。私は少し待っていればともいいと答えました。彼は待っていると云ったまま、すぐ私の前の空席に腰を下ろしました。すると私は気が散って急に雑誌が読めなくなりました。何だかKの胸に一物があつて、談判でもしに來られたように思われて仕方がないので。私ははやむを得ず読みかけた雑誌を伏せて、立ち上がろうとしました。Kは落ち付き払ってもう済んだのかと聞きます。私はどうでもいいのだと答えて、雑誌を返すと共に、Kと図書館を出ました。（前半の本文）

*

*

さて、「……ある日私は久しぶりに学校の図書館に入りました。私は広い机の片隅で窓から射す光線を半身に受けながら、新着の外国雑誌を、あちらこちらと引つ繰り返して見ていました。私は担任教師から専攻の学科に関して、次の週までにある事項を調べて来いと命ぜられたのです。しかし私に必要な事柄がなかなか見付からないので、私は二度も三度も雑誌を借り替えなければなりませんでした。最後に私はやっと自分に必要な論文を探し出して、一心にそれを読み出しました。すると突然幅の広い机の向う側から小さな声で私の名を呼ぶものがあり、私はふと眼を上げてそこに立っているKを見ました。Kはその上半身を机の上に折り曲げるようにして、彼の顔を私に近付けました。ご承知の通り図書館では他の人の邪魔になるような大きな声で話をする訳に行かないのですから、Kのこの所作は誰でもやる普通の事なのですが、私はその時に限って、一種変な心持がしました。

ところで、学問には、「人文科学」と「社会科学」それに「自然科学」とがあるかと思ふが、まず、「人文科学」では、「人間とは何か、また、人間の所産（人間が生み出したもの）を研究の対象とする学問である。例えば、哲学、文学、歴史学、考古学、心理学、宗教学、言語学、その他などがあるかと思う。また、「社会科学」では、社会における「人間の営み」の研究を行なう分野であり、例えば、政治学、経済学、法学、社会学、教育学、国際研究、コミュニケーション、その他などがあるかと思う。そして、「自然科学」では、自然に属する諸々の対象を取り扱い、その法則性を明らかにする学問であり、例えば、物理学、天文学、地球科学、生物学、化学、工学（科学技術）、その他などがあるかと思う。さて、先生の「専攻の学科」であるが、先生はもちろん、「社会科学」や「自然科学」

などの分野ではない。だとすれば、「人文科学」であるが、その「人文科学」の中の何かということになるが、それは恐らく、「文学か哲学」のようなものかと思う。一方、Kという人の「専攻の学科」であるが、それは、日蓮のことをはじめ、Kの言う昔の人とは、無論英雄でもなければ豪傑でもない。(英雄や豪傑は所詮俗人に過ぎない)。霊のために肉を虐げたり、道のために体を鞭ったりしたいわゆる難行苦行の人を指すとあるので、恐らく、「宗教学」(或いは「哲学」)のようなものになるかと思う。

Kは低い声で勉強かと聞きました。私はちよつと調べものがあるのだと答えました。それでもKはまだその顔を私から放しません。同じ低い調子でいっしょに散歩をしないかと言うのです。私は少し待ってればしてもいいと答えました。彼は待っていると云ったまま、すぐ私の前の空席に腰を下ろしました。すると私は気が散って急に雑誌が読めなくなりました。何だかKの胸に一物があつて、談判でもしに來られたように思われて仕方ないのです。私はやむを得ず読みかけた雑誌を伏せて、立ち上がろうとしました。Kは落ち付き払つてもう済んだのかと聞きます。私はどうでもいいのだと答えて、雑誌を返すと共に、Kと図書館を出ました。

四十、上野公園で先生にどう思うかと尋ねる(後半部)

二人は別に行く所もなかったのですが、竜岡町から池の端へ出て、上野の公園の中へ入りました。その時彼は例の事件について、突然向うから口を切りました。前後の様子を綜合して考えると、Kはそのために私をわざわざ散歩に引張り出したらしいのです。けれども彼の態度はまだ実際の方面へ向つてちつとも進んでいませんでした。彼は私に向つて、ただ漠然と、どう思うと言ふのです。どう思うというのは、そうした恋愛の淵に陥った彼を、どんな眼で私が眺めるかという質問なのです。一言で言うと、彼は現在の自分について、私の批判を求めたいようなのです。そこに私は彼の平生と異なる点を確かに認める事が出来たと思ひました。たびたび繰り返すようですが、彼の天性は他の思わくを憚るほど弱く出来上つてはいなかつたのです。こうと信じたら一人でどんどん進んで行くだけの度胸もあり勇氣もある男なのです。養家事件でその特色を強く胸の裏に彫り付けられた私、これは様子が違ふと明らかに意識したのは当然の結果なのです。

私がKに向つて、この際何で私の批評が必要なのかと尋ねた時、彼はいつもにも似ない悄然とした口調で、自分の弱い人間であるのが實際恥ずかしいと言ひました。そうして迷つているから自分で自分が分らなくなつてしまつたので、私に公平な批評を求めるより外に仕方がないと言ひました。私は隙かさず迷うという意味を聞き糺しました。彼は進んでいいか退いていいか、それに迷うのだと説明しました。私はすぐ一歩先へ出ました。そうして退こうと思へば退けるのかと彼に聞きました。すると彼の言葉がそこで不意に行き詰りました。彼はただ苦しいと言つただけでした。實際彼の表情には苦しうなところがありありと見えていました。もし相手がお嬢さんでなかつたならば、私はどんなに彼に都合のいい返事を、その渴き切つた顔の上に慈雨の如く注いでやつたか分りません。私はそのくらいの美しい同情をもつて生れて來た人間と自分ながら信じています。しかしその時の私は違つていました。(後半の本文)

*

*

さて、二人は別に行く所もなかったもので、竜岡町から池の端へ出て、上野の公園の中へ入りました。その時彼は例の事件について、突然向うから口を切りました。前後の様子を総合して考えると、Kはそのために私をわざわざ散歩に引っぱり出したらしいのです。けれども彼の態度はまだ実際の方面へ向ってちつとも進んでいませんでした。彼は私に向って、ただ漠然と「どう思う？」と言うのです。どう思うというのは、そうした恋愛の淵に陥った彼を、どんな眼で私が眺めるかという質問なのです。「一言で言うと、「……彼は現在の自分について、私の批判を求めたいようなのです」。そこに私は彼の平生と異なる点を確かに認める事が出来たと思いました。たびたび繰り返すようですが、彼の天性は他の思わくを憚るほど弱く出来上ってはいなかったのです。こうと信じたら一人でどんなに進んで行くだけの度胸もあり勇氣もある男なのです。養家事件でその特色を強く胸の裏に彫り付けられた私が、これは様子が違うと明らかに意識したのは当然の結果なのです。」

私がKに向って、この際何で私の批評が必要なのかと尋ねた時、彼はいつもにも似ない悄然とした口調で、自分の弱い人間であるのが實際恥ずかしいと言いました。そうして「……迷っているから自分で自分が分らなくなってしまうたので、私に公平な批評を求めより外に仕方がない」と言いました。私は隙かさず「迷う」という意味を聞き糺しました。「……彼は進んでいいか退いていいか、それに迷うのだ」と説明しました。私はすぐ一歩先へ出ました。そうして「……退こうと思えば退けるのか」と彼に聞きました。すると彼の言葉がそこで不意に行き詰りました。彼はただ「苦しい」と言っただけでした。実際彼の表情には苦しそうなところがありありと見えていました。

例えば、Kという人は、なぜ「進む方向」へと向かわないのか？ お嬢さんにはこれという婚約者はいないのだから、誰に遠慮することなく思いきって「愛の告白」をしたらよいのである。それなのに、Kという人は一体何をためらっているのだろうか？ なぜ一歩を踏み出すことに躊躇しているのだろうか？ それには、次の「二つの理由」があり、一つは、いわゆる「理想の問題」（それは「道を一心に精進すること」そのためには色恋は邪魔になる）のであり、そして、もう一つは、やはり「先生の問題」があるのである。

つまり、Kという人は、親友である「先生」が「お嬢さんのことが好きである」ということぐらいは、直接には聞いてはいなくても、当然のことながら、うすうすは感じていたであろう。それゆえ、その「二人の仲」にいきなり割って入るということには、やはり「ためらい」が生じたのではないかと思う。つまり、いわゆる「ぬけがけ」は避けたかったというのである。それは、二人の「親友関係」（或いは「信頼関係」）に決定的なヒビが入る（或いは「崩壊させること」）にも直結するからである。

つまり、親友である「K」は、親友である「先生」（当時は大学生）の「反応」がぜひとも知りたかった。どのような「反応」を示すのか？ その先生という人の「心の中」がどうしても知りたかった。それによって、自分もどうしたらよいかはつきりと見えて来るからである。そして、若しもそれが「肯定的な反応」であれば、それは、親友である「先生」からの「承諾を得た」ということにもなり、それゆえ、堂々と「お嬢さんと交際ができる」ということにもなるだろう。一方、先生という人は、もし相手がお嬢さんでなかったならば、私はどんなに彼に都合のいい返事を、（例えば、それならつき合ったらいいじゃないかと）、その渴き切った顔の上に慈雨の如く注いでやったか分りません。私はそのくらいの美しい同情をもって生れて来た人間と自分ながら信じています。しかしその時の

私は違っていました。(先生という人は、ここで一気に「反撃」に出るのである。)

四十一、先生のKに対する最初の反撃

「……私はちやうど他流試合でもする人のようにKを注意して見ていたのです。私は、私の眼、私の心、私の身体、すべて私という名の付くものを五分の隙間もないように用意して、Kに向ったのです。罪のないKは穴だらけというよりむしろ明け放しと評するのが適当なくらいに無用心でした。私は彼自身の手から、彼の保管している要塞の地図を受け取って、彼の眼の前でゆっくりそれを眺める事が出来たも同じでした。

Kが理想と現実の間に彷徨してふらふらしているのを発見した私は、ただ一打で彼を倒す事が出来るだろうという点にばかり眼を着けました。そうしてすぐ彼の虚に付け込んだのです。私は彼に向って急に厳粛な改まった態度を示し出しました。無論策略からですが、その態度に相応するくらいな緊張した気分もあつたのですから、自分に滑稽の羞恥だのを感じず余裕はありませんでした。私はまず「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」と言い放ちました。これは二人で房州を旅行している際、Kが私に向って使った言葉です。私は彼の使った通りを、彼と同じような口調で、再び彼に投げ返したのです。しかし決して復讐ではありません。私は復讐以上に残酷な意味をもっていたという事を自白します。私はその一言でKの前に横たわる恋の行手を塞ごうとしたのです。

Kは真宗寺に生れた男でした。しかし彼の傾向は中学時代から決して生家の宗旨に近いものではなかったのです。教義上の区別をよく知らない私が、こんな事をいう資格に乏しいのは承知していますが、私はただ男女に関係した点についてのみ、そう認めていたのです。Kは昔から精進という言葉が好きでした。私はその言葉の中に、禁欲という意味も籠っているのだろうと解釈していました。しかし後で実際に聞いて見ると、それよりもまだ嚴重な意味が含まれているので、私は驚きました。道のためにはすべてを犠牲にすべきものだというのが彼の第一信条なのです。Kが自活生活をしている時分に、私はよく彼から彼の主張を聞かされたのでした。その頃からお嬢さんを思っていた私は、勢いどうしても彼に反対しなければならなかったのです。私が反対すると、彼はいつでも気の毒そうな顔をしました。そこには同情よりも侮蔑の方が余計に現われていました。

こういう過去を二人の間に通り返して来ているのですから、精神的に向上心のないものは馬鹿だという言葉は、Kに取って痛いに違いなかったのです。しかし前にも言った通り、私はこの一言で、彼がせっかく積み上げた過去を蹴散らしたつもりではありません。却つてそれを今まで通り積み重ねて行かせようとしたのです。それが道に達しようが、天に届こうが、私は構いません。私はただKが急に生活の方向を転換して、私の利害と衝突するのを恐れたのです。要するに私の言葉は単なる利己心の発現でした。

「……精神的に向上心のないものは、馬鹿だ」と、私は二度同じ言葉を繰り返しました。そうして、その言葉がKの上にとど影響するかを見詰めていました。「……馬鹿だ」とやがてKが答えました。「……僕は馬鹿だ」と。

Kはびたりとそこへ立ち留ったまま動きません。彼は地面の上を見詰めています。私は思わずぎよつとしました。私にはKがその刹那に居直り強盗のごとく感ぜられたのです。

しかしそれにしては彼の声がいかに力に乏しいという事に気が付きました。私は彼の眼遣いを参考にしたかったのですが、彼は最後まで私の顔を見ないので。そうして、徐々とまた歩き出しました。(本文)

*

*

さて、「……私はちようど他流試合でもする人のようにKを注意して見ていたのです。私は、私の眼、私の心、私の身体、すべて私という名の付くものを五分の隙間もないように用意して、Kに向ったのです。罪のないKは穴だらけというよりむしろ明け放しと評するのが適當なくらいに無用心でした。私は彼自身の手から、彼の保管している要塞の地図を受け取って、彼の眼の前でゆっくりそれを眺める事が出来たも同じでした」。

Kが「理想」(道への精進)と「現実」(恋への想い)の間に彷徨してふらふらしているのを発見した私は、ただ一打で彼を倒す事が出来るだろうという点にばかり眼を着けました。そうしてすぐ彼の虚に付け込んだのです。私は彼に向って急に厳肅な改まった態度を示し出しました。無論策略からですが、その態度に相応するくらいな緊張した気分もあつたのですから、自分に滑稽だの羞恥だのを感じる余裕はありませんでした。私はまず「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」と言い放ちました。これは二人で房州を旅行している際、Kが私に向って使った言葉です。私は彼の使った通りを、彼と同じような口調で、再び彼に投げ返したのです。しかし決して復讐ではありません。私は復讐以上に残酷な意味をもっていたという事を自白します。私はその一言で「……Kの前に横たわる恋の行手を塞ごうとした」のです。(先生の目的は、Kの恋の行手を塞ぐことだけであつた。)

Kは真宗寺に生れた男でした。しかし彼の傾向は中学時代から決して生家の宗旨に近いものではなかつたのです。教義上の区別をよく知らない私が、こんな事をいう資格に乏しいのは承知していますが、私はただ男女に関係した点についてのみ、そう認めていたのです。Kは昔から精進という言葉が好きでした。私はその言葉の中に、禁欲という意味も籠っているのだろうと解釈していました。しかし後で實際を聞いて見ると、それよりもまだ嚴重な意味が含まれているので、私は驚きました。道のためにはすべてを犠牲にすべきものだというのが彼の第一信条なのですから、撰欲や禁欲は無論、たとい欲を離れた恋そのものでも道の妨害になるのです。Kが自活生活をしている時分に、私はよく彼から彼の主張を聞かされたのでした。その頃からお嬢さんを思っていた私は、勢いどうしても彼に反対しなければならなかつたのです。私が反対すると、彼はいつでも気の毒そうな顔をしました。そこには同情よりも侮蔑の方が余計に現われていました。

こういう過去を二人の間に通り抜けて来ているのですから、精神的に向上心のないものは馬鹿だという言葉は、Kに取って痛いに違ひなかつたのです。しかし前にも言った通り、私はこの一言で、彼がせっかく積み上げた過去を蹴散らしたつもりではありません。却つて(恋の横道へと逸れるのを)「今まで通り、積み重ねて行かせようとした」のです。それが道に達しようが、天に届こうが、私は構いません。私はただKが急に生活の方向を転換して、私の利害と衝突するのを恐れたのです。(人間はお互いの「利害や感情」がぶつかり合うから揉事になるのであり、お互いの「利害や感情」がぶつかり合わなければ、今まで通りの「関係」でいられるのです)。要するに私の言葉は単なる利己心の発現でした。

そして、「……精神的に向上心のないものは、馬鹿だ」と、私は二度同じ言葉を繰り返しました。そうして、その言葉がKの上にとどう影響するかを見詰めていました。「……馬

鹿だ」とやがてKが答えました。「……僕は馬鹿だ」と。(これは迷っているのも馬鹿であるが、他人に相談したことも馬鹿であるということかも知れない。つまり、先生の「反撃」は予想外であり、いつもの「先生とは全く違う」という感じを抱いたに違いない。それは、お嬢さんをめぐってのまさに「恋敵」《敵同士》になつてしまつたからである。) Kはびたりとそこへ立ち留つたまま動きません。彼は地面の上を見詰めています。私は思わずぎよつとしました。私にはKがその刹那に居直り強盗(居直つて自分に襲いかかつて来る)の如く感ぜられたのです。しかしそれにしては彼の声がいかに力に乏しいという事に気が付きました。私は彼の眼遣いを参考にしなかつたのですが、彼は最後まで私の顔を見ないので。そうして、徐々とまた歩き出しました。

四十二、先生の最初の反撃に対するKの反応

「……私はKと並んで足を運ばせながら、彼の口を出る次の言葉を腹の中で暗に待ち受けました。或は待ち伏せと言つた方がまだ適当かも知れません。その時の私はたといKを騙し打ちにしても構わないくらいに思つていたので。しかし私にも教育相当の良心はありますから、もし誰か私の傍へ来て、お前は卑怯だと一言私語してくれるものがあつたならば、私はその瞬間に、はつと我に立ち帰つたかも知れません。もしKがその人であつたならば、私は恐らく彼の前に赤面したでしょう。ただKは私を窘めるには余りに正直でした。余りに単純でした。余りに人格が善良だったので。目のくらんだ私は、そこに敬意を払う事を忘れて、却つてそこに付け込んだのです。そこを利用して彼を打ち倒そうとしたのです。」

Kはしばらくして、私の名を呼んで私の方を見ました。今度は私の方で自然と足を留めました。するとKも留まりました。私はその時やつとKの眼を真向に見る事が出来たのです。Kは私より背の高い男でしたから、私は勢い彼の顔を見上げるようにしなければなりません。私はそうした態度で、狼の如き心を罪のない羊に向けたのです。

「……もうその話は止めよう」と彼が言いました。彼の眼にも彼の言葉にも変に悲痛なところがありました。私はちよつと挨拶が出来なかつたのです。するとKは、「……止めてくれ」と今度は頼むように言い直しました。私はその時彼に向つて残酷な答えを与えたのです。狼が隙を見て羊の咽喉笛へ食い付くように。

「……止めてくれて、僕が言い出した事じゃない、もともと君の方から持ち出した話じゃないか。しかし君が止めたければ、止めてもいいが、ただ口の先で止めたつて仕方があるまい。君の心でそれを止めるだけの覚悟がなければ。一体君は君の平生の主張をどうするつもりなのか」と。

私がこう言つた時、背の高い彼は自然と私の前に萎縮して小さくなるような感じがしました。彼はいつも話す通り頗る強情な男でしたけれども、一方ではまた人一倍の正直者でしたから、自分の矛盾などをひどく非難される場合には、決して平気でいられない質だつたのです。私は彼の様子を見てようやく安心しました。すると彼は卒然「覚悟？」と聞きました。そうして私がまだ何とも答えない先に「……覚悟、——覚悟ならぬ事もない」と付け加えました。彼の調子は独言のようでした。また夢の中の言葉のようでした。

二人はそれぎり話を切り上げて、小石川の宿の方に足を向けました。割合に風のない暖かな日でしたけれども、何しろ冬の事ですから、公園のなかは淋しいものでした。ことに霜に打たれて着味を失った杉の木立の茶褐色が、薄黒い空の中に、梢を並べて聳えているのを振り返って見た時は、寒さが背中へ噛じり付いたような心持がしました。我々は夕暮の本郷台を急ぎ足でどしどし通り抜けて、また向うの岡へ上るべく小石川の谷へ下りたのです。私はその頃になって、ようやく外套の下に体の温味を感じ出したぐらいです。急いだためでもありませんが、我々は帰り路には殆んど口を聞きませんでした。宅へ帰って食卓に向った時、奥さんはどうして遅くなったのかと尋ねました。私はKに誘われて上野へ行ったと答えました。奥さんはこの寒いのにと言って驚いた様子を見せました。お嬢さんは上野に何があったのかと聞きたがります。私は何も無いが、ただ散歩したのだという返事だけしておきました。平生から無口なKは、いつもよりなお黙っていました。奥さんが話しかけても、お嬢さんが笑っても、碌な挨拶はしませんでした。それから飯を呑み込むように掻き込んで、私はまだ席を立たないうちに、自分の室へ引き取りました。(本文)

* * *

さて、「……私はKと並んで足を運ばせながら、彼の口を出る次の言葉を腹の中で暗に待ち受けました。或は待ち伏せと言った方がまだ適当かも知れません。その時の私はたといKを騙し打ちにしても構わないくらいに思っていたのです。しかし私にも教育相当の良心はありますから、もし誰か私の傍へ来て、お前は卑怯だと一言私語してくれるものがあつたなら、私はその瞬間に、はっと我に立ち帰ったかも知れません。もしKがその人であつたなら、私は恐らく彼の前に赤面したでしょう。ただKは私を窺めるには余りに正直でした。余りに単純でした。余りに人格が善良だったので。目のくらんだ私は、そこに敬意を払う事を忘れて、却つてそこに付け込んだのです。そこを利用して彼を打ち倒そうとしたのです。(これは、何が何でもお嬢さんを奪われたくない、また、何があつてもお嬢さんだけは失いたくないという、そのような「想い」が余りに強過ぎて、先生ですから、本来の「健全な精神」を失つてしまつているのである。)

例えば、異性を「本気で好きになる」(或いは本気で「愛するようになる」と、まさに「……誰もが相手の異性を是非とも専有(独占)したいという強烈な一念に襲われるもの」)であり、それゆえ、相手の異性がほかの誰かとかにもかにも親しうに話をしてる場面などに出つくわすと、その人の「心の中」では、もう抑え難いほどのもう気が狂わんばかりの「嫉妬心」や「不平・不満」、その他の「負の感情」(恨みや憎しみ)などに襲われてしまうものである。——それは、誰の「心の中」でも全く同じことであり、とても「正気」ではいられないほどの「精神的状態」に深く陥つてしまうのである。それが、まさに「恋」(恋愛)であり、——例えば、先生は、「……恋(恋愛)は、罪悪である」と言っているが、それは、どれほど真面目な人であっても、(先生もそうであるが)、一度、本気で「恋」(恋愛)に深く陥つてしまうと、ふだんの「知性や理性」などに支配されていた「冷静な判断」などはとても出来にくくなり、まさに「正気」を失つて、ふだんではとても考えられないようなことを「言つたりやつたりするようになる」のである。そういう意味では、「恋」(恋愛)というのは、一面では、ふだんの冷静な「知性や理性」などの働きを鈍らせる一種の「狂気」にも近いものになり易いのである。

Kはしばらくして、私の名を呼んで私の方を見ました。今度は私の方で自然と足を留めました。するとKも留まりました。私はその時やとKの眼を真向に見る事が出来たのです。Kは私より背の高い男でしたから、私は勢い彼の顔を見上げるようにしなければなりません。私はそうした態度で、狼の如き心を罪のない羊に向けたのです。

Kは、「……もうその話は止めよう」と言いました。彼の眼にも彼の言葉にも変に悲痛なところがありました。私はちよつと挨拶が出来なかつたのです。するとKは、「……止めてくれ」と今度は頼むように言い直しました。私はその時彼に向つて残酷な答えを与えたのです。狼が隙を見て羊の咽喉笛へ食い付くように。「……止めてくれって、僕が言い出した事じゃない、もともと君の方から持ち出した話じゃないか。しかし君が止めなければ、止めてもいいが、ただ口の先で止めたって仕方があるまい。君の心でそれを止めるだけの覚悟がなければ。一体君は君の平生の主張をどうするつもりなのか」と。(これは、相手が最も衝撃を受けるような心の「核心部分」(信念や信条)を攻撃したのである。)

私がこう言った時、背の高い彼は自然と私の前に萎縮して小さくなるような感じがしました。彼はいつも話す通り頗る強情な男でしたけれども、一方ではまた人一倍の正直者でしたから、自分の矛盾などをひどく非難される場合には、決して平気でいられない質だったので。私は彼の様子を見てようやく安心しました。すると彼は卒然「覚悟？」と聞きました。そうして私がまだ何とも答えない先に「……覚悟、——覚悟ならぬ事も無い」と付け加えました。彼の調子は独言のようでした。また夢の中の言葉のようでした。この「覚悟」という言葉が、先生の「頭の中」(或いは「心の中」)にいつまでも重苦しく残ることになるのである。

*

*

二人はそれぎり話を切り上げて、小石川の宿の方に足を向けました。割合に風のない暖かな日でしたけれども、何しろ冬の事ですから、公園のなかは淋しいものでした。ことに霜に打たれて蒼味を失った杉の木立の茶褐色が、薄黒い空の中に、梢を並べて聳えているのを振り返って見た時は、寒さが背中へ嚙じり付いたような心持がしました。我々は夕暮の本郷台を急ぎ足でどしどし通り抜けて、また向うの岡へ上るべく小石川の谷へ下りたのです。私はその頃になつて、ようやく外套の下に体の温味を感じ出したぐらいです。急いだためでもありませんが、我々は帰り路には殆んど口を聞きませんでした。宅へ帰つて食卓に向つた時、奥さんはどうして遅くなつたのかと尋ねました。私はKに誘われて上野へ行つたと答えました。奥さんはこの寒いのにと言つて驚いた様子を見せました。お嬢さんは上野に何があつたのかと聞きたがります。私は何も無いが、ただ散歩したのだという返事だけしておきました。平生から無口なKは、いつもよりなお黙っていました。奥さんが話しかけても、お嬢さんが笑つても、碌な挨拶はしませんでした。それから飯を呑み込むように掻き込んで、私はまだ席を立たないうちに、自分の室へ引き取りました。

一、先生の最初の反撃(反撃一)

さて、先生という人は、このままでは「K」にお嬢さんを取られてしまうかも知れない、すぐにも何らかの手を打たなければ、大変なことになるという、そういう悶々とした「想い」の状態のまま、その後、二人の間には、表面上、それほど変わらないような関係が続

くことになるが、しかし、深く悩み続けていた「K」という人は、再び、図書館にいる「先生」を呼び出しては、力弱く、「……ただ漠然と、どう思うという」のであった。それに対して、親友である「先生」という人は、まさにことばかりに一気に「反撃」に出るのである。それはもちろん、お嬢さんを「絶対に失いたくないという一心からだ」と思うが、この時の「対応(策略)」が、結果として、親友を「死」へと追いやったという「意識」へとつながっていくのである。

それでは、それは、いったいどのような対応だったかと言え、それは、次のようなものである。つまり、「……私はちようど他流試合でもする人のようにKを注意して見えたのです。私は、私の眼、私の心、私の身体、すべて私という名のつくものを五分の隙間もないように用意して、Kに向ったのです。罪のないKは穴だらけというよりむしろ明け放しと評するのが適当なくらいに無用心でした。Kが理想と現実の間に彷徨してふらふらしているのを発見した私は、ただ一打で彼を倒すことが出来るだろうという点にばかり眼を着けました。そうしてすぐ彼の虚につけ込んだのです。私はまず『精神的に向上心のないものは馬鹿だ』と言い放ちました。私はその一言でKの前に横たわる恋の行方を塞ごうとしたのです。というのも、Kは、真宗寺に生まれ、昔から精進という言葉が好きでした。道のためにはすべてを犠牲にすべきものだというのが彼の第一信条であり、それゆえ、摂慾や禁欲はむしろ、たとえ慾を離れた恋そのものでも道の妨害になるのです。だからこそ、この言葉がKには痛いだろうと思っただけです。……」

一方、「K」は、それに対して、「……もうその話は止めよう」と彼が辛そうに言い出した時、私は、彼に向って残酷な答えを与えたのです。狼が隙を見て羊の咽喉管へ食いくように。「……止めてくれって、僕が言い出したことじゃない。もともと君のほうから持ち出した話じゃないか。しかし君が止めたければ、止めてもいいが、ただ口の先で止めたって仕方があるまい。君の心でそれを止めるだけの覚悟がなければ。一体君は君の平生の主張をどうするつもりなのか」と、相手が最も衝撃を受けるような心の「核心部分」(信念や信条)を攻撃したのである。それに対して、「K」は、「覚悟？」と聞き、やがて、「……覚悟、——覚悟ならないこともない」とつけ加えた、という展開になるのである。

*

*

四十三、
上野うえのから帰った晩、二人は……

四十三、上野から帰った晩、二人は……

「……その頃は覚醒とか新しい生活とかいう文字のまだない時分でした。しかしKが古い自分をさらりと投げ出して、一意に新しい方角へ走り出さなかったのは、現代人の考えが彼に欠けていたからではないのです。彼には投げ出す事の出来ないほど尊とい過去があったからです。彼はそのため今日まで生きて来たと言ってもいいくらいなのです。だからKが一直線に愛の目的物に向って猛進しないと行って、決してその愛の生温い事を証拠立てる訳には行きません。いくら熾烈な感情が燃えていても、彼は無闇に動けないのです。前後を忘れるほどの衝動が起る機会を彼に与えない以上、Kはどうしても一寸踏み留まって自分の過去を振り返らなければならなかったのです。そうすると過去が指し示す路を今まで通り歩かなければならなくなるのです。その上彼には現代人のもたない強情と我慢がありました。私はこの双方の点においてよく彼の心を見抜いていたつもりなのです。

上野から帰った晩は、私に取って比較的安静な夜でした。私はKが室へ引き上げたあとを追いかけて、彼の机の傍に坐り込みました。そうして取り留めもない世間話をわざと彼に仕向けました。彼は迷惑そうでした。私の眼には勝利の色が多少輝いていたでしょう、私の声にはたしかに得意の響きがあったのです。私はしばらくKと一つ火鉢に手を翳した後、自分の室に帰りました。外の事にかけては何をしても彼に及ばなかった私も、その時だけは恐るるに足りないという自覚を彼に對してもっていたのです。

私はほどなく穏やかな眠りに落ちました。しかし突然私の名を呼ぶ声で眼を覚ました。見ると、間の襖が二尺ばかり開いて、そこにKの黒い影が立っています。そうして彼の室には宵の通りまだ燈火が点いているのです。急に世界の変った私は、少しの間口を利く事も出来ずに、ぼうっとして、その光景を眺めていました。

その時Kはもう寝たのかと聞きました。Kはいつでも遅くまで起きている男でした。私は黒い影法師のようなKに向って、何か用かと聞き返しました。Kは大した用でもない、ただもう寝たか、まだ起きてるかと思つて、便所へ行つたついでに聞いてみただけだと答えました。Kは洋燈の灯を背中に受けているので、彼の顔色や眼つきは、全く私には分かりませんでした。けれども彼の声は不断よりも却つて落ち付いていたくらいでした。

Kはやがて開けた襖をぴたりと立て切りました。私の室はすぐ元の暗闇に帰りました。私はその暗闇より静かな夢を見るべくまた眼を閉じました。私はそれぎり何も知りません。しかし翌朝になって、昨夕の事を考えてみると、何だか不思議でした。私はことによると、すべてが夢ではないかと思ひました。それで飯を食う時、Kに聞きました。Kはたしかに襖を開けて私の名を呼んだと言います。なぜそんな事をしたのかと尋ねると、別に判然した返事もしません。調子の抜けた頃になって、近頃は熟睡が出来るのかと却つて向うから私に問うのです。私は何だか変に感じました。

その日丁度同じ時間に講義の始まる時間割になつていたので、二人はやがていっしょに宅を出ました。今朝から昨夕の事が氣に掛つている私は、途中でまたKを追窮しました。けれどもKはやはり私を満足させるような答えをしません。私はあの事件について何か話すつもりではなかったのかと念を押して見ました。Kはそうではないと強い調子で言い切りました。昨日上野で「……その話はもう止めよう」と言つたではないかと注意する如くにも聞こえました。Kはそういう点に掛けて鋭い自尊心をもつた男なのです。ふとそ

ここに気のついた私は突然彼の用いた「覚悟」という言葉を連想し出しました。すると今までまるで気にならなかつたその二字が妙な力で私の頭を抑え始めたのです。(本文)

*

*

さて、「……その頃は覚醒とか新しい生活とかいう文字のまだない時分でした。しかしKが古い自分をさらりと投げ出して、一意に新しい方角へ走り出さなかつたのは、現代人の考えが彼に欠けていたからではないのです。彼には投げ出す事の出来ないほど尊とい過、去があつたからです。彼はそのために今日まで生きて来たと言つてもいいくらいなのです。だからKが一直線に愛の目的物に向つて猛進しないと云つて、決してその愛の生温い事を証拠立てる訳には行きません。いくら熾烈な感情が燃えていても、彼は無闇に動けないのです。前後を忘れるほどの衝動が起る機会を彼に与えない以上、Kはどうしても一寸踏み留まつて自分の過去を振り返らなければならなかつたのです。そうすると過去が指し示す路を今まで通り歩かなければならなくなるのです。その上彼には現代人のもたない強情と我慢がありました。私はこの双方の点においてよく彼の心を見抜いていたつもりなのです。

さて、Kという人が一直線に愛の「目的物」に向つて猛進しないからと言つて、決してその「愛」の生温い事を証拠立てる訳には行きません。いくら熾烈な感情が燃えていても、彼は無闇に動けないのです。それは一体なぜなのかと問えば、それは、「……彼には投げ出す事の出来ないほど尊とい過去があつたからです。彼はそのために今日まで生きて来たと言つてもいい位なのです」。それでは、その「尊とい過去」とは一体何かと問えば、それは、次のような事である。つまり、Kという人は、昔から常に「精進」という言葉を使つて来たのです。彼の「行為・動作」は悉くこの「精進」の一語で形容されるものであり、道のためにはすべてを犠牲にすべきものだというのが彼の第一信条なのです。それから節慾や禁欲はむろん、たとい慾を離れた「恋」そのものでも道の妨害になるのです。それゆえ、Kがもし「理想」(道への精進)の方を選べば、まさに「現実」(恋への想い)は断ち切らなければならぬ、一方、若しも「現実」(恋への想い)の方を選べば、まさに「理想」(道への精進)を断念せざるを得ない。だからこそ、「……苦しい」と言つてゐるのであり、そのような二律背反の「究極の選択」を迫られてゐるのであり、それゆえ、Kという人は、「……自分でももう自分をどうしてよいか分なくなつてしまひ」、そこで「……先生に公平な批評を求めるより外に仕方がなかつた」となるのである。(もちろん、その場合、Kという人が若しも「現実」(恋への想い)の方を選べば、今度は「先生との問題」が必ず生じることになるのです。)

*

*

上野から帰つた晩は、私に取つて比較的安静な夜でした。私はKが室へ引き上げたあとを追ひ懸けて、彼の机の傍に坐り込みました。そうして取り留めもない世間話をわざと彼に仕向けました。彼は迷惑そうでした。私の眼には勝利の色が多少輝いていたでしょう、私の声にはたしかに得意の響きがあつたのです。私はしばらくKと一つ火鉢に手を翳した後、自分の室に帰りました。外の事にかけては何をしても彼に及ばなかつた私も、その時だけは恐るるに足りないという自覚を彼に對してもつてゐたのです。(これは、Kが「恋」の方を選んで、まさか「道」の方を捨てるようなことは出来まいと見てゐるのである。)

私はほどなく穏やかな眠りに落ちました。しかし突然私の名を呼ぶ声で眼を覚まししました。見ると、間の襖が二尺ばかり開いて、そこにKの黒い影が立っています。そうして

彼の室には宵の通りまだ燈火が点いているのです。急に世界の変った私は、少しの間口を利く事も出来ずに、ぼうっとして、その光景を眺めていました。

その時Kはもう寝たのかと聞きました。Kはいつでも遅くまで起きている男でした。私は黒い影法師のようなKに向って、何か用かと聞き返しました。Kは大した用でもない、ただもう寝たか、まだ起きているかと思つて、便所へ行ったついでに聞いて見ただけだと答えました。Kは洋燈の灯を背中に受けているので、彼の顔色や眼つきは、全く私には分りませんでした。けれども彼の声は不断よりも却つて落ち付いていたくらいでした。

Kはやがて開けた襖をびたりと立て切りました。私の室はすぐ元の暗闇に帰りました。私はその暗闇より静かな夢を見るべくまた眼を閉じました。私はそれぎり何も知りません。しかし翌朝になって、昨夕の事を考えてみると、何だか不思議でした。私はことによると、すべてが夢ではないかと思ひました。それで飯を食う時、Kに聞きました。Kはたしかに襖を開けて私の名を呼んだと言ひます。なぜそんな事をしたのかと尋ねると、別に判然した返事もしません。調子の抜けた頃になつて、近頃は熟睡が出来るのかと却つて向うから私に問うのです。私は何だか変に感じました。(これは、今までは「Kの切ない恋の告白」により、先生という人は、このままではKにお嬢さんを取られてしまうかも知れないと思ひ、どうしようどうしようという「氣持ち」でいたが、先生の「Kへの反撃」によつて、いわば「形勢」が逆転して、今度はKの方が追い詰められた感じになつて居るのです。)その日丁度同じ時間に講義の始まる時間割になつていたので、二人はやがていつしよに宅を出ました。今朝から昨夕の事が氣に掛つていた私は、途中でまたKを追窮しました。けれどもKはやはり私を満足させるような答えをしません。私はあの事件について何か話すつもりではなかつたのかと念を押して見ました。(あの時、Kは何か言ひたかつたのか、それとも何か聞きたかつたのかはよく分からない)。しかし、Kはそうではないと強い調子で言い切りました。昨日上野で「……その話はもう止めよう」と言つたではないかと注意する如くにも聞こえました。Kはそういう点に掛けて鋭い自尊心をもつた男なのです。ふとそこに氣のついた私は突然彼の用いた「覚悟」という言葉を連想し出しました。すると今までまるで氣にならなかつたその二字が妙な力で私の頭を抑え始めたのです。

四十四、覚悟という言葉と奥さんへの談判

「……Kの果断に富んだ性格は私によく知れていました。彼のこの事件についてのみ優柔な訳も私にはちやんと呑み込めていたのです。つまり私は一般を心得た上で、例外の場合をしっかりと攫まえたつもりで得意だったのです。ところが「覚悟」という彼の言葉を、頭のなかで何遍も咀嚼しているうちに、私の得意はだんだん色を失つて、しまいにはぐらぐら揺き始めるようになりました。私はこの場合も或は彼にとつて例外でないのかも知れないと思ひ出したのです。すべての疑惑、煩悶、懊惱、を一度に解決する最後の手段を、彼は胸のなかに畳み込んでいたのではなからうかと疑り始めたのです。そうした新しい光で覚悟の二字を眺め返してみた私は、はつと驚きました。その時の私がかもしこの驚きをもつて、もう一返彼の口にした覚悟の内容を公平に見廻したらば、まだよかつたかも知れませんが、悲しい事に私は片眼でした。私はただKがお嬢さんに対して進んで行くという意味にその言葉を解釈しました。果断に富んだ彼の性格が、恋の方面に發揮されるのが

すなわち彼の覚悟だろうと一閃に思い込んでしまったのです。

私は私にも最後の決断が必要だという声を心の耳で聞きました。私はすぐその声に応じて勇気を振り起しました。私はKより先に、しかもKの知らない間に、事を運ばなくてはならないと覚悟を極めました。私は黙って機会を窺っていました。しかし二日経っても三日経っても、私はそれを捕まえる事が出来ません。私はKのいない時、またお嬢さんの留守な折を待って、奥さんに談判を開こうと考えたのです。しかし片方がいなければ、片方が邪魔をするといった風の日はかり続いて、どうしても「今だ」と思う好都合が出て来てくれないのです。私はいらいらしました。

一週間の後私はとうとう堪え切れなくなつて仮病を遣いました。奥さんからお嬢さんからも、K自身からも、起きろという催促を受けた私は、生返事をしただけで、十時頃まで蒲団を被つて寝ていました。私はKもお嬢さんもお嬢さんいなくなつて、家の内がひっそり静まった頃を見計らつて寢床を出しました。私の顔を見た奥さんは、すぐどこが悪いかと尋ねました。食物は枕元へ運んでやるから、もつと寝ていたらよかろうと忠告してもくれました。身体に異状のない私は、とても寝る気にはなれません。顔を洗つていつもの通り茶の間で飯を食いました。その時奥さんは長火鉢の向側から給仕をしてくれたのです。私は朝飯とも午飯とも片付かない茶碗を手を持ったまま、どんな風に問題を切り出したものだろうかと、そればかりに屈託していたから、外観からは実際気分の好くない病人らしく見えただろうと思います。

私は飯を終つて烟草を吹かし出しました。私が立たないので奥さんも火鉢の傍を離れる訳に行きません。下女を呼んで膳を下げさせた上、鉄瓶に水を注したり、火鉢の縁を拭いたりして、私に調子を合わせています。私は奥さんに特別な用事でもあるのかと問いました。奥さんはいえと答えましたが、今度は向うで何故ですと聞き返して来ました。私は実は少し話したい事があるのだと言いました。奥さんは何ですかと言つて、私の顔を見ました。奥さんの調子はまるで私の気分に入らぬような軽いものでしたから、私は次に出すべき文句も少し渋りました。

私は仕方なしに言葉の上で、好い加減にうろつき廻つた末、Kが近頃何か言ひはしなかつたかと奥さんに聞いてみました。奥さんは思いも寄らないという風をして、「……何を？」とまた反問して来ました。そうして私の答える前に、「……あなたには何かおつしやつたんですか」と却つて向うで聞くのです。(本文)

*

*

さて、「……Kの果断に富んだ性格は私によく知れていました。彼のこの事件についてのみ優柔な訳も私にはちゃんと呑み込めていたのです。つまり私は一般を心得た上で、例外の場合をしっかりと攫まえたつもりで得意だったのです。ところが「覚悟」という彼の言葉を、頭のなかで何遍も咀嚼(吟味)しているうちに、私の得意はだんだん色を失つて、しまいはぐらぐら揺き始めるようになりました。私はこの場合も或は彼にとつて例外でないのかも知れないと思ひ出したのです。すべての疑惑、煩悶、懊惱、を一度に解決する最後の手段(何かを執行する事)を、彼は胸のなかに畳み込んでいたのではなからうかと疑り始めたのです。そうした新しい光で「覚悟」の二字を眺め返してみた私は、はっと驚きました。その時の私がおもひこの「驚き」をもつて、もう一返彼の口にした「覚悟」の内容を公平に見廻したならば、まだよかつたかも知れません。悲しい事に私は片眼

(片方しか見ていなかった)のです。私はただKが「お嬢さんに対して進んで行く」という意味にその言葉を解釈しました。それは、果断に富んだ彼の性格が、恋の方面に發揮されるのがすなわち「彼の覚悟」だろうと一閃に思い込んでしまったのです。

Kがもしそうであれば、私は私にも最後の決断が必要だという声を心の耳で聞きました。私はすぐその声に応じて勇気を振り起しました。私はKより先に、しかもKの知らない間に、事を運ばなくてはならないと覚悟を極めました。私は黙って機会を窺っていました。しかし二日経っても三日経っても、私はそれを捕まえる事が出来ません。私はKのいない時、またお嬢さんの留守な折を待って、奥さんに談判を開こうと考えたのです。しかし片方がいなければ、片方が邪魔をするといった風の日ばかり続いて、どうしても「今だ」と思う好都合が出て来てくれないのです。私はいらいました。

例えば、われわれ人間は、それが何であれ、最初の一步を踏み出すまでは、とかくあてもないこうでもないといろいろと考え過ぎてしまいためらいがちになるが、しかし、最初の一步を踏み出してしまえば、あとはもうその勢いで前に進むしかないのです、自然とより「活発な動き」になつて行き、あとはなるようになって行くことが多いのだろう。

一週間の後私はとうとう堪え切れなくなって仮病を遣いました。奥さんからお嬢さんからも、K自身からも、起きろという催促を受けた私は、生返事をしただけで、十時頃まで蒲団を被つて寝ていました。私はKもお嬢さんもなく、家の内がひっそり静まった頃を見計らつて寢床を出ました。私の顔を見た奥さんは、すぐどこが悪いかと尋ねました。食物は枕元へ運んでやるから、もつと寝ていたらよかろうと忠告してくれました。身体に異状のない私は、とても寝る気にはなれません。顔を洗っていつもの通り茶の間で飯を食いました。その時奥さんは長火鉢の向側から給仕をしてくれたのです。私は朝飯とも午飯とも片付かない茶碗を手に持ったまま、どんな風に問題を切り出したものだろうかと、そればかりに屈托していたから、外観からは実際気分の好くない病人らしく見えただろうと思います。

私は飯を終つて烟草を吹かし出しました。私が立たないので奥さんも火鉢の傍を離れる訳に行きません。下女を呼んで膳を下げさせた上、鉄瓶に水を注したり、火鉢の縁を拭いたりして、私に調子を合わせています。私は奥さんに特別な用事でもあるのかと問いました。奥さんはいいえと答えましたが、今度は向うで何故ですと聞き返して来ました。私は実は少し話したい事があるのだと言いました。奥さんは何ですかと言って、私の顔を見ました。奥さんの調子はまるで私の気分に入らぬような軽いものでしたから、私は次に出すべき文句も少し洩りました。(これも最初の一步が言い出せないでいるのです。)私は仕方なしに言葉の上で、好い加減にうろつき廻つた末、Kが近頃何か言いはしなかつたかと奥さんに聞いてみました。奥さんは思ひも寄らないという風をして、「……何を？」とまた反問して来ました。そうして私の答える前に、「……あなたには何かおっしゃったんですか」と却つて向うで聞くのです。

四十五、お嬢さんを下さいと言う

「……Kから聞かされた打ち明け話を、奥さんに伝える気になかった私は、「いいえ」と言ってしまった後で、すぐ自分の嘘を快からず感じました。仕方がないから、別段何

も頼まれた覚えはないのだから、Kに関する用件ではないのだと言い直しました。奥さんは「そうですね」と言つて、後を待っています。私はどうしても切り出さなければならなくなりました。私は突然「……奥さん、お嬢さんを私に下さい」と言いました。奥さんは私の予期してかかったほど驚いた様子も見せませんでした。それでも少時返事が出来なかつたものと見えて、黙つて私の顔を眺めていました。一度言い出した私は、いくら顔を見られても、それに頓着などはしていません。「……下さい、ぜひ下さい」と言いました。「……私の妻としてぜひ下さい」と言いました。奥さんは年を取っているだけに、私よりもずつと落ち付いていました。「……上げてもいいが、あんまり急じゃありませんか」と聞くのです。私が「……急に貰いたいのだ」とすぐ答えたら笑い出しました。そして「……よく考えたのですか」と念を押すのです。私は言い出したのは突然でも、考えたのは突然でないという訳を強い言葉で説明しました。

それからまだ二つ三つの問答がありました。私はそれを忘れてしまいました。男のようには判然としたところのある奥さんは、普通の女と違つてこんな場合には大変心持よく話の出来る人でした。「……宜ごさんす、差し上げましょう」と言いました。「……差し上げるなんて威張つた口の利ける境遇ではありません。どうぞ貰つて下さい。ご存知の通り父親のない憐れな子です」と後では向うから頼みました。

話は簡単でかつ明瞭に片付けてしまいました。最初からしまいまでに恐らく十五分とは掛らなかつたでしょう。奥さんは何の条件も持ち出さなかつたのです。親類に相談する必要もない、後から断ればそれで沢山だと言いました。本人の意嚮さえ確かめるに及ばないと明言しました。そんな点になると、学問をした私の方が、却つて形式に拘泥するくらいに思われたのです。親類はとにかく、当人にはあらかじめ話して承諾を得るのが順序らしいと私が注意した時、奥さんは「……大丈夫です。本人が不承知の所へ、私があの子をやるはずがありませんから」と言いました。

自分の室へ帰つた私は、事のあまりに訳もなく進行したのを考えて、却つて変な気持ちになりました。果して大丈夫なのだろうかという疑念さえ、どこからか頭の底に這い込んで来たくらいです。けれども大体の上において、私の未来の運命は、これで定められたのだという観念が私のすべてを新たにしました。

私は午頃また茶の間へ出掛けて行つて、奥さんに、今朝の話をお嬢さんに何時通じてくれるつもりかと尋ねました。奥さんは、自分さえ承知していれば、いつ話しても構わなからうというような事を言うのです。こうなると何だか私よりも相手の方が男みたやうなので、私はそれぎり引き返もうとしました。すると奥さんが私を引き留めて、もし早い方が希望ならば、今日でもいい、稽古から帰つて来たなら、すぐ話そうと言うのです。私はそうしてもらう方が都合が好いと答えてまた自分の室に帰りました。しかし黙つて自分の机の前に坐つて、二人のこそそ話を遠くから聞いている私を想像してみると、何だか落ち付いていられないやうな気もするのです。私はとうとう帽子を被つて表へ出ました。そうしてまた坂の下でお嬢さんに行き合いました。何にも知らないお嬢さんは私を見て驚いたらしかつたのです。私が帽子を脱つて「今お帰り」と尋ねると、向うではもう病氣は癒つたのかと不思議そうに聞くのです。私は「……ええ癒りました、癒りました」と答えて、ずんずん水道橋の方へ曲つてしまいました。(本文)

*

*

さて、「……Kから聞かされた打ち明け話を、奥さんに伝える気のなかつた私は」、「いえ」と言つてしまつた後で、すぐ自分の嘘を快からず感じました。仕方がないから、別段何も頼まれた覚えはないのだから、Kに関する用件ではないのだと言ひ直しました。奥さんは「そうですね」と言つて、後を待つています。私はどうしても切り出さなければならなくなりました。私は突然「……奥さん、お嬢さんを私に下さい」と言ひました。奥さんは私の予期してかかつたほど驚いた様子も見せませんでした。それでも少時返事が出来なかつたものと見えて、黙つて私の顔を眺めていました。一度言ひ出した私は、いくら顔を見られても、それに頓着などはしてはくれません。「……下さい、ぜひ下さい」と言ひました。「……私の妻としてぜひ下さい」と言ひました。奥さんは年を取つてはいるだけに、私よりもずつと落ち付いていました。「……上げてもいいが、あんまり急じやありませんか」と聞くのです。私が「……急に貰いたいのだ」とすぐ答へたら笑ひ出しました。そうして「……よく考えたのですか」と念を押すのです。私は言ひ出したのは突然でも、考えたのは突然でないという訳を強い言葉で説明しました。

それからまだ二つ三つの問答がありました。私はそれを忘れてしまいました。男のように判然としたところのある奥さんは、普通の女と違つてこんな場合には大變心持よく話の出来る人でした。「……直ぐさ、差し上げましょう」と言ひました。「……差し上げるなんて威張つた口の利ける境遇ではありません。どうぞ貰つて下さい。ご存知の通り父親のない憐れな子です」と後では向うから頼みました。

話は簡単でかつ明瞭に片付いてしまいました。最初からしまいまでに恐らく十五分とは掛らなかつたでしょう。奥さんは何の条件も持ち出さなかつたのです。親類に相談する必要もない、後から断ればそれで沢山だと言ひました。本人の意嚮さえ確かめるに及ばないと言ひました。そんな点になると、学問をした私の方が、却つて形式に拘泥するくらいに思われたのです。親類はとにかく、当人にはあらかじめ話して承諾を得るのが順序らしいと私が注意した時、奥さんは「……大丈夫です。本人が不承知の所へ、私があの子をやるはずがありませんから」と言ひました。（これはもう奥さんはその言葉をずっと待つていたという事であり、それは、お嬢さんも全く同じことになるのである。）

自分の室へ帰つた私は、事のあまりに訳もなく進行したのを考えて、却つて変な氣持になりました。果して大丈夫なのだろうかという疑念さえ、どこからか頭の底に這い込んで来たくらいです。けれども大体の上において、私の未来の運命は、これで定められたのだという觀念が私のすべてを新たにしました。

私は午頃また茶の間へ出掛けて行つて、奥さんに、今朝の話をお嬢さんに何時通じてくれるつもりかと尋ねました。奥さんは、自分さえ承知していれば、いつ話しても構わなからうというような事を言うのです。こうなると何だか私よりも相手の方が男みたやうなので、私はそれぎり引き込もうとしました。すると奥さんが私を引き留めて、もし早い方が希望ならば、今日でもいい、稽古から帰つて来たら、すぐ話そうと言ひます。私はそうしてもらう方が都合が好いと答えてまた自分の室に帰りました。しかし黙つて自分の机の前に坐つて、二人のこそそ話を遠くから聞いている私を想像してみると、何だか落ち付いていられないやうな氣もするのです。私はどうとう帽子を被つて表へ出ました。そうしてまた坂の下でお嬢さんに行き合いました。何にも知らないお嬢さんは私を見て驚いたらしかつたのです。私が帽子を脱つて「今お帰り」と尋ねると、向うではもう病氣は癒つた

のかと不思議そうに聞くのです。私は「……ええ癒りました、癒りました」と答えて、ずんずん水道橋の方へ曲ってしまいました。

二、先生のもう一つの反撃（反撃二）

さて、先生のもう一つの「反撃」は、とにかく、Kより先に「お嬢さんを下さい」と奥さんに願ひ出ることでした。それは、Kもお嬢さんも二人とも留守の時を狙ってと考えていたが、なかなか二人が留守という状態にならず、一週間が過ぎた後、先生は、「仮病」を使って学校を休み、そして、Kもお嬢さんもいなくなり、十時頃まで寝ていたが、病気ではないので、起き出して、いつものように顔を洗って、茶の間で朝食とも昼食ともつかない食事をした後、奥さんに話を持ち出すことになる。もちろん、最初は、なかなか言い出せずにいたが、やがて、私は突然、「……奥さん、お嬢さんを私に下さい」と言い出した。「……私の妻としてぜひ下さいと言いました」とある。この言葉を先生は、もつと早く、Kが同居する前に言っておくべきだったのである。そうすれば、Kの「自殺」も先生の「人生」も全く違ったものになっていたに違いない。その時、奥さんは、「……上げてもいいが、あんまり急ではありませんか」と聞くのです。「……私が急に貰いたいです」とすぐ答えたら笑い出しました。そして、「……よく考えたのですか」と念を押すのです。「……私は言い出したのは突然でも、考えたのは突然でないという訳を強い言葉で説明しました」とある。この「部分」を丁寧に読むだけでも、遂にその日が来たかと、奥さんの「心の中」が透けて見えて来るような対応の「仕方」になっているかと思う。

そして、「……奥さんは、宜ごさんす、差上げましょう」と言いました。「……差上げるなんて威張った口の利ける境遇ではありません。どうぞ貰って下さい。ご存じの通り父親のない憐れな子ですと後では向うが頼みました」とある。さらに、「……話は簡単でかつ明瞭に片づいてしまいました。最初からしまいまでに恐らく十五分とはかからなかったでしょう。奥さんはなんの条件も持ち出さなかったのです。親類に相談する必要もない。後から断われればそれで沢山だと言いました。本人の意嚮さえたしかめるに及ばないと明言しました。（中略）、親類はともかく、当人にはあらかじめ話して承諾を得るのが順序らしい」と私が注意した時、奥さんは、「……大丈夫です。本人が不承知のところへ、私があるの子をやるはずがありませんからと言いました」とある。——これは、もう奥さんは、先生が「いつその言葉を出す」か、ずっと待っていたということであり、それは、お嬢さんも全く「同じ気持ち」であったということである。それゆえ、先生がもつと早く「結婚の申し入れ」を行なっていたならば、この三人は、どれほど「幸せな家庭」（或いは「幸せな家族」）になっていたかも知れないのである。

それは、第一部でも、先生自身、「……私は世の中で女というものをたった一人しか知らない。妻以外の女は殆んど女として私に訴えないのです。妻の方でも、私を天下にただ一人しかない男と思ってくれています。そういう意味から言って、私たちは最も幸福に生れた人間の一对であるべきはずだ」と語っているのである。

*

*

四十六、外を歩き回まわって宅うちに帰る

四十六、外を歩き回って宅に帰る

「……私は猿楽町から神保町の通りへ出て、小川町の方へ曲りました。私がこの界限を歩くのは、いつも古本屋をひやかすのが目的でしたが、その日は手摺のした書物などを眺める気が、どうしても起らないのです。私は歩きながら絶えず宅の事を考えていました。私には先刻の奥さんの記憶がありました。それからお嬢さんが宅へ帰ってからの想像がありました。私はつまりこの二つのもので歩かせられていたようなものです。その上私は時々往來の真中で我知らずふと立ち留まりました。そうして今頃は奥さんがお嬢さんにもうあの話をしている時分だろうなどと考えました。また或る時は、もうあの話が済んだ頃だとも思いました。

私はとうとう万世橋を渡って、明神の坂を上って、本郷台へ来て、それからまた菊坂を下りて、しまいに小石川の谷へ下りたのです。私の歩いた距離はこの三区に跨がって、いびつな円を描いたとも言われるでしょうが、私はこの長い散歩の間殆んどKの事を考えなかつたのです。今その時の私を回顧して、なぜだと自分に聞いてみても一向分りません。ただ不思議に思うだけです。私の心がKを忘れ得るくらい、一方に緊張していたと見ればそれまでですが、私の良心がまたそれを許すべきはずはなかつたのですから。

Kに対する私の良心が復活したのは、私が宅の格子を開けて、玄關から坐敷へ通る時、すなわち例のごとく彼の室を抜けようとした瞬間でした。彼はいつもの通り机に向って書見をしていました。彼はいつもの通り書物から眼を放して、私を見ました。しかし彼はいつもの通り今帰ったのかとは言いませんでした。彼は「……病気はもう癒いのか、医者へでも行ったのか」と聞きました。私はその刹那に、彼の前に手を突いて、詫まりたくなつたのです。しかも私の受けたその時の衝動は決して弱いものではなかつたのです。もしKと私がたつた二人曠野の真中にでも立っていたならば、私はきつと良心の命令に従って、その場で彼に謝罪したろうと思います。しかし奥には人がいます。私の自然はすぐそこで食い留められてしまつたのです。そうして悲しい事に永久に復活しなかつたのです。

夕飯の時Kと私はまた顔を合せました。何にも知らないKはただ沈んでいただけで、少しも疑い深い眼を私に向けません。何にも知らない奥さんはいつもより嬉しそうでした。私だけがすべてを知っていたのです。私は鉛のような飯を食いました。その時お嬢さんはいつものようにみんなと同じ食卓に並びませんでした。奥さんが催促すると、次の室で只今と答えるだけでした。それをKは不思議そうに聞いていました。しまいにどうしたのかと奥さんに尋ねました。奥さんは大方極りが悪いのだろうと言つて、ちよつと私の顔を見ました。Kはなお不思議そうに、なんで極りが悪いのかと追窮しに掛りました。奥さんは微笑しながらまた私の顔を見るのです。

私は食卓に着いた初めから、奥さんの顔付で、事の成行をほぼ推察していました。しかしKに説明を与えるために、私のいる前で、それを悉く話されては堪らないと考えました。奥さんはまたその位の事を平気でする女なのですから、私はひやひやしたのです。幸いにKはまた元の沈黙に帰りました。平生より多少機嫌のよかつた奥さんも、とうとう私の恐れを抱いている点までは話を進めずにしまいました。私はほつと一息して室へ帰りました。しかし私がこれから先Kに対して取るべき態度は、どうしたものだろうか、私はそれを考えずにはいられませんでした。私は色々の弁護を自分の胸で拵らえて見ました。

けれどもどの弁護もKに対して面と向うには足りませんでした、卑怯な私はついに自分で自分をKに説明するのが厭いやになったのです。(本文)

*

*

さて、「……私は猿楽町さるがくちょうから神保町の通りへ出て、小川町の方へ曲りました。私がこの界限かいげんを歩くのは、いつも古本屋をひやかすのが目的でしたが、その日は手摺てずれのした書物などを眺める気が、どうしても起らないのです。私は歩きながら絶えず宅うちの事を考えていました。私には先刻さつきの奥さんの記憶がありました。それからお嬢さんが宅へ帰ってからの想像がありました。私はつまりこの二つのもので歩かせられていたようなものです。その上私は時々往来の真中で我知らずと立ち留まりました。そうして今頃は奥さんがお嬢さんにもうあの話をしてている時分だろうなどと考えました。また或る時は、もうあの話が済んだ頃だとも思いました。(つまり先生の「頭の中」はその事だけで一杯になつていたのであり、それゆえ、外ほかのことを「考える余地」はなかったのである。)

私はとうとう万世橋を渡って、明神の坂を上つて、本郷台へ来て、それからまた菊坂を下りて、しまいに小石川の谷へ下りたのです。私の歩いた距離はこの三区に跨またがって、いびつな円を描いたとも言われるでしょうが、私はこの長い散歩の間殆んどKの事を考えなかつたのです。今その時の私を回顧して、なぜだと自分に聞いてみても一向分りません。ただ不思議に思うだけです。私の心がKを忘れ得るくらい、一方に緊張していたと見ればそれまでですが、私の良心がまたそれを許すべきはずはなかつたのですから。

Kに対する私の良心が復活したのは、私が宅の格子を開けて、玄関から坐敷へ通る時、すなわち例のごとく彼の室を抜けようとした瞬間でした。彼はいつもの通り机に向つて書見をしていました。彼はいつもの通り書物から眼を放して、私を見ました。しかし彼はいつもの通り今帰つたのかとは言いませんでした。彼は「……病気はもう癒いのか、医者へでも行つたのか」と聞きました。私はその刹那に、彼の前に手を突いて、詫あやまりたくなつたのです。しかも私の受けたその時の衝動は決して弱いものではなかつたのです。もしKと私がたった二人曠野の真中にでも立っていたならば、私はきつと良心の命令に従つて、その場で彼に謝罪したろうと思います。しかし奥には人がいます。私の自然はすぐそこで食い留められてしまつたのです。そうして悲しい事に永久に復活しなかつたのです。

夕飯の時Kと私はまた顔を合せました。何にも知らないKはただ沈んでいただけで、少しも疑い深い眼を私に向けません。何にも知らない奥さんはいつも嬉うれしそうでした。私だけがすべてを知っていたのです。私は鉛のような飯を食いました。その時お嬢さんはいつものようにみんなと同じ食卓に並びませんでした。奥さんが催促すると、次の室で只今と答えるだけでした。それをKは不思議そうに聞いていました。しまいにどうしたのかと奥さんに尋ねました。奥さんは大方「極り」が悪いのだろうと言つて、ちよつと私の顔を見ました。Kはなお不思議そうに、なんで極りが悪いのかと追窮ついきゆうしに掛かりました。奥さんは微笑しながらまた私の顔を見のです。(この極りの悪さは、女性には特有のものかも知れない。勿論、心から嬉しいのだけれども、何か気恥きぢずかしいというような感じであり、それは、例えば、妊娠を夫や家族などに告げるような時もそうかも知れない。)

私は食卓に着いた初めから、奥さんの顔付で、事の成行をほぼ推察していました。しかしKに説明を与えるために、私のいる前で、それを悉く話されては堪たまらないと考えました。奥さんはまたその位の事を平気でする女なのですから、私はひやひやしたのです。

幸いにKはまた元の沈黙に帰りました。平生より多少機嫌のよかった奥さんも、とうとう私の恐れを抱いている点までは話を進めずにしまいました。私はほっと一息して室へ帰りました。しかし私がこれから先Kに対して取るべき態度は、どうしたものだろうか、私はそれを考えずにはいられませんでした。(そのように突き動かすのは、まさに先生の「良心」であるが)、私は色々の弁護を自分の胸で拵らえて見ました。けれどもどの弁護もKに対して面と向うには足りませんでした、卑怯な私はついに自分で自分をKに説明するのが厭になったのです。(このようなところも、あとあと後悔することにもなるのだろう。)

四十七、奥さんはKに二人の結婚話をする

「……私はそのまま二、三日過ぎました。その二、三日の間Kに対する絶えざる不安が私の胸を重くしていたのは言うまでもありません。私はただでさえ何とかしななければ、彼に済まないと思つたのです。その上奥さんの調子や、お嬢さんの態度が、始終私を突ツつくように刺戟するので、私はなお辛かつたのです。どこか男らしい気性を具えた奥さんは、いつ私の事を食卓でKに素ば抜かないとも限りません。それ以来ことに目立つように思えた私に対するお嬢さんの挙止動作も、Kの心を曇らす不審の種とならないとは断言出来ません。私は何とかして、私とこの家族との間に成り立った新しい関係を、Kに知らせなければならぬ位置に立ちました。しかし倫理的に弱点をもっている、自分で自分を認めている私には、それがまた至難の事のように感ぜられたのです。

私は仕方がないから、奥さんに頼んでKに改めてそう言ってもらおうかと考えました。無論私のいない時にです。しかしありのままを告げられては、直接と間接の区別があるだけで、面目のないのに変りはありません。と言つて、拵え事を話してもらおうとすれば、奥さんからその理由を詰問されるに極つています。もし奥さんにすべての事情を打ち明けて頼むとすれば、私は好んで自分の弱点を自分の愛人とその母親の前に曝け出さなければなりません。真面目な私には、それが私の未来の信用に関するとしか思われなかつたのです。結婚する前から恋人の信用を失うのは、たとい一分一厘でも、私には堪え切れない不幸のように見えました。

要するに私は正直な路を歩くつもりで、つい足を滑らした馬鹿ものでした。もしくは狡猾な男でした。そうしてそこに氣のついているものは、今のところただ天と私の心だけだったので。しかし立ち直つて、もう一歩前へ踏み出そうとするには、今滑つた事をぜひと周囲の人に知られなければならない窮境に陥つたのです。私はあくまで滑つた事を隠したがりました。同時に、どうしても前へ出ずにはいられなかつたのです。私はこの間に挟まってまた立ち竦みました。

五、六日経つた後、奥さんは突然私に向つて、Kにあの事を話したかと聞くのです。私はまだ話さないと答えました。するとなぜ話さないのかと、奥さんが私を詰るのです。私はこの問いの前に固くなりました。その時奥さんが私を驚かした言葉を、私は今でも忘れずに覚えています。

「……道理で妾が話したら変な顔をしていましたよ。あなたもよくないじゃありませんか。平生あんなに親しくしている間柄なのに、黙つて知らん顔をしているのは」と。

私はKがその時何か言いはしなかったかと奥さんに聞きました。奥さんは別段何にも言わないと答えました。しかし私は進んでもっと細かい事を尋ねずにはいられませんでした。奥さんは固より何も隠す訳がありません。大した話もないがと言いながら、一々Kの様子を語って聞かせてくれました。

奥さんの言うところを総合して考えてみると、Kはこの最後の打撃を、最も落ち付いた驚きをもって迎えたらしいのです。Kはお嬢さんと私との間に結ばれた新しい関係について、最初はそうですかとただ一口言っただけだったそうです。しかし奥さんが、「……あなたも喜んで下さい」と述べた時、彼ははじめて奥さんの顔を見て微笑を洩らしながら、「……おめでどうございます」と言ったまま席を立ったそうです。そうして茶の間の障子を開ける前に、また奥さんを振り返って、「……結婚は何時ですか」と聞いたそうです。それから「……何かお祝いを上げたいが、私は金がないから上げる事が出来ません」と言ったそうです。奥さんの前に坐っていた私は、その話を聞いて胸が塞るような苦しさを覚えました。(本文)

*

*

さて、「……私はそのまま一、二日過ぎました。その二、三日の間Kに対する絶えざる不安が私の胸を重くしていたのは言うまでもありません。私はただでさえ何とかしなければ、彼に済まないと思つたのです。その上奥さんの調子や、お嬢さんの態度が、始終私を突ツつくように刺戟するので、私はなお辛かつたのです。どこか男らしい気性を具えた奥さんは、いつ私の事を食卓でKに素は抜かないとも限りません。それ以来ことに目立つように思えた私に対するお嬢さんの挙止動作も、Kの心を曇らす不審の種とならないとは断言出来ません。私は何とかして、私とこの家族との間に成り立った新しい関係を、Kに知らせなければならぬ位置に立ちました。しかし倫理的に弱点をもつていると、自分で自分を認めている私には、それがまた至難の事のように感ぜられたのです。

私は仕方がないから、奥さんに頼んでKに改めてそう言ってもらおうかと考えました。無論私のいない時にです。しかしありのままを告げられては、直接と間接の区別があるだけで、面目のないのに変りはありません。と言つて、拵え事を話してもらおうとすれば、奥さんからその理由を詰問されるに極つています。もし奥さんにすべての事情を打ち明けて頼むとすれば、私は自分で自分の弱点を自分の愛人とその母親の前に曝け出さなければなりません。真面目な私には、それが私の未来の信用に関すると思われなかつたのです。結婚する前から恋人の信用を失うのは、たとい一分一厘でも、私には堪え切れない不幸のように見えたのでした。

つまり、先生の「知性や理性」(或いは「良心」)では、自分とお嬢さんとの関係(経緯)をKには話さなければいけないと思いつながら、一方、先生の「利己的自我」(つまり「エゴ」)の方では、それを話せば、自分の「立場や面目或いは信用」などを失ってしまう、それは絶対に避けなければならない。それゆえ、結局、わが身可愛さ(保身)からKには何も話さないことになつてしまつたのである。

要するに私は正直な路を歩くつもりで、つい足を滑らした馬鹿ものでした。いわば道を外してしまつた、もしくは狡猾な男でした。そうしてそこに気のついてゐるものは、今のところただ天と私の心だけだったので。つまり、他人はいくらでも騙せても自分を騙すことはでき得ないのである。しかし立ち直つて、もう一步前へ踏み出そうとするには、

今滑った事をぜひと周囲の人に知らなければならぬ窮境に陥ったのです。私はあくまで滑った事を隠したがりました。同時に、どうしても前へ出ずにはいられなかったのです。私はこの間に挟まってまた立ち竦みました。

五、六日経った後、奥さんは突然私に向って、Kにあの事を話したかと聞くのです。私はまだ話さないと答えました。するとなぜ話さないのかと、奥さんが私を詰るのです。私はこの問いの前に固くなりました。その時奥さんが私を驚かした言葉を、私は今でも忘れずに覚えています。(この記憶があるいは先生をより苦しめたかも知れない。)

「……道理で妾が話したら変な顔をしていましたよ。あなたもよくないじゃありませんか。平生あんなに親しくしている間柄なのに、黙って知らん顔をしているのは」と。

私はKがその時何か言いはしなかったかと奥さんに聞きました。奥さんは別段何にも言わないと答えました。しかし私は進んでもっと細かい事を尋ねずにはいられませんでした。奥さんは固より何も隠す訳がありません。大した話もないが言いながら、一々Kの様子を語って聞かせてくれました。

奥さんの言うところを総合して考えてみると、Kはこの最後の打撃を、最も落ち付いた驚きをもって迎えたいらしいのです。Kはお嬢さんと私との間に結ばれた新しい関係について、最初は「……そうですか」とただ一口言っただけだったそうです。しかし奥さんが、「……あなたも喜んで下さい」と述べた時、彼ははじめて奥さんの顔を見て微笑を洩らしながら、「……おめでどうございます」と言っただま席を立つたそうです。そうして茶の間の障子を開ける前に、また奥さんを振り返って、「……結婚は何時ですか」と聞いたそうです。それから「……何かお祝いを上げたいが、私は金がないから上げる事が出来ません」と言っただけです。奥さんの前に坐っていた私は、その話を聞いて胸が塞がるような苦しさを覚えました。

三、結婚話聞いた時のKの反応

さて、私が奥さんに話をした日から二、三日が過ぎ、その間はKに対する絶えざる不安が私の胸を重くしていました。私はただでさえ何とかしなければ、彼に済まないと思つたのです。私は何とかして、私とこの家族との間に成り立つた新しい関係を、Kに知らせなければならぬ位置にいました。しかし倫理的に弱点をもっている私には、それがまた至難の事のように感ぜられたのです。五、六日経った後、奥さんは突然私に向って、Kにあの事を話したかと聞くのです。私はまだ話さないと答えると、なぜ話さないのかと、奥さんが私を詰るのです。奥さんは、「……道理で妾が話したら変な顔をしていましたよ。あなたもよくないじゃありませんか。平生あんなに親しくしている間柄なのに、黙って知らん顔をしているのは」。私はKがその時何か言いはしなかったかと奥さんに聞きました。奥さんの言うところを総合すると、Kはこの最後の打撃を、最も落ち付いた驚きをもって迎えたいらしいのです。Kはお嬢さんと私との間に結ばれた新しい関係について、最初は「……そうですか」とただ一口言っただけだったそうです。しかし奥さんが、「……あなたも喜んで下さい」と述べた時、彼ははじめて奥さんの顔を見て微笑を洩らしながら、「……おめでどうございます」と言っただま席を立つたそうです。そうして茶の間の障子を開ける前に、また奥さんを振り返って、「……結婚はいつですか」と聞いたそうです。それ

から「……何かお祝いを上げたいが、私は金がないから上げる事が出来ません」と言ったそうです。奥さんの前に坐すわっていた私は、その話を聞いて胸むねが塞ふさがるような苦くるしさを覚え
ました。

さて、この場面は、奥さんから「二人の結婚話」を聞かされた時の、Kという人の反応であるが、まず、「……道理で妾めかけが話したら変な顔をしていましたよ」とある。奥さんは、当然、先生は、親友であるKにその話はしているはずだと思っていたので、そうではなかったことに少なからず驚おどろいているのである。それが次の言葉であり、「……あなたもよくないじゃありませんか。平生へいせいあんなに親しくしている間柄なのに、黙もくって知らん顔をしているのは」となるのである。この時、奥さんは、二人の間に「何かあったのかな？」ぐら
いは思ったとしても、まさかKという人が「お嬢さんに切ない恋心」を抱いだいていたなどは、全く想像すらでき得なかつたではない。だからこそ、Kという人に「……あなたも喜んで下さい」と言うのであるが、この言葉は、奥さんという人の「思いや考え」は、「先生とお嬢さんとの結婚」を望んで、いたという確かな証拠であり、それゆえ、たとえKが「お嬢さんとの結婚」を望んだとしても、そういうことは永遠にあり得ない話であることを、この時にはつきりと思い知らされたのである。（なぜなら、母親が結婚相手を決めるからである）。それが次の「Kの表情」であり、彼ははじめて奥さんの顔を見て微笑を洩もらしながら、「……おめでどうございます」（これは奥さんの願いが叶かなったことに対しておめでどうございます）と言ったまま席を立ったことになるが、それと同時に、この「……彼ははじめて奥さんの顔を見て微笑を洩もらしながら」というのは、もう一方では、Kという人は、「理想」と「現実」との間で深く悩み苦しんでいたが、そういう自分自身が馬鹿ばかみ
たいに思おもえて来たという事でもある。その後、「……結婚はいつですか」と聞いている。これは、（恐らく）自然と出て来た言葉かと思うが、「……何かお祝いを上げたいが、私は金がないから上げる事が出来ません」と言ったのは、Kの「複雑な思い」（それは二人の結婚を表向きは祝いわいが心の底からは祝いわえない複雑な気持ち）の表れかも知れない。
ところで、奥さんの言うところを総合すると、Kはこの最後の打撃を、最も落ち付いた驚おどろきをもって迎むかえたらしく、Kはお嬢さんと私との間に結むすばれた新しい関係について、最初は「……そうですか」とただ一口言っただけだったとある。このKという人の「反応」は、一体、何を意味するのかと問えば、恐らく、自分の知らないところで、「……そういうことになっていったのか」という反応かと思うが、「変な顔」をしていたのは、なぜどうしてそういうことになったのかその「経緯」がよく分からないので、いわば「変な顔」になつていたが、奥さんの「……あなたも喜んで下さい」という言葉を聞いて、その「謎」（奥さんも望んでいた事）がはつきりとしたので、Kという人は、「……はじめて奥さんの顔を見て微笑を洩もらしながら」となるのである。それでは、Kという人は、親友の先生を「恨うらんだのだろうか？」という大問題が残るが、恐らく、先生を「恨うらむ」というよりも、むしろ「理想」と「現実」との間で深く悩み苦しんでいたという、そういう自分自身の「愚おろかしさ」を恨うらんだかも知れない。つまり、本来、子供の頃からの「理想」（道への精進）を一心に邁進まいしんすべきだったのに、ふと目の前の「色恋」に深く迷まよってしまった自分自身の「意志薄弱さ」（薄志弱行）に失望したかも知れないのである。

*

*

四十八、Kの自殺

さて、「……勘定して見ると奥さんがKに話をしてからもう二日余りになります。その間Kは私に対して少しも以前と異なった様子を見せなかったもので、私は全くそれに気が付かずにいたのです。彼の超然とした態度はたとい外観だけでもせよ、敬服に値すべきだと私は考えました。彼と私を頭の中で並べてみると、彼の方が遥かに立派に見えました。」

「……おれは策略で勝つても人間としては負けたのだ」という感じが私の胸に渦巻いて起りました。私はその時さぞKが軽蔑している事だろうと思つて、一人で顔を赧らめました。しかし今更Kの前に出て、恥を掻かせられるのは、私の自尊心にとつて大いな苦痛でした。私が進もうか止そうかと考えて、ともかくも翌日まで待とうと決心したのは土曜の晩でした。ところがその晩に、Kは自殺して死んでしまったのです。私は今でもその光景を思い出すと慄然とします。いつも東枕で寝る私が、その晩に限つて、偶然西枕に床を敷いたのも、何かの因縁かも知れません。私は枕元から吹き込む寒い風でふと眼を覚ましたのです。見ると、いつも立て切つてあるKと私の室との仕切の襖が、この間の晩と同じくらい開いています。けれどもこの間のように、Kの黒い姿はそこには立っていません。私は暗示を受けた人のように、床の上に肘を突いて起き上がりながら、屹とKの室を覗きました。洋燈が暗く点つているのです。それで床も敷いてあるのです。しかし掛蒲団は跳返されたように裾の方に重なり合つているのです。そうしてK自身は向うむきに突つ伏しているのです。

私はおいと言つて声を掛けました。しかし何の答えもありません。おいどうかしたのかと私はまたKを呼びました。それでもKの身体は些とも動きません。私はすぐ起き上つて、敷居際まで行きました。そこから彼の室の様子を、暗い洋燈の光で見廻して見ました。

その時私の受けた第一の感じは、Kから突然恋の告白を聞かされた時のそれとほぼ同じでした。私の眼は彼の室の中を一目見るや否や、あたかも硝子で作つた義眼のように、動く能力を失いました。私は棒立に立ち竦みました。それが疾風のごとく私を通過したあとで、私はまたああ失策つたと思ひました。もう取り返しが付かないという黒い光が、私の未来を貫いて、一瞬間に私の前に横たわる全生涯を物凄く照らしました。そうして私はがたがた顫え出したのです。

それでも私はついに私を忘れる事が出来ませんでした。私はすぐ机の上に置いてある手紙に眼を着けました。それは予期通り私の名宛になっていました。私は夢中で封を切り取つてどんなに辛い文句がその中に書き列ねてあるだろうと予期したのです。そうして、もしそれが奥さんやお嬢さんの眼に触れたら、どんなに軽蔑されるかも知れないという恐怖があつたのです。私はちよつと眼を通しただけで、まず助かつたと思ひました。(固より世間体の上だけで助かつたのですが、その世間体がこの場合、私にとつては非常な重大事件に見えたのです。)

手紙の内容は簡単でした。そうしてむしろ抽象的でした。自分は薄志弱行で到底行先の望みがないから、自殺するとうただけなのです。それから今まで私に世話になつた礼が、極あつさりとした文句でその後に加えてありました。世話ついでに死後の片付方も頼みたいという言葉もありました。奥さんに迷惑を掛けて済まんから宜しく詫をしてくれと

いう句もありました。国元へは私から知らせてもらいたいという依頼もありました。必要な事はみんな一口ずつ書いてある中にお嬢さんの名前だけはどこにも見えません。私はしまいまで読んで、すぐKがわざと回避したのだという事に気が付きました。しかし私のもっとも痛切に感じたのは、最後に墨の余りで書き添えたらしく見える、もつと早く死ぬべきだのになぜ今まで生きていたのだろうかという意味の文句でした。

私は顫える手で、手紙を巻き取めて、再び封の中へ入れました。私はわざとそれを皆目の眼に着くように、元の通り机の上に置きました。そうして振り返って、襖に迸っている血潮を始めて見たのです。(本文)

*

*

さて、「……勘定して見ると奥さんがKに話をしてからもう二日、余りになります。その間Kは私に対して少しも以前と異なった様子を見せなかつたので、私は全くそれに気が付かずにいたのです。彼の超然とした態度はたとい外観だけでもせよ、敬服に値すべきだと私は考えました。彼と私を頭の中で並べてみると、彼の方が遥かに立派に見えました。「……おれは策略で勝つても人間としては負けたのだ」という感じが私の胸に渦巻いて起りました。私はその時さぞKが軽蔑している事だろうと思つて、一人で顔を赧らめました。しかし今更Kの前に出て、恥を掻かせられるのは、私の自尊心にとつて大いな苦痛でした。私が進もうか止そうかと考えて、ともかくも翌日まで待とうと決心したのは土曜の晩でした。ところがその晩に、Kは自殺して死んでしまつたのです。私は今でもその光景を思い出すと慄然とします。いつも東枕で寝る私が、その晩に限つて、偶然西枕に床を敷いたのも、何かの因縁かも知れません。私は枕元から吹き込む寒い風でふと眼を覚ましたのです。見ると、いつも立て切つてあるKと私の室との仕切の襖が、この間の晩と同じくらい開いています。けれどもこの間のように、Kの「黒い姿」はそこには立っていません。私は暗示を受けた人のように、床の上に肘を突いて起き上がりながら、屹とKの室を覗きました。洋燈が暗く点つているのです。それで床も敷いてあるのです。しかし掛蒲団は跳返されたように裾の方に重なり合つているのです。そうしてK自身は向うむきに突ッ伏しているのです。(この状態では、Kの「顔の様子」を見ることは出来ない。)

私はおいと言つて声を掛けました。しかし何の答えもありません。おい、どうかしたのかと私はまたKを呼びました。それでもKの身体は些とも動きません。私はすぐ起き上つて、敷居際まで行きました。そこから彼の室の様子を、暗い洋燈の光で見廻して見ました。

その時私の受けた「第一の感じ」は、Kから突然「恋の告白」を聞かされた時のそれとほぼ同じでした。私の眼は彼の室の中を一目見るや否や、あたかも硝子で作つた義眼のように、動く能力を失いました。私は棒立に立ち竦みました。それが疾風のごとく私を通過したあとで、私はまた「……ああ失策つた」と思いました。もう取り返しが付かないという「黒い光」が、私の未来を貫いて、一瞬間に私の前に横たわる全生涯を物凄く照らししました。そうして私はがたがた顫え出したのです。

これは、自分のこれからの「人生」は、いわゆる「明るい光」に照らされた希望に満ちた人生などではなくて、むしろ逆に、もう取り返しが付かないという(後悔の)「黒い光」が、その一瞬、私の前に横たわる「全生涯」を物凄く照らし出して、自分の「全生涯」は、もう取り返しが付かないという(後悔の)「黒い光」に照らされた暗い「人生」を生きることになるという想いに襲われたのである。それは、例えば、自分の不注意から交通事故

などで何人もの人を死傷させたような時、その瞬間、「……あつ、これで自分の人生は終わってしまった」という想いに襲われるのと、基本的には全く同じ心理なのである。

それでも私はついに私を忘れる事が出来ませんでした。私はすぐ「机の上に置いてある手紙」に眼を着けました。それは予期通り私の名宛になっていました。私は夢中で封を切りました。しかし中には私の予期したような事は何にも書いてありませんでした。私は私に取ってどんなに辛い文句がその中に書き列ねてあるだろうと予期したのです。そうして、もしそれが奥さんやお嬢さんの眼に触れたら、どんなに軽蔑されるかも知れないという恐怖があったのです。私はちよつと眼を通しただけで、まず「助かった」と思いました。(固より世間体の上だけで助かったのですが、その世間体がこの場合、私にとつては非常な重大事件に見えたのです。世間から「責められる証拠」が残らなかつたからである。)

手紙の「内容」は簡単でした。そうしてむしろ抽象的でした。自分は「……薄志弱行で到底先行の望みがないから、自殺する」というだけなのです。それから今まで私に世話になつた札が、極あつさりとした文句でその後に付け加えてありました。世話ついでに死後の片付方も頼みたいという言葉もありました。奥さんに迷惑を掛けて済まんから宜しく詫をしてくれという句(文句)もありました。国元へは私から知らせてもらいたいという依頼もありました。必要な事はみんな一口ずつ書いてある中にお嬢さんの名前だけはどこにも見えません。私はしまいまで読んで、すぐKがわざと回避したのだという事に気が付きました。しかし私の「もつとも痛切に感じた」のは、最後に墨の余りで書き添えたらしく見える「……もつと早く死ぬべきだのになぜ今まで生きていたのだろう」という意味の文句でした。(これが「Kの自殺」の謎を解く「最大の手がかり」となるものである。)

私は顫える手で、手紙を巻き収めて、再び「封の中」へ入れました。私はわざとそれを皆な眼に着くように、元の通り「机の上」に置きました。そうして振り返つて、襖に

四十九、奥さんにKの自殺を告げる

「……私は突然Kの頭を抱えるように両手で少し持ち上げました。私はKの死顔が一目見たかつたのです。しかし俯伏になつて彼の顔を、こうして下から覗き込んだ時、私はすぐその手を放してしまいました。慄としたばかりではないのです。彼の頭が非常に重たく感ぜられたのです。私は上から今触つた冷たい耳と、平生に変らない五分刈の濃い髪の毛を少時眺めていました。私は少しも泣く気にはなれませんでした。私はただ恐ろしかつたのです。そうしてその恐ろしさは、眼の前の光景が官能を刺激して起る単調な恐ろしさばかりではありません。私は忽然と冷たくなつたこの友達によつて暗示された運命の恐ろしさを深く感じたのです。

私は何の分別もなくまた私の室に帰りました。そうして八畳の中をぐるぐる廻り始めました。私の頭は無意味でも自分そうして動いていろと私に命令するのです。私はどうかしなければならぬと思ひました。同時にもうどうする事も出来ないのだと思ひました。座敷の中をぐるぐる廻らなければならぬと思ひました。檻の中へ入れられた熊のような態度で。

私は時々奥へ行つて奥さんを起そうという気になります。けれども女にこの恐ろしい有

様を見せては悪いという心持がすぐ私を遮ります。奥さんはとにかく、お嬢さんを驚かす事は、とても出来ないという強い意志が私を抑えつけます。私はまたぐるぐる廻り始めるのです。

私はその間に自分の室の洋燈を点けました。それから時計を折々見ました。その時の時計ほど埒の明かない遅いものはありませんでした。私の起きた時間は、正確に分らないのですけれども、もう夜明に間もなかった事だけは明らかです。ぐるぐる廻りながら、その夜明を待ち焦れた私は、永久に暗い夜が続くのではなからうかという思いに悩まされました。

我々は七時前に起きる習慣でした。学校は八時に始まる事が多いので、それでないと授業に間に合わないのです。下女はその関係で六時頃に起きる訳になっていました。しかしその日私が下女を起しに行ったのはまだ六時前でした。すると奥さんが今日は日曜だと言って注意してくれました。奥さんは私の足音で眼を覚ましたのです。私は奥さんに眼が覚めているなら、ちよつと私の室まで来てくれと頼みました。奥さんは寝巻の上へ不始の羽織を引つ掛けて、私の後に跟いて来ました。私は室へはいるや否や、今まで開いていた仕切りの襖をすぐ立て切りました。そうして奥さんに飛んだ事が出来たと小声で告げました。奥さんは何だと聞きました。私は顛で隣の室を指すようにして、「……驚いちゃいけません」と言いました。奥さんは蒼い顔をしました。「……奥さん、Kは自殺しました」と私がまた言いました。奥さんはそこに居竦まったように、私の顔を見て黙っていました。その時私は突然奥さんの前へ手を突いて頭を下げました。「……済みません。私が悪かったです。あなたにもお嬢さんにも済まない事になりました」と詫言りました。私は奥さんと向い合うまで、そんな言葉を口にする気はまるでなかったのです。しかし奥さんの顔を見た時不意に我とも知らずそう言ってしまったのです。Kに詫まる事の出来ない私は、こうして奥さんとお嬢さんに詫言なければならなくなつたのだと思つて下さい。つまり私の自然が平生の私を出し抜いてふらふらと懺悔の口を開かしたのです。奥さんがそんな深い意味に、私の言葉を解釈しなかつたのは私にとって幸いでした。蒼い顔をしながら、「……不慮の出来事なら仕方がないじやありませんか」と慰めるように言つてくれました。しかしその顔には驚きと怖れとが、彫り付けられたように、硬く筋肉を攫んでいました。(本文)

*

*

さて、「……私は突然Kの頭を抱えるように両手で少し持ち上げました。私はKの死顔が一目見たかつたのです。しかし俯伏になつて彼の顔を、こうして下から覗き込んだ時、私はすぐその手を放してしまいました。慄としたばかりではないのです。彼の頭が非常に重たく感ぜられたのです。私は上から今触つた冷たい耳と、平生に変わらない五分刈の濃い髪の毛を少時眺めていました。私は少しも泣く気にはなれませんでした。私はただ恐ろしかつたのです。そうしてその恐ろしさは、眼の前の光景が官能(五感)を刺激して起る単調な恐ろしさばかりではありません。私は忽然と冷たくなつたこの友達によつて暗示された「運命の恐ろしさ」を深く感じたのです。

私は何の分別もなくまた私の室に帰りました。そうして八畳の中をぐるぐる廻り始めました。私の頭は無意味でも自分そうして動いていると私に命令するのです。私はどうかしなければならぬと思ひました。同時にもうどうする事も出来ないのだと思ひました。座

敷の中をぐるぐる廻らなければならなくなつたのです。檻の中へ入れられた熊のような態度で。——私は時々奥へ行つて奥さんを起そうという気になります。けれども女にこの恐ろしい有様を見せては悪いという心持がすぐ私を遮ります。奥さんとはかく、お嬢さんを驚かす事は、とても出来ないという強い意志が私を抑えつけます。私はまたぐるぐる廻り始めるのです。そして、私はその間に自分の室の洋燈を点けました。それから時計を折々見ました。その時の時計ほど埒の明かない遅いものはありませんでした。私の起きた時間は、正確に分らないのですけれども、もう夜明に間もなかつた事だけは明らかです。ぐるぐる廻りながら、その夜明を待ち焦れた私は、永久に暗い夜が続くのではなからうかという思いに悩まされました。

我々は七時前に起きる習慣でした。学校は八時に始まる事が多いので、それでないと授業に間に合わないのです。下女はその関係で六時頃に起きる訳になっていました。しかしその日私が下女を起しに行つたのはまだ六時前でした。すると奥さんが今日は日曜だと言つて注意してくれました。奥さんは私の足音で眼を覚ましたのです。私は奥さんに眼が覚めているなら、ちよつと私の室まで来てくれと頼みました。奥さんは寝巻の上へ不斷着の羽織を引っ掛けて、私の後に跟いて来ました。私は室へはいるや否や、今まで開いていた仕切りの襖をすぐ立て切りました。そうして奥さんに飛んだ事が出来たと小声で告げました。奥さんは何だと聞きました。私は顔で隣の室を指すようにして、「……驚いちゃいけません」と言いました。奥さんは着い顔をしました。「……奥さん、Kは自殺しました」と私がまた言いました。奥さんはそこに居竦まつたように、私の顔を見て黙つていました。その時私は突然奥さんの前へ手を突いて頭を下げました。「……済みません。私が悪かつたのです。あなたにもお嬢さんにも済まない事になりました」と詫言りました。私は奥さんと向い合うまで、そんな言葉、口にする気はまるでなかつたのです。しかし奥さんの顔を見た時不意に我とも知らず、そう言つてしまつたのです。Kに詫まる事の出来ない私は、こうして奥さんとお嬢さんに詫言なければならなくなつたのだと思つて下さい。つまり私の自然が平生の私を出し抜いてふらふらと懺悔の口を開かしたのです。「これは、先生の「罪の意識」（或いは「良心の呵責」）などからつき動かされて生じて来た行為（言動）になるかと思う」。奥さんがそんな深い意味に「私の言葉」を解釈しなかつたのは私にとつて幸いでした。蒼い顔をしながら、「……不慮の出来事なら仕方がないじゃありませんか」と慰めるように言つてくれました。しかしその顔には驚きと怖れとが、彫り付けられたように、硬く筋肉を攪んでいました。

例えば、万が一にもKと先生との間に何かがあつたとしても、奥さんとしては、結局、先生の方を信じるしかないのです、それゆえ、Kの「自殺の原因」をあれこれ問うよりも、むしろ「不慮の出来事」として受け止めたかつたのかも知れない。

五十、Kの自殺後の奥さんと先生の対処

「……私は奥さんに気の毒でしたけれども、また立つて今閉めたばかりの唐紙を開けました。その時Kの洋燈に油が尽きたと見えて、室の中は殆んど真暗でした。私は引き返して自分の洋燈を手を持ったまま、入口に立つて奥さんを顧みしました。奥さんは私の後ろから隠れるようにして、四畳の中を覗き込みました。しかし這入ろうとはしません。そこは

そのままにしておいて、雨戸を開けてくれと私に言いました。

それから後の奥さんの態度は、さすがに軍人の未亡人だけあって要領を得ていました。私は医者の方へも行きましました。また警察へも行きましました。しかしみんな奥さんに命令されて行つたのです。奥さんはそうした手続の済むまで、誰もKの部屋へは入れませんでした。

Kは小さなナイフで頸動脈を切つて一息に死んでしまつたのです。外に創らしいものは何にもありませんでした。私が夢のような薄暗い灯で見た唐紙の血潮は、彼の頸筋から一度に迸つたものと知れました。私は日中の光で明らかにその迹を再び眺めました。そうして人間の血の勢いというものの劇しいのに驚きました。

奥さんと私は出来るだけの手際と工夫を用いて、Kの室を掃除しました。彼の血潮の大部分は、幸い彼の蒲団に吸収されてしまつたので、畳はそれほど汚れないで済みましたから、後始末はまだ楽でした。二人は彼の死骸を私の室に入れて、不断の通り寝ている体に横にしました。私はそれから彼の実家へ電報を打ちに出たのです。

私が帰つた時は、Kの枕元にもう線香が立てられていました。室へ這入るとすぐ仏臭い烟で鼻を撲たれた私は、その烟の中に坐っている女二人を認めました。私がお嬢さんの顔を見たのは、昨夜来この時が始めてでした。お嬢さんは泣いていました。奥さんも眼を赤くしていました。事件が起つてからそれまで泣く事を忘れていた私は、その時ようやく悲しい気分にとられる事が出来たのです。私の胸はその悲しさのために、どのくらい寛ろいだか知れません。苦痛と恐怖でぐいと握り締められた私の心に、一滴の潤を与えてくれたものは、その時の悲しさでした。

私は黙つて二人の傍に坐っていました。奥さんは私にも線香を上げてやれと言います。私は線香を上げてまた黙つて坐っていました。お嬢さんは私には何とも言いません。たまに奥さんと一口二口言葉を換わす事がありました。それは当座の用事についてのみでした。お嬢さんにはKの生前について語るほどの余裕がまだ出て来なかつたのです。私はずれでも昨夜の物凄く有様を見せずに済んでまだよかつたかと心のうちで思いました。若い美しい人に恐ろしいものを見せると、折角の美しさが、そのために破壊されてしまふそうでは怖かつたのです。私の恐ろしさが私の髪の毛の末端まで来た時ですら、私はその考えを度外に置いて行動する事は出来ませんでした。私には綺麗な花を罪もないのに妄りに鞭うつと同じような不快がそのうちに籠つていたのです。

国元からKの父と兄が出て来た時、私はKの遺骨をどこへ埋めるかについて自分の意見を述べました。私は彼の生前に雑司ヶ谷近辺をよくいっしょに散歩した事があります。Kにはそこが大変気に入つていたので、それで私は笑談半分に、そんなに好きなら死んだらここへ埋めてやろうと約束した覚えがあるのです。私も今その約束通りKを雑司ヶ谷へ葬つたところで、どのくらいの功德になるものかとは思いました。けれども私は私の生きている限り、Kの墓の前に跪いて月々私の懺悔を新たにされたのです。今まで構い付けなかつたKを、私が万事世話をした来たという義理もあつたのでしよう、Kの父も兄も私のいう事を聞いてくれました。(本文)

*

*

さて、「……私は奥さんに気の毒でしたけれども、また立つて今閉めたばかりの唐紙を開けました。その時Kの洋燈に油が尽きたと見えて、室の中は殆んど真暗でした。私は引き返して自分の洋燈を手を持ったまま、入口に立つて奥さんを顧みましました。奥さんは私の

後ろから隠れるようにして、四畳の中を覗き込みました。しかし這入ろうとはしません。そこはそのままにしておいて、雨戸を開けてくれと私に言いました。

それから後の奥さんの態度は、さすがに軍人の未亡人だけあって要領を得ていました。私は医者の方へも行ききました。また警察へも行ききました。しかしみんな奥さんに命令されて行ったのです。(まだ若い大学生であった先生という人は、何をどうして良いか何も分からずに、ただ八畳の室を意味なく歩き廻っていただけでしたが)、奥さんはそうした手続の済むまで、誰も「Kの部屋」へは入れませんでした。

Kは小さなナイフで頸動脈を切つて一息に死んでしまったのです。外に創らしいものは何にもありませんでした。私が夢のような薄暗い灯で見た唐紙の血潮は、彼の頸筋から一度に迸ったものと知れました。私は日中の光で明らかにその迹を再び眺めました。そうして人間の血の勢いというものの劇しいのに驚きました。「先生は、この現場を直接見てしまった。その為、先生の「頭の中」(或いは「心の中」)にその情景が鮮明に焼き付いてしまった。いくら取り除こうとしても取り除けなかつたに違いない。」

奥さんと私は出来るだけの手際と工夫を用いて、Kの室を掃除しました。彼の血潮の大部分は、幸い彼の蒲団に吸収されてしまったので、畳はそれほど汚れないで済みましたから、後始末はまだ楽でした。二人は彼の死骸を私の室に入れて、不断の通り寝ている体横にしました。私はそれから彼の実家へ電報を打ちに出たのです。(これも奥さんの指示であり、まだ若い先生には実家に電報を打つという発想自体生じなかつたに違いない。)

私が帰った時は、Kの枕元にもう線香が立てられていました。室へ這入るとすぐ仏臭い烟で鼻を撲たれた私は、その烟の中に坐っている女二人を認めました。私がお嬢さんの顔を見たのは、昨夜来この時が初めてでした。お嬢さんは泣いていました。奥さんも眼を赤くしていました。事件が起つてからそれまで泣く事を忘れていた私は、その時ようやく悲しい気分が誘われる事が出来たのです。私の胸はその悲しさのために、どのくらい寛ろいதாக知れませんが。苦痛と恐怖でぐいと握り締められた私の心に、一滴の潤を与えてくれたものは、その時の悲しさでした。(やっと人間らしい感情が戻つて来たのである。)

私は黙つて二人の傍に坐っていました。奥さんは私にも線香を上げてやれと言います。私は線香を上げてまた黙つて坐っていました。お嬢さんは私には何とも言いません。たまに奥さんと一口二口言葉を換わす事がありました。それは当座の用事についてのみでした。お嬢さんにはKの生前について語るほどの余裕がまだ出て来なかつたのです。私はずれでも昨夜の物凄く有様を見せずに済んでまだよかつたと思ひました。若い美しい人に恐ろしいものを見せると、折角の美しさが、そのために破壊されてしまふ。私はずれに怖かつたのです。私の恐ろしさが私の髪の毛の末端まで来た時ですら、私はその考えを度外に置いて行動する事は出来ませんでした。私には綺麗な花を罪もないのに妄りに鞭うつと同じような不快がそのうちに籠っていたのです。(先生はなぜかこの意識が非常に強くて、お嬢さんの「心の中」に「暗い影」を落とすことを最後まで避けるのである。)

国元からKの父と兄が出て来た時、私はKの遺骨をどこへ埋めるかについて自分の意見を述べました。私は彼の生前に雑司ヶ谷近辺をよくいっしょに散歩した事があります。Kにはそこが大変気に入っていたのです。それで私は笑談半分に、そんなに好きなら死んだらここへ埋めてやろうと約束した覚えがあるのです。私も今その約束通りKを雑司ヶ谷へ葬つたところで、どのくらいの功德になるものかとは思いました。けれども私は私の

生きている限り、Kの墓の前に跪ひざまずいて月々私の懺悔ざんげを新たにされたかったです。今まで構かまい付けなかったKを、私が万事世話をした来たという義理もあつたのでしよう、Kの父も兄も私の言う事を聞いてくれました。(この箇所は、なぜ雑司ぞうしヶ谷がやに「Kの墓」があるのかという、その理由説明になっているかと思う。)

*

*

一、Kの死の場面の要約

一、Kの死の場面の要約

さて、奥さんがKに話をしてからもう二日余りになり、その間、Kは私に対して少しも以前と異なつた様子を見せなかつたので、私は全くそれに気が付かずでした。彼の超然とした態度はたとい外観だけでもせよ、敬服に値すべきものであり、彼と私を頭の中で並べてみると、彼の方が遙かに立派に見えました。そして、「……おれは策略で勝つても人間としては負けたのだ」という感じが私の胸に渦巻いて起りました。

私が進もうか止そうかと考えて、ともかくも翌日まで待とうと決心したのは土曜の晩でした。ところがその晩に、Kは自殺して死んでしまったのです。私は今でもその光景を思い出すと慄然します。いつも東枕で寝る私が、その晩に限って、偶然西枕に床を敷いたのも、何かの因縁かも知れません。私は枕元から吹き込む寒い風でふと眼を覚ましたのです。見ると、Kと私の室との仕切りの襖が、この間の晩と同じくらい開いています。けれどもこの間の間に、Kの黒い姿はそこには立っていません。私は暗示を受けた人のように、床の上に脇を突いて起き上がりながら、屹とKの室を覗きました。洋燈が暗く点つて居るのです。それで床も敷いてあるのです。しかし掛蒲団は跳返されたように裾の方に重なり合つて居るのです。そうしてK自身は向うむきに突伏して居るのです。

私はおいと言つて声を掛けました。しかし何の答えもありません。おい、どうかしたのかと私はまたKを呼びました。それでもKの身体は些とも動きません。私はすぐ起き上つて、敷居際まで行き、そこから彼の室の様子を、暗い洋燈の光で見廻してみました。

その時私の受けた「第一の感じ」は、Kから突然「恋の自白」を聞かされた時のそれとほぼ同じであり、私は棒立ちに立ち竦みました。それが疾風のごとく私を通過したあとで、私はまた「……ああ失策つた」と思いました。もう取り返しが付かないという（後悔の）「黒い光」が、私の未来を貫いて、一瞬間に私の前に横たわる「全生涯」を物凄く照らしました。そうして私はがたがたと顫え出したのです。

それから、私はすぐ机の上に置いてある「手紙」に眼を着けて、私は夢中で封を切りました。しかし中には私の予期したような事は何にも書いてありませんでした。私は私に取つてどんなに辛い文句がその中に書き列ねてあるだろうと予期したのです。そうして、もしそれが奥さんやお嬢さんの眼に触れたら、どんなに軽蔑されるかも知れないという恐怖があつたのです。私はちよつと眼を通しただけで、まず「助かつた」と思いました。

私は顫える手で、手紙を巻き取めて、再び「封の中」へ入れました。私はわざとそれを皆の眼に着くように、元の通り「机の上」に置きました。そうして振り返つて、襖に迸つている血潮を始めて見たのでした。

*

*

私は突然Kの頭を抱えるように両手で少し持ち上げました。私はKの死顔が一目見たかつたのです。しかし俯伏しになつて居る彼の顔を、こうして下から覗き込んだ時、私はすぐその手を放してしまいました。慄としたばかりではないのです。彼の頭が非常に重たく感ぜられたのです。私は上から今触つた冷たい耳と、平生に変らない五分刈の濃い髪の毛を少時眺めていました。私は少しも泣く気にはなれませんでした。私はただ恐ろしかつたのです。そうしてその恐ろしさは、眼の前の光景が官能（五感）を刺激して起る単調な恐ろしさばかりではありません。私は忽然と冷たくなったこの友達によつて暗示された「運

命の恐ろしさ」(Kの死を一生背負つて生きねばならない運命)を深く感じたのです。

私は何の分別もなくまた私の室に帰り、そうして八畳の中をぐるぐる廻り始めました。その間に自分の室の洋燈を点て、それから時計を折々見ました。私の起きた時間は、正確に分らないのですが、もう夜明に間もなかつた事だけは明らかです。ぐるぐる廻りながら、その夜明を待ち焦れた私は、永久に暗い夜が続くのではないかと思ひ悩まされました。

我々は七時前に起きる習慣でした。学校は八時に始まる事が多いので、それでないと授業に間に合わないのです。下女はその関係で六時頃に起きる訳になっていました。しかしその日私が下女を起しに行つたのはまだ六時前でした。すると奥さんが今日は日曜だと言つて注意してくれました。奥さんは私の足音で眼を覚ましたのです。私は奥さんに眼が覚めているなら、ちよつと私の室まで来てくれと頼みました。奥さんは寝巻の上へ不始着の羽織を引掛けて、私の後に跟いて来ました。私は室へ這入るや否や、奥さんに飛んだ事が出来たと小声で告げ、奥さんは何だと聞きました。私は顎で隣の室を指すようにして、

「……驚いちゃいけません」と言い、奥さんは蒼い顔をしました。「……奥さん、Kは自殺しました」と私がまた言いました。奥さんはそこに居竦まつたように、私の顔を見て黙っていました。その時私は突然奥さんの前へ手を突いて頭を下げました。「……済みません。私が悪かつたのです。あなたにもお嬢さんにも済まない事になりました」と詫言りました。私は奥さんと向い合うまで、そんな言葉を口にする気はまるでなかつたのです。しかし奥さんの顔を見た時不意に我とも知らず、そう言つてしまつたのです。Kに詫まる事出来ないうちは、こうして奥さんとお嬢さんに詫なければいられなくなつたのだと思つて下さい。奥さんがそんな深い意味に、私の言葉を解釈しなかつたのは私にとつて幸いでした。蒼い顔をしながら、「……不慮の出来事なら仕方がないじゃありませんか」と慰めるように言つてくれました。しかしその顔には驚きと怖れとが、彫り付けられ、硬く筋肉を攫んでいました。

*

*

私は奥さんに気の毒でしたけれども、また立つて今閉めたばかりの唐紙を開けました。その時Kの洋燈に油が尽きたと見えて、室の中はほとんど真暗でした。私は引き返して自分の洋燈を手持つたまま、入口に立つて奥さんを顧みしました。奥さんは私の後ろから隠れるようにして、四畳の中を覗き込みました。しかし入ろうとはしません。そこはそのままにして置いて、雨戸を開けてくれと私に言いました。

それから後の奥さんの態度は、さすがに軍人の未亡人だけあつて要領を得ていました。私は医者、の所へも行き、また警察へも行きました。しかしみんな奥さんに命令されて行つたのです。奥さんはそうした手続の済むまで、誰もKの部屋へは入れませんでした。

Kは小さなナイフで頸動脈を切つて一息に死んでしまつたのです。外に創らしいものは何にもありませんでした。私が夢のような薄暗い灯で見た唐紙の血潮は、彼の頸筋から一度に迸つたものと知れました。私は日中の光で明らかにその迹を再び眺めました。そうして人間の血の勢いというものの劇しいのに驚きました。

奥さんと私は出来るだけの手際と工夫を用いて、Kの室を掃除しました。彼の血潮の大部分は、幸い彼の蒲団に吸収されてしまつたので、畳はそれほど汚れないで済みました。それから、後始末はまだ楽でした。二人は彼の死骸を私の室に入れて、不断の通り寝ている体に横にしました。私はそれから彼の実家へ電報を打ちに出たのです。

私が帰った時は、Kの枕元にもう線香が立てられていました。室へ這入るとすぐ仏臭い烟で鼻を撲たれた私は、その烟の中に坐っている女二人を認めました。私がお嬢さんの顔を見たのは、昨夜来この時が始めてでした。お嬢さんは泣いていました。奥さんも眼を赤くしていました。事件が起ってからそれまで泣く事を忘れていた私は、その時ようやく悲しい気分が誘われる事が出来たのです。私の胸はその悲しさのために、どのくらい寛ろいだか知れません。苦痛と恐怖でぐいと握り締められた「私の心」に、一滴の潤いを与えてくれたものは、その時の悲しさでした。私はお嬢さんに昨夜の物凄い有様を見せずに済んで、よかつたと心の内で思いました。

二、その結末

さて、先生は、とにかくも、この二つの「反撃」を以って、親友である「K」を攻撃し、その結果として、親友である「K」を「自殺」へと追いやってしまったという「意識」に襲われ、その「罪の意識」(或いは「良心の呵責」)というものに長く悩まされ続けることになるのである。——それは、かつて信じていた伯父に裏切られた時には、他に愛想を尽かした自分が、今度は、自分で親友である「K」を裏切るような「行動」(言動)をしてしまったのである。それによって、親友を「死」へと追いやったという「意識」(つまりは「罪の意識」)に悩まされ続けているのである。——すなわち、「……平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人なんです。それが、いざという間に、急に悪人になるんだから恐ろしいのです。だから油断ができないんです」。なぜなら、自分自身、いざという間に、急に「悪人」になってしまったからである。その結果、親友を「死」へと追いやるような結果になってしまった事を悩み苦しむことにもなるのである。

*

*

それは、第三部の「本文」では、次のようになっていいる。つまり、「……私は過去の因果で、人を疑りつけている」。そして、「……叔父に欺むかれた当時の私は、他の頼みにならない事をつくづくと感じたには相違ありませんが、しかし、他を悪く取るだけあって、自分はまだ確かな気がしていました。世間はどうかあるうとも、この己は立派な人間だという信念がどこかにあったのです。それがKのために美事に破壊されてしまったって、自分もあの叔父と同じ人間だと意識した時、私は急にふらふらしました。他に愛想を尽かした私は、自分にも愛想を尽かして動けなくなつたのです」とある。——つまり、ここで最も大事なことは、叔父に裏切られた時には、他人というものは、つくづく「当てや頼み」にならないものだと思底からそう感じ、相手を心から「恨み、憎んだり」もしたが、しかし、世間(や他人)はたとえどうであろうとも、この己(自分自身)は、立派な人間(そんな悪いことなど絶対にしない人間)という「信念」(確信)がどこかにあったのである。

ところが、先生とお嬢さんとKとの「三角関係」のなかで、先生は、前述のような「二つの反撃」を以って、親友である「K」を意識的に攻撃してしまった。それは、何が何でもお嬢さんを失いたくないために、(ふだんの自分ならそんなことは絶対にしないだろうと信じていた自分)が、いざという間に、急に「悪人」(つまり「他を騙したり、貶めるような人間)に変わってしまったのである。この「衝撃」、つまり、かつて信じていた伯父に裏切られた時には、つくづく他に愛想を尽かした自分が、今度は、自分で親友である「K」

を裏切るような「行動」（言動）を意識的にしてしまっただけのこと。この「衝撃」、そして、自分もあの叔父と同じ人間だと意識した時、私は急にふらふらしました。他に愛想を尽かした私は、自分にも愛想を尽かして動けなくなつたのです。——それは、Kが「自殺」をした後、親友である「K」を「自殺」へと追いやってしまつたのは、誰でもない、この「自分自身」であるという「意識」に強く襲われ、そして、その「罪の意識」（或いは「良心の呵責」というものに、先生という人は、ずっと長く何年も悩まされ続けることになるのである。

三、お嬢さんの気持ち

それでは、お嬢さんの「気持ち」は、いったいどういうものだったのか？ この問題を、もう一度、確かめておきたいと思うが、まず、「K」と「先生」、そのどちらにより強い「想い」を寄せていたのだろうか？ それは、どちらというよりも、お嬢さんの「気持ち」というのは、一貫して、「先生」だけにしか向いていないのである。それゆえ、「先生」という人も、あれこれ「策を弄する必要」などまったくなかったのである。——つまり、お嬢さんが「心の底から愛していた」のは、「K」ではなく、まさに「先生」その人だけだったのである。それゆえ、たとえ「K」がお嬢さんに「愛を告白」したとしても、恐らく、お嬢さんは、その「告白」（申し入れ）をきっぱりと断つたに違いない。そのことを「K」は、うすうす感じていたのだろう。だからこそ、「自殺」ができていたのである。「自殺」というのは、まさに「ここで自分の人生を終わらせる」ということであり、若しもお嬢さんに「愛を告白」して、それを受け入れてもらえる何らかの「自信」（或いは「可能性」）があると思っていたならば、敢えて「自殺」（ここで自分の人生を終わらせる）理由などどこにもないのである。いくらでも「打つ手」はあるからである。

例えば、お嬢さんの前で、仮に「……お嬢さんを心から愛しています。ぼくと結婚してください」と二人が同時に、まさに「求婚」（プロポーズ）をしたとしても、お嬢さんは、間違いないで、「先生」を選ぶだろうということを、はつきりと感じていたのである。だからこそ、「自殺」ができていたのである。それは、「……明日（将来）に渡って希望が持たない」からこそ、まさに「自殺」が出来るのである。——つまり、「K」という人物は、いわば修行僧のような若者であり、頭も良く、努力家で、まじめで、正直で、忍耐強くもあるが、一方では、無口で、孤独で、非社交的で、友だちもなく、精神的には「神経衰弱」気味でもあり、しかも、親からは勘当されているという、いわば「八方ふさがり」の状態であり、そのようななかで、お嬢さんへの「恋心」は、誰よりも自分が一番驚いたに違いない。自分でも自分の「心」を持って余っていたかと思うが、それゆえ、親友である「先生」に「胸の内」を打ち明けているのである。そして、「K」としては、出来るなら、ここを突破口として、「八方ふさがり」の状態を何とか打開し、新しい「人生」を切り開きたかったのかも知れない。しかし、その「望み」は、完全に絶たれて、遺書の言葉では、「……自分は、薄志弱行で到底行先の望みがないから、自殺する」となるのである。

四、Kの遺書

さて、Kの机の上に置いてあった「遺書」の内容は、やはり「重要」なものであり、それゆえ、その一つ一つを丁寧に見ていきたいと思うが。まず、全体の内容は、次のようなものである。「……自分は、薄志弱行で到底行先の望みがないから、自殺するというだけなのです。それから今まで私に世話になった礼が、ごくあっさりした文句でその後につけ加えてありました。奥さんに迷惑をかけて済まんからよろしく詫言をしてくれという句もありました。国元へは私から知らせてもらいたいという依頼もありました。ただ、お嬢さんの名前だけはどこにも見えません。Kがわざと回避したのだと気づきました。しかし私のもっとも痛切に感じたのは、最後に墨の余りで書き添えたらしく見える、もつと早く死ぬべきだのになぜ今まで生きていたのだろうという意味の文句でした」とある。

まず、「……自分は、薄志弱行で到底行先の望みがないから、自殺する」とある。これは、まさに自分の「薄志弱行」(それは「意志が弱くて実行出来ないでいる」という「意味合い」になるかと思うが、Kの場合、本文では、次のようになっていて、つまり、図書館にいた先生を呼び出しては、二人で散歩することになるが、そこで「……彼は私に向って、ただ漠然と、どう思うと言うのです。どう思うというのは、そうした恋愛の淵に陥った彼を、どんな眼で私が眺めるかという質問なのです。一言で言うと、彼は現在の自分について、私の批判を求めたいようなのです。そこに私は彼の平生と異なる点を確かに認める事が出来たのです。というのも、彼の天性は他の思わくを憚るほど弱くでき上ってはいなかったし、こうと信じたら一人でどんどん進んで行くだけの度胸も勇氣もある男なのです。私がKに向って、この際何んで私の批判が必要なのかと尋ねた時、彼はいつもにも似ない悄然とした口調で、自分の弱い人間であるのが実際恥ずかしいと言いました。そうして迷っているから自分で自分が分らなくなってしまうので、私に公平な批評を求めるより外に仕方がないと言いました。私は隙かさず迷うという意味を聞き糺しました。彼は進んでいいか退いていいか、それに迷うのだと説明しました。私はすぐ一歩先へ出ました。そうして退こうと思えば退けるのかと彼に聞きました。すると彼の言葉がそこで不意に行き詰りました。彼はただ苦しいと言っただけでした。実際彼の表情には苦しうなところがありありと見えていました」とある。それでは、なぜ、Kはその「一歩」(お嬢さんへの愛の告白)をためらっているのだろうか？ それは、次のようなことである。

まず、Kという人は、所謂「理想」(それは「道のためには一心に精進すること」と「現実」(それは「お嬢さんへの切ない恋心」との間を頼りなく揺れ動いている「心的状態」であったが、Kは、「それをどう思うか、また、どうしたらよいか」と、親友である「先生」に聞いているのであり、それを一言で言えば、まさに「……Kは現在の自分について、先生の批評を求めている」ということである。それでは、なぜ「先生」にわざわざ批評を求めたのか？ それは、「先生」の「心の中」もせひとも知りたかったからでもあるのだろう。そして、ふつうに考えれば、「K」という人が「お嬢さんのことを好きになった」からと言って、そのことで深く悩む理由は何もない。深く悩む理由の一つは、いわゆる「理想」との関係があるからであり、もちろん、これが「大部分」を占めるかと思うが、それに加えて、「先生」との関係もあるのである。それは、親友である「先生」も「お嬢さんのことが好きであるだろう」ことは、うすうすは感じていたであろう。だからこそ、先生の「心の中」もせひとも知りたかったのである。その結果、(反撃する)先生という人の「心の中」をはっきりと知ったのである。

例えば、若しも「先生」との「親友関係」（或いは「信頼関係」）を最優先させるならば、「お嬢さん」のことは諦めて、「先生」に譲るしかない。というよりは、もともと「二人の仲」の方が先だったからである。しかし、「お嬢さん」への「想い」（愛情）も何とも断ち難いものがある。だからこそ、まさに「深く悩む」のである。一方、「お嬢さん」への「想い」（愛情）を最優先させるならば、「先生」との「親友関係」（或いは「信頼関係」）には決定的なヒビが入る（或いは「崩壊する」）ことを覚悟しなければならぬ。それも非常に「辛い」ことである。なぜなら、一生「恨まれる」ことになるからである。そのように、われわれ人間の「心の中」というのは、たった一つだけの「想い」だけではなく、実際は、実に様々な「想い」が複雑に同時に存在しているのである。

そして、この（男女の）「三角関係」というものは、必ず、誰かが（或いは「三人とも」）、多かれ少なかれ、傷つくことになるのである。

*

*

さて、もう一つの理由は、まさに「養子先でも実家でもさらに唯一の親友とも結局は人間関係で破綻をし」、この世に「頼れる」（或いは「心の支え」となる人間もいなくなり、まさに「八方ふさがり」状態で、これから何をどうやって生きていけばよいかも分からず、ただ深く悩み苦しみ揺れ動いている自分の「心の弱さ」ゆえ、自殺するということでもあ。そして、世話になった先生へのお礼、また、奥さんに迷惑をかけることになってしまったお詫び、国元への連絡、その他、あとのことは、すべて「先生」に任せるとある。これは、一体、どういうことなのか？ 「K」は、お寺の子として生まれている。そして、中学の頃、医師の家に養子としてもらわれていく。この時に、すでに親への「不信・不満」があったかも知れない。そして、養子先の「親」への「不信・不満」もあつたかも知れない。だからこそ、大学は、「医学部」へ入れと言われていたにも関わらず、それに従わず、そのために、養子縁組は破綻し、また、実家の親からは勘当されてしまう。Kの「孤独」は、その「生い立ち」から生じている。Kの「実の母親」は、すでに死んでいて、父親と継母に育てられるなかで、まさに「継母」との確執、養子に出される衝撃（それは「父親は実の子である自分よりも女の方を選んだという衝撃）、その他から、恐らく、「親」（或いは「人間」）が信じられない、というような意識が自然と生じて来て、だからこそ、誰にも依存しない、まさに「独立独歩の道」を心がけていたということである。それが、まさに「お嬢さんへの恋心」でもろくも崩れてしまったということである。

それは、本文でも、「……Kは母のない男でした。彼の性格の一面は、たしかに継母に育てられた結果とも見る事が出来るようです。もし彼の実の母が生きていたら、あるいは彼と実家との関係に、こうまで隔たりが出来ずに済んだかも知れないと私は思うのです」とある。そして、その「八方ふさがり」状態であった「K」にとつて、子供の頃からの「親友」である「先生」という存在は、何者にも換え難い存在であり、この世で唯一信じられる「人間」（或いは「友達」）であるという思いがあつたかも知れない。

そして、先生と「K」とは「同じ家」に同居することになるが、「K」は、その奥さんやお嬢さんともほんの少しずつ打ち溶けていくようになる。それは、「K」に人間らしくなつてもらうために、先生がわざわざ奥さんやお嬢さんにお願したことであつた。そして、ここまでは、すべてが順調に行っていたのである。ところが、先生の「大誤算」は、まさかKが「お嬢さんに恋心」を抱くなどということとは、「K」の日頃の「言動」からす

れば、どうしても想像でき得なかつたに違いない。だからこそ、「K」の「告白」を聞いた時に、先生は、「……ああ失策^{しま}つた、先越^{さき}された」という想いに襲われるのである。そして、この時点から、先生のKに対する「態度」は、大きく変わってしまうのであり、それは、まさに子供の頃からの「親友」から絶対に負けることの出来ない「恋敵」(敵同士)へと大きく変化してしまつたのである。——ところが、「K」の方は、それとは気づかずに、今まで通りの「親友」として「先生」を見ていたのである。だからこそ、再び、図書館にいる「先生」を呼び出しては、力弱く、「……ただ漠然と、どう思うという」のであつた。この時の「K」は、まるで「隙^{すき}だらけ」だつたと言つてゐる。その「隙」に襲いかかつたのである。そして、もう「一撃」は、「K」より先に、奥さんに「……お嬢さんをください」と願ひ出ることであつたが、それは、奥さんも、お嬢さんも、その「言葉」をずっと待つていたということでもあるのだろう。

五、自殺の動機

さて、先生の、この二つの「反撃」が、「K」に一体どのような「衝撃」を与えたのかは、厳密にはよく分らない。ただ、「K」は、奥さんから二人の結婚話を聞いてから二日後に、「自殺」をしている。それでは、「K」は、なぜ「自殺」を凶つたのか？ それが、まさに「最大の謎」であるが、その「謎を解くヒント」は、意外と次の言葉の中に隠されている。——それは、「遺書」の最後の部分、つまり、「……私のもつとも痛切に感じたのは、最後に墨^{すみ}の余りで書き添えたらしく見える、もつと早く死ぬべきだのになぜ今まで生きていたのだろう」という言葉である。つまり、Kが「自殺」を考えたのは、今度が「最初」ではなく、実は、前々から「自殺」のことを考えていたということである。

それでは、それは、いつ頃のことなのか？ 一つは、養子縁組が成立する以前の頃か、一つは、養子縁組の「医師の家」にいた頃か、そして、もう一つは、養子縁組が破綻し、実家からも勘当された「八方ふさがり」の頃か、いずれの頃にしても、「K」の「全人生」のなかで何度か「自殺」が考えられて来たということであり、そして、今度は、ついにそれを遂行してしまつたということである。その「最大の要因」は、恐らく、親が信じられない、養父母が信じられない、それに加えて、心から信じていた「先生」からも裏切られるような結果になつてしまい、この世に信じられる人間が誰一人としていなくなつてしまつた、いわば完全なる「孤独」に深く陥つてしまつたからか？ そして、先生の二つの「反撃」は、前々から「自殺」のことを考えていた「K」にとつて、まさに最後の「一押し」となつて、ついに「自殺」を遂行してしまつたのである。そして、先生は、そのことやがて気づくことになるが、それは、つまり、自分が最後の「一押し」をしてしまつたという想いである。だからこそ、先生は、まさに「罪の意識」(或いは「良心の呵責」)に何年も襲われ続けているのである。

一方、「K」という人は、先生を「恨んで」はいないのである。若しも心の底から恨んでいたら、死後のすべてを先生に託すわけがない。例えば、奥さんから「二人の結婚話」を聞かされた時も、これは、これで「なるべくしてなつた結果」なのだ、かえつて「諦め」がついたかも知れない。——つまり、先生とお嬢さんが結びつくのが自然であり、一方、自分とお嬢さんが結びつくことなどは、ほとんどあり得ない話だということは、その

時にはつきりと知ったに違いない。(それは奥さんが「……あなたも喜んで下さい」と言った時である)。ただ、「K」という人は、自分の「心の中」に生じて来た「お嬢さんへの切ない恋心」というものをどうしたものか、自分でもどうにも持て余すようになり、そこで、親友である「先生」にどうしたものかと打ち明けているのである。ところが、一方の「先生」は、Kの「告白」を、むしろ恋の「宣戦布告」のように思い込んでしまい、まさに「戦闘体制」に入ってしまったのである。そして、いわゆる二つの「反撃」によって、先生は、お嬢さんを得て、一方の「K」は、やがて「自殺」を遂行することになるのです。そして、先生は、「……恋は罪悪である」と言っている。それは、異性を「本気で愛する」ようになれば、必ず、「……誰かが傷つくことになる。誰かを傷つけずにはおかないもの」だからである。だからこそ、「……恋(恋愛)は、罪悪なのである」。

六、先生「夫婦」

ところで、先生「夫婦」には「子供」がいなかった。それは、例えば、仮に、奥さんが、「……なぜ、私を抱いてくれないのですか？」と訊ねた時に、先生は、無条件で「妻」を抱くことが出来なかった。それは、一体、なぜなのか？ それは、「妻」を抱こうとする、死んだKの「亡霊」が目の前にちらつくからである。それゆえ、「妻」を抱きたくとも抱くことができないのである。それを先生は、「天罰」だと呼んでいるのである。

それは、「第一部」の本文では、次のようになっていいる。つまり、先生の宅は夫婦と下女だけであった。行くたびに大抵はひっそりとしていた。高い笑い声などの聞こえる試しはまるでなかった。或る時は宅の中にいるものは先生と私だけのような気がした。「……子供でもあると好いんですがね」と奥さんは私の方を向いて言った。(これは、奥さんの本音であり、この言葉に対して、先生の反応を見ているのである)。私は「そうですな」と答えた。「……一人貰ってやるうか」と先生が言った。「……貰ッ子じゃ、ねえあなた」と奥さんはまた私の方を向いた。(これは、先生の子供こそ欲しいのであり、他人の子供が欲しい訳ではないのである)。「……子供はいつまで経つてもできっこないよ」と先生は言った。奥さんは黙っていた。「……なぜです」と私が代わりに聞いた時先生は「……天罰だからさ」と言って高く笑ったとある。

また、お嬢さんは、母親から時々気拙いことを言われることもあったらしいとも書いてある。それは、結局、母親から、「……なぜ、子供が出来ないのですか？ 早く孫の顔が見たい」という様なことを言われていたのである。奥さんは、歯痒かったに違いない。だからこそ、「……妻はたびたびどこが気に入らないのかはつきり言ってください」と何度か頼んでいるのである。——それは、自分を避けるようなところはつきりとあるからである。この時、先生がすべてを「告白」していたら、奥さんは、あるいは「救われた」かも知れない。少なくとも「夫への疑念」は、晴れることになる。そして、夫の「悩み・苦しみ」を共有することで、かえって隠し隔てのない親密な「夫婦」関係になれたかも知れない。しかし、先生は、奥さんの「心の中」に「暗い影」を落とすことを最後まで避けたのである。

それは、お嬢さんが若しも「Kがお嬢さんに切ない恋心を抱いていた」ということを知ったならば、つまり、先生は、それを知って、まさに「Kのお嬢さんへの切ない恋心」を諦

らめさせようと、二つの「策略」を講じることになるが、その結果、先生は、お嬢さんを
得て、一方、Kは、「自殺」をしてしまった。そのような経緯を知ったならば、お嬢さん
は、間違いなく、私が原因で「Kは自殺をしたの？」と思ひ込むようになるだろう。そう
なれば、先生と全く同じように、そのことで、まさに「罪の意識」(或いは「良心の呵責」)
に深く悩み苦しむことにもなるだろう。それは何が何でも避けたかったのである。それは、
奥さんへの「愛情」であり、いわば「秘密を墓場まで持って行く」という選択をしたとい
うことである。どちらがよかったのか？ それは、分からない。しかし、若しもこの「先
生」という人に、何らかの「問題」(欠点)があるとするれば、それは、「……言うべき時
に言うべきことをはつきりと言うことをためらったこと、そして、言うべきではなかった
ことを敢えて言ってしまった」ということになるのかも知れない。そのために、先生は、
「罪の意識」(或いは「良心の呵責」)に悩まされ続けているのである。

*

*

五十一、Kはなぜ自殺したかと問われる

五十一、Kはなぜ自殺したかと問われる

「……Kの葬式の帰り路に、私はその友人の一人から、Kがどうして自殺したのだろうという質問を受けました。事件があつて以来私はもう何度となくこの質問で苦しめられていたのです。奥さんもお嬢さんも、国から出て来たKの父兄も、通知を出した知り合いも、彼とは何の縁故もない新聞記者までも、必ず同様の質問を私に掛けない事はなかったのです。私の良心はそのたびにちくちく刺されるように痛みました。そうして私はこの質問の裏に、早くお前が殺したと白状してしまえという声を聞いたのです。

私の答えは誰に対しても同じでした。私はただ彼の私宛で書き残した手紙を繰り返すだけで、外に一口も付け加える事はしませんでした。葬式の帰りに同じ問いを掛けて、同じ答えを得たKの友人は、懐から一枚の新聞を出して私に見せました。私は歩きながらその友人によつて指し示された箇所を読みました。それにはKが父兄から勘当された結果厭世的な考えを起して自殺したと書いてあるのです。私は何にも言わずに、その新聞を畳んで友人の手に帰しました。友人はこの外にもKが気が狂つて自殺したと書いた新聞があると云つて教えてくれました。忙しいので、殆んど新聞を読む暇がなかった私は、まるでそうした方面の知識を欠いていましたが、腹の中では始終気にかかつていたところでした。私は何よりも宅のものの迷惑になるような記事の出るのを恐れたのです。ことに名前だけにせよお嬢さんが引合いに出たら堪らないと思つていたのです。私はその友人に外に何とか書いたのではないかと聞きました。友人は自分の眼に着いたのは、ただその二種ぎりだと答えました。

私が今おる家へ引越したのはそれから間もなくでした。奥さんもお嬢さんも前の所にいるのを厭がりますし、私もその夜の記憶を毎晩繰り返すのが苦痛だったので、相談の上移る事に極めたのです。

移つて二カ月ほどしてから私は無事に大学を卒業しました。卒業して半年も経たないうちに、私はとうとうお嬢さんと結婚しました。外側から見れば、万事が予期通りに運んだのですから目出度と言わなければなりません。奥さんもお嬢さんもいかにも幸福らしく見えました。私も幸福だったのです。けれども私の幸福には黒い影が随いていました。私はこの幸福が最後に私を悲しい運命に連れて行く導火線ではなからうかと思ひました。

結婚した時お嬢さんが、——もうお嬢さんではありませんから、妻と言います。——妻が、何を思い出したのか、二人でKの墓参りをしようと言ひ出しました。私は意味もなくただぎよつとしました。どうしてそんな事を急に思ひ立ったのかと聞きました。妻は二人揃つてお参りをしたら、Kがさぞ喜ぶだろうと言ひ出しました。私は何事も知らない妻の顔をしげしげ（しげしげ）眺めていましたが、妻から何故そんな顔をするのかと問われて始めて気が付きました。

私は妻の望み通り二人連れ立って雑司ヶ谷へ行きました。私は新しいKの墓へ水をかけて洗つてやりました。妻はその前へ線香と花を立てました。二人は頭を下げて、合掌しました。妻は定めて私といっしょになつた顛末を述べてKに喜んでもらつてもらうつもりでしたらう。私は腹の中で、ただ自分が悪かつたと繰り返すだけでした。

その時妻はKの墓を撫でてみて立派だと評していました。その墓は大したものではない

のですけれども、私が自分で石屋へ行って見立てたりした因縁があるので、妻はとくにそう言いたかったでしょう。私はその新しい墓と、新しい私の妻と、それから地面の下に埋められたKの新しい白骨とを思い比べて、運命の冷罵を感じずにはいられなかったのです。私はそれ以後決して妻といっしょにKの墓参りをしない事にしました。(本文)

* *
まず、前の章の最後のところで、「……国元からKの父と兄が出て来た時、Kの遺骨をどこへ埋めるかについては、彼の生前、雑司ヶ谷近辺をよく一緒に散歩した時、Kはそこが大変気に入り、そんなに好きなら死んだらここへ埋めてやろうと約束した覚えがあったと告げて、その約束通りにKを雑司ヶ谷に葬ったとともに、私の生きている限り、Kの墓の前に跪ずいて月々私の懺悔を新たにしていたかった」とある。(先生は、それ以来、命日の日、必ず月に一回の「墓参り」をずっと欠かさず続けているのである。)

さて、「……Kの葬式の帰り路に、私はその友人の一人から、Kがどうして自殺したのだらうという質問を受けました。事件があつて以来私はもう何度となくこの質問で苦しめられていたのです。奥さんもお嬢さんも、国から出て来たKの父兄も、通知を出した知り合いも、彼とは何の縁故もない新聞記者までも、必ず同様の質問を私に掛けない事はなかったのです。私の良心はそのたびにちくちく刺されるように痛みました。そうして私はこの質問の裏に、早く「お前が殺した」と白状してしまえという声を聞いたのです。

例えば、病気で亡くなった場合には、殆どの場合、その原因(病名)ははっきりとしているので、敢えて「なぜ、どうして？」と問う人も少ないかと思うが、一方、自殺で亡くなった場合には、必ず、誰でも「なぜ、どうして？」と問わずにはいられないものがあるのである、それは、その「自殺」の「動機」(原因)がはっきりとしない場合が非常に多いからであり、たとえKのように「遺書」を残したとしても、本当にそれだけなのか、ほかに何か理由があるのではないかとあれこれ疑いが次から次と生じて来るものである。

私の答えは誰に対しても同じでした。私はただ彼の私宛で書き残した手紙を繰り返すだけで、外に一口も付け加える事はしませんでした。葬式の帰りに同じ問いを掛けて、同じ答えを得たKの友人は、懐から一枚の新聞を出して私に見せました。私は歩きながらその友人によつて指し示された箇所を読みました。それにはKが父兄から勘当された結果厭世的な考えを起して自殺したと書いてあるのです。私は何にも言わずに、その新聞を畳んで友人の手に帰しました。友人はこの外にもKが気が狂つて自殺したと書いた新聞があると言つて教えてくれました。忙しいので、殆ど新聞を読む暇がなかった私は、まるでそうした方面の知識を欠いていましたが、腹の中では始終気にかかつていたところでした。私は何よりも宅のものの迷惑になるような記事の出るのを恐れたのです。ことに名前だけにせよお嬢さんが引合いに出たら堪らないと思つていたのです。私はその友人に外に何とか書いたのではないかと聞きました。友人は自分の眼に着いたのは、ただその二種ぎりだと答えました。

私が今おる家へ引越したのはそれから間もなくでした。奥さんもお嬢さんも前の所にいるのを厭がりますし、私もその夜の記憶を毎晩繰り返すのが苦痛だったので、相談の上移る事に極めたのです。(前の所を厭がるのは、ごく自然で無理からぬ感情かと思う。)

移つて二カ月ほどしてから私は無事に大学を卒業しました。卒業して半年も経たないうちに、私はとうとうお嬢さんと結婚しました。外側から見れば、万事が予期通りに運んだ

のですから目出度と言わなければなりません。奥さんもお嬢さんもいかにも幸福らしく見えませんでした。私も幸福だったのです。けれども私の幸福には黒い影が随いていました。私はこの幸福が最後に私を悲しい運命に連れて行く導火線ではなからうかと思いました。

結婚した時お嬢さんが、——もうお嬢さんではありませんから、妻と言います。——妻が、何を思い出したのか、二人でKの墓参りをしようと言いました。私は意味もなくただぎよつとしました。どうしてそんな事を急に思い立ったのかと聞きました。妻は二人揃ってお参りをしたら、Kがさぞ喜ぶだろうと言うのです。私は何事も知らない妻の顔をしげしげ（しげしげ）眺めていましたが、妻から何故そんな顔をするのかと問われて始めて気が付きました。（先生は、新しい家へ移って二カ月ほど無事に大学を卒業し、そして、卒業して半年も経たないうちに、今度はめでたにお嬢さんと結婚することになり、奥さんもお嬢さんもいかにも幸福らしく見えましたし、私も幸福だったのです。けれども、私の幸福には不吉な「黒い影」がずつと随きまどつていたのです。）

私は妻の望み通り二人連れ立って雑司ヶ谷へ行きました。私は新しいKの墓へ水をかけて洗ってやりました。妻はその前へ線香と花を立てました。二人は頭を下げて、合掌しました。妻は定めて私といっしょになった顛末を述べてKに喜んでもらおうつもりでしたらう。私は腹の中で、ただ「自分が悪かった」と繰り返すだけでした。

その時妻はKの墓を撫でてみて立派だと評していました。その墓は大したものではないのですけれども、私が自分で石屋へ行って見立てたりした因縁があるので、妻はとくにそう言いたかったのでしょう。私はその新しい墓と、新しい私の妻と、それから地面の下に埋められたKの新しい白骨とを思い比べて、運命の冷罵を感じずにはいられなかったのです。私はそれ以後、決して妻といっしょにKの墓参りをしない事にしました。

それは、先生とお嬢さんとの仲睦まじい姿は、墓の中に眠っているKの気持ちをかえって苦しめることにもなるだろう。先生が毎月欠かさず墓参りに行くのは、ただただ（すまないという）「懺悔」の気持ちだけであり、それ以外の理由は何もないのである。

五十二、Kの亡霊から逃れるために読書を……

「……私の亡友に対するこうした感じはいつまでも続きました。実は私も初めからそれを恐れていたのです。年来の希望であった結婚すら、不安のうちに式を挙げたと言え言えない事もないでしょう。しかし自分で自分の先が見えない人間の事ですから、ことによると或はこれが私の心持を一転して新しい生涯に入る端緒になるかも知れないとも思ったのです。ところがいいよいよ夫として朝夕妻と顔を合せてみると、私の果敢ない希望は手敵しい現実のために脆くも破壊されてしまいました。私は妻と顔を合せているうちに、卒然Kに脅かされるのです。つまり妻が中間に立って、Kと私をどこまでも結び付けて離さないようにするのです。妻のどこにも不足を感じない私は、ただこの一点において彼女を遠ざけたがりました。すると女の胸にはすぐそれが映ります。映るけれども、理由は解らないのです。私は時々妻からなぜそんなに考えているのだとか、何か気に入らない事があるのだろうかという詰問を受けました。笑って済ませる時はそれで差支えないのですが、時によると、妻の痛も高じて来ます。しまいには「……あなたは私を嫌っていらつしやるんでしよう」とか、「……何でも私に隠していらつしやる事があるに違いない」とかいう怨言

も聞かなくてはなりません。私はそのたびに苦しみました。

私は一層思い切つて、ありのままを妻に打ち明けようとした事が何度もあります。しかしぎとという間際になると自分以外のある力が不意に来て私を抑え付けるのです。私を理解してくれるあなたの事だから、説明する必要もあるまいと思いますが、話すべき筋だから話しておきます。その時分の私は妻に対して己れを飾る気はまるでなかったのです。もし私が亡友に対すると同じような善良な心で、妻の前に懺悔の言葉を並べたなら、妻は嬉し涙をこぼしても私の罪を許してくれたに違いないのです。それを敢えてしない私に利害の打算があるはずはありません。私はただ妻の記憶に暗黒な一点を印するに忍びなかったから打ち明けなかったのです。純白なものに一票の印気でも容赦なく振り掛けるのは、私にとって大変な苦痛だったのだと解釈して下さい。

一年経つてもKを忘れる事の出来なかった私の心は常に不安でした。私はこの不安を駆逐するために書物に溺れようと力めました。私は猛烈な勢をもつて勉強し始めたのです。そうしてその結果を世の中に公けにする日の来るのを待ちました。けれども無理に目的を拵えて、無理にその目的の達せられる日待つのは嘘ですから不愉快です。私はどうしても書物のなかに心を埋めていられなくなりました。私はまた腕組みをして世の中を眺め出したのです。

妻はそれを今日に困らないから心に弛みが出るのだと観察していたようでした。妻の家にも親子二人ぐらいは坐つていてどうか暮して行ける財産がある上に、私も職業を求めないで差支えない境遇にいたのですから、そう思われるのももつともです。私も幾分かスポイルされた気味がありました。しかし私の動かなくなった原因の主なもの、全くそこにはなかったのです。叔父に欺むかれた当時の私は、他の頼みにならない事をつくづくと感じたには相違ありませんが、他を悪く取るだけあつて、自分はまだ確かな気がしていました。世間はどうあるうともこの己は立派な人間だという信念がどこにあつたのです。それがKのために美事に破壊されてしまつて、自分もあの叔父と同じ人間だと意識した時、私は急にふらふらしました。他に愛想を尽かした私は、自分にも愛想を尽かして動けなくなつたのです。(本文)

*

*

さて、「……私の亡友に対するこうした感じはいつまでも続きました。実は私も初めからそれを恐れていたのです。年来の希望であつた結婚すら、不安のうちに式を挙げたと言えと言えない事もないでしょう。しかし自分で自分の先が見えない人間の事ですから、これによると或はこれが私の心持を一転して新しい生涯に入る端緒になるかも知れないとも思つたのです。ところがいよいよよ夫として朝夕妻と顔を合せてみると、私の果敢ない希望は手厳しい現実のために脆くも破壊されてしまいました。

「……私は妻と顔を合せているうちに、卒然Kに脅かされるのです。つまり妻が中間に立つて、Kと私をどこまでも結び付けて離さないようにするのです。妻のどこにも不足を感じない私は、ただこの一点において彼女を遠ざけたがり、ました。(これが妻を抱けない理由であり、先生はこの事をまさに天罰と呼んでいるのである)。すると女の胸にはすぐそれが映ります。映るけれども、理由は解らないのです。私は時々妻からなぜそんなに考えているのだとか、何か気に入らない事があるのだろうかとかいう詰問を受けました」とある。そして、笑つて済ませる時はそれで差支えないのですが、時によると、妻の癩も高

じて来ます。終いには「……あなたは私を嫌っていらつしやるんでしよう」とか、「……何でも私に隠していらつしやる事があるに違いない」とかいう怨言えんげんも聞かなくてはなりません。私はそのたびに苦しみました。

私は一層思い切つて、ありのままを妻に打ち明けようとした事が何度もあります。しかしいざという間際になると自分以外の「ある力」が不意に来て私を抑え付けるのです。(それは、先生の「良心」であるが、あるが、まを妻に語れば、今度は「妻」が先生と同じような「罪の意識」(或いは「良心の呵責」)に深く悩み苦しむことにもなるからである。)

私を理解してくれるあなたの事だから、説明する必要もあるまいと思いますが、話すべき筋だから話しておきます。——その時分の私は妻に対して己を飾る気はまるでなかったのです。もし私が亡友に対すると同じような「善良な心」で、妻の前に「懺悔の言葉」を並べたなら、妻は「嬉し涙」をこぼしても私の罪を「許してくれた」に違いないのです。それを敢えてしない私に「利害の打算」があるはずはありません。私はただ妻の記憶に「暗黒な一点」を印するに忍びなかつたから打ち明けなかつたのです。純白なものに「零の印気」でも容赦なく振り掛けるのは、私にとつて大変な苦痛だったのだと解釈して下さい。

つまり、先生という人は、奥さんをまさに「純白なもの」(つまり「100%純白な存在」として見ているのである。しかし、それが誰であれ、いわゆる「100%純白な存在」というのは、あり得ないのであり、それゆえ、もし私が亡友に対すると同じような「善良な心」で、妻の前に「懺悔の言葉」を並べたなら、妻は「嬉し涙」をこぼしても私の罪を「許してくれた」に違いないのです。——だとすれば、この時、先生がすべてを「告白」していたら、奥さんは、あるいは「救われた」かも知れない。少なくとも「夫への疑念」は、晴れることになる。そして、夫の「悩み・苦しみ」を共有することで、かえって隠し隔てのない親密な「夫婦」関係になれたかも知れないのである。しかし、先生は、奥さんの「心の中」に「暗い影」を落とすことを最後まで避けたのである。

それは、お嬢さんが若しも「Kがお嬢さんに切ない恋心を抱いていた」ということを知ったならば、つまり、先生は、それを知って、まさに「Kのお嬢さんへの切ない恋心」を諦めさせようと、二つの「策略」を講じることになるが、その結果、先生は、お嬢さんを、得て、一方、Kは、「自殺」をしてしまう。そのような経緯を知ったならば、お嬢さんは、間違ひなく、私が原因で「Kは自殺をしたの？」と思ひ込むようになるだろう。そうならば、先生と全く同じように、そのことで、まさに「罪の意識」(或いは「良心の呵責」)に深く悩み苦しむことにもなるだろう。それは何が何でも避けたかつたのである。それは、奥さんへの「愛情」であり、いわば「秘密を墓場まで持つて行く」という選択をしたという事である。どちらがよかつたのか？ それは、分からない。しかし、もし、この「先生」という人に何らかの「問題」(欠点)があるとすれば、それは、「……言うべき時に言うべきことをはつきりと言うことをためらつたこと、そして、言うべきではなかつたことを敢えて言つてしまつた」ということになるのかも知れない。そのために、先生は、「罪の意識」(或いは「良心の呵責」)に悩まされ続けているのである。

*

*

一年経つてもKを忘れる事の出来なかつた私の心は常に不安でした。私はこの不安を駆逐するために「書物」に溺れようと力めました。私は猛烈な勢をもって勉強し始めたのです。そうしてその結果を世の中に公けにする日の来るのを待ちました。けれども無理

に目的を拵えて、無理にその目的の達せられる日を待つのは嘘ですから不愉快です。私はどうしても「書物」のなかに心を埋めていられなくなりました。私はまた腕組みをして世の中を眺め出したのです。

妻はそれを今日に困らないから心に弛みが出るのだと観察していたようでした。妻の家にも親子二人ぐらいいは坐っていてどうか暮して行ける財産がある上に、私も職業を求めないで差支えない境遇にいたのですから、そう思われるのももつともです。（これは妻から見た「外的事実」である）。私も幾分かスポイルされた気味がありましよう。しかし私の動かなくなつた原因の主なもの、全くそこにはなかつたのです。叔父に欺むかれた当時の私は、他の頼みにならない事をつくづくと感じたには相違ありませんが、他を悪く取るだけあつて、自分はまだ確かな気がしていました。世間はどうかあるうとも、この己は「立派な人間」だという信念がどこかにあつたのです。それがKのために美事に破壊されてしまつて、自分もあの叔父と「同じ人間」だと意識した時、私は急にふらふらしました。他に愛想を尽かした私は、自分にも愛想を尽かして「動けなくなつた」のです。

例えば、第一部で先生は、「……私は世間に向かつて働き掛ける資格のない男だから仕方がない」という謎めいた言葉があつたが、その「資格がない男」という言葉の真意は、まさに次のようなことである。——つまり、叔父に欺むかれた当時の私は、他の頼みにならない事をつくづくと感じたには相違ないが、他を悪く取るだけあつて、自分はまだ確かな気がしていました。世間はどうかあるうとも、この己は「立派な人間」だという信念がどこかにあつたのです。それがKのために美事に破壊されてしまつて、自分もあの叔父と「同じ人間」だと意識した時、私は急にふらふらしました。他に愛想を尽かした私は、自分にも愛想を尽かして動けなくなつたのです。つまり、社会に出て積極的に世間に働きかけるような仕事が出来なくなつてしまつたのです。なぜなら、自分は「……親友を裏切り自殺へと追いやったような人間だから」である。（これがまさに内から見た先生自身の「内的事実」になるのである。）

五十三、Kの亡霊から逃れるために飲酒を……

「……書物の中に自分を生理めにする事の出来なかつた私は、酒に魂を浸して、己れを忘れようと試みた時期もあります。私は酒が好きだとは言いません。けれども飲めば飲む質でしたから、ただ量を頼みに心を盛り潰そうと力めたのです。この浅薄な方便はしばらくするうちに私をなお厭世的にしました。私は爛醉の真最中にふと自分の位置に気が付くのです。自分はわざとこんな真似をして己れを偽つてゐる愚物だという事に気が付くのです。すると身振いと共に眼も心も醒めてしまします。時にはいくら飲んでもこうした仮装状態にさえ入り込めないで無闇に沈んで行く場合も出て来ます。その上技巧で愉快を買った後には、きつと沈鬱な反動があるのです。私は自分の最も愛している妻とその母親に、いつでもそこを見せなければならなかつたのです。しかも彼らは彼らに自然な立場から私を解釈して掛ります。

妻の母は時々気拙い事を妻に言うようでした。それを妻は私に隠していました。しかし自分は自分で、単独に私を責めなければ気が済まなかつたらしいのです。責めると言つても、決して強い言葉ではありません。妻から何か言われたために、私が激した例は殆ん

どなかつたくらいですから。妻はたびたびどこが気に入らないのか遠慮なく言ってくれと頼みました。それから私の未来のために酒を止めると忠告しました。ある時は泣いて「…あなたはこの頃人間が違った」と言いました。それだけならまだいいのですけれども、「…Kさんが生きていたら、あなたもそんなにはならなかったでしょう」と言うのです。私はそうかも知れないと答えた事がありました。私の答えた意味と、妻の了解した意味とは全く違っていたのですから、私は心のうちで悲しかったのです。それでも私は妻に何事も説明する気にはなれませんでした。

私は時々妻に詫まりました。それは多く酒に酔って遅く帰った翌日の朝でした。妻は笑いました。或は黙っていました。たまにぼろぼろと涙を落す事もありました。私はどちらにしても自分が不愉快で堪らなかったのです。だから私の妻に詫まるのは、自分に詫まるのとつまり同じ事になるのです。私はしまいに酒を止めました。妻の忠告で止めたというより、自分で厭になったから止めたと言った方が適当でしょう。

酒は止めたけれども、何もする気にはなりません。仕方がないから書物を読みます。しかし読めば読んだなりで、打ち遣って置きます。私は妻から何のために勉強するのかという質問をたびたび受けました。私はただ苦笑していました。しかし腹の底では、世の中で自分が最も信愛しているたった一人の人間すら、自分を理解していかないのかと思うと、悲しかったのです。理解させる手段があるのに、理解させる勇気が出せないのだと思うとますます悲しかったのです。私は寂寞でした。どこからも切り離されて世の中になつた一人住んでいるような気のした事もよくありました。

同時に私はKの死因を繰り返し繰り返し考えたのです。その当座は頭がただ恋の一字で支配されていたせいでもありません。私の観察はむしろ簡単でしかも直線的でした。Kは正しく失恋のために死んだものとすぐ極めてしまったのです。しかし段々落ち付いた気分で、同じ現象に向つて見ると、そう容易くは解決が着かないように思われて来ました。現実と理想の衝突、——それでもまだ不十分でした。私はしまいにKが私のようにたつた一人で淋しくって仕方がなくなつた結果、急に所決したのではなからうかと疑い出しました。そうしてまた慄としたのです。私もKの歩いた路を、Kと同じように辿っているのだという予覚が、折々風のように私の胸を横通り始めたからです。(本文)

*

*

さて、「…書物の中に自分を生理めにする事の出来なかつた私は、酒に魂を浸して、己れを忘れようと試みた時期もあります。私は酒が好きだとは言いません。けれども飲めば飲める質でしたから、ただ量を頼みに心を盛り潰そうと力めたのです。この浅薄な方便はしばらくするうちに私をなお厭世的にしました。私は爛醉の真最中にふと自分の位置に気が付くのです。自分はわざとこんな真似をして己れを偽っている愚物だという事に気が付くのです。すると身振いと共に眼も心も醒めてしまいます。時にはいくら飲んでもことうした仮装状態にさえ入り込めないで無闇に沈んで行く場合も出て来ます。その上技巧で愉快を買った後には、きつと沈鬱な反動があるのです。私は自分の最も愛している妻とその母親に、いつでもそこを見せなければならなかつたのです。しかも彼らは彼らに自然な立場から私を解釈して掛ります。(今度は酒で過去を忘れようとしたが出来なかつた。)

妻の母は、時々「氣拙い事」を妻に言うようでした。それを妻は私に隠していました。しかし自分(妻)は自分(妻)で、単独に私を責めなければ気が済まなかつたらしいので

す。責めると言っても、決して強い言葉ではありません。妻から何か言われたために、私が激した例は殆んどなかったくらいですから。妻は「たびたびどが気に入らないのか、遠慮なく言ってくれ」と私に頼みました。

まず、妻の母からは、時々「氣拙い事」を妻に言うようでした。むろん、その内容には色々なことがあったかと思うが、その中でも、母親から、「……なぜ、子供が出来ないのでか？ 早く孫の顔が見たい」という様なことも言われていたに違いない。奥さんは、齒痒かったに違いない。だからこそ、「……妻はたびたびどが気に入らないのかはつきり言ってください」と何度も頼んでいるのである。——それは、自分を避けるようなところが、つきりとあるからである。この時、先生がすべてを「告白」していたら、奥さんは、あるいは「救われた」かも知れない。少なくとも「夫への疑念」は、晴れることになる。そして、夫の「悩み・苦しみ」を共有することで、かえって隠し隔てのない親密な「夫婦」関係になれたかも知れない。しかし、先生は、奥さんの「心の中」に「暗い影」を落とすことを最後まで避けたのである。

それから（妻は）私の未来のために酒を止めろと忠告しました。ある時は泣いて「……あなたはこの頃人間が違った」と言いました。それだけならまだいいのですけれども、「……Kさんが生きていたら、あなたもそんなにはならなかったでしょう」と言うのです。私はそうかも知れないと答えた事がありました。私の答えた意味と、妻の了解した意味とは全く違っていたのですから、私は心のうちで悲しかったのです。それでも私は妻に何事も説明する気にはなれませんでした。（身も心も深く寄り添えるのが夫婦の幸せである。）

私は時々妻に詫まりました。それは多く酒に酔って遅く帰った翌日の朝でした。妻は笑いしました。或は黙っていました。たまにぼろぼろと涙を落す事もありました。私はどちらにしても自分が不愉快で堪らなかったのです。だから私の妻に詫まるのは、自分に詫まるのとつまり同じ事になるのです。私はしまいに酒を止めました。妻の忠告で止めたというより、自分で厭になったから止めたと言った方が適当でしょう。

酒は止めたけれども、何もする気にはなりません。仕方がないから書物を読みます。しかし読めば読んだなりで、打ち遣って置きます。私は妻から何のために勉強するのかという質問をたびたび受けました。私はただ苦笑していました。しかし腹の底では、世の中で自分が最も信愛しているたった一人の人間すら、自分を理解していないのかと思うと、悲しかったのです。理解させる手段（告白）があるのに、理解させる勇気が出せないのだと思うとますます悲しかったのです。私は寂寞でした。どこからも切り離されて世の中にたった一人住んでいるような気のした事もよくありました。（これは、いわば心からの「孤独感」であるが、それも妻との「心のコミュニケーション」を避けているからである。）

同時に私はKの「死因」を繰り返し繰り返し考えたのです。その当座は頭がただ「恋の一字」で支配されていたせいでもありません。私の観察はむしろ簡単でしかも直線的でした。Kは正しく「失恋」のために死んだものとすぐ極めてしまったのです。しかし段々落ち付いた気分、同じ現象に向って見ると、そう容易くは解決が着かないように思われて来ました。現実と理想の衝突、——それでもまだ不十分でした。私はしまいにKが私のようにたった一人で淋しくって仕方がなくなつた（心からの「孤独感」の結果、急に所決したのではなかるうかと疑い出しました。そうしてまた慄としたのです。私もKの歩いた路を、Kと同じように辿っているのだという予覚（予感）が、折々風のように私の胸を横過

り始めたからです。(Kの自殺の要因は、次のようなものになるかと思う。)

それは、「遺書」の最後の部分、つまり、「……私のもつとも痛切に感じたのは、最後に墨の余りで書き添えたらしく見える、もつと早く死ぬべきだのになぜ今まで生きていたのだろう」という言葉である。つまり、Kが「自殺」を考えたのは、今度が「最初」ではなく、実は、前々から「自殺」のことを考えていたということである。

それでは、それは、いつ頃のことなのか？ 一つは、養子縁組が成立する以前の実家にいた頃か、一つは、養子縁組の「医師の家」にいた頃か、そして、もう一つは、養子縁組が破綻し、実家からも勘当された「八方ふさがり」の頃か、いずれの頃にしても、「K」の「全人生」のなかで何度か「自殺」が考えられて来たということであり、そして、今度は、ついにそれを遂行してしまったということである。その「最大の要因」は、恐らく、親が信じられない、養父母が信じられない、それに加えて、心から信じていた「先生」からも裏切られるような結果になってしまい、この世に信じられる人間が誰一人としていなくなってしまった、いわば完全なる「孤独」に深く陥ってしまったからか？ そして、先生の二つの「反撃」は、前々から「自殺」のことを考えていた「K」にとって、まさに最後の、「一押し」となって、ついにKは「自殺」を遂行してしまったのである。

*

*

五十四、奥さんの病氣と死

五十四、奥さんの病氣と死

「……その内妻さいさいの母が病氣になりました。医者に見せると到底癒とちうていなおらないという診断でした。私は力の及ぶかぎり懇切に看護をしてやりました。これは病人自身のためでもありませんし、また愛する妻のためでもありませんが、もつと大きな意味から言うのと、ついに人間のためでした。私はそれまでも何かしたくつて堪たまらなかったのだけれども、何もする事が出来ないのでやむをえず、懐ふしうで手をしていたに違いありません。世間と切り離された私が、始めて自分から手を出して、幾分でも善いい事をしたという自覚を得たのはこの時でした。私は罪滅つみほろぼしとでも名づけなければならぬ、一種の氣分に支配されていたのです。

母は死にました。私と妻はたった二人ぎりになりました。妻は私に向つて、これから世の中で頼りにするものは一人しかなくなつたと言いました。自分自身さえ頼りにする事の出来ない私は、妻の顔を見て思わず涙ぐみました。そうして妻を不幸な女だと思ひました。また不幸な女だと口へ出しても言ひました。妻はなぜだと聞きます。妻には私の意味が解わからないのです。私もそれを説明してやる事が出来ないのです。妻は泣きました。私が不斷からひねくれた考えで彼女を観察しているために、そんな事も言うようになるのだと恨うらみしました。

母の亡くなつた後あと、私は出来るだけ妻を親切に取り扱つてやりました。ただ、当人を愛していたからばかりではありません。私の親切には箇人こじんを離れてもつと広い背景があつたようです。ちょうど妻の母の看護をしたと同じ意味で、私の心は動いたらしいのです。妻は満足らしく見えました。けれどもその満足のうちには、私を理解し得ないために起るぼんやりした稀薄きはくな点がどこかに含まれているようでした。しかし妻が私を理解し得たにしたところで、この物足りなさは増すとも減る氣遣きづかいはなかつたのです。女には大きな人道の立場から来る愛情よりも、多少義理をはずれても自分だけに集注される親切を嬉うれしがる性質が、男よりも強いように思われますから。

妻はある時、男の心と女の心とはどうしてもびたりと一つになれないものだろうかと言ひました。私はただ若い時ならなれるだろうと曖昧あいまいな返事をしておきました。妻は自分の過去を振り返つて眺ながめているようでしたが、やがて微かな溜息ためいきを洩もりました。

私の胸にはその時分から時々恐ろしい影が閃ひらめきました。初めはそれが偶然外そとから襲つて来るのです。私は驚きました。私はぞつとしました。しかししばらくしている中に、私の心はその物凄ものすごい閃ひらめきに応ずるようになりました。しまいには外から来ないでも、自分の胸の底に生れた時から潜ひそんでいるものの如ごとくに思われ出して来たのです。私はそうした心持になるたびに、自分の頭がどうかしたのではなかるうかと疑うたぐつて見ました。けれども私は医者にも誰にも診みてもらはう氣にはなりませんでした。

私はただ人間の罪というものを深く感じたのです。その感じが私をKの墓へ毎月行かせます。その感じが私に妻の母の看護をさせます。そうしてその感じが妻に優しくしてやれと私に命じます。私はその感じのために、知らない路傍ろぼうの人から鞭むちうたれたいとまで思つた事もあります。こうした階段を段々経過して行くうちに、人に鞭むちうたれるよりも、自分で自分を鞭むちうつべきだという考くわえが起ります。私は仕方がないから、死んだ氣で生きて行くことと決心しました。

私がそう決心してから今日まで何年になるでしょう。私と妻とは元の通り仲好く暮して来ました。私と妻とは決して不幸ではありません、幸福でした。しかし私のもっている一点、私に取っては容易ならんこの一点が、妻には常に暗黒に見えたいのです。それを思うと、私は妻に対して非常に気の毒な気がします。(本文)

*

*

さて、「……その内妻の母が病気になりました。医者に見せると到底癒らないという診断でした。私は力の及ぶかぎり懇切に看護をしてやりました。これは病人自身のためでもありません、また愛する妻のためでもありません、もつと大きな意味から言うと、ついに人間のためでした。私はそれまでも何かしたくって堪らなかつたのだけれども、何もする事が出来ないでやむをえず、懐手をしていたに違いありません。世間と切り離された私が、始めて自分から手を出して、幾分でも「善い事」をしたという自覚を得たのはこの時でした。私は罪滅しとでも名づけなければならぬ、一種の気分、支配されていたのです。(これは、自分の過去の「罪深さ」などを自覚(悔い)て、その「罪滅し」として、人間や社会のために少しでも「善い事」をしたいという心理になるのである。)

母は死にました。私と妻はたった二人ぎりになりました。妻は私に向って、これから世の中で頼りにするものは一人(あなた)しかなくなつたと言いました。自分自身さえ頼りにする事の出来ない私は、妻の顔を見て思わず涙ぐみました。そうして妻を不幸な女だと思ひました。また不幸な女だと口へ出しても言ひました。妻はなぜだと聞きます。妻には私の意味が解らないのです。私もそれを説明してやる事が出来ないので。妻は泣きました。私が不断からひねくれた考えで彼女を観察しているために、そんな事も言うようになるのだと恨みましたとある。

これは、普通の夫婦であれば当然(心身共)もつと「親密な関係」が持てたはずであるが、先生の場合、妻との間に或る「一定の距離」を保たなければならぬ理由があり、その理由を妻に説明してやる事も出来ない状況なので、妻のことを「不幸な女だ」(それは「夫と親密な関係」が持っていないから)と言っているのである。一方、妻は、なぜと聞くのは、奥さんにしてみれば、夫からお前は「不幸な女」だと言われる程のことではなく、毎日何不自由なくそれなりに楽しく暮らせてはいるからである。

母の亡くなつた後、私は出来るだけ妻を親切に取り扱ってやりました。ただ、当人を愛していたからばかりではありません。私の親切には箇人を離れてもつと広い背景があつたようです。ちょうど妻の母の看護をしたと同じ意味で、私の心は動いたらしいのです。妻は満足らしく見えました。けれどもその満足のうちには、私を理解し得ないために起るぼんやりした稀薄な点がどこかに含まれているようでした。しかし妻が私を理解し得たに似たところで、この物足りなさは増すとも減る気遣いはなかつたのです。女には大きな人道の立場から来る愛情よりも、多少義理をはずれても自分だけに集注される親切を嬉しがる性質が、男よりも強いように思われますから。

さて、この「……女には大きな人道の立場から来る愛情よりも、多少義理をはずれても自分だけに集注される親切を嬉しがる性質が、男よりも強いように思われます」とあるが、もしそうであるならば、——例えば、先生がすべてを「告白」していたら、奥さんは、あるいは「救われた」かも知れない。少なくとも「夫への疑念」は、晴れることになる。そして、夫の「悩み・苦しみ」を共有することで、かえって隠し隔てのない親密な「夫婦」

関係になれたかも知れない。そうなれば、先生という人は、やがて「Kへの亡霊」からも少しづつ解放されて、何とか妻を抱くこともでき得るようになったかも知れないのです。しかし、先生という人は、何よりも奥さんの「心の中」に「暗い影」を落とすことを最後まで避けたという選択をしたのである。

妻はある時、男の心と女の心とはどうしてもびたりと一つになれないものだろうかと言いました。私はただ若い時ならなれるだろうと曖昧な返事しておきました。妻は自分の過去を振り返って眺めているようでしたが、やがて微かな溜息を洩らしました。

私の胸にはその時分から時々恐ろしい影が閃きました。初めはそれが偶然外から襲って来るのです。私は驚きました。私はぞつとしました。しかししばらくしている中に、私の心がその物凄い閃きに応ずるようになりました。しまいには外から来ないでも、自分の胸の底に生れた時から潜んでいるものの如くに思われ出して来たのです。私はそうした心持になるたびに、自分の頭がどうかしたのではなからうかと疑って見ました。けれども私は医者にも誰にも診てもらおう気にはなりませんでした。

この「恐ろしい影」とは、恐らく、「死の影」であり、初めはそれが偶然外から襲って来て、私は驚きました。私はぞつとしました。しかし、しばらくしている中に、私の心がその物凄い閃きに応ずるようになりました。しまいには外から来ないでも、自分の胸の底に生れた時から潜んでいるものの如くに思われ出して来たのです。つまり、その「死の影」には、最初は驚き、ぞつとしたものであるが、やがてそれは自分の胸の底に生れた時から潜んでいるものの如くに思われて来ては、終には「自殺願望」へと変貌してしまうのである。その「心の推移」を表現したものが、まさに「次の文章」になるかと思う。

つまり、「……私はただ人間の罪、というものを深く感じたのです。その感じが私をKの墓へ毎月行かせます。その感じが私に妻の母の看護をさせます。そうしてその感じが妻に優しくしてやれと私に命じます。私はその感じのために、知らない路傍の人から鞭たれたいとまで思った事もあります、こうした階段を段々経過して行くうちに、人に鞭たれるよりも、自分で自分を鞭つべきだという気になります。自分で自分を鞭つよりも、自分で自分を殺すべきだという考えが起ります。私は仕方がないから、死んだ気で生きて行こうと決心しました。(このような段階を経て、やがて「自殺願望」が生じて来るのであるが、しかし、今はまだ「……死んだ気で生きて行こうと決心する」のである。)

私がそう決心してから今日まで何年になるでしょう。私と妻とは元の通り仲好く暮して来ました。私と妻とは決して不幸ではありません、幸福でした。しかし私のもっている一点、私に取っては容易ならんこの一点が、妻には常に暗黒(永遠に解けない謎)のように見えたらしいのです。それを思うと、私は妻に対して非常に気の毒な気がします。

五十五、うつ脳の牢獄に閉じ込められて

「……死んだつもりで生きて行こうと決心した私の心は、時々外界の刺戟で躍り上がりました。しかし私がどの方面かへ切つて出ようと思いつくや否や、恐ろしい力がどこからか出て来て、私の心をぐいと握り締めて少しも動けないようにするのです。そうしてその力が私にお前は何をする資格もない男だと抑え付けるように言うて聞かせます。すると私はその一言で直ぐたりと萎れてしまいます。しばらくしてまた立ち上がるうとすると、ま

た締め付けられます。私は歯を食いしばって、何で他の邪魔をするのかと怒鳴り付けます。不可思議な力は冷やかな声で笑います。自分でよく知っているくせにと言います。私はまたぐたりとなります。

波瀾も曲折もない単調な生活を続けて来た私の内面には、常にこうした苦しい戦争があったものと思つて下さい。妻が見て歯痒がる前に、私自身が何層倍歯痒い思いを重ねて来たか知れないくらいです。私がこの牢屋の中に凝としていた事がどうしても出来なくなつた時、またその牢屋をどうしても突き破る事が出来なくなつた時、必竟私にとって一番楽な努力で遂行出来るものは自殺より外にないと私は感ずるようになったのです。あなたは何故と言つて眼を睜るかも知れませんが、いつも私の心を握り締めに来るその不可思議な恐ろしい力は、私の活動をあらゆる方面で食い留めながら、死の道だけを自由に私のために開けておくのです。動かずにいればともかくも、少しでも動く以上は、その道を歩いて進まなければ私には進みようがなくなつたのです。

私は今日に至るまですでに二、三度運命の導いて行く最も楽な方向へ進もうとした事があります。しかし私はいつでも妻に心を惹かされました。そうしてその妻をいっしょに連れて行く勇氣は無論ないので。妻にすべてを打ち明ける事の出来ないくらいな私ですから、自分の運命の犠牲として、妻の天寿を奪うなどという手荒な所作は、考えてさえ恐ろしかったのです。私に私の宿命がある通り、妻には妻の廻り合せがあります、二人を一束にして火に燻べるのは、無理という点から見ても、痛ましい極端としか私には思えませんでした。

同時に私だけがなくなつた後の妻を想像して見るといかにも不憫でした。母の死んだ時、これから世の中で頼りにするものは私より外になくなつたと言つた彼女の述懐を、私は腸に沁み込むように記憶させられていたのです。私はいつも躊躇しました。妻の顔を見て、止してよかつたと思う事もありました。そうしてまた凝と竦んでしまいます。そうして妻から時々物足りなそうな眼で眺められるのです。

記憶して下さい。私はこんな風にして生きて来たのです。始めてあなたに鎌倉で会つた時も、あなたといっしょに郊外を散歩した時も、私の気分が大した変りはなかつたのです。私の後ろにはいつでも黒い影が括つ付いていました。私は妻のために、命を引きずつて世の中を歩いていたようなものです。あなたが卒業して国へ帰る時も同じ事でした。九月になつたらまたあなたに会おうと約束した私は、嘘を吐いたのではありません。全く会う気でいたのです。秋が去つて、冬が来て、その冬が尽きて、きつと会うつもりでいたのです。

すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御になりました。その時私は明治の精神が天皇に始まつて天皇に終つたような気がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが、その後生き残っているのは必竟時勢遅れだという感じが烈しく私の胸を打ちました。私は明白さまに妻にそう言いました。妻は笑つて取り合いませんでしたが、何を思ったものか、突然私に、では殉死でもしたらよかろうと調戲しました。(本文)

*

*

さて、「……死んだつもりで生きて行こうと決心した私の心は、時々外界の刺戟で躍り上がりました。しかし私がどの方面かへ切つて出ようと思ひ立つや否や、恐ろしい力がどこからか出て来て、私の心をぐいと握り締めて少しも動けないようにするのです。そうし

てその力が私にお前は何をする資格もない男だと抑え付けるように言っただけです。すると私はその一言で直ぐたりと萎れてしまいます。しばらくしてまた立ち上がるかとすると、また締め付けられます。私は歯を食いしばって、何で他の邪魔をするのかと怒鳴り付けます。不可思議な力は冷やかな声で笑います。自分でよく知っているくせにと言います。私はまたぐたりとなります。(それでは、その「或る力」というのは、一体、何かと問えば、それこそ、まさに先生の「知性や理性」(特に「良心」)であり、その先生の「良心」こそは、まさに「先生を許さない」のである。)

波瀾も曲折もない単調な生活を続けて来た私の内面には、常にこうした苦しい戦争があったものと思っして下さい。妻が見て歯痒がる前に、私自身が何層倍歯痒い思いを重ねて来たか知れないくらいです。私がこの牢屋の中に凝としていた事がどうしても出来なくなつた時、またその牢屋をどうしても突き破る事が出来なくなつた時、必竟私にとつて一番楽な努力で遂行出来るものは自殺より外にないと私は感ずるようになったのです。あなたは何故と言つて眼を睜るかも知れませんが、いつも私の心を握り締めに来るその不可思議な恐ろしい力は、私の活動をあらゆる方面で食い留めながら、死の道だけを自由に私のために開けておくのです。動かずにいればともかくも、少しでも動く以上は、その道を歩いて進まなければ私には進みようがなくなつたのです。

私は今日に至るまですでに二、三度運命の導いて行く最も楽な方向へ進もうとした事があります。しかし私はいつでも妻に心を惹かされました。そうしてその妻をいつしよに連れて行く勇氣は無論ないので。妻にすべてを打ち明ける事の出来ないくらいな私ですから、自分の運命の犠牲として、妻の天寿を奪うなどという手荒な所作は、考えてさえ恐ろしかったのです。私に私の宿命がある通り、妻には妻の廻り合せがあります、二人を一束にして火に燻べるのは、無理という点から見ても、痛ましい極端としか私には思えませんでした。(これは、妻を道連れにした「無理心中」は避けたということである。)

同時に私だけがなくなつた後の妻を想像して見るといかにも不憫でした。母の死んだ時、これから世の中で頼りにするものは私より外になくなつたと言つた彼女の述懐を、私は腸に沁み込むように記憶させられていたのです。私はいつも躊躇しました。妻の顔を見て、止してよかつたと思う事もありました。そうしてまた凝と竦んでしまいます。そうして妻から時々物足りなさそうな眼で眺められるのです。

記憶して下さい。私はこんな風にして生きて来たのです。始めてあなたに鎌倉で会つた時も、あなたといつしよに郊外を散歩した時も、私の気分が大した変りはなかつたのです。私の後ろにはいつでも「黒い影」(死の影)が括ッ付いていました。私は妻のために、命を引きずつて世の中を歩いて来た(生き長らえた)ようなものです。あなたが卒業して国へ帰る時も同じ事でした。「……九月になったらまたあなたに会おうと約束した私は、嘘を吐いたのではありません。全く会う氣でいたのです。秋が去つて、冬が来て、その冬が尽きて、きつと会うつもりでいたのです」とある。

つまり、先生という人は、その時点までは、「自殺」のことはまだ考えてはいなかつたのである。——ところが、夏の暑い盛りに明治天皇が「崩御」されて、その約一ヶ月半後の「御大葬」の夜に乃木大将の「殉死」を号外で知ることになるが、その「殉死」という言葉によって、先生の「頭の中」(或いは「心の中」)にあった「自殺願望」というものがふと呼び覚まされることになってしまったのである。(それが次以降の文章である。)

すると夏の暑い盛り(めい)に明治天皇(めいじてんのう)が崩御(ほうぎよ)になりました。その時私は明治の精神(せいしん)が天皇に始まって天皇に終ったような気がしました。最も強く明治の影響(えいぎょう)を受けた私どもが、その後(あと)に生き残(のこ)っているのは必竟(ひつきやう)時勢遅れ(じせいちぢれ)だという感じが烈(はげ)しく私の胸(むね)を打ちました。私は明白(あから)さまに妻にそう言(い)いました。妻は笑(わら)って取り合(あ)いませんでしたが、何を思(おも)ったものか、突然(とつぜん)私(わたし)に、では殉(じゆん)死(し)でもしたらよかろうと調(た)戯(ぎ)しました。(この「殉(じゆん)死(し)」という言葉が、先生(せんせい)の「人生(じんせい)」を一気(いっせ)に激変(げきへん)させる大きな要因(やういん)の一つになつて行くのである。)

五十六、乃木大将(のぎ)の殉(じゆん)死(し)を契機(けい)に自(じ)殺(ころ)を決(けつ)心(しん)する

「……私は殉(じゆん)死(し)という言葉(ことば)を殆(ほと)んど忘れていました。平生(へいぜい)使(つか)う必要(ひつや)のない字(じ)だから、記憶(きおく)の底(そこ)に沈(しず)んだまま、腐(く)れかけていたものと見(み)えます。妻(つま)の笑(わら)談(だん)を聞(き)いて始めてそれ(それ)を思(おも)い出(で)した時(とき)、私(わたし)は妻(つま)に向(む)つてもし自分(じぶん)が殉(じゆん)死(し)するならば、明治(めいじ)の精神(せいしん)に殉(じゆん)死(し)するつもり(つもり)だと答(こた)えました。私(わたし)の答(こた)えも無(む)論(ろん)笑(わら)談(だん)に過(か)ぎなかつたのですが、私(わたし)はその時(とき)何(なに)だか古(ふる)い不(ふ)要(よう)な言(ご)葉(え)に新(あたら)しい意(い)義(ぎ)を盛(も)り得(え)たよ(よ)うな心(こ)持(ぢ)がしたのです。

それから約(やく)一(いち)カ月(げつ)(半(はん))ほど経(た)ちました。御(ご)大(だい)葬(じやう)の夜(よ)私(わたし)はいつも通(と)り書(か)斎(さい)に坐(すわ)つて、相(あい)図(ず)の号(ごう)砲(ぱう)を聞(き)きました。私(わたし)にはそれが明治(めいじ)が永(と)久(きう)に去(い)つた報(ほう)知(ち)のごとく聞(き)こえました。後(あと)で考(こう)えると、それが乃(の)木(ぎ)大(だい)将(じやう)の永(と)久(きう)に去(い)つた報(ほう)知(ち)にもなつていたのです。私(わたし)は号(ごう)外(がい)を手(て)にして、思(おも)わず妻(つま)に殉(じゆん)死(し)だ殉(じゆん)死(し)だと言(い)いました。

私(わたし)は新聞(しんぶん)で乃(の)木(ぎ)大(だい)将(じやう)の死(し)ぬ前(まへ)に書(か)き残(のこ)して行(い)つたものを読(よ)みました。西(せい)南(なん)戦(せん)争(そう)の時(とき)敵(てき)に旗(はた)を奪(と)られて以(も)来(らい)、申(ま)し訳(わけ)のため(ため)に死(し)のう(う)死(し)のう(う)と思(おも)つて、つ(つ)い今(こん)日(にち)まで生(な)きていたとい(い)う意(い)味(み)の句(く)を見(み)た時(とき)、私(わたし)は思(おも)わず指(さし)を折(を)つて、乃(の)木(ぎ)さん(さん)が死(し)ぬ覚(さ)悟(ご)をしながら生(な)きながら(ながら)え(え)て来(き)た年(とし)月(げつ)を勘(かん)定(てい)して見(み)ました。西(せい)南(なん)戦(せん)争(そう)は明治(めいじ)十(じゆ)年(ねん)で(で)すから、明(めい)治(ち)四(し)十(じゆ)五(ご)年(ねん)ま(ま)で(で)は三(さん)十(じゆ)五(ご)年(ねん)の距(きょ)離(り)が(が)あ(あ)り(り)ま(ま)す。乃(の)木(ぎ)さん(さん)は(は)この三(さん)十(じゆ)五(ご)年(ねん)の(の)間(あいだ)死(し)のう(う)死(し)のう(う)と思(おも)つて、死(し)ぬ機(き)会(かい)を待(まち)つて(て)いた(ら)しい(い)のです。私(わたし)は(は)そ(そ)う(う)い(い)う(う)人(ひと)に取(と)つて、生(な)きて(て)いた(ら)三(さん)十(じゆ)五(ご)年(ねん)が(が)苦(くる)しい(い)か、ま(ま)た(た)刀(た)を腹(はら)へ突(つ)き立(た)て(て)一(いつ)刹(せつ)那(な)が(が)苦(くる)しい(い)か、ど(ど)つ(つ)ち(ち)が(が)苦(くる)しい(い)だ(だ)ら(ら)う(う)と考(こう)え(え)ま(ま)した(ら)。

それから二(に)、三(さん)日(にち)して、私(わたし)は(は)ど(ど)う(う)と(と)自(じ)殺(ころ)す(す)る(る)決(けつ)心(しん)を(を)した(ら)のです。私(わたし)に乃(の)木(ぎ)さん(さん)の(の)死(し)ん(ん)だ(だ)理(り)由(ゆ)が(が)よ(よ)く解(わか)ら(ら)ない(い)よ(よ)う(う)に、あ(あ)な(な)た(た)に(に)も(も)私(わたし)の(の)自(じ)殺(ころ)す(す)る(る)訳(わけ)が(が)明(めい)ら(ら)か(か)に吞(の)み込(こ)め(め)ない(い)か(か)も(も)知(し)れ(れ)ま(ま)せん(ん)が、も(も)し(し)そ(そ)う(う)だ(だ)と(と)す(す)ると、そ(そ)れ(れ)は(は)時(とき)勢(せい)の(の)推(お)移(い)か(か)ら(ら)来(き)る(る)人(ひと)間(ま)の(の)相(あ)違(ちが)い(い)だ(だ)か(か)ら(ら)仕(し)方(かた)が(が)あ(あ)り(り)ま(ま)せん(ん)。或(ある)は(は)箇(こ)人(じん)の(の)も(も)つ(つ)て(て)生(な)れ(れ)た(た)性(せい)格(かく)の(の)相(あ)違(ちが)い(い)と(と)言(い)つ(つ)た(た)方(かた)が(が)確(た)か(か)も(も)知(し)れ(れ)ま(ま)せん(ん)。私(わたし)は(は)私(わたし)の(の)出(い)来(き)る(る)限(かぎ)り(り)こ(こ)の(の)不(ふ)可(こ)思(し)議(ぎ)な(な)私(わたし)と(と)い(い)う(う)もの(もの)を(を)、あ(あ)な(な)た(た)に(に)解(わか)ら(ら)せ(せ)る(る)よ(よ)う(う)に、今(いま)ま(ま)での(の)叙(じよ)述(しよ)で(で)己(おの)れ(れ)を(を)尽(つく)した(ら)つ(つ)も(も)り(り)で(で)す。

私(わたし)は(は)妻(つま)を(を)残(のこ)して(て)行(い)き(き)ま(ま)す。私(わたし)が(が)い(い)な(な)く(く)な(な)つ(つ)て(て)も(も)妻(つま)に(に)衣(い)食(じき)住(じゆ)の(の)心(しん)配(はい)が(が)ない(い)のは(は)仕(し)合(あ)わ(わ)せ(せ)で(で)す。私(わたし)は(は)妻(つま)に(に)残(のこ)酷(こく)な(な)驚(おどろ)怖(く)を(を)与(よ)る(る)事(こと)を(を)好(この)み(み)ま(ま)せん(ん)。私(わたし)は(は)妻(つま)に(に)血(ち)の(の)色(いろ)を(を)見(み)せ(せ)ない(い)で(で)死(し)ぬ(ぬ)つ(つ)も(も)り(り)で(で)す。妻(つま)の(の)知(し)ら(ら)ない(い)間(ま)に(に)、こ(こ)つ(つ)そ(そ)り(り)こ(こ)の(の)世(よ)か(か)ら(ら)い(い)な(な)く(く)な(な)る(る)よ(よ)う(う)に(に)し(し)ま(ま)す。私(わたし)は(は)死(し)ん(ん)だ(だ)後(あと)で(で)、妻(つま)か(か)ら(ら)頓(とん)死(し)した(ら)と思(おも)わ(わ)れ(れ)たい(い)のです。氣(き)が(が)狂(くる)つ(つ)た(た)と思(おも)わ(わ)れ(れ)ても(も)満(まん)足(そく)な(な)のです。

私(わたし)が(が)死(し)の(の)う(う)と(と)決(けつ)心(しん)して(て)から(ら)、も(も)う(う)十(じゆ)日(にち)以(も)上(じやう)に(に)な(な)り(り)ま(ま)す(す)が(が)、そ(そ)の(の)大(だい)部(ぶ)分(ぶん)は(は)あ(あ)な(な)た(た)に(に)こ(こ)の(の)長(なが)い(い)自(じ)叙(じよ)伝(でん)の(の)一(いち)節(せつ)を(を)書(か)き(き)残(のこ)す(す)た(た)め(め)に(に)使(つか)用(よう)さ(さ)れた(れ)た(た)もの(もの)と(と)思(おも)つ(つ)て(て)下(くだ)さい。始(はじめ)は(は)あ(あ)な(な)た(た)に(に)会(あ)つ(つ)て(て)話(わ)を(を)する(る)氣(き)で(で)いた(た)の(の)で(で)す(す)が(が)、書(か)い(い)て(て)み(み)ると、却(かえ)つ(つ)て(て)そ(そ)の(の)方(かた)が(が)自(じ)分(ぶん)を(を)判(はん)然(ぜん)描(が)き(き)出(で)す(す)事(こと)が(が)出(い)来(き)た(た)よ(よ)う(う)な(な)心(こ)持(ぢ)が(が)して(て)嬉(うれ)しい(い)のです。私(わたし)は(は)醉(すい)興(きやう)に(に)書(か)く(く)の(の)は(は)あ(あ)り(り)ま(ま)せん(ん)。私(わたし)を(を)生(な)ん(ん)だ(だ)私(わたし)の(の)過(か)去(こ)は(は)、人(ひと)間(ま)の(の)経(けい)験(けん)の(の)一(いち)部(ぶ)分(ぶん)と(と)して(して)、私(わたし)よ(よ)り(り)外(ほか)に(に)誰(たれ)も(も)語(ご)り(り)得(え)る(る)もの(もの)は(は)ない(い)のです(す)から(ら)、そ(そ)

れを偽りなく書き残して置く私の努力は、人間を知る上において、あなたにとつても、外の人にとつても、徒勞ではなからうと思えます。渡辺華山は邯鄲という画を描くために、死期を一週間繰り延べたという話をつい先達で聞きました。他から見たら余計な事のようにも解釈出来ましようが、当人にはまた当人相応の要求が心の中にあるのだからやむを得ないとも言われるでしょう。私の努力も単にあなたに対する約束を果たすためばかりではありません。半ば以上は自分自身の要求に動かされた結果なのです。

しかし私は今その要求を果たしました。もう何にもする事はありません。この手紙があなたの手に残る頃には、私はもうこの世にはいないでしょう。とくに死んでいるでしょう。妻は十日ばかり前から市ヶ谷の叔母の所へ行きました。叔母が病気で手が足りないというから私が勧めてやったのです。私は妻の留守の間に、この長いものの大部分を書きました。時々妻が帰って来ると、私はすぐそれを隠しました。

私は私の過去を善悪ともに他の参考に供するつもりです。しかし妻だけはたった一人の例外だと承知して下さい。私は妻には何にも知らせたくないのです。妻が己れの過去に対してもつ記憶を、なるべく純白に保存しておいてやりたいのが私の唯一の希望なのです。私が死んだ後でも、妻が生きている以上は、あなた限りに打ち明けられた私の秘密として、すべてを腹の中にしまっておいて下さい。(未完)

*

*

さて、「……私は殉死という言葉を残んど忘れていました。平生使う必要のない字だから、記憶の底に沈んだまま、腐れかけていたものと見えます。妻の笑談を聞いて始めてそれを思い出した時、私は妻に向つてもし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死するつもりだと答えました。私の答えも無論笑談に過ぎなかつたのですが、私はその時何だか古い不要な言葉に新しい意義を盛り得たような心持がしたのです。

それから約一カ月(半)ほど経ちました。御大葬の夜私はいつもの通り書齋に坐つて、相図の号砲を聞きました。私にはそれが明治が永久に去つた報知のごとく聞こえました。後で考えると、それが乃木大将の永久に去つた報知にもなつていたので。私は号外を手にして、思わず妻に殉死だ殉死だと言いました。(殉死は、主君や夫などの死を追つて臣下や妻などが死ぬことであるが、それは、自分の「衷心」(誠)を示す行為でもある。)

私は新聞で乃木大将の死ぬ前に書き残して行つたものを読みました。西南戦争の時敵に旗を奪られて以来、申し訳のために死のう死のうと思つて、つい今日まで生きていたという意味の句を見た時、私は思わず指を折つて、乃木さんが死ぬ覚悟をしながら生きて来た年月を勘定して見ました。西南戦争は明治十年ですから、明治四十五年までには三十五年の距離があります。乃木さんはこの三十五年の間、死のう死のうと思つて、死ぬ機会を待つていたらしいのです。私はそういう人にとつて、生きていた三十五年が苦しいか、また刀を腹へ突き立てた一刹那が苦しいか、どっちが苦しいだろうと考えました。

それから二、三日して、私はとうとう自殺する決心をしたのです。私に乃木さんの死んだ理由がよく解らないように、あなたにも私の自殺する訳が明らかに呑み込めないかも知れませんが、もしそうだとすると、それは時勢の推移から来る人間の相違だから仕方がありません。或は箇人のもつて生れた性格の相違と言つた方が確かかも知れません。私は私の出来る限りこの不可思議な私というものを、あなたに解らせるように、今までの叙述で己れを尽したつもりです。(自殺の理由は、決して一つだけではなく、実際は、実に様

々なものが複合的に作用し合つて、最後の「一押し」で遂行してしまうものである。」

私は妻を残して行きます。私がいなくなつても妻に衣食住の心配がないのは仕合せです。私は妻に残酷な驚怖を与える事を好みません。私は妻に血の色を見せないで死ぬつもりです。妻の知らない間に、こつそりこの世からいなくなるようになります。私は死んだ後で、妻から頓死したと思われたのです。気が狂つたと思われても満足なのです。

さて、この「……私は妻に血の色を見せないで死ぬつもり」とあるが、先生自身は、Kの自殺の時に飛び散つた血潮の凄まじさを見ているのであり、それが先生の「頭の中」（或いは「心の中」）に鮮明に焼き付くように残つてしまい、その生々しい記憶のために、先生自身なおさら深く悩み苦しむことにもなつたのかも知れない。

私が死のうと決心してから、もう十日以上になります。その大部分はあなたにこの長い自叙伝の一節を書き残すために使用されたものと思つて下さい。始めはあなたに会つて話をする気でしたのですが、書いてみると、却つてこの方が自分を判然描き出す事が出来たような心持がして嬉しいのです。私は酔興に書くものではありません。私を生んだ私の過去は、人間の経験の一部分として、私より外に誰も語り得るものはないのですから、それを偽りなく書き残して置く私の努力は、人間を知る上において、あなたにとつても、外の人にとつても、徒勞ではなからうと思ひます。渡辺華山は邯鄲という画を描くために、死期を一週間繰り延べたという話をつい先達で聞きました。他から見たら余計な事のようにも解釈出来ましようが、当人にはまた当人相応の要求が心の中にあるのだからやむを得ないとも言われるでしょう。私の努力も単にあなたに対する約束を果たすためばかりではありません。半ば以上は自分自身の要求に動かされた結果なのです。

しかし私は今その要求を果たしました。もう何にもする事はありません。この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう。とくに死んでいるでしょう。妻は十日ばかり前から市ヶ谷の叔母の所へ行きました。叔母が病気で手が足りないというから私が勧めてやったのです。私は妻の留守の間に、この長いものの大部分を書きました。時々妻が帰つて来ると、私はすぐそれを隠しました。

私は私の過去を「善悪」ともに他の参考に供するつもりです。しかし妻だけはたった一人の例外だと承知して下さい。私は妻には何にも知らせたくないのです。妻が己れの過去に對してもつ記憶を、なるべく純白に保存しておいてやりたいのが私の唯一の希望なので、すから、私が死んだ後でも、妻が生きている以上は、あなた限りに打ち明けられた私の秘密として、すべてを腹の中にしまつておいて下さい。

つまり、先生という人は、「……私は妻には何にも知らせたくないのです。妻が己れの過去に對してもつ記憶を、なるべく純白に保存しておいてやりたいのが私の唯一の希望なのです」ということになるのです。(完)

*

*

一、先生の自殺

一、先生の自殺

それでは、「先生」という人は、なぜ、「自殺」をしたのだろうか？ それも、結局は、まさに「……明日（将来）に渡って希望が持てない」からである。それでは、その「希望」とは、一体、何なのかと敢えて問えば、それは、結果として、親友を「自殺」へと追いやってしまったという「意識」、その「罪の意識」（或いは「良心の呵責」）というものは、まさに「半永久的」に消えない。その「苦しみ」から開放される「希望」が全く持てないということである。だからこそ、まさに「自殺」（つまり「ここで自分の人生を終わらせる」ということ）になるのである。

例えば、乃木大将の場合にも、それは、「……西南戦争の時敵に旗を奪られて以来、申し訳のために死のう死のうと思つて、つい今日まで生きてしまった」とある。——つまり、何度も何度も自殺をしようと思いつながら、なかなかその「機会」（つまり「切っ掛け」）が得られずにいたが、たまたま明治天皇が崩御されたのを「切っ掛け」として、それから約一カ月半後、「御大葬」の夜、まさに「殉死」という形で「自殺」することができたということである。それは、「Kの場合」も全く同じことであり、何度も「自殺」しようと思いつながら、なかなかその「機会」（つまり「切っ掛け」）が得られずにいたが、先生との「一連の出来事」で、まさに自殺する「切っ掛け」が出来たということである。

そして、それは、先生の場合も同じことであり、その「切っ掛け」となったものは、一つは、まさに明治天皇「崩御」と乃木大将の「殉死」報道であるが、それ以上に大事なことは、先生の場合は、自分の「心の底」にあった「想い」を語つてもよいと思える「私」という存在が出来たということである。——つまり、先生も、まさに「孤独な人間」であり、自分の「想い」を語れる「相手」が誰もいなかったということである。ところが、「私」という若者と親しく心を通わすことで、この「若者」になれば、自分の「心の底」にある「想い」を（遺書」という形で）語ることができ得るかも知れないという、そういう「機会」（つまり「自殺できる機会」）が得られたので、まさに「自殺」を遂行してしまったのである。つまり、自殺しようと思つていても、なかなかその「機会」（つまり「切っ掛け」）が得られなかつたが、「私」という若者が出来たことで、この「若者」になれば、自分の「心の底」にある「想い」を語つてもよいと思つて来たということである。しかし、いつどこでどのような形で語るのか？ つまり、直接会つて語るのか、それとも、手紙のようなもので語るのか。そのようなことをあれこれ考えているうちに、（実際、一度は、彼に直接話そうとして電報を打つたが、父親が重篤で来られないということ）で、そこで、先生の「頭の中」（或いは「心の中」）にふと「遺書」という形で語ることができ得るかも知れないという「想い」に襲われたということである。そして、この「方法」ならば、自分の「心の底」にある「想い」をすべて語ることができ得るとともに、それを讀んだ若者も、きつと自分の「遺志」をしつかり受け留めてくれるだろうし、また、念願の「自殺」を遂行することも出来得る。つまり、すべての「願い」が同時に叶うということがある。だからこそ、先生は、「自殺」を遂行してしまつたのである。——それでは、なぜそれほどまでに「死にたい」と思うのか？ それは、先生の場合、結果として、親友を「自殺」へと追いやってしまったという、その「罪の意識」（或いは「良心の呵責」）というものが、それだけ先生にとって「耐えがたいもの」であつたとともに、いわゆる「う

つ、脳のうの牢獄のうごく」からどうしても抜け出せないという苦しみ」ということである。逆に言えば、それほどまでに自分（先生）を苦しめたものだからこそ、まさにその「うう、つつ、脳のうの牢獄のうごく」とそこから生じる「罪の意識のいし」（或いは「良心のの呵責のか」）というものを、何が何でも「遺書の」のなかに「書き残しておきたかった」ということでもあるのだろう。

例えば、若い頃、「中・高時代」、非行や家庭内暴力、その他などで狂人の如く荒れ狂ったとする。そのために、やがて、母親は「病気」になって早死はやじにをしてしまったとする。その場合、その子供は、母親を殺したのは、誰でもない、この俺おれだという、そういう「罪の意識のいし」（或いは「良心のの呵責のか」）に一生深く悩まされ続けることになるだろう。

つまり、その子供は、一生涯、その「罪の意識のいし」（或いは「良心のの呵責のか」）からは、絶対に逃れることができないのである。そういう「意識」と、基本的には全く同じ「心理」なのである。

二、先生の遺書

それは、本文では次のようになっていいる。つまり、「……私はただ人間の罪のというものを深く感じたのです。その感じが私をKの墓へ毎月行かせます。その感じが私に妻の母の看護をさせます。そうしてその感じが妻に優しくしてやれと私に命じます。私はその感じのために、知らない路傍みちわらの人から鞭むちたれたいとまで思ったこともありす。こうした階段をだんだん経過して行くうちに、人に鞭むちたれるよりも、自分で自分を鞭むちつべきだという気になります。自分で自分を鞭むちつよりも、自分で自分を殺すべきだという考えが起ります。私は仕方がないから、死んだ気で生きて行こうと決心しました。

私がそう決心してから今日こんにちまで何年になるでしょう。私と妻とは元の通り仲好く暮らして来ました。私と妻とは決して不幸ではありません。幸福でした。しかし私のもっている一点、私にとっては容易よういならんこの一点が、妻には常に暗黒に見えたいらしいのです。それと思うと、私は妻に対して非常に気の毒な気がします」。

死んだつもりで生きて行こうと決心した私の心は、時々外界しげきの刺戟おどで躍り上がりました。しかし私がどの方面かへ切つて出ようと思ひ立つや否や、恐ろしい力がどこからか出て来て、私の心をぐいと握り締めて少しも動けないようにするのです。そうしてその力が私にお前は何をする資格もない男だと抑おさえ付けるように言いって聞かせます。すると私はその一言で直すぐたりと萎しおれてしまいます。しばらくしてまた立ち上がろうとすると、また締め付けられます。私は歯を食いしばって、何で他の邪魔ひとをするのかと怒鳴り付けます。不可思議な力は冷ひややかな声で笑います。自分でよく知っている癖くせにと言いいます。私はまたぐたりとなつてしまうのです。

*

*

それでは、その「或る力」というのは、一体、何かと問えば、それこそ、まさに先生の「良心」であり、その先生の「良心」こそは、まさに「先生を許さない」のである。なぜなら、——お前は、親友である「K」を死へと追いやった「張本人」（つまりは「人殺し」）じゃないか！ その「人殺し」であるお前が、のこのこ世間に出ていって、一体、どんなもつともらしいことを言ったりやったり出来るというのだ。お前には、そんな「資格」などないことは、誰よりもお前がいちばんよく知っているはずじゃないか、と、まさに先生

の「良心」は、その度ごとに先生を責め立てるのである。……

* 波乱も曲折もない単調な生活を続けて来た私の内面には、常にこうした苦しい、戦争があつたものと思つて下さい。妻が見て齒痒がる前に、私自身が何層倍齒痒い思いを重ねて来たか知れないくらいです。私がこの牢獄の中にじっとしていることがどうしても出来なくなつた時、またその牢獄をどうしても突き破ることが出来なくなつた時、畢竟私に一つて一番楽な努力で遂行できるものは自殺よりほかにないと私は感ずるようになったのです。(中略)、ただ、妻のことを思うと躊躇しました。私は妻のために、命を引きずつて世の中を歩いていたようなものです……」と。

* これは、実に見事な「遺書」であり、人間の「罪の意識」(或いは「良心の呵責」という「心の葛藤」を実地的確に表現しているものである。しかも、今日言うところの、いわゆる「うつ病」(その「牢獄」)、「うつ脳」(その「牢獄」)の中に閉じ込められ、そこから何とかして抜け出ることのでき得ない状態)を實に見事に表現しているものである。つまり、作者(夏目漱石)自身、この「本文」を書き遺したいたがために、この『こころ』という作品を書いたと言ってもよいほどである。

なぜなら、夏目漱石には有名な「神経衰弱」というものがあるが、それを今日の医学用語で言えば、それは、まさに「うつ病」(或いは「躁うつ病」)に他ならないのです。

つまり、「……私を生んだ私の過去が、今のような自分を生み出している」とあるが、それは、若い頃、親友を裏切り、その結果、自殺へと追いやつたという過去の経験から、まさに「罪の意識」(或いは「良心の呵責」)に深く悩み苦しむ結果となつたと共に、いわゆる「うつ病」(その「牢獄」)、「うつ脳」(その「牢獄」)の中に閉じ込められ、そこから何とかして抜け出ることのでき得ない状態)になっていることは、人間の経験の一部分として、私よりほかに誰も語り得るものはないのですから、それを偽りなく書き残して置く私の努力は、人間を知る上において、貴方にとつても、ほかの人にとつても、徒勞ではなからうと思ふのです。

それは、本文では、次のようになってゐる。つまり、「……私は何千万といふ日本人のうちで、ただ貴方だけに、私の過去を物語りたいのです。あなたは真面目だから。あなたは真面目に人生そのものから生きた教訓を得たいと言つたから」とある。すなわち、「作者」(夏目漱石)という人は、一体、誰のためにこのような「作品」を書き遺したのかと敢えて問えば、それは、人生を真面目に真剣に生きようとする人のためにこそ、自分(先生)が実際の人生の中で経験した「心の闇」(「罪と罰」)とを、敢えてここに書き遺しておきたかつたということである。

あとは、『こころ』という作品を最初から最後まで丁寧に読んでもらえれば、今までのそれぞれの「内容説明」の一つ一つが、まさに「実感」として感じてもらえるのではないかと思う。——そして、個人的には、自分の「頭の中」(或いは「心の中」)には、次のようなかつて自分が書いた「文章」が、自然と浮かんで来るのである……。

三、罪と罰

さて、われわれ人間の「罪」と「罰」というのは、その人自身がいちばん自分が犯した「罪」の何たるかは、極めて微妙なところまで感じ分けるとともに、その自分自身が犯した「罪」に対して、裁判上の「刑罰」というのは、いわば外的な「罰」に過ぎないというのである。そして、最終的に自分を裁くものは、やはりわれわれ人間の「心の中」（或いは「魂の中」）でも、いわゆる「理知的部分」（その最も奥深い「無意識の世界」に深く内在しているであろう敢えて「内なる神」）であり、それは、決して「悪」を欲しないし、また、「悪」とはどこまで行っても妥協できないとともに、自分自身の「善悪」をどこまでも厳密に感じ分けている存在でもあるわけである。つまり、他人をごまかすことは、いくらでもでき得るだろうが、しかし、自分自身をごまかすことはでき得ず、絶えず自分自身が犯した「罪」に対して、いわゆる「理知的部分」（その最も奥深い「無意識の世界」に深く内在しているであろう敢えて「内なる神」）によって厳密に吟味され続けている、内なる「審判」（つまりは「内的制裁」「罰」）を受けざるを得ないということである。それが、まさにわれわれ人間の「罪と罰」ということになるのである。

*

*

わが罪を

終に裁くは

内なる神か

「参考文献」

※底本「こころ」夏目漱石（「青空文庫」）